

あなたも聖書を理解できます！

パウロの最初の書簡群：

ガラテヤ人への手紙とテサロニケ人への手紙第1・第2

ボブ・アトリー
聖書解釈学教授
(聖書解釈)

学習ガイド注釈シリーズ
新約聖書, Vol. 7

バイブルレッスンインターナショナル, マーシャル, テキサス州

1997年

www.BibleLessonsIntl.com

Copyright©1997 by Bible Lesson International, Marshall, Texas (Revised 2007, 2010)
All rights reserved. 出版元の許可文書なしに本書の一部をいかなる方法あるいは手段を用いても複製してはならない。

Bible Lesson International
P.O. Box 1289
Marshall, TX 75671-1289
1-800-785-1005

ISBN 978-0-9661098-1-8

この注解書で主に用いられた聖書は:

New American Standard Bible (Update, 1995)
Copyright©1960, 1962, 1963, 1968, 1971, 1972, 1973, 1975, 1977, 1995 by
the Lockman Foundation
P.O. Box 2279
La Habra, CA 90632-2279

分割された段落、短い説明のための要約、選択された聖句の出典は:

1. The Greek New Testament, Fourth Revised Edition, All rights reserved.
Copyright©1993 Deutsche Bibelgesellschaft, O Stuttgart. 許可を得て使用。
2. The New King James Version, Copyright©1979, 1980, 1982 by Thomas Nelson, Inc.
許可を得て使用。All rights reserved
3. The New Revised Standard Version of the Bible, Copyright©1989 by the Division of
Christian Education of National Council of the Churches of Christ in the U.S.A. 許
可を得て使用。All rights reserved.
4. Today's English Version は著作権所有者の許可を得て使用した。The American Bible
Society, Copyright©1966, 1971 許可を得て使用。
5. The Jerusalem Bible, Copyright©1966 by Darton, Longman & Todd, Ltd. and
Doubleday, a division of Bantam Doubleday Dell Publishing Group, Inc. 許可を得て
再版。

www.BibleLessonsIntl.com
www.freebiblecommentary.org

1995 年改訂版 The New American Standard Bible

読みやすくするために:

1. “thee’ s”や”thou’ s”等の古英語を含む聖句は現代英語に更新されている。
2. 過去20年間に意味の変化によって理解できるようになった語句は現代英語に更新されている。
3. “And”で始まる文はしばしば、古代語と英語との文体の違いを認識したうえで、より適切な英語に訳し直されている。元のギリシャ語とヘブル語は必ずしも英語に正確に対応していないので、多くの場合元のギリシャ語とヘブル語の“または”に正確に対応する現代英語が語句の置換に用いられている。その他の場合、元の言語中の語がそのように訳されるべきときには、“And”は文脈の解釈上“そして”あるいは“しかし”のような異なる語に訳されている。

以前より正確にするために:

1. 新約聖書の最古かつ最良のギリシャ語原典の最近の研究が見直され、いくつかの聖句は原典によりはるかに忠実に新たに訳し直されている。
2. 対照聖句は比較され見直されている。
3. 意味の幅の広い動詞はいくつかの聖句中で、文脈内でより適切な意味に訳し直されている。

The NASB についてさらに:

1. 改訂版 The NASB の訳された内容はそれほど大きくは変化していない。The NASB の初版は時代の変化によく対応し、翻訳内容の変更の程度は The NASB の編集者の定めた基準を認めたとうえで最小限度に留まりつづけている。
2. 改訂版 The NASB は、元のギリシャ語とヘブル語を文字通りに妥協することなく訳するという The NASB の伝統を継承している。文脈中の語句の意味の変化はロックマン財団の Fourfold Aim の定めた厳しい判断基準の範囲内に留まりつづけている。
3. 改訂版 The NASB の出版に貢献した翻訳者と監修者は、聖書の言語や神学の博士号あるいはその他の上級学位を持つ保守的な聖書学者達である。彼らは様々な特定の教派の教義的背景を代表している。

伝統の継承:

The NASB の初版は聖書の最も正確な英訳本であるという評価を得ています。最近の他の訳本は時々正確さと読みやすさにおいて批判的コメントを受けていますが、細部まで注意深く読もうとする読者のなかで読み終わった後にこれらの訳本が一貫して意味不明であることに気付く人はいません。時々文字通りに訳されていますが、初版の内容を頻繁に言い換えようとするので、しばしば少しばかり読み易くなっており、そのために原典への忠実性が犠牲にされています。言い換えはそれ自体悪いことではありません。なぜなら翻訳者が理解し解釈した通りに聖句の意味を明らかにできるからです。

しかし、言い換えは所詮聖書の注解であり、翻訳にすぎません。最新版 The NASB は、真の聖書翻訳物であるという The NASB の伝統を保持し、原典が実際に語っている内容を明らかにします—単に翻訳者がそうだと信じて疑わないことではなく。

—ロックマン財団

この書の初版を
長年の信頼と祈りと励まし、そして惜しみない経済的援助を通して
このシリーズの出版を実現させてくれている
Henry“Ted”と Eileen Beyer と彼らの家族
に捧げる。

この注解書の執筆の各進捗段階の原稿を読み通して多くの励ましと有益な指摘をしてくれた
東バプテスト大学の同僚と他の友人達に私は感謝したい:

FRANKLIN ATKINSON

ROBERT ELLISON

JOHN HARRIS

DAVID KING

JERRY SUMMERS

BRUCE TANKERSLEY

RANDY TRULL

WALLACE WATKINS

私は又、長年そうしてきたようにこれらの原稿をタイプしてくれた人々に感謝したい:

BETTYE HUGHES

JODELL LOGAN

LEEANN MALONE

PEGGI POWERS

DORIS SPRABERRY

PEGGY UTLEY

HELEN WHITMIRE

目次

この注解書はどのようにあなたの役に立つことができるか？	i
編集者からの言葉	iii
聖書を有意義に読むための手引き: 立証可能な真実への個人的探求	v
注解:	
ガラテヤ人への手紙への導入	1
ガラテヤ人への手紙1章	7
ガラテヤ人への手紙2章	37
ガラテヤ人への手紙3章	62
ガラテヤ人への手紙4章	101
ガラテヤ人への手紙5章	124
ガラテヤ人への手紙6章	149
パウロのテサロニケ人への手紙	164
テサロニケ人への手紙への導入	165
テサロニケ人への第一の手紙1章	177
テサロニケ人への第一の手紙2章	206
テサロニケ人への第一の手紙3章	236
テサロニケ人への第一の手紙4章	249
テサロニケ人への第一の手紙5章	271
テサロニケ人への第二の手紙1章	297
テサロニケ人への第二の手紙2章	314
テサロニケ人への第二の手紙3章	338
補遺1: ギリシャ語の文法構造の簡単な定義	349
補遺2: 原典批評	360
補遺3: 用語集	365
補遺4: 学説についてのコメント	378

ガラテヤ人への手紙とテサロニケ人への手紙の特別なトピック

送る (<i>Apostello</i>)、ガラテヤ人への手紙 1: 1	9
天のお父様、ガラテヤ人への手紙 1: 1	11
復活、ガラテヤ人への手紙 1: 1	11
教会 (<i>Ekklesia</i>)、ガラテヤ人の手紙 1: 2	13
2つの世、ガラテヤ人への手紙 1: 4	16
神の御心、ガラテヤ人への手紙 1: 4	17
栄光、ガラテヤ人への手紙 1: 5	19
永遠を意味するギリシャ語の熟語、ガラテヤ人への手紙 1: 5	19
アーメン、ガラテヤ人への手紙 1: 5	20
ボブの伝道についての偏見、ガラテヤ人への手紙 1: 7	24
呪い (<i>Anathema</i>)、ガラテヤ人への手紙 1: 8	25
パリサイ人、ガラテヤ人への手紙 1: 13	28
パウロの <i>Huper</i> 複合語の使用、ガラテヤ人への手紙 1: 13	29
肉 (<i>Sarx</i>)、ガラテヤ人への手紙 1: 16	33
パウロの著作物における「真理」、ガラテヤ人への手紙 2: 5	43
イエスの異父兄弟ヤコブ、ガラテヤ人への手紙 2: 9	46
<i>Koinonia</i> 、ガラテヤ人への手紙 2: 9	46
バルナバ、ガラテヤ人への手紙 2: 13	49
義、ガラテヤ人への手紙 2: 21	57
忍耐の必要、ガラテヤ人への手紙 3: 4	67
旧約聖書における信条と信頼と信仰と忠実さ、ガラテヤ人への手紙 3: 5	69
信条、ガラテヤ人への手紙 3: 6	73
贖いと救い、ガラテヤ人への手紙 3: 13	79
契約、ガラテヤ人への手紙 3: 15-17	83
無用と無効 (<i>Kartargeo</i>)、ガラテヤ人への手紙 3: 17	86
モーセの律法についてのパウロの見方、ガラテヤ人への手紙 3: 19	88
洗礼、ガラテヤ人への手紙 3: 27	93
人種主義、ガラテヤ人への手紙 3: 28	94
パウロの <i>Kosmos</i> の使用、ガラテヤ人への手紙 4: 3	105
三位一体、ガラテヤ人への手紙 4: 4	106
心、ガラテヤ人への手紙 4: 6	110
信徒の相続、ガラテヤ人への手紙 4: 7	111
予型論、ガラテヤ人への手紙 4: 24	120
シナイ山の位置、ガラテヤ人への手紙 4: 25	121

忍耐、ガラテヤ人への手紙 5: 4	129
背信、ガラテヤ人への手紙 5: 4	131
希望、ガラテヤ人への手紙 5: 5	134
パン種、ガラテヤ人への手紙 5: 9	136
新約聖書における悪と善、ガラテヤ人への手紙 5: 19	141
神の御国、ガラテヤ人への手紙 5: 21	144
自慢、ガラテヤ人への手紙 6: 4	153
破壊と破滅と墮落 (<i>Phtheiro</i>)、ガラテヤ人への手紙 6: 8	156
パウロの神への賛美と祈りと感謝、ガラテヤ人への手紙 6: 18	162
シラス—シルワノ、テサロニケ人への手紙第一 1: 1	178
父、テサロニケ人への手紙第一 1: 1	179
感謝、テサロニケ人への手紙第一 1: 2	181
とりなしの祈り、テサロニケ人への手紙第一 1: 2	186
選び、テサロニケ人への手紙第一 1: 4	190
型 (<i>Tupos</i>)、テサロニケ人への手紙第一 1: 7	194
東洋の文献、テサロニケ人への手紙第一 1: 8	195
神の名、テサロニケ人への手紙第一 1: 9	197
初期教会の <i>Kerygma</i> 、テサロニケ人への手紙第一 1: 10	201
苦難、テサロニケ人への手紙第一 1: 10	202
一人の人間として表現される神、テサロニケ人への手紙第一 1: 10	203
大胆さ (<i>Parresia</i>)、テサロニケ人への手紙第一 2: 2	209
非難されない、無罪の、罪のない、叱責されない、テサロニケ人への手紙第一 2: 10	214
選びおよび予め定められた運命と神学的バランスの必要、I テサロニケ 2: 12	217
神の王国、テサロニケ人への手紙第一 2: 12	217
預言 (旧約聖書)、テサロニケ人への手紙第一 2: 15	221
新約聖書の預言、テサロニケ人への手紙第一 2: 15	226
悪しき者、テサロニケ人への手紙第一 2: 18	231
イエスの再臨、テサロニケ人への手紙第一 2: 19	234
なぜクリスチャンは苦難に遭うのか、テサロニケ人への手紙第一 3: 3	239
「試練」を意味するギリシャ語の用語、テサロニケ人への手紙第一 3: 5	240
豊かに満ち (<i>Perisseuo</i>)、テサロニケ人への手紙第一 3: 12	244
イエスの再来を意味する新約聖書の用語、テサロニケ人への手紙第一 3: 13	245
聖なる者、テサロニケ人への手紙第一 3: 13	247
神の御心、テサロニケ人への手紙第一 4: 3	252
聖化、テサロニケ人への手紙第一 4: 3	253
富、テサロニケ人への手紙第一 4: 12	258

いつでも起こり得る再臨 対 まだ起こっていない再臨(新約聖書の矛盾)、		
	テサロニケ人への手紙第一 4: 15	265
イスラエルで用いられた角笛、テサロニケ人への手紙第一 4: 16		267
雲に乗って来られる、テサロニケ人への手紙第一 4: 17		268
終末論、テサロニケ人への手紙第一 5: 4		275
救いの意味で用いられるギリシャ語の動詞時制、テサロニケ人への手紙第一 5: 9		284
教化、テサロニケ人への手紙第一 5: 11		285
聖霊の御人格、テサロニケ人への手紙第一 5: 19		290
クリスチャンは互いに裁きあうべきか、テサロニケ人への手紙第一 5: 21		292
火、テサロニケ人への手紙第二 1: 7		304
知る(ヘブル語の用語研究)、テサロニケ人への手紙第二 1: 8		305
永遠、テサロニケ人への手紙第二 1: 9		306
死者はどこにいるのか、テサロニケ人への手紙第二 1: 9		307
召された、テサロニケ人への手紙第二 1: 11		312
主の御名、テサロニケ人への手紙第二 1: 12		312
黙示文学、テサロニケ人への手紙第二 1: 1-12 の文脈の考察		315
<i>Arche</i> 、テサロニケ人への手紙第二 2: 13		332
聖書における聖別、テサロニケ人への手紙第二 2: 14		333
主の御名、テサロニケ人への手紙第二 3: 6		343

著者からの言葉: この注解書はどのようにあなたの役に立つことができるのか?

聖書的解釈は、神からのメッセージを理解してそれを私達の時代に適用することで、古代の、神の啓示を受けた(聖書の各書の)著者(の主張)を理解しようとする、合理的で霊的な過程である。

この霊的な過程は不可欠であるが、定義が難しい。それには神への(自分自身の)明け渡しと解放が含まれる。そこには(1)神への(2)神を知ることへの(3)神に仕えることへの飢え渇きがあるに違いない。この過程には祈り、告白、そして生活様式を変えることへの意欲が含まれる。聖霊は解釈の過程に不可欠であるが、誠実に神に従うクリスチャン達の間でなぜ聖書の理解が異なるのかは謎である。

合理的過程は(霊的な過程に比べて)説明がより容易である。私達は原典に忠実で公平でなければならず、個人的なあるいは特定の教派への偏見に影響されてはいけない。私達は皆歴史的に条件づけられている。誰も客観的な、つまり中立的な解釈をしない。この注解書は、私達の偏見を克服する手助けとなるように構成された3つの解釈上の原則を含む、深い合理的過程を紹介している。

第一の原則

第一の原則は、その聖書の書の書かれた時代背景と著者の執筆の特別な歴史的動機に着目することである。原著者にはある目的と伝えるべきメッセージがあった。原典は私達に、古代の、神の啓示を受けた原著者が決して意図しなかったことを伝えることができない。彼(原著者)の意図—私達の歴史的、感情的、文化的、個人的、あるいは特定の教派への要求ではない—が大切である。適用は解釈の不可欠なパートナーであるが、正しい解釈は常に適用に先行してはいけない。各聖書原典は一つの、つまり唯一の意味をもつことは繰り返し強調されなければならない。この意味とは、聖書の原著者が聖霊のお導きを通して自分の生きた時代の人々に伝えたかったことである。この一つの意味は様々な文化や状況に広く適用することができる。これらの適用は原著者の真の意図とつながるに違いない。この理由から、この「学習の手引き」的な注解書は聖書の各書をを紹介することを目的として編集されている。

第二の原則

第二の原則は(聖書の各)書単位を区別することである。聖書の各書は単独の文書である。解釈する者には、一つの真実を他を排除することによって分離する権利はない。従って私達は(聖書の)個々の書単位を解釈する前に聖書の全ての書の(書かれた)目的を理解する努力をしなければならない。(聖書の各書単位の)個々の部分—章、段落、あるいは節—は全ての書単位の意味していないことを意味することはできない。解釈は全ての書単位から演繹的に行なわれるので

はなく、各書単位の個々の部分から帰納的に行なわれなければならない。従って、この「学習の手引き」的な注解書は学習者が段落によって各書単位の構造を理解するのを助けることを目的として編集されている。章と段落とを分け(て考え)ることは神の啓示によってすることではないが、私達が(聖書の[各書の]著者の)考えのまとまりを区別するのを助けてくれる。

段落レベル—文、節、句、あるいは単語のレベルではない—での解釈は聖書の[各書の]著者の意図する意味を理解するのに不可欠である。段落は単独のトピック、つまりテーマ(主題)あるいはトピックセンテンスとしばしば呼ばれる話題に基づく。段落中の各単語、句、節、そして文はこの単独のテーマといくらかは関連がある。それらはテーマ思想を限定し、拡張し、説明し、またはテーマに対して疑問を投げかける。正しい翻訳のために真に不可欠なことは、聖書の各書を構成する個々の書単位を通して段落ごとに原著者の考えを理解することである。この「学習の手引き」的な注解書は学習者が現代英語翻訳との比較によってそれを行うのを助けることを目的として編集されている。これらの(現代英語)翻訳は様々な翻訳シリーズの中から選ばれてきている。

1. 合衆国聖書協会のギリシャ語原典は改訂第4版(UBS⁴)である。この原典は現代の原典研究者達によって(現代英語に)書き換えられている。
2. The New King James Version(NKJV)は、テクトゥス・レセプトゥスとして知られるギリシャ語原典の伝統に基づく逐語訳である。その段落分割は他の翻訳より長い。これらのより長い文単位は学習者が単独のトピックを理解するのを助ける。
3. The New Revised Standard Version(NRSV)は修正逐語訳である。これは下記の2つの現代版(聖書)の中間的な翻訳形態である。その段落分割は個々の主題の区別に極めて有用である。
4. The Today's English Version(TEV)は合衆国聖書協会により出版された dynamic equivalent 訳である。これは、現代英語を読み、あるいは話す人々がギリシャ語原典を理解できるような聖書の翻訳を試みている。しばしば、特に福音の中で、NIVと同様に、主題によるよりはむしろ(聖書の)話し手(語り手)によって段落を分割している。解釈する者の目的からいうと、これは役に立たない。UBS⁴も TEV も同じ団体から出版されているのに段落分割の様式が異なるのは興味深い。
5. The Jerusalem Bible(JB)はフランスカトリック翻訳に基づく dynamic equivalent 訳である。これはヨーロッパ諸国の言語による訳と段落分割の様式を比較するのに非常に有用である。
6. この注解書の編集のために用いた聖書の現代英語訳は 1995 年更新の New American Standard Bible(NASB)である。逐語訳で、聖句を順番に解説している点はこの段落分割の様式に従っている。

第三の原則

第三の原則は、聖書のみことば、つまり聖句が持ちうる可能な最大範囲の意味(セム語領域)

を把握するために様々な訳の聖書を読むことである。しばしばギリシャ語の句や言葉は何通りにも理解されうる。これらの様々な訳によって聖書のみことばや聖句は何通りにも理解され、複数あるギリシャ語原典の区別や説明を助けている。これらは(翻訳の)原則には影響しないが、神の啓示を受けた古代の(聖書の)書き手によって書かれた原典に私達が戻ろうとするのを確実に助けてくれる。

この注解書は学習者に自分の(聖書の)解釈を確認する近道を示す。それは権威的ではなく、むしろ知識を提供して考えることを喚起するようになされる。しばしば、他の可能な解釈は私達が偏狭に、独断的に、そして特定の教派に偏重になりすぎないように助ける。解釈する者は、古代の原典がいかにあいまいかを認識するために、より広い解釈の視野を持つことが必要である。聖書を真実の源であると主張しているクリスチャンの間で(意見の)一致がほとんどみられないのは衝撃的なことである。

これらの原則は私が、自分を強いて古代の原典に格闘させることによって、自分の歴史的生いたちの多くを克服するのを助けてくれている。この注解書があなたを十分に祝福してくれるだろうことを私は希望する。

ボブ・アトリー

東テキサスバプテスト大学

1996年6月27日

編集者からの言葉

この初版で始まる研究聖書注解シリーズは聖書研究者にとって非常に特別な機会を与えることでしょう。英語で書かれた注解書や学習の手引きは数多くあり、大半は手ごろな価格で入手できるものばかりですが、その中でもボブ・アトリーの注解書は、あまり聖書の知識のない新しい(救われたばかりの)クリスチャンから原語(訳者注:聖書が最初に書かれた当時の言語。つまりヘブル語等)の知識に精通した一流の学者まで含めた全レベルの聖書学習・研究者の助けとなるように特別に編纂されたものです。このシリーズの真の特徴は、各章の注解に先立って5つの並列段落分割を聖書学習・研究者に提供していることにあります。著者はこれらの段落分割によって、個々の訳出文からは容易に見いだせない自らの見解と議論の流れをある方法で示そうと試みています。段落分割と文章単位はそれ自体は(神の)啓示によるものではありませんが、聖書の示そうとしている興味深い真理を見出そうと欲する人々にとっては、聖書解釈の手がかりとして不可欠のものです。

聖句を理解しやすくするというアトリー博士の召命は彼の希望と調和し、彼の個人的で組織的な研究の原則を通じて読者の皆さんお一人お一人が神のお言葉と真の出会いをされるのを助けてきました。この研究聖書注解シリーズは説教や日曜学校の準備の手助けとして用いることができますが、その出版の意図は聖書学習・研究者各位の聖書の研究あるいは学習を手助けすること

にあります。従って、4つの読書サイクルについての議論である次のセクションは、聖書学習・研究者が神のお言葉と適切な時間を過ごすために特に推奨されています。大半のクリスチャンにとって正しい聖書研究のために必要な原則は自動的に与えられるものではありませんが、その原則が最良の報酬を与えるのは確かです。

アトリー博士と6年来の知り合いであるという恩恵があるにもかかわらず、聖書解釈における彼の見識を知ることだけでなく彼の人生や(この注解書の執筆の)動機づけにおける職務上の誠実さや信仰の正しさや目的への献身度を見ることは私にとって新鮮な経験となっています。アトリー博士は神とのより親しい関係を積極的に追い求め、クリスチャンにふさわしい精神—そして聖書への情熱的な愛が目指す目標を例示しています。彼がしばしば確信を持って明言しているように、私達一人一人は「今自身のいる光の中を歩み、同じ光の中にいない人々に対して忍耐し、そして常にもっと光を追い求める」べきです。彼が教えそして実践しているこの原則は永遠に続くものです。そしてまた、アトリー博士が長年続けてきた、この研究聖書注解シリーズの初版の出版の実現のための祈りと執筆が世界中の信仰者の皆さんと神のお言葉の学習・研究者の皆さんの祝福となることを私は望みます。

ウィリアム・G・ウェルズ

1996年10月8日

聖書を有意義に読むための手引き: 立証可能な真実への個人的探求

私達は真実を知ることができるだろうか？それはどこで見つかるだろうか？私達はそれを論理的に立証できるだろうか？最高の権威はあるのだろうか？私達の人生と私達の生きる世界とを導くことのできる絶対的存在はあるのだろうか？人生に意味はあるのだろうか？私達はなぜここにいるのだろうか？私達はどこに向かっているのだろうか？これらの疑問—全ての理性ある人々が熟考する疑問—は有史以来人間の知性につきまどってきた(伝道者の書 1: 13-18, 3: 9-11)。私は私の人生を支配する中心となるものについて個人的に探究したことを覚えている。主に家族の大多数の証言によれば、私は幼少期にキリストを信じた。大人になるにつれて、私自身と私の生きる世界についての疑問も又深まっていった。単なる文化的・宗教的なありきたりの知識は、本で読んで知ったり実際に体験した出来事に意味を与えなかった。それは混乱、探究、渴望の時であり、また私の生きた非情で厳しい世界に対面したときの絶望感であった。

これらの究極の疑問に対する答えは多くの人々によりなされているが、研究と熟考の後に私は彼らの答えが(1)自分の哲学[個人的信条]、(2)古代の神話、(3)個人的体験、あるいは(4)心理学的投射に基づくことに気付いた。私には、私の世界観、私の人生を支配する中心となるもの、私の生きる理由を確立するために、ある程度の立証、証拠、理性的信念が必要だった。

私はこれらを自らの聖書研究のなかに見出した。私はその信憑性を裏付ける証拠を探し始め、そしてそれが(1)考古学によって確定された、聖書の歴史的信頼性、(2)旧約聖書の預言の信頼性、(3)1600年間にわたってなされた聖書のメッセージの統一性、そして(4)聖書との出会いによって自らの人生が恒久的に変化した人々の個人的証しのなかにあると気付いた。キリスト教は信仰と信条とが一体化した(宗教)体系であり、人間の人生の複雑な疑問を取り扱うことができる。これが与える論理的枠組みだけでなく聖書的信仰の経験的側面も私に喜びの感情と感情の安定をもたらした。

私は、聖句を通して理解した通りに、私の人生を支配する中心はキリストであると自分は気付いていると考えた。それはわくわくする経験であり、感情の解放だった。しかしながら私は、時々同じ教派の複数の教会や(神)学校の間でさえ、この本(注解書)にどれほど多くの異なる解釈がなされ(激しく議論がなされる)かを考え始めたときの衝撃と痛みをまだ覚えている。聖書の啓示と信憑性とを主張することは終りではなく、始まりにすぎない。聖句の中の多くの難解な文章の、それらを絶対視し信憑性を主張する人々によってなされた、様々で互いに対立する解釈を私はどのように立証しあるいは却下すればよいだろうか？(福音主義キリスト教は聖書の信憑性を主張するが、それが持つ意味には同意できない！)

この仕事は私の人生の最終目的となり、また信仰深い巡礼となった。私は、私のキリストへの信仰が私に大きな平安と喜びとをもたらしていることをわかっていた。私の心は、自分の(生きてきた)文化と互いに対立する宗教体系の教条(教義)主義と特定の教派への偏重による傲慢さとの相互関係の中心にある絶対的なものを渴望していた。古代の文献の正しい解釈を目的とする自ら

の研究の中で私は自分自身の歴史的、文化的、特定の教派への偏重による、そして経験に基づく偏見に気付いて驚いた。私はしばしば、自分自身の見識を広めるためだけのために聖書を読んでいたのだ。私は自分自身の(主張の)不安定さや不十分さを克服するなかで、他者に反論するための教義の(情報)源として聖書を利用していったのだ。このことに気付いてどんなに心を痛めたことか。

私は決して完全に客観的にはなれないが、聖書をより有意義に読むことはできる。私は自分の持つ偏見を明らかにして認めることによってなくしていくことができる。私はまだそれらを持ち続けているが、私自身の弱さと向き合い続けている。解釈する人はしばしば聖書をより有意義に読むことにおいて最悪の敵なのだ。

私が聖書研究において提唱している前提を、読者の皆さんと一緒に検証するためにいくつか挙げよう。

I. 前提

- A. 私は聖書が唯一の真の神の唯一の自己啓示であると信じる。従って聖書は、特定の歴史背景の中にいる書き手を通して、元々の書き手でいらっしやる神の御意志が現れるように翻訳されなければならない。
- B. 私は聖書が一般の人—全ての人々—のために書かれたと信じる！神は御自身を、(私達の持つ)歴史的・文化的背景の範囲内ではっきりと私達に語りかける(ことができる)ように適応させられた。神は真実を隠されない—私達に理解を求めておられるのだ！従って聖書は、私達の今生きている時代の背景ではなく、その書かれた時代の背景を考慮して翻訳されなければならない。聖書は、最初にそれを読み聞きした人々が決して私達に伝えていないことを私達に伝えることができない。聖書は一般の人の心によって理解可能であり、人間の通常のコミュニケーションの形式と技術を利用している。
- C. 私は聖書が首尾一貫したメッセージと目的を持っていると信じる。聖書には難解な、あるいは逆説的な文章はみられないが、それ自体は矛盾していない。従って、聖書を最もよく解釈するのは聖書自体なのだ。
- D. 私は聖書の各文章(預言を含む)が、神の啓示を受けた原著者の意志に基づく一つの、そして唯一の意味を持っていると信じる。私達は決して原著者の意志をわかっているという絶対的な確信を持つことはできないが、それを示す多くの事柄を例示することはできる:
 1. 聖書のメッセージを表現するために選ばれたジャンル(文学様式)
 2. 聖書の記述から明らかとなった、聖書の書かれた時代の背景または特別の事情
 3. 各文章単位および聖書全体の文脈
 4. メッセージ全体に関係する、文章単位の文体デザイン(概要)
 5. メッセージ(の意味)を伝えるために用いられている特別な文法的特徴
 6. メッセージを表現するために選ばれた言葉

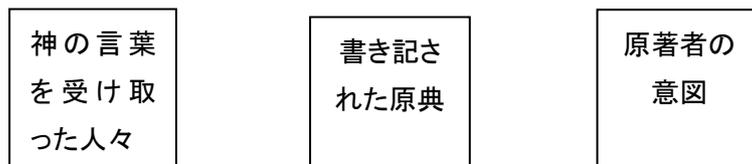
7. 並列段落

これらの分野の各々の研究が私達の文章研究の目的となっている。有意義な聖書の読み方についての方法論を説明する前に、かなり多くの解釈の逸脱の原因となっていて、その結果避けるべきだといえる、今日用いられているいくつかの不適切な方法について述べよう。

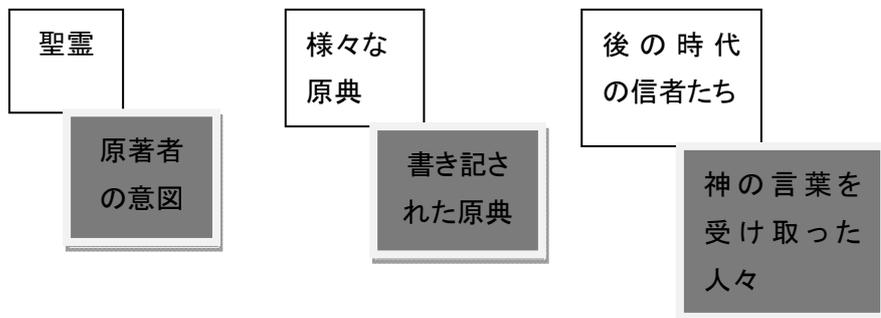
II. 不適切な方法

- A. 聖書の各書の文脈を無視して、各文、節、あるいは語でさえも、真実ではない、原著者の意志とは無関係な内容の文あるいはより長い文を書くために用いること。これはしばしば「文脈偽装」と呼ばれる。
- B. 聖書の各書の歴史的背景を、原典からの裏付けがほとんどまたは全くない、推定上の歴史的背景に置き換えて無視すること。
- C. 聖書の各書の歴史的背景を無視して、主に現代のクリスチャン達の手記(読者の)地元の新聞の朝刊を読むときと同じように聖書を読むこと。
- D. 神の言葉を最初に聞いた人々および原著者の意志とは全く無関係な哲学的あるいは神学的メッセージとして原典を寓話(寓意)[訳者注: たとえ話]的に解釈して、聖書の各書の歴史的背景を無視すること。
- E. 原典のメッセージを、原著者の目的と語られたメッセージとは無関係な、(読者)自身の神学体系、大切にしている教義、あるいは現世的な内容のものに置き換えて無視すること。この現象はしばしば、話し手が自身の権威を示す目的で、聖書を読み始めた後に起こる。これはしばしば「読者応答」(「文脈が私に示す意味」)的解釈と呼ばれる。

人間の書いた文章には少なくとも3つの関連する構成要素がある:



過去には、様々な読解技術が3つの構成要素の1つに集中していた。しかし、聖書特有の啓示を真に言い表すためには、(上記の)図を修正するほうがより適切だろう。



事実(これらの)3つの構成要素は解釈のプロセスに含まれなければならない。立証の目的のために、私の解釈においてははじめの2つの構成要素、つまり原著者の意図と原典に注目する。私はおそらく(今後もずっと)今までに見てきた悪習、つまり(1)原典を寓話(寓意)的あるいは精神的な意味に解釈すること、そして(2)「読者応答」(「文脈が私に示す意味」)的解釈、に反応していただく。悪習は(解釈の)各段階で起こる可能性がある。私達は自身の動機、偏見、技術、そして適用についていつも確認していかなければならない。しかし、もし解釈に範囲や制限や基準がないなら、私達はどのようにそれらを確認すればよいだろうか？ここに、可能な正しい解釈の範囲を制限するいくつかの基準を私に与えてくれる、原著者の意図と原典の文構造がある。

これらの不適切な読解技術に注目した上で、どのようにすれば、ある程度(そうする)根拠があり一貫性を持った、聖書の有意義な読み方と正しい解釈の仕方ができるだろうか？

Ⅲ. 聖書を有意義に読むことのできる方法

この点に関して、私は特定のジャンル(文章の種類)を解釈する独特の技術ではなく、聖書の原典の全てのタイプに対して有効な、一般的な聖書解釈の原則について述べたいと思う。ジャンルに特化した(聖書の)読み方を解説した本としては、Zondervan から出版された、Gordon Fee と Douglas Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* が良い。

私の方法論は主に、4つの個人的な読書のサイクルを通して聖霊に聖書を啓蒙化していただいている読者を対象としている。この方法論では聖霊、聖書の原典、そして読者が第一に重要であり、これらは二回にはされない。また、この方法論は読者が過度に注釈者に影響されるのを防いでいる。私はこのように言われているのをよく聞いている:「聖書は注釈書に多くの光を投げかける。」この言葉は学習参考書(訳者注: ここでは注釈書)をけなすつもりで言われるコメントではなく、むしろそれら(注釈書)を適切なタイミングで用いてほしいという切実な願いをこめたコメントである。

私達は自分達の行う原典自体の解釈について裏付けができなければならない。6つの分野が最低限度それ(原典自体の解釈)を立証している:

1. 原著者の
 - a. 歴史的背景
 - b. 文脈
2. 原著者の選択する
 - a. 文法的構造(統語法)
 - b. 現代語(で)の用法
 - c. ジャンル
3. 適切な
 - a. 関連の並列する文章

b. 原則どうしの関係(逆説)

私達は自分達の行う解釈について理由と論理とを述べ、そして説明できる必要がある。聖書は私達にとって信仰と実践の唯一の源である。悲しいことに、クリスチャンはしばしば、聖書の教えあるいは主張に同意しない。

4つの読書のサイクルは以下に示す解釈上の洞察(見識)を与えることを意図している:

A. 第1の読書サイクル

1. その(聖書の)書をまず一通り読みなさい。そしてその書を他の訳、できれば他の翻訳理論に基づいた訳による本で再び読みなさい。
 - a. 逐語訳(NKJV、NASB、NRSV)
 - b. dynamic equivalent(TEV、NJB)
 - c. 言い換え(リビングバイブル、拡大版聖書)
2. その書全体の(書かれた)主な目的を探求しなさい。その書のテーマを明らかにしなさい。
3. (可能であれば)その書全体の主な目的つまりテーマをはっきりと表現している文章単位、章、段落、あるいは文を抜粋しなさい。
4. その書の主な文学上のジャンル(類型)を明らかにしなさい。
 - a. 旧約聖書
 - (1)ヘブル語の物語
 - (2)ヘブル語の詩(知恵の文学、詩篇)
 - (3)ヘブル語の預言(散文、詩)
 - (4)法典
 - b. 新約聖書
 - (1)物語(福音書、使徒行伝)
 - (2)寓話[たとえ話](福音書)
 - (3)書簡
 - (4)黙示文学

B. 第2の読書のサイクル

1. その書全体を再び読み、主なトピックつまり主題を明らかにしなさい。
2. 主なトピックを要約し、その内容を簡単に短く述べなさい。
3. その書全体の(書かれた)主な目的についての(あなたの)コメントと大体の要約を学習参考書を用いて確認しなさい。

C. 第3の読書のサイクル

1. その書全体を再び読み、その聖書の書自体から歴史的背景と書かれた特殊な状況を明らかにしなさい。

2. その聖書の書に言及されている歴史的な事柄を列記しなさい。
 - a. 著者
 - b. 日付
 - c. 神の言葉を受け取る人々
 - d. その聖書の書が書かれた特別な理由
 - e. 聖書のその書が書かれた目的に関連する文化的背景
 - f. 歴史上の人々と出来事についての参考文献
3. あなたが解釈しようとしている聖書のその書の部分の(内容の理解の)ために、歴史的背景と書かれた特殊な状況についてあなたが要約したもの[(a)で行った]を段落レベルまで拡大させなさい。文章単位を常に明らかにし要約しなさい。これはいくつかの章あるいは段落の形にしなさい。これはあなたが原著者の論理と文章デザインに従うことを可能にする。
4. 要約した歴史的背景を学習参考書を用いて確認しなさい。

D. 第4の読書のサイクル

1. その特別な文章単位の箇所をいくつかの訳で再び読みなさい。
 - a. 逐語訳(NKJV、NASB、NRSV)
 - b. dynamic equivalent(TEV、NJB)
 - c. 言い換え(リビングバイブル、拡大版聖書)
2. 文あるいは文法の構造を探しなさい。
 - a. エペソ 1: 6,12,13 の反復聖句
 - b. ローマ 8: 31 の反復される文法構造
 - c. 互いに対照的な概念たち
3. 以下に示す事柄を列記しなさい。
 - a. 重要な用語
 - b. 見慣れない用語
 - c. 重要な文法構造
 - d. 特に難しい単語、節、そして文
4. 関連のある並列文を探しなさい。
 - a. 以下に示す文献を用いて、最も明確に(聖書のその書の)主題を表している文を探しなさい。
 - (1)「体系的神学」の本
 - (2)参照聖書
 - (3)コンコーダンス
 - b. 主題の中で、ありえる逆説的な対を探しなさい。聖書的真実の多くは論理的な対に表れている。というのは、教派間の衝突の多くが聖書的な(訳者注: 聖書の解釈者間

の)緊張に伴う原典の原文偽装に由来するからだ。聖書の全ての書は神の啓示によって書かれたものなので、私達は解釈において霊的なバランスを保つために神からの完全なメッセージを聖書の中に探し出さなければならない。

c. 同じ書、同じ著者、あるいは同じジャンルの中に並列文を探しなさい。聖書はそれ自身の最良の解釈者である。なぜなら、聖書は一人の著者、つまり聖霊によって書かれているからである。

5. 歴史的背景と聖書のその書が書かれた特殊な状況を学習参考書(以下に示すもの)を用いて確認しなさい。

a. スタディバイブル

b. 聖書百科事典、聖書ハンドブック、聖書辞典

c. 聖書入門書

d. 聖書注解書(この点においてあなたの学習では、過去あるいは現在のあなたの所属する信仰共同体[行っている教会やクリスチャンの仲間・友人のグループなど]に手助けや指導を頼みなさい)

IV. 聖書解釈の応用

この点について、(今までの聖書学習の)応用に話題を移す。今までは聖書原典をその書かれた状況に応じて理解することに時間をかけてきたので、次にそれを生活そして文化に応用していかなければならない。私は(この聖書学習の)聖書的意義を「聖書の原著者が自分の生きた時代の人々に語ったことを理解してその真実を私達の生きる時代に応用すること」と定義する。

応用は原著者の意図の時間的・論理的解釈の後に行なわれなければならない。私達は、聖書のみことばがその書かれた時代の人々に語ったことが何かを知るまでは、それを自分達の生きる時代に応用することはできないのだ！聖書のみことばは、それが決して意味していない意味を持ってはいないのだ！

(第3の読書のサイクルにおいて)あなたがまとめた詳しい要約はあなたのガイドとなってくれるだろう。応用は単語レベルではなく段落レベルで行なわれるべきである。単語は文脈中でのみ意味を持ち、節は文脈中でのみ意味を持ち、文は文脈中でのみ意味を持つ。解釈のプロセスに関わっている、神の啓示を受けた人だけが原著者なのだ。私達はただ、聖霊の啓蒙によって彼の導きに従っているだけである。しかし啓蒙は啓示ではない。「…と主が言われた」と言うためには、私達は原著者の意図を忠実に守らなければならない。応用は、聖書全体の書かれた意図、特定の文章単位、そして段落レベルの(原著者の)考えの発展に特に関係するものでなければならない。

私達の生きる時代の問題を聖書に解釈させてはいけない：聖書に語らせるのだ！このことで私達は原典から原則を導きだすことを求められるだろう。もし原典が原則を裏付けているならこれは正しいことである。(だが)不幸にも多くの場合、その原則は原典の(はっきり述べている)原則ではなく、「私達の(正しいと思っている)」原則なのだ。

聖書を応用するときには、(預言の中の言葉は別として)一つの、そして唯一の意味が特定の聖書原典について有効であることを覚えておくことが大切である。その意味は原著者が自分の生きた時代の人々に危機感あるいは必要を感じて語った意図と関連がある。この一つの意味から多方面への応用が可能である。それらの応用は神の言葉を受け取る人々の必要に基づくものであろうが、しかしそれは原著者の(聖書のみことばを解釈して確信した)意味と関連がなければならない。

V. 解釈の霊的側面

今まで私は解釈と応用に関わる論理的プロセスについて述べてきた。ここでは私は解釈の霊的側面について簡単に述べることにする。以下に示すチェックリストはととも私の役に立っている:

- A. 聖霊の助けを求めて祈りなさい(I コリント 1: 26-2: 16 を参照)。
- B. (自分にも他者にも)分かっている罪からの個人的赦しと清めを求めて祈りなさい(I ヨハネ 1: 9 を参照)
- C. 神を知りたいという、より大きな願いのために祈りなさい(詩篇 19: 7-14、42: 1 以下、119: 1 以下を参照)
- D. どんな新しい見識もすぐにあなた自身の生活に応用しなさい。
- E. 謙虚で教えられやすい者でありなさい。

論理的プロセスと聖霊の導きとの間でバランスを保つことはとても難しい。以下に示す引用文は私が両者のバランスを保つのを助けてくれている:

- A. James W. Sire 著 *Scripture Twisting* の 17-18 ページより:

「啓蒙は霊的に選ばれた者の心にだけでなく、神の人々の心にも来る。聖書的キリスト教にはカリスマ的指導者(権威者)階級も、啓蒙家も、(聖書のみことばを)全て正しく解釈できる人々もない。だから、聖霊は特別な知恵の賜物と知識と霊的識別力を下さる一方で、これらの賜物を持つクリスチャンに御自分のお言葉を単に権威的に解釈させようとはなさらない。権威あるものとして存在する聖書を参照するだけではなく、神が特別な能力を与えられた人々にも意見を聞くことによって学び、判断し、そして見分ける(認識あるいは識別する)ことは神の人々一人一人の責任である。要約すると、私が聖書全体について行っている仮定は、聖書は全ての人に対する神の真の啓示であり、その語る全ての事柄は私達にとって最高の権威あることであり、全体的に見て謎はなく、あらゆる文化圏の一般の人々に十分に理解されるべきものである、ということである。」

- B. Bernard Ramm 著 *Protestant Biblical Interpretation* の 75 ページにあるキルケゴールについての記述:

キルケゴールによれば、聖書の文法的、辞書的、歴史的研究は聖書を正しく(有意義に)読むための準備として必要であった。「聖書を神の言葉として読むためには、心で、口に出して、わくわくして、(神への)熱烈な期待をもって、そして神と会話しながら読まなければなら

らない。ぼんやりして、注意を払わず、学者や専門家と同じように聖書を読むことは、聖書を神の言葉として読むことにはならない。ラブレターを読むのと同じように聖書を読めば、それが聖書を神の言葉として読むことになるのである。」

C. H. H. Rowley 著 *The Relevance of the Bible* の 19 ページより:

「完全にではなく、ただ単に知的に理解するだけでは、聖書の持つ価値の全てを自分のものとすることはできない。聖書はそのように理解されることをひどく嫌っている。なぜならそれ(単に知的に理解[するような読み方を]しないこと)が完全な理解に不可欠だからである。そうではなく、完全に理解[するような読み方を]したいのなら、霊的価値を霊的に理解できるような読み方をしなければならない。だから、霊的な理解のためには知的な注意深さ以上の何かが必要である。霊的なことは霊的に見分けられ(認識あるいは識別され)るので、聖書を学習する者には、もし科学的研究を超えて神からのより豊かな恵みを聖書の全ての書から最大限受け取ることを目的とした研究がしたいなら、霊を受け入れようとする態度と、自分が従うべき神を見出そうとする熱意が求められる。」

VI. この注解書の方法

The Study Guide Commentary はあなたの解釈手順を以下に示す方法で助けることができるように編集されている:

- A. 聖書の各書に(それが書かれた)歴史的背景の短い要約を導入する。「第3の読書サイクル」を終えたらこの情報(要約)を確認しなさい。
- B. 各章の冒頭に文脈に関する洞察(見識)を述べる。これは、文章単位がどのように構成されているかをあなたが理解するのを助けてくれるだろう。
- C. いくつかの現代訳聖書を用いて、各章の冒頭あるいは主な文章単位に段落分けをし、見出し(短い説明文)をつける:
 1. 米国聖書協会ギリシャ語原典第4改訂版(UBS⁴)
 2. 1995年改訂 The New American Standard Bible (NASB)
 3. The New King James Version (NKJV)
 4. The New Revised Standard Version (NRSV)
 5. Today's English Version (TEV)
 6. The New Jerusalem Bible (NJB)

段落分けは神の啓示により行うことではない。それは文脈から確認されなければならない。他の翻訳理論や神学的観点に基づく聖書といくつかの現代訳聖書を比較することによって私達は原著者の考えの構成の仕方の予想される形を分析することができる。各段落は一つの大きな真実を含んでいる。これは「トピックセンテンス」あるいは「原典の中心的概念」と呼ばれてきた。この独特の考えは正しい歴史的かつ文法的解釈の鍵である。一つの段落の範囲内で解釈したり、その内容を説教したり教えたりすることは決して

すべきでない！また、各段落はその周囲の段落と関連があるということを覚えておきなさい。このような理由で、(聖書の)書全体の段落レベルでの要約はとても重要なのである。私達は、神の啓示を受けた原著者により語られている主題の論理の流れに従うことができなければならない。

- D. 注解の記述の内容は聖句を順に解釈する方式に従っている。これは私達を原著者の考えに従わせている。注解の記述の内容はいくつかの分野から情報を与えている:
1. 文脈
 2. 歴史的、文化的見識
 3. 文法についての情報
 4. 単語についての研究成果
 5. 関連する並列文
- E. この注解書のトピックのいくつかにおいては、引用される The New American Standard Bible(1995年改訂)の原文がいくつかの他の現代訳聖書によって補足されるだろう:
1. The New King James Version (NKJV): 「テキストウス・レセプトウス」の原典に従っている。
 2. The New Revised Standard Version (NRSV): The National Council of Churches of the Revised Standard Version 編の逐語訳改訂聖書である。
 3. Today's English Version (TEV): アメリカ合衆国聖書協会編の dynamic equivalent 訳聖書である。
 4. The New Jerusalem Bible (NJB): フランスカトリックの dynamic equivalent 訳に基づく英訳聖書である。
- F. ギリシャ語が読めない人々のために、いくつかの英訳聖書を比較すると原典中の問題を明らかにするのを助けることができる:
1. 数タイプある原典
 2. 単語の別の意味
 3. 文法的に難解な原典と(文章)構造
 4. (意味が)あいまいな原典中の文
- 英訳聖書はこれらの問題を解決できないが、これらの問題が確実に、より詳しくより徹底的に研究されるように促す。
- G. 各章の締めくくりとして、その章の主な解釈上の問題に注目させることを意図した、関連する議論のための問いを与える。

パウロのガラテヤ人への手紙

ガラテヤ人への手紙への導入

導入

- A. ガラテヤ人への手紙は、キリストお一人への信仰のみを通した、恵みだけによる救いの斬新で自由な真実の最も明確な表現のひとつだ。それはしばしば「クリスチャンの自由のマグナ・カルタ」と呼ばれている。
- B. この手紙はプロテスタント派による宗教改革の炎をかき立てた。
1. Martin Luther は「ガラテヤ人への短い手紙は私の手紙である。私はその手紙と婚約している。その手紙は私の妻である。」と言っている。
 2. John Wesley はガラテヤ人への説教に永久の平和を見出した。
 3. Curtis Vaughan は自著 *Study Guide Commentary* の11ページで「(ガラテヤ人への手紙ほど)人々の精神により深く影響し、とても長い人類の歴史をつくり、そして現代生活の最大の要求とのこれほどの適合性を語り続けている書は他にない」と述べている。
- C. この教義(教理)指向の手紙はおそらくパウロが(信徒向けに)最初に書いた手紙でローマ人への手紙の前に書かれたものであり、それが信仰を通した恵みによる義認の教義(教理)へと発展したことは、ユダヤ教においてモーセの律法を守ることが強調されていることや長老たちの伝統(口伝の伝統)とは別のことである。
1. 救いは律法と恵みのどちらにも見出すことはできない。
 2. 救いは律法と恵みのどちらにも見出されなければならない。
 3. キリストのようになることは真の回心の後に起こることである。
 4. モーセの律法尊重主義が救いに影響するユダヤ教と、クリスチャンの自由を裁き制限しようと試みるクリスチャン的な律法尊重主義との間に神学的な違いはない。パウロはユダヤ教を呪うべきものとして非難しているがクリスチャン的な律法尊重主義は支持している(ローマ 14 章 1-15 節と 15 章、I コリント 8~10 章を参照)。
それはパウロの擁護する、信仰を通した恵みによる救いの自由な福音であるが、パウロは一部の信徒に律法尊重の傾向があることも認識している。
- D. キリストお一人への信仰のみを通した、恵みだけによる、この斬新で自由な救いは私達の生きる時代に切に求められている。なぜならそれが私達の自己中心的で行い指向の宗教意識を繰り返し少しずつ刺激するからである。いつの時代も、人間の悔い改めと謙遜な信仰を通して仲介される、神の始められた自己犠牲的で無条件の契約の愛は試されているのだ！それは偽りの教師が救いにおけるキリストの中心的位置を拒絶していたということではなく、彼らがキリストを虚飾していたということである。それは私達が付け加えることではなく、私達がいかなることでも付け加えているということである！

著者

パウロがこの手紙を書いたことは、手紙の内容がパウロの主張の根本を成していることから全く疑う余地がない。ガラテヤ人への手紙はとて自伝的で個人的である。この手紙は読むと非常に心を動かされるが、一方で論理的に正確である。

(書かれた)時代と宛先人

A. 背景的事柄のこれら2つの特徴は一緒に取り扱われなければならない。なぜなら、宛先人の識別に関する2つの相反する理論がこの手紙の書かれた年代の決定に影響するからである。この2つの理論はどちらも論理的な重要性を有し、数少ない聖書的な証拠を含む。

B. それら2つの理論は:

1. 18世紀まで通説であった伝統的な理論

- a. それは「北部ガラテヤ人理論」と呼ばれている。
- b. それはトルコの北部中央平原の少数民族のガラテヤ人を言い表した「ガラティア」であると思われる(I ペテロ 1: 1 を参照)。これらの少数民族のガラテヤ人は紀元前3世紀にこの地域に侵入したケルト人(ギリシャ語の *Keltoi* やラテン語の *Gall*)であった。彼らは西ヨーロッパの同類の部族と区別するために「ガロ-ギリシャ人」と呼ばれている。彼らは紀元前230年にペルガマンの王アタラス I 世の支配下に置かれた。彼らの地理上の支配地は小アジアの北部中央地域、つまり現在のトルコに限定された。
- c. もしこの少数民族である可能性を考慮すれば、この手紙の書かれた年代はパウロが第二あるいは第三の伝道旅行をした紀元50年代半ばであると考えられる。パウロはシラスとテモテとともに旅をしたようだ。
- d. ガラテヤ 4: 13 でパウロの罹った病気はマラリアだと言う研究者もいる。彼らは、パウロはマラリア感染者の多い海岸沿いのじめじめした低地を去って北部の高地へと移動したのだと主張している。

2. 第2の理論は Wm. M. Ramsay 卿著 *St. Paul the Traveller and Roman Citizen* (New York の G. P. Putnam's Sons が 1896 年に刊行) によって擁護されている。

- a. 伝統的な理論が「ガラティア」を少数民族と定義しているように、この理論はその語を行政(管理)官と定義している。パウロはしばしばローマ帝国の州の名前を用いたようだ(I コリント 16: 19、II コリント 1: 1 と 8: 1 などを参照)。ローマ帝国のガラテヤ州は少数民族の住んでいた「ガラティア」より大きな地域を含んでいた。これらの少数民族のケルト人はごく初期からローマ帝政を支持し、(他地域)より大きな地方自治権と領土支配権を与えられていた。もしこの広大な地域が「ガラティア」の名で知られていたならば、使徒行伝 13~14 章に記されている、ピシディア州のアンティオキア、リストラ、デルベ、イコニオンなどのこれら南部の都市へのパウロの最初の伝道旅行でこれらの都市に教会が開かれた可能性がある。

b. もしこの「南部理論」が正しいとするならば、ガラテヤ人への手紙が書かれた年代はかなり早い時期、つまりガラテヤ人への手紙について同じ議題が話し合われた使徒行伝15章の「エルサレム会議」に近いがそれ以前であったと考えられる。その会議は紀元48～49年に開かれたが、ガラテヤ人への手紙は多分それと同時期に書かれたのだろう。もしこのことが真実なら、ガラテヤ人への手紙は新約聖書のパウロの手紙の中で最初のものということになる。

c. 南部ガラテヤ人理論を裏づけるいくつかの証拠がある。

(1) パウロと一緒に旅行した人の名前については述べられていないが、バルナバの名は3回登場する(2: 1と9節と13節を参照)。これはパウロの最初の伝道旅行の事実と合致する。

(2) テトスは割礼を受けていないと言われている(2: 1～5を参照)。これは、ガラテヤ人への手紙が書かれた年代が使徒行伝15章の「エルサレム会議」以前であったという考えと最もよく合致する。

(3) ペテロの発言(2: 11～14を参照)と異邦人との交わりの問題は、ガラテヤ人への手紙が書かれた年代が使徒行伝15章の「エルサレム会議」以前であったという考えと最もよく合致する。

(4) エルサレムに金銭が持ち込まれたときに、様々な地域(使徒行伝 20: 4を参照)出身のパウロの仲間数名が列挙されている。しかしガラティア北部出身の者は、これら少数部族のガラテヤ人が教会に出席していたことを私達が知っているにもかかわらず、全く挙げられていない(I コリント 16: 1を参照)。

3. これらの理論に関する様々な議論の詳細については専門的な注解書を参照せよ。それらはそれぞれ正当な観点を有しているが、時間に関するこの点において見解は一致しておらず、「南部理論」が全ての事実と最もよく合致するようだ。

C. ガラテヤ人への手紙と使徒行伝の関係

1. パウロはエルサレムを5回訪れており、そのことは使徒行伝の中でルカにより記されている。

- a. 9: 26～30、彼自身の回心後
- b. 11: 30と12: 25、異邦人の教会から飢餓の救済をするため
- c. 15: 1～30、エルサレム会議
- d. 18: 22、短期訪問
- e. 21: 15 前半、異邦人の働きの新たな説明

2. ガラテヤ人への手紙にはエルサレムを2度訪れたと記されている。

- a. 1: 18、3年後
- b. 2: 1、14年後

3. 使徒行伝 9: 26 がガラテヤ人への手紙 1: 18 と関連があることは最も確からしいようだ。

使徒行伝 11: 30 または 15: 1 前半あるいは記録にない訪問は多分ガラテヤ人への手紙 2: 1 でも述べられている。

4. 使徒行伝 15 章とガラテヤ人への手紙 2 章の記述にはいくつかの相違点があるが、これは多分以下に示すようなことによる:
 - a. 見解の相違
 - b. パウロとルカの意図の相違
 - c. ガラテヤ人への手紙 2 章は、使徒行伝 15 章に記された会議の少し前に書かれ、その会議と関連があるかもしれないという事実

D. F. F. Bruce と Murry Harris によってわずかに修正が加えられた、パウロが手紙を書いたと考えられる年代

<u>手紙</u>	<u>年代</u>	<u>書かれた場所</u>	<u>使徒行伝との関連</u>
1. ガラテヤ	(紀元)48 年	シリア州のアンティオキア	14: 28、15: 2
2. I テサロニケ	50 年	コリント	18: 5
3. II テサロニケ	50 年	コリント	
4. I コリント	55 年	エフェソス	19: 20
5. II コリント	56 年	マケドニア	20: 2
6. ローマ	57 年	コリント	20: 3

7. ~10. 獄中書簡群

コロサイ	60 年代初め	ローマ	
エペソ	60 年代初め	ローマ	
ピレモン	60 年代初め	ローマ	
ピリピ	62 年末~63 年	ローマ	28: 30-31

11. ~13. 第四の伝道旅行

I テモテ	63 年(またはその後だが紀元 68 年より前)	マケドニア
テトス	63 年	エフェソス(?)
II テモテ	64 年	ローマ

手紙の(書かれた)目的

A. パウロは偽りの教師達のメッセージについて特定の地域3箇所の名を挙げている。これらの異端者達は、クリスチャンになる前にユダヤ教徒にならなければならないと信じていたので、「ユダヤ教徒化した人々」と呼ばれてきた(6: 12 を参照)。彼の関心はユダヤ教徒化した人々への非難にあった。

1. パウロは現実には(他の)12使徒のような使徒ではなかった(使徒行伝 1:21-22 を参照)。そのため彼は使徒の権威、つまり少なくともエルサレムの母教会の権威に頼っていた。
2. パウロのメッセージは偽りの教師達の誤ったメッセージとは異なっていた。このメッセージは

「律法とは別の信仰による義認」の概念と直接関連があるようだ。エルサレムの伝道者達は自分達の個人的生活においてまだ非常にユダヤ教徒的であった。

3. 自由思想(主義)の中のある概念がある意味でこれらの教会と関係があった(5: 18~6: 8を参照)。まさしくこれをどのように説明すべきかが議論されている。パウロの手紙の中で2つのグループ、つまりユダヤ教徒化した人々とグノーシス主義者に注目する研究者もいる(4: 8-11を参照)。しかし、これらの節は偶像崇拜と関連づけるのが最もよいようだ。信仰あるユダヤ教徒は信仰ある異教徒の生活様式に関心があった。パウロの斬新で自由な恵みはどのように偶像崇拜と関連があり、そしてそれを超越したのか？
- B. 教義(教理)上はこの手紙はパウロのローマ人への手紙ととてもよく似ている。これら2つの手紙は、様々な状況の中で反復され発展したパウロの主要な教義(教理)を含んでいる。
- C. 現実には、ガラテヤ人はモーセの古い契約(旧約聖書)とキリストの新しい契約(エレミヤ 31章 31-34節とエゼキエル 36: 22-38を参照)の違いに注目していた。前者は人間の行いを神が受け入れられることに基づくとユダヤ教の指導者達によって理解されていた(パウロはモーセの契約自体ではなく、ユダヤ教の伝統によってそれが誤って解釈され適用されていることに反応している)が、後者は新しい心と新しい精神に基づいている。両者は神の恵みに基づいていて、義なる人々を望んでいる。両者の違いは、どのように義が達成されるかということである。

簡単な概要

- A. 序文、1: 1-10
 1. この手紙の一般的な紹介
 2. この手紙が書かれた理由
- B. 自らの使徒の地位についてのパウロの弁護、1: 11-2: 14
- C. 自らの福音の教義(教理)的真理についてのパウロの弁護、2: 15-4: 20
- D. 自らの福音の実践的意味についてのパウロの弁護、5: 1-6: 10
- E. 個人的要約と結語、6: 11-18

パウロの全ての手紙と同様に、教義(教理)編(つまり1~4章)と実践編(つまり5~6章)がある。

第一読書サイクル(viiページを見よ)

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。(解釈を試みようとしている)その聖書の書全体を一通り読みなさい。書全体の中心テーマをあなた自身の言葉で述べなさい。

1. 書全体のテーマ

2. 文学(ジャンル)のタイプ

第二読書サイクル(viiページを見よ)

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

その聖書の書全体をもう一度一通り読みなさい。主題を要約し、その主題を一文で表現しなさい。

1. 第一の文章単位の主題
2. 第二の文章単位の主題
3. 第三の文章単位の主題
4. 第四の文章単位の主題
5. (以下同様)

ガラテヤ人への手紙1章

現代語訳聖書の段落分割

UBS ⁴	NKJV	NRSV	TEV	NJB
あいさつ	あいさつ	あいさつ	あいさつ	あいさつ
1: 1~5	1: 1~5	1: 1~5	1: 1~2	1: 1~5
			1: 3	
			1: 4~5	
他に福音はない	唯一の福音	ガラテヤ人の背信	唯一の福音	警告
1: 6~9	1: 6~10	1: 6~10	1: 6~9	1: 6~10
1: 10			1: 10	
パウロはどのように使徒になったのか	使徒への召命	自らの使徒の地位についてのパウロの弁護	パウロはどのように使徒になったのか	神の召命
1: 11~12	1: 11~17	1: 11~12	1: 11~12	1: 11~24
1: 13~17		1: 13~17	1: 13~14	
			1: 15~19	
	エルサレムでの出会い			
1: 18~24	1: 18~24	1: 18~24		
			1: 20	
			1: 21~24	

第三読書サイクル(viiページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落

3. 第三段落
4. (以下同様)

文脈の洞察

- A. 本来はガラテヤ人へのあいさつである1~5節は、ギリシャ語では一つの文である。
- B. パウロの通常の謝辞(ローマ、I & IIコリント、エペソ、ピリピ、コロサイ、I & IIテサロニケ)はここでは見られない。このことはパウロとこのグループの教会との緊張を反映している。
- C. 6~10節はこの手紙全体の神学的主題を表している。パウロがこの手紙の中で論じている神学的事項の全てがこれら数節に述べられているといっても過言ではないだろう。
- D. ガラテヤ 1: 11-2: 21 はパウロが自らの使徒の地位について弁護し、それによって自らの福音について語っている自伝的箇所である。これはIIコリント10~13章と非常によく似ている。
- E. ガラテヤ 1: 11-2: 21 は次のような内容に分けられる:
 1. パウロはエルサレムの伝道者達に依存していなかった、1: 11-24
 2. パウロはエルサレムの教会に認められていた、2: 1-10
 3. パウロの平等主義の例、2: 11-21
- F. この手紙の主要部は 1: 11-6: 10 にある。それは次のような内容に分けられる:
 1. 自らの使徒の地位についてのパウロの弁護、1: 11-2: 14
 2. 自らの福音の教義(教理)的真理についてのパウロの弁護、2: 15-4: 20
 3. 自らの福音の実践的意味についてのパウロの弁護、5: 1-6: 10

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 1: 1-5

¹人々からではなく、代理人を通してでもなく、イエス・キリストと、イエスを死者の中から復活させられた父なる神によってつかわされた使徒パウロ、²そしてわたしとともにいる全ての兄弟達からガラテヤの諸教会へ。³父なる神と主イエス・キリストから恵みと平和があなたがたにあるように。⁴イエスは私達の神であり父でいらっしゃる方の御心に従い、今のこの悪い世から私達を救い出すために、御自身を私達の罪のために捧げられたのです。⁵私達の神であり父でいらっしゃる方にとこしえに栄光がありますように。アーメン。

1: 1「パウロ」タルソスのサウロは使徒行伝 13: 9 で初めてパウロと呼ばれる。「ディアスポラ」のユダヤ人の大半はヘブル語の名前とギリシャ語の名前を持っていたようだ。もしそうなら、サウロの両親は彼にこの名前をつけたということになるが、なぜ使徒行伝13章で突然パウロという名前が登場するのだろうか？多分(1)他者が彼をこの名前で呼び始めたから、あるいは(2)彼が自身を「小さい」または「最も小さい」という言葉で表現し始めたからだろう。ギリシャ語の名前 *Paulos* は

「小さい」を意味した。彼のギリシャ語名の起源についていくつかの理論が提唱されている。

1. パウロは背が低く、太っていて、はげ頭で、足が曲っていて、眉が濃く、目が飛び出ているという2世紀の言い伝えがこの名前のもとになったようだが、これはテサロニケの *Paul and Thekla* と呼ばれる聖書正典ではない書に由来するものである。

2. パウロが自身を、自分がかつて使徒行伝 9: 1-2にあるように教会を迫害したので「聖人達のうちで最も小さい」と呼んでいる段落（I コリント 15: 9、エペソ 3: 8、I テモテ 1: 15 を参照）。

研究者達の中にはこの「最も小さいこと」をひとりで選ばれた呼び名[訳者注:パウロ]の起源とする者もいる。しかし、ガラテヤ人への手紙のような書の中でパウロはエルサレムの12使徒との非依存性と平等性を強調しているので、この意見[訳者注:「最も小さいこと」をパウロという名前の起源とする説]はやや説得力に欠けるようだ。

「使徒」「使徒」は「送る」という意味のギリシャ語の単語のひとつ (*Apostello*) に由来する。イエスは、特別な意味で御自分とともにいる弟子として12人を選ばれ、彼らを「使徒」と呼ばれた(マルコ 6: 30 とルカ 6: 13 を参照)。

パウロはピリピ人への手紙とテサロニケ人への手紙第一・二とピレモン人への手紙を除く全ての手紙で自らの使徒の地位について主張している。この導入的段落は彼の記した手紙の中に見られる自らの使徒の地位についての主張のうちで最もはっきりとしたもののひとつであるが、それは偽りの教師達が個人的攻撃によって彼の福音に反論しようとした諸教会の事情による。

特別なトピック: 送る (*Apostello*)

これは「送る」という意味の一般的なギリシャ語の単語 (*Apostello*) である。この用語にはいくつかの神学的な用法がある。

- ユダヤ教の指導者達はこの用語を、英単語の "ambassador (大使)" のような、ある人の公的な代理人として召喚されてつかわれる人の意味で用いている (II コリント 5: 20 を参照)。
- この用語は福音書群ではしばしば、父なる神によってつかわれたイエス・キリストの意味で用いられている。ヨハネの福音書では救世主の意味に解釈されている (マタイ 10: 40 と 15: 24、マルコ 9: 37、ルカ 9: 48、そして特にヨハネ 4: 34、5: 24 と 30 節と 36 節と 37 節と 38 節、6: 29 と 38 節と 39 節と 40 節と 57 節、7: 29、8: 42、10: 36、11: 42、17: 3 と 8 節と 18 節と 21 節と 23 節と 25 節、20 章 21 節を参照)。この用語は信徒達のところにつかわされたイエスの意味で用いられている (17 章 18 節と 20: 21 を参照)。
- 新約聖書では弟子達の意味で用いられている。
 - 元々の12人の弟子達 (マルコ 6: 30、ルカ 6: 13、使徒行伝 1: 21-22 を参照)
 - 使徒の助手達とその同僚達
 - バルナバ (使徒行伝 14: 4 と 14 節を参照)
 - アンドロニコとユニアス (KJV ではユニア、ローマ 16: 7 を参照)

- (3) アポロ (I コリント 4: 6-9 を参照)
- (4) 主イエスの兄弟ヤコブ (ガラテヤ 1: 19 を参照)
- (5) シルワノとテモテ (I テサロニケ 2: 6 を参照)
- (6) 多分テトス (II コリント 8: 23 を参照)
- (7) 多分エパフロディト (ピリピ 2: 25 を参照)

c. 教会に与え続けられている賜物 (I コリント 12: 28-29 とエペソ 4: 11 を参照)

4. パウロは自分へのこの呼び名を自らの記した手紙の大半の中で、キリストの代理者として神から自分に与えられた権威を主張するために用いている (ローマ 1: 1、 I コリント 1: 1、 II コリント 1: 1、ガラテヤ 1: 1、エペソ 1: 1、コロサイ 1: 1、 I テモテ 1: 1、 II テモテ 1: 1、テトス 1: 1 を参照)

NASB 「人々からではなく、代理人を通してでもなく」

NKJV 「人からではなく、人を通してでもなく」

NRSV 「人の委任によらず、また権威ある機関からではなくつかわされた」

TEV 「人のところから来たのではなく、人を通して来たのではない」

JB 「人に対する自らの権威によらず、またいかなる人との約束にもよらない(方)」

これは、自らの使徒の地位が人ではなく神に由来するものであるというパウロの主張の一つを強調したものである (12 節と 16 節を参照)。偽りの教師達はパウロが (1) エルサレムの 12 使徒 (使徒行伝 9: 19-22 を参照)、あるいは (2) 母教会から自らの福音を得ていたが後にこの福音を少し変えたのだと主張していたのかもしれない。パウロはこの発言に対して、自らの信条や評判ではなく福音自体が問題だとして自己弁護している (II コリント 10~13 章を参照)。

「イエス・キリストと父なる神によって」 自分への啓示と福音の全てをイエスご自身から受けたというパウロの大胆な主張 (1: 12 を参照) に注目しなさい。パウロは使徒行伝 1: 22-23 に見られる使徒の資格基準に適していなかったにもかかわらず、この特別な使命 (つまり異邦人 [異教徒] への伝道のための使徒) を果たすように主から召されたと信じていた。

「イエス」は救い主 YHWH を意味する (マタイ 1: 21 を参照)。この用語は新約聖書の中で単独で用いられるときにはイエスの人間性を強調する (エペソ 4: 21 を参照)。「キリスト」はヘブル語の用語 *Messiah*、つまり聖別された方と同じ意味の語であり、新しい義の時代をもたらして下さる、唯一の、神の啓示を受けた、来るべき方についての旧約聖書の約束を強調する。

「イエス・キリスト」と「父なる神」は、新約聖書の著者がキリストの完全な神性を言い表す方法であったひとつの前置詞によって連結されており、これは 1 節と 3 節に表れている (I テサロニケ 1 章 1 節と 3: 11、 II テサロニケ 1: 2 と 12 節と 2: 16 を参照)。

神は天のお父様でいらっしゃる、それはユダヤの家におけるのと同じく、性的な世代つまり年代の経過ではなく個人的な関係と統治の意味でいうご存在である。

特別なトピック: 天のお父様

旧約聖書は父なる神について親密な家族の比喩を導入している。

1. イスラエルの国家はしばしば「YHWH の息子」と言い表されている(ホセア 11: 1、マラキ 3: 17 を参照)。
2. さらに前では申命記で父なる神について類似の語が用いられている(1: 31)。
3. 申命記32章ではイスラエルは「彼の子供達」と呼ばれ、神は「あなたの父」と呼ばれている。
4. この類似性は詩篇 103: 13 で述べられ、詩篇 68: 5 でさらにはっきりしている(孤児達の父)
5. それは預言者達の間で一般的であった(イザヤ 1: 2 と 63: 8、63: 16、64: 8[父なる神の息子イスラエル]、エレミヤ 3: 4 と 19 節、31: 9 を参照)。

イエスはアラム語を話されたが、このことは多くの場所で「お父様」がギリシャ語の *Pater* として見られることがアラム語の *Abba* に影響しているかもしれないことを意味している(14: 36 を参照)。この家族用語「父ちゃん」あるいは「パパ」はイエスの父なる神との親密さを反映しており、イエスがこのことを弟子達に明らかにされていることも私達自身の父なる神との親密さを強めている。この用語「お父様」は YHWH を意味する語として旧約聖書の中で控えめに用いられているが、イエスはこの語をしばしば、そして普遍的に用いられている。これは信徒にとって、キリストを介した神との新しい関係の主な啓示である(マタイ 6: 9 を参照)。

「イエスを死者の中から復活させられた方」パウロは、イエスを死者の中から復活させられた方は父なる神であったことを強調している。彼に福音をお与えになったのは父なる神と御子であった。これは聖句を深読みし過ぎかもしれないが、エルサレムの12使徒がまだ人の形をとられていた主に召された一方で、パウロは自分は復活の主に召されたと主張しているようだ。

多くの段落では、イエスを死者の中から復活させ、イエスの働きを承認されたのは父なる神である(Ⅱコリント 4: 14、使徒行伝 2: 24 と 3: 15 と 10: 40、ローマ 6: 4、Ⅰペテロ 1: 21 を参照)。ローマ 8: 17 では、イエスを死者の中から復活させるのは霊なる神である。しかし、ヨハネ 10: 17-18 では御子なる神は御自分の命をお捨てになるが再び得られるとおっしゃっている。これは三位一体の神なる方々の御業の流動性を示している。

特別なトピック: 復活

A. 復活の証拠

1. ペンテコステ(五旬節)の 50 日後、復活はペテロの説教の主題となっていた(使徒行伝2章を参照)。その地域に住んでいた数千の人々が救われたのだ!
2. 弟子達の人生は失望(彼らは主イエスの復活を予想していなかった)から大胆さへ、ときには殉教へと劇的に変化した。

B. 復活の重要性

1. イエスが御自身について語られている通りの方であることを示すこと(マタイ 12: 38-40 での

死と復活についての予言を参照)

2. 神はイエスの御生涯とお教え、そして身代わりの死を承認されている！(ローマ 4: 25 を参照)

3. 全てのクリスチャンへの約束(つまり復活の体: I コリント15章を参照)を示している。

C. 死者の中から復活されることになっていたイエスのお言葉

1. マタイ 12: 38-40、16: 21、17: 9 と 22 節と 23 節、20: 18-19、26: 32、27: 63

2. マルコ 8: 31、9: 1-10 と 31 節、14: 28 と 58 節

3. ルカ 9: 22-27

4. ヨハネ 2: 19-22、12: 34、14~16章

D. さらなる研究のために

1. *Evidence That Demands a Verdict*, Josh McDowell 著

2. *Who Moved the Stone*, Frank Morrison 著

3. *The Zondervan Pictorial Encyclopedia of the Bible*, 「復活」、「イエス・キリストの復活」

4. *Systematic Theology*, L. Berkhof 著、346 ページと 720 ページ

1: 2 「そしてわたしとともにいる全ての兄弟達」 パウロが自分の仲間達の名前を明らかにしなかったことは現代の聖書研究者達にとって不運なことであるが、そのことによって、この手紙の宛先人に関する2つの理論の一つが立証されてきているようである。北部理論は少数部族のガラテヤ人に注目しており、南部理論はローマ帝国の自治州であるガラテヤ地方に注目している。パウロは自分の仲間達の名前がバルナバ(最初の伝道旅行)あるいはテモテとシラス(二回目の伝道旅行)とは言っていない。バルナバという名前はガラテヤ人への手紙の中に3回登場するが、その名前が出てくる箇所は最初の伝道旅行、従ってパウロの使徒としての活動の初期について述べた箇所だということになる。

パウロはこの手紙の中でしばしば「兄弟達」という用語を用いているが、多分それはこれらの教会に対する彼のメッセージがとても強烈で内容が深く、攻撃的であったからだろう。パウロは新しい主題を導入するのにしばしば「兄弟達」という言葉で書き始めていた。

「ガラテヤの諸教会へ」 ここでもこれらの教会の正確な所在は未定のままである。研究者達の中にはその所在はガラテヤ北部であり(I ペテロ 1: 1 を参照)、従ってこの書簡が書かれた年代は紀元 50 年代中期となると主張している者もいる。使徒行伝 26: 6 と 18: 23 はパウロがこの地方で説教したことの証拠と解釈されている。また、ガラテヤはローマ帝国の自治州のガラテヤであり、パウロとバルナバが最初の伝道旅行をした地域であると使徒行伝13章と14章で述べられている地域よりはるかに広い地域を占めると主張している者もいる。このことから、この書簡が書かれた年代は、使徒行伝15章で述べられているエルサレム会議の直前の紀元 40 年代後半であろう。

特別なトピック: 教会 (*Ekklesia*)

このギリシャ語の用語 *ekklesia* は2つの単語「～から」と「召された」に由来するので、神に召し出された人々を意味する。初期教会はこの語を世俗の使用事例(使徒行伝 19: 32 と 39 節と 41 節を参照)とセプトゥアギンタでのイスラエルの「集会[あるいは会衆]」(*Qahal*, BDB874、民数記 16: 3 と 20: 4 を参照)という意味とからその意味を解釈している。彼らはこの語を自分達に対して、旧約聖書の神の人々の後継者(子孫)の意味で用いていた。彼らは新しいイスラエル(ローマ 2: 28-29、ガラテヤ 6: 16、I ペテロ 2: 5 と 9 節、黙示録 1: 6 を参照)であり、神の全世界的宣教の成就(創世記 3: 15 と 12: 3、出エジプト 19: 5-6、マタイ 28: 18-20、ルカ 24: 47、使徒行伝 1: 8 を参照)であった。

この語は福音書群と使徒行伝でいくつかの意味で用いられている。

1. 街の世俗の集会、使徒行伝 19: 32 と 39 節と 41 節
2. キリストにある全世界の神の人々、マタイ 16: 18 とエペソ人への手紙
3. キリストの信者の地域集会、マタイ 18: 17 と使徒行伝 5: 11(これらの節ではエルサレムの教会)
4. (集合的に)イスラエルの人々、使徒行伝 7: 38、ステパノの説教の中で
5. ある地域の神の人々、使徒行伝 8: 3(ユダあるいはパレスティナ)

1: 3「恵みと平和があなたがたにあるように」 通常のギリシャ語の書簡のあいさつの言葉は *charein* という単語であった。パウロはこの語の特質を考慮して、似た響きを持つクリスチャン用語の *charis*、つまり恵みにこの語を変換している。研究者の多くは、パウロはギリシャ語のあいさつの言葉「恵み」とヘブル語のあいさつの言葉「平和」[*shalom*]とを結びつけたのだと示唆している。これは興味深い理論ではあるが、そのような考えはこの典型的なパウロの導入句を深読みしすぎることからきているような気がする。恵みが常に平和に先行することは神学的に興味深いことである。

「主」 ギリシャ語の用語 *kurios* はヘブル語の用語 *adon* と意味が似ている。どちらも「君子」、「主人」、「地主」、「亭主」、あるいは「領主」の意味で用いられた(創世記 24: 9、出エジプト 21: 4、II サムエル 2: 7、マタイ 6: 24、ヨハネ 4: 11 と 9: 36 を参照)。しかし、その語はまた、神がこの世につかわされた方、つまり救い主でいらっしゃるイエスを意味するようになったヨハネ 9: 38 を参照)。

この用語の旧約聖書での用法は、ユダヤ教において神の契約名、つまり「ある」(出エジプト 3 章 14 節を参照)を意味するヘブル語の動詞 YHWH を口にすることがためらわれていることに由来する。彼ら(ユダヤ教徒)は十戒のひとつ「あなたは主なるあなたの神の名をおろそかにしてはいけない」に違反することを恐れていた。だから彼らはその名を口にしなければおろそかにすることはないと思っていたのだ。そういうわけで彼らはその名をギリシャ語の用語 *kurios*(主の意味)と意味が似ているヘブル語の用語 *adon*(主の意味)に置き換えたのだ。新約聖書の著者達はこの語

をキリストの完全な神性の表現に用いた。聖句「イエスは主である」は公的な信仰告白であり、初期教会においてはこれが洗礼での恒例行事であった(ローマ 10: 9-14 を参照)。

YHWH

1. これは、契約を立てられる神、つまり救い主なる神の神性を反映した名前だ！人類は契約を破るが、神は御自身のお言葉、つまり(人類との)約束である契約に忠実でいらっしやる(詩篇 103 篇を参照)。

この名は創世記 2: 4 で *Elohim* とともに初めて登場する。創世記 1~2 章での創造についての記述は 2 つではないが、2 つの創造が強制的に記述されている: (1) 宇宙(形あるもの)の創造主なる神(2) 人間を特別に創造された神。創世記 2: 4 は、人類の特権的な地位と目的ならびにその特別な地位に関する罪と反逆の問題についての特別な啓示で始まる。

2. 創世記 4: 26 には「人々は主の名を呼び始めた」(YHWH)とある。しかし、出エジプト 6: 3 は、最初の契約の人々(家父長達とその家族達)が *El-shaddai* という名前でだけ神を知っていたことを暗示している。YHWH という名前は出エジプト 3: 13-16、特に 14 節でただ 1 度説明されている。しかし、モーセの著述物ではしばしば語源ではなく通常言葉遊びによって用語が解釈されている(創世記 17: 5、27: 36、29: 13-35 を参照)。この名前の意味についてはいくつかの理論がある(IDB 第二巻 409~411 より抜粋)。

- a. アラビア語幹「熱烈な愛を示す」に由来
- b. アラビア語幹「吹く」に由来(嵐の神なる YHWH)
- c. ウガリット語[訳者注:ヘブル語と密接な関係にあるセム語族の死語で、楔形文字で知られる](カナン語)幹「話す」に由来
- d. フェニキア碑文によれば、「維持される方」あるいは「創始者なる方」という意味の使役の意味の分詞
- e. ヘブル語の用語 *Qal* の品詞形態「存在される方」(未来時制では「存在されるであろう方」)に由来
- f. ヘブル語の用語 *Hiphil* の品詞形態「存在させる方」に由来
- g. 「永遠でただお一人の生ける神」という意味のヘブル語幹「生きる」(例えば創世記 3: 20)に由来
- h. 出エジプト 3: 13-16 の文脈によれば、完了時制で用いられる未完了形として機能する用語「私は以前と同じようにあり続けよう」あるいは「私はいつもと同じようにあり続けよう」(J. Wash Watts 著 *A Survey of Syntax in the Old Testament* 67 ページを参照)に相当する。

YHWH という名前の完全な形はしばしば略語で、あるいは可能な限り元の形で表現される。

- (1) *Yah*(例えば Hallelu-yah)
- (2) *Yahu*(名前、例えばイザヤ)

(3) Yo(名前、例えばヨエル)

3. 後の時代のユダヤ教ではこの契約の名はとても神聖な名(四子音文字)とされたので、ユダヤ教徒は出エジプト 20: 7 および申命記 5: 11 と 6: 13 の命令に違反しないためにその名を口にするのを恐れた。そこで彼らはその名を「地主」、「主人」、「亭主」、あるいは「領主」を意味するヘブル語の用語 *adon* あるいは *adonai* (我が主)に置き換えたのだ。彼らは旧約聖書を読むときに YHWH を見かけるとそれを「主」と発音した。こういうわけで英訳聖書では YHWH が主と記されているのである。

4. *EI* の場合と同様に、しばしば YHWH はイスラエルの契約の神の特定のご性質を強調するために他の用語と組み合わせて用いられる。組み合わせが可能な用語は多数あるが、ここではその一部を挙げる。

- a. YHWH—*Yireh*(YHWH は与えられるだろう)、創世記 22: 14
- b. YHWH—*Rophekha*(YHWH はあなたのいやし主)、出エジプト 15: 26
- c. YHWH—*Nessi*(YHWH は私の旗印)、出エジプト 17: 15
- d. YHWH—*Meqaddishkem*(あなたを聖別される方 YHWH)、出エジプト 31: 13
- e. YHWH—*Shalom*(YHWH は平和)、士師記 6: 24
- f. YHWH—*Sabaoth*(万軍の YHWH)、I サムエル 1: 3 と 11 節、4: 4、15: 2(しばしば預言の中で)
- g. YHWH—*Ro'I*(YHWH は私の羊飼い)、詩篇 23: 1
- h. YHWH—*Sidqenu*(YHWH は我らの義)、エレミヤ 23: 6
- i. YHWH—*Shammah*(YHWH はおられる)、エゼキエル 48: 35

1: 4 この一連の聖句はパウロの福音のメッセージの3つの大きな特徴をはっきりと示している。パウロは導入部の内容を拡張して、ナザレのイエスの御人格と御業の中心性を示した。3つの特徴は次のようなことである:

1. イエスが私達の身代わりとなって亡くなられたこと(ローマ 4: 25 と 5: 6 と 8 節、I コリント 15: 3、II コリント 5: 14 と 21 節を参照)
2. イエスが新しい救世主の世をもたらされること。これは、この現在の悪い世「からイエスが永久に私達を救い出される」という意味のアオリスト(不定過去)中間動詞形である。

「悪い」は「これは悪い、神なき世である」という概念を表し、これを強調している(ヨハネ 12 章 31 節、II コリント 4: 4、エペソ 2: 2-7 を参照)。2つのユダヤ人の世—現在の悪い世と、神の救世主によってもたらされるであろう来るべき世—の概念はマタイ 12: 32、13: 39、28: 20 と新約聖書中の他の書に見られる。イエスは新しい世をもたらしておられるが、それはまだ完了していない。

4. イエスの使命は神の永遠の救いの計画に従ったものであった。イエスは死ぬために来られた(創世記 3: 15、イザヤ 53: 4 と 10 節、マルコ 10: 45、ヨハネ 3: 16、使徒行伝 2: 22-23 と 4: 27-28、II コリント 5: 21、II テモテ 1: 9、I ペテロ 1: 20、黙示録 13: 8 を参照)。

「御自身を私達の罪のために捧げられた」用語「賜物」は、罪深い人間に対して神が与えられる自由な恵みの比喩である。

1. イエスは御自身を捧げられた(マタイ 20: 28、ルカ 22: 19、ガラテヤ 1: 4、I テモテ 2: 6 を参照)
2. 神は世界の救いのために御子を与えられた(ヨハネ 3: 16、I ヨハネ 4: 10 を参照)
3. イエスは神の賜物である(ヨハネ 4: 10、ローマ 5: 15、II コリント 9: 15 を参照)
4. キリストにある信仰を通した恵みによる義認は神の賜物である(ローマ 3: 24、エペソ 2: 8 を参照)

NASB、NIV 「私達を救い出す」

NKJV 「私達を救い出す」

NRSV 「私達を自由にするために」

TEV 「私達を救い出すために」

NJB 「私達を自由にするために」

これはアオリスト(不定過去)中間仮定法である。使徒行伝 7: 10 と 34 節では、これはエジプト脱出と同じ意味で用いられている。イエスは新たなモーセでありエジプト脱出である！ガラテヤ人への手紙の文脈の中では、これはキリストの死が信徒に、全人類に対する罪の赦し(イザヤ 53 章を参照)をもたらすことを意味している。罪深い人間が救われることは神の御意志である(ヨハネ 3 章 16 節、I テモテ 2: 14、II ペテロ 3: 9 を参照)。

「今のこの悪い世」 次の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: この世と来るべき世

旧約聖書の預言者達は未来を現在の延長だと見ていた。彼らにとって未来は地理的なイスラエルの回復となるはずのものである。しかし、彼らはそれを新しい世とも見ていた(イザヤ 65: 17 と 66: 22 を参照)。アブラハムの子孫による(エジプト脱出後にも)相次ぐ意図的な YHWH の拒絶によって新たなパラダイム(理論的枠組み)がユダヤの聖書外典的黙示文学(例えば I エノク、IV エズラ、II バルク)の中に生まれた。これらの書から2つの世、つまりサタンに支配される現在の悪い世と、聖霊が支配なさり救世主(しばしば大いなる戦士と呼ばれる)によって始められる来るべき義の世の区別が始まった。

神学のこの分野(終末論)には明らかに進展が見られる。神学者達はこれを「進歩的」黙示と呼ぶ。新約聖書は、これは2つの世という新しい宇宙の現実(つまり時間二元論)であると主張している。

イエス
マタイ 12: 32

パウロ
ローマ 12: 2

ヘブル人への手紙
1: 2

マタイ 13: 22 と 29 節	I コリント 1: 20、2: 6 と 8 節、3: 18	6: 5
マルコ 10: 30	II コリント 4: 4	11: 3
ルカ 16: 8	ガラテヤ 1: 4	
ルカ 18: 30	エペソ 1: 21、2: 1 と 7 節、6: 12	
ルカ 20: 34-35	I テモテ 6: 17	
	II テモテ 4: 10	
	テトス 2: 12	

新約聖書の神学では、ユダヤ教徒のいうこれら2つの世は、救世主が2度来られるという予期せぬ過度の預言のために重複している。イエスの受肉は新しい世の始まりについての旧約聖書の預言(ダニエル 2: 44-45)を成就させた。しかし、旧約聖書はまた、イエスが裁き主そして征服者として来られるとも見ている。というのは、イエスは最初は卑しく従順な(ゼカリヤ 9: 9 を参照) 苦難の奴隷(イザヤ 53 章とゼカリヤ 12:10 を参照)として来られたからである。イエスは旧約聖書の預言の通りに権威をもって来られるだろう(黙示録 19 章を参照)。この2段階の成就是神の王国の存在(開始)を実現させたが、実際に実現するのは未来である(完了していない)。これが新約聖書の、すでに実現しているのだがまだ私達は見ていないという主張である。

「私達の神であり父でいらっしゃる方の御心に従い」 次の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: 神の御心(Thelema)

ヨハネの福音書

- イエスは神の御心を行うために来られた(4: 34、5: 30、6: 38 を参照)
- 父なる神から御子を頂いた人々全てを終りの日によみがえらせるために(6: 39 を参照)
- 御子を信じる人々全て(6: 29 と 40 節を参照)
- 神の御心を行うことに関する祈りに応えられた(9: 31 と I ヨハネ 5: 14 を参照)

共観福音書群

- 神の御心を行うことは重要である(マタイ 7: 21 を参照)
- 神の御心を行うことで人はイエスの兄弟姉妹となる(マタイ 12: 50、マルコ 3: 35 を参照)
- 誰も滅びないことが神の御心である(マタイ 18: 14、I テモテ 2: 4、II ペテロ 3:9 を参照)
- カルバリーはイエスに対する父なる神の御心であった(マタイ 26: 42、ルカ 22: 42 を参照)

パウロの書簡群

- 全ての信者の成熟度と働き(ローマ 12: 1-2 を参照)

- この悪い世から救い出された信者達(ガラテヤ 1: 4 を参照)
- 神の御心は救いの御計画であった(エペソ 1: 5 と 9 節と 11 節を参照)
- 聖霊に満たされた人生を体験し、また過ごす信者達(エペソ 5: 17-18 を参照)
- 神の知識に満たされた信者達(コロサイ 1: 9 を参照)
- 完全で完成なものとされた信者達(コロサイ 4: 12 を参照)
- 聖別された信者達(I テサロニケ 4: 3 を参照)
- 全てのものに感謝する信者達(I テサロニケ 5: 18 を参照)

ペテロの書簡群

- 義を行い(つまり世の権威に従い)愚かな者達を黙らせ、福音伝道の機会をつくりだす信者達(I ペテロ 2: 15 を参照)
- 苦しむ信者達(I ペテロ 3: 17 と 4: 19 を参照)
- 自己中心的ではない生活を送る信者達(I ペテロ 4: 2 を参照)

ヨハネの書簡群

- 永遠に生き続ける信者達(I ヨハネ 2: 17 を参照)
- 応えられた祈りに忠実に生きる信者達(I ヨハネ 5: 14 を参照)

1: 5「～な方にとこしえに栄光がありますように」パウロの著作物には典型的であるが、この頌栄歌(栄光の賛歌)は神の権威があまりにも大きいために文脈の中に割り込んでくる。パウロの著作物の中の代名詞にはしばしば(意味の)不明確な先行詞がある。多くの場合、これらの代名詞の中で男性単数代名詞は父なる神に対応している。

「栄光」旧約聖書では「栄光」を意味する最も一般的なヘブル語の用語(*kabod*)は元々は「重いこと」を意味する商業用語(秤を使うことに関係する語)であった。重いものは貴重品、つまり本質的に価値があるものであった。しばしば明るさの概念([イスラエルの民が]荒野を放浪していた時代の栄光の雲 *Shekinah*)は言葉に付け加えられて神の威厳を表現した。神お一人が尊く誉むべき方である。墮落した人類にとって神はあまりにまぶしすぎて見ることができない。キリストを通してのみ神を本当の意味で知ることができる(エレミヤ 1: 14、マタイ 17: 2、ヘブル 1: 3、ヤコブ 2: 1 を参照)。

用語「栄光」はややあいまいな意味の語である。

1. その語は「神の義」と並列するかもしれない。
2. その語は神の「神聖さ」あるいは「完全性」を言い表しているかもしれない。
3. その語は、神がそれに似せて人類を造られた(創世記 1: 26-27 と 5: 1 と 9: 6 を参照)が、後に意図的な非服従を通して損なわれた(創世記 3: 1-22 を参照)神のお姿を言い表しているかもしれない。

特別なトピック: 栄光

「栄光」の聖書的な概念は定義が難しい。信徒達の栄光は、彼らが自分達ではなく神にある福音と栄光を理解することである(エレミヤ 9: 23-24)。

旧約聖書では「栄光」を意味する最も一般的なヘブル語の用語(*kbd*、BDB217)は元々は秤を使うことに関する商業用語(「重いこと」)(語)であった。重いものは貴重品、つまり本質的に価値があるものであった。しばしば明るさの概念は言葉に付け加えられて神の威厳を表現した(出エジプト 19: 16-18 と 24: 17、イザヤ 60: 1-2 を参照)。神お一人が尊く誉むべき方である。墮落した人類にとって神はあまりにまぶしすぎて見ることができない(出エジプト 33: 17-23、イザヤ 6: 5 を参照)。キリストを通してのみ YHWH を本当の意味で知ることができる(エレミヤ 1: 14、マタイ 17: 2、ヘブル 1: 3、ヤコブ 2: 1 を参照)。

用語「栄光」はややあいまいな意味の語である。

1. その語は「神の義」と並列するかもしれない。
2. その語は神の「神聖さ」あるいは「完全性」を言い表しているかもしれない。
3. その語は、神がそれに似せて人類を造られた(創世記 1: 26-27 と 5: 1 と 9: 6 を参照)が、後に意図的な非服従を通して損なわれた(創世記 3: 1-22 を参照)神のお姿を言い表しているかもしれない。

この語は、出エジプト 16: 7 と 10 節、レビ記 9: 23、民数記 14: 10 で[イスラエルの民が]荒野を放浪していた時代に YHWH が御自分の民にお姿を現わされたときに初めて用いられた。

「とこしえに」 文字通り「時代から時代へ」

特別なトピック: 永遠(ギリシャ語の熟語)

ギリシャ語の熟語句のひとつは「時代を越えて」(ルカ 1: 33、ローマ 1: 25 と 11: 36 と 16: 27、ガラテヤ 1: 5、I テモテ 1: 17 を参照)であるが、これはヘブル語の *'olam* を反映しているかもしれない。Robert B. Girdlestone 著 *Synonyms of the Old Testament* の 319~321 ページと旧約聖書の特別なトピック: 永遠 (*'Olam*) を見よ。他の関連熟語句には「これから後」(マタイ 21: 19 [マルコ 11 章 14 節、]、ルカ 1: 55、ヨハネ 6: 58 と 8: 35 と 12: 34 と 13: 8 と 14: 16、II コリント 9: 9 を参照)と「世々限りなく」(エペソ 3: 21 を参照)がある。永遠を意味するこれらのギリシャ語の熟語の間に違いはないように思われる。用語「時代」は「畏れ多い方の複数形」と呼ばれるユダヤ教の文法構造の数字的な意味で言えば複数形かもしれないし、あるいはユダヤ教で「悪の世」、「来るべき世」、「義の世」の意味のいくつかの「時代」の概念を言い表しているのかもしれない。

「アーメン」 これは「信仰」を意味する旧約聖書のヘブル語の用語(*emeth*、ハバクク 2: 4 を参照)のひとつの形である。その本来の語源は「確信していること」であった。しかし、その言外の意味は後に主張されることになる内容(II コリント 1: 20 を参照)に変わった。それは信心深く忠実な信頼

できる人物の比喩として用いられた(Robert B. Girdlestone 著 *Synonyms of the Old Testament* の 102~106 ページを参照)。ここではそれは父なる神への頌栄歌(栄光の賛歌)に近いものとして機能している(ローマ 1: 25 と 9: 5 と 11: 36 と 16: 27、エペソ 3: 21、ピリピ 4: 20 を参照)。

特別なトピック: アーメン

I. 旧約聖書

- A. 用語「アーメン」は以下に示すような意味のヘブル語の用語に由来する。
1. 「真実」(*emeth*, BDB49)
 2. 「誠実」(*emun*, *emunah*, BDB53)
 3. 「信仰」あるいは「忠実」
 4. 「信頼」(*dmn*, BDB52)
- B. その語源は人の安定した体の姿勢に由来する。その反対は不安定で危なっかしくて(申命記 28: 64-67 と 38: 16、詩篇 40: 2 と 73: 18、エレミヤ 23: 12 を参照)つまづき易い(詩篇 73: 2 を参照)人と言えるだろう。この文字通りの用法から比喩的な派生語として「誠実な」、「真実の」、「忠実な」、「信頼できる」が生まれた(創世記 15: 16、ハバクク 2: 4 を参照)。
- C. 特別な用法
1. 柱、Ⅱ列王記 18: 16(Ⅰテモテ 3: 15)
 2. 確信、出エジプト 17: 12
 3. 堅実、出エジプト 17: 12
 4. 安定、イザヤ 33: 6、34: 5-7
 5. 真実の、Ⅰ列王記 10: 6 と 17: 24 と 22: 16、箴言 12: 22
 6. 確固とした、Ⅱコリント 20: 20、イザヤ 7: 9
 7. 信頼できる(トーラ)、詩篇 119: 43 と 142 篇と 151 篇と 168 篇
- D. 旧約聖書では他にも2つのヘブル語の用語が活きた信仰を言い表すのに用いられている。
1. *bathach*(BDB105)、信頼
 2. *yra*(BDB431)、畏怖、尊敬、崇拜(創世記 22: 12 を参照)
- E. 信頼あるいは誠実の概念から、他者に真実、つまり信頼できることを言うために用いる礼拝のための用法が生まれた(申命記 27: 15-26、ネヘミヤ 8: 6、詩篇 41: 13 と 70: 19 と 89: 52 と 106: 48 を参照)。
- F. この用語の神学的重要性は人間の誠実さではなく YHWH の誠実さにある(出エジプト記 34 章 6 節、申命記 32: 4、詩篇 108: 4 と 115: 1 と 117: 2 と 138: 2 を参照)。墮落した人間の唯一の希望は YHWH が御自分の立てられた恵みの契約に忠実でいらっしゃることと彼(YHWH)の約束である。YHWH を知る人は彼(YHWH)のようになるはずである(ハバクク 2: 4 を参照)。聖書は御自分のお姿(創世記 1: 26-27 を参照)を人間のうちに回復された神の歴

史と記録である。救いによって人間は神との親しい関係を回復する。これが私達が造られた理由である。

II. 新約聖書

- A. 礼拝中の発言の(神に対する)忠実性を主張するために締めくくりの言葉として用語「アーメン」を用いることは新約聖書ではよくあることである(I コリント 14: 16、II コリント 1 章 20 節、黙示録 1: 7 と 5: 14 と 7: 12 を参照)。
- B. 祈りあるいは頌栄歌の締めくくりの言葉としてこの用語を用いることは新約聖書ではよくあることである(ローマ 1: 25 と 9: 5 と 11: 36 と 16: 27、ガラテヤ 1: 5 と 6: 18、エペソ 3: 21、ピリピ 4: 20、II テサロニケ 3: 18、I テモテ 1: 17 と 6: 16、II テモテ 4: 18 を参照)。
- C. イエスは重要な発言をなさるときにこの用語を用いられた唯一の方である(ヨハネの福音書ではしばしば2回用いられている; ルカ 4: 24、12: 37、18: 17 と 29 節、21: 32、23: 43 を参照)
- D. この用語は黙示録 3: 14 ではイエスの称号として用いられている(多分イザヤ 65: 16 の YHWH の称号)。
- E. 真実、忠実、誠実、信頼の概念はギリシャ語の用語 *pistos* あるいは *pistis* の中に表現されており、英語では「信頼」、「信仰」、「信条」と訳されている。

NASB(改訂版)原典: 1: 6-10

⁶キリストの恵みによってあなたがたを召してくださった方からこんなにも早く離れて、あなたがたが他の福音を求めようとしていることに、私は驚きあきれています。⁷他の福音というのは実は全く別のものではなく、あなたがたを惑わしてキリストの福音をゆがめようとする人々がいるということにすぎないのです。⁸しかし、たとえわたしたちであれ、天から来た天使であれ、わたしたちがあなたがたに告げ知らせてきた福音に反する福音をあなたがたに告げ知らせようとする者は呪われよ!⁹わたしたちが前にも言っておいたことを、今またわたしは言います。あなたがたが受けた福音に反する福音をあなたがたに告げ知らせようとする者は呪われよ!¹⁰わたしは今人々に気に入られようとしているのでしょうか、それとも神に気に入られようとしているのでしょうか。それとも人々に何とか気に入られようとあくせくしているのでしょうか。もしわたしが今なお人々に気に入られようとしているならば、わたしはキリストの忠実なしもべとはいえないでしょう。

1: 6「私は驚きあきれています」 感謝—パウロの著作物ではとても一般的なこと—の代わりに、信仰を通した恵みによる義認という純粋で単純で大いなる福音からガラテヤ人が偽りの教師達によりあまりにも容易に離れてしまっていることをパウロは驚き(その動詞は、パウロの著作物ではこの箇所とII テサロニケ 1: 10 にのみ見られる)をもって見ている。

「こんなにも早く」 2つの意味が考えられる(1)パウロが告げ知らせた福音を受けてからまもなく

(2) 偽りの教師達が来てからまもなく。

「(～)方から離れて」この動詞は現在時制で、ガラテヤ人が離反しようとしていることを示している。「離反する」は「そむく」という意味の軍隊用語である。パウロの福音を拒むことによって神御自身から離れるということの個人的意味が強調されていることに注意しなさい。「離反する」は現在時制動詞の受動態である可能性があるが、より長い文脈(3: 1以降と5: 7を参照)の中では現在時制動詞の中間形の意味を持つ。このことは、離反するように偽りの教師達が唆したとはいえ実際にそうしたのはガラテヤ人の意志によるものであったことを強調している。

「キリストの恵みによってあなたがたを召してくださった方」聖句「あなたがたを召された」は通常は父なる神の御業をいう(ローマ 8: 30 と 9: 24、I コリント 1: 9 を参照)。これは、聖句「キリストの」を付け加えることについての文脈上の問題のために重要である。それはパピルス P⁴⁶ と F*の中には見当たらないが、パピルス P⁵¹ とアンシアル書体²、A、B、K、F²の中には見られる。これは、その語がキリストを通して私達を召してくださった父なる神のことを言っていることを明らかにするための初期の付加語のようだ。もう一度このように言わなければならない: 神は人間の救いにおいていつも主導権をお持ちである(ヨハネ 6: 44 と 45 節、ローマ 9 章、エペソ 1: 3-14 を参照)。I テサロニケ 1: 4 の「特別なトピック: 選び」と II テサロニケ 1: 11 の「特別なトピック: 召された者」を見よ。

「他の福音を求めようとしている」「他の」[heteros]は時々「他の種類のものの中の別のもの」の意味で用いられる(II コリント 11: 4 を参照)。7 節では *allos* が用いられており、「1つの組の中の同じ種類のものの中の別のもの」と訳されている。しかし、コイネギリシャ語ではこれらの用語は同意語化していたのであまりはつきりと区別するべきではない。だが、この文脈の中では、パウロは明らかに両者を対比して用いていた。

1: 7

NASB 「実は全く別のものではなく」

NKJV 「別のものではなく」

NRSV 「他の福音があるということではなく」

TEV 「他の福音はありません」

NJB 「1つ以上の良い知らせがありえるということではなく」

ひとつの真の福音がしばしば誤解されているとはいえ、福音は2つはない。2: 7 の KJV 訳はしばしば2つの福音、つまりひとつはギリシャ人のための、もうひとつはユダヤ人のための福音に言及して解釈されている。これは偽りの教師達の言ってきたことかもしれないが、不運なそして誤った推(結)論である。

- NASB 「あなたがたを惑わしている人々がいるということにすぎないのです」
 NKJV 「しかしあなたがたを惑わす人々があります」
 NRSV 「しかしあなたがたを混乱させている人々があります」
 TEV 「あなたがたを混乱させている人々があります」
 NJB 「あなたがたの間に問題を起こす人々がいるということにすぎないのです」

「惑わせる」とは軍の反乱のような意図的行動のことをいう(この文脈にはいくつかの軍事用語がある)。「偽りの教師達」は 5: 12 では複数形だが、5: 7 と 5: 10 では単数形で用いられているので、実際には偽りの教師達の中でリーダーだけのことをいっているのかもしれない。彼らは 5: 12 では「扇動者」と呼ばれている。研究者の多くは、ユダヤ教徒となったガラテヤ人は使徒行伝 15: 1 と 5 節と 24 節に登場する回心したパリサイ人あるいは司祭だろうと推測している。彼らは、クリスチャンとなる前にユダヤ教徒となることの必要性を強調している。ユダヤ教徒となった人々がユダヤの律法上強調している事柄は以下に示すような点に見られる:

1. 割礼の必要性(2: 3-4、5: 1、6: 12-15 を参照)
2. 特別な日を守ること(4: 10 を参照)
3. パウロがペテロに出会ったとき(2: 11-14 を参照)に示唆された、食物に関するきまりを守ることも律法に含まれるとしている点

これは多分、Ⅱコリント 11: 26 とⅠテサロニケ 2: 14-16 に登場するのと同じ偽りの教師達のグループだろう。彼らの問題は救いの中心にキリストがおられることを否定したことではなく、恵みと人の行いを混乱させるモーセの律法を求めたことにある。新しい契約は人間の長所に注目してはいない(エレミヤ 31: 31-34、エゼキエル 36: 22-38 を参照)。

旧約聖書と新約聖書をどのように関連づけるかということの神学的・実践的問題は現代でも未解決のままである。以下に示すような事柄が問題となりうるものとして示唆されてきた:

1. 旧約聖書を無視すること
2. 旧約聖書を拡大解釈すること
3. イスラエルの新興宗教グループではない少数部族を存続させること
4. 旧約聖書を読むときと同じ視点で新約聖書を読むこと
5. イエスの新しいメッセージを通して旧約聖書を読むこと
6. 約束(旧約聖書)と成就(新約聖書)として聖書を解釈すること

私は今もこの問題と格闘しているのだ! 私にとって旧約聖書は真の啓示であると思われる(マタイ 5: 17-19 とⅡテモテ 3: 15-16 を参照)。創世記なしに聖書を理解することはできない。旧約聖書には不思議な方法で神が現れているが、しかし私には、イスラエルがモーセの契約をその人間的側面を強調することによって誤用したのだと思われるのだ! 私はむしろその神的側面を強調したい(創世記 3: 15 と 12: 3、出エジプト 19: 5-6 を参照)。

新約聖書はイスラエルに対する国家的約束を一般化しており、それによって墮落した人類を救い御自身のお姿に似たものとするという神の御心(創世記 1: 26-27 を参照)が完全に現わされて

いるのだ！ただお一人の神、ただ一つの世界、関係回復のためのただ一つの方法！

特別なトピック: ポブの伝道についての偏見

私はこの点について偏見があることを読者の皆さんに認めなければならない。私の組織神学はカルヴァン主義や天啓的史観(訳者注: 神の摂理によって歴史がつくられるという考え)ではなく、大いなる召命による伝道主義である(マタイ 28: 18-20、ルカ 24: 46-47、使徒行伝 1: 8 を参照)。神は全ての人、つまり御自身のお姿に似せて造られた全ての人(創世記 1: 26-27 を参照)を救う永遠の計画を持っておられた(創世記 3: 15 と 12: 3、出エジプト 19: 5-6、エレミヤ 31: 31-34、エゼキエル 18章と 36: 22-39、使徒行伝 2: 23 と 3: 18 と 4: 28 と 13: 29、ローマ 3: 9-18、19-20 節、21-31 を参照)と私は信じている。契約群はキリストの中で統一される(ガラテヤ 3: 28-29 とコロサイ 3: 11 を参照)。イエスは神の秘密であり、隠されていたが今や明らかにされた(エペソ 2: 11-3: 13 を参照)のだ！イスラエルの福音ではなく新約聖書の福音が聖句において重要である。

この予備知識が私の聖書解釈の全てのもとになっている。私は聖書を全て通読した！これは確かに偏見(解釈者全員が持っている！)であるが、しかし聖句から得られる情報に基づいた仮定である。

- | | |
|-----------|------------------------|
| NASB | 「そしてキリストの福音をゆがめようとする」 |
| NKJV、NRSV | 「そしてキリストの福音を曲解しようとする」 |
| TEV | 「そしてキリストの福音を変化させようとする」 |
| NJB | 「キリストの良い知らせを変化させようとする」 |

「ゆがめる」は「転覆させる」という意味のアオリスト不定詞であり、多分これも軍事用語であろう。道徳は福音の重要な要素であるが、常に救いに次ぐものである。それはユダヤ教徒となった者達の主張とは異なり、救いより優先されることはない(エペソ 2: 8-9 と 10 章を参照)。パウロの福音はキリストであり、そしてキリストのようになることである。一方、彼ら(ユダヤ教徒となった者達)の福音は義なる働き(モーセの律法)であり、そしてキリストにある神の義である。

1: 8「しかし、... であれ」このアオリスト中間仮定法の第三種条件文は仮定的な状況を表している(Ⅱコリント 11: 3-4 を参照)。パウロは、たとえ自分あるいは天から来た天使であれ、他の福音を告げ知らせようとするならば裁かれて神から離されるべきであると主張している。

- | | |
|------|----------------|
| NASB | 「その者は呪われよ！」 |
| NKJV | 「その者は呪われる」 |
| NRSV | 「その者は呪われる」 |
| TEV | 「罰を受け地獄へ行くだろう」 |
| NJB | 「その者は罰を受ける」 |

「呪い」(*anathema*、マタイ 18: 7、ローマ 9: 3、I コリント 12: 3 と 16: 22 を参照)は、神に何かを捧げるという意味で用いられるヘブル語の用語 *herem* を反映している。エリコが破壊のために神に捧げられた(ヨシュア 6~7章を参照)という事例において *Herem* はその用法から否定的な意味へと変化した。神の呪いは御自分の民が契約を破ったことの結果であった(申命記 27 章 11-26 節を参照)。しかしパウロはこの用語を特に、偽りの教師達の福音を神のお怒りにゆだねてその深刻さを示すために用いた。

統語論的には8節と9節は重文である(訳者注: 同じことを二度述べている)。8節の第三種条件文は起こる可能性のある行動(つまり仮定的行動)を示し、9節の第一種条件文は現在確かに起こっている行動(つまり偽りの教師達の説教)を示している。

特別なトピック: 呪い(*Anathema*)

「呪い」を意味するヘブル語の用語はいくつかある。*Herem* (BDB887、KB1105)は神への捧げもの(*anathema* である LXX、レビ 27: 28 を参照)で通常は破壊されるもの(申命記 7: 26、ヨシュア 6: 17-18 と 17: 12 を参照)の意味で用いられる。それは「聖戦」の概念で用いられる用語であった。神はカナン人を滅ぼされると言われ、エリコはその最初の事例、つまり「最初の実」であった。

新約聖書では *anathema* とその関連語はいくつかの異なる意味で用いられている。

1. 神への捧げもの(ルカ 21: 5 を参照)
2. 死ぬというののしり言葉(使徒行伝 23: 14 を参照)
3. 呪いののしること(マルコ 14: 71 を参照)
4. イエスに関する呪いの決まり文句(I コリント 12: 3 を参照)
5. 神の裁きつまり破壊的な御業に対して捧げられる人または物(ローマ 9: 3、I コリント 16: 22、ガラテヤ 1: 8-9 を参照)

1: 9「わたしたちが前にも言っておいたことを」これは複数名詞に対応する能動態直説法動詞の完了形であり、パウロの伝道チームの過去の説教のことを言っている。

「あなたがたが受けた福音」動詞「受けた」(*paralambano*、アオリスト能動態直説法動詞)はユダヤ教の指導者達の著作物の中に見られる「口述の伝統」を意味する専門用語であり、パウロが伝統を受け継いでいた(12 節、I コリント 11: 23 と 15: 3、ピリピ 4: 9、I テサロニケ 2: 13 と 4: 1、II テサロニケ 3: 6 を参照)ことを示しているが、文脈には彼が他の人々からこの伝統を受け継がなかった(12 節を参照)ことが強調されている。

クリスチャンになるためには人は福音を受け(ヨハネ 1: 12 を参照)、そしてそれを他の人々に告げ知らせるためにそれを信じ(ヨハネ 3: 16 を参照)なければならない。クリスチャンの回心には3つの要件があり、それらは全て重要である(3つは全て *pistis-pistello* の3つの用法に対応している。1: 23-24 の解説を見よ)。

1. イエスを個人的に受け入れる(信じるべき人物)
2. 新約聖書に記されたイエスについての真実を信じる(その人物についての確信すべき真実)
3. イエスのような生き方をする(その人物のような生き方)

パウロの福音の中心的内容が直接イエスに由来すること(12節を参照)を明らかにしなければならない。パウロはエルサレムの母教会とその指導者達を訪問する前に数年間説教の計画と準備を行った(ガラテヤ 1: 18 と 2: 1 を参照)。しかしパウロはまた、肉の体をお持ちのイエスを知る人々からイエスのお言葉と御業について多くを学んだ。

1. パウロが迫害した人々がイエスについて証言した。
2. パウロはステパノの弁護を見てそして聞いた(使徒行伝 7: 58 を参照)。
3. アナニアはイエスについて証言した(使徒行伝 9: 10-19 を参照)
4. パウロはペテロとともに15日間過ごした(1: 18 を参照)

さらに、パウロは自らの著作物の中で初期教会の多くの信条や賛美歌についても述べ(1: 4-5、I コリント 15: 3-4、エペソ 5: 14、ピリピ 2: 6-11、コロサイ 1: 15-20、I テモテ 3: 16 を参照)、またクリスチャンの伝統について数回述べている(I コリント 11: 2、II テサロニケ 3: 6 を参照)。パウロは偽りの教師達を糾弾するために非常に特殊で控えめな意味でこれらについて述べている。

1: 10「わたしは今人々に気に入られようとしているのでしょうか、それとも神に気に入られようとしているのでしょうか」 これは 1: 1 で論じ始めた主題の発展と継続である。偽りの教師達へのパウロの強烈な言葉は、彼が彼らの説教を聞いてきた人々に気に入られようとしてはいなかったことを明らかにしている。多分パウロは、I コリント 9: 19-27 と使徒行伝 21: 17-26 にあるように、全ての人に対して全てのものになったという自らの発言を非難されていたのだろう。これは次のように誤解されていた:(1)異教徒の文化との妥協(2)2つの福音、つまりひとつはユダヤ人のための、もうひとつは異教徒のためのより信じ易いもの、についてのパウロの説教。

「もし」 10 節は「事実に反して」という意味の第二種条件文である。拡大解釈するとこの文は次のように読める:「もしわたしが今なお人々に気に入られようとしているならば(実際にはわたしはそうではないが)、わたしはキリストの忠実なしもべ(実際にはわたしはそうである)とはいえないでしょう」。補遺1のVIIを見よ。

「わたしが今なお人々に気に入られようとしているなら」 「今なお」という用語については数多くの議論がなされている。これは、パウロが決して人々に気に入られようとしていなかったこと、あるいは、自分は伝道を始めた頃は熱心なパリサイ人のように人々に気に入られようとしていたという、パウロの告白を暗示している。

「わたしはキリストの忠実なしもべとはいえないでしょう」これは、人は2人の主人に仕えることはできないというキリストの教え(マタイ 6: 24 を参照)について述べている。「忠実なしもべ」は多分パウロが(1)イエスは主でパウロは奴隷であること、あるいは(2)旧約聖書でモーセが用い(申命記 34: 5 とヨシュア 8: 31 と 33 節を参照)、ヨシュア(ヨシュア 24: 29 と士師記 2: 8 を参照)、そしてダビデ(Ⅱサムエル 7: 5; 肩書、詩篇 18 篇を参照)に受け継がれた名誉ある指導者の肩書、について述べるために用いたのだろう。

NASB(改訂版)原典: 1: 11-17

¹¹兄弟達、わたしはあなたがたにうちあけます。わたしが告げ知らせた福音は人によるものではありません。¹²わたしはそれを人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示を通して受けたのです。¹³あなたがたはわたしの以前のユダヤ教徒としてのありさま、つまりわたしがどのように神の教会を徹底的に迫害し滅ぼそうとしていたかについて聞いてきています。¹⁴わたしは同胞の間で同じ年頃の多くの者たちよりもユダヤ教に傾倒し、先祖から受け継いだ伝統を極端なほどに熱心に守ろうとしていました。¹⁵しかし、わたしが母の胎内にあるときからわたしを選び分けられ、御恵みによってわたしを召しだされた神が御心のままに¹⁶わたしのうちに御子を現わされ、福音なる御子について異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしはすぐに血と肉に相談せず、¹⁷エルサレムに上ってわたしの前から使徒であった者達に会うこともせず、アラビアに退いて、それからダマスコに戻りました。

1: 11-2: 14 これは、パウロが自らの使徒としての地位と自分が告げ知らせた福音について弁護している文学単位である。

1: 11

NASB 「兄弟達、わたしはあなたがたにうちあけます」

NKJV 「兄弟達、わたしはあなたがたに知っておいてほしいことがあります」

NRSV 「兄弟姉妹達、わたしはあなたがたに知ってほしいのです」

TEV 「兄弟達、わたしはあなたがたに言いたいことがあります」

NJB 「兄弟達、このことは事実なのでわたしはあなたがたに認めてほしいのです」

KJV 訳ではこの箇所は「わたしはあなたがたに保証します」となっており、このような聖句では決まった言い方である(Ⅰコリント 12: 3 と 15: 1、Ⅱコリント 8: 1 を参照)。

1: 11-12「わたしが告げ知らせた福音は人によるものではありません」これは 1: 1 の2重否定を繰り返す聖句で始まっている。パウロは自分のメッセージの源は人間ではないと主張している(Ⅱテサロニケ 2: 13、Ⅱペテロ 1: 20-21 を参照)。彼はさらに、自分はそれをいかなる人からも受けてはいないと主張している。用語「受ける」はユダヤ教の学校の学生に用いられている。その福音は

パウロがエルサレムのユダヤ教の学校の学生だったときに受けた教えとは反対のものであった。それは彼がダマスコに行く途上とアラビアにいたときに(エペソ 3: 2-3 を参照) イエス・キリストの啓示を通して彼に教えられた。彼は 11 節と 12 節でこれを3回言っている！

用語「福音」と動詞「告げ知らされた」はどちらも次の複合語に由来する。

1. *eu*、「良い」
2. *angelion*、「知らせ」あるいは「メッセージ」

パウロは I コリント 15: 1 と II コリント 11: 7 でこれらの語を一緒に用いている。

1: 12「イエス・キリストの啓示」 これは主語の所有格(啓示の代理者としてのイエスを強調している。「人々から」の反対)であり、また目的語の所有格(啓示の実体としてのイエスを強調している。16 節を参照)であろう。

1: 13「あなたがたはわたしの以前のユダヤ教徒としてのありさまについて聞いてきています」 これらの教会がパウロの過去(回心前)についてどのように聞いていたかは明らかではない:(1)それは周知の事実だった(2)パウロが彼らにうちあげた(3)偽りの教師達がパウロの以前の所業について暴露した。「ユダヤ教」とは「パリサイ主義」のことを言っているようだ(使徒行伝 26: 4-5 を参照)。ローマ帝国の将軍タイタスによる紀元 70 年のエルサレムの破壊の後、パリサイ派はヤムニアという都市に移動した。サドカイ派は完全に消滅し、パリサイ主義が現在のラビ主導のユダヤ教となった。パウロはピリピ 3: 4-6 で熱心なパリサイ人であった自らの過去について述べている。

特別なトピック: パリサイ人

I. この用語は以下に示す語源のうちの1つに由来すると考えられる。

- A. 「分けられる」 この会派はマカベア(マカバイ)家の時代に生まれた(これが最も広く受け入れられている見方である)。
- B. 「分ける」 これは同じヘブル語幹のもう一つの意味である。研究者の中にはそれが解釈者を意味したのだと言う者もいる(II テモテ 2: 15 を参照)。
- C. 「ペルシア人」 これは同じアラム語幹のもう一つの意味である。パリサイ人の教義の中にはペルシアのゾロアスター教(拝火教)の二元論と多くの共通点を持つものがある。

II. 彼らはマカベア(マカバイ)家の時代に *Hasidim*(敬虔な人々)から派生した。エッセネ派(訳者注:紀元前2世紀から紀元1世紀末までパレスティナにあったユダヤ教の一派。禁欲と財産共有が特色)のような他の会派のいくつかはアンティオコス4世エピファネス(訳者注:セレウコス朝シリアの王。紀元前 215 年-164 年[在位 175 年-164 年])に対する反ヘレニズム運動から生まれた。パリサイ人は Josephus の *Antiquities of the Jews* の 8.5.1-3 に最初に述べられている。

III. 彼らの主な教義

- A. 来るべきメシア(救世主)への信仰 これは I エノクのような聖書外典的なユダヤ教の黙示文学に影響を受けている。
- B. 日々の生活に生きておられる神 これはサドカイ人とは正反対である。パリサイ人の教義の多くはサドカイ人の教義とは神学的に対称的であった。
- C. 地上での人生に基づく現実志向のその後の人生 これは報いと罰を伴う(ダニエル 12 章 2 節を参照)。
- D. 旧約聖書と口述の伝統の権威 (Talmud) 彼らはラビである学者達(保守的な Shammai と自由主義の Hillel)が解釈し適用している通りに旧約聖書の神のご命令に意識的に従っていた。ラビの解釈は、2つの異なる思想、つまり保守的な考えと自由主義、を持つラビ達の対話に基づいていた。聖句の意味についてのこれらの口頭での議論は最終的に2つの形式、つまりバビロニアのタルムードと未完成のパレスティナのタルムードに書きまとめられた。彼らはモーセがシナイ山上でこれらの口頭による解釈を受けたと信じていた。これらの議論は歴史的にはエズラと「大いなるシナゴーク」(後にサンヘドリンと呼ばれる)の人々によって始められた。
- E. 高度に発達した天使論 これには善と悪の霊的存在が関係する。これはペルシアの二元論と聖書外典的なユダヤ教の文学から生まれた。

NASB	「わたしがどのように徹底的に迫害していたか」
NKJV	「わたしがどのように迫害していたか」
NRSV	「わたしはこっぴどく迫害していました」
TEV	「わたしがどのように情け容赦なく迫害していたか」
NJB	「わたしがどれほどの損害を与えたか」

この未完了時制の動詞は使徒行伝 9: 4 で用いられており、使徒行伝 8: 1-3 と 22: 20 と 26: 10 (I コリント 15: 9 と I テモテ 1: 13 を参照)に記されているパウロの繰り返した行動について述べている。これらは一般的にパウロの個人的告白と同じ内容である。

「徹底的に」(誇張)について、以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: パウロの *Huper* 複合語の使用

パウロは、基本的に「上の」あるいは「上方の」という意味のギリシャ語の前置詞を用いて新しい語を作ることを特に好んだ。属格[所有格](奪格)とともに用いるとその語は「~のために」という意味になる。その語はまた、*peri* (II コリント 8: 23 と II テサロニケ 2: 1 を参照)のように、「~について」、つまり「~に関して」という意味にもなる。対格とともに用いるとその語は「上の」、「上方の」あるいは「~を越えて」という意味になる(A. T. Robertson 著 *A Grammar of the Greek New Testament in the Light of Historical Research* の 625-633 ページを参照)。ある概念を強調したいときにパウロは複合語の中でこの前置詞を用いた。複合語の中でのこの前置詞のパウロによる

特別な用法は次のようなものである。

A. *Hapax legomenon* (新約聖書中でただ1度用いられている)

1. *Huperakmos* 人生の全盛期を過ぎた人、I コリント 7: 36
2. *Huperauxano* あふれるほどに増える、II テサロニケ 1: 3
3. *Huperbaino* 限度を越える、(法に)違反する、I テサロニケ 4: 6
4. *Huperkeina* ~を越えて、II コリント 10: 16
5. *Huperkteina* ~を過剰に拡大(拡張)する、II コリント 10: 14
6. *Huperentugchano* とりなす、ローマ 8: 26
7. *Hupernikao* 大勝利している、ローマ 8: 37
8. *Huperpleonazo* あふれるほど豊かである、I テモテ 1: 14
9. *Huperrupsoo* 高く上げる、ピリピ 2: 9
10. *Huperphroneo* 高尚な考えを持つ、ローマ 12: 3

B. パウロの著作物でのみ用いられている語

1. *Huperaiomai* 自分自身を高く上げる、II コリント 12: 7、II テサロニケ 2: 4
2. *Huperballontos* 過剰に、度を越して、II コリント 11: 23(ここでのみ副詞だが、II コリント 3: 10 と 9: 14、エペソ 1: 19 と 2: 7 と 3: 19 では動詞)
3. *Huperbole* ~を越える、過剰に防護する、ローマ 8: 37、I コリント 12: 31、II コリント 1: 8 と 4: 7 と 17 節と 22: 7、ガラテヤ 1: 13
4. *Huperekperissou* 徹底的に、エペソ 3: 20、I テサロニケ 3: 10 と 5: 13
5. *Huperlian* 最高の、目立って、II コリント 11: 5 と 12: 11
6. *Huperoche* 卓越、優秀、I コリント 2: 1、I テモテ 2: 2
7. *Huperperisseuo* 卓越している、ローマ 5: 20(中間語法、豊かに満たされている、あふれている、II コリント 7: 4)

C. パウロが用いているが他の新約聖書の著者達はめったに用いていない語

1. *Huperano* はるか上方に、エペソ 1: 21 と 4: 10、ヘブル 9: 5
2. *Huperecho* 優秀、卓越、ローマ 13: 1、ピリピ 2: 3 と 3: 8 と 4: 7、I ペテロ 2: 13
3. *Huperephanos* 傲慢な、生意気な、ローマ 1: 30、II テモテ 3: 2、ルカ 1: 51、ヤコブ 4: 6、I ペテロ 5: 5

パウロはとても情熱的な人物であった。物や人が良かった場合、それらはとても良かった。また、物や人が悪かった場合、それらはとても悪かった。パウロはこの前置詞を用いて、罪、自己、キリスト、そして福音についての自分の最上級の感情を表現することができた。

「**神の教会**」 *Ekklesia* は「~から」と「呼ぶ」に由来するギリシャ語の複合語である。これはコイネギリシャ語で街の集会のようなあらゆる種類の集会を言い表すために用いられた(使徒行伝 19 章 32 節を参照)。この語は、エジプトのアレキサンドリア図書館の蔵書として紀元前 250 年頃に書

かれた旧約聖書のギリシャ語訳であるセプトウアギンタで用いられたので、初期教会はこの語を選んだ。このギリシャ語の用語は契約に関する聖句「イスラエルの集会[あるいは会衆]」の中で用いられたヘブル語の用語 *qahal* (民数記 20: 4 を参照) に訳されている。新約聖書の著者達は、彼らはその時代(旧約聖書の時代)の神の人々であった「神に召し出された者達」であると主張した。という意味とからその意味を解釈している。彼ら(新約聖書の著者達)は旧約聖書の神の人々と自分達つまり新約聖書の神の人々の間に大きな違いはないと見ていた。私達は、イエス・キリストの教会は現代のラビ主導のユダヤ教ではなく旧約聖書の御言葉の真の後継者であることを主張すべきである。

パウロが 1: 2 で地域教会に、また 1: 13 で世界教会について述べていることに注目しなさい。「教会」は新約聖書では3つの異なる意味で用いられている:(1)家庭教会(2)地域教会(1: 2、I コリント 1: 2 を参照)(3)地上におけるキリストのお体全体(1: 13、マタイ 16: 18、エペソ 1: 22 と 3: 21 と 5: 23-32 を参照)。

「滅ぼそうとしていた」 この動詞句は未完了時制で、過去に繰り返し行なわれた行為を意味する。

1: 14「わたしは同胞の間で同じ年頃の多くの者たちよりもユダヤ教に傾倒していました」 これはパウロのエルサレムのユダヤ教学校の同期生のことを言っている。一年次の神学生ほど熱狂的な人々はいないのだ！ユダヤ教徒の律法への情熱は実に献身的であったし、今もそうである。また、その情熱は知識と真理を伴わないものであったし、今もそうである(ローマ 10: 2 以降を参照)。パウロは同じ年頃のユダヤ人達に気に入られようとしていたのだ！

「先祖から受け継いだ伝統を極端なほどに熱心に守ろうとしていました」 ここでは「口述の伝統」を意味する専門用語である「伝統」という用語が用いられている。ユダヤ人は、文字に記された旧約聖書と同様に口述の伝統はシナイ山上で神がモーセに与えられたものであると信じていた。口述の伝統とは文字に記された旧約聖書を保護し解釈することを意味した。後にバビロニアとパレスティナのタルムードに成文化されたので、それ(口述の伝統)は重要な信仰関係(イザヤ 29 章 13 節、コロサイ 2: 16-23、II テモテ 3: 1-5 を参照)のかわりに形式主義と民間伝承を生んだ。II テサロニケ 2: 15 の「伝統」の解説を見よ。

1: 15

NASB	「しかし神が. . . されたとき」
NKJV	「しかし神が御心のままに. . . されたとき」
NRSV	「しかし神が. . . されたとき」
TEV	「しかし神が」
NJB	「そして神が」

多くの信頼できる古代の文献では、用語「神」のかわりに男性代名詞「彼」が用いられている(文

献P⁴⁶とBを参照)。Theos(神)は文献^R、A、Dの中に見られる。「彼」は元々の形であり、後に何を指示するかはっきりしない代名詞を明らかにするために theos に加えられたようである。補遺2を見よ。

「わたしが母の胎内にあるときからわたしを選び分けられ、御恵みによってわたしを召しだされた方」パウロは旧約聖書の預言者、特にエレミヤの召命(エレミヤ 1: 4-5、YHWH のしもべ、イザヤ 49: 1 と 5 節を参照)について述べている。パウロは伝道への神の召しを感じた(ローマ 1: 1 を参照)。これは、パウロの使徒としての権威と地位が人によるものではないこと(1 節、11-12 節を参照)を主張するもうひとつの方法である。神の召命の概念はパウロの個人的告白の中で強調されている(使徒行伝 9: 1-19、13: 2、22: 1-16、26: 9-18 を参照)。召しについての最強のメッセージのいくつかはパウロの著作物の中に見られる(ローマ9章とエペソ1章を参照)。

「御恵みによって」というパウロの表現が「聖霊」と同意語であるように思われるのは興味深い。術語(専門用語)はパウロの著作物によく見られる(ローマ 3: 24、I コリント 15: 10、II コリント 6 章 1 節、エペソ 2: 8 を参照)。

恵みは神の変わらないご性質を反映していて、霊は聖霊と罪深い人類とを出会わせる(ヨハネ 6: 44 と 65 節を参照)。

1: 16

NASB、NKJV、NJB 「わたしのうちに御子を現わされ」

NRSV、TEV 「わたしに御子を現わされ」

12 節で「啓示」と訳されている「現す」(*apocalupto*) は特に「明確な出現」を意味する。明らかにこれはダマスコへの途上、そして後にアラビアで起こった。

聖句「わたしのうちに」については多くの議論がある。それは神がパウロの目の前にイエスを現わされたという意味だと信じている研究者もあれば、神がパウロを通して(人々の目の前に)イエスを現わされたという意味だと信じている研究者もいる。どちらも真実である。*The Revised English Bible* では両者を合一している(御子をわたしのうちに、そしてわたしを通して現わされる)。より長い文脈では前者が最もよく適合するが、16 節では後者が最もよく適合する。

「わたしが御子について異邦人に告げ知らせるように」 聖句「わたしのうちに」は「異邦人のうちに」と言い換えることができる。神は異邦人を召すためにパウロを召された(使徒行伝 9: 15 と 22: 15、26: 16-18、ローマ 1: 15 と 11: 13 と 15: 16、ガラテヤ 2: 7 と 9 節、エペソ 3: 8、I テモテ 2: 7 を参照)。私達は英単語“ethnic”を「異邦人」を意味するこのギリシャ語の用語から得ている。

NASB 「わたしはすぐに血と肉に相談しませんでした」

NKJV 「わたしはすぐに血と肉と話し合いませんでした」

NRSV 「わたしは誰とも話し合いませんでした」
TEV 「わたしは誰にも助言を求めませんでした」
NJB 「わたしはこれについて誰とも話し合いませんでした」

これはアラビアでのパウロの私的な学びの時のことを言っているようだ(17節を参照)。パウロがどのくらいの期間学び、またアラビアに滞在したのかは明らかではない。それは多分、ダマスコの南東に隣接するナバト王国だろう(Ⅱコリント 11: 32 を参照)。18節からパウロは3年ほど滞在した(しかしそうする必要があったわけではない)ようである。パウロがこのように述べた本来の目的は(使徒行伝では述べられていないが)、彼がエルサレムの使徒達から自らの福音を受けたのではなく、またエルサレムの教会から公的に認められたのでもなく、神から自らの福音を受け、そして神によって公的に認められたことを示すことであった(1節と 11-12節を参照)。

特別なトピック: 肉(*sarx*)

これは人間の知恵あるいは世界的な標準のことを言っている(Ⅰコリント 1: 20、2: 6と8節、3:18を参照)。パウロは用語「肉」(つまり *sarx*)を自らの著作物の中でいくつかの意味で用いている。

1. 人体(ローマ 2: 28、Ⅰコリント 5: 5と7: 28を参照)
2. 人間の家系(父-子、ローマ 1: 3と4: 1、Ⅰコリント 10: 18を参照)
3. 人類全部(Ⅰコリント 1: 26と29節を参照)
4. 創世記3章の人類の墮落による人間の弱さ(ローマ 6: 19と7: 18を参照)

「わたしの前から使徒であった者達に」パウロは12人の最初の使徒の指導権をはっきりと認めていたが、同時に自分が彼らと平等であることも主張していた。

NASB(改訂版)原典: 1: 18-24

¹⁸それから3年後、わたしはケファと知り合いになろうとエルサレムに上って彼のところに15日間滞在しました。¹⁹しかしわたしは主の兄弟ヤコブ以外の使徒には会いませんでした。²⁰(今わたしはこのように書いていますが、自分は神の御前にうそはっていないとはっきり言います。)²¹その後わたしはシリアとキリキアに行きました。²²わたしはまだ、キリストにあるユダヤの諸教会とは面識がありませんでした。²³ただ彼らは、「かつて我々を迫害した者が、あの当時滅ぼそうとしていた信仰を、今は福音として告げ知らせている。」と聞いて、²⁴わたしのことで神をほめたたえていました。

1: 18「それから3年後、わたしはエルサレムに上りました」パウロはエルサレム訪問を公に認めている。この文は、パウロが回心後3年が過ぎるまでエルサレムの12人の使徒に会わなかったことを強調している。使徒行伝にはパウロがエルサレムを5回訪問したと記されているが、ガラテヤ人への手紙にはただ2回と記されている。使徒行伝に記された訪問のうちのどれがガラテヤ人へ

の手紙に記された訪問と類似しているか、あるいは他にも訪問があったのかを知ることはとても難しい。大半の人々は 18 節に述べられたこの訪問は使徒行伝 9: 26-30 に記された訪問と同じであると信じている。「導入」の「日付と宛先」の C.を見よ。

「ケファと知り合いになろうと」これは私達の知っている英単語「歴史」のもとになったギリシャ語の成句である。パウロは(1)ペテロと知り合いになるために(2)ペテロからイエスの教えを学ぶという特別の目的のためにエルサレムに行った。しかしパウロはペテロのところにずっと滞在していたのではない(使徒行伝 9: 28-30 を参照)。パウロは(昼は)福音を告げ知らせ、夜と安息日にペテロのところに滞在した。この節はパウロが15日間だけ滞在したことを強調しているが、これはさらなる宣教のための滞在としてはあまりにも短かすぎる。しかし、ペテロの手紙 I と II で明らかなパウロの術語と神学から、ペテロはパウロが自分から学んだことより多くのことをパウロから学んだようだ。

NASB、NRSV、NJB 「ケファ」
NKJV、TEV 「ペテロ」

ケファ(岩を意味するアラム語の用語)は MSS の P⁴⁶、P⁵¹、^{ℵ*}、A、B に見られる。ペテロ(大岩を意味するギリシャ語の用語)は MSS の ^{ℵ^c}、D、F、G、K、L、P に見られる。パウロは 2: 9 と 11 節と 14 節で「ケファ」を用いている。

1: 19「しかしわたしは主の兄弟ヤコブ以外の使徒には会いませんでした」このギリシャ語の文はとても曖昧である。文脈からはヤコブが使徒であると読み取れるが、これは明らかなことではない。それ(使徒)は 18 節にあるペテロのことを言っているのかもしれない。ヤコブはバルナバ(使徒行伝 14: 4 と 14 節を参照)、アンドロニコとユニアス(ローマ 16: 7 を参照)、アポロ(I コリント 4 章 9 節を参照)、エパフロディト(ピリピ 2: 25 を参照)、シルワノとテモテ(I テサロニケ 2: 6 と使徒行伝 18: 5 を参照)と同じように「使徒」であるようだ。このヤコブは主の異父兄弟(マタイ 13: 55 とマルコ 6: 3 を参照)であり、12使徒のひとりでかなり前に殉教した使徒ヤコブとは別人である。イエスの肉親は数世代にわたってエルサレムの教会の指導者であった。聖句のいくつか(使徒行伝 12 章 17 節と 15: 13 と 21: 18、I コリント 15: 7、ヤコブ 1: 1)はヤコブがエルサレムの教会のとても重要な指導者であったことを示している。2: 9 の特別なトピック: イエスの異父兄弟ヤコブを見よ。

「使徒」については 1: 1 の特別なトピックを見よ。

1: 20「自分は神の御前にうそはいいないとはっきり言います」パウロは誓いを立てることの重要性を知っていて、宣誓によって自らの忠実さを主張することが重要であるとも感じていた(ローマ 9: 1 と I テモテ 2: 7 を参照)。他の書簡にもパウロが神の忠実さの証人として用いられている

という記述がある(ローマ 1: 9、Ⅱコリント 1: 23 と 4: 2 と 11: 31、Ⅰテサロニケ 2: 5 と 10 節を参照)。パウロは自分のメッセージの霊的起源と内容について熟知していた。

1: 21「その後わたしはシリアとキリキアに行きました」 シリアとキリキアはローマ帝国の属州であったが、小さいほうの州キリキアは完全には独立していなかった(使徒行伝 15: 41 を参照)。このような理由でその地域名(キリキア)が2番目に述べられているようだ。実は時系列上パウロはその地域(キリキア)を最初に訪れている。パウロの宣教活動はキリキアから始まった。というのは、その地域(キリキア)には彼の故郷タルソスがあったからである。これは使徒行伝 9: 30 にも記されているようだ。パウロのシリア滞在時期は、ローマ帝国の属州シリアの首都であったアンテオケに関連して記されている。この時期は使徒行伝 11: 25-26 に記されている。

1: 22「わたしはまだ、キリストにあるユダヤの諸教会とは面識がありませんでした」「面識がなかった」というギリシャ語の用語は同語源の英単語「不可知論者」の中に反映されている。この場合の「知識」(*gnosis*)にはその語を否定するアルファ欠性(否定)語が含まれる。これはある意味で驚くべきことである。というのはパウロは教会を迫害する者として有名だったからである。しかし、全ての教会が彼が誰かを知っていたわけではなく、また彼はパレスティナの教会に宣教の許可を得ていなかった。

「諸教会」 1: 2 の特別なトピックを見よ。

1: 23-24 パウロがこれらのユダヤの初期教会に認められようとしていなかったのに、パウロが異邦人に宣教していることを聞いた彼ら(ユダヤの初期教会)は彼を認めた。これは、パウロが(使徒としての)正当な権威を持たないと主張したユダヤ人「クリスチャン」の偽教師達に対する彼のもう一つの論点である。

「信仰」 この用語はいくつかのはっきりした意味を持っているようだ。

1. 旧約聖書の背景からこの語の意味は「忠実さ」あるいは「信頼性」となる。従って、この語は神の忠実さを信じること、あるいは神が信頼できる方であることを信じることを言い表すのに用いられる。
2. 神が自由に与えてくださった、キリストにある赦しを私達が受け取ること
3. 神に忠実に、神のように生きること
4. クリスチャンの信仰とイエスについての真実という集合的意味(使徒行伝 6: 7 とユダ 3 節と 20 節を参照)

Ⅱテサロニケ 3: 2 のようないくつかの聖句では、パウロがどの意味でこの語を用いていたかを知ることは難しい。ここでは 4. が最も可能性が高い。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. ガラテヤの教会へのパウロの挨拶はどのような点で独特なのか？
2. 4 節に記された、キリストのご人格と御業を言い表した3つの聖句を挙げなさい。
3. なぜパウロはガラテヤの教会への所業においてそのように恐れられたのか？
4. 偽りの教師達とは誰で、彼らのメッセージの主旨は何か？
5. 用語「迫害した」はどのような意味か？
6. 自分が人に気に入られようとしていないことをパウロはどのように証明したか？
7. なぜパウロは 1:1 で強調したことを 11 節と 12 節で繰り返したのか？
8. 偽りの教師達はパウロを非難するために彼の以前の生活についての話題をどのように用いているか？
9. なぜパウロはアラビアへ行ったのか？
10. 偽りの教師達がパウロに対して行ったと思われる非難のいくつかと、1:10 以降でそれらの非難に対してパウロがどのように応答したかについて説明しなさい。

ガラテヤ人への手紙2章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
他の使徒に受け入れられたパウロ	福音の弁護	エルサレムで認められたパウロの使徒の地位	パウロと他の使徒	エルサレム会議
2: 1~10	2: 1~10	2: 1~10	2: 1~5 2: 6~10	2: 1~10
パウロがアンテオケでペテロを非難する	律法に戻らない	パウロがアンテオケでペテロの矛盾を非難する	パウロがペテロと議論する	アンテオケのパウロとペテロ
2: 11~21	2: 11~21	2: 11~14	2: 11~14	2: 11~13 2: 14
		教義に関する発言		パウロの告げ知らせた福音
		2: 15~21	2: 15~16 2: 17~21	2: 15~21

第三読書サイクル(viiページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上に挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

文脈の洞察

- A. この章は、1: 11 に始まり 2: 14 まで続く文章単位(パウロが自らの使徒の地位を弁護している)の続きである。
- B. 2: 15~21 では変則的な文章がパウロの福音の内容を紹介し、3、4章ではそれがさらに洗練された形となっている。これは、神の御意志の啓示に基づき、いかなる人間の伝統、つまり12人の使徒とエルサレムの教会に由来する伝統にも基づかない、パウロの自らの使徒の地位の弁護と福音である。
- C. 周知のようにこの段落は以下の2つの理由で解釈が難しい。

1. 最初の一区切りの 1-10 節は文法的に特異性がある。パウロは1、2 節で主題について論じ始めたが、3-10 節では一連の3つの括弧と口語(話し言葉)的な文でこの主題に割り込んだ。1、2 節の主題についての議論は 6-10 節で再開される。これは文法的に解説が難しいにもかかわらずその全体的な意味は明らかである。

現代訳聖書の中の 1-10 節の見慣れない句読法(つまり括弧、ダッシュ、3つのドット)を比較することで、パウロの考えに従おうとする時の問題点が見えてくる。

2. 次の一区切りの 11-21 節も、パウロとペテロの議論の結論が明らかではないので解釈が難しい。NRSV と TEV と JB では引用文が 14 節までに限られているが、NASB では引用文が 21 節まで続いている。パウロはペテロへの発言を 14 節で締めくくり、(メシアを)信じたユダヤ人達とユダヤ教徒化した者達の律法の地位(存在意義)の理解に関する神学的考察の要旨について 15 節で述べ始め、21 節まで述べ続けたのだと私は思う。

パウロは 15-21 節で、自らの告げ知らせた、神の自由な恵みの福音についての一連の質問と非難と誤解に回答している。それらの質問はペテロからではなくユダヤ教徒化した者達と彼らの背後にいるパリサイ人達からなされたものであった。これらの質問へのパウロの回答は3、4章へと続くことになる。

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 2: 1-10

¹その後14年たってから、わたしはバルナバとともに再びエルサレムに上りました。そのときにテトスも連れて行きました。²わたしがエルサレムに上ったのは啓示によりました。わたしは自分が異邦人に告げ知らせている福音について、特に名声ある人々には個人的に意見を述べました。というのは、自分が無駄に走っているのではないか、あるいは走ったのではないかと不安になったからです。³しかし、わたしと一緒にいったテトスさえ、ギリシャ人であったのに割礼を受けることを強制されませんでした。⁴それは、わたしたちの身柄を拘束しようとして、キリスト・イエスにある自由を見つけ出そうとこっそり忍び込んできた偽の兄弟達がいたからでした。⁵しかしわたしたちは、福音の真理をあなたがたのうちにとどまらせるために、一時たりとも彼らに屈して従いません

でした。⁶非常に名声ある人々からも割礼を受けることを強制されませんでした(彼らがどのような人々であったかはわたしにとってはどうでもよいことです。神はわけへだてをなさいません)—実際、彼らはわたしに重荷を負わせませんでした。⁷それどころか彼らは、割礼を受けた人々に福音を告げ知らせることがペテロに任されたのと同じように、割礼を受けていない人々に福音を告げ知らせることがわたしに任されていることを知ったのです。⁸(というのは、割礼を受けた人々に福音を告げ知らせる使徒としての使命を十分に果たせるようにペテロに働きかけられた方が、割礼を受けていない人々に福音を告げ知らせる使命を十分に果たせるようにわたしにも働きかけられたからです。)⁹また彼らはわたしに与えられた恵みを認め、柱とみなされていたヤコブとケファとヨハネは仲間であることのあかしとしてわたしとバルナバに右手を差し出しました。こうしてわたしたちは異邦人に、ヤコブたちは割礼を受けた人々に福音を告げ知らせに行くことになりました。¹⁰ただ、彼らはわたしたちに貧しい人々のことを忘れないよう求めましたが、それはわたしもそうしたいと切望していたまさにそのことでした。

2: 1「14年たってから」 14年という期間は学者達の間で意見の一致がほとんど見られない主題である。この時期は以下のような出来事に関係があるのかもしれない。

1. パウロの回心(1: 15-16 を参照)
2. パウロのアラビア滞在(1: 17 を参照)
3. パウロの最初のエルサレム訪問(1: 18 を参照)

この時期は、パウロのエルサレム訪問とそこで使徒たちと会うことがいかに遅れ気味で散発的であったかを示すことにおいてのみ重要である。

「わたしは再びエルサレムに上りました」「再び」とは2回目以降の訪問を意味する。その正確な時期は明らかではない。というのは、使徒行伝にパウロのエルサレム訪問の記録が5回あるからである。最後の2回はもっと後の訪問なのでこの段落では述べられていないが、ここで述べられているのが他の3回の訪問のどれかは明らかではない。個人的に私はガラテヤ人への手紙2章が使徒行伝 15 章と関連があると信じている。というのは、どちらもバルナバがいて、主題が同じであり、そしてペテロとヤコブの名が挙げられているからである。この著者の推測を超えて、*The New International Commentary Series* で有名な F.F. Bruce や *The Word Biblical Commentary Series* で有名な Richard Longenecker のような他の学者達はガラテヤ人への手紙2章が使徒行伝 11:30 に記された飢饉にあえぐ民の訪問と関連があると信じている。

「エルサレムに上った」という聖句は真に神学的である。使徒行伝 11:27 に記されているように、予言者達が「アンテオケに下った」ときに彼らの予言が的中した。エルサレムは聖なる都市であるので、あらゆる方向から「上って」くるところと考えられているのである。

「バルナバとともに」使徒行伝 4: 6 によれば、バルナバはヨセフという名のキプロス出身のレビ人

である。弟子達がバルナバにつけたこのあだ名は「励ましの息子」という意味である。彼はパウロの回心を受け入れた最初の人であった(使徒行伝 11:24 を参照)。彼は明らかに、シラスのように(使徒行伝 15: 22 を参照)エルサレムの教会の指導者であった(使徒行伝 11:22 を参照)。彼はタルソスに行ってサウロを捜し出し、アンテオケでの働きの際の助手とした(使徒行伝 11: 19-27 を参照)。彼はパウロの最初の伝道旅行に同行した(I コリント 9: 6 を参照)。

「そのときにテスも連れて行きました」 テスはパウロの忠実な助手の一人であった(II コリント 8: 23 を参照)。コリントやクレタのような伝道の特に難しい地を訪れる際にパウロはテスを随行させた。片親が異邦人であるテモテとは違い、テスは異邦人を両親として生まれた。エルサレムの教会はテスに割礼を施すようにパウロに求めなかった(使徒行伝 15 章を参照)。驚くべきことにテスの名は使徒行伝には全く登場しない。William Ramsay 卿と A.T. Robertson はテスがガルの兄弟だと推測していて、彼について特別な記述(自分の家族を卑下する行為)がないのはそのためだと説明しているが、これには証拠がない。マルチン・ルターはパウロが試みにテスをエルサレムに連れて行ったと推測している。また、パウロはテスを随行させたが、その(エルサレム到着の)直後にパウロは、テスが哀れなギリシャ人という理由で(3 節を参照)エルサレムの教会がテスに割礼を施すように自分に求めなかったことの重大性に気付いたのだという研究者もいる。

「わたしがエルサレムに上ったのは啓示によりました」 もし使徒行伝 15 章を作り話と仮定するならば、使徒行伝 15: 2 は矛盾を生む。しかし、そのときの啓示はそれを教会にもたらしたアンテオケの 5 人の予言者達の一人に由来することが示唆されてきた。その際アンテオケの教会はパウロのエルサレム訪問の必要を認めた。

「そしてわたしは自分が異邦人に告げ知らせている福音について彼らに意見を述べました」 これは 3-5 節と関連しているので非常に重要である。なぜパウロは使徒たちに自分の福音について語ったのか？(1)パウロは使徒たちに、自分の意見に賛成し自分の福音を肯定してもらいたかったのか？それとも(2)パウロは偽教師達の存在に反応していたのか？多分後者が 4 節と 5 節の挿入句の内容に最もよく合う。このパウロの報告の内容と同じことは使徒行伝 15: 12 にも述べられているようだ。

NASB 「しかし特に名声ある人々には個人的にそうしました」
NKJV 「しかし名声ある人々には個人的に」
NRSV 「(知識ある指導者たちと個人的に会ったときだけです)」
TEV 「指導者たちと個人的に会ったときに」
NJB 「わたしは指導者たちに個人的に言いました」

個人的な会見をまず見つけようとして使徒行伝 15 章を読んでいくのには困難が伴う。しかし、

使徒行伝 15: 2 前半と 6 節は主要な指導者たちとの会見について述べているようだ。パウロは自分の意見をよりきちんとした形で聞いてもらうために、ユダヤ教徒化した者たち（人は救われる前にユダヤ教徒にならなければならないと要求した者達）が以前から紛れ込んでいるであろう会衆ではなく、まず指導者たちに会ったのかもしれない。近年、多分ドイツのチュービンゲンの神学者達の過度の強調によるものかもしれないが、パウロとエルサレムの使徒達との間に緊張があったことを示唆する学者達がいる。また、2: 2 と 6 節（2回）と 9 節に見られる、パウロがエルサレムの指導者たちについて述べた普通ではない3つの事柄はやや軽蔑的であると主張する学者達もいる。これらの事柄は次の3つの点で軽蔑的であるとみなされている。

1. 彼らは、パウロが使徒達との間に個人的に何らかの緊張があったことではなく、偽りの教師達がパウロを軽蔑しようとして本来の12使徒を過度に強調したことを強調している。
2. 多分パウロは、使徒行伝 8: 1 に記されている、使徒達の行動の一部に失望した。使徒達は教会の世界宣教について全く理解していなかったのだ。パウロはまた、ガラテヤ 2: 11-14 に記されているように、エルサレムから仲間達が来たことを理由にペテロが異邦人との交わりの席を外したという恥ずべき事実で失望した。
3. これらの事柄は使徒達ではなく他の権威ある教会指導者について述べているか、あるいは一部の使徒達について述べている。

NASB、TEV	「というのは、自分が無駄に走っているのではないか、あるいは走ったのではないかと不安になったからです」
NKJV	「無駄に走るのではないか、あるいは走ったのではないかと思って」
NRSV	「無駄に走っていなかったこと、あるいは走ったことを確かめるために」
NJB	「というのは、自分が歩んでいた道、あるいはすでに歩んだ道が許されないのではないかと不安になったからです」

これは明らかに、パウロがエルサレムの指導者達から神学的に承認されようとしていたことを述べているのではない。そうではなくここでは異邦人に対する伝道の努力の事実が問題であり（Ⅱコリント 7: 14 と 9: 4 を参照）、パウロはその結果自分が受けるはずの一致した見解を望み、そのために祈っていた。パウロは他の書でも同様の不安について述べている（ピリピ 2: 16 と I テサロニケ 3: 5 を参照）。

2: 3「しかし、わたしと一緒にいったテスでさえ、ギリシャ人であったのに割礼を受けることを強制されませんでした」その意味が直接的なのに、この聖句に関してはいくつかの疑問がある：(1)5 節の内容に関して原典によって様々な表現があること。西方で発見された原典、特に原典 D では語「～ない」が省略されている。(2)4 節の意味があいまいであるので、研究者達の中には、強制されたからではなくテスの自由を示すためにパウロがテスに割礼を施したのだと言う者もいる。しかし、この聖句にはパウロの議論の要旨の全てが含まれている。半ユダヤ人であるテモテに割

礼を施したことで、パウロはすでに公然と非難されていた(使徒行伝 16: 3 を参照)。しかしこのとき彼はテトスに割礼を施すつもりはなかった。実際ここで問題となっているのは本当の割礼(ローマ 2: 28-29 とガラテヤ 6: 15 を参照)ではなく、神によって人がいかに義とされるかということである。パウロはユダヤ人およびユダヤ教徒化した者達の行い志向の考え方とイエスの福音の恵み志向の考え方を対比させて述べている。

2: 4

NASB	「それは偽の兄弟達がいたからでした. . . こっそり忍び込んできた」
NKJV	「これはこっそり忍び込んできた偽の兄弟達がいたので起こりました」
NRSV	「こっそり忍び込んできた偽の兄弟達がいたので」
TEV	「兄弟のふりをしてわれわれの一団に入ってきた」
NJB	「問題は、実はわれわれの兄弟ではない者がこっそり忍び込んできたことだけが理由で起こっているのです」

これらの偽の兄弟達については他の書でも述べられている(使徒行伝 15: 1 と 5 節、Ⅱコリント 11: 13 と 26 節、Ⅰテサロニケ 2: 14-16 を参照)。動詞形は受動態であり、多分彼らが何者かによって潜入させられたことを意味しているのだろう。

1. (メシアを)信じていないユダヤ人
2. 「ユダヤ教徒化した者」と呼ばれる、(メシアを)信じているユダヤ人の一教派
3. サタン自身

「偽の兄弟達」(*pseudodelphous*)という用語は、Ⅱペテロ 2: 1 で「偽の指導権」(*pseudoprophetai* と *pseudodidaskaloi*)を言い表すのに用いられている複合語と同様の語である。コイネギリシャ語におけるこの用語は一般的に、自分の住む都市に敵が潜入して防御力を調べる手助けをする裏切り者を言い表すのに用いられている。

解釈上のもう一つの問題は裏切りの舞台になっている場所に関係がある。偽の兄弟達は(1)エルサレムの教会(2)エルサレム会議(3)アンテオケの教会のどれに忍び込んだのか?これらの解釈の詳細には確実性を求めることが不可能である。従って、独断論には確証はない。

「わたしたちの身柄を拘束しようとして、キリスト・イエスにある自由を見つけ出そうと」キリストにある自由についてパウロが強調していることは最も重要なことである(使徒行伝 13: 39、ガラテヤ 5: 1 と 13 節を参照)。この文脈での「自由」はユダヤ人の支配と統制からの解放を意味し、概念として以降の章でさらに詳しく述べられている。私達はキリストにあって真に自由であるが、自由だからといって罪を犯してよいというわけではない(ローマ 14: 1-15: 13 と 5 節、Ⅰコリント 8-10 章を参照)ことをはっきり覚えておくことは大切である。福音につきものである、自由と責任のこの弁証法的な緊張は、パウロがコリントの教会には「責任」を、ガラテヤの教会には「自由」を強調していることにも表現されている。どちらも本当だ! 両者は釣り合いを保たなければならない!

2: 5「しかしわたしたちは一時たりとも彼らに屈して従いませんでした」「わたしたち」とはパウロとバルナバのことに違いない。彼ら(パウロとバルナバ)は、全ての異邦人は回心後に割礼を受け(そしてモーセの律法に責任を持つようになる)必要があることに偽の兄弟達が反対するとわかっていた。

「～ない」は原典 P⁴⁶、^κ、B、C、D¹、G の中に見られる。6世紀の原典 D²と古代ラテン語訳の中には見られない。エペソ 5: 21 でパウロが(兄弟達と)互いに服従しあうことを強調しながらも、この場合は服従に断固反対すべきだと言っているのは、これらの偽の兄弟達が実はクリスチャンではないと信じていたからである。パウロは、自己努力によって神の前に義なる者であろうとする者は真のクリスチャンではないと信じていると主張している(ガラテヤ 1: 8 と 9 節、5: 2-12、ローマ 10: 2-5、I テサロニケ 2: 14-16 を参照)。そこで重要な質問となるのは、「人は誰に信頼を置くのか? 自分自身か、それともキリストか?」ということである。

「福音の真理をあなたがたのうちにとどませるために」 まぎれもなく、この議論は異邦人への伝道の継続という問題の基礎であった。新約聖書では真理はとても重要な語である。以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: パウロの著述物における「真理」

パウロのこの用語とその関連の語形の用い方は、忠実さを意味する旧約聖書の語 *emet* (BDB53) に由来する。聖書外典的なユダヤ教の書では虚偽の反対語としての真実の意味で用いられている。多分最も近い意味の言葉は死海文書の「感謝の歌」であろう。そこではこの語は明らかにされた教義の意味で用いられている。エッセネ派の者達は「真理の証人」となった。

パウロはイエス・キリストの福音を言い表すためにこの用語を用いている。

1. ローマ 1: 18 と 25 節、2: 8 と 20 節、3: 7、15: 8
2. I コリント 13: 6
3. II コリント 4: 2、6: 7、11: 10、13: 8
4. ガラテヤ 2: 5 と 14 節、5: 7
5. エペソ 1: 13、6: 14
6. コロサイ 1: 5 と 6 節
7. II テサロニケ 2: 10 と 12 節と 13 節
8. I テモテ 2: 4、3: 15、4: 3、6: 5
9. II テモテ 2: 15 と 18 節と 25 節、3: 7 と 8 節、4: 4
10. テトス 1: 1 と 14 節

また、パウロは自分の言いたいことを正確に言い表すためにこの用語を用いている。

1. 使徒行伝 26: 25
2. ローマ 9: 1

3. IIコリント 7: 14、12: 6
4. エペソ 4: 25
5. ピリピ 1: 18
6. I テモテ 2: 7

彼はまた、I コリント 5: 8 で自らの動機について、そしてエペソ 4: 24 と 5: 9 とピリピ 4: 8 で自らの（そして全てのクリスチャンの）生活様式について述べるためにこの用語を用いている。彼は時々この用語を人々に対して用いている。

1. 神、ローマ 3: 4(ヨハネ 3: 33 と 17: 17 を参照)
2. イエス、エペソ 4: 21(ヨハネ 14: 6 と同様)
3. 使徒的証人、テトス 1: 13
4. パウロ、IIコリント 6: 8

パウロはガラテヤ 4: 16 とエペソ 4: 15 でのみ動詞形(つまり *altheuo*)を用いており、それは福音のことを言っている。さらに研究したい場合は Colin Brown 編 *The New International Dictionary of New Testament Theology* 第3巻 784～902 ページを見よ。

2: 6

NASB	「非常に名声ある人々から」
NKJV	「何らかの地位ある人々から—彼らがどのような人々であれ」
NRSV	「公認の指導者とみなされている人々から」
TEV	「指導者らしい人々」
NJB	「公認の指導者であるこれらの人々」

この聖句は次の2つのことを言っていると考えられる:(1) 12人の使徒達の一部(2)エルサレムの教会の特定の指導者達。パウロの論点は、彼らの反対が彼の神からの召命や使命や福音には影響しないということにある。しかし、F.F. Bruce は「～らしい」が必ずしも軽蔑的な意味では用いられないことを示すために自著 *War of the Jews* の 3.453 と 4.141 と 4.159 で Josephus を引用している。

「神はわけへだてをなさいません」 この旧約聖書における裁判の比喩(申命記 10: 17、IIコリント 19: 7 を参照)は本来「顔を上げる」(レビ 19: 15、申命記 1: 17 と 16: 19、使徒行伝 10: 34 を参照)という意味であった。情実(えこひいき)あるいは被告人の特別な事情に基づいて判断する裁判官の実情をパウロは遠回しに言っているのである。神はわけへだてをなさらない(ローマ 2: 11、エペソ 6: 9、コロサイ 3: 25、I ペテロ 1: 17)。

NASB、NRSV	「わたしに重荷を負わせませんでした」
NKJV	「わたしに重荷を負わせませんでした」

TEV 「わたしに何ら新たな示唆をしませんでした」

NJB 「わたしが告げ知らせた良き知らせに何も付け加えませんでした」

ここにパウロの、彼自身と自らの福音の、エルサレムの12人の使徒あるいは母教会からの独立(「私に」は強調のために前に置かれている)を肯定する記述の中心がある。これは(エルサレムの)12人の使徒あるいは教会の指導者達の墮落ではなく、パウロの召命と啓示の霊的本質が強調されているということなのである。

2: 7「それどころか、割礼を受けていない人々に福音を告げ知らせることがわたしに任されていることを知ったのです」 1: 10 で始まる文脈でパウロは主な論点の組み立てを続けた。エルサレムの指導者達がパウロのことを見聞きしたとき、彼らは神がパウロを召され選ばれていることを認めた。「彼らの」とは9節に登場する使徒達のことである。を意味する。「わたしは任されていた」は完了受動態動詞形であり、聖霊を通した神の召しと備えによってパウロが福音のしもべとしての役割を果たし続けていることを強調している(I コリント 9: 17、I テサロニケ 2: 4、I テモテ 1: 11、テトス 1: 2 を参照)。他の段落では異邦人担当の使徒としてのパウロの召命がさらに裏付けられている(使徒行伝 9: 15、ローマ 1: 5 と 11: 13 と 15: 16、ガラテヤ 1: 16、エペソ 3: 8、I テモテ 2: 7、II テモテ 4: 17 を参照)。

「ペテロと同じように」 7節と8節で用語「ペテロ」が用いられていることはガラテヤ人への手紙ではいくぶん珍しいことである。ガラテヤ人への手紙の他の箇所ではペテロの名を引用するときには、パウロはペテロを、アラム語で「岩」を意味する「ケファ」と呼んでいる(1: 18、2: 9 と 11節と 14節を参照)。しかし、「ペテロ」という名前の登場はこの箇所が最初のもので、2つの名前は同意語である。

2: 8 1-10節の複雑な文法構造の中のもうひとつの括弧は地理あるいは少数部族について述べている(9節後半を参照)。パウロとペテロはどちらも神の与えられた使命を帯びているのだ！

2: 9「また(彼らは)わたしに与えられた恵みを認め、柱とみなされていたヤコブとケファとヨハネは仲間であることのアカシとしてわたしとバルナバに右手を差し出しました」 これらの「柱」はエルサレムのキリスト教会の3人の指導者である。この肩書はローマのクレメント(紀元95年の著作物)とイグナティウスの用いた「使徒達」に関連して用いられた。この語は黙示録 3: 12 でも肯定的に用いられている。多分この聖句はユダヤ教の指導者達がアブラハムとモーセについて言い表すために用いた語に由来するものであったようだ。パウロはここでも、自分は(エルサレムの12人の使徒あるいは母教会から)独立しているだけでなく、使徒達のうち少なくとも数名(イエスの12使徒のペテロとヨハネ)が神が彼に与えられた権威を認めて、仲間であることのアカシとして彼に右手を差し出したという主張を裏付けている。このヤコブは12人の使徒の一人のヤコブではなく、イ

エスの異父兄弟でエルサレムの教会の指導者であったヤコブである(使徒行伝15章を参照)。

聖句「柱とみなされていた」は否定的な評価ではなく、多分偽の教師達のパウロに対する非難のことを言っているのだろう。この文脈では、パウロはこれら3人の指導者を軽蔑したかったのではなく、彼とバルナバの働きを彼らが公的に認めたという事実を強調したかったのだ！

「わたしに与えられた恵み」 動詞形はアオリスト受動態分詞である。1: 15 の、「恵み」と「霊」の関係についての解説を見よ。

「ヤコブ」 以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: イエスの異父兄弟ヤコブ

- A. 彼は「神の義にかなう者ヤコブ」と呼ばれ、いつも膝まづいて祈っていたので後に「らくだの膝」とあだ名をつけられた(Eusebius の引用した Hegesippus の言葉に由来)。
- B. ヤコブは主の復活後までは信徒ではなかった(マルコ 3: 21、ヨハネ 7: 5 を参照)。イエスは復活された後に個人的に彼の前にお姿を現わされた(I コリント 15: 7 を参照)。
- C. 彼は使徒達とともに上の部屋にいた(使徒行伝 1: 14 を参照)。そして多分、五旬節で聖霊が下られたときもそこにいた。
- D. 彼は結婚していた(I コリント 9: 5 を参照)。
- E. 彼はパウロによれば柱(多分使徒のことを言っているのだろう、ガラテヤ 1: 19 を参照)とみなされていたが、12使徒の一人ではなかった(ガラテヤ 2: 9、使徒行伝 12: 17 と 15: 13 以降を参照)。
- F. Josephus は自著 *Antiquities of the Jews* の 20. 9. 1 の中で、ヤコブは紀元 62 年にサンヘドリンのサドカイ人の命令で石打ちにあつ(て殺され)たと言っている。また、他の言い伝えによれば(2世紀の作家のアレキサンドリアのクレメントや Hegesippus)ヤコブは(エルサレムの)神殿の壁に押し付けられ(て殺され)たと言われている。
- G. イエスの死後数世代にわたって、イエスの親族はエルサレムの教会の指導者に指名された。

「仲間」 以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: *Koinonia*

用語「仲間」(*koinonia*)には次のような意味がある。

- 1. ある人との親密な交際
 - a. 御子と(I ヨハネ 1: 6、I コリント 1: 9 を参照)
 - b. 聖霊と(II コリント 13: 13、ピリピ 2: 1 を参照)
 - c. 父なる神と御子と(I ヨハネ 1: 3 を参照)
 - d. 他の契約の兄弟姉妹と(I ヨハネ 1: 7、使徒 2: 42、ガラテヤ 2: 9、ピレモン 17 節を参照)

2. 物あるいはグループとの親密な交際
 - a. 福音と(ピリピ 1: 5、ピレモン 6 節を参照)
 - b. キリストの血と(I コリント 10: 16 を参照)
 - c. 暗闇とではなく(II コリント 6: 14 を参照)
 - d. 苦難と(ピリピ 3: 10 と 4: 14、 I ペテロ 4: 13 を参照)
3. 気前よく与えられる贈り物(ローマ 12: 13 と 15: 26、 II コリント 8: 4 と 9: 13、ピリピ 4: 15、ヘブル 13: 16 を参照)
4. 神と人とその兄弟姉妹との交わりを回復させる、キリストを通した神の恵みの賜物

これは、縦の関係(創造主と人)によってもたらされる横の関係(人と人)をはっきりと言いつている。それはまたクリスチャン共同体の必要と喜びを強調する。動詞の時制はこの共同体を持つという経験の始まりと継続を強調する(1: 3[2回]と 6 節と 7 節を参照)。キリスト教は共同体なのだ。

「こうしてわたしたちは異邦人に、彼ら(ヤコブたち)は割礼を受けた人々に福音を告げ知らせに行くことになりました」 この聖句は主に、人種ではなく地理について述べている。パレスティナの内には異邦人が、パレスティナの外にはユダヤ人がいた。パウロの教会の多くには両者がいた。というのは、パウロは新しい町に来るとまずシナゴークに行って説教したからである。

2: 10「ただ、彼らはわたしたちに貧しい人々のことを忘れないよう求めました」 パウロはエルサレムの貧しい人々への特別な供与物の概念をアンテオケの教会によって初めて教えられた(使徒行伝 11: 27-30 を参照)。彼はこれを発展させて異邦人の教会への伝道計画とした(使徒行伝 24 章 17 節、 I コリント 16: 1-2、 II コリント 8 章と 9 章、ローマ 15: 25- 27 を参照)。もしガラテヤ 2 章と使徒行伝 15 章が同じことを言っているなら、それは使徒行伝 15: 23-29 には述べられていない他の交わりの規定がより難しくなる理由の説明になる。従って研究者の多くは、この節に記された訪問を使徒行伝 11: 27-30 に記された訪問と同時期であるとみなしている。

NASB(改訂版)原典: 2: 11-21

¹¹ケファがアンテオケに来たとき、彼に非難すべきところがあったので、わたしは面と向かって反対しました。¹²というのは、ある人々がヤコブのところから来る前にはケファは異邦人と一緒に食事をしていましたが、来てからは割礼を受けた人々を恐れてしりごみして身を引こうとし始めたからです。¹³他のユダヤ人たちもケファの見せかけの行いに加わり、しまいにはバルナバさえもその見せかけの行いに巻き込まれてしまいました。¹⁴しかし、彼らが福音の真理から外れた歩みをしているのを見たとき、わたしは皆の前でケファに言いました「あなたはユダヤ人でありながらユダヤ人らしい生活をせず異邦人のように生活しているのに、なぜ異邦人にユダヤ人らしく生活することを強制するのですか？」¹⁵わたしたちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような

罪人ではありません。¹⁶それにもかかわらず、人は律法の行いによってではなくキリスト・イエスへの信仰によって義とされることを知って、律法の行いによってではなくキリストへの信仰によって義とされるためにキリスト・イエスを信じました。なぜなら律法の行いによつては誰も義とされることはないからです。¹⁷しかし、もしもキリストによって義とされようと努めていながら、わたしたち自身も罪人であるとわかっているなら、キリストは罪に仕える者なののでしょうか？決してそうではありません！¹⁸というのは、もしわたしが以前に自分で打ち壊したものを再び建てるなら、わたしは自分が罪人であることを証明することになるからです。¹⁹わたしは神に対して生きるために、律法を通して律法に対して死にました。²⁰わたしはキリストとともに十字架につけられています。ですから、生きているのはもはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしを愛しわたしのためにご自身をささげられた神の御子への信仰によって、今わたしは肉において生きているのです。²¹わたしは神の恵みを無にはしません。というのは、もしわたしたちが律法によって義とされるなら、キリストは亡くなる必要がなかったということになるからです。

2: 11「ケファがアンテオケに来たとき」 ペテロのアンテオケ訪問の時期は明らかではない。学者達の中にはこの訪問の時期がエルサレム会議の直後だという者もいれば以前だという者もいる。明らかにこの訪問の時期についての議論においては時系列上の順番は問題ではない。実際の問題の全てが解決され尽くしていなかったという事実注目すれば、訪問の時期は使徒行伝15章に記されたエルサレム会議の後だと言えるだろう。しかし、会議においてパウロとその福音が承認された(2: 9 と使徒行伝 15: 6-11 を参照)後にペテロがこのような行動をとったとは想像し難い。その訪問の時期が使徒行伝 11: 27-30 に記されたものと同じであると思う人々にとっては、このことは新たな議論を生む。

「わたしは面と向かって反対しました」 パウロはここでもエルサレムの使徒達からの独立と、自分と使徒達の地位の平等性を主張した。これは強烈な言葉である(エペソ 6: 13 とヤコブ 4: 7 を参照)。

NASB	「彼に非難すべきところがあったので」
NKJV	「彼に非難すべきところがあったので」
NRSV	「彼に非難すべきところがあったので」
TEV	「彼が明らかに悪かったので」
NJB	「彼が明らかに悪かったので」

この迂言的(婉曲的)過去完了受動態動詞はすでに起こったことや状態が定まったこと、あるいは外部の代行者によってなされたことについて述べている。この文法構造はペテロがこのような態度をとり続けたということの意味してはいない。使徒達のグループの指導者が誤りを犯したことに注目しなさい。信頼できる永遠のみことばを書き記すように使徒達は啓示を受けたが、このこ

とは決して、彼らが罪を犯さなかったことあるいは他の分野で愚かな選択をしなかったことを意味してはいないのだ！

2: 12「**というのは、ある人々がヤコブのところから来る前には**」「ある人々」とは多分エルサレムの教会のメンバーだろうが、彼らが公の権威をもっていたかどうかは明らかではない。明らかに彼らはヤコブのところから遣わされた使者達ではなかった。なぜならヤコブはパウロの異邦人伝道における立場を全て認めていたからである(使徒行伝 15: 13-21 を参照)。多分彼らは自分達の権限を超えて事実を調査する委員会のメンバーだったのだろう。彼らは多分、エルサレム会議の規定が遵守されているかをチェックするためにその場にいたのだろう(使徒行伝 15: 20-21 を参照)。彼らは、異邦人の信徒と同席して交わりを持っているユダヤ人信徒ペテロを、律法(つまりタルムード)を唱えるという直接的な暴力によって非難した。ペテロは早くからまさにこの問題と格闘してきていた(使徒行伝 11: 1-18 を参照)。これはイエスがこの世におられた間でさえ(決して)小さな問題ではなかった(マタイ 9: 11 と 11: 19、ルカ 19: 1-10 と 15: 2、使徒行伝 15: 28-29 を参照)。

「**彼(ケファ)は割礼を受けた人々を恐れてしりごみして身を引こうとしました**」 12 節には3つの未完時制の動詞がある。1つ目の動詞は、ペテロがいつも異邦人の信徒と一緒に食事していたことを述べている。2つ目の動詞と3つ目の動詞は、エルサレムの教会からの派遣団が到着したときにペテロが異邦人の信徒と社会的な交わりを控え始めたことを強調している。これは割礼という単純な問題以上のことではなく、むしろ信徒となったばかりの異邦人にとってのモーセの律法との一般的な関係であった。

2: 13「**他のユダヤ人たちもケファの見せかけの行いに加わり、しまいにはバルナバさえもその見せかけの行いに巻き込まれてしまいました**」 ユダヤ教徒化した者達の悪巧みの恐るべき影響力は主の最も忠実な僕にさえ及んだ。明らかにパウロはバルナバの行いに失望した。使徒行伝 15 章でバルナバは異邦人に伝道し、自由な福音を擁護した。ここでの問題は異邦人の信徒のモーセの律法の命令からの解放ではなく、むしろユダヤ人信徒のそれ(モーセの律法の命令)からの解放の実行である。モーセの律法を解釈した口述の伝統を拒否する自由がペテロとバルナバにはあったのだろうか？ 3: 19 の特別なトピック: モーセの律法についてのパウロの見解を見よ。

特別なトピック: バルナバ

I. 人物

- A. キプロス生まれ(使徒行伝 4: 36 を参照)
- B. レビ族の出身(使徒行伝 4: 36 を参照)
- C. 「**励ましの子**」とあだ名をつけられた(使徒行伝 4: 36 と 11: 23 を参照)
- D. エルサレムの教会の一員(使徒行伝 11: 22 を参照)

E. 預言者および教師としての霊的賜物があった(使徒行伝 13: 1 を参照)

F. 使徒と呼ばれた(使徒行伝 14: 14 を参照)

II. 伝道の働き

A. エルサレムで

1. 自分の財産を売って、得た金を全て、貧しい人々を助けるための活動資金として使ってもらうように使徒達に渡した(使徒行伝 4: 37 を参照)。
2. エルサレムの教会の指導者であった(使徒行伝 11:22 を参照)

B. パウロとともに

1. 彼はパウロの回心を受け入れた最初の人々の一人であった(使徒行伝 11:24 を参照)。
2. 彼はタルソスに行ってサウロを捜し出し、アンテオケで新しく開拓された教会での働きの際の助手とした(使徒行伝 11: 24-26 を参照)。
3. アンテオケの教会はバルナバとサウロをエルサレムの教会に派遣して、貧しい人々を助けるための活動に従事させた(使徒行伝 11: 29-30 を参照)。
4. バルナバとパウロは第一回伝道旅行に出かけた(使徒行伝 13: 1-3 を参照)。
5. バルナバはキプロス(彼の故郷)での伝道団の指導者であったが、まもなくパウロの指導力が認められた(使徒行伝 13: 13 を参照)。
6. 彼らは異邦人への伝道の働きについてエルサレムの教会に説明と報告を行った(使徒行伝 15 章を参照、これはエルサレム会議と呼ばれている)。
7. バルナバとパウロは、食物に関するユダヤ人の律法と、ガラテヤ 2: 11-14 に記された異邦人との交わりに同意しなかった最初の人々であった。
8. バルナバとパウロは第二回伝道旅行を計画したが、第一回伝道旅行において働きをする職務を放棄した(使徒行伝 13: 13 を参照)、バルナバのいとこヨハネ・マルコ(コロサイ 4: 10 を参照)についての議論が起こった。パウロがヨハネ・マルコを第二回伝道旅行に連れて行くことを拒否したために伝道団は分裂した(使徒行伝 15: 36-41 を参照)。こうして伝道団は2分された(つまりバルナバとヨハネ・マルコとパウロとシラス)。

III. 教会の言い伝え(Eusebius)

- A. バルナバはイエスが遣わされた70人のうちの一人であった(ルカ 10: 1-20 を参照)。
- B. 彼はクリスチャンの殉教者として自分の故郷キプロスで死んだ。
- C. Tertullian はバルナバがヘブル人への手紙を書いたと言っている。
- D. アレキサンドリアのクレメントは使徒バルナバについての聖書外典的な書を書いたと言っている。

2: 14

NASB、NKJV

「まっすぐに」

NRSV

「首尾一貫した行動をしていない」

TEV

「まっすぐな道を歩んでいない」

これは文字通り「まっすぐに歩まなかったこと」である。これには2つの比喩が含まれる。

1. 「歩んだ」は生活様式を意味する。
2. 「まっすぐに」は義の正しい道を歩むことのとえである(まっすぐさを測る棹、2: 21 の特別なトピック: 義を見よ)。

「福音の真理」 2: 5 の特別なトピック: パウロの著述物における「真理」を見よ。

「わたしは皆の前でケファに言いました」 教会の問題は通常は私的に取り扱われる必要があるが、ペテロの行動は福音の核心を突いている。この衝突(パウロとペテロの議論)はアンテオケの教会全体に影響を与え、(パウロのペテロへの発言は)教会の不一致の問題を解決するために公的かつ必然的に発言されなければならなかった(I テモテ 5: 20 を参照)。

「あなたはユダヤ人でありながら」 この第一種条件文(著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定した)からパウロとペテロの議論が始まる。ガラテヤ 2: 15-21 は多分、神学的要約であって必ずしもパウロがペテロに語った言葉自体ではない。ペテロの偽善と言動の不一致についての議論となった、公の場でのパウロとペテロの対決はパウロの(エルサレムの12人の使徒あるいは母教会からの)独立性をさらに証明するものとなった。

「ユダヤ人らしく生活する」 パウロは名詞「ユダヤ人」を不定詞(現在形能動態)に変換しており、新約聖書ではここにのみ見られる。

2: 15-21 この章の冒頭の記述(つまり「文脈の洞察 C.」)を見よ。15-21 節でパウロがより多くの聴衆に語っていることから、パウロのペテロに対する発言は 14 節で終わっているように私には思われる。問題は、パウロが語りかける対象が変わったことを示す語が文脈上に見られないことである。15-21 節の発言はガラテヤ人のクリスチャンに対するものかもしれない。もしそうなら、それらの発言は、ペテロとバルナバ(そしてその場にいた他のユダヤ人クリスチャン)の不適切な行動ではなく、ユダヤ教徒化した者達の批判に関する、福音の真理の要約的発言となる。

解釈上の問題は、「15、16、17 節の『わたしたち』とは誰のことか?」ということである。

1. パウロ、ペテロ、そして他のユダヤ人信徒達
2. パウロとガラテヤ人信徒達(信仰による義という神学的原則の一般化、16 節を参照)

2: 15「わたしたちは生まれながらのユダヤ人であって」 明らかにユダヤ人はある種の霊的強みを持っていた(ローマ 3: 1 と 2 節、9: 4 と 5 節を参照)。しかしかれらの強みは救いではなく、古い契約を通した啓示および神の民としての神との交わりに関係していた。従って、パウロの異邦人へ

の福音の中心は、神の御前におけるユダヤ人信徒と異邦人の平等性であった。

「異邦人のような罪人ではありません」明らかにパウロは、(当時)ラビ達主導のユダヤ教では一般的で、偽の教師達も多分用いていた、軽蔑的な言い方を用いていた。異邦人は旧約聖書の契約の民の住んでいた区域の外に住んでいたのが罪人であった(エペソ 2: 11-12 を参照)。

「人は律法の行いによってではなくキリスト・イエスへの信仰によって義とされること」この節では、信仰のみを通した恵みによる義認の原則は全ての人に適用されること(エペソ 2: 8-9 を参照)が3回、つまり1回目は「人」、2回目は「私達」、3回目は「誰も～ない」で始まる文に見られるように、強調されている。この3回の繰り返しは圧倒的で衝撃的である。全ての人(ユダヤ人と異邦人)にとっての信仰による義認の真理はローマ 1～8 節のパウロの決定的な発言の本質であり、ローマ 3: 21-31 に要約されている。「義認」は「義であると宣言すること」を意味する法律用語である。2 章 21 節の特別なトピックを見よ。

「義とされる」(と「義である」)は旧約聖書概念では測量器具を意味した(2: 21 の特別なトピックを見よ)。YHWH は御自身の御性質と道徳規準を言い表されるためにこの比喩を用いられた。神は霊的な測量器具でいらっしゃる(マタイ 5: 48 を参照)。新約聖書で神は私達に(1)キリストの死を通した御自身の義[Ⅱコリント 5: 21](2)人類の側の悔い改めと信仰[マルコ 1: 15、使徒行伝 3 章 16 節と 19 節と 20: 21 を参照]を下さる。

信仰を通した恵みによる義認—キリストにある私達の立場として 16 節と 17 節に示されている—は神の無条件の愛とキリストの成し遂げられた御業と聖霊への飢え渴きに全般的に基づいている。しかし、私達にとってクリスチャンらしい生活において強調されていることは全て 21 節に、私達の立場はクリスチャンらしい生活を送ることに反映されなければならないと述べられている(ローマ 8: 29、ガラテヤ 4: 19、エペソ 1: 4 と 2: 10、Ⅰヨハネ 1: 7 を参照)。パウロは良い行いが重要であることを否定してはいない。彼はただ、それ(良い行い)が(自分が)人に受け入れられるための根拠となることを否定しているのである。エペソ 2: 8-10 にはパウロの福音—良い行いに対して、人類の信仰という応答を通して与えられる神の無条件の恵み—が明確に示されている。私達の聖別を強調していると思われるガラテヤ 2: 20 でさえ、人間の長所あるいは生活様式とは全く別の、イエスに帰属する義の原則の正当性と普遍性を証明している。

パウロは、次のようなことは義認の要件ではないと強調している。

1. 「律法の行いによって」、16 節 a
2. 「律法の行いによってではなく」、16 節 b
3. 「律法の行いによっては誰も義とはされないから」、16 節 c

そこでパウロは、罪深い人類が義とされる唯一の方法を示した。

1. 「キリスト・イエスへの信仰を通して」(文中「キリスト・イエスへの信仰を通して[*dia*]」)、
16 節 a

2. 「私達はキリスト・イエスを信じています」(文中「私達が信じているキリスト・イエスにあって [eis]」[アオリスト能動態直説法])、16 節 b

3. 「キリストへの信仰によって」(文中「キリストへの信仰によって[ek]」)、16 節 c

この3回の繰り返しは明確化と強調のためだった！唯一の問題は 16 節 a の所有格「キリスト・イエスの」と 16 節 c の所有格「キリストの」をどのように理解し訳すかということである。大半の訳ではこの聖句は目的所有格「キリストへの信仰」と解釈されているが、主格所有格の可能性もあり (NET 聖書を参照)、それは父なる神の御意志に対する「キリストの忠実さ」という旧約聖書の熟語を反映している。これと同じ文法的疑問はローマ 3: 22 と 26 節、ガラテヤ 2: 20 と 3: 22、エペソ 3: 12、ピリピ 3: 8 の理解に影響を与える。パウロの意図がどのようなものであれ、両者(それら2つの疑問)は、義認は人の行動や長所や従順さの中ではなくイエス・キリストの御業と従順さの中に見出されることを示している。イエス・キリストは私達の唯一の希望なのだ！

NASB、NKJV	「わたしたちでさえキリスト・イエスを信じました」
NRSV	「そしてわたしたちはキリスト・イエスを信じるようになりました」
TEV	「わたしたちもキリスト・イエスを信じました」
NJB	「わたしたちはキリスト・イエスを信じなければなりませんでした」

ギリシャ語の用語 *pistis* (名詞)と *pisteuo* (動詞)は英語では「信頼」、「信条」、あるいは「信仰」と訳されているようだ。この用語は私達と神の関係の2つの明確な特徴を表している:(1) 私達は、御自分のなされた約束への神の忠実さとキリストの成し遂げられた御業に信頼を置いている(2) 私達は、神と人類と罪とキリストと救いについてのメッセージ(つまり御言葉)を信じる。従ってそれは福音のメッセージあるいは私達が福音の人に置く信頼について述べている。その福音とは歓迎すべき人(イエス・キリスト)と信じるべきその人についてのメッセージ、そして送るべきその人のような生活である。3: 6 の特別なトピック: 信条を見よ。

「律法」(2回登場) NASB、NKJV、NRSV、TEV、JB 訳には全て限定冠詞が2回登場する。その限定冠詞はギリシャ語の原典には見られないが、それはパウロがモーセの律法について述べるためにこの聖句を用い続けている理由と考えられている。これがパウロの主な意図であったにもかかわらず、私達が神に対する正しい立場を示すうえで基礎となると思われるあらゆる人間の努力(社会的ノルマ)がここには暗示されているようだ。

「誰も」 1: 16 の特別なトピック: 肉 (*sarx*) を見よ。

2: 17「もしも」 「もしも」は第一種条件文の冒頭にあり、著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定されている。パウロと彼の仲間達は(全ての人と同じように)罪人と仮定されている(ローマ 3 章 9-18 節と 19 節と 23 節と 11: 32、ガラテヤ 3: 22 を参照)。

「わたしたち自身も罪人であるとわかっている」この聖句は解釈が難しいことが分かっている。解釈を可能にするいくつかの理論が生まれてきている。

1. 大半の解説者はこの聖句をローマ 3: 22 と関連づけてこのように言っている「私達は異邦人と同様に、皆罪人なので神の義を必要としている」。
2. 解説者達の中にはこの聖句をローマ 6-8 章の二律相反的疑問、つまり「もし人が人間の努力とは無関係に救われるなら、なぜ神は私達の罪について私達を裁かれるのか？」と関連づける者もいる。
3. この聖句は、あらゆることで律法を一旦破ればそれを守ることによって神の前に義とされる可能性がなくなるという3章の律法についてのパウロの議論を生むきっかけとなったようだ。ユダヤ人信徒とペテロとパウロとバルナバは律法で禁じられた食べ物を口にすることで律法を破っていた。この観点は 17 節を、正当な仮定に基づいた偽の結論を否定する直前(後)の文脈と関連づけているようだ。
4. パウロは、異邦人とユダヤ人はキリストにあって一つだと言っている。もしこれが神の御意志でないなら、この一致はユダヤ人信徒とキリストを罪人の集団にしてしまうだろう。

NASB	「キリストは罪に仕える者なのでしょうか？決してそうではありません」
NKJV	「キリストは神の奴隷なのでしょうか？」
NRSV	「キリストは罪に仕える者なのでしょうか？決してそうではありません」
TEV	「これはキリストが罪に仕える者だと言う意味なのでしょうか？そうではありません」
NJB	「キリストがわたしたちを罪に誘い込んでいるとも考えられるが、そんな考えはばかげている」

パウロの議論は難解でありながらも続いた。パウロが(1)ペテロの行動(2)偽の教師達の非難あるいは教えに应答したことは明らかであるが、これに直接関連する問題は未だ明らかではない。

聖句「決してそうではありません」あるいは「神が禁じられています」のパウロの他の用法はこの段落の解釈において重要である(ガラテヤ 3: 21、ローマ 6: 2 を参照)。通常パウロが、正当な仮定に基づいた偽の結論を否定するためにこれを願望法構造として用いることは稀である。

2: 18「もしわたしが以前に自分で打ち壊したものを再び建てるなら、わたしは自分が罪人であることを証明することになるからです」これは第一種条件文の冒頭にあり、著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定されている。ここでパウロが本当に言いたかったことは学者達にはわからない。それはパウロが告げ知らせた福音かそれとも以前にユダヤ教徒であったときの生活か？これと同じあいまいさはローマ7章にも見られる。「再び建てる」と「打ち壊す」は、マタイ 16: 19 の「結ぶ」と「解く」に類似したラビの用語である。

2: 19「わたしは律法を通して律法に対して死にました」 この重みのある発言は神秘的というよりはむしろ法的である。イエスが私達の身代わりに亡くなったとき、私達は彼とともに死んだのである(2: 20、ローマ 6: 6-7、Ⅱコリント 5: 14-15 を参照)。従って、救いに関する限り、私達の律法との義務的關係は壊れた。私達は自由にキリストのもとに行くことができる。このことはローマ 6: 1 から 7: 6 のパウロの発展的な議論と同様に 20 節と 21 節に特に記されている。

「神に対して生きるために」 ここでもパウロは、キリストにある私達の立場の2つの神学的特徴とキリストのような生活を送る私達の義務とを強調している。この逆説的真理はいくつかの方法で述べられているようだ。

1. 直説法(私達の立場についての発言)と命令法(私達の立場に基づいて生きていきなさいとの命令)
2. 目的語(福音の真理)と主語(福音の中に生きること)
3. 「私達は勝っている」(私達はキリストにあって神に受け入れられた)が今「私達は走らなければならない」(私達はキリストに感謝しつつ生きなければならない)

これは福音の2つの本質である—救いは絶対的自由だが、私達の存在と持ち物の全てがあつてこそ、そのように言えるのである！自由な賜物はキリストのように生きよとの召しの前にもたらされることは繰り返し述べられなければならない。私達は神に仕えるために罪に対して死んだのだ！

2: 20「わたしはキリストとともに十字架につけられています」ギリシャ語の文では「キリストとともに」は強調のため文頭に置かれている(UBS⁴ギリシャ語原典ではそれは 19 節に見られる)。動詞(完了受動態直説法)は、過去に何かが付帯する結果を伴って起こり、外部の代行者によってそれが成し遂げられたことを意味している。それはローマ 6: 1-11 と 7: 1-6 に特に記されている。

パウロはガラテヤ 5: 24 と 6: 4 で用語「十字架につけられた」を用いているが、この用語は信徒とこの墮落した世の仕組みとの関係に関連がある。しかし、ここで強調されているのは信徒と律法との結びつきであるようだ(3: 13 を参照)。一旦キリストとともに死んだからには、私達は神に対して生きているのだということを覚えておくことは大切である(19 節とローマ 6: 10 を参照)。この概念は(1)神と同じように歩む私達の責任(Ⅰヨハネ 1: 7 を参照)および(2)私達は召されたその召しにふさわしく歩まなければならないということ(エペソ 4: 1 と 5: 2 を参照)として繰り返し強調されている。私達は自由な赦しの中でキリストを知ったので、彼のしもべとしての責任のもとに生活することが重要である(コロサイ 2: 12-14 と 20 節および 3: 1-4、Ⅱコリント 5: 14-15 を参照)。

「キリストがわたしの内に生きておられるのです」イエスはしばしば信徒の内に住まわれると言われている(マタイ 28: 20、ヨハネ 14: 23、ローマ 8: 10、コロサイ 1: 27 を参照)。これはしばしば聖霊

の働きと関連がある(ローマ 8: 9 と 11 節、I コリント 3: 16 と 6: 19、II テモテ 1: 14 を参照)。聖霊の働きは信徒の内に御子を拡大し再生することである(ヨハネ 16: 7-15、ローマ 8: 28-29、ガラテヤ 4: 19 を参照)。

「今わたしは肉において生きているのです」 1: 16 の特別なトピック: 肉(*sarx*)を見よ。

「わたしは信仰によって生きています」ギリシヤ語の用語 *pistis* (名詞)と *pisteuo* (動詞)は英語では「信頼」、「信条」、あるいは「信仰」と訳されているようであり、主に私達が神の信頼性に置く信頼と神の忠実さへの信仰を強調している。3: 6 の特別なトピックを見よ。この信仰は私達が神の約束に対して初めてする応答であり、その後の応答はその約束の中を歩み続けることである。

「信仰」は新約聖書の中で3つの意味で用いられている。

1. 個人的信頼
2. 忠実な生活
3. 使徒行伝 6: 7 と 13: 8 と 14: 22、ガラテヤ 1: 23、ユダ 3 節と 20 節に見られるような、クリスチャンの教義の本質を言い表した言葉

このことはハバクク 2: 4 を暗示しているようだ(ローマ 1: 17、ガラテヤ 3: 11、ハバクク 10: 38 を参照)。

「神の御子」太古の MSS(つまり P⁴⁶、B、D、F、G)には「神とキリスト」と記されているものもあるが、パウロはこの聖句を用いておらず、また神への信仰が救いをもたらすとも主張していない。聖句「神の御子」は⁸、A、C、D²、そして初期教会の教父達の著作物の中に見られる。UBS⁴はその聖句を階級 A(確定)としている。

「神の御子への信仰」は文字通り「神の御子の信仰」であることも覚えておきなさい。16 節の文法に関する議論を見よ。

「わたしを愛しわたしのためにご自身をささげられた方」これは身代り的な罪の贖いの本質である(ガラテヤ 1: 4、マルコ 10: 45、ローマ 5: 6 と 8 節と 10 節、創世記 3: 15、イザヤ 53: 4-6 を参照)。

「もし」これも第一種条件文の冒頭にあり、著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定されている。第二種条件文を予想する人もいるだろう。これは誤った主張を強調する第一種条件文の良い例である。神に至る唯一の道がある—律法ではなく、キリストの成し遂げられた御業への信仰を通した道である(3: 21 を参照)。もし律法が救いをもたらすことができたら、キリストは死ぬ必要がなかったのだ!

「義」

特別なトピック： 義

「義」は非常に重要なトピックであるので、聖書研究者はこの概念について個人的に深く研究しなければならない。

旧約聖書では神の御性質は「公平な」つまり「義である」(BDB841)と表現されている。メソポタミアの言語での用語はそれ自体が、壁や塀の水平度を測る建築用具として用いられた、川岸に生える葦に由来する。神は御自身の御性質の比喩的な表現に用いられるためにこの用語を選ばれた。神は万物を評価するためのものさし(定規)でいらっしやる。この概念は神の義とともに裁きにおける神の権限をも言い表している。

人は神のお姿に似せて創造された(創世記 1: 26-27、5: 1 と 3 節、9: 6 を参照)。人類は神との交わりのために創造された。全ての被造物は神と人類の交わりの舞台あるいは背景である。神は御自分の最高の被造物である人類に、御自分を知り、愛し、御自分に仕え、御自分のようになってほしいと願っておられるのだ！人類の忠誠心は試され(創世記3章を参照)、そして最初の夫婦はその試練に失敗した。このことは神と人類の関係の破綻につながった(創世記3章とローマ 5 章 12~21 節を参照)。

神はその(御自分と人類の)交わりを修復かつ回復すると約束された(創世記 3: 15 を参照)。神はこのことを御自分の御意志と御自分の御子を通してされる。人類は神との不和を解消することができなかった(ローマ 1: 18~3: 20 を参照)。

(人類の)墮落後、(関係の)回復への神の第一の段階は、御自分の招きと、人類の悔い改めによる忠実で従順な応答に基づく契約の概念であった。墮落のために人類は適切な行動がとれなくなった(ローマ 3: 21-31 とガラテヤ3章を参照)。神御自身は、契約を破った人類との関係回復において主導権をとられなければならなかった。神は以下に示すことによってこのことをされた。

1. キリストの御業を通して人類を義とすると宣言する(つまり法廷の義)
2. キリストの御業を通した義を人類に自由に与える(つまり帰属される義)
3. 義(つまりキリストのようであること、神のお姿の回復)を生む霊を人類の内に住まわせるように備える

しかし神は契約的な応答を要求された。神は宣言され(つまり自由に与えられ)備えられたが、人類は以下に示すことによって応答しまた応答し続けなければならなかった。

1. 悔い改め
2. 信仰
3. 生活様式における従順
4. 忍耐

従って、義は神と御自分の最高の被造物との契約的で相互的な行為である。神の御性質とキリストの御業と聖霊のお持ちの能力に基づいて、各人は個人的かつ継続的に適切な応答をしなければならない。その概念は「信仰による義認」と呼ばれている。その概念は、これらの用語の中ではなく福音の中に現われている。それは、ギリシャ語の用語「義」を様々な形で 100 回以上も用

いたパウロによって最初に定義された。

訓練された教師であるパウロは、用語 *dikaiosune* を、ギリシャ語の文献由来の用語ではなくセプトゥアギンタの中で用いられた用語 *SDQ* のヘブル語的意味で用いている。ギリシャ語の文献ではこの用語は神と社会の期待にかなった者と関係がある。ヘブル語的意味ではそれは常に契約用語を構成する。YHWH は公正で、倫理的で、道徳的な神である。神はご自分の人々にご自分の性質を反映してほしいと思っておられる。救われた人類は新しく生まれたものとなる。この新しさによって、神に従う新しい生活に入る(ローマカトリック教会の義認の中心)。イスラエルは神政国家なので、俗(社会の規範)と聖(神の御意志)の間に明確な境界線はない。この違いは、英語で「正義」(社会に關係)と「義」(宗教に關係)と訳されているヘブル語とギリシャ語の用語で表現されている。

イエスの福音(良い知らせ)は、墮落した人類と神との交わりが回復されるということである。これは父なる神の愛と慈みと恵み、御子のご生涯と死と復活、聖霊の福音へのご説得とお導きによって達成されてきた。義認は神の自由なご行為であるが、それは神への忠実さにつながるものでなければならない(福音の自由性を強調する宗教改革運動家達の見解と、愛と神への忠実さに基づく生活への変化を強調するローマカトリック教会の見解の両方を反映するアウグスティヌスの見解)。宗教改革運動家達にとって、用語「神の義」は目的所有格(つまり、罪深い人類が神に受け入れられるようにする行為[立場上の聖別])であり、一方ローマカトリック教会にとってそれは主格所有格、つまりより神に似たものとなる過程(経験的かつ進歩的聖別)である。現実にはそれは確かにそれら両方だ！！

私の見解では、聖書全般、特に創世記4章から黙示録 20 章までは神による、エデンの園でかつて行なわれていたご自分と人類との交わりの回復の記録である。聖書は地上という設定での神と人類との交わりについて書き始められ、同じ設定で書き終わられている(黙示録 21-22 章を参照)。神のお姿とご目的は回復されることになっているのだ！

上述の議論を立証するために、ギリシャ語の語群で描写された、特に選んだ下記の新約聖書の聖句に注目しなさい。

- A. 神は義なるお方である(しばしば、裁く方としての神に關係する)
 - 1. ローマ 3: 26
 - 2. IIテサロニケ 1: 5-6
 - 3. IIテモテ 4: 8
 - 4. 黙示録 16: 5
- B. イエスは義なるお方である
 - 1. 使徒行伝 3: 14、7: 52、22: 14(メシアの肩書)
 - 2. マタイ 27: 19
 - 3. Iヨハネ 2: 1 と 29 節、3: 7
- C. 神の被造物に対するご意志は正しい

1. レビ記 19: 2
 2. マタイ 5: 48(5: 17-20 を参照)
- D. 神が義を与えられ造られる目的
1. ローマ 3: 21-31
 2. ローマ4章
 3. ローマ 5: 6-11
 4. ガラテヤ 3: 6-14
 5. 神により与えられる
 - a. ローマ 3: 24、6: 23
 - b. I コリント 1: 30
 - c. エペソ 2: 8-9
 6. 信仰により受ける
 - a. ローマ 1: 17、3: 22 と 24 節、4: 3 と 5 節と 13 節、9: 30、10: 4 と 6 節と 10 節
 - b. I コリント 5: 21
 7. 御子の御業を通して
 - a. ローマ 5: 21-31
 - b. II コリント 5: 21
 - c. ピリピ 2: 6-11
- E. 神のご意志は、ご自分に従う者達が義となることである。
1. マタイ 5: 3-48、7: 24-27
 2. ローマ 2: 13、5: 1-5、6: 1-23
 3. II コリント 6: 14
 4. I テモテ 6: 11
 5. II テモテ 2: 22、3: 16
 6. I ヨハネ 3: 7
 7. I ペテロ 2:24
- F. 神は義によって世界を裁くおつもりである
1. 使徒行伝 17: 31
 2. II テモテ 4: 8

義は神のご性質であり、キリストを通して罪深い人類に自由に与えられる。それは

- A. 神の布告
- B. 神の賜物
- C. キリストの御業

である。しかしそれはまた、精力的かつ断固として追い求められなければならない義なる状態になる過程でもある。それはいつの日かキリストの再来されるときに完成する予定である。神との交わ

りは救いのときに回復されるが、生涯を通じて深まり、そして死つまりキリストの再臨のときに顔と顔を見合わせた出会いとなるのだ！

ここに IVP の *Dictionary of Paul and His Letters* からのよい引用を示す。

「カルヴァンはルターよりもはっきりと神の義の关系的側面を強調している。神の義についてのルターの見解は無罪評決という一面を含むようだ。カルヴァンは、神の義を私達に伝え知らせることの素晴らしい本質を強調している」(834 ページ)。

私の見解では信者と神の関係には3つの局面がある：

- A. 福音は一人の人物である(東方教会とカルヴァンが強調)
- B. 福音は真理である(アウグスティヌスとルターが強調)
- C. 福音は変化した生活である(カトリックが強調)

それらは全て正しく、健康的で健全な聖書的キリスト教の中になければならないことである。もしどれかひとつが強調あるいは軽視されれば問題が起こる。

私達はイエスを歓迎しなければならない！

私達は福音を信じなければならない！

私達はキリストのようになることを追い求めなければならない！

「キリストは亡くなる必要がなかった」これは、ユダヤ教徒化した者達が人の行いに置く強調のパウロによる拒絶の神学的最高潮である。もし人の行いが神との正しい関係をもたらすことができたら、キリストは死ぬ必要がなかったのだ！しかし(1)旧約聖書、特に士師記とイスラエルの歴史[ネヘミヤ9章を参照]と(2)パウロのような熱心な宗教家達が今経験していることは、人間が神の契約に従い順応していくことができないことを示している。古い契約はいのちのかわりに死と非難をもたらす(ガラテヤ3章を参照)。新しい契約(エレミヤ 31: 31-34、エゼキエル 36: 22-38 を参照)は墮落した人類に、愛する神からの恵みの賜物、つまり新しい心と新しい精神と新しい霊、を信仰によってもたらすのだ！この賜物はキリストのいけにえの御業を通してのみ(受け取るのが)可能になる。キリストは律法を成就されたのだ！キリストは失なわれた交わりを回復されたのだ(つまりガラテヤ3章以来人の内で損なわれていた[壊れていた]神のイメージが修復され回復されてきているのだ！)。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. この章はなぜ解釈がとても難しいのか？
2. パウロは 2、6、9 節でエルサレムの使徒たちを軽蔑することを言ったか？
3. テトスに関する状況がエルサレム会議との関連上なぜ非常に重要な問題なのか？
4. 偽りの教師達とは誰か？彼らはどのように潜入したのか？彼らの目的は何か？
5. ペテロが異邦人と一緒に食事をするを拒否したことが、パウロの福音の理解の観点からなぜそれほどに非難されるのか？
6. 用語「義認」を定義しなさい。
7. 用語「信仰」を定義しなさい。
8. 19 節と 20 節は文脈とどのように関連しているか？

ガラテヤ人への手紙3章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
律法か信仰か	信仰による義認	経験の要求	律法か信仰か	クリスチャンの経験
3: 1~6	3: 1~9	3: 1~5	3: 1~5	3: 1~5
		御言葉中のアブラハムの経験の要求	3: 2~3	御言葉の証人 信仰と律法
		3: 6~9	3: 6~9	3: 6~9
3: 7~14				
	律法は呪いをもたらず			律法によりもたらされる呪い
	3: 10~14	3: 10~14	3: 10~12	3: 10~14
			3: 13~14	
律法と約束	不変の約束	アブラハムの契約からの一例	律法と約束	律法は約束を無効にしなかった
3: 15~20	3: 15~18	3: 15~18	3: 15~18	3: 15~18
	息子達と相続人達	モーセの律法の真の目的		律法の目的
		3: 19~20	3: 19~20	3: 19~22
奴隷達と息子達			律法の目的	
(3: 21~4: 7)			(3: 21~4: 7)	
3: 21~22		3: 21~22	3: 21~22	信仰の到来
3: 23~25		3: 23~26	3: 23~25	3: 23~29
		洗礼の平等性の要求		
3: 26~4: 7	3: 26~4: 7		3: 26~29	
		3: 27~29		

第三読書サイクル(viiページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

文脈の洞察

- A. 3章は2: 15-21に始まった文章単位を続けている。3、4章でパウロは自分の(告知らせている)福音の神学的特徴についてさらに述べている(これら[特徴]はローマ人への手紙でさらに述べられることになる)。明らかにユダヤ教徒化した者達はパウロの宣教活動を非難することによって個人的にパウロを攻撃した。
- B. 3章の構造は容易に判別できる。
1. 1-5 節でパウロはガラテヤ人に個人的な救いの経験を求めている。彼は 1: 10-2: 21 で自身の個人的告白を福音の真理の証拠として用いたが、ここではガラテヤ人の個人的な経験を用いている。彼は4つあるいは5つの修辞学的質問によってこれを行った。
 2. 6-18 節でパウロは、救いという領域における全ての人の経験の例として旧約聖書のアブラハムの経験を取り上げて詳細に述べている。彼は特に、アブラハムがモーセの律法を通してではなく信仰を通して恵みにより義とされたことに注目した。
- C. パウロは 6-18 節で旧約聖書の御言葉を7回引用している。
1. 6 節—創世記 15: 6
 2. 8 節—創世記 12: 3
 3. 10 節—申命記 27: 26(多分 28: 58 も)
 4. 11 節—ハバクク 2: 4
 5. 12 節—レビ記 18: 5
 6. 13 節—申命記 21: 23
 7. 16 節—創世記 13: 15(多分 22: 18 も)
- 旧約聖書を拡張的に用いた理由として考えられるのは次のようなことである。
1. パウロは自分の(告知らせている)福音が旧約聖書にも基づいていることをユダヤ教徒

化した者達とガラテヤ人に理解してほしかった。

2. ユダヤ教徒化した者達が自分達の議論に旧約聖書を用いていたので、パウロもそのようにした。

パウロの議論が(1)現代のユダヤ教神学(2)ユダヤ教徒化した者達の強調したことによって構成されていることを私達は覚えておくべきである。パウロの議論は私達にとってあいまいである。なぜなら私達はユダヤ教徒化した者達の神学および彼らがどのように(原典、解説、比喩)それを表現したかを知らないからである。私達は(パウロとユダヤ教徒化した者達およびガラテヤ人の)対話の半分だけを読んでいるにすぎない。旧約聖書の人々が神の律法を賜物や祝福とみなしていたのにユダヤ教の律法主義がその考えを歪めていたのは明らかである！

- D. パウロはユダヤ教徒化した者達から律法の誤解と適用について猛烈に攻撃されていたので、モーセが法を定めた目的について述べている(19-29 節)。彼は2つの質問でこれを達成した(19 節と 21 節)。ここでパウロが用語「律法」を特別な意味で用いていたことは主張されるべきである。パウロは偽の教師達の神学(つまり律法は救いの手段であるという理論、ローマ 4: 14 を参照)に反論していた。人は律法に関するこの観点とマタイ 5:17-21 でのイエスのこの用語の御使用の様子との釣り合いをとらなければならない。律法は良い—律法は神からいただくものだ！律法は永遠である(ローマ 7: 7 と 12-14 節を参照)。3: 19 の特別なトピックを見よ。
- E. モーセの律法は、ギリシャローマ世界で知られていた2つの意味で擬人化された(3: 23-25 と 4: 2 を参照)。
1. 23 節、「わたしたちは律法の下に囚われています」—囚人としての律法
 2. 24 節、「律法はわたしたちのお供です」—子供の保護者としての律法
 - a. 4: 2「保護者」—生まれてから 14 歳になるまでの子供の保護者
 - b. 4: 2「後見人」—14 歳から 25 歳までの子供の保護者

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 3: 1-5

¹ああ、物分かりの悪いガラテヤの人たち、誰があなたがたを惑わしたのですか。目の前に、イエス・キリストが十字架につけられたお姿ではっきりと示されたではありませんか。²あなたがたに一つだけ確かめておきたいことがあります。あなたがたが霊を受けたのは律法の行いによってですか、それとも福音を聞いて信じたからですか。³あなたがたはそれほどに物分かりが悪いのですか。霊によって始めたのに、今や肉によって完成させようとしているのですか。⁴あれほど多くのことで苦しんだのは無駄だったのですか—無駄だったはずがないのに。⁵あなたがたに霊を下さり、またあなたがたの間で奇跡を行なわれる方は、(あなたがたが)律法を行ったからそうされるのでしょうか、それとも(あなたがたが)福音を聞いて信じたからそうされるのでしょうか。

3: 1 と 3 節

NASB、NKJV、NRSV、TEV 「ああ、物分かりの悪いガラテヤの人たち」

NJB 「ああ、愚かなガラテヤの人たち」

これは ALPHA PRIVATIVE を伴う用語「精神」[*nous*]であり、「物分かりの悪い(愚かな)」(ルカ 24: 25 を参照)と訳されている。パウロは、ユダヤ教徒化した者達の誤った教え(1: 6 を参照)の意味について彼らは明確な考えを持っていなかったことを強制的に主張している。いつものことながら、これら偽の教師達は強引で有能で論理的な性格の持ち主であったに違いない！

「誰があなたがたを惑わしたのですか」単数形代名詞「誰」を使うことは、パウロが挙げようとしていた偽の教師達のうちの主な者達の一人を指し示す手段であったようだ(5: 7 と 10 節を参照)。しかしこれはこの文脈を深読みし過ぎているかもしれない。というのは、複数形代名詞が 5: 12 で用いられているからである。

「惑わした」は、この文脈の中では旧約聖書でいう「悪の目」(申命記 15: 9 と 28: 54、箴言 23: 6 と 28: 22、マタイ 20: 15、マルコ 7: 22 を参照)を暗示させると学者達の中に言う者がいるにもかかわらず、精神の混乱の比喩であるようだ。

「目の前に、イエス・キリストがはっきりと示されたではありませんか」エジプトで発見されたコイネギリシャ語のパピルス(Moulton と Milligan 共著 *The Vocabulary of the Greek Testament* を参照)は、「はっきりと示す」とは(1)「生き生きと描写する」、あるいは(2)公に掲示された法的公示物を意味することを示している。この比喩は、イエス・キリストの御人格と御業についてのパウロの明確な教えと説教を言い表すために用いられた。明らかに、ガラテヤの教会はパウロの教えからユダヤ教の律法主義へと転換しようとしていた。

「十字架につけられたお姿で」「十字架につけられた」は完了形受動態分詞であり、今でもイエスが十字架につけられた方でいらっしゃることを意味している。これは「十字架につけられた方」という肩書と言えるかもしれない(マタイ 28: 5、マルコ 16: 6、I コリント 1: 23 と 2: 2 を参照)。私達がイエスを見ると、イエスは十字架につけられたことのしるしを今でもお持ちである。そのしるしは今ではイエスの勝利の象徴なのだ！

受動態は、御子をいけにえとされたまさにそのお方でいらっしゃる、父なる神について述べているようだ(イザヤ 53: 10、ヨハネ 3: 16、II コリント 5: 21 を参照)。

3: 2「あなたがたが霊を受けたのは」霊を受けることは恵みの2番目の業(つまり使徒行伝4章)ではない。それは人がクリスチャンになるときに起こる(ローマ 3: 14 と 8: 9 を参照)。人が霊を持っているなら、その人はクリスチャンではない。霊はここでは、エレミヤ 31: 31-34 で語られた、新しい時代のしるしとみなされている。この点についてパウロはガラテヤ人への手紙で聖霊について 16

回も述べている。パウロとヨハネは霊の神学について他の新約聖書の著者達よりも詳細に論じている。

- NASB 「律法の行いによってですか、それとも福音を聞いて信じたからですか」
NKJV 「律法の行いによってですか、それとも福音を聞いて信じたからですか」
NRSV 「律法を行ったからですか、それとも福音を聞いて信じたからですか」
TEV 「律法の命じることを行ったからですか、それとも福音を聞いて信じたからですか」
NJB 「あなたがたが霊を受けたのは律法を行ったからですか、それともあなたがたに告げ知らされたこと(福音)を信じたからですか」

「信仰」(*pistis*)はこの章の中で繰り返し用いられ、英語では「信仰」、「信頼」、あるいは「信条」と解釈されまた訳されているようである。用語「信仰」の旧・新約聖書における使用に関する3:6の特別なトピックを見よ。信じることと信頼することの英語における概念はとてもよく似ている(2章26節、3:2と6節と7節と8節と9節と11節と12節と14節と22節と26節を参照)。

3:3「あなたがたはそれほどに物分かりが悪いのですか」これは1節にあるのと同じ用語である。

- NASB 「霊によって始めたのに、今や肉によって完成させようとしているのですか」
NKJV 「霊によって始めたのに、今や肉によって完成させようとしているのですか」
NRSV 「霊によって始めたのに、今や肉によって終わらせようとしているのですか」
TEV 「神の霊によって始めたのに、今や自分自身の力で終わらせたいのですか」
NJB 「霊によって始めたことを肉によって終わらせるほどにあなたがたは物分かりが悪いのですか」

この2番目の節の文法構造は(1)中間態(NRSV、TEV、JB)あるいは(2)受動態(NASB、NKJV)と理解されうる。中間態はガラテヤ人の行動を、また受動態はガラテヤ人以外の人々の行動を強調している。中間態は文脈に最も良く合う。ガラテヤ人は自分自身の努力でモーセの律法を成し遂げることによって自らの救いを完成させようとしていた。私達の救いと成熟は信仰を通した恵みによって実現するのだ！この聖句の中の2つの重要な用語はどちらもピリピ1:6でも用いられている。これ以降のパウロの議論では、信徒はイエス・キリストにあって、そして唯一キリストにあって完全でありまた成熟しているという事実が注目されることになる。

3節でのパウロの発言は、信徒は自らの生き方について選択の余地がないという意味ではない。救いは神の無条件の恵みへの応答であり、またクリスチャンの生活は、悔い改めと信仰とキリストのようであり続けること(5:1-6:10を参照)による、聖霊のお導きへの絶え間ない応答だ！

肉については1:16の特別なトピックを見よ。

3: 4

NASB	「あれほど多くのことで苦しんだのは無駄だったのですか」
NKJV	「あれほど多くのことで苦しんだのは無駄だったのですか」
NRSV	「あれほど多くのことを経験したのは無駄だったのですか」
TEV	「あなたがたが経験したことは全て無意味だったのですか」
NJB	「あなたがたが味わった苦しみは全て無駄だったのですか」

「苦しみ」とは以下に示すようなことであろう。

1. 肉体の苦しみ(使徒行伝 14: 2 と 5 節と 19 節と 22 節に小アジア南部の教会のユダヤ人による迫害の経験の記録がある)
2. 回心によるガラテヤ人感情の激変
3. ギリシャ語の文献ではこの用語は「恩恵」を言い表しているようである(Magill 著 *NT Transline* 685 ページを参照)。

「無駄だったはずがないのに」これは第三種条件文である。この聖句については2つの理論がある:(1)1: 16 に関連する(2)人がモーセの律法を行うことに依り頼んでいることの霊的無意味さについてのパウロの継続的議論に関連する。もし彼ら(ガラテヤ人)が人間的な努力に戻ってしまうなら、キリストの恵みは彼らにとって無意味になる(4: 11、5: 2-4、I コリント 15: 2 を参照)。

特別なトピック: 忍耐の必要

クリスチャンの生活に関連する聖書的原則は説明が難しい。というのは、それが典型的な東洋の弁証法的ペア(会話上の2人組)の中に表現されているからである。このペアは互いに正反対の考えを持っているようだが、しかしどちらも聖書的である。西洋のクリスチャンは一つの真理を選び取ってそれと正反対の真理を無視あるいは軽視する傾向がある。説明しよう。

- A. 救いはキリストを信頼するという最初の決心か、それとも一生涯キリストの弟子であり続けるという約束か?
- B. 救いは主なる神からの恵みによる選びか、それとも神の恵みに対する人類の信仰と悔い改めによる応答か?
- C. 救いは一度受け取れば失うことのできないものなのか、それとも(失なわないために)継続的努力を必要とするものなのか?

忍耐の問題は教会の歴史全般にわたって議論を呼んでいる。問題は新約聖書の中の明らかに相反する段落群に始まる。

A. 確信についての聖句

1. イエスのお言葉(ヨハネ 6: 37 と 10: 28-29)
2. パウロの発言(ローマ 8: 35-39、エペソ 1: 13 および 2: 5 と 8-9 節、ピリピ 1: 6 と 2: 13、II テサロニケ 3: 3、II テモテ 1: 12 と 4: 18)

3. ペテロの発言(I ペテロ 1: 4-5)

B. 忍耐の必要についての聖句

1. イエスのお言葉(マタイ 10: 22 および 13: 1-9 と 24-30 節ならびに 24: 13、マルコ 13: 13、ヨハネ 8: 31 と 15: 4-10、黙示録 2: 7 と 17 節と 26 節および 3: 5 と 12 節ならびに 21: 7)
2. パウロの発言(ローマ 11: 22、I コリント 15: 2、II コリント 13: 5、ガラテヤ 1: 6 と 3: 4 と 5: 4 と 6: 9、ピリピ 2: 12 と 3: 18-20、コロサイ 1: 23)
3. ヘブル人への手紙の著者の発言(2: 1、3: 6 と 14 節、4: 14、6: 11)
4. ヨハネの発言(I ヨハネ 2: 6、II ヨハネ 9 章)
5. 父なる神のお言葉(黙示録 21: 7)

聖書的な救いは主なる三位一体の神の愛と慈みと恵みからもたらされる。霊を受けなければ誰も救われることはできない(ヨハネ 6: 44 と 45 節を参照)。まず神が来られて救いの御業を始められるが、人類には信仰と悔い改めによる応答が求められる。神は契約の関係のもとに人類とともに働かれる。それには特権と責任があるのだ！

救いは全ての人に与えられる。イエスの死は墮落した被造物の罪の問題を取り扱っている。神は一つの道を備えられ、御自身のお姿に造られた全ての人に、御自身の愛とイエスを与えられたことに対して応答してほしいと思っておられる。

もしあなたが非カルヴァン主義的観点からこの主題についてさらに書籍を読みたいと思うなら、次に挙げる書を読むことを勧める。

1. Dale Moody 著 *The Word of Truth*, Eerdmans 社刊、1981 年(348~365 ページ)
2. Howard Marshall 著 *Kept by the Power of God*, Bethany Fellowship 編、1969 年
3. Robert Shank 著 *Life in the Son*, Westcott 社刊、1961 年

この分野において聖書は2つの異なる問題を挙げている:(1)無益で自己中心的な生活を送る自由を確信すること(2)伝道活動と個人的な罪(の問題)と格闘している人々を助長すること。問題は偽の(伝道)グループが偽のメッセージを受け取って、聖書中の限られた御言葉に基づく神学体系を組み立てていることなのである。確信あるメッセージを渴望しているクリスチャンもいれば、重要な警告を必要とするクリスチャンもいるのだ！あなたはどちらのグループに属するのか？

3: 5「あなたがたに霊を下さる方」 神が霊を下さることは救いの始めである(3: 14、ローマ 8: 9 を参照)。この分詞は現在形能動態で、II コリント 9: 10 にある神の備えを言い表すのに用いられている。それ以前の箇所 で用いられている場合はこの語は「惜しみなく与える」あるいは「自由に与える」という意味を持つ。

「また、あなたがたの間で奇跡を行なわれる」 これも、次のような継続的な効果を示す現在形能動態分詞である。

1. 彼ら(ガラテヤ人)の救いの奇跡

2. 福音を確信させるために福音に伴って現われるしるしと奇跡
3. ガラテヤの人々の間に表れていた霊的賜物(I コリント12章を参照)

翻訳者達の中では、この聖句を個人に対する呼びかけとして「あなたがたのうちに」と読み取るべきなのか、それとも教会に対する呼びかけとして「あなたがたの間で」あるいは「あなたがたのただ中に」と読み取るべきなのかについて意見が分かれている。

神は彼ら(ガラテヤの人々)がモーセの律法を行っているのを喜んで祝福をお与えになるのだろうか？ そうではない！ これらの奇跡は、彼ら(ガラテヤの人々)が信仰を通した恵みにより受けた真の福音の神による確証である。

NASB(改訂版)原典: 3: 6-9

⁶それで、アブラハムは神を信じ、彼は義とみなされたのです。⁷ですから、信仰によって生きる人々はアブラハムの子であるということ覚えておきなさい。⁸聖書は、神が異邦人を信仰によって義とされることを予見して、「全ての国々はあなたによって祝福されるであろう」という福音をアブラハムに告げ知らせました。⁹そのようなわけで、信仰によって生きる人々は、信仰の人アブラハムとともに祝福されています。

3: 6「それで、アブラハムは」 6~9 節は、ユダヤ人国家の霊的・人種的父であるアブラハムの例をさらに詳しく述べている。偽の教師達は、神を信じて後に割礼を受けた人の例としてアブラハムを挙げたのかもしれない。このことは、ローマ4章のパウロの議論がここでは展開されていないことの理由の説明となる。アブラハムは、どうすれば全ての人々が神のもとに来るかということの模範を示している(創世記 15: 6 の LXX を参照)。救いと、神との正しい関係を保つことは常に信仰を通した恵みにより実現している。これは新しいメッセージではなかった！

「それで」について、Curtis Vaughan は自著 *Study Guide Commentary* の 61 ページの中で、この聖句は、アブラハムが信仰を通した恵みによって神に義とされたのでガラテヤ人も神にそうしていただけなのだということを意味しているのだと言っている。信仰の原理は 7 節と 9 節で信仰を持つ全ての人に、そして 8 節でガラテヤ人に拡張されるのだ！

人とアブラハムとの関係は(1)肉体的つながり[イスラエル]あるいは(2)肉体的しるし[割礼、ローマ 2: 28-29 を参照]ではなく信仰(エペソ 2: 8-9 を参照)を通した恵み(18 節を参照)によって決められたのだ！

「信じた」 これは創世記 15: 6 の LXX からの引用である。

特別なトピック: 旧約聖書における信条と信頼と信仰と忠実さ(κρητι)

I. 緒言

新約聖書にとって大変重要な、この神学的概念は旧約聖書の中においてほどには明確に定義

されていないことは言うておく必要がある。それは確かに存在するが、選ばれた重要な段落と人物の中において(のみ)表わされている。

旧約聖書は以下に示すことを融合している。

1. 個人と社会
2. 個人的出会いと契約への従順

信仰は個人的出会いと日常の生活様式である！それは辞書形(つまり語彙の研究)より人で表現したほうがより簡単である。この個人的特徴は以下に示すことに最もよく表現されている。

1. アブラハムとその子孫
2. ダビデとイスラエル

これらの人々は神に出会い、そして彼らの人生は恒久的に変えられた(完璧な人生ではなく継続的な信仰)。神との出会いの後、試練は彼らの信仰の弱さと強さを明らかにしたが、神との親密な信頼関係はずっと続いたのだ！それは試され製錬されたが、彼らの忠実さと生活様式によって証明されて続いた。

II. 用いられている主な語幹

A. אָנַח (BDB52)

1. 動詞

- a. *Qal* 語幹—支える、養う(Ⅱ列王記 10: 1 と 5 節、エステル 2: 7、非神学的用法)
 - b. *Niphal* 語幹—確定する、確立する、確認する、忠実である、信頼できる
 - (1) 人々の、イザヤ 8: 2 と 53 節、エレミヤ 40: 14
 - (2) 物事の、イザヤ 22: 23
 - (3) 神の、申命記 7: 9 と 12、イザヤ 49: 7、エレミヤ 42: 5
 - c. *Hiphil* 語幹—堅く立つ、信じる、信頼する
 - (1) アブラハムは神を信じた、創世記 15: 6
 - (2) エジプトにいたイスラエルの人々は信じた、出エジプト 4: 31 と 14: 31(申命記 1: 32 で否定された)
 - (3) イスラエルの人々は、モーセを通して語られた YHWH を信じた、出エジプト 19: 9、詩篇 106: 12 と 24 節
 - (4) アハズは神を信頼しなかった、イザヤ 7: 9
 - (5) それ(彼)を信じる人は誰でも、イザヤ 28: 16
 - (6) 神についての真理を信じる、イザヤ 43: 10-12
2. 名詞(男性形)—忠実さ(つまり申命記 32: 20、イザヤ 25: 1 と 26: 2)
 3. 副詞—真に、本当に、確かに、そのように(申命記 27: 15-26、Ⅰ列王記 1: 36、Ⅰ歴代誌 16: 36、イザヤ 65: 16、エレミヤ 11: 5 と 28: 6 を参照)。これは旧・新約聖書中で「アメン」の礼拝において用いられたものである。

B. נָחַם (BDB54) 女性名詞、堅さ、忠実さ、真理

1. 人々の、イザヤ 10: 20、42: 3、48: 1
2. 神の、出エジプト 34: 6、詩篇 117: 2、イザヤ 38: 18 と 19 節および 61: 8
3. 真理の、申命記 32: 4、I 列王記 22: 16、詩篇 33: 4 と 98: 3 と 100: 5 と 119: 30、エレミヤ 9: 4 とゼカリヤ 8: 16

C. נָחַם (BDB53) 堅さ、忠実さ、忠誠

1. 手の、出エジプト 17: 12
2. 時間の、イザヤ 33: 6
3. 人々の、エレミヤ 5: 3、7: 28、9: 2
4. 神の、詩篇 40: 11、88: 12、89: 2 と 3 節と 6 節と 9 節、119: 138

III. この旧約聖書の概念のパウロの使い方

A. パウロは、ダマスコへの途上でイエスと個人的に出会ったときに YHWH と旧約聖書について新たに理解したことを基本にしている(使徒行伝 9: 22 と 26 節を参照)。

B. 彼は、語幹 נָחַם を用いている2つの重要な旧約聖書の御言葉について新たに理解したことを裏付ける旧約聖書の他の御言葉を発見した。

1. 創世記 15: 6—神との個人的出会い(創世記12章)の後にアブラムは従順な信仰生活を送った(創世記12-22章)。パウロはこのことをローマ4章とガラテヤ3章で婉曲的に述べている。
2. イザヤ 28: 16—それを信じる人々(つまり神が試され固定されたすみ石[礎石])は決してこのようにはならないだろう。
 - a. ローマ 9: 33、「恥をかく」つまり「失望する」
 - b. ローマ 10: 11、「恥をかく」つまり「失望する」
3. ハバクク 2: 4—忠実な神を知る人々は忠実に生きるだろう(エレミヤ 7: 28)。パウロはこの御言葉をローマ 1: 17 とガラテヤ 3: 11 で用いている(ヘブル 10: 38 にも注目せよ)。

IV. この旧約聖書の概念のペテロの使い方

A. パウロはこれらを融合した。

1. イザヤ 8: 14— I ペテロ 2: 8(躓きの石)
2. イザヤ 28: 16— I ペテロ 2: 6(すみ石[礎石])
3. 詩篇 111: 22— I ペテロ 2: 7(捨てられた石)

B. 彼はこれらの御言葉をイスラエルを言い表す特有の言葉「選ばれた種族、忠実な司祭、聖なる国家、神御自身の所有される民」に変換した。

1. 申命記 10: 15、イザヤ 43: 21
2. イザヤ 61: 6、66: 21
3. 出エジプト 19: 6、申命記 7: 6

そしてここではそれをキリストにある教会の信仰に対して用いている。

V. この概念のヨハネの使い方

A. 新約聖書におけるその用法

用語「信じた」はギリシャ語の用語 (*pisteuo*) に由来し、これも同様に「信条」、「信仰」、あるいは「信頼」と訳されているようだ。例えば、名詞形はヨハネの福音書の中にはないが、動詞形はしばしば用いられている。ヨハネ 2: 23-25 では、救世主でいらっしゃるナザレのイエスとの群衆の係わりの信憑性は明らかにされていない。用語「信条」のこのような表面的な使い方は他にもヨハネ 8: 31-59 と使徒行伝 8: 13 と 18-24 節に例がある。真の聖書的信仰は最初の応答以上のものである。それは弟子化の過程につながるものでなければならない(マタイ 13: 20-21 と 31-32 を参照)。

B. 前置詞との併用

1. *eis* は「～へ」を意味する。この特有の構造は信徒がイエスに信頼あるいは信仰を置いていることを強調している。
 - a. 神の御名へ(ヨハネ 1: 12、2: 23、3: 18、I ヨハネ 5: 13)
 - b. 神へ(ヨハネ 2: 11、3: 15 と 18 節、4: 39、6: 40、7: 5 と 31 節と 39 節と 48 節、8: 30、9: 36、10: 42、11: 45 と 48 節、17: 37 と 42 節、マタイ 18: 6、使徒行伝 10: 43、ピリピ 1: 29、I ペテロ 1: 8)
 - c. わたしへ(ヨハネ 6: 35、7: 38、11: 25 と 26 節、12: 44 と 46 節、14: 1 と 12 節、16: 9、17: 20)
 - d. 御子へ(ヨハネ 3: 36、9: 35、I ヨハネ 5: 10)
 - e. イエスへ(ヨハネ 12: 11、使徒行伝 19: 4、ガラテヤ 2: 16)
 - f. 光へ(ヨハネ 12: 36)
 - g. 神へ(ヨハネ 14: 1)
2. *en* はヨハネ 3: 15、マルコ 1: 15、使徒行伝 5: 14 では「～の中に」を意味する。
3. *epi* はマタイ 27: 42、使徒行伝 9: 42、11: 17、16: 31、22: 19、ローマ 4: 5 と 24 節、9: 33、10: 11、I テモテ 1: 16、I ペテロ 2: 6 では「～の中に」あるいは「～の上に」を意味する。
4. ガラテヤ 3: 6、使徒行伝 18: 8 と 27: 25、I ヨハネ 3: 23 と 5: 10 にある、前置詞を伴わない与格
5. *hoti* は「～ということ信じ」の意味を表し、信じる対象の内容を示す。
 - a. イエスは神の聖者である(ヨハネ 6: 69)
 - b. イエスは「わたしはある」というお方である(ヨハネ 8: 24)
 - c. イエスは父なる神の内におられ、父なる神はイエスの内におられる(ヨハネ 10: 38)
 - d. イエスはメシア(救世主)である(ヨハネ 11: 27 と 20: 31)
 - e. イエスは神の御子である(ヨハネ 11: 27 と 20: 31)
 - f. イエスは父なる神によってつかわされた(ヨハネ 11: 42、17: 8 と 21 節)
 - g. イエスは父なる神とともにおられる(ヨハネ 14: 10-11)
 - h. イエスは父なる神のみもとから来られた(ヨハネ 16: 27)

- i. イエスはご自身を神の契約の名「わたしはある」と名乗られた(ヨハネ 8: 24 と 13: 19)
- j. 私達はイエスとともに生きることになる(ローマ 6: 8)
- k. イエスは死に、そして復活された(I テサロニケ 4: 14)

VI. 結論

聖書的信仰とは人の神のお言葉とお約束への応答である。神が常に(コミュニケーションを)始められる(つまりヨハネ 6: 44 と 45 節)が、この神のコミュニケーションの半分は人の(神のお言葉とお約束への)応答の必要である。

1. 信頼
2. 契約への従順

聖書的信仰とは次に示すことである。

1. 個人的関係(最初の信仰)
2. 聖書的真理の肯定(神の啓示への信仰)
3. それへの適切な従順的応答(日々の信仰)

聖書的信仰は天国への切符あるいは保険ではない。それは個人的関係である。これは被造物、特に人間が神のお姿に似せて造られた(創世記 1: 26-27 を参照) 目的である。ここで議題となるのは「親密さ」である。神は交わりを望んでおられるが、これはある神学的立場からではない！そうではなく、聖なる神との交わりには子供達が「家族」としての特徴(つまり神聖、レビ 19: 2、マタイ 5 章 48 節、I ペテロ 1: 15-16 を参照)を示すことが求められているのだ。墮落(創世記 3 章を参照)は私達が適切に応答する能力に影響した。だから、神は私達のために働かれ、「新しい心」と「新しい霊」とを私達に下さり、私達が信仰と悔い改めを通して御自分と交わり御自分に従うことができるようにして下さったのである。

上記の3つの事柄は全て重要である。これら3つの事柄は全て維持されなければならない。その目標は(ヘブル語とギリシャ語の意味で)神を知ることと私達の生活に神のご性質を反映させることである。信仰の目標は、いつの日か行くことになる天国ではなく、毎日キリストのようであることなのだ！

人の忠実さは結果(新約聖書)であり神との関係の基礎(旧約聖書)ではない。つまり神の忠実さへの人の信仰であり、神の信頼性への人の信頼である。新約聖書における救い観の核心は、キリストにより示された神の無条件の恵みと慈みに人が最初にそして継続的に応答しなければならないということである。神は愛され、神は遣わされ、神は備えられている。私達は信仰と忠実さをもって応答しなければならないのだ(エペソ 2: 8-9 と 10 節を参照)！忠実なる神は忠実なる人々に、信仰なき世に御自身を現し、御自分への個人的信仰を彼らにもたらしてほしいと思われているのだ。

特別なトピック: 信仰、信条、あるいは信頼 (*pistis* [名詞]、*pisteuo* [動詞] *pistos* [形容詞])

A. これは聖書においてとても重要な用語である(ヘブル 11: 1 と 6 節を参照)。それはイエスの初期の教えの主題である(マルコ 1: 15 を参照)。新たな契約が要求していることが少なくとも2つある: 悔い改めと信仰である(1: 15、使徒行伝 3: 16 と 19 節および 20: 21 を参照)。

B. 語源

1. 旧約聖書における用語「信仰」は忠実、忠誠、信頼性を意味し、私達の性質ではなく神の御性質を言い表していた。
2. その語は「確実で安定した」を意味するヘブル語の用語(*emun*, *emunah*)に由来する。信仰を保つことは精神的同意(一連の真理)、道徳的生活(生活様式)、そして主にその人との関係形成(人の歓迎)つまり意志に基づくその人との関係形成(決断)である。

C. 旧約聖書での用法

アブラハムの信仰が未来の救世主へのものではなく、彼に子と子孫が生まれるという神の約束(創世記 12: 2、15: 2-5、17: 4-8、18: 14 を参照)へのものであったことは強調されなければならない。アブラハムは神を信頼することでこの約束に応えた。彼はこの約束にまだ疑いと問題とを持っていた。というのは、この約束の成就(実現)に13年かかったからである。しかし彼の不完全な信仰は神に受け入れられた。神は、たとえからし種ほどの大きさの信仰であっても、それをもって御自分と御自分のなされた約束に応答する、欠陥ある人間とともに働こうとされているのだ。

D. 新約聖書での用法

用語「信じた」はギリシャ語の用語(*pisteuo*)に由来し、これも同様に「信条」、「信仰」、あるいは「信頼」と訳されているようだ。例えば、名詞形はヨハネの福音書の中にはないが、動詞形はしばしば用いられている。ヨハネ 2: 23-25 では、救世主でいらっしゃるナザレのイエスとの群衆の係わりの信憑性は明らかにされていない。用語「信条」のこのような表面的な用い方は他にもヨハネ 8: 31-59 と使徒行伝 8: 13 と 18-24 節に例がある。真の聖書的信仰は最初の応答以上のものである。それは弟子化の過程につながるものでなければならない(マタイ 13: 20-21 と 31-32 を参照)。

E. 前置詞との併用

1. *eis* は「～へ」を意味する。この特有の構造は信徒がイエスに信頼あるいは信仰を置いていることを強調している。
 - a. 神の御名へ(ヨハネ 1: 12、2: 23、3: 18、I ヨハネ 5: 13)
 - b. 神へ(ヨハネ 2: 11、3: 15 と 18 節、4: 39、6: 40、7: 5 と 31 節と 39 節と 48 節、8: 30、9: 36、10: 42、11: 45 と 48 節、17: 37 と 42 節、マタイ 18: 6、使徒行伝 10: 43、ピリピ 1: 29、I ペテロ 1: 8)
 - c. わたしへ(ヨハネ 6: 35、7: 38、11: 25 と 26 節、12: 44 と 46 節、14: 1 と 12 節、16: 9、17: 20)
 - d. 御子へ(ヨハネ 3: 36、9: 35、I ヨハネ 5: 10)
 - e. イエスへ(ヨハネ 12: 11、使徒行伝 19: 4、ガラテヤ 2: 16)

- f. 光へ(ヨハネ 12: 36)
 - g. 神へ(ヨハネ 14: 1)
2. *en* はヨハネ 3: 15、マルコ 1: 15、使徒行伝 5: 14 では「~の中に」を意味する。
 3. *epi* はマタイ 27: 42、使徒行伝 9: 42、11: 17、16: 31、22: 19、ローマ 4: 5 と 24 節、9: 33、10:11、I テモテ 1: 16、I ペテロ 2: 6 では「~の中に」あるいは「~の上に」を意味する。
 4. ガラテヤ 3: 6、使徒行伝 18: 8 と 27: 25、I ヨハネ 3: 23 と 5: 10 にある、前置詞を伴わない与格
 5. *hoti* は「~ということを知る」という意味を表し、信じる対象の内容を示す。
 - a. イエスは神の聖者である(ヨハネ 6: 69)
 - b. イエスは「わたしはある」というお方である(ヨハネ 8: 24)
 - c. イエスは父なる神の内におられ、父なる神はイエスの内におられる(ヨハネ 10: 38)
 - d. イエスはメシア(救世主)である(ヨハネ 11: 27 と 20: 31)
 - e. イエスは神の御子である(ヨハネ 11: 27 と 20: 31)
 - f. イエスは父なる神によってつかわされた(ヨハネ 11: 42、17: 8 と 21 節)
 - g. イエスは父なる神とともにおられる(ヨハネ 14: 10-11)
 - h. イエスは父なる神のみもとから来られた(ヨハネ 16: 27)
 - i. イエスはご自身を神の契約の名「わたしはある」と名乗られた(ヨハネ 8: 24 と 13: 19)
 - j. 私達はイエスとともに生きることになる(ローマ 6: 8)
 - k. イエスは死に、そして復活された(I テサロニケ 4: 14)

「彼は義とみなされたのです」 これは創世記 15: 6 のセプトウアギンタからの引用である。アオリスト受動態動詞「~とみなされる」は「他人の口座に送金する」(ローマ 4: 3 と 9 節と 22 節を参照) という意味の商業用語である。2: 21 の特別なトピック: 義を見よ。神の愛と、子孫を与えるという神の約束へのアブラハムの信仰のゆえに神の義はアブラハムに与えられた。創世記 15: 6 の引用はセプトウアギンタに由来する。パウロは自らの主張を強固にするためにモーセの律法を数回引用した。偽の教師達が律法を用いて主張したので、パウロはそれと同じ方法で彼らの誤ちを証明した。モーセの著書(創世記~申命記)は紀元1世紀のユダヤ教のヘブル語正典のうちで最も権威ある箇所であった。

3: 7「信仰によって生きる人々はアブラハムの子であるということを覚えておきなさい」 この発言はこの文脈単位の主な主張点である。この宣言は、ユダヤ教に傾倒した偽の教師達を震え上がらせたであろう。これと同じ真理は洗礼者ヨハネのメッセージ(ルカ 3: 8 を参照)、そして特にヨハネ 8: 37-59 のイエスのお言葉にも暗示されている。この神学的真理は 3: 14 と 29 節およびローマ 2 章 28-29 節でパウロによってさらに述べられている。人はアブラハムの子たちについて、彼らの両親は誰かということではなく、彼らが誰を知っているか(イエスとの個人的関係)およびどのよう

に生活しているか(キリストのようであること)ということを知ることができるのだ。

3: 8「聖書は、神が異邦人を信仰によって義とされることを予見して」 このヘブル語の熟語は旧約聖書の全ての靈感を肯定している。この節では聖書は2回擬人化されている。4: 30 の解説を見よ。

全ての人の救いはいつでも神の御計画である(創世記 3: 15 と 12: 3、出エジプト 19: 5-6 を参照)。唯一の神がおられ、全ての人は神のお姿に似せて造られた(創世記 1: 26-27、5: 1、9: 6)。だから神は全ての人を愛しておられる(エゼキエル 18: 32、ヨハネ 3: 16、I テモテ 2: 4、II ペテロ 3: 9)。異邦人を含めた全ての人に対する神の普遍の愛は、イザヤ書(2: 2-4、45: 21-25、56: 1-8、60: 1-3 を参照)、ヨナ書、ヨハネ 3: 16、エペソ 2: 11~3: 13、I テモテ 2: 4 と 4: 10、テトス 2: 11、II ペテロ 3: 9 にはっきりと見られる。

この、全ての人が得ることのできる救いのメカニズムは、キリストのような人格(10 節)に表われる、人の信仰(エペソ 2: 8-9 を参照)を通した神の恵みである。

「福音を〜に告げ知らせました」 この英語の成句はギリシャ語では一語(*proeuangelisato*、アオリスト中間態[異態]直説法動詞)に訳されている。

1. *pro* —(〜[人]の)前に
2. *eu* —良い
3. *angelia* —メッセージ、知らせ
4. *euangelizomai* —告げ知らせる
5. 全て合わせると「〜[人]に良い知らせを告げ知らせる」という意味になる。

この成句は新約聖書ではここでのみ見られる。この成句は、全ての人に対する神の愛がアブラハムの最初の召し(つまり創世記 12: 3)のときに彼の前に明らかにされたことを主張している。福音(*euangelion*)はモーセの著書の中にその語源を持つのである。

「全ての国々はあなたによって祝福されるであろう」 ここでパウロは、創世記 12: 3 と 18: 18 と 22 章 18 節と 26: 4 に記された、アブラハムに対する神の約束を引用している。このヘブル語の動詞形は(1)受動態形「祝福されるだろう」(創世記 18: 18 と 28: 14 を参照)あるいは(2)中間態再帰動詞形「自分達自身を祝福するだろう」(創世記 22: 16-18 と 26: 4 を参照)であろう。しかし、セプトウアギンタとパウロの引用では動詞形は中間態ではなく受動態である。この聖句でパウロは創世記 12: 3 とセプトウアギンタ由来の 18: 18 とを結びつけている。神のお姿に似せて造られた全ての人の救いはいつでも神の御計画なのだ！ 1: 7 の特別なトピック:ボブの伝道についての偏見を見よ。

3: 9

NASB 「信仰によって生きる人々は、信仰の人アブラハムとともに祝福されています」

NKJV	「信仰によって生きる人々は信徒アブラハムとともに祝福されています」
NRSV	「信じる人々は信じたアブラハムとともに祝福されています」
TEV	「アブラハムは信じて祝福されました。ですから信じる人々は皆彼と同じように祝福されるのです」
NJB	「ですから、信仰により頼む人々は信仰の人アブラハムが受けたのと同じ祝福を受けるのです」

前置詞「*syn*」は「～と密接な関係がある」という意味で、アブラハムと神を信じる全ての人とはほぼ同じである(ほぼ同じ待遇を神から受ける)ことを示している。アブラハムを描写した言葉「忠実な」と「信仰のある」は、神が自分に対してなされた約束を信頼することによってアブラハムが神を信じたことを強調している。新約聖書における信仰とは、神の信頼性と神の約束を信頼することも意味する。しかし、アブラハムの信仰が完全ではなかったことと、ハガルとの間に子をもうけることによって神が自分に対してなされた約束を果たされることができようになるように試みた(創世記16章を参照)ことを覚えておきなさい。それは人類の完全な信仰ではなく、彼らの信仰の目的なのだ。

NASB(改訂版)原典: 3: 10-14

¹⁰ですから、律法の働きにより頼む者は誰でも呪われています。というのは、「律法の書にそうせよと書かれている全てのことを忠実に行なわない者は皆呪われている」と書いてあるからです。¹¹ここに、律法によっては誰も神の御前に義とされないことは明らかです。なぜなら、「義なる人は信仰によって生きる」からです。¹²しかし、律法は信仰を基礎としてはいません。そうではなく、「律法を行う者は律法によって生きる」のです。¹³キリストはわたしたちのために呪いとなられて、律法の呪いからわたしたちを救い出して下さいました。というのは、「木にぶら下っている者は皆呪われている」と書いてあるからです。¹⁴それは、アブラハムに与えられた祝福が、キリスト・イエスにおいて異邦人にも与えられるためであり、またわたしたちが信仰によって、与えられると約束された霊を受けるためでした。

3: 10

NASB	「ですから、律法の働きにより頼む者は誰でも呪われています」
NKJV	「ですから、律法の働きにより頼む者は誰でも呪われています」
NRSV	「ですから、律法の働きにより頼む者は誰でも呪われています」
TEV	「律法に従うことにより頼む者は呪いのもとに生きています」
NJB	「律法に従うことにより頼む者は呪われています」

議論の次の段階で、パウロはアブラハムからモーセの律法の厳格な戒律に話題を移した。この議論はユダヤ教徒化した者達の誤った神学に対する挑戦である。律法に固執した(神への)信頼はイエスがこの世におられた時代のパリサイ人に特徴的な性質であった(ローマ10: 2-5を参照)。

神との正当な関係を得るための自己努力は地獄行きの唯一の道である(2: 16 を参照)とパウロは主張した。パウロはこの道をよく知っていたのだ！パウロがモーセの律法について述べることはとても多かったが、彼の言う律法とは一般的な「法」、つまり世の道德規準に基づいた人間の努力である。どの規準が重要かということではない—大切な真理は、墮落した人類は自らの道徳的行いによって神に受け入れられるとは言えないということである。私達はこの概念を自己義認的律法主義と呼ぶ。それは義なる人々の間で生きていて、活発であり、栄えているのだ！

「というのは、『律法の書にそうせよと書かれている全てのことを忠実に行なわない者は皆呪われている』と書いてあるからです」これは申命記 27: 26 と 28: 58 以降に暗示されている。語「全ての」は申命記 27: 26 には登場しないが、28: 58 には登場する。律法の呪いはヨハネ 7: 49 に暗示されている。もし人がただ一度でも (*Bar Mitzvah* 後に) ある方法で律法を破れば、その人は律法の戒律に従って非難され罰を受ける(ヤコブ 2: 10 とガラテヤ 5: 3 を参照)。旧約聖書の律法は全ての人にとって死刑宣告となった(コロサイ 2: 14)。神は言われた「罪を犯した魂、それは確かに死ぬ」(エゼキエル 18: 4 と 20 節)。アダムの子供達は皆罪を犯したのだ！律法は、神との正しい関係を得る手段としては、決して罪を犯さない人にだけ適用できる。このことに伴う問題は、全ての人が罪を犯し、そして神の栄光を受けられなくなったということなのである(ローマ 3: 9-18、22 節、23 節、11: 32 を参照)。

3: 11

NASB 「なぜなら、『義なる人は信仰によって生きる』からです」

NKJV 「義なる人は信仰によって生きる」

NRSV 「義なる人は信仰によって生きる」

TEV 「信仰によって神に義とされた人は生きる」

NJB 「義なる人は信仰によって生きる」

ここでパウロはハバクク 2: 4 を引用している(ローマ 1: 17 とヘブル 10: 38 を参照)。意味の不明瞭な節ではあるが、ハバクク 2: 4 は幾通りにも理解されてきている。

1. マソラ原典では「義なる人は信仰と忠実さによって生きる」
2. セプトゥアギンタでは「義なる人はわたしの(神の)忠実さによって生きる」
3. パウロがその聖句を引用した目的は、キリストを通じた信仰に基づく義と、モーセの律法を通じた行いに基づく義とを対比させるためである(レビ 18: 5 を引用している 12 節を参照)

ここには創世記 5: 16 への不明瞭な暗示が見られる。なぜならハバクク 2: 4 と創世記 5: 16 には同じ2つの重要な用語、つまり信仰と義があるからである。

- 3: 6 の特別なトピック: 旧約聖書における信条、信頼、信仰、そして忠実さを見よ。

3: 12

NASB、NKJV 「律法は信仰を基礎としてはいません」
NRSV 「律法は信仰を基礎としてはいません」
TEV 「律法は信仰により頼んではいません」
NJB 「律法は信仰を基礎とはしていません」

ここに重要な仮定がある！神との正しい関係を持つという問題(救い)においては、信仰と律法ではなく信仰か律法かを選ぶのである。ユダヤ教徒化した者達は神への信仰を神による支配に変えてしまった。旧約聖書においてさえ、イスラエルの民は各々YHWHへの個人的信仰によってのみ義とされた。決して全てのイスラエルの民が、アブラハムの子孫であるという理由で義とされたわけではなかった(ヨハネ 8: 31-59 を参照)。

「そうではなく、『律法を行う者は律法によって生きる』のです」これはレビ 18: 5 からの引用であり、神のご命令(つまりモーセの律法)を実行することの重要性を強調している。しかし、旧約聖書は人類の律法実行不能の歴史である(ネヘミヤ9章を参照)。旧約聖書は墮落した人類の霊的必要を強調している(19 節と 22 節を参照)。そこで別の救いの道が開かれ、事実その道が常に神の救われる方法、つまり人の努力ではなく信仰による救いの道となった(ハバクク 2: 4 を参照)。信仰を通した恵みによる救いは新しい契約の本質である(エレミヤ 31: 31-34、エゼキエル 36: 22-36、使徒行伝2章、ローマ4章、エペソ 2: 8-9 を参照)。

3: 13「キリストはわたしたちを救い出して下さいました」ここでパウロはキリストの身代わりの贖罪について述べている。キリストは私達のために、私達が自身で贖うことのできないものを贖ってくださったのだ(イザヤ 53 章、マルコ 10: 45、II コリント 5: 21 を参照)。用語「救った」つまり「贖った」は「奴隷状態にある者を買戻す」つまり「獲得する」という意味である(使徒行伝 20: 28、I コリント 6: 20 と 7: 23、I ペテロ 1: 18-19 を参照)。

特別なトピック: 贖いと救い

I. 旧約聖書

A. この概念を表現する重要な2つのヘブル語の法律用語がある。

1. *Ga'al* (BDB145、I)。本来の意味は「(~[人、物]を)代価を払うことによって自由にする」である。この用語の一形態 *go'el* には個人的な仲介者、通常は家族の一員(つまり親類の救済者)の概念が加わる。物、動物、土地(レビ25章と27章を参照)、あるいは親族(ルツ 4: 15、イザヤ 29: 22 を参照)を買戻すこの権利の文化的特徴は神学的に、YHWH がイスラエルの民をエジプトから救い出されたこと(出エジプト 6: 6 と 15: 13、詩篇 74: 2 と 77: 15、エレミヤ 31: 11 を参照)に移転される。彼(YHWH)は救い主となるのだ(ヨブ 19: 25、詩篇 19: 14 と 78: 35、箴言 23: 11、イザヤ 41: 14、43: 14、44: 6 と 24 節、47: 4、48: 17、49: 7

- と 26 節、54: 5 と 8 節、59: 20、60: 16、63: 16、エレミヤ 50: 34 を参照)。
2. Padah (BDB804)。本来の意味は「運ぶ」つまり「救い出す」である。
 - a. 初子の救い(出エジプト 13: 13 と 14 節、民数記 18: 15-17 を参照)
 - b. 肉体の救いは霊の救いとは対照的である(詩篇 49: 7 と 8 節と 15 節)
 - c. YHWH はイスラエルを罪と反逆から救い出されることになっている(詩篇 130: 7-8)
- B. この神学的概念にはいくつかの関連する事柄が含まれる。
1. 必要、束縛、剥奪(没収)、投獄がある。
 - a. 肉体的
 - b. 社会的
 - c. 霊的(詩篇 130: 8 を参照)
 2. 自由化、解放、回復のために代価が払われなければならない。
 - a. イスラエル国家の(申命記 7: 8 を参照)
 - b. 個人の(ヨブ 19: 25-27、33: 28 を参照)
 3. 誰かが仲介者あるいは後援者の役割を果たさなければならない。*ga'al* ではこの人は通常は家族の一員あるいは近親者(*go'el*、BDB145)である。
 4. YHWH はしばしば家族用語の中に御自身を表現される。
 - a. 父
 - b. 夫
 - c. 近親者の救済者と復讐者

救いは YHWH の個人的代理者を通して保証された。代価は払われ、救いは成し遂げられたのだ!

II. 新約聖書

- A. この概念を表現するのに用いられるいくつかの用語がある。
1. *Agorazo* (I コリント 6: 20 と 7: 30、II ペテロ 2: 1、黙示録 5: 9 と 14: 3-4 を参照)。これは何かに支払われた代金を意味する商業用語である。私達は自分自身の人生をコントロールしない、(イエス・キリストの)血で贖われた民である。私達はキリストに属している。
 2. *Exagorazo* (ガラテヤ 3: 13 と 4: 5、エペソ 5: 16、コロサイ 4: 5 を参照)。これは商業用語である。この語はイエスが私達の身代わりに死んでくださったことを意味している。イエスはい志向の律法(つまりモーセの律法:エペソ 2: 14-16 とコロサイ 2: 14 を参照)の「呪い」を御身に負われた。それは罪深い人類が成し遂げられなかったことであった。イエスは私達みんなのために(マルコ 10: 45 と II コリント 5: 21 を参照)呪いを御身に負われた(申命記 21: 23 を参照)のだ! イエスの御身の内では神の義と愛は完全な赦しと受容と親交へと変わるのだ!
 3. *Luo*、「解放する」
 - a. *Lutron*、「払われた代価」(マタイ 20: 28、マルコ 10: 45 を参照)。これらは、御自身が負

っておられなかった罪の負債を払うことによって世を救うという、この世に来られる目的についてイエスが御自分のお言葉で語られたことに由来する力強い言葉である(ヨハネ 1: 29 を参照)。

b. *Lutroo*、「解放する」

- (1) イスラエルを救う(ルカ 24: 21)
- (2) 人々を救い聖めるために御自身を捧げる(テトス 2: 14)
- (3) 罪なき身代わりとなる(I ペテロ 1: 18-19)

c. *Lutrosis*、「救い」、「連れ出し」、「解放」

- (1) イエスについてのザカリヤの予言、ルカ 1: 68
- (2) イエスについてのアンナの神への賛美、ルカ 2: 38
- (3) ただ一度捧げられた、イエスの尊い犠牲、ヘブル 9: 12

4. *Apolutrosis*

a. イエスの再来時の救い(使徒行伝 3: 19-21 を参照)

- (1) ルカ 21: 28
- (2) ローマ 8: 23
- (3) エペソ 1: 14 と 4: 30
- (4) ヘブル 9: 15

b. キリストの死による救い

- (1) ローマ 3: 24
- (2) I コリント 1: 30
- (3) エペソ 1: 7
- (4) コロサイ 1: 14

5. *Antilytron* (I テモテ 2: 6 を参照)。これは(テトス 2: 14 と同様に)解放と十字架上のイエスの身代わりの死とを関連づける重要な語である。イエスは受け入れ得る犠牲となられた唯一の方であり、「みんな(全ての人)」のために死んでくださったお方である(ヨハネ 1: 29 と 3: 16-17 と 4: 42、I テモテ 2: 4 と 4: 10、テトス 2: 11、II ペテロ 3: 9、I ヨハネ 2: 2 と 4: 14 を参照)。

B. 新約聖書中の神学的概念

1. 人類は罪の奴隷である(ヨハネ 8: 34、ローマ 3: 10-18 と 6: 23 を参照)。
2. 人類が罪に束縛されていることは旧約聖書のモーセの律法(ガラテヤ3章を参照)とイエスの山上の説教(マタイ5~7章を参照)によって明らかである。人の行いは死刑宣告となっている(コロサイ 2: 14 を参照)。
3. 罪なき神の子羊イエスはこの世に来られて私達のために死んでくださった(ヨハネ 1: 29 と II コリント 5: 21 を参照)。私達は神に仕えるために罪から贖い出された(ローマ6章を参照)。

4. 推測によれば YHWH とイエスは私達の代わりに働かれる「近親者」でいらっしやる。ここでも家族の比喩(つまり父、夫、息子、兄弟、近親者)は続く。
5. 救いはサタンに払われた代価ではなく、(中世神学)神のお言葉と神の義の神の愛との和解であり、それらはキリストの内に完全に現れている。十字架で平和は回復され、人類の反逆は赦され、人類に現わされた神のお姿は親しい交わりの中で今や完全にその全貌を回復したのだ！
6. 聖書には救いの未来の姿、つまり私達の復活後の体と三位一体の神との個人的な親交についても記されている(ローマ 8: 23、エペソ 1: 14 と 4: 30 を参照)。私達の復活後の体は神と同様ということになっている(I ヨハネ 3: 2 を参照)。神は肉体をお持ちであるが、その肉体は異次元で表されている。I コリント 15: 12-19 のパラドックスを I コリント 15: 35-58 で定義することは難しい。明らかに地上での肉体があり、そして天での霊的肉体があることになっている。イエスは両方お持ちなのだ！

「わたしたちのために呪いとなられて、律法の呪いから」この節は、すでに殺されて公衆の面前で屈辱的な絞首刑あるいは磔刑(はりつけの刑)となった人を描写するのに用いられた申命記 21: 23 を引用している。この不適切な埋葬は神による呪いと解釈された(イザヤ 53: 4 と 10 節を参照)。罪なき身代わりとしてのイエスの磔刑は、私達のためにイエスが律法の呪いを御身に負われたことを意味した(II コリント 5: 21、ピリピ 2: 8 を参照)。この真理は圧倒的である—イエスは私達のために呪いとなられたのだ！イエスはご自身で律法を成就され、私達のために律法の呪いのもとに死んでくださり、そしてそれによって律法の力を打ち砕かれたのだ(コロサイ 2: 14 を参照)。

3: 14 14 節の中の2つの目的節は神がアブラハムを召された目的について述べている。

1. アブラハムへの神の約束を通してイスラエルの民が受けた祝福を異邦人にも伝えること
2. 信仰を通して全ての人は、新しい時代の約束されたしるしであった霊を受けることができるということ

ペンテコステ(五旬節)での出来事は使徒達にとって新しい時代の始まりのしるしであった。霊を受けることは救いのたとえであった(3: 1、ルカ 24: 49、使徒行伝 1: 4、ローマ 8: 9 を参照)。

古代ギリシャ語の原典には、この節の中では明らかに紛らわしい2つの語がある。

1. アブラハムの祝福(*eulogian*)
2. 霊の約束(*epaggelian*)

古代パピルス原典 P⁴⁶(紀元 200 年頃書かれた)とアンシアル原典ベゼ(D、5世紀)には「祝福」が2箇所見られるが、大多数の他の古代の原典(MSS⁸、A、B、C、D²)では2番目の節に「約束」が見られる。UBS⁴は「約束」を階級 A(確定)としている。

NASB(改訂版)原典: 3: 15-22

¹⁵兄弟たち、人間関係の観点から話をしましょう。人の立てた契約であっても、法的に有効となれば誰もそれを無効としたり新たな条件をつけ加えることはできません。¹⁶ところで、アブラハムとその子孫に約束が告げられましたが、そのとき神は多くの人をさして「子孫たちとに」とは言われず、一人の人をさして「あなたの子孫とに」と言われました。つまり(その子孫である一人の人は)キリストのことです。¹⁷わたしが言っているのはこのようなことです。430年後につくられた律法はそれ以前に神によって有効とされた契約を無効とし、はじめからなかったことにすることはありません。¹⁸というのは、もし相続が法に基づくものなら、それはもはや約束に基づくものではないからです。しかし神は約束によってそれをアブラハムにお与えになりました。¹⁹それでは、なぜ律法はあるのでしょうか。律法は、約束されたあの方が来られるときまで、違反者がいるという理由で(新たな条件を)つけ加えられ、仲介者の代理によって天使たちを通して定められたものです。²⁰仲介者はただひとりの人のためだけに働くことはありませんが、一方で神はただひとりの人のために働かれます。²¹それでは、律法は神の約束に反するのでしょうか。決してそうではありません！なぜなら、もし命を与える律法が与えられるなら、義は律法に基づくものということになるであろうからです。²²しかし聖書は、イエス・キリストへの信仰による約束が信じる人々に与えられるように、全てのものを罪のもとに閉じ込めました。

3: 15-17

NASB、NKJV	「人の立てた契約」
NRSV	「人の遺言」
TEV	「その契約」
NJB	「もしある遺言が」

パウロは一般人の例を挙げて自らの議論を進めている。彼は、個人の相続に関して「遺書」あるいは「遺言」と訳されるコイネギリシャ語の用語を用いている。古代ギリシャ語ではその語は「契約」と訳される。セプトウアギンタではこの用語は常に神と人類との間の契約を言い表すために用いられる。このあいまいさのために、パウロはこの法のたとえを、神とアブラハムと彼の子孫との間の契約の例として用いた。この契約は変更できないのだ！遺言と契約の概念を用いた同種の議論はヘブル 9: 15-20に見られる。

特別なトピック: 契約

契約を意味する旧約聖書の用語 *berith* (BDB136)は定義が容易ではない。ヘブル語にはこれに適合する動詞はない。語源をもとに定義を試みても全て説得力に欠けるものばかりだ。しかし、その概念の明らかな中心性は学者達に、その語の用法を調べてその機能的意味の決定を試みる意欲をかきたてている。

契約は唯一の真の神が御自分の被造物である人類を支配される手段である。契約、約束、そして協定の概念は聖書的な啓示の理解において重要である。神の主権(統治権)と人の自由意志と

の間の緊張は契約の概念にはっきりと見られる。契約の中には神の御性質と御業にのみ基づくものがある。

1. 被造物自体(創世記1～2章を参照)
2. アブラハムの召し(創世記12章を参照)
3. アブラハムとの契約(創世記15章を参照)
4. ノアの保護とノアへの約束(創世記6～9章を参照)

しかし契約の本質は応答を要求する。

1. 信仰によってアダムは神に従わなければならず、またエデンの中央にある木の実を食べないようにしなければならなかった。
2. 信仰によってアブラハムは家族のもとを去り、神に従い、未来の子孫(が与えられること)を信じなければならなかった。
3. 信仰によってノアは洪水から身を避けるための巨大な船を建造して動物達を集めなければならなかった。
4. 信仰によってモーセはイスラエルの民をエジプトから連れ出してシナイ山へ導き、(神の)祝福と呪いの約束とともに霊的かつ社会的な生活の指針を受けた(申命記27～28章を参照)

神と人の関係に関する、これと同じ緊張は「新しい契約」の中で述べられている。この緊張はエゼキエル18章とエゼキエル 36: 27-37(YHWH の御業)を見比べるとはっきりと分かる。その契約は神の慈みと恵みに満ちた御業あるいは人の義務的な応答に基づくのだろうか？これは旧・新約聖書にとって切実な問題である。どちらにとっても目標は同じである：(1)創世記3章で失われた、YHWH と人の交わりの回復(2)神の御性質を反映する義なる人々を生み出すこと。

エレミヤ 31: 31-34 の新しい契約は、行いによって神に受け入れられようとする人の思いを取り除くことでこの緊張を解く。神の法は外なる法の条文のかわりに内なる望みとなる。神の御性質を反映する義なる人々の目標も(目標と)同じであるが、方法論が異なる。墮落した人類は彼ら自身が神のお姿を映し出すにはふさわしくないことを知った。問題は神の契約ではなく、人間の罪深さと弱さであった(ローマ7章とガラテヤ3章を参照)。

旧約聖書の無条件の契約と条件付きの契約の間にある緊張と同じ緊張は新約聖書にも見られる。救いはイエス・キリストの成し遂げられた御業において絶対的に自由であるが、それには(自発的かつ継続的な)悔い改めと信仰が必要である。それは法的な宣言でありキリストらしさへの召し、つまり神が人を受け入れられたことを公表されたということであり、また神聖であるようにとの命令なのだ！信じる人々は行いによってではなく服従を通して救われる(エペソ 2: 8-10 を参照)。神らしい生活は救いの証拠となるが救いの手段とはならない。しかし永遠の命は目に見える特徴を持つのだ！この緊張はヘブル人への手紙にはっきりと見られる。

3: 15

NASB 「法的に有効となれば誰もそれを無効としたり新たな条件をつけ加えることはできません」

NKJV 「確定すれば誰もそれを無効としたりつけ加えたりできません」

NRSV 「人の遺言が一旦法的に有効となれば、誰もそれにつけ加えたり無効としたりできません」

TEV 「2人の人があることに同意してある契約に署名すれば、誰もその契約を破ったり何かをつけ加えたりできません」

NJB 「請求書に書かれたことは誰もそれを無視したりつけ加えたりすることは許されません」

パウロは、モーセの律法は(神の)アブラハムへの約束に取って代わったのだというユダヤ教徒化した者達の主張に応答している。創世記15章に記された(神の)アブラハムへの約束は、神の約束と、アブラハムが契約上の責任を何も負っていない犠牲、つまり信仰のみによって法的に有効とされた(創世記 15: 12-21 を参照)。

3: 16「約束」 「約束」は、神がアブラハムへの約束を多数回繰り返されているため複数形である(創世記 12: 1-3、13: 14-18、15: 1-5 と 12-18 節、17: 1-14、22: 9-19 を参照)。

「その子孫」「種」を用いたのは、子孫を表す一般的な熟語上の言葉の遊びである。形の上では単数形だが、意味の上では単数形と複数形の両方ありうる。パウロはイサクではなくイエスのことを言うためにこの語を用いた—だから、神の約束はモーセへの(神の)契約とは関係がない。「種」はアブラハムの場合と同様に、信仰によって神の子供達という集団的な意味で理解されうる(ローマ 2: 28-29 を参照)。

3: 17「430年後につくられた律法」 パウロは(神の)アブラハムへの約束の優位性のもうひとつの理由として、それが時系列上モーセの律法より前になされたことを述べている。430年という数については多くの議論があるが、その数は出エジプト 12: 40-41 に由来し、エジプト捕囚に関連がある。学者達の中には、出エジプト 12: 40 に「そしてカナンので」(F. F. Bruce 著 *Answers to Questions* 170 ページ)という一節を付け加えたセプトウアギンタとサマリア五書を用いる者がいる。創世記 15: 13 と使徒行伝 7: 6 には、イスラエルの民はエジプトに 400 年間捕われていたという記録がある。しかし、その他の学者達の中には、約束はアブラハムだけへのものではなく、全ての家父長達へも繰り返しなされ、しかもそれは単に、家父長達に最後に約束がなされたときからモーセが律法を受けたときまでの期間を指していると主張する者もいる。文脈中では、パウロの説明は時間の長さではなく、(神の)アブラハムへの約束から(神が)モーセに律法が与えられたときまでの長い期間に関係がある。

「はじめからなかったことにする」 この語 (*katargeo*) はとても多くの意味に訳されているが、その主な意味は何かを無用に、無価値に、無効に、不能に、無力にするが必ずしも存在を消しさったり破壊したりはしないことである。

特別なトピック: 無用と無効 (*kartargeo*)

これ (*kartargeo*) はパウロの好んだ語のひとつである。彼はこの語を少なくとも25回用いているが、この語のセム語系の語源あるいは語幹はとても広範囲にわたる。

A. この語の語源学上の基本的な語幹は、以下に示す意味を持っていた *argos* に由来する。

1. 不活発な(活動的でない)
2. 怠惰な
3. 不使用の
4. 無用の
5. 機能しなくなった

B. *kata* との複合語は、以下に示すことを表現するのに用いられた。

1. 不活発さ(活動的でないこと)
2. 無用さ
3. 消去されたもの
4. 捨てられたもの
5. 全く機能しなくなったもの

C. この語はルカの福音書の中でただ一度、実のならなくなった無用な木を描写するのに用いられている(ルカ 13: 7 を参照)。

D. パウロはこの語を主に2つの比喩的な意味で用いた。

1. 神は、人類に敵対するものを不能に(機能しないように)された。
 - a. 人類の罪の性質—ローマ 6: 6
 - b. 「子孫」についての神の約束に関連するモーセの律法—ローマ 4: 14、ガラテヤ 3: 17、5: 4 と 11 節、エペソ 2: 15
 - c. 霊的力— I コリント 15: 24
 - d. 「不法の者」— II テサロニケ 2: 8
 - e. 肉体の死— I コリント 15: 26、II テモテ 1: 16、ヘブル 2: 14
2. 神は古いもの(契約、世)を新しいものと取り換えられた。
 - a. モーセの律法に関連するもの—ローマ 3: 3 と 31 節、4: 14、II コリント 3: 7 と 11 節と 13 節と 14 節
 - b. 律法を用いた結婚の類推—ローマ 7: 2 と 6 節
 - c. この世のもの— I コリント 13: 8 と 10 節と 11 節
 - d. この体— I コリント 6: 13
 - e. この世の指導者達— I コリント 1: 28 と 2: 6

この語はとても多くの意味に訳されているが、その主な意味は何かを無用に、無価値に、無効に、不能に、無力にするが必ずしも存在を消しさったり破壊したり壊滅させたりはしないことである。

「神によって」これは、UBS⁴が階級 A(確定)とする最も保存状態の良い古代の原典(P⁴⁶、⁸、A、B、C、P)の解釈であるが、しかし待つてほしい、ここで聖書的な批判をいくつか紹介しよう。

1. 肯定的立場で

- a. 通常はより短い解釈が好まれる(書記達は削除ではなく付け加えと明瞭化を行う傾向があった)
- b. より古く最も普遍的な地理学上の解釈が多分最古のものであろう。より長い解釈は MS の D で初めて発見された(6世紀)。

2. その他の立場で

- a. 最も見慣れない解釈が多分最古のものであろう。パウロは通常、「キリストへ」(*eis Christon*)ではなく「キリストに」と言っている。
- b. 著者の普段の用法は、異なる見解に対する人の見方に影響を与える。しかし、パウロはガラテヤ 2: 16 と 3: 24 で同じ見慣れない形を用いている。

補遺2: 文脈批判を見よ。

3: 18

NASB	「しかし神は約束によってそれをアブラハムにお与えになりました」
NKJV	「しかし神は約束によってそれをアブラハムにお与えになりました」
NRSV	「しかし神は約束を通してそれをアブラハムにお与えになりました」
TEV	「しかし、神がそれをアブラハムにお与えになったのは神がそれを約束されたからでした」
NJB	「そして神が賜物をアブラハムにお与えになったのはまさしく約束という形においてでした」

この完了形中間態(異態)直説法動詞は、神御自身が過去になさって、その結果が現在まで続いていることを強調している。「与えた」(*charizomai*)の基本的な語源は「賜物」あるいは「恵み」(*charis*)である。それは、メシア(救世主)の御業を通した神の御性質を確かな基礎とする、神の御業の自由な性質を強調している。

3: 19

NASB、NKJV	「それでは、なぜ律法はあるのでしょうか」
NRSV	「それでは、律法はどのような目的を持つのでしょうか」
TEV	「それでは、律法の目的は何だったのでしょうか」
NJB	「それでは、律法を付け加える目的は何だったのでしょうか」

パウロは 1-5 節の自らの修辞学的様式に戻った。彼は神の御計画におけるモーセの律法の目的(19 節と 21 節を参照)の説明を試みるために 2つの質問から始めた。彼がこの対比的方法を用いたのは、彼が自らの以前の議論で律法の目的にあまりにも失望していたので、読者達の中に

彼が二律背反的思考の擁護者ではないかと思う人が出るおそれがあったからである。

特別なトピック: モーセの律法についてのパウロの見方

それは良いもので、神から来る(ローマ 7: 12 と 16 節を参照)

- A. それは義への道ではなく、また神に受け入れられる道ではない(それは呪いでさえありうる、ガラテヤ3章を参照)
- B. それは信じる人々への神の御意志でもある。なぜならそれは神が御自身でなさる啓示だからだ(パウロは信じる人々に罪を悟らせるために、あるいは信じる人々を励ますためにしばしば旧約聖書を引用する)。
- C. 信じる人々は旧約聖書から知識を得る(ローマ 4: 23-24、15: 4、I コリント 10: 6 と 11 節を参照)が、旧約聖書によっては救われない(使徒行伝 15 章、ローマ 4 章、ガラテヤ3章、ヘブル人への手紙を参照)。
- D. それは新しい契約の中で次のような機能を果たす:
 - 1. 罪深さを示す(ガラテヤ 3: 15-29 を参照)
 - 2. 救われた人を社会に導く
 - 3. 道徳上の決断ができるようにクリスチャンを教える

モーセの律法についてのパウロの見方を理解しようとするうえで問題となるのは、呪いと死から祝福と永遠までのこの神学的範囲である。自著 *A Man in Christ* の中で James Stewart はパウロの逆説的思考と著述について述べている:

「あなた(読者)は、自分の用いた用語の意味をできるだけはっきりと決めるための思考体系と原則を自らの内に作り上げていた人を普通に予想しただろう。あなたはその人が、自分の主張する考えの表現法の正確さに主眼を置くことを予想しただろう。あなたはある単語が、あなたが読んでいる本の作者によって一旦ある特別な意味で用いられれば、終始(その本全体で)その意味を持ち続けることを求めるだろう。しかし、このようなことをパウロに求めればあなたは失望することになるだろう。彼の表現法の多くは固定的ではなく流動的である...「律法は神聖です」、「内なる人としては私は神の律法を喜んでいます」(ローマ 7: 12 と 22 節を参照)と彼は記すが、それは明らかに、他の箇所では「キリストは律法の呪いからわたしたちを救いだして下さいました」(ガラテヤ 3: 13 を参照)と言わせているもう一つの *nomos* の特徴である。」(26 ページ)。

「律法は、約束されたあの方が来られるときまで、違反者がいるという理由で(新たな条件を)つけ加えられ、仲介者の代理によって天使たちを通して定められたものです」ギリシャ語の原典の伝統ではいくつかの異なる解釈があるが、NASB に記されているものは UBS⁴ によって階級 A に位置づけられている。律法が(神の)約束に劣る点に関して4つの事柄をここに明らかにすることができる。

1. それは後に付け加えられた。

2. それは違反者の数を増やした。
3. それはメシア、つまり「子孫なる方」が来られるときまでだけであった。
4. それは仲介者を通して与えられた。

成句「違反者の数を増やした」は「違反者を制限した」と解釈できる。この訳は統語論的に可能である。しかし、ローマ人への手紙の冒頭の数章でパウロがはっきりと述べているように(ローマ 3:20、5: 20、7: 1 を参照)、律法は人類に彼らの罪をはっきりと示すために与えられた。律法の前には罪は価値のないものとなる(ローマ 4: 15、5: 13 を参照)。

ピリピ 3: 6 とローマ 7: 7-11 は逆説的である。パウロは、自分は生涯のうちで律法の要求を成就したと感じていた。しかし、後に彼のうちで明らかとなった貪欲さは彼に、自分は罪人であり霊的救いの必要があることを示した。

ラビ(ユダヤ教の指導者)が天使を律法の仲介代理者として見ていることはセプトウアギンタの申命記 33: 2 の訳に見ることができる。律法の授与に関係する天使(達)は、使徒行伝 7: 38 と 53 節、ヘブル 2: 2、Josephus 著 *Antiquities of the Jews* の 15. 5. 3、そして聖書外典 *Book of Jubilees* 1: 27-29 でも議論されている。パウロは、YHWH がイスラエルの民とともにおられなかったときにイスラエルの民とともに居続けた主の天使(出エジプト 23: 20-33、32: 34、33: 2 を参照)を想っていたのかもしれない。

3: 20

NASB	「仲介者はただひとりの人のためだけに働くことはありませんが、一方で神はただひとりの人のために働かれます」
NKJV	「仲介者はただひとりの人を仲介することはありませんが、神はただひとりの人を仲介されます」
NRSV	「仲介者はひとり以上の人の間で働きますが、神はひとりの人を仲介されません」
TEV	「ただひとりの人がいるときには仲介者は必要ありませんが、神はただひとりの人を仲介されます」
NJB	「2人の人の間には仲介者は1人だけで十分ですが、神はひとりの人を仲介されます」

この節は数多くのさまざまな解釈が可能である。文脈では、律法の伝達の順序は神から天使達を通してモーセへ、そして人々へというものであったというのが明確な解釈と言えるだろう。従って、約束は2人の人、つまり神とアブラハムの間だけで交わされたので(律法に)優っており、一方モーセの契約は4者間で交わされたので(約束に)劣っている。神のアブラハムへの約束は誰の仲介も必要としなかった。

それは創世記 15: 12-21 の神のアブラハムへの無条件の約束のことも指しているのかもしれない。神だけがその約束の承認に関与されている。さて、神のアブラハムとの最初の契約が条件付

きであった(創世記 12: 1 を参照)にもかかわらず、パウロは自らの論点を明らかにするために創世記 15 章を引用している。モーセの契約は神と人類にとって条件付きのものであった(3: 15-17 の特別なトピックを見よ)。問題は、墮落(創世記 3 章を参照)以来人類が神との契約における自らの立場に基づく役割を果たせなくなったことにある。だから、神おひとり(つまり「神は唯一のお方」)に基づく約束は(律法に)優っているのだ!

3: 21「それでは、律法は神の約束に反するのでしょうか」 ギリシャ語の原典では、モーセの律法を意味したと思われる用語「律法」に冠詞がついていない。冠詞のつかない用語「律法」は 21 節と 4: 5 に 3 回見られる。ガラテヤ人の手紙では用語「律法」は、人類が宗教的指導指針や文化的規範の行いによって神のお気に入られようと試みていることを言う場合には、しばしば冠詞をつけずに用いられる。大切なことはどの指針かということではなく、(そのような指針や規範の行いによっては)人類は神に受け入れられることはできないという信条である(エペソ 2: 9 を参照)。ここにローマ 7 章の注意深い解釈が重要な理由がある。

ギリシャ語の原典には成句「神の」にいくつか種類がある。

1. 「神の」—MSS の \aleph 、A、C、D、F、G
2. 後の時代の小文字体の原典(104、459)—「キリストの」
3. その語(「神の」)を省略しているもの—MSS の P⁴⁶、B
37: 16

UBS⁴はこの語の階級を決定できず(階級“C”)、「神の」を括弧で囲んでいるが、そうした方が文脈に最も合う。

「なぜなら、もし律法が与えられるなら」 この第 2 種条件文は「事実反する」という概念を表している。拡大解釈すればこの聖句はこのような意味になる:「もしいのちを与えることができる律法が与えられるなら(そのような律法は決して存在しなかった)、(神との)正しい関係は律法を通して築かれる(律法はそのようなことはしない)」。律法は神に義としていただく道では決してなかった。それは神からの真の啓示である(マタイ 5: 17-19、ローマ 7: 12 を参照)。律法は神からの啓示であり価値あるものだが、(神との)正しい関係や救いに至る道ではない。

「義」 2: 21 の特別なトピックを見よ。

3: 22

NASB	「しかし聖書は全てのものを罪のもとに閉じ込めました」
NKJV	「しかし聖書は全てのものを罪のもとに閉じ込めました」
NRSV	「しかし聖書は全てのものを罪の力のもとに閉じ込めました」
TEV	「しかし聖書は、全世界は罪の力のもとにあると言っています」

NJB 「聖書は例外なく、罪は全てのものの主人であると言っています」

パウロが旧約聖書のどの御言葉について述べていたのかは、以前にガラテヤ 2: 16 と 3: 10 で挙げられていた申命記 27: 26 がひとつの可能性として挙げられるが、明らかではない。人類の墮落と(神からの)離反はパウロの福音の最初の論点である(ローマ 3: 9-18 と 22-23 節、11: 32 を参照)。

文字通りこれは「全ての人」(男性名詞)ではなく「全てのもの」(中性名詞)である。研究者達の中には、ここにキリストの救いの宇宙的重要性を見る者もある(ローマ 8: 18-25、エペソ 1: 22、およびキリストによる宇宙的救いを主題とするコロサイ人への手紙全体を参照)。しかし、この文脈では、その語はユダヤ人とユダヤ教徒化した者達と異邦人を含む全人類を指している。

「イエス・キリストへの信仰による約束が信じる人々に与えられるように」これは、神の恵みと慈みは人の長所や行いを通してではなくアブラハムとその「子孫」(つまりメシア)への神の約束を通してもたらされるという、議論全体の要約である！「信仰」あるいは「信条」と訳される用語「*pistis*」の繰り返しに注目しなさい。3: 6 の特別なトピックを見よ。

「キリストへの信仰によって」をどのように理解し訳すかの議論については 2: 16 の解説を見よ。

NASB(改訂版)原典: 3: 23-29

²³しかし信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下に監禁され、後に信仰が明らかにされるまで閉じ込められていました。²⁴こうして律法は、わたしたちが信仰によって義とされるように、わたしたちをキリストに導く教師となったのです。²⁵しかし今は信仰が現れたので、わたしたちはもはやそのような教師の下にはいません。²⁶というのは、あなたがたは皆、キリスト・イエスへの信仰を通して神の子であるからです。²⁷なぜなら、キリストの御名において洗礼を受けたあなたがたは皆、キリストを身にまとっているからです。²⁸ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もありません。というのはあなたがたは皆キリスト・イエスにあって一つだからです。²⁹もしあなたがたがキリストに属するなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人です。

3: 23「しかし信仰が現れる前には」「信仰」と並んで用いられているこの限定冠詞はキリスト教的な真理の本質(使徒行伝 6: 7、13: 8、14: 22、ガラテヤ 1: 23、6: 10、ユダ 3 節と 20 節を参照)を暗示している。しかし、この文脈では、その語は福音の世にとって比喩的である。

NASB 「わたしたちは律法の下に監禁され、後に信仰が明らかにされるまで閉じ込められていました」

NKJV 「わたしたちは律法の監視の下に置かれ、後に信仰が明らかにされるまで閉じ込められていました」

NRSV 「わたしたちは信仰が明らかにされるまで律法の下に監禁され保護されていました」

TEV 「この来るべき信仰が明らかにされるまで、律法はわたしたち皆を囚人として閉じ込めていました」

NJB 「わたしたちは律法によって一切の自由を許されていませんでした。わたしたちは信仰が明らかにされるまで保護されていました」

律法は 22 節で初めて看守として表現されている。人類はメシアが来られるまで保護監視下に置かれていた(ピリピ 4: 7、I ペテロ 1: 5 を参照)。律法を表現するのに用いられた 2 番目の比喻は 24 節にあり、それは私達の保護(擁護)者と呼ばれている。ギリシャおよびローマの社会では、この用語はギリシャおよびローマの少年の世話をする人を意味した。そうした保護者は彼らの保護と食事と送迎と教育の責任を負っていたので、「保護者」という語は保護者と訓練師という 2 通りの意味を持っていた。パウロは律法が神の御計画において持つ 2 つの目的を区別している: (1) 私達に自身の罪深さを示すこと(2) キリストによって恵みが自由に与えられるまで保護者として私達を保護すること(ヨハネ 1: 12、3: 16、ローマ 1: 16、10: 9-13 を参照)。

3: 24

NASB 「律法はわたしたちをキリストに導く教師となったのです」

NKJV 「律法はわたしたちをキリストに導く教師でした」

NRSV 「律法はキリストが来られるまでわたしたちの訓練師でした」

TEV 「だから律法はキリストが来られるまでわたしたちに責任を負っていました」

NJB 「律法はキリストが来られるまでわたしたちの保護者となったのです」

この前置詞句「キリストに」には 2 通りの解釈が可能である: (1) 「わたしたちをキリストに導く」、NASB と NKJV と NIV に見られる(2) 「キリストが来られるまで」、NRSV、TEV、JB に見られる。

「わたしたちが信仰によって義とされるように」「信仰によって義とされる」は宗教改革におけるマルチン・ルター有名な標語であった。律法には、キリストによる神の自由な賜物の中で機能する部分がある。それは福音に必要な前提条件—私達の必要を備えるのだ! 救いの「信仰」には常に(1)認知的(2)意志的(3)関係的側面がある。

3: 25「しかし今は信仰が現れたので、わたしたちはもはやそのような教師の下にはいません」信じる人々はもはや未成年の(神の)子供ではなく、成年の(神の)子供であり相続者なのだ! このことは全て、神の恵みとキリストの成し遂げられた御業と私達の悔い改めと信仰の応答を通して実現する。

3: 26「あなたがたは皆、キリスト・イエスへの信仰を通して神の子である」成句「皆神の子である」は信仰によってキリストを受け入れた人々のことを言い表している(ヨハネ 1: 12、3: 16、ローマ 8 章

14-17 節を参照)。この節は万人救済論あるいはローマ 5: 18 または 11: 32 を弁護しているのではなく、救いの普遍的提示について述べている。「全て」はギリシャ語原典中では強調のために最初に現れる。

3: 27「なぜなら、キリストの御名において洗礼を受けたあなたがたは皆」 これは救いの手段としての洗礼を強調しているのではない。というのは、それはまさしくユダヤ教徒化した者達が割礼との関連で用いていた議論であるからだ。クリスチャンの洗礼は、以前に 2、3、5、14 節で述べた聖霊の御業のしるしである（I コリント 12: 13 を参照）。聖霊の中で（によって、で）洗礼を受けることはクリスチャンになることの聖書的比喩であった。洗礼は単に、キリストへの信仰を公に告白する機会であり、内なる人の変化が達成された象徴である。水の洗礼を救いの前提条件とすることは新たにユダヤ教徒化することなのだ！

特別なトピック: 洗礼

Curtis Vaughan 著 *Acts* の 28 ページには使徒行伝 2: 38 に関して興味深い脚注がある。

「『受洗した』という意味のギリシャ語の用語は3人称命令形であり、『悔い改める』という意味の用語は2人称命令形である。二者へのより直接的な命令から『受洗した』第三者へのより間接的な命令へのこの変化は、ペテロの主要な要求が悔い改めであることを意味している。」

このことは洗礼者ヨハネ（マタイ 3: 2 を参照）とイエス（マタイ 4: 17 を参照）の説教において強調されたことを受け継いだものである。悔い改めは霊的に重要であるようであり、洗礼は霊的变化を公に告白することである。新約聖書は未受洗の信徒については何も知らないのだ！初期教会において洗礼は信仰を公に告白する**唯一の行為**であった。それはキリストへの信仰を公に告白する機会であり、救いのメカニズムではないのだ！ペテロが2回目の説教において悔い改めについて述べたのに洗礼については述べなかったこと（3: 19 とルカ 24: 17 を参照）は覚えておく必要がある。洗礼はイエスが示された模範であった（マタイ 3: 13-18 を参照）。洗礼はイエスが命令されたことであった（マタイ 28: 19 を参照）。救いのための洗礼の必要性について現代において問題となることは新約聖書には述べられていない。全ての信じる人は洗礼を受けることを期待されている。しかし人はまた、聖餐式の形式主義に対して注意しなければならない！救いは信仰の問題であり、立場や言葉や儀式の正しさの問題ではないのだ！

「キリストを身にまとっている」 これは私達の側の目的ある行為を強調するアオリスト中間態直説法動詞である。これは、私達が神の家族的な御性質を（衣服と同じように）「着る」という概念と関連がある。パウロはしばしばこの衣服の比喩を用いた（ローマ 13: 14、エペソ 4: 22 と 24 節と 25 節と 31 節、コロサイ 3: 10 と 12 節と 14 節を参照）。それは、（ユダヤの儀式 *Bar Mitzvah* と同じように）少年が子供用のトーガ（訳者注：古代ローマ市民の着ていたゆるやかな外衣）を大人用のトーガと交換することで成年市民と（公に認められるように）なるというローマの通過儀式を指すのかも

しれない。それでこのことは、私達が(神の子として)成年に達し、そして成年相続人となることを象徴しているのだ。

3: 28 ユダヤ教徒化した者達が強調した(人間の種類の)違いは今やキリストにあって完全に取り除かれた。クリスチャンになることにおいては誰にとっても障害はない。異邦人や奴隷や女性に対するユダヤ人の傲慢さは完全に取り除かれた。(人間の種類の)違いは救いにおいては無意味である(ローマ3: 22、I コリント12: 13、コロサイ3: 11を参照)が、これは私達がもはや男でも女でも、奴隷でも自由人でも、ユダヤ人でもギリシャ人でもないという意味ではない。それらの違いは今でもあり、これらの違いについて述べている聖書箇所もあるが、クリスチャンになることにおいては障害はない。自己義認的で律法遵守主義の偏見の強い人々の作りあげた障害をキリストはきっぱりと打ち砕いてくださった。ハレルヤ！

Manfred T. Brauch 著 *Abusing Scripture* の 68 ページ(と F. F. Bruce 著 *The Epistle to the Galatians* の 187 ページ)は、3つの対照的なグループが、古代のシナゴーク(ユダヤ教の礼拝堂)でのユダヤ人男性の、女性や奴隷や異邦人に造られなかったことを神に感謝する祈りを反映していると主張している。キリストにある新しい真実はゆがめられ、紀元1世紀のユダヤ教の偏見が明らかとなった。「キリストにある」は全てに優先するのだ！

特別なトピック: 人種主義

I. 導入

- A. これは墮落した人類による、彼らの社会の実情の普遍的表現である。これは、他者に依存しようとする人類のエゴ(わがまま)である。人種主義はあらゆる点で現代の現象であると言える。また、国家主義(つまり部族[民族]主義)はそれよりも古い表現である。
- B. 国家主義はバベルの塔で始まり(創世記11章)、元々はいわゆる人種の始祖となった(創世記10章)ノアの3人の息子達に関連がある。しかし聖句から、人類がひとつの源(始祖)から出たことは明らかである(創世記1~3章と使徒行伝 17: 24-26 を参照)。
- C. 人種主義は数多い偏見のひとつに過ぎない。その他の偏見としては(1)学歴自慢(2)社会的・経済的傲慢(3)自己正当化的な宗教的律法尊重主義(4)原理主義的な政治協力主義、などがある。

II. 聖書中の資料

A. 旧約聖書

1. 創世記 1: 27 人類、つまり男性と女性は神のお姿に似せて造られたので、その点で彼らは特別である。それはまた個人の価値と尊厳も表している(ヨハネ 3:16 を参照)。
2. 創世記 1: 11-25 ここでは成句「その種類に応じて」が10回も用いられている。これは人種差別を支持するために用いられてきた。しかし文脈から、これが人間ではなく動植物について述べていることは明らかである。

3. 創世記 9: 18-27 これは人種的優越性を支持するために用いられてきた。神がカナンを呪われなかったことを覚えておかなければならない。彼の父ノアは泥酔し昏睡した状態から目覚めた後に彼を呪った。聖書には神が確かにこの神名濫用を見過ごされカナンを呪われたという記述は全くない。神がそうされたときでさえ、このことは黒色人種に影響を及ぼさなかった。カナンはパレスティナに住む人々の父であった。そしてエジプトの壁画は彼らが黒人ではなかったことを示している。

4. ヨシュア 9: 23 これはある人種が他の人種に仕える宿命にあることを示すために用いられてきた。しかし文脈によれば、ギベオン人はユダヤ人と同人種である。

5. エズラ 9-10 章とネヘミヤ 13 章 これは人種的意味で用いられてきた。しかし文脈によれば、結婚は人種(の違い)ではなく宗教的理由によって禁止された(彼らはノアと同じ息子から出た。創世記 10 章)。

B. 新約聖書

1. 福音書

a. イエスはユダヤ人とサマリア人との憎しみを何度も挙げられ、人種的な憎しみがふさわしくないことを示された。

(1) 良きサマリア人のたとえ話(ルカ 10: 25-37)

(2) 井戸端の女(ヨハネ 4: 4)

(3) とても感謝している重い皮膚病の人(ルカ 17: 7-19)

b. 福音は全ての人のためのものである。

(1) ヨハネ 3: 16

(2) ルカ 24: 46-47

(3) ヘブル 2: 9

(4) 黙示録 14: 6

c. 天の御国には全ての人がいるであろう。

(1) ルカ 13: 29

(2) 黙示録 5 章

2. 使徒行伝

a. 使徒行伝 10 章は神の普遍的愛と福音の普遍的メッセージをはっきりと述べている。

b. ペテロは使徒行伝 11 章で自分の行動を非難されたが、この問題は使徒行伝 15 章のエルサレムの集会が行なわれるまでは解決されなかった。紀元 1 世紀にはユダヤ人と異邦人との対立はとても激しかった。

3. パウロの手紙

a. キリストのうちには妨げがない。

(1) ガラテヤ 3: 26-28

(2) エペソ 2: 11-22

(3)コロサイ 3: 11

b. 神は人に対してえこひいきをなさない。

(1)ローマ 2: 11

(2)エペソ 6: 9

4. ペテロの手紙とヤコブの手紙

a. 神は人に対してえこひいきをなさない。I ペテロ 1: 17

b. 神は分け隔てをなさないのので、御自分の人々に対してもえこひいきをなさない。ヤコブ 2: 1

5. ヨハネの手紙

信者の責任についての力強い発言のひとつは I ヨハネ 4: 20 に見られる。

Ⅲ. 結論

A. 人種主義はそれ自体があらゆる種への偏見であるので、神の子供には全くふさわしくない。ここに、1964年にニューメキシコ州グロリエタで開催されたクリスチャンいのち委員会のフォーラムでのヘンリー・バーネットのスピーチの引用を挙げる。

「人種主義は遺伝する。なぜならそれは非科学的であることは言うまでもなく、非聖書的で非クリスチャン的であるからだ。」

B. この問題はクリスチャンに、自らのキリストに似た愛と赦しと失なわれた世界への理解を示す機会を与える。クリスチャンがこれを拒むと自らの未熟さをさらすことになり、悪いものが信者の信仰と確信と成長を遅らせる機会を与えることになる。それはまた、キリストのもとに来る失なわれた人々にとっての妨げとなりうるだろう。

C. 私に何ができるだろうか？(クリスチャンいのち委員会配布用冊子「人種関係」からの抜粋)

個人レベルで

人種に関する問題の解決におけるあなた自身の責任を受け入れなさい。

祈り、聖書の学び、他人種の人々との交わりを通して、あなたの生活からの人種差別の撤廃に努めなさい。

人種についてのあなたの信念、特に人種差別の気持ちを起こさせる考え方に同調しないという決意を表明しなさい。

家族生活で:

他人種の人々への態度作りが家族に及ぼす影響の重大性を認識しなさい。

子供達と親達が人種問題について家庭外で聞いたことを話し合うことによって、クリスチャン的な態度作りを試みなさい。

親達は他人種の人々へのクリスチャン的な態度の模範を示すように注意すべきである。

人種の家系間の家族の友好的関係を作る機会を持つように試みなさい。

教会で:

人種に関する聖書的真理を説教あるいは教えることによって、教会は社会全体に模範を示す良い場所となりえます。

新約聖書に登場する教会に人種的な障壁が見られなかった(エペソ 2: 11-12 とガラテヤ 3 章 26-29 節)のと同様に、礼拝、交わり、教会を通した奉仕は全ての人に開放されていることをはっきりと認識しなさい。

日々の生活で:

職場で全ての人種差別が克服されるように援助しなさい。

権利と機会の平等を守るあらゆる種類の共同体組織を通して活動しなさい。そのとき、非難の対象は人ではなく人種問題であるということを覚えておきなさい。その目的は理解を促すことであり、気まずさを生むことではありません。

賢明だと思えるなら、一般の公教育機関内に交わりの場を設けるためと人種関係の向上のための特別な行動のために、有識者で特別委員会を結成しなさい。

立法府とその構成議員達が、人種的正義を全うし、政治的圧力による偏見の助長に反対する法律を制定できるように助ける。

差別的な内容のない法律の制定に努めている官吏を推挙する。

暴力を避け、法律に敬意を払い、法構造が差別を助長する人々にとって人種差別の道具とならないように、クリスチャン市民としてできることは全てしなさい。

全ての人々との関係においてキリストのご精神とお心を模範としなさい。

「というのはあなたがたは皆キリスト・イエスにあって一つだからです」 人類が皆アダムにあって一つである(ローマ 5: 12 以降)のと同じように、人類は皆潜在的にキリストにあって一つである(ローマ 5: 18 を参照)。唯一の障害は個人的な悔い改めとキリストへの信仰である(マルコ 1: 15、使徒行伝 3: 16 と 19 節、20: 21 を参照)。

この集団強調は団体としてのイスラエルの概念ととてもよく似ている。今や私達はひとつの新しい集団単位、つまり教会である(ヨハネ 17 章、ローマ 12: 4 と 5 節、I コリント 12: 12 以降)。

3: 29「もし」 ここでは、「もし」は第一種条件文の冒頭にあり、著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定されている。

「あなたがたがキリストに属するなら、あなたがたはアブラハムの子孫であり、約束による相続人です」 イスラエルの国家つまり民が全て真に霊的なイスラエルであるわけではなく(6: 16、ローマ 2: 28-29 と 9: 6 を参照)、真にイスラエルである人々は全て信仰によってそうであるということなのだ。従って、ユダヤ人と異邦人の間にはもはや違いはない。違いはメシアへの信仰を持つ人々と持たない人々の間にだけある。神はえこひいきをなさらない。神の1度限りの普遍的で喜ばしい、人類の救いの御計画は悔い改めと、十字架にかかれた御子への信仰である。信仰により応答する人々は神の子および相続人とされるのだ(テトス 3: 7 を参照)! ユダヤ人と異邦人の間にはもはや、旧約聖書に記されているような違いはない。

この新しい真実は国家のおよび地理的預言にも影響を与える。ユダヤ人と異邦人との違いはもはや無意味である。今や違いは信じていないか信じているかである。イエスを含む新約聖書の著者達の中で旧約聖書のイスラエルへの国家的預言を再主張する者はない。パレスティナとエルサレムはもはや神の御業の中心ではない。全世界は新しい聖地である。エルサレムはもはや特別な聖なる都市ではない。それは今や「新しいエルサレム」(黙示録 3: 12、21: 2 と 10 節を参照)であり、天国の象徴なのだ。旧約聖書の預言を究極の未来の真実として注目あるいは拡大解釈する体系神学に注意せよ！

ここに私の注解書の黙示録編の導入部からの抜粋(1-2 ページ)を示す。

「最初の緊張(旧約聖書の人種的、国家的、地理的区分対全世界の全ての信じる人々)」

旧約聖書の預言者達は、エルサレムの中心に位置するパレスティナにユダヤの王国が回復され、そこで地上の全ての国々がダビデのような支配者を賛美し仕えるために集まることを予言したが、イエスも新約聖書の使徒達もこの予言で言われている出来事には注目していない。旧約聖書は神の啓示による書(マタイ 5: 17-19 を参照)ではないのか？新約聖書の著者達は重要な終りの時の出来事を書き落したのか？

世の終りについてのいくつかの情報源がある：

1. 旧約聖書の預言者達(イザヤ、ミカ、マラキ)
2. 旧約聖書の黙示的書の著者達(エゼキエル37~39章、ダニエル書、ゼカリヤ書を参照)
3. 聖書外典であるユダヤ教の黙示的書の著者達(例えば、ユダの手紙でも暗示されている I エノク)
4. イエス御自身(マタイ24章、マルコ13章、ルカ21章を参照)
5. パウロの著作物(I コリント15章、II コリント5章、I テサロニケ4~5章、II テサロニケ2章を参照)
6. ヨハネの著作物(I ヨハネと黙示録)

これら全ては私達に終りの時に関する事(出来事、時系列、人)をはっきりと教えているのか？もしそうでないなら、それはなぜか？それらは全て(聖書外典であるユダヤ教の書を除く)神の啓示による書ではないのか？

聖霊は旧約聖書の著者達に、彼らが理解できる用語と区分を用いて真理を明らかにされた。しかし、進歩的な啓示を通して聖霊はこれらの終末論的概念を普遍的な概念に拡張された(キリストの謎、エペソ 2: 11~3: 13 を参照、10: 7 の特別なトピックを見よ)。ここに関連する数例がある：

1. 旧約聖書では都市エルサレムは神の人々(Zion)の比喩として用いられているが、新約聖書では、悔い改めて御自分を信じた全ての人々を神が受け入れられたこと(黙示録 21~22 章の新しいエルサレム)を表現する用語として用いられている。以前にはユダヤ人が住んでいてユダヤ王国の首都であった、文字通りの実体ある都市の新しい神の人々(ユダヤ人信徒と異邦人信徒)への神学的拡張は、創世記 3: 15 で墮落した人類を救う神の約束に予め示され

ている。アブラハムの召し(創世記 12: 1-3 を参照)でさえ異邦人と関係があった(創世記 12 章 3 節、出エジプト 19: 5 を参照)。

2. 旧約聖書では神の人々の敵は古代近東地域の周辺諸国であったが、新約聖書では全ての未信者、反神思想を持つ者達、サタンの啓示を受けた者達も「敵」とみなされている。戦いは地理的・地域的衝突から全世界的・宇宙的衝突へと拡大した(コロサイ人への手紙を参照)。
3. 旧約聖書にとっても不可欠な、土地に関する約束(創世記の家父長への約束、創世記 12: 7、13: 15、15: 7 と 15 節、17: 8 を参照)は今や全地に対するものとなった。新しいエルサレムは近東地域だけに独占的に与えられるのではなく、再び造られた地に与えられるのだ(黙示録 21~22 章を参照)。
4. 旧約聖書の拡張された予言的概念の例としては他にこのようなものがある:
 - a. アブラハムの子孫は今や霊的に割礼を受けている(ローマ 2: 28-29 を参照)。
 - b. 異邦人も今では契約の民とみなされている(ホセア 1: 10、2: 23[ローマ 9: 24-26 で引用]、レビ 26: 12、出エジプト 29: 45[Ⅱコリント 6: 16-18 と出エジプト 19: 5 で引用]、申命記 14: 2[テトス 2: 14 で引用]を参照)。
 - c. 神殿は今やイエスであり(マタイ 26: 61、27: 40、ヨハネ 2: 19-21 を参照)、彼を通して地域教会(Ⅰコリント 3: 16)や信徒個人(Ⅰコリント 6: 19)が神殿である。
 - d. イスラエルとその特徴を言い表した旧約聖書の聖句でさえ今や神の人々(ローマ 9: 6 とガラテヤ 6: 16 の「イスラエル」、Ⅰペテロ 2: 5 と 9-10 および黙示録 1: 6 の「司祭の王国」を参照)全てを言い表している。

予言的モデルは完成され、拡張され、そして今やより総(包)括的である。イエスと、新約聖書を書いた使徒達は旧約聖書の預言者達とは異なる方法で終りの時を示している(Martin Wyngaarden 著 *The Future of The Kingdom in Prophecy and Fulfillment* を参照)。旧約聖書モデルを文字通りのもの、つまり規範的なものにしようとする現代の解釈者は黙示録をユダヤ教の書そのものにし、イエスとパウロの言葉の意味を無理やり霧のようにあいまいにしているのだ！新約聖書の著者達は旧約聖書の予言をゆがめず、その究極の宇宙の意味を示している。イエスとパウロの終末論には組織的な論理体系はない。それらの目的は救いと牧会(霊的指導)である。

しかし、新約聖書の中にさえ緊張はない。終末論的出来事の体系化はない。驚くべきことに、多くの意味で黙示録はイエスの教え(マタイ 24 章、マルコ 13 章を参照)の代わりに旧約聖書の終りの時の暗示を用いているのだ！それはエゼキエルとダニエルとゼカリヤの始めた文学ジャンルに属するが、発展したのは聖書外典(ユダヤ教の黙示文学)の書かれた時期であった。これはヨハネが旧約聖書と新約聖書とを関連づける方法だったのかもしれない。それは人類の反逆と神の救いの御業の太古の様式を示しているのだ！しかし、黙示録に旧約聖書の用語と人物と出来事が登場するのに、それら(旧約聖書の用語と人物と出来事)が紀元 1 世紀のローマの価値基準に従って再解釈されていること(黙示録 1: 7 を参照)は言うておかなければならない。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 「霊を受ける」とはどのような意味か？
2. なぜパウロは自らの議論においてアブラハムに注目したのか？
3. 用語「呪い」は私達に、ユダヤ教徒化した者達に、そして全ての人々にどのように適合するか？
4. パウロは 17 節において時系列上の記録の誤りを犯したか？犯したならば、あるいは犯していないならばそれはなぜか？
5. 19 節に挙げられている、律法が約束に劣る4つの理由を述べなさい。
6. 23-24 節にある、神が律法をつくられた2つの目的を挙げなさい。
7. 現代の教会について 28 節の意味することを説明しなさい。

ガラテヤ人への手紙4章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
奴隷と子	子と相続人	律法の下での奴隷状態; 神の子の自由	律法の目的	神の子
(3: 21~4: 7)	(3: 26~4: 7)		(3: 21~4: 7)	
3: 26~4: 7	3: 26~4: 7			
		4: 1~7	4: 1~5	4: 1~7
			4: 6~7	
パウロのガラテヤ人への関心	教会への心配		パウロのガラテヤ人への関心	
4: 8~11	4: 8~11	4: 8~11	4: 8~11	4: 8~11
		パウロとの関係についてのガラテヤ人への主張		個人的主張
4: 12~20		4: 12~20	4: 12~16	4: 12~20
			4: 17~20	
ハガルとサラの例え話	2つの契約	最終証明	ハガルとサラの例	2つの契約: ハガルとサラ
4: 21~5: 1	4: 21~31	4: 21~5: 1	4: 21~27	4: 21~31
			4: 28~31	

第三読書サイクル(viiページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落

2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

文脈の洞察

- A. この章は大きく3つの部分に分けられる。
1. 1～11節(あるいは1～7節)では、信仰による神の成年相続人としての異邦人についての議論が続いており、この世で粗野とみなされている奴隷については述べられていない。1～11節の内容はローマ 8: 1-17 で強調されていることと非常によく似ている。
 2. 12～20節(あるいは8～20節)はパウロの個人的経験の告白である。
 3. 21～31節は、旧約聖書に記されている、アブラハムの最初の2人の息子達の例え話である。
- B. パウロは2つの文化の比喩を用いて旧約聖書の律法の目的と、新約聖書における信徒と律法との関係を強調している。
1. 子供とその保護者に関するローマの律法
 2. アブラハムの人生に関するラビ(ユダヤ教の指導者)の予型論
- C. この章は御子イエスと聖霊の密接な御関係も説明している(4: 6を参照)。
1. イエスは父なる神に求められ、そしてイエスは聖霊を送られる。
 - a. イエスは聖霊を送られる、ヨハネ 15: 26 と 16: 7
 - b. 父なる神は聖霊を送られる、ヨハネ 14: 26
 - c. 父なる神と御子から、ルカ 24: 49
 - d. イエスが父なる神と御自身が一体であることを語られたので、聖霊はお2人(父なる神と御子)と御自身が一体であることを語られる。
 2. 「同じ種類のもう一人」。聖霊に最もふさわしいお名前は「もう一人のイエス」である。
 - a. お2人とも父なる神から「送られた」
 - 1) 御子—ガラテヤ 4: 4
 - 2) 聖霊—ガラテヤ 4: 6
 - b. お2人とも「真理」と呼ばれた
 - 1) 御子—ヨハネ 14: 6
 - 2) 聖霊—ヨハネ 14: 17、15: 26、16: 13
 - c. お2人とも「仲裁者」と呼ばれた
 - 1) 御子— I ヨハネ 2: 1
 - 2) 聖霊—ヨハネ 14: 16 と 26 節、15: 26、16: 7
 - d. イエスの御名で呼ばれた聖霊(NASB)
 - 1) 使徒行伝 16: 7—「イエスの霊」

- 2) ローマ 8: 9-「神の霊. . . キリストの霊」
- 3) IIコリント 3: 17-「主は霊である. . . 主の霊」
- 4) IIコリント 3: 18-「主、聖霊」
- 5) ガラテヤ 4: 6-「御子の霊」
- 6) ピリピ 1: 19-「イエス・キリストの霊」
- 7) I ペテロ 1: 11-「キリストの霊」

e. お2人とも信徒の内に住まわれる

- 1) 御子-マタイ 28: 20、ヨハネ 14: 20 と 23 節、15: 4、17: 23、ローマ 8: 10、IIコリント 13: 5、ガラテヤ 2: 20、エペソ 3: 17、コロサイ 1: 27
- 2) 聖霊-ヨハネ 14: 16-17、ローマ 8: 11、I ペテロ 1: 11
- 3) 父なる神-ヨハネ 14: 23、17: 23、IIコリント 6: 16

f. お2人とも「聖なる方」と言い表されている

- 1) 聖霊-ルカ 1: 35
- 2) 御子-ルカ 1: 35、14: 26

3. 新約聖書全体では、聖霊はしばしば、父なる神と御子の伝道の御働きとを関連づける用語で言い表されている(使徒行伝 16: 7、ローマ 8: 9、IIコリント 3: 17-18、ピリピ 1: 19 を参照)。

D. 例え話と予型論の定義(4: 21-31)

1. 例え話は各文脈の隠れた、より深いレベルの意味を探り出す。それは全く関連のない文脈から意味を取り入れて、原著者あるいは彼の時代の意図した意味あるいは御言葉全体の要旨さえ明らかにする。
2. 予型論は、お一人の神なる著者と一つの神の御計画に基づいて、聖書の統一性に注目しようとする。旧約聖書と新約聖書の類似性は真理を予示する。これらの類似性(ホセア 11 章 1 節)は聖書全体の解釈から自然に明らかになってくる(ローマ 15: 4、Iコリント 10: 6 と 11 節、I ペテロ 1: 12 を参照)。

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 4: 1-7

¹つまりこういことです。相続人は子供である間は全ての物の持ち主であっても奴隷と全く違いはなく、²父親が定めた期日までは保護者や管理人の下にいます。³同じようにわたしたちも、子供である間はこの世の自然物の下に拘束されていました。⁴しかし時が満ちて、神は御子を、女から生まれたものとして、そして律法の下に生まれたものとしてお遣わしになりました。⁵それは、律法の下にある人々を救い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。⁶あなたがたが子であるので、神は「アバ！父よ！」と叫ぶ御子の霊をわたしたちの心に送ってくださったのです。⁷で

すから、あなたがたはもはや奴隷ではなく、子なのです。そして子ならば、神を通して定められた相続人なのです。

4: 1

NASB、NKJV 「つまりこういうことです」

NRSV 「わたしの言いたいのはこういうことです」

TEV 「つまりこういうことです」

NJB 「言い換えるとこういうことです」

パウロはこの標準的な著述の手法を用いて前の主題についてさらに議論を展開した(3: 17 と 5 章 16 節を参照)。

「相続人」 信徒はキリストにあって神の相続人であるという大いなる真理はガラテヤ 3: 7、16 節、24-26 節、29 節の中心である(ローマ 8: 17 を参照)。これと同じことはガラテヤ 4: 1、5 節、6 節、7 節、28-31 節でも強調されている。アブラハムの真の子孫は少数部族ではなく霊的な人々である(ローマ 2: 28-29、ピリピ 3: 3、コロサイ 2: 11 を参照)。

「子供である」 これは乳幼児を意味するギリシャ語の用語で、このような意味で用いられていた:

1. 霊的乳児
2. 法的弱者

古代地中海文化では、少年から成年男子への通過儀礼を行う年齢は様々であり、その儀式は主要な文化的・宗教的行事であった。

1. ユダヤ人の文化では 13 歳
2. ギリシャ人の文化では 18 歳
3. ローマ人の文化では通常 14 歳

4: 2「保護者や管理人の下にいます」 ガラテヤ 3: 22-25 には私達は「律法の下に」いたとあるが、この「律法」は(1)私達を保護・監視する看守[3: 22-23 を参照](2)成年後見人[3: 24-25 を参照]に例えられている。しかし、4章ではこの比喻は「保護者」と「管財人」に変わる。ローマの律法では 14 歳に達した少年達は法的保護者の保護下に置かれた(3: 23-25 を参照)。14 歳から 25 歳まで彼らの財産は管財人によって管理された(4: 2 を参照)。エバを知った」。パウロはこれらの正確な用語を用いてこのローマの慣習について述べている。

「父親が定めた期日までは」 この聖句は、ローマ人の父親達には自分の息子が少年から成年男子に変わる時期を判断する自由があったことのさらなる証拠となる。これはローマの律法に特有の特徴である。それは、御子が私達を成熟させてくださる時期を父なる神が選んでおられることを

意味する(4節を参照)。

4: 3「わたしたちが子供である間は」 代名詞「わたしたち」は次のような人々を指していたようだ:

1. モーセの律法の保護下にあったユダヤ人
2. 福音を聞く前にすでに高齢であったユダヤ人と異邦人
3. 異邦人の信じていた異教

この文脈ではその語は「相続人」(1節)、つまり例外2に関連するものであったようだ。

NASB 「この世の自然物の下に拘束されていました」

NKJV 「この世の自然物の下に拘束されていました」

NRSV 「この世の自然の霊の奴隷でした」

TEV 「宇宙を支配する霊の奴隷でした」

NJB 「わたしたちはこの世の自然原則の奴隷も同然でした」

この聖句は迂言的(婉曲的)過去完了受動態分詞である。この(文法)構造は子としての私達の定まった地位を強調している。「自然物」[*stoicheia*]は本来「一列に並んで立つ」という意味であった。その語はパウロの時代のギリシャローマ世界においては幅広い意味を持っていた:

1. 子供のしつけあるいは初等教育におけるあらゆる科目の基本(ヘブル 5: 12 と 6: 1 を参照)
2. 実体的宇宙の基本的構成物—大気、水、火、大地(Ⅱペテロ 3: 10 と 12 節を参照)。これらはギリシャ人によってしばしば神格化された。
3. 天体(Ⅰエノク 52: 8-9 を参照)。初期教会の教父達はコロサイ 2: 8 と 20 節におけるその語の用法をこのように解釈した。

その語の意味に最も近いものを3. とすると間接的な意味は「天体の背後に霊的力がある」ということになるが、これはガラテヤ 4: 3 と 8-10 節の解釈に影響を与える一般的な用法である(コロサイ 2: 18-20 とガラテヤ 3: 19 の天使達を参照)。しかし、自著 *Christ and the Powers* の中で Hendrik Berkhof は、これらの力は私達の自然の墮落した世界において神から離れた人類を統一する傾向のある非人間的構造(政治、民主主義、社会階層、社会一般の事柄、スポーツ、哲学等)であると言っている(32 ページを参照)。この解釈は聖書の例に適合する。パウロは、成年後見人としての律法(3: 22~4: 7)と奴隷の使用人としての *stoicheia* とを対比させていた(4: 3 を参照、4: 8 の解説を見よ)。

特別なトピック: パウロの *Kosmos*(世界)の使用

パウロは用語 *kosmos* をいくつかの意味で用いている。

1. 全ての創造された秩序(ローマ 1: 20、エペソ 1: 4、Ⅰコリント 3: 22、8: 4 と 5 節を参照)
2. この惑星(Ⅱコリント 1: 17、エペソ 1: 10、コロサイ 1: 20、Ⅰテモテ 1: 15、3: 16、6: 7 を参照)
3. 人類(1: 27-28、4: 9 と 13 節、ローマ 3: 6 と 19 節、11: 15、Ⅱコリント 5: 19、コロサイ 1: 6 を

参照)

4. 神から離れて組織され機能する人類(1: 20-21、2: 12、3: 19、11: 32、ガラテヤ 4: 3、エペソ 2: 2 と 12 節、ピリピ 2: 15、コロサイ 2: 8 と 20-24 節を参照)。これはヨハネの用法と非常によく似ている(I ヨハネ 2: 15-17)。
5. 現代の世界構造(7: 29-31、ガラテヤ 6: 14 を参照、パウロがユダヤの社会構造について述べたピリピ 3: 4-9 と類似)

ある意味でこれらは重複していて、各用法を分類するのは難しい。この用語は、パウロの思想の多くがそうであるように、予め定められた定義によってではなく直前の文脈によって定義されなければならない。パウロの術語は流動的であった(James Stewart 著 *A Man in Christ* を参照)。彼は組織神学を建て上げようとしていたのではなく、キリストを(世に)示したのだ。彼は全てを変えたのだ!

4: 4「しかし時が満ちて」 これは、神が歴史を支配され、キリストが神の時に来られることを意味している(マルコ 1: 15、エペソ 1: 10、I テモテ 2: 6、テトス 1: 3 を参照)。解説者の多くはこの聖句が次に示すような事柄に関連があると見ている:

1. ローマの平和
2. ローマの幹線道路と船舶
3. 地中海世界における、真の神とその神との交わりへの宗教的・道徳的探求

この意見は 2 節の「父親が定めた期日までは」と関連がある。新しい世はキリストの御業によって神の時に始められ、新しい契約が来ると(救いの手段としての)古い契約はキリストにあって過ぎ去るのだ。

「神は御子をお遣わしになりました」 「送る」はギリシャ語の用語 *apostello* であり、(英単語)「使徒」はこの語から派生した。これと同じ聖句は 6 節にあり、そこでは父なる神が聖霊をお遣わしになりましたとある。三位一体の3人のお方について4~6節で述べられていることに注意せよ。用語「三位一体」は聖書には見られないが、その概念は繰り返し見られる。以下の特別なトピックを見よ。

神は御子をお遣わしになったという事実は御子がすでに天におられたということの意味を意味していて、それは御子の神性を表している(ヨハネ 1: 1-3、14 節、18 節、I コリント 8: 6、ピリピ 2: 6、コロサイ 1: 15-17、ヘブル 1: 2 を参照)。ここにイスラエルの「一神教」との対立が見られる(申命記 4: 35 と 39 節、6: 4、33: 26、イザヤ 43: 10-11、45: 21-22、46: 9、エレミヤ 10: 6-7 を参照)。

特別なトピック: 三位一体

一つの文脈と一緒に述べられている三位一体の3人のお方全員の御業に注意しなさい。用語「三位一体」は Tertullian によって最初に用いられ、聖書の用語ではないが、その概念はどこにで

も見られる。

A. 福音書

1. マタイ 3: 16-17、28: 19(および並列文)
2. ヨハネ 14: 26

B. 使徒行伝—使徒行伝 2: 32-33、38-39 節

C. パウロ

1. ローマ 1: 4-5、5: 1 と 5 節、8: 1-4 と 8-10 節
2. I コリント 2: 8-10、12: 4-6
3. II コリント 1: 21、13: 14
4. ガラテヤ 4: 4-6
5. エペソ 1: 3-14、17 節、2: 18、3: 14-17、4: 4-6
6. I テサロニケ 1: 2-5
7. II テサロニケ 2: 13
8. テトス 3: 4-6

D. ペテロ— I ペテロ 1: 2

E. ユダ—ユダ 20-21 節

神の複数形は旧約聖書の中に暗示されている。

A. 神の複数形の使用

1. 名前 *Elohim* は複数形であるが、神を指して用いられるときには常に単数形動詞を伴う。
2. 創世記 1: 26-27 と 3: 22 と 11: 7 の「われわれ」

B. 主の天使は神の可視的代表であった。

1. 創世記 16: 7-13、22: 11-15、31: 11 と 13 節、48: 15-16
2. 出エジプト 3: 2 と 4 節、13: 21、14: 19
3. 士師記 2: 1、6: 22-23、13: 3-22
4. ゼカリヤ 3: 1-2

C. 神と聖霊は分かれている、創世記 1: 1-2、詩篇 104: 30、イザヤ 63: 9-11、エゼキエル 37 章 13-14 節

D. 神(YHWH)とメシア(*Adon*)は分かれている、詩篇 45: 6-7、110: 1、ゼカリヤ 2: 8-11、10 章 9-12 節

E. メシアと聖霊は分かれている、ゼカリヤ 12: 10

F. 3人のお方全員はイザヤ 48: 16 と 61: 1 で述べられている。

イエスの神性と聖霊の御人格は、厳格で一神教徒の初期信徒達にとって問題となった。

1. Tertullian—御子は父なる神に次ぐ地位のお方であるとした。
2. Origen—御子と聖霊の神性は父なる神の神性に次ぐものであるとした。
3. Arius—御子と聖霊の神性を否定した。

4. 君主論—父なるただお一人の神、御子、聖霊の順に連続的に(お姿を)現されると信じた。三位一体は聖書的な資料の情報に基づいて歴史的に発展した明確な表現である。

1. イエスの完全な神性が父なる神の神性と等しいことは紀元 325 年にニケーアの公会議で承認された。
2. 聖霊の完全な御人格と神性が父なる神および御子の神性と等しいことはコンスタンチノーブルの公会議(紀元 381 年)で承認された。
3. 三位一体の原理はアウグスティヌスの著書 *De Trinitate* に全て表現されている。

ここに真の謎がある。しかし新約聖書は3人の永遠なるお方達の中にある神性は一つであることを認めているようだ。

「女から生まれた」パウロは、イエスの神性は認めるが人間性は否定するという、キリスト仮現説(訳者注:地上のキリストは天上の霊的実在者としてのキリストの幻影であるとする、紀元2世紀頃の説)を信じてグノーシス主義(訳者注:東洋・ギリシャ・ローマの宗教思想を混合した、神の直覚的認識の観念を中心とする紀元2世紀頃の思想。キリスト教会で異端とされた。)を唱える者達(エペソ人、コロサイ人、使徒行伝、Iヨハネ)がその当時いたことを多分考慮したのだろうが、イエス・キリストの完全な人間性を強調した。しかし、この異端思想がガラテヤ人への手紙のパウロの執筆に影響した証拠はほとんどない(3節を参照)。

聖句「女から生まれた」は明らかに創世記 3: 15 とイザヤ 7: 1 に登場するユダヤ教徒化した者達を思い出させる。ヘブル人への手紙の著者はこのことを自身の神学における主要な論点としている(ヘブル 2: 14 と 17 節を参照)。この聖句と非常によく似ていて、イエス・キリストの完全な人間性を強調しているが罪の性質については述べていない聖句がローマ 8: 3 とピリピ 2: 7 に見られる。イエスが神そのもので完璧な人でいらっしやることは、初期教会で告げ知らされた福音の主な真理である(Iヨハネ 4: 1-3 を参照)。

驚くべきことに、イエスの処女降誕は、マタイの福音書とルカの福音書のイエスの御誕生について述べられている段落においては強調されていないばかりではなく行間にさえ述べられていない。多分それは異端者達によってあまりにも容易に誤解され、オリンポス山の神々の神話と結びつけられているのだろう。

「律法の下に生まれた」これはイエスがユダヤの律法の下にユダヤの伝統の中でお生まれになったことを示している(ローマ 1: 3 を参照)。用語「律法」には冠詞が付いていないが、文脈はその語がモーセの律法を指しており、イエスが従われていた *stoicheia* であるに違いないことを示している。イエスはローマの律法にも従われていた。この聖句はまた、イエスが御自分から進んでお受けになった、人類に及ぶ「律法の呪い」とも関連があるのかもしれない(3: 10-13 を参照)。

4: 5「御子が律法の下にある人々を救い出されるために」「救う」(アオリスト能動態仮定法動詞)

は 3: 13 で(アオリスト能動態直説法動詞)神がキリストの御生涯と死と復活を通して(1)罪の奴隷状態から全人類を(2)モーセの律法からユダヤ人を、そして *stoicheia* から異邦人を買戻されることを言い表すために用いられている。これは人類の救いよのなさ(ローマ 1: 18~3: 31 とエペソ 2:1-3 を参照)と神が恵みをくださること(マルコ 10: 45 とエペソ 2: 4-6 を参照)を示している。この文脈ではパウロが 3: 19 のモーセの律法について述べているのか、それとも人の特権に関する一般的意味での法について述べているのかを知ることは難しい(3: 21 を参照)。3: 13 の特別なトピック: 贖いと救いを見よ。

NASB、NKJV 「わたしたちが神の子となるように」

NRSV 「わたしたちが子となるように」

TEV 「わたしたちが神の子となるように」

NJB 「わたしたちが子となるように」

パウロは、信徒がキリストへの信仰を通してアブラハムの成年相続人として受ける特権についての議論を続けた。パウロは私達の救いの家族的比喻として「養子縁組する」を用いたが、一方ヨハネとペテロは「新しく生まれる」を用いた。その養子縁組の比喻はローマの文化では主に2つの意味で用いられた。ローマの律法では養子縁組は非常に困難であった。長く煩雑で費用のかかる法的手続きの後、一旦発効すれば養子縁組によって養子にはいくつかの特別な権利と特権が与えられた。

1. 負債は全て帳消しにされた。
2. 告発された罪は全て却下された。
3. 養子は新しい父親によって死刑に処せられることはなくなった。
4. 養子は新しい父親によって相続権を奪われることはなくなった。

法的な意味では、養子は完全に新しい人であった。パウロはこのローマの法的手続きを用いることによって信徒のキリストにある安全について述べようとしていた(ローマ 8: 15 と 23 節を参照)。父親が子を公的に養子としたとき、子は公的かつ永久的に父親の相続人となった。また、その比喻は、毎年3月17日に行なわれる、少年が成年男子となる公式行事の中で用いられた。

4: 6「あなたがたが子であるので、神は御子の霊をわたしたちの心に送ってくださったのです」 ローマ 8: 14-17 と同様に、パウロは御子と聖霊(新しい保護者)をお送りになるという神の恵みの御業について繰り返し述べている。そのギリシャ語の聖句の正確な意味は明らかではない。聖霊は御子であることの証拠あるいは結果なのか? 「御子を通して私達は子となる」はガラテヤ 2: 15 から 4: 31 までの標語である。私達がクリスチャンとなること(2、5、14 節を参照)を述べるために3章に聖霊が非常に頻りに登場したことは興味深いことである。聖霊はここでは「御子の霊」と呼ばれている。このことは聖霊の2つの御業を示している:(1)キリストを慕い求めること(2)キリストに私達の内に住んでいただくこと(ヨハネ 16: 7-15 を参照)。御子と聖霊の御業は常に酷似している(こ

の章の導入部 C.を参照)。

「心」以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: 心

ギリシャ語の用語 *kardia* はセプトウアギンタと新約聖書の中でヘブルの用語 *leb*(BDB523)を反映する語として用いられる。この用語は様々な意味で用いられる(Bauer、Arndt、Gingrich、Danker 共著 *A Greek-English Lexicon* の 403~404 ページを参照)。

1. 実生活の中心、人に関する比喩(使徒行伝 14: 17、Ⅱコリント 3: 2-3、ヤコブ 5: 5 を参照)
2. 霊的生活の中心(つまり道德)
 - a. 神は心を知っておられる(ルカ 16: 15、ローマ 8: 27、Ⅰコリント 14: 25、Ⅰテサロニケ 2: 4、黙示録 2: 23 を参照)
 - b. 人類の霊的生活について用いられる(マタイ 15: 18-19 と 18: 35、ローマ 6: 17、Ⅰテモテ 1 章 5 節、Ⅱテモテ 2: 22、Ⅰペテロ 1: 22 を参照)。
3. 思索生活の中心(つまり知性、マタイ 13: 15 と 24: 48、使徒行伝 7: 23 と 16: 14 と 28: 27、ローマ 1: 21 と 10: 6 と 16: 18、Ⅱコリント 4: 6、エペソ 1: 18 と 4: 18、ヤコブ 1: 26、Ⅱペテロ 1: 19、黙示録 18: 7 を参照。Ⅱコリント 3: 14-15 とピリピ 4: 7 では心は精神と同意語である。)
4. 意志作用の中心(つまり意志、使徒行伝 5: 4 と 11: 23、Ⅰコリント 4: 5 と 7: 37、Ⅱコリント 9: 7 を参照)
5. 感情の中心(マタイ 5: 28、使徒行伝 2: 26 と 37 節、7: 54、21: 13、ローマ 1: 24、Ⅱコリント 2: 4、7: 3、エペソ 6: 22、ピリピ 1: 7 を参照)
6. 聖霊のお働きのための特別な場所(ローマ 5: 5、Ⅱコリント 1: 22、ガラテヤ 4: 6 を参照[つまり私達の心の中のキリスト、エペソ 3: 17])
7. 心は一個人を比喩的に表現する方法である(申命記 6: 5 を引用しているマタイ 22: 37 を参照)。心に関する思想、意志、行動は人間の型を全て明らかにする。旧約聖書にはこの語の驚くべき用法が見られる。
 - a. 創世記 6: 6 と 8: 21「神は心からお嘆きになった」、ホセア 11: 8-9 にも注目
 - b. 申命記 4: 29 と 6: 5「心と霊の全てをもって」
 - c. 申命記 10: 16「割礼を受けていない心」とローマ 2: 29
 - d. エゼキエル 18: 31-32「新しい心」
 - e. エゼキエル 36: 26、「新しい心」対「石の心」

「『アバ！父よ！』と叫ぶ」この聖句には父を意味するギリシャ語とアラム語の用語がある。用語 *Abba* は子と父との親密な家族関係を意味するアラム語の単語であり(マルコ 14: 36 とローマ 8 章 15 節を参照)、私達の使う「お父ちゃん」にととてもよく似ている。このような家族関連の表現は

イエスと父なる神との親密な御関係を強調している。神がキリストを送ってくださったことに対して私達が応答するので、私達はこれと同じ親密な関係を父なる神との間に持っているのである。真に私達は(神の)養子なのだ!

4: 7「ですから、あなたがたはもはや奴隷ではなく、子なのです。そして子ならば、神を通して定められた相続人なのです」これは第一種条件文であり、その意味は「あなたがたは子なのですから」である(TEV、NIV)。聖霊は私達を罪の奴隷状態、つまり罪に束縛された状態から解放し、神の子としてくださった(ローマ 8: 12-17 を参照)。これは私達の相続権を保障している(I ペテロ 1 章 4-5 節を参照)。

特別なトピック: 信徒の相続

聖書は、全てのものの相続人(ヘブル 1: 2 を参照)でいらっしゃるイエスとの家族関係によって信徒が多くを相続すること(使徒行伝 20: 32 と 26: 18、エペソ 1: 4、コロサイ 1: 12 と 3: 24 を参照)、そして以下に示すようなこと(ローマ 8: 17、ガラテヤ 4: 7 を参照)であることを述べている。

- 王国(マタイ 25: 34、I コリント 6: 9-10 と 15: 50、エペソ 5: 5 を参照)
- 永遠の命(マタイ 19: 29、ヘブル 9: 15 を参照)
- 神の約束(ヘブル 6: 12 を参照)
- 神が御自分の約束を守られること(I ペテロ 1: 4-5 を参照)

「神を通して」 KJV では「キリストを通して」となっている。より古いギリシャ語の原典では「神を通して」となっている。これは恵みの創始者なる神を強調している(ヨハネ 6: 44 と 65 節、ガラテヤ 4 章 9 節を参照)。原典によって表現は様々であるが、P⁴⁶、 \aleph 、A、B、C*では「神を通して」となっている。全ての表現例の中でこれが最も珍しく、他の表現例全ての起源となっている。UBS⁴はそれを階級 A(確定)としている。

NASB(改訂版)原典: 4: 8-11

⁸ところがあの頃、つまり神を知らなかったとき、あなたがたは本来神ではないものの奴隷でした。⁹しかし今は神を知っている、いやむしろ神に知られているのに、どうして無力で価値のない諸々の自然の霊たちのもとに再び戻り、再びそれらの奴隷になろうとするのですか。¹⁰あなたがたはいろいろな日、月、季節、年を見守っています。¹¹わたしは自分があなたがたのために労苦したことが無駄になったのではないかと、あなたがたのことを心配しています。

4: 8「ところがあの頃、つまり神を知らなかったとき」これはある定まった状態を強調する完了形能動態分詞である。解説者の中にはこれをユダヤ教の背景によって明らかにしようとする者もい

るが、神に疎外された異教徒であった異邦人の概念によって明らかにするほうがはるかによい（エペソ 2: 12-13、コロサイ 1: 21 を参照）。事実、全ての人類は被造物（詩篇 19: 1-5、ローマ 1 章 19-20 節）と内なる道徳的証拠（ローマ 2: 14-15 を参照）によって神を知る潜在能力を持っている。この知識は「自然的啓示」と呼ばれるが、聖書は私達全てとユダヤ人と異邦人がこの知識を拒んだと言っている（ローマ 3: 23 を参照）。

「知る」はヘブル語では個人間の親密な家族的関係の意味で、またギリシャ語では認識内容の意味で用いられているが、ここではギリシャ語での意味で用いられており、9 節ではヘブル語での意味で用いられている。

「あなたがたは本来神ではないものの奴隷でした」 偶像崇拜は無駄で無意味である（使徒行伝 17: 29 と I コリント 6: 9 を参照）。しかし、パウロは偶像崇拜のむなしさの背後に悪魔の働きがあると主張した（I コリント 10: 20 と黙示録 9: 20 を参照）。人類が悪魔的な者の奴隷の状態にあることは I コリント 12: 2 の動詞の中にも暗示されている。パウロは以下に示すいくつかのそれらしい事柄の中の一つについて述べようとしていたのかもしれない：

1. 3 節と 9 節の *stoicheia*
2. 異教の偶像
3. 異教の偶像の背後にいる悪魔
4. 律法主義と形式主義の中で YHWH に取って代わったユダヤの律法

4: 9「しかし今は神を知っている、いやむしろ神に知られているのに」 8 節の時間的要素は 9 節とは対照的である。9 節でパウロは 3: 1-5 と 19 節と 21 節および 4: 15 と同様に新たな強力で修辭学的な質問（形式）を用いた。9 節の「知る」(*ginosko*) はそれとは異なる、そして多分 8 節で用いられている用語 (*oida*) より関係のあるギリシャ語の用語として選ばれているが、コイネギリシャ語ではこの両者を区別することは難しい。この用語は神学的に、ヘブル語での個人関係の意味を持つ（創世記 4: 1 とエレミヤ 1: 5 を参照）。それらの新しい関係は神に関する事実に基づくものではなく、疎外されていた人々に神がキリストを通してお与えになった新しい契約に基づくものである（エペソ 2: 11~3: 13 を参照）。

NASB 「どうして無力で価値のない諸々の自然の霊たちのもとに再び戻ろうとするのですか」

NKJV 「どうして無力ではかない自然の霊たちのもとに再び戻ろうとするのですか」

NRSV 「どうして無力ではかない自然の霊たちのもとに再び戻ろうとするのですか」

TEV 「どうして自然を支配するそれらの無力ではかない霊たちのもとに再び戻ろうとするのですか」

NJB 「何もできず何も与えることのできないこれらのような自然の霊たちのもとにどうして再び戻ろうとするのですか」

これは旧約聖書の悔い改め(回心)の概念(*shuv*、BDB996)を反映するギリシャ語の用語の現在形能動態直説法動詞である。この節には 4: 3 と同様に用語 *stoicheia* がある。彼ら(*stoicheia*)は救いによって異教の奴隷をユダヤ教の奴隷と交換する。ユダヤ教と異教は *stoicheia* の取り扱いを受けるのだ(8 節の解説を見よ)! これらの墮落した世界の構造は救いをもたらすには全く不十分である。

stoicheia は「無力で価値のない」と表現されているが、コロサイ 2: 15 と 20 節でも同様に表現されている。

4: 10「あなたがたはいろいろな日、月、季節、年を見守っています」 これは継続する動作、この場合は個人的で几帳面な宗教的観測—つまりユダヤ教の暦(コロサイ 2: 16 を参照)を表す現在形中間態直説法動詞である。これらのガラテヤ人はある宗教(異教)の暦を他の宗教(ユダヤ教)の暦と交換していた。パウロは福音を理解してその真理をあらゆる状況に適用することができた。ガラテヤの教会の状況を見てパウロは律法主義と行いによる義に反対する必要を感じた。しかし、ローマ人への手紙 14 章でパウロは信仰の強い人々に、特定の日々に敬意を払う信仰の弱い人々を裁かないように勧めている(ローマ 14: 5-6 を参照)。ガラテヤ人への手紙ではそれは福音の正しい理解の問題であり、ローマ人への手紙ではそれはクリスチャンの交わりに関する関係がある。

4: 11

NASB 「わたしは自分があなたがたのために労苦したことが無駄になったのではないかと、あなたがたのことを心配しています」

NKJV 「わたしは自分があなたがたのために労苦したことが無駄になったのではないかと、あなたがたのことを心配しています」

NRSV 「わたしは自分があなたがたのために労苦したことが無駄になったのではないかと心配しています」

TEV 「わたしはあなたがたのことが心配なのです! わたしがあなたがたのために労苦したことは無駄になったのかもしれませんが」

NJB 「あなたがたのせいでわたしは自分があなたがたのために自分の時間を浪費したと感じています」

いくつかの現代語訳聖書では、この節はパウロがガラテヤの教会のために労苦したことについて述べている(JB と改訂版英訳聖書を参照)。しかし、この節はパウロのガラテヤの信徒自体に対する関心と関係があるのかもしれない(TEV を参照)。2つの可能性がある。

1. パウロは彼らの救いを疑っていたのではなく、むしろ根本的に自由な福音を彼らに広め、その中に住ませ、その恩恵にあずからせることの無益さを疑っていた。
2. パウロは彼らが人の行いを重んじて恵みを拒絶していたことを恐れていた(3: 4 と 5: 2-4 を参照)。

NASB(改訂版)原典: 4: 12-20

¹²兄弟たち、あなたがたにお願いします。わたしもあなたがたのようになったのですから、あなたがたもわたしのようになってください。あなたがたはわたしに悪いことをしませんでした。¹³知つての通り、わたしは病気になったことがきっかけであなたがたに初めて福音を告げ知らせました。¹⁴そしてわたしの体調のためにあなたがたにとって試練ともいえることがあったにもかかわらず、あなたがたはわたしをさげすんだりひどく嫌ったりせず、わたしを神の天使あるいはキリスト・イエス御自身であるかのように受け入れてくれました。¹⁵ところで、あなたがたに与えられた祝福はどこにあるのですか。わたしはあなたがたのために証言しますが、あなたがたはできることなら自分の目をえぐり出してわたしに与えようとさえしました。¹⁶それでは、わたしは真実をあなたがたに語つたためにあなたがたの敵となったのですか。¹⁷彼らが熱心になんかを探し求めるのは善意からではなく、あなたがたを締め出すことによって自分達をあなたがたが探し求めるようにしたいからなのです。¹⁸わたしがあなたがたとともにいるときに限らずいつでも、善意から熱心になんかを探し求められるのはよいことです。¹⁹わたしの子供たち、わたしはあなたがたの内にキリストが形づくられるまで、再び産みの苦しみを経験しています—²⁰できることならわたしは今あなたがたとともにいて、語調を変えて語りたいのです。というのは、わたしはあなたがたのことで困惑しているからです。

4: 12「兄弟たち、あなたがたにお願いします。わたしもあなたがたのようになったのですから、あなたがたもわたしのようになってください」この動詞は現在形中間態(異態)命令形である。この節には様々な解釈がある。

1. Williams 訳では「わたしの見解を受け入れてください」となっている。パウロは以前に、その当時ガラテヤ人の間にあった、行いによる義認(ユダヤ教)の傾向を受け入れたことから、信仰による義認という自らの見解を受け入れるよう彼らに求めた。

2. 研究者の中には、「わたしもあなたがたのようになったのですから」は、パウロが自分は何かを得ることができるよう全体的人にとって全体的のものになったと主張している I コリント 9: 19-23 を暗示しているのだと言う者もある。パウロはユダヤ人とともにいたときにはユダヤ人のように生活していた。パウロは異邦人とともにいたときには異邦人のように生活していた。しかし現実にはパウロは救いの手段としての律法を無視していた。彼は方法においては柔軟な考え方をしていたが、メッセージにおいてはそうではなかった。

「兄弟たち」はパウロが新しい話題に移ったことを示している。また、彼ら(ガラテヤ人)を「兄弟たち」と呼ぶことでパウロは自らの痛烈な批判の手を緩めた(19 節、1: 11、3: 15 を参照)。

「あなたがたはわたしに悪いことをしませんでした」研究者の中にはこの節が「過去にはあなたがたはわたしに悪いことをしませんでしたは今ではしています」を意味する負の発言を表現していると思っている者もあるが、一方で、ガラテヤの教会が自分と自分のメッセージを受け入れたことに

対する喜びをパウロが正の発言として表現しているとみる者もいる。この節は 13-15 節とともに解釈されるべきである。

4: 13「わたしは病気になったことがきっかけであなたがたに初めて福音を告げ知らせました」「初めて」と言っているのは、この手紙が書かれた以前の2度目を意味している。しかし、この聖句は、Ⅰテモテ 1: 13 の中と同様に、慣用的に「公的に」という意味を持つ。パウロは以下に示す理由でガラテヤの教会に行った。

1. 病気が回復するまでの時間を過ごすため
2. 病気のため彼はしばらくの間そこに滞在しなければならなかった。

(1) 14-15 節および(2) 6: 11 と(3) Ⅱコリント 12: 1-10 から私は個人的に、パウロが自身の「肉の中の棘」、つまり病気のことを言っているのだと信じている。これらの節を総括すると、私には、おそらくダマスコへ向かう途上での経験(使徒行伝9章を参照)から始まるある種の目の問題が(パウロには)あり、紀元1世紀に(彼が)罹った病気によってその問題が悪化したのだと思われる。パウロの部分的な失明はおぞましい目の異常、つまり眼炎が原因で起こったのかもしれない。

「病気」(文字通り「肉の弱さ」)については 1: 16 の特別なトピックを見よ。

4: 14

NASB 「そしてわたしの体調のためにあなたがたにとって試練ともいえることがあったにもかかわらず、あなたがたはわたしをさげすんだりひどく嫌ったりしませんでした」

NKJV 「そしてわたしのからだには試練があったにもかかわらず、あなたがたはわたしをさげすんだり拒んだりしませんでした」

NRSV 「わたしの体調があなたがたにとっては試練となったにもかかわらず、あなたがたはわたしを拒んだりさげすんだりしませんでした」

TEV 「わたしの体調があなたがたにとっては大きな試練となったにもかかわらず、あなたがたはわたしをさげすんだり拒んだりしませんでした」

NJB 「あなたがたにとって大きな試練となったわたしの体調を理由に、あなたがたが不快感や嫌悪感を示すことは全くありませんでした」

ユダヤ人と異邦人の多くはパウロの病気を神からの裁きと考えていたようだ。パウロが神の御意志の中に生きたという事実と彼の病気は私達に罪と病気との関係を再考させている(ヨハネ9章とヨブ記と詩篇73篇を参照)。

これらの2つの動詞には明確な意味がある。最初に登場する動詞は「無効とみなす」という意味である。2番目に登場する動詞は「唾を吐く」という意味である。2番目の動詞の用法は、一部の研究者がパウロの病気を、かつて古代近東地域にあった「悪の目」(3: 1を参照)についての迷信と関連づけている理由となっている。その魔術的療法は「唾を吐く」ことで、それによって「悪の目」の魔力から身を守るというものであり、「悪の目」とはおそらく(1)異常な目つき、あるいは(2)乱視

(てんかん)のことを言っているのだろう。

「わたしを神の天使あるいはキリスト・イエス御自身であるかのように受け入れてくれました」この力強い発言によってパウロは、彼ら(ガラテヤ人)が彼(パウロ)を通して神からの真のメッセージを、それをもたらした神のしもべ(パウロ)への大いなる敬意とともに受け取ったことを示唆している。NJB ではこの聖句は「神の使者」と訳されている。ヘブル語とギリシャ語で「天使」に相当する語には「使者」という意味もある。

4: 15

NASB 「ところで、あなたがたに与えられた祝福はどこにあるのですか」

NKJV 「ところで、あなたがたに与えられた祝福は何ですか」

NRSV 「あなたがたが感じていた好意はどうなったのですか」

TEV 「あなたがたはとても幸せでした！何があったのですか」

NJB 「あなたがたが抱いていたこの情熱はどうなったのですか」

この修辞学的質問の中で、パウロはガラテヤ人が自分に対して抱いていた本来の良い感情がどこに行ってしまったのかを知りたがっている。Phillips 訳では「あなたがたのきよい魂に何があったのですか」となっている。

「あなたがたはできることなら自分の目をえぐり出してわたしに与えようとさえしました」この第二種条件文は「もしあなたがたが自分の目をえぐり出したなら(実際はそうしませんでした)、それらをわたしに与えようとしたでしょう(実際はそうしなかったでしょう)」と理解されるべきである。この解釈は、パウロの体にある棘(Ⅱコリント12章を参照)とは目の病気であるという理論を裏付けている。

4: 16「それでは、わたしは真実をあなたがたに語ったためにあなたがたの敵となったのですか」

パウロは彼ら(ガラテヤ人)の自分に対する急激な心の変化と福音に対する急激な心の変化とを対比させた。

4: 17-18 17 節と 18 節の解釈には2つの困難、つまり(1)聖句「熱心に探し求める」の意味と(2)18 節の主題のあいまいさが生じる。それは(a)パウロのことなのか、それとも(b)ガラテヤの諸教会のことなのか？この種のあいまいさには教義による解釈は適当ではないが、文の一般的意味には影響はない。ユダヤ教徒化した者達はガラテヤ人に、自分達だけに従い、また以前にパウロを受け入れたのと同様に自分達を受け入れてくれることを望んでいた。

4: 17

NASB 「彼らは熱心にあなたがたを探し求めます」

NKJV 「彼らは熱心にあなたがたの気に入られようとします」

NRSV 「彼らはあなたがたに親切にします」

TEV 「その人々はあなたがたに深い関心を示します」

NJB 「非難すべき点は彼らがあなたがたを味方に引き入れようとする方法にあります」

文字通りこれは「彼らはあなたがたに熱心です」ということである。これは、とくに次の聖句「しかし誠心からではなく」を含む文脈においては、偽りの教師達のことを言っているに違いない。語幹「燃える」に由来する「熱心な」はコイネギリシャ語では2つの意味がある：(1)若い恋人達の愛(2)他者への嫉妬。これらの強烈な感情は言葉巧みな偽りの教師達のガラテヤの諸教会に対する活動にその特徴があるが、彼らの活動は自己中心的な動機によるものであった。

NASB 「そうではなく、彼らはあなたがたを締め出すことによって自分達をあなたがたが探し求めるようにしたいのです」

NKJV 「彼らはあなたがたを締め出したのです。あなたがたが彼らに熱心になるようにするために。」

NRSV 「彼らはあなたがたを締め出したのです。あなたがたが彼らに親切にするようにするために。」

TEV 「彼らはあなたがたをわたしから引き離したいのです。彼らがあなたがたに持っているのと同じ関心をあなたがたが彼らに持つようにするために。」

NJB 「あなたがたをわたしから引き離すことで、彼らはあなたがたを味方に引き入れたいのです」

偽りの教師達は、以前にガラテヤの諸教会がパウロに示していたのと同様の好意(13-15節を参照)をガラテヤ人に示そうと熱心であった。彼らはパウロを疎外して彼の地位を奪おうとしたのだ！このことは18節を説明しているようである。

4: 18 パウロは、以前に自分にとっても親切で自分をいたわってくれた人々があまりにも突然に敵対するようになったことに衝撃を受けた(16節を参照)。13-20節の文脈中ではこの解釈が最も適している。

4: 19「わたしの子供たち、わたしは再び産みの苦しみを経験しています」パウロは、それが暖かで愛情に満ちているという意味を持つという理由で、家族の比喻をしばしば用いた。彼はIコリント4章15節とIテサロニケ2:11では自身を父と称しているが、ここでは母(Iテサロニケ2:7を参照)と称している。パウロは、自分はガラテヤ人の真の霊的親であり、ユダヤ教徒化した者ではないことを強調していたのかもしれない。

「あなたがたの内にキリストが形づくられるまで」「形づくられる」[ギリシャ語幹 *morphe*]は胎児の発育という医学的な意味で用いられた。*Morphe* とは何かにつ随する特性のことをいうのだろう。この聖句はガラテヤ人のキリストにある成熟度(エペソ 4: 13 を参照)、言い換えればキリストらしさ(ローマ 8: 28-29、Ⅱコリント 3: 18 と 7: 1、ガラテヤ 4: 19、エペソ 1: 4 と 4: 13、Ⅰテサロニケ 3: 13、4: 3 と 7 節、5: 23、Ⅰペテロ 1: 15 を参照)について述べている。これは必ずしも、クリスチャン生活における2つの相異なる経験—救いと成熟—を意味しているのではなく、成熟が発育上の経験であるということを私達は皆知っているという意味である。

パウロは、ガラテヤの諸教会を教え諭すことにおける自身の動機が利己的な偽りの教師達のものとは全く異なることを示した。

4: 20「できることならわたしは今あなたがたとともにいて、語調を変えて語りたいのです」パウロは、自分がガラテヤ人に感じている、親のような愛情を彼らに分かってほしいと願っていた。印刷物のページ(上の活字)は冷たく非情に感じられるが、ガラテヤ人に対する彼の心は燃えていた。

NASB、NKJV 「というのは、わたしはあなたがたのことで困惑しているからです」

NRSV 「というのは、わたしはあなたがたを疑っているからです」

TEV 「わたしはあなたがたのことをとても心配しています」

NJB 「わたしにはどうすることが最善なのか分かりません」

「方法」を意味し、アルファ欠性(否定)語を伴うこのギリシャ語の用語は少なくとも2通りに訳されている。

1. リビングバイブルでは「率直に言うと私にはどうすればよいのかわかりません」となっている。
2. Phillips 訳では「どのようにあなたがたとつきあっていけばよいのか私には本当にわかりません」となっている。

これらの慣用的な訳はそれぞれ、これらのガラテヤの諸教会との交流におけるパウロの欲求不満を表現している。

NASB(改訂版)原典: 4: 21-5: 1

²¹わたしに言ってください、律法の下にいたいと思っている方々、あなたがたは律法の言っていることを聞き入れようとしませんか。²²というのは、アブラハムには2人の息子がおり、一人は女奴隷から生まれ、もう一人は自由な身分の女から生まれたと聖書に書いてあるからです。²³女奴隷から生まれた息子は肉によって生まれましたが、自由な身分の女から生まれた息子は約束によって生まれました。²⁴これはたとえ話です。というのは、これらの女たちは2つの契約だからです。一人はシナイ山から出て、奴隷となる子を産みました。この女はハガルです。²⁵このハガルはアラビアではシナイ山で、現在のエルサレムのことです。というのは、現在のエルサレムは自分の子供たちとともに奴隷となっているからです。²⁶しかし、もう一人の天上のエルサレムは自由な身分

の女で、わたしたちの母です。²⁷というのは、このように書いてあるからです。

「喜べ、子を産まない不妊の女よ。

大声で叫べ、産みの苦しみを知らない女よ。

なぜなら一人取り残された女の産む子が夫ある女の産む子より多いからだ。」

²⁸さて兄弟たち、あなたがたはイサクと同様に約束の子です。²⁹しかし、あのとき、肉によって生まれた者が霊によって生まれた者を迫害したように、今も同じことがあります。³⁰しかし、聖書に何と書いてありますか。

「女奴隷とその子を追い出せ。

なぜなら女奴隷の子供は自由な身分の女の子供とともに相続人になるべきではないからだ。」

³¹ですから、兄弟たち、わたしたちは女奴隷の子供ではなく自由な身分の女の子供なのです。^{5:1}キリストがわたしたちを自由な身分にしてくださったのは、この自由をわたしたちに得させるためだったのです。ですから堅く立ち続け、奴隷のくびきに2度とつながれることのないようにしなさい。

4: 21「わたしに言ってください、律法の下にいたいと思っている方々、あなたがたは律法の言っていることを聞き入れようとしないのですか」パウロはモーセに起因する誤りと戦うためにモーセの記述を引用した。この節は7節の考察で始まる。8～20節はパウロのもうひとつの個人的で感情的な主張である。4: 7の「子であること」と「相続人」、そして3: 15-18の「子孫」の概念はこの予型論に先行するものである。

4: 22「アブラハムには2人の息子がいました」アブラハムには2人以上息子がいたが、ここで挙げられている2人、つまり創世記16章に記されている彼の最初の息子イシュマエルと創世記21章に記されている彼の2番目の息子イサクは対比されている。この予型論全体の論点は、2人の息子のうちの一人は女奴隷から自然な方法で生まれ、もう一人は自由な身分の女、つまり彼の妻から神の約束による超自然的な方法で生まれたということである。この文脈全体で強調されていることは、23節と同様に、神の約束対人間の努力である。

4: 23-24 ユダヤ人は23節まではパウロの予型論に同意していたようだ。23節でパウロは、人間の努力という意味ではユダヤ人はイシュマエルの真の子孫であり、一方教会は「約束」によるサラの真の子孫であると言っている。

4: 24「たとえ話」これは、Philo や Clement や Origen の用いた語「たとえ話」ではなく、むしろ予型論である。パウロは今のこの状況をアブラハムの2人の息子、社会の慣習によって生まれた息子と神の約束によって生まれた息子、に関する事情と似たものと見ていた。息子の一方は行いによる義(イシュマエル)を表しており、もう一方は(神の)自由な恵み(イサク)を表しているのだ！パウ

口にとって、律法は罪深い人類を救うことはできず、彼らにとって死刑宣告となった(コロサイ 2: 14 を参照)。キリストの内にのみ真の救いは見出される。旧約聖書の信仰の本質はモーセの律法の内ではなくアブラハムの信仰の内に見出された。

特別なトピック: 予型論

たとえ話の用い方は Philo と初期教会とパウロとでは大きく異なっていた。前者は歴史的背景を完全に無視し、原著者の意図とは全く異なる教えをつくりあげた。パウロの方法はより予型論らしい。パウロは創世記の歴史的背景と新・旧契約の統一を推測したので、それらの間に類似性を持たせることができた。というのはそれらの著者は1人—神だからである。この特殊な文脈の中で、パウロはアブラハムの契約とモーセの契約とを対比させ、そしてエレミヤ 31: 31-34 の新しい契約と新約聖書も同じように対比させた。

4: 21-31 には4つの関連事項がありえる。

1. 2人の母親は2つの家族を表している。ひとつは自然な方法でつくり、もうひとつは超自然的な約束によってつくりだされた。
2. これら2人の母親とその子供達の間には、ユダヤ教徒化した者達のメッセージとパウロの福音の間にあったのと同じ緊張があった。
3. 両グループはどちらもアブラハムの子孫だといわれていたが、一方はモーセの律法の奴隷であり、他方はキリストの成し遂げられた御業において自由の身分であった。
4. 2つの山はこれら2つの契約、つまりシナイ山でモーセに与えられた契約とシオン山でアブラハムに与えられた契約に関連がある。シオン山つまりモリア山はアブラハムが息子イサクをいけにえとして捧げた場所であり、後にエルサレムとなった。アブラハムは地上のエルサレムではなく天国のような都市(ヘブル 11: 39, 12: 22, 13: 14, 新しいエルサレム、イザヤ40~46章)を探していたのだ。

パウロがこの予型論を用いたのは次のような理由によると思われる。

1. 偽の教師達がこれと同じ方法を利用して、自分達がアブラハムの真の子孫だと主張した。
2. 偽の教師達がモーセの著書からのたとえ話を用いて自分達のユダヤ教契約神学を押し付けようとしたのでパウロはユダヤ人の信仰の父アブラハムのたとえ話を用いた。
3. パウロがそれを用いた理由は創世記 21: 9-10にあるようだ。その箇所は 30 節で引用され、自然な方法によって生まれた息子を「追い出す」とある。パウロの類型学によればこれはユダヤ教徒化した者達を指しているようだ。
4. パウロがそれを用いた理由はユダヤ人偽教師達の排他主義、特に異邦人に対する彼らの軽蔑にあるようだ。パウロの予型論によれば異邦人は神に受け入れられ、人種的に自信過剰な人々は神に疎外される(マタイ 8: 11-12 を参照)。
5. パウロがこの予型論を用いたのは彼が3・4章で「(神の)子であること」と「相続人であること」を強調していたからであると思われる。これは、私達が神の家族に入れられるのはキリストお

一人を通じた信仰によってであって自然な方法で子孫となることによってではないという彼の議論の中心であった。

4: 25「ハガルはアラビアではシナイ山です」ここでの「です」には2通りの解釈がある:(1)「それは表す」(2)ハガルとシナイ山の間にはある種の一般的な語源的関係がある。ハガルという名は「岩」(山の換喩[物事の隣接性に基づく比喩])を意味するヘブル語の用語と同様の綴りを有している。注解者の大半は(1)を採択している。ハガルはシナイ山上で与えられたモーセの律法、つまりユダヤ教を表している。

アラビアはパウロの時代には現代よりもはるかに広大な地であった。

特別なトピック: シナイ山の位置

- もしモーセがファラオ(エジプト王)から求められた文字通りの比喩的ではない「3日の旅」(3章 18節、5: 3、8: 27)のことを言っていたなら、それはシナイ半島南部のその場所(つまりシナイ山)に着くために要する時間としては十分ではなかった。従って、学者の中には、その山はカデシューバルネアの泉の近くにある山だと言う者もいる。
- 罪の荒野の中の「イエベル・ムサ」と呼ばれるその場所(つまりシナイ山)についてはいくつかの説がある。
 - 山の前の広大な平原
 - 申命記 1: 2 によればシナイ山からカデシューバルネアまでは(徒歩の旅で)11日かかった。
 - 用語「シナイ」はヘブル語の用語ではない。それは砂漠の低木を意味する罪の荒野と関連があるようだ。その山のヘブル語名はホレブ(つまり荒野)である。
 - シナイ山は紀元4世紀以来その場所にある。それはシナイ半島とアラビアを含む広大な地域である「ミディアンの地」にある。
 - 考古学によって、出エジプト記に登場するいくつかの都市(*Elim*、*Dophkah*、*Rephidim*)がシナイ半島西岸に位置することが確定しているらしい。
- ユダヤ人はシナイ山の地理学的位置に全く関心がなかった。彼らは神が自分達に律法をお与えになり、創世記 15: 12-21 からの約束を成就されたと信じていた。「場所」は問題ではなかった。彼らはこの場所に戻ろうとはしなかった(つまり毎年巡礼することはなかった)。
- シナイ山の定位置は、紀元 385~358 年頃に書かれた *Pilgrimage of Silvia* に登場するまでは決まっていなかった(F. F. Bruce 著 *Commentary on the Book of the Acts* の 151 ページを参照)。

「現在のエルサレムのことです。というのは、現在のエルサレムは自分の子供たちとともに奴隷となっているからです」ここでの比喩は、エルサレムを支配する現行のユダヤ教体系と、来るべき

終末論的都市である新しいエルサレムの間にある。この都市は人の手によってつくられるものではなく、天に永遠に存在する(ヘブル 11: 10、12: 22、13: 14、黙示録 21: 2 と 10 節を参照)。

パウロが上述のエルサレムを教会にあてはめたことに注目しなさい。新約聖書中の使徒の著書は旧約聖書の論点(ユダヤ人对ギリシャ人)を信者対未信者に変えた。新約聖書は旧約聖書の(神の)地理的な約束をパレスティナから天に戻した(地上のエルサレム対天のエルサレム)。この論点の根本的変化によって黙示録は(1)ユダヤ人ではなく信者について(2)ユダヤ人の王国ではなく世界王国について述べる事が可能となった。

4: 26「自由」 ここでの自由は、信者がユダヤ教(つまり呪い、3: 13)と異教(*stoicheia*)から解放されたことを述べている。自由とは信者が自己中心的になるということではなく、

1. 私達(信者)には神に仕える自由がある(ローマ6章を参照)。
2. 私達(信者)は墮落した自己という恐ろしい暴君から解放されている。

言い換えれば信者には「仕える」自由があり、また「自己」から解放されている。それは2つの自由だ！私達は奴隷や召使としてではなく息子や娘として父なる神とその家族に自分から進んで仕えるのだ！

4: 27 これはイザヤ 54: 1 からの引用である。文脈中ではそれはバビロン脱出後の都市エルサレムの回復について述べている。新しいエルサレムは65章と66章に特記されている。パウロはこの終末論的理解を自分の予型論に反映させた。

4: 28 ガラテヤの諸教会の信者達は信仰によってアブラハムの真の子孫であった(ローマ 2 章 28-29 節を参照)。

4: 29 パウロはイエスに真に従う全ての人々を、神の約束を通してイサクの真の子孫となった人々とみなした。旧約聖書は迫害(つまりユダヤの伝統)について特には述べていないが、子のないサラに対するハガルの高慢な態度(創世記 16: 4-5 を参照)とハガルに対するサラの不当な扱い(創世記 16: 6 を参照)については述べている。ユダヤ教の指導者達は創世記 21: 9 を、イシュマエルがサラとその子供をあざけたのだと解釈している。ヘブル語の原典自体は「からかう」つまり「あざ笑う」(BDB850、KB1019)としている。多分パウロは後に起こるユダヤ人と異邦人の反目のことを言うつもりだったのだろう。

29 節の終わりの聖句「今も同じことがあります」は、アブラハムの実の子孫(つまりモーセの契約の子)が今でもアブラハムの霊的な子(つまり信仰の子)を迫害していることを暗示している。2つの山の間には対立があるのだ！

4: 30「しかし、聖書に何と書いてありますか。『女奴隷とその子を追い出せ』 これは創世記 21 章

10 節からの引用である(サラ[*Peil* 命令形、BDB176、KB204]を引用)。このギリシャ語動詞は「女奴隷を追い出す」という意味のアオリスト能動態命令形であり、ガラテヤ人への手紙の文脈中では「ユダヤ教徒化した者達を追い出せ！」という意味のようだ。

御言葉は擬人化される(ヨハネ 7: 42、ローマ 9: 17、ガラテヤ 3: 8 と 4: 36、ヤコブ 2: 23 と 4: 5 を参照)。これは父なる神や聖霊の御言葉を比喩的に述べ、それによって「靈感」(マタイ 5: 17-19 を参照)についても述べる方法であるのかもしれない。

4: 31「ですから、兄弟たち、わたしたちは女奴隷の子供ではなく自由な身分の女の子供なのです」
これはここでの議論の要旨であった。イエス・キリストを信頼する私達はアブラハムの約束の成年相続人であり、単に人種的な、つまり自然的に生まれたイスラエルの成年相続人である。これと同じ真理はローマ9～11章に表現されている。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. パウロはなぜ私達がキリストの子であることを強調し続けたのか？
2. イエスのご人格に関して 4 節で3回強調されていることは何か？
3. 私達が神を知ること、あるいは私達が神に知られることに関する 8 節と 9 節の関係は何か？
4. 成句「世のくだらない考え」あるいは「*stoicheia*」の意味は何か？説明しなさい。
5. 14～15 節にはっきりと述べられている、パウロの体の棘とは何か？
6. なぜ私達は寓話的解釈に注意しなければならないのか？イエスとパウロがそれを用いたのに、なぜ私達は用いることができないのか？
7. 9 節がどのように 6 節と7節と関係があるかをあなた自身の言葉で説明しなさい。

ガラテヤ人への手紙5章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
		最終証明		
(4: 21~5: 1)		(4: 21~5: 1)		
クリスチャンの自由	クリスチャンの自由	クリスチャンの自由の本質	自由を保て	クリスチャンの自由
	5: 1~6		5: 1	5: 1
5: 2~6		5: 2~6	5: 2~6	5: 2~6
	愛は律法を成就する			
5: 7~12	5: 7~15	5: 7~12	5: 7~10	5: 7~12
			5: 11~12	
				自由と愛
5: 13~15		5: 13~15	5: 13~15	5: 13~15
霊の実と肉の業	霊の内を歩む			
5: 16~21	5: 16~26	5: 16~21	5: 16~18	5: 16~24
5: 22~26		5: 22~26	5: 19~26	5: 25~26

第三読書サイクル(viiページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落

4. (以下同様)

文脈の洞察

- A. 5章はパウロの主張する、信仰を通した恵みによる義認の、重要で実際的な側面について明確に述べている。ユダヤ教徒化した者達は、自分達が持っているモーセの言う神らしさの概念を異邦人クリスチャン達が受け入れないことを心配し、旧約聖書の戒律を彼らに強制しようとした。しかし、パウロは自身も神らしさに関心を持ってはいたが、それは戒律に従った結果ではなく心の変化であると断言している(エレミヤ 31: 33、エゼキエル 36: 26 と 27 節を参照)。確かにユダヤ教徒化した者達は真の救いの条件の全てを持っていたが、救いに至るまでにそれら条件が満たされる順番については逆に把握していた。彼らは、人類は行いによって神に受け入れられると感じていた。しかし、十字架にかかられたキリストの福音は、キリストとの個人的関係が喜びを通した神らしい生活に導くことを示している。パウロも又、道徳的で堅実な奉仕志向の生活を送る神の子とみなされていた。5章はこの道徳的命令について述べている。
- B. 自由という主題は2種類の誤(悪)用と関連して5章に表現されている。
1. 1~12 節は自由の遵法的な(人の特権)誤用を取り扱っている。
 2. 13~15 節は自由の二律背反的な(無法)誤用を取り扱っている(ローマ 14: 1~15: 13、I コリント8章と 10: 23-33 を参照)。
- C. この書は根本的で絶対的に自由な恵みのメッセージと呼べるかもしれない。パウロは自己努力の問題について独自の理解をしていた。彼の福音は自由への根本的な召しであったが、行き過ぎの許される自由ではなく、愛の奉仕へと導く自由であった。私達は自分達の時代に、信徒はキリストにあって真に自由であるが、律法から解放されていることによって今や神が自由にお与えになった愛に適切に応答する自由がある(ローマ6章を参照)という釣り合いを理解する必要がある。ローマ 14: 1~15: 13 は I コリント8~10章と同様に自由と責任の聖書的な釣り合いの素晴らしい例である。聖霊は私達に神らしく生きる力を与えてくださるのだ。
- D. 16~26 節はクリスチャンの自由の超自然的源が聖霊であることを示している。救いは神の愛の自由な御業であるとともにクリスチャンの人生でもある。信徒は悔い改めと信仰によって救われなければならないのと同様に、悔い改めと信仰によって聖霊に自分達の人生を導き続けていただかなければならない。

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 5: 1

¹キリストがわたしたちを自由な身分にしてくださったのは、この自由をわたしたちに得させるためだったのです。ですから堅く立ち続け、奴隷のくびきに2度とつながれることのないようにしなさい。

5:1「この自由をわたしたちに得させるためだったのです」 5:1の冒頭の聖句は(聖書によっては)多分 4:21-31と同じ段落にあるか又は新しい段落の冒頭にある(NKJV、TEV、NJB)。これは4章30節と31節の「自由な身分の女」と5:1の「自由」と5:1の「自由な」における言葉遊びであろう。福音の目的は人々をモーセの律法の呪いから解放して、アブラハムが神の約束に応答したときと同様に彼らが自発的かつ適切に神に応答できるようにすることである。従って、信徒には罪を犯す自由ではなく神のために生きる自由がある(2:4、ローマ6章の特に11節を参照)。

名詞「自由」は冒頭に置かれ、その概念の強調のために同じ語幹の動詞形(「解放された」、アオリスト能動態直説法)が用いられているのだ!

「キリストがわたしたちを自由な身分にしてくださったのは」 クリスチャンはキリストにあって真に自由である(ヨハネ8:32と36節、Ⅱコリント3:17を参照)。マルチン・ルターが言っているように、「クリスチャンは万物の最も自由な主人であり、何物にも従わない。クリスチャンは全ての人の最も忠実なしもべであり、全ての人に従う」。

NASB 「ですから堅く立ち続け、奴隷のくびきに2度とつながれることのないようにしなさい」

NKJV 「ですから、キリストに解放していただいたことによって得た自由のうちに堅く立ち続け、奴隷のくびきに2度とつながれることのないようにしなさい」

TEV 「ですから、自由な身分の者として立ち、2度奴隷にならないようにしなさい」

NRSV、JB 「ですから堅く立ち、2度と奴隷のくびきに身をまかせることのないようにしなさい」

パウロは、信徒のキリストにある真の自由の観点から2つの忠告をしている。

1. 彼らが耐え忍ぶこと
2. 彼らがあらゆる形の遵法主義つまり自己努力に戻るのをやめること

これらはどちらも現在命令形である。しかし、2番目のものは、通常はすでに進行中の動作をやめることを意味する否定分詞を含んでいる。

「奴隷のくびき」をうまく言い換えた成句が使徒行伝15:10に見られる。イエスもくびきを負っておられるが、そのくびきは負いやすいものである(マタイ11:29-30を参照)。ユダヤ教の指導者達は「くびき」を律法の定め方の比喩として用いた。「キリストの律法」はユダヤ教の律法つまり人の持つ特権とは完全に異なる(ヤコブ1:25、2:8と12節を参照)。

NASB(改訂版)原典: 5:2-12

²見よ。わたしパウロはあなたがたに言います。あなたがたがもし割礼を受けるなら、あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方ということになります。³割礼を受ける全ての人にもう一度言います。そのような人には律法全体を行う義務があるのです。⁴律法によって義とされようとしている人々、あなたがたはキリストから遠ざけられ、恵みに与ることができなくなっています。⁵とい

うのは、わたしたちは聖霊を通じて信仰により義とされることの希望を待ち望んでいるからで

す。⁶キリスト・イエスにおいては、割礼を受けているかどうかは無意味であり、愛を通して働く信仰に意味があるのです。⁷あなたがたはよく走っていました。それなのに、あなたがたが真理に従うことを誰が邪魔したのですか。⁸このような説得はあなたがたを召された方からのものではありません。⁹わずかなパン種がパン生地全体を膨らませるのです。¹⁰あなたがたが決して他の考えを受け入れることはないだろうと、わたしは主にあつてあなたがたを信頼しています。あなたがたを惑わす者は誰であろうと裁きを受けるでしょう。¹¹しかし兄弟達、わたしが今なお割礼を宣べ伝えているならば、今なお迫害を受けているのはなぜでしょうか。もしそうなら、十字架のつまづきはとつくなくなっています。¹²あなたがたを惑わす者は自ら去勢してしまえばよいのにとわたしは願っています。

5: 2

NASB 「見よ。わたしパウロはあなたがたに言います」

NKJV 「わたしパウロはあなたがたにはつきりと言います」

TEV 「見よ！わたしパウロはあなたがたにこう言います」

NRSV 「見よ！わたしパウロはあなたがたにこう言います」

NJB 「わたしパウロはあなたがたにこう言います」

これは強力な人称代名詞(*ego*)を伴う「見る」の命令形である。「わたしパウロ」はパウロの発言を権威あるものとして強調している。異邦人に伝道する使徒パウロは啓示的な情報を与えているのだ！

NASB 「あなたがたがもし割礼を受けるなら」

NKJV 「あなたがたがもし割礼を受けるなら」

TEV 「あなたがたがもし割礼を受けるなら」

NRSV、NJB 「あなたがたがもし割礼を受けるなら」

これは重要な行為を意味する第三種条件文である。これは、ガラテヤ人クリスチャンはその当時まだ割礼を受けていなかったが、ユダヤ教徒化した者達によって与えられた、その新たな救われるための前提条件(つまり最低限度の完全化。3: 1を参照)に従う傾向があったことを示唆しているようだ。しかし割礼は根本的な問題ではなかった(6節とIコリント7: 18-19を参照)。割礼は、ユダヤ教の行いによる義の体系全体のうちのほんの一部分に過ぎなかった。パウロは使徒行伝16章3節でデモテをユダヤ人への伝道者とするために彼に割礼を施した。しかしパウロは、真の割礼は体に施されるものではなく(ローマ2: 28-29、コロサイ2: 11を参照)心に施されるものである(申命記10: 16、エレミヤ4: 4を参照)と繰り返し述べている。問題は割礼ではなく、神と人との関係をいかに正しく保つかということにあるのだ(4節を参照)。

「あなたがたにとってキリストは何の役にも立たない方ということになります」パウロは神に義とさ

れる2つの方法、つまり(1)人の努力と(2)自由な恵みを対比させている。段落全体の主題は、これら2つの方法が相反的であること、つまり人の努力を選べば自由な恵みを否定することになり、自由な恵みを選べば人の努力を否定することになるということである。ガラテヤ 3: 1-5 がはっきりと示しているように、救いの基本条件として両者を混同することはできないのだ。

5: 3「そのような人には律法全体を行う義務があるのです」 人の努力を(神に義とされる)方法を選べば、その人は道徳的に責任の負える年齢(少年では 13 歳 [*bar-mitzvah*]、少女では 12 歳 [*bath-mitzvah*])から死ぬまで(申命記 27: 26、ガラテヤ 3: 10、ヤコブ 2: 10 を参照)律法に完全に固執しなければならない。聖書は、(イエス以外は)誰もこのようにした人がいないので、全ての人は律法の違反者、つまり罪人とされていると主張している(ローマ 3: 9-18、22-23、5: 8、6: 23、11 章 32 節を参照)。

5: 4「律法によって義とされようとしている人々」 3・4章の神学的主題は、私達が神に受け入れられることは神のご性質と聖霊のお力づけと救世主の御業に完全に基づいているということである。これは、信仰のみを通した恵みによる義認という、パウロの根本的で新たな福音の本質である(ローマ 4~8章を参照)。

NASB 「あなたがたはキリストから遠ざけられています」

NKJV 「あなたがたはキリストから疎外されています」

TEV 「あなたがた... はキリストから切り離されています」

NRSV 「キリストから切り離されています」

NJB 「あなたがたはキリストから切り離されています」

このギリシャ語の動詞 (*katargeo*、アオリスト受動態直説法)は様々に訳されている:(1)無用である(2)無力である(3)非生産的である(4)無益である(5)空[から]である(6)無である(7)無し空[から]にする(8)終わらせる(9)無効にする(10)疎外する。パウロはこの語を20回以上も用いている。3: 17 の特別なトピックを見よ。上記の訳のいくつかをガラテヤ 3: 17(無効にする)と 5: 11(無にする)に見ることができる。もしもある人が人為的な行いによって神に義とされようとするなら、その人は救いの方法としての恵みによる義認から除外される(5: 12 を参照)。

NASB、NKJV、NJB 「あなたがたは恵みに与ることができなくなっています」

NRSV 「あなたがたは恵みに与ることができなくなっています」

TEV 「あなたがたは神の恵みの外にいます」

行いによって神の前に義とされようとする人々は、十字架に架かられたメシアの成し遂げられた御業のうちに見出される恵みによる義認の過程を知り得ない。この聖句は本来、過去に救われはしたが今は神を見失っている人々のいる可能性についてではなく、いかに人類が救いを見出すか

についての現代の神学的命題を取り扱っている。しかし、救いは過去に始まって今も続く応答に
関与することに注意せよ。それは恵みと信仰の両方に関与する重要事項であり過程である。両方
とも重要なのだ(7 節を参照)。

パウロはこの書簡の中で救いと結びつく律法主義を取り扱っていた。現代の教会内における律
法主義の大半はクリスチャンの生活と関連がある(ガラテヤ 3: 1-3 を参照)。大半の律法主義クリ
スチャンはローマ 14: 1-15: 13 の「弱い兄弟達」とよく似ている。彼らは福音の自由と解放を受け
入れることができない。彼らは救われるために行いに依り頼んではないが、自分達が神のご機
嫌を損ねることを恐れている。しかし、このような態度は他の信徒達からの裁きの批判を生む。
ガラテヤの教会に起こったこの交わりの破綻は私達の時代の教会でも起こっている。

完全に自由だが全てを犠牲にする救いについての議論におけるこの点について、私は3つの
特別なトピックを挙げたいと思う。一つ目は過程としての救いを取り扱う(I テサロニケ 5: 9 の特別
なトピック: 救いについて用いられているギリシャ語動詞の時制を見よ)。二つ目は救いと命の終
わりとの関係を取り扱い、三つ目は背信[背教]の神学的問題を取り扱う(以下の特別なトピックを
見よ)。

特別なトピック: 忍耐

クリスチャンの生活に関連する聖書的原則は説明が難しい。というのは、それが典型的な東洋
の弁証法的ペア(会話上の2人組)の中に表現されているからである。このペアは互いに正反対
の考えを持っているようだが、しかしどちらも聖書的である。西洋のクリスチャンは一つの真理を
選び取ってそれと正反対の真理を無視あるいは軽視する傾向がある。例えば:

1. 救いはキリストを信頼するという最初の決心か、それとも一生涯キリストの弟子であり続け
るという約束か?
2. 救いは主なる神からの恵みによる選りか、それとも神の恵みに対する人類の信仰と悔い改
めによる応答か?
3. 救いは一度受け取れば失うことのできないものなのか、それとも(失なわないために)継続的
努力を必要とするものなのか?

忍耐の問題は教会の歴史全般にわたって議論を呼んでいる。問題は新約聖書の中の明らか
に相反する段落群に始まる。

1. 確信についての聖句
 - a. イエスのお言葉(ヨハネ 6: 37 と 10: 28-29)
 - b. パウロの発言(ローマ 8: 35-39、エペソ 1: 13 および 2: 5 と 8-9 節、ピリピ 1: 6 と 2: 13、
II テサロニケ 3: 3、II テモテ 1: 12 と 4: 18)
 - c. ペテロの発言(I ペテロ 1: 4-5)
2. 忍耐の必要についての聖句
 - a. イエスのお言葉(マタイ 10: 22 および 13: 1-9 と 24-30 節ならびに 24: 13、マルコ 13: 13、

- ヨハネ 8: 31 と 15: 4-10、黙示録 2: 7 と 17 節と 26 節および 3: 5 と 12 節ならびに 21: 7)
- b. パウロの発言(ローマ 11: 22、I コリント 15: 2、II コリント 13: 5、ガラテヤ 1: 6 と 3: 4 と 5: 4 と 6: 9、ピリピ 2: 12 と 3: 18-20、コロサイ 1: 23)
 - c. ヘブル人への手紙の著者の発言(2: 1、3: 6 と 14 節、4: 14、6: 11)
 - d. ヨハネの発言(I ヨハネ 2: 6、II ヨハネ 9 章)
 - e. 父なる神のお言葉(黙示録 21: 7)

聖書的な救いは主なる三位一体の神の愛と慈みと恵みからもたらされる。霊を受けなければ誰も救われることはできない(ヨハネ 6: 44 と 45 節を参照)。まず神が来られて救いの御業を始められるが、人類には信仰と悔い改めによる応答が求められる。神は契約の関係のもとに人類とともに働かれる。それには特権と責任があるのだ!

救いは全ての人に与えられる。イエスの死は墮落した被造物の罪の問題を取り扱っている。神は一つの道を備えられ、御自身のお姿に造られた全ての人に、御自身の愛とイエスを与えられたことに対して応答してほしいと思っておられる。

もしあなたが非カルヴァン主義的観点からこの主題についてさらに書籍を読みたいと思うなら、次に挙げる書を読むことを勧める。

1. Dale Moody 著 *The Word of Truth*, Eerdmans 社刊、1981 年(348~365 ページ)
2. Howard Marshall 著 *Kept by the Power of God*, Bethany Fellowship 編、1969 年
3. Robert Shank 著 *Life in the Son*, Westcott 社刊、1961 年

この分野において聖書は2つの異なる問題を挙げている:(1)無益で自己中心的な生活を送る自由を確信すること(2)伝道活動と個人的な罪(の問題)と格闘している人々を助長すること。問題は偽の(伝道)グループが偽のメッセージを受け取って、聖書中の限られた御言葉に基づく神学体系を組み立てていることなのである。確信あるメッセージを渴望しているクリスチャンもいれば、重要な警告を必要とするクリスチャンもいるのだ! あなたはどちらのグループに属するのか?

アウグスティヌスとペラギアスとの間には、そしてカルヴァンとアルミニウス(半ペラギアス主義者)との間には歴史的な神学論争がある。その議論には救いについての命題、つまりもしある人が真に救われるならその人は信仰と実りにおいて忍耐しなければならないのかということが関係する。

カルヴァン主義者は、神の尊厳と維持力を主張するそれらの聖書箇所(ヨハネ 10: 27-30、ローマ 8: 31-39、I ヨハネ 5: 13 と 18 節、I ペテロ 1: 3-5 を参照)とエペソ 2: 5 と 8 節にある完了形受動態分詞様の動詞時制を無視している。

アルミニウス主義者は、「持ちこたえる」、「耐える」、「(存続し)続ける」ように信徒に警告するそれらの聖書箇所(マタイ 10: 22 と 24: 9-13、マルコ 13: 13、ヨハネ 15: 4-6、I コリント 15: 2、ガラテヤ 6: 9、黙示録 2: 7 と 11 節と 17 節と 26 節、3: 5 と 12 節と 21 節、21: 7 を参照)を無視している。私は個人的にはヘブル6章と10章が適用できるとは信じていないが、アルミニウス主義者の多くはそれらを背信(背教)への警告として用いている。マタイ13章とマルコ4章の種播き人のたとえ

話は、ヨハネ 8: 31-59 と同じように、見せかけの信仰の問題を提起している。カルヴァン主義者が救いについて述べるために完了時制の動詞を引用したように、アルミアス主義者は I コリント 1: 18 と 15: 2 および II コリント 2: 15 のような現在時制の動詞のある文章を引用した。

これは、神学体系がいかに証拠となる聖句をもとに解釈する方法を濫用しているかを示した完璧な例である。通常は指導原理あるいは主要な原典が他の全ての原典にとって標準となる神学的基準を定めるのに用いられる。いかなる文献に由来する基準であろうと注意せよ。それらは啓示に由来するものではなく、西洋の論理学に由来するものである。聖書は東洋の書である。その書は過度の緊張と逆説めいた事柄の中の真理を表している。クリスチャンは両者を受け入れて緊張の中を生きるように求められている。新約聖書には信徒の安全および信仰を持ち続け神らしく生き続けることの要求が記されている。キリスト教とは悔い改めと信仰という(神への)応答を始めてそれを継続することである。救いとは物(天国への切符あるいは火災保険証書)ではなく関係である。それは決断であり(キリストの)弟子となるということである。それは新約聖書の中で全種類の動詞時制を用いて述べられている。

アオリスト(完了した行為)、使徒行伝 15: 11、ローマ 8: 24、II テモテ 1: 9、テトス 3: 5

完了形(継続的な結果を伴う完了した行為)、エペソ 2: 5 と 8 節

現在形(継続的な行為)、I コリント 1: 18 と 15: 2 および II コリント 2: 15

未来形(未来の出来事あるいは特定の出来事)、ローマ 5: 8 と 10 節および 10: 9、I コリント 3: 15、ピリピ 1: 28、I テサロニケ 5: 8-9、ヘブル 1: 14 と 9: 28

特別なトピック: 背信 (*aphistemi*)

このギリシャ語の用語 *aphistemi* は幅広い意味を持つセム語族の用語である。しかし、英語におけるその用語「apostacy」はこの用語から派生したのに、その用法は現代の読者によって偏ったものとなっている。常に言われていることではあるが、重要なことは予め定められている定義ではなく文脈である。

この語は「～から」つまり「遠方から」を意味する前置詞 *apo* と「座る」、「立つ」、あるいは「固定する」を意味する *histemi* の複合語である。以下に示す(非神学的な)用法に注意せよ。

1. 物理的に引き離す
 - a. 神殿から、ルカ 2: 37
 - b. 家から、マルコ 13: 34
 - c. 人から、マルコ 12: 12 と 14: 15、使徒行伝 5: 38
 - d. 全てのものから、マタイ 19: 27 と 29 節
2. 政治的に引き離す、使徒行伝 5: 37
3. 関係を引き離す、使徒行伝 5: 38、15: 38、19: 9、22: 29
4. 法的に引き離す(離婚)、申命記 24: 1 と 3 節(LXX)と新約聖書のマタイ 5: 31 と 19: 7、マルコ 10: 4、I コリント 7: 11

5. 負債を返済する、マタイ 18: 24
6. 去ることで無関心を示す、マタイ 4: 20 と 22: 27、ヨハネ 4: 28 と 16: 32
7. 去らないことで関心を示す、ヨハネ 8: 29 と 14: 18
8. 受け入れる、許す、マタイ 13: 30 と 19: 14、マルコ 14: 6、ルカ 13: 8

神学的にはこの動詞にも幅広い用法がある。

1. 罪を帳消しにする、免除する、赦す、出エジプト 32: 32(LXX)、民数記 14: 19、ヨブ 42: 10 と新約聖書のマタイ 6: 12 と 14~15 節、マルコ 11: 25-26
2. 罪から離れる、Ⅱテモテ 2: 19
3. 以下に示す事柄を避けることによって無視する
 - a. 律法、マタイ 23: 23、使徒行伝 21: 21
 - b. 信仰、エゼキエル 20: 8(LXX)、ルカ 8: 13、Ⅱテサロニケ 2: 3、Ⅰテモテ 4: 1、ヘブル 2: 13

現代の信徒は、新約聖書の著者達がそれについて決して考えることのなかった多くの神学的疑問を持っている。これらの疑問の一つは、信仰から忠実さを切り離す現代の傾向と関連があるようだ。

聖書には、神の人々と関係して事件に巻き込まれる人物が登場する。

I. 旧約聖書

- A. 12(10)人のスパイの報告を聞いた人々、民数記 14 章(ヘブル 3: 16-19 を参照)
- B. コラ、民数記 16 章
- C. エリの息子、Ⅰサムエル 2 章と 4 章
- D. サウル、Ⅰサムエル 11-31 章
- E. 偽預言者達(例)
 1. 申命記 13: 1-5、18: 19-22(偽預言者の識別方法)
 2. エレミヤ 28 章
 3. エゼキエル 13: 1-7
- F. 偽の女預言者達
 1. エゼキエル 13: 17
 2. ネヘミヤ 6: 14
- G. イスラエルの悪い指導者達
 1. エレミヤ 5: 30-31、8: 1-2、23: 1-4
 2. エゼキエル 22: 23-31
 3. ミカ 3: 5-12

II. 新約聖書

A. このギリシャ語の用語は文字通り *apostasize* である。旧・新約聖書はどちらも、イエス・キリストが再び来られる前には悪く誤った教えが世に広まると明言している(マタイ 24: 24、マルコ 13 章 22 節、使徒行伝 20: 29 と 30 節、Ⅱテサロニケ 2: 9-12、Ⅱテモテ 4: 4 を参照)。このギリシャ語

の用語は、マタイ13章とマルコ4章とルカ8章に見られる土壌の例え話にあるイエスのお言葉を反映しているようだ。これらの偽教師達は明らかにクリスチャンではないが、元々は信徒であった(使徒行伝 20: 29-30、Iヨハネ 2: 19 を参照)。しかし、彼らは未熟な信徒を誘惑し捕えることができた(ヘブル 3: 12 を参照)。

ここでの神学的疑問は、偽教師達も信徒かということである。これに答えるのは難しい。なぜなら彼らは地域教会の偽教師達であったからである(Iヨハネ 2: 18-19 を参照)。私達の神学的つまり特定の宗派の伝統はしばしば、聖書の特定の御言葉を引用せずにこの疑問に答える(個人的な偏見でつくりあげた証拠を示すために御言葉の中から自説に合わない一節を除外するという方法を除く)。

B. あからさまな信仰

1. ユダ、ヨハネ 17: 12
2. 大シモン、使徒行伝8章
3. マタイ 7: 13-23 に登場する人々
4. マタイ13章とマルコ4章とルカ8章に登場する人々
5. ヨハネ 8: 31-59 のユダヤ人
6. アレクサンドロとヒメナイ、Iテモテ 1: 19-20
7. Iテモテ 6: 21 の人々
8. ヒメナイとフィルト、IIテモテ 2: 16-18
9. デマス、IIテモテ 4: 10
10. 偽教師、IIペテロ 2: 19-22、ユダ 12-19 節
11. 反キリスト、Iヨハネ 2: 18-19

C. 実りのない信仰

1. Iコリント 3: 10-15
2. IIペテロ 1: 8-11

私達がこれらの聖句について考えることは稀である。なぜなら私達の組織神学(カルヴァン主義、アルミニウス主義など)では応答が義務とされているからである。どうか私に偏見を持たないでいただきたい。というのは、この話題を持ちだしたのは私だからである。私の関心は正しい聖書解釈の手順にある。私達は聖書に語ってもらい、そしてその語られたことを既存の神学に組み入れようとしてはいけない。これは苦痛で衝撃的なことである。というのは、私達の神学の多くは特定の宗派(の教義)に偏っており、文化的で関係(親、友人、牧師)志向であり、聖書的ではないからである。(自分は)神の人々の中にいる(と思いこんでいる)人々の一部は、実は神の人々の中にはいないのだということが(このことから)分かる(例えばローマ 9: 6)。

5: 5「というのは、わたしたちは聖霊を通じて信仰により」この聖句は救いのために(信徒に)必要な2つの特質を示している。

1. 人の応答(マルコ 1:15、使徒行伝 3: 16 と 19 節、20: 21 を参照)
2. 聖霊を慕い求めること(ヨハネ 6: 44 と 45 節、16: 7-13 を参照)

これらの聖句はギリシャ語原典では強調のために文頭に置かれている。

「義とされることの希望を待ち望んでいるからです」「希望」はしばしば新約聖書の中でイエス・キリストの再来を指す言葉として用いられている。イエス・キリストが再来される時に信徒の救いは完結することになる。新約聖書には私達の救いが以下に示す事柄として記されている。

1. 完了した行為
2. 存在状態
3. 過程
4. 将来完成されるものとして

これら救いに関連するこれら4つの事柄は相補的であり相互排他的ではない。私達は救われ、既に救われており、救われ続けていて、そして救われることになる。救いの未来の特徴はイエス・キリストの再来の時の信徒も栄光を受けることを伴う(I ヨハネ 3: 2 を参照)。救いについて未来に起こる出来事を記した他の箇所としてはローマ 8: 23、ピリピ 3: 21、コロサイ 3: 3 と 4 節がある。I テサロニケ 5: 9 の特別なトピック「救いについて用いられているギリシャ語動詞の時制」を見よ。

特別なトピック: 希望

パウロはこの用語をしばしばいくつかの互いに異なるが関連しあっている意味で用いている。しばしばそれは信徒の信仰の完成と関連がある(例えば I テモテ 1: 1)。これは栄光、永遠の命、究極の救い、イエス・キリストの再来などとして表現され得る。それが完成されるのは確実なことであるが、それが実現するのは未来であって未知である。それはしばしば「信仰」と「愛」と関連することであった(I コリント 13: 13、I テサロニケ 1: 3、II テサロニケ 2: 16 を参照)。パウロのこの用語の用例の一部を以下に示す。

1. イエス・キリストの再来、ガラテヤ 5: 5、エペソ 1: 18 と 4: 4、テトス 2: 13
2. イエスは私達の希望、I テモテ 1: 1
3. 神の御前に居るべき信徒、コロサイ 1: 22 と 23 節、I テサロニケ 2: 19
4. 希望は天に蓄えられている、コロサイ 1: 5
5. 福音を信頼する、コロサイ 1: 23、I テサロニケ 2: 19
6. 究極の救い、コロサイ 1: 5、I テサロニケ 4: 13 と 5: 8
7. 神の栄光、ローマ 5: 2、II コリント 3: 12、コロサイ 1: 27
8. キリストによる異邦人の救い、コロサイ 1: 27
9. 救いの確信、I テサロニケ 5: 8
10. 永遠の命、テトス 1: 2 と 3: 7
11. クリスチャンの成熟の結果、ローマ 5: 2-5

12. 全ての被造物の救い、ローマ 8: 20-22
13. 神の子とされることの完成、ローマ 8: 23-25
14. 神の称号、ローマ 15: 13
15. パウロの信徒への希望、II コリント 1: 7
16. 新約聖書を信じている人々への手引きとしての旧約聖書、ローマ 15: 4

「義」 2: 21 の特別なトピックを見よ。

5: 6 この発言はガラテヤ人への手紙の主題、つまり私達は人の行う儀式つまり行い—割礼、食物に関する戒律、あるいは道徳的生活—によってではなく信仰によって神の前に義とされることを要約している。

この結論的な聖句は受動態と中間態の両方で解釈されてきた (Barbara and Timothy Friberg 著 Analytical Greek New Testament の 584 ページと Harold K. Moulton 編の The Analytical Greek Lexicon 改訂版の 139 ページ)。ローマカトリック教会は概ね、愛が信仰の源であることを意味する受動態でその聖句を解釈してきた。しかし、プロテスタント派の多くは信仰が愛の源であることを意味する中間態でその聖句を解釈してきた (I テサロニケ 1: 3 を参照)。この聖句は新約聖書の中では通常中間態で用いられている (ローマ 7: 5、II コリント 1: 6、エペソ 3: 20、I テサロニケ 2: 13、II テサロニケ 2: 7 を参照)。信仰は第一に重要なことである。

これは自由にキリストを受け入れた異教徒の生活様式に関する偽教師達の質問に対するパウロの答えである。それは信徒の生活水準を定め従う能力を与える (救われた後の) 聖霊に基づく愛である。それは新しい契約であり、新しい心であり、そして新しい想いである (エレミヤ 31: 33、エゼキエル 36: 26-27 を参照)。

5: 7 「誰」 ある一人の偽教師を指すこの単数形代名詞は 7 節にも見られ、また 10 節には 2 箇所見られる。しかし、12 節には複数形が見られる。それは単数形の集合的用法であろう。しかし 3: 1 が理由で、その単数形の意味は以下に示すようなことだと考えられる。

1. ユダヤ教徒化した者達に思想を転換させられ、今は彼らの導く方向に教会を向かわせている、ある一人の地域指導者
2. 説得力に富み、ユダヤ教徒化した者である、ある一人の指導者

NASB 「あなたがたはよく走っていました。それなのに、あなたがたが真理に従うことを誰が邪魔したのですか」

NKJV 「あなたがたはよく走りました。それなのに、あなたがたが真理に従うことを誰が邪魔したのですか」

TEV 「あなたがたはよく走っていました。それなのに、あなたがたが真理に従うことを誰が邪

魔したのですか」

NRSV 「あなたがたはよくやっていました。それなのに、あなたがたが真理に従うことを誰がやめさせたのですか」

NJB 「あなたがたは調子よく走り始めました。それなのに、あなたがたが真理に従いたいという気持ちを誰が弱らせたのですか」

「あなたがたはよく走っていました」は未完了形能動態直説法である。これはガラテヤの諸教会がクリスチャンの成熟のために長年大いに尽力していたことを意味している。パウロはしばしば運動選手の比喩を用いた。彼が特に好きなのは「走っている」であった(2: 2、I コリント 9 章 24-26 節、ピリピ 2: 16 と 3: 12-14、II テモテ 4: 7 を参照)。

動詞「邪魔した」つまり「妨げた」(アオリスト能動態直説法)は一般に軍事的あるいは(スポーツ)競技的意味を持つ。軍事的意味ではこの語は接近中の敵軍の面前にある道路を破壊する行為を意味する。(スポーツ)競技的意味では、ある走者が他の走者の前に割り込んで自他ともに失格する行為を意味する。

パウロは 2 節の「真理に従う」と 8 節の「説得」との間の言葉遊びをしていた。これはガラテヤ人が個人的に責任感がなかったという意味ではなく、彼らが影響を受けていたことを意味している。

パウロは「福音に従う」の表現手段として「真理に従う」を用いた。2: 5 の特別なトピック「パウロの著作物における真理」を見よ。

5: 8「あなたがたを召された方」しばしばこの先行代名詞は明らかではない。ガラテヤ 1: 6 の中におけるのと同じく、この聖句は常に父なる神の選びを指して用いられる。I テサロニケ 2: 12 の解説を見よ。

5: 9「わずかなパン種」酵母は聖書中では新約聖書における一般的な格言(ことわざ)であり、しばしば否定的な意味で用いられる(マタイ 16: 6、マルコ 8: 15、I コリント 5: 6)が、例外もある(マタイ 13: 33 を参照)。ここではこの比喩は、行いによる義の原則の普及力を強調しているようだ(マタイ 16: 6 と 32 節を参照)。

特別なトピック: パン種

用語「パン種」(*zume*)は旧・新約聖書において2つの意味で用いられている。

1. 墮落、従って悪の象徴の意味
 - a. 出エジプト 12: 15、13: 3 と 7 節、23: 18、34: 25、レビ 2: 11、6: 17、申命記 16: 3
 - b. マタイ 16: 6 と 11 節、マルコ 8: 15、ルカ 12: 1、ガラテヤ 5: 9、I コリント 5: 6-8
2. 浸透、従って影響の意味だが悪の象徴の意味ではない。
 - a. レビ 7: 13、23: 17、アモス 4: 5
 - b. マタイ 13: 33、ルカ 13: 20-21

聖句だけがこの語の意味を決めることができる(全ての語に対する真実)。

5: 10「わたしはあなたがたを信頼しています」これは、パウロが過去にガラテヤの諸教会を信頼し、そして信頼し続けたことを意味する完了形能動態直説法である(Ⅱコリント 2: 3、Ⅱテサロニケ 3: 4、フィレモン 21 節を参照)。

「あなたがたが決して他の考えを受け入れることはないだろうと」 4: 12 の解説を見よ。

NASB 「あなたがたを惑わす者は誰であろうと裁きを受けましょう」

NKJV 「あなたがたを惑わす者は誰であろうと裁きを受けましょう」

TEV 「あなたがたを混乱させる者は誰であろうと罰を受けましょう」

NRSV 「あなたがたの心を乱そうとする者は誰であろうと神の罰を受けましょう」

NJB 「今後あなたがたを惑わす者は誰であろうと罰を受けましょう」

信徒は神の御前に責任ある者であるが、(悪しき者達の)影響を受ける可能性がある(1: 7、使徒行伝 15: 24 を参照)。神の信徒になりたての者達を協道に導く人々に対する処罰の厳しさはマタイ 18: 6-7 に見ることができる。

5: 11「わたしが今なお割礼を宣べ伝えているならば」これは著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定された第一種条件文である(この用法はこの文の構造が必ずしも現実の通りではないことを示している)。パウロはあえて見慣れない文法構造を用いて「彼らが今なお、割礼を宣べ伝えていることで私を責めているので」と言っている。そうした発言は以下に示す聖句に見ることができる。

1. 彼(パウロ)がテモテに割礼を施したこと(使徒行伝 16: 3 を参照)とテトスには割礼を施そうとしなかったこと(2: 2-5 を参照)
2. I コリント 7: 18-19 のパウロの発言

背景に何があろうと、パウロはユダヤ教徒化した者達の言動不一致を明言していた。というのは、彼が割礼を宣べ伝えていたならば彼らは熱狂的に彼を受け入れていたであろうからである。しかし彼らが彼を迫害していたので、それは彼が異邦人には割礼を宣べ伝えていなかったことの十分な証拠となる。

「もしそうなら、十字架のつまづきはとっくになくなっています」「つまづきの石」つまり「障害物」(*skandalon*)は「動物を捕えるためのわな」を意味する(ローマ 9: 33、I コリント 1: 23 を参照)。十字架はユダヤ教徒化した者達にとって気分を害するものとなった。というのは、得るために彼らが相当努力していたそれが神を信じた人々には(何の努力もなしに)自由に与えられたからである。

「とっくになくなっています」これは完了形受動態直説法である。3: 17 の特別なトピックを見よ。

5: 12

NASB 「あなたがたを惑わす者は自ら去勢してしまえばよいのにとわたしは願っています」

NKJV 「あなたがたを惑わす者は自ら去勢してしまえばよいのにとわたしは願っています」

TEV 「あなたがたを惑わす者は自ら去勢してしまえばよいのにとわたしは願っています」

NRSV 「あなたがたを惑わす者は行くところまで行ってしまえばよいとわたしは願っています。
彼らに自分達のしたいようにさせて自ら去勢してしまいなさい」

NJB 「あなたがたを惑わす者達に、わたしが彼らを去勢させたがっていると言いなさい」

「(手足などを)切断する」は「去勢」の意味で用いられている。歴史から知られているように、当時ガラテヤ州に存在していたキュベレ(小アジアで崇拝の対象となっていた自然の豊穡の女神)教では全ての指導者が去勢された(宦官)。パウロは割礼を皮肉をこめて誇張していた(ピリピ 3 章 2 節と同様に。その箇所では彼は彼らを「犬」と呼んでいる)。

NASB(改訂版)原典: 5: 13-15

¹³兄弟たち、あなたがたは自由を得るために召し出されたのですから、ただ、自分の得た自由を肉の機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。¹⁴というのは、「隣人を自分のように愛しなさい」という一言によって律法全体が成就するからです。¹⁵ですが、もし互いにかみ合い共食いでいるなら、互いに滅ぼし合わないよう気をつけなさい。

5: 13「兄弟たち、あなたがたは自由を得るために召し出されたのですから」この文で議論の新しい段階が始まる。用語「兄弟たち」は議題の変化の印となる。1~12 節が律法主義の蔓延を取り扱っているのと同じように、13~15 節は二律背反主義の蔓延を取り扱っている。私達は自分の得た自由を、墮落した人間の性質の生む罪深い欲情におぼれるための免許証として用いてはいけない。(ローマ 14: 1-15: 13 を参照)。

NASB 「ただ、自分の得た自由を肉の機会とせず」

NKJV 「ただ、自分の得た自由を肉の機会として用いずに」

TEV 「ただ、自分の得た自由を自分を甘やかす機会として用いずに」

NRSV 「ただ、この自由を自分の肉の欲望に自分を支配させる言い訳とせず」

NJB 「だが注意しなさい。そうしないとこの自由が自分を甘やかすきっかけとなるでしょう」

「機会」は軍事上の襲撃目標地域を意味する軍事用語(ローマ 6: 1-14 を参照)である。英訳聖書のいくつかは「肉」を成句「低俗な性質」と訳している。創世記3章に記されている墮落以来、人類の性癖は自我に対して歪められてきているので、この後者の訳語はパウロの用語「肉」の用法(1: 16 の特別なトピックを見よ)と符合する。アダムの性質と霊に導かれた生活との間の同様な対

比はローマ 8: 1-11 に表現されている。

「愛によって互いに仕えなさい」この動詞は完了形能動態直説法である。以前にパウロは、彼ら（ガラテヤの信徒達）が律法主義の奴隷となるべきではないと主張したが、ここではこの主張と、4: 愛によって互いに仕えよという命令との釣り合いをとっている（6 節、ヨハネ 13: 34-35、エペソ 5: 21、ピリピ 2: 3-4 を参照）。この聖句全体は個人的ではなく集団的である（Gordon D. Fee 著 *To What End Exegesis?* の154～172ページを参照）。

5: 14

NASB 「というのは、一言によって律法全体が成就するからです」

NKJV 「というのは、一言によって全ての律法が成就するからです」

TEV 「というのは、一つの戒律によって律法全体が要約されるからです」

NRSV 「というのは、一つの戒律によって律法全体が要約されるからです」

NJB 「というのは、一つの戒律によって律法全体が要約されるからです」

これと同じ真理はローマ 13: 8 とヤコブ 2: 8 に表現されている。これは神の明らかにされた御意志としての「律法」（マタイ 5: 17-20 を参照）であって、行いによる義認という救いの体系ではない。キリスト教において旧約聖書には正しく働く余地がまだあるのだ。これはセプトウアギンタ由来のレビ記 19: 18 からの引用であった。それは律法の目的に関するユダヤ教の指導者の要約として機能していたのかもしれない。それはマタイ 5: 43-48、22: 39、マルコ 12: 29-31、ルカ 10: 25-28 でイエスによってとてもよく似た用いられ方をしていた。これは完了時制の動詞であり、継続する状態への過去の行為の最高潮を強調している。それは（1）律法の要約、あるいは（2）律法の成就として理解され得る。

5: 15 これは著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定された第一種条件文である。この節は野生動物が互いに共食いし合う様子を表現した暴力的想像を用いており、それは偽教師達がガラテヤの諸教会の中に生み出していた恐ろしい現実の光景である。この解釈は 26 節のこれと同様に強烈な発言によって支持される。これは個人の問題ではなく集団の問題である。

NASB(改訂版)原典: 5: 16-24

¹⁶わたしは言います。霊のお導きに従って歩みなさい。そうすればあなたがたは肉の欲望を満たすことはないでしょう。¹⁷というのは、肉の欲望は霊に反し、霊の望むことは肉に反しているからです。これらが対立しているのです、あなたがたは自分達のしたいことができないのです。¹⁸しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいません。¹⁹肉の行いは明らかです。それは不道德、不純、みだらな行い、²⁰偶像崇拜、黒魔術、敵意、争い、嫉妬、怒りの爆発、口論、紛争]、紛争、派閥争い、²¹妬み、泥酔、大酒盛り、そしてこれらに類する行いです。以前から警告

しておいたようにここでも警告しておきますが、このようなことを行う者は神の御国を受け継ぐことはできません。²²しかし霊の実は愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、²³柔和、節制です。これらに対する律法はありません。²⁴キリスト・イエスにつながる人々は肉を欲情と欲望と一緒に十字架につけてしまったのです。

5: 16「霊のお導きに従って歩みなさい」 現在形能動態直説法動詞を用いて、パウロはガラテヤの信徒たちに超自然的で神の霊に導かれ続ける生活を送るように強く命じている(エペソ 4: 1 と 17 節、5: 2 と 15-18 節を参照)。ガラテヤの信徒たちに対するパウロのこのような勧告の主な要点は、聖霊は内なる救いをもたらすお方であるということである。従ってこの節は、聖霊の始められたこと(3: 3 を参照)はまた聖霊の成し遂げられること(ローマ 8: 16-25 を参照)でもあることを意味していた。これと関連する用語の、ローマ 8: 1 にあり 18 節に暗示されている「霊の律法」は I コリント 9: 21 とヤコブ 1: 25 と 2: 8-12 にある「キリストの律法」と全く同じである。愛の律法とは自分自身に対するのと同じように他者に仕えることである(ピリピ 2: 1-4 を参照)。

「そうすればあなたがたは肉の欲望を満たすことはないでしょう」 コイネギリシャ語に特有の最強の否定はアオリスト仮定法の二重否定であり、「決していかなる環境の下にもいない」を意味する。この否定語はこの節に見られ、この語の後には「喜ばせる(満足させる)」を意味する非常に強いギリシャ語の単語が続く。クリスチャン生活と永遠の救いの根源は超自然的である。信徒は救われた者と言われるだけでなくキリストのようになった者と言われる(ローマ 8: 28-29、ガラテヤ 4 章 17 節、エペソ 1: 4 を参照)。パウロはよく「肉」と「霊」とを対比させる(ローマ 8 章 1-11 節を参照)。パウロは「肉」(*sarx*)を2つの意味、つまり(1)肉体(2)人類の墮落した罪深いアダムの性質、で用いている。ここでは明らかに(2)の意味である。1: 16 の特別なトピック「肉(*sarx*)」を見よ。

5: 17 この2通りの生活様式の対比はローマ 8: 1-11 にも見られる。パウロは救われる方法を2通り挙げている:(1)人の努力(2)キリストにある神の自由な恵み。神のように生活する方法は2通りある:(1)[墮落に影響される]人の努力(2)聖霊にある神の自由な力。ユダヤ教徒化した者達は救いとクリスチャン生活の両方における人の努力を主張していたが、パウロはそれら両方における神の超自然的備えを主張した。

5: 18「しかし、霊に導かれているなら」 これは著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定された第一種条件文である。霊に導かれる人々は律法に支配されない(ローマ 6: 14 と 7: 4 と 6 節を参照)。これはクリスチャンが罪を犯さない(ローマ 7 章と I ヨハネ 2: 1 を参照)という意味ではなく、彼らの生活が神に対して反逆的ではない(I ヨハネ 3: 6 と 9 節を参照)という意味である。

「あなたがたは律法の下にはいません」ギリシャ語の原典では用語「律法」の前に冠詞がないので、この語は単なるユダヤ教の律法にとどまらず幅広い意味を持っていたと思われる。ここでの律法の意味は神に近づくための生活様式である。また、ここには神を喜ばせる、つまり神に受け入れられるための2つの方法が対比されている。それらは自己努力と神の自由な恵みである。

5: 19「肉の行いは明らかです」多くの解説者はこの一連の罪をいくつかの区分に分けて見ている。しかし、ここには主に異教の礼拝過多に基づく一貫性がある。人々は自らの行いと動機において真の自己を現す(マタイ 7: 16 と 20 節, 12: 33 を参照)。

KJV はこのリストに用語「姦通」を加えている。このことは紀元6世紀のギリシャ語原典 D の Codex Bezae だけが裏付けている。この語は古代ラテン語聖書とウルガタ聖書でもリストに加えられている。「肉」については 1: 16 の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: 新約聖書における悪と善

悪と善のリストは新約聖書では一般的である。しばしばそれらはユダヤ教の指導者の作ったリストあるいは文化的(ギリシャ文明的)リストを反映している。新約聖書中に見られる、善悪両者の特徴を対比させたリストを以下に示す。

	悪	善
1. パウロ	ローマ 1: 28-32	—
	ローマ 13: 13	ローマ 12: 9-21
	I コリント 5: 9-11	—
	I コリント 6: 10	I コリント 6: 6-9
	II コリント 12: 20	II コリント 6: 4-10
	ガラテヤ 5: 19-21	ガラテヤ 5: 22-23
	エペソ 4: 25-32	—
	エペソ 5: 3-5	—
	—	ピリピ 4: 8-9
	コロサイ 3: 5 と 8 節	コロサイ 3: 12-14
	I テモテ 1: 9-10	—
	I テモテ 6: 4-5	—
	II テモテ 2: 22 前半と 23 節	II テモテ 2: 22 後半と 24 節
	テトス 1: 7、3: 3	テトス 1: 8-9、3: 1-2
2. ヤコブ	ヤコブ 3: 15-16	ヤコブ 3: 17-18
3. ペテロ	I ペテロ 4: 3	I ペテロ 4: 7-11
	II ペテロ 1: 9	II ペテロ 1: 5-8
4. ヨハネ	黙示録 21: 8、22: 15	—

NASB 「不道德、不純」
NKJV 「姦淫、不純」
TEV 「姦淫、不純」
NRSV 「不道德、不潔」
NJB 「姦淫、公然猥褻」

この前者のギリシャ語の用語[*porneia*]は元々「売春婦」を意味していたが、後に一般に性的不道德を指す言葉として用いられるようになった(Ⅰコリント 6: 9 を参照)。英語でこれに対応する用語は、このギリシャ語の用語に由来する「好色文学[春本、春画、猥褻文書]」である。後者の用語[*akatharsia*]、つまり「不純」も、元々は旧約聖書中で儀礼上あるいは道徳上の不潔を意味していたが、性的不道德を指す一般的用語である。

NASB 「みだらな行い」
NKJV、NRSV 「みだらな行い」
TEV 「猥褻行為」
NJB 「性的無責任」

これは性的欲望の公的誇示を意味する(Ⅱコリント 12: 20 を参照)。この種の性行為には限度がなく、また社会的に禁止しようにも法的に限度を設けることが難しい。異教崇拝の特徴は(後の時代の一部のグノーシス主義者である偽の教師たちがそうであったように、Ⅰテモテ 1: 10、Ⅱテモテ 3: 6、テトス 3: 3 を参照)性行為である。

5: 20「偶像崇拝」 これは神に代わる何者(物)かを崇拝することに関連がある(Ⅰコリント 10: 14、エペソ 5: 5、コロサイ 3: 5、Ⅰペテロ 4: 3 を参照)。それは特に立像つまり無生物の物体を崇拝する行為に関連がある。

「黒魔術」 これは、英語の用語「pharmacy」のもとになったギリシャ語の用語 *pharmakia* であった。黒魔術[魔法、妖術]は薬剤を用いて宗教的な体験に誘う行為に関連があったようだ。後にこの語はあらゆる魔術を指す言葉として用いられた。

NASB 「敵意、争い、嫉妬、怒りの爆発、口論、紛争、派閥争い」
NKJV 「憎しみ、争い、嫉妬、怒りの爆発、自己中心的野望、紛争、異端信仰」
TEV 「敵意、争い、嫉妬、怒り、けんか、紛争、派閥争い」
NRSV 「人々は敵対し争い、嫉妬深く、怒りっぽく、野心的になりました」
NJB 「争い、口論、嫉妬、怒りとけんか、論争、派閥争い」

このうんざりするような否定的な言葉の羅列は、怒りっぽく、墮落した、自己中心的な人々の態度と行いを表現している。

「敵意」 この用語 (*echthra*) は人々に対する特徴的な敵意を表現している。

「争い」 これは「賞金争い」を意味している。

「嫉妬」 この用語 (*zelos*) は肯定・否定両方の意味を持つが、この文脈では「自己中心性」を意味している。

「怒りの爆発」 このギリシャ語の用語 (*thumos*) は「突然の制御不能な怒りの爆発」を意味している。

「口論」 これは、限度を知らない自己探求つまり野望に基づく論争を意味している。

「紛争、派閥争い」 これら2語は2語1組で解釈される。これら2語は大きな集団、つまり似たもの同士のグループから政党まで全てを指す集団 (I テモテ 5: 15 と 26 節を参照) の内部の派閥争い的な内部分裂を表現している。そのような集団はコリントの教会のような教会群を指して用いられている (I コリント 1: 10-13、11: 19、II コリント 12: 20 を参照)。

5: 21「妬み」 この時代のストア哲学の有名な格言のひとつに「妬みは他者の善を嘆き悲しむことである」というのがある。

もっと前の時代のギリシャ語原典の中には用語「妬み」の後に用語「殺人」を付け加えているものもある。その語は原典 A、C、D、G、K、P には見られるが、P⁴⁶、^R、B の中には見られない。その語は初期の異端マルシオンや初期教会の教父のイレネウス、アレクサンドリアのクレメンス、オリゲン、クリソストム、ジェローム、アウグスティヌスらの著作物にも見られない。律法学者達がローマ 1: 29 からその語を付け加えたと思われる。

「泥酔、大酒盛り」 これらの最後の2語は異教崇拜に関連する大宴会 (行き過ぎた酒乱的パーティー) を表現している。

「そしてこれらに類する行いです」 この聖句はこのリストが排他的ではなく典型的であることを示している (I コリント 6: 9-10、エペソ 5: 5 を参照)。ここで注意が必要なのであえて述べておくが、パウロの宣教当時のガラテヤの信徒達が前者 (排他的) であったことは覚えておいたほうがよいかもしれない。この節は I ヨハネ 5: 16 とともに、ローマカトリック教会が死に値する罪と容易に赦される軽い罪とを区別する根拠の中心がある。しかしこの解釈は、用語間の定義の重複と、これらの罪はクリスチャンでも犯すことがあるという事実の点から極めて疑わしい。これらの節は、クリスチャンはこれらの罪を犯しても救われた状態が続くとはいえ、これらの罪の影響を受けた、つまり

これらの罪に支配された生活を送るなら、彼らは真にキリストにあって新しく生まれた者とはなっていないのだと警告している(Iヨハネ 3: 6 と 9 節)。

「以前から警告しておいたようにここでも警告しておきますが、このようなことを行う者は神の御国を受け継ぐことはできません」 人の生活様式の選び方にはその人の心が現れる。真に救われた人々は今も罪と闘い続けているが、彼らは罪の影響を受けた生活を送っていない(Iヨハネ 3: 6 と 9 節を参照)。そのことは、これらの罪が赦され得ない、つまり真のクリスチャンはこれらの罪を犯さないということではなく、真の信徒の内にキリストらしさの過程が始まっているということなのである。信徒をキリストに導かれた霊は今も信徒の内にキリストを形づくっておられる(4: 19、ヨハネ 16 章 8-13 節を参照)。イエスはマタイ7章「あなたがたは実でそれら[木]を見分ける」とヨハネ15章で信徒の生活様式についてはっきりと述べられた。

「神の御国」はイエスの最初と最後の説教と語られた寓話(たとえ話)の大半の主題である。人の心の中の神の御臨在はいつの日か全地で完成されることだろう(マタイ 6: 10、I コリント 6: 9-10、エペソ 5: 5 を参照)。

特別なトピック: 神の御国

旧約聖書では YHWH はイスラエルの王(I サムエル 8: 7、詩篇 10: 16、24: 7-9、29: 10、44: 4、89: 18、95: 3、イザヤ 43: 15、44: 4 と 6 節を参照) および理想の王としてのメシア[救世主](詩篇 2: 6、イザヤ 9: 6-7、11: 1-5 を参照)と考えられている。イエスがベツレヘムにお生れになった(紀元前6~4世紀)ことで神の御国は新しい力と救い(新しい契約、エレミヤ 31: 31-34、エゼキエル 36: 27-36 を参照)とともに人類の歴史の中に登場した。洗礼者ヨハネは御国が近づいていることを宣言した(マタイ 3: 2、マルコ 1: 15 を参照)。イエスは御国が御自身と御自分のお教えの中にあることをはっきりと教えられた(マタイ 4: 17 と 23 節、9: 35、10: 7、11: 11-12、12: 28、16: 19、マルコ 12: 34、ルカ 10: 9 と 11 節、11: 20、12: 31-32、16: 16、17: 21 を参照)。しかし御国は未来でもある(マタイ 16: 28、24: 14、26: 29、マルコ 9: 1、ルカ 21: 31、22: 16 と 18 節を参照)。

マルコの福音書とルカの福音書の中の共観福音書的な同一箇所の記述の中には聖句「神の御国」が見られる。イエスのお教えのこの共通のトピックは人の心の中の神の御臨在であり、それはいつの日か全地で完成されることになっている。これはマタイ 6: 10 のイエスの祈りに反映されている。マタイはユダヤ人への手紙の中で神の御名を用いない聖句(天の御国)を好んで用いたが、マルコとルカは異邦人への手紙の中で一般的に神の御名を用いた。

これは共観福音書群の中でとても重要な聖句である。イエスの最初と最後の説教と語られた寓話(たとえ話)の大半ではこのトピックが取り扱われている。ここではそれは人の心の中の神の御臨在のことである。驚くべきことにヨハネはこの聖句をたった2回しか(自著中のイエスの寓話の中では全く)用いていない。ヨハネの福音書の中では「永遠の命」が重要な比喻である。

この聖句に関連する緊張はキリストがこの世に2回来られることによって起こっている。旧約聖

書は主に神のメシア(救世主)の来られること—天の軍勢を伴われ、裁きのために、栄光に満ちて来られること—を記しているが、新約聖書はイエスが最初(1度目)に、イザヤ 53 章に記されているような苦しみのしもべとして、またゼカリヤ 9: 9 に記されているような謙遜な王として来られたことを示している。ユダヤの2つの世、つまり悪の世と新しい義の世とは重複している。イエスは今は信徒の心の中に臨在されているが、いつの日かその御臨在は全ての被造物に及ぶことになっている。イエスは旧約聖書の預言通りに来られることになっている。信徒は神の御国の「すでに」対「まだ」の中に生きている(Gordon D. Fee と Douglas Stuart 共著 *How to Read The Bible For All Its Worth* の 131~134 ページを参照)。

5: 22「しかし霊の実は」 パウロは人の努力を肉の業と表現したが、クリスチャン生活は霊の「実」つまり産物と表現した。だから彼は人中心の宗教と超自然的なもの中心の宗教とを区別した。明らかに霊の実と霊の賜物は違う。霊的な賜物は救いのときに全ての信徒に与えられる(I コリント 12: 7 と 11 節を参照)が、霊の実はイエス・キリストの御意志とお心の持ち方と御生活のありさまを表現するもう一つの比喻である。霊の賜物はそれぞれキリストのお体の中の様々なお働きであるので、霊の実はこれらの賜物を用いられる場合のお心の持ち方の全てである。(自分が用いるのに)有効な賜物を持つことはできてもキリストのような心の持ち方をすることはできない。従って、キリストのような成熟とは霊の実であり、霊の様々な賜物を通して神に最上の栄光を捧げる。これらはどちらも霊の満たしによってもたらされる(エペソ 5: 18 を参照)。

霊の実がこの節では単数形であることも興味深いことである。単数形で用いられていることは2通りに理解され得る: (1) 後出の様々な語によって表現されているように、愛は霊の実である(2) それは「子孫」のような単数形の集合的用法である。

「愛」愛を意味するこのギリシャ語の用語 *agape* は神が御自分から与えられる愛という特定の意味を指す言葉として初期教会によって用いられた。この名詞は古代ギリシャ語ではあまり頻繁には用いられていなかった。初期教会は神の特別な愛を表現するために新たな意味をその語に導入した。ここでの愛は神学的に *hesed* (BDB338)、つまり旧約聖書に見られる神の契約への忠実さと愛に類似する語である。

「喜び」喜びは、自分の置かれている環境に無関係にキリストと共にいることを喜ぶという生活態度である(ローマ 14: 17、I テサロニケ 1: 6 と 5: 16、ユダ 24 節を参照)。

「平和」平和とは以下に示すような意味で用いられているようだ。

1. 私達とキリストとの関係の健全さ
2. 自分の置かれた環境に依らない、神の啓示に基づく新しい世界観

3. 他の人々、特に信徒と私達との関係の平穏さ(ヨハネ 14: 27、ローマ 5: 1、ピリピ 4: 7 を参照) 神との平和は自分の内と外(つまり契約の兄弟姉妹)との平和をもたらす。

「寛容」長い(長期間の)苦難は挑発(怒らせること)に直面しているときでさえ当然のことである。これは父なる神の御性質であった(ローマ 2: 4、9: 22、I テモテ 1: 18、I ペテロ 3: 20 を参照)。神が私達に対して長期間寛容でいらっしやるので、私達は他の人々(エペソ 4: 2-3 を参照)、特に信徒(6: 10 を参照)に対して寛容でなければならない。

「親切、善意」 「親切」はイエスの御生涯だけでなく経験された苦難も表現している(マタイ 11: 30 を参照)。この2語はともに他の人々、特に信徒(6: 10 を参照)への肯定的で開かれた、受け入れようという態度を表現している。

「誠実」 *Pistis* は旧約聖書の中で忠実さや信頼性の意味で用いられている。その語は通常は神について用いられる(ローマ 3: 3 を参照)。ここではその語はある信徒と他の人々、特に他の信徒との新しい関係を表現している。

5: 23「柔和」時々「従順」と訳される *praotes* とは従順な精神を意味する。その語は飼い慣らされた動物からとられた比喻である。柔和はギリシャ語やストア哲学では美德(善)のリストに入っていない。なぜならギリシャ人はそれを弱さと見ているからである。それはクリスチャンに特有の性質である(I コリント 4: 21、II コリント 10: 1、エペソ 4: 2、コロサイ 3: 12、I テモテ 6: 11、II テモテ 2: 25、テトス 3: 2 を参照)。その語はモーセ(民数記 12: 3 を参照)もイエス(マタイ 11: 29 と 21: 5 を参照)も用いた。

「節制」 リストの最後の語である節制はキリストのような成熟の特徴である(使徒行伝 24: 25、テトス 1: 8、II ペテロ 1: 6 を参照)。この用語は I コリント 7: 9 で性的衝動の抑制について用いられているので、ここでは異教崇拜の性の濫用のリストを暗示させる。

「これらに対する律法はありません」 信徒の人生には、神のように生きることによって自身の存在を示すという、新たな内なる律法がある(ローマ 6: 19、ヤコブ 1: 25 と 2: 8 と 12 節を参照)。これはまさに新しい契約の目標である(エレミヤ 31: 31-34、エゼキエル 36: 22-32 を参照)。キリストのようになることは神が全てのクリスチャンに定められた目標である(ローマ 8: 28-29、ガラテヤ 4 章 19 節、エペソ 1: 4 を参照)。

「キリスト・イエスにつながる人々は肉を十字架につけてしまったのです」 これは過去に完了した行為について述べるアオリスト能動態直説法動詞である。この文と神話的な集団を意味するその

他の文は神学的な範疇の中で解釈され得る(ローマ 6: 6 を参照)。ガラテヤ人への手紙の全般にわたって、特に 2: 20 において、「十字架に架かる」は私達と律法の間を特徴づけるのに用いられる。神が無償でお与えくださる、キリストにある恵みを救いの唯一の手段として受け入れたからには、私達は断固として自身の墮落した性質と墮落した世の体系という悪を自身から切り離す。悪を自身から切り離すという個人的な決断は、ガラテヤ 2: 20 と 5: 24 と 6: 14 に見られる、「磔刑」の聖書的な比喩である。

これはしばしば「自分に死ぬ」という言葉で特徴づけられる。神は私達各自を(詩篇 139 篇を参照)自分自身にではなく彼御自身に仕えるように造られた(ローマ 6 章を参照)。このキリストにある新しい命は、反逆的な人類の墮落した自己中心的な生活様式の死を意味する(2: 20、ローマ 6 章 11 節、II コリント 5: 14-15、I ヨハネ 3: 16 を参照)。

「肉」については 1: 16 の特別なトピックを見よ。

「**欲情と欲望と一緒に**」ギリシャ人は体を罪深さの源と見ていた。なぜなら彼らは創造と人類の墮落に関する超自然的な啓示(創世記 1~3 章を参照)を受けなかったからである。だから彼らは道徳的に中立な肉体を悪の源とみなして非難した。信徒は体が道徳的に中立であることをパウロの教えから理解している(ローマ 4: 1、9: 3、I コリント 10: 18 を参照)。イエスは現実の人の体を持っておられた(ヨハネ 1: 14、ローマ 1: 3、9: 5 を参照)。その(体の)良し悪しは私達がそれをどのように用いるか、つまり神のために用いるか悪のために用いるかに依る。私達は信徒となったからには自身の墮落した自己中心的な性質を聖霊の御力に明け渡さなければならない(ローマ 7 章と I ヨハネ 2: 1 を参照)。

NASB(改訂版)原典: 5: 25-26

²⁵霊のお導きに従って生きているのなら、霊のお導きに従って歩んでいきましょう。²⁶うぬぼれたり、互いに挑発し合ったり、ねたみ合ったりしないようにしましょう。

5: 25「**霊のお導きに従って生きているのなら、霊のお導きに従って歩んでいきましょう**」これは著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定された第一種条件文である。これは章全体を要約している(16 節、ローマ 8: 1-11 を参照)。信徒は無償の恵みを受けているので、彼らはそれにふさわしい生き方をしなければならない(エペソ 4: 1 と 17 節、5: 2 と 15-21 節を参照)。

5: 26 これは 15 節と同じことを述べており、ユダヤ教徒化した者達のガラテヤの諸教会への誤った教えのもたらす恐ろしい結果と、人々の間にあった分裂(崩壊)的雰囲気や霊が制御されなかったことを示している。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 5章をガラテヤ人への手紙の他の章と関連づけて要約しなさい。
2. 自由とそれがクリスチヤンの生活において意味することを説明しなさい。
3. 結論的聖句である4節の文脈上の意味を説明しなさい。
4. 私達に無償で与えられた福音は私達の生活様式をどのように制御しているのか。
5. 現代の教会における15節と26節の持つ意味は何か。
6. 19～21節はガラテヤの諸教会あるいは異教崇拜の風潮について述べているか。
7. 霊の賜物はどのように霊の実と関連しているか。

ガラテヤ人への手紙6章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
互いの重荷を負う	重荷を負い分け合う	クリスチャンが自由を行使するときの特別な注意点	互いの重荷を負う	柔和さと忍耐において
6: 1~10	6: 1~5	6: 1~5	6: 1~5	6: 1~5
	寛大になり善を行う	大洪水		人類の墮落
	6: 6~10	6: 6	6: 6	6: 6~10
		6: 7~10	6: 7~10	
最終警告と祝福	栄光は十字架上だけに	パウロの自伝的後記	最終警告と挨拶	後記
6: 11~16	6: 11~15	6: 11~16	6: 11~16	6: 11~16
	祝福と哀願			
	6: 16~18			
6: 17		6: 17	6: 17	6: 17~18
6: 18		6: 18	6: 18	6: 18

第三読書サイクル(viiページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上に挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

文脈の洞察

- A. ガラテヤ 5: 1~6: 10 はパウロの主張する、キリストの根本的に無償の恵みの実際の側面であり、神の愛と恵みおよび悔い改めと信仰の応答を通して信徒に与えられる。
1. 6: 1-5 は、罪を犯しているクリスチャンの兄弟への対処方法についての特別な指針を与える。
 2. 6: 6-10には新約聖書の中で最も記憶に残り易い2つの引用がある。解説者達の中にはそれを一連の互いに無関係な真理群とみる者もいるし、信徒のお金の使い方に関する文章単位とみる者もいる。
- B. ガラテヤ 6: 12- 16 はこの書簡全体の短い要約である。
- C. 6: 17- 18 のパウロの短い結語は、同じく彼の書いたエペソ人への手紙を思い出させる。エペソ人への手紙には終わりの挨拶が特にはなかった。ガラテヤ人への手紙はある地理的地域のいくつかの教会に宛てて書かれたことを思い出そう。

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 6: 1-5

¹兄弟たち、もしも誰かが何らかの罪にとらわれているなら、霊の人であるあなたがたは、そのような人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい。あなたがた各自も、誘惑されないように自身に気をつけなさい。²互いに重荷を負い合い、そうすることによってキリストの律法を全うしなさい。³というのは、もしも誰かが、現実には何者でもないのに、自分は何らかの地位ある者であると思うなら、その人は自身を欺いているからです。⁴あなたがた各自は自身の行いを吟味しなければなりません。そうすれば、自身に対してだけは誇れても、他者に対しては誇る事ができないでしょう。⁵というのは、わたしたち各自が自身の重荷を負わなければならないからです。

6: 1「もしも」 これは、重要な行為を意味する第三種条件文を導入する語である。

「もしも誰かがとらわれているなら」 これはアオリスト受動態仮定法である。文字通り「不意を突かれた」である(William D. Mounce 編 The Analytical Lexicon to the Greek New Testament の 393 ページを参照)。この聖句は罪に対する私達自身の責任および罪の巧妙な誘惑と罠とを指摘している(エペソ 4: 14 と 6: 10-18 を参照)。神の恵みを故意に妨げない人々がいた。彼らは騙されたのだ。

NASB、NKJV	「何らかの罪に」
NRSV	「罪に」
TEV	「何らかの悪行に」
NJB	「悪い行いをする」

ここには少なくとも3つの罪についての記述があるようだ。

1. 偽教師達の影響。これは、割礼を受けよという誘惑に負け、モーセの律法による保護を求めていた人々のことを言っているようだ。
2. 5: 15 と 26 節に強い言葉が用いられているので、それはガラテヤの諸教会にあった破壊的傾向のことを言っているようだ。
3. これは 5: 19-21 に記された過度の異教崇拜と関連しているようだ。

これらに引き続く指針は、墮落した兄弟との交わりを信徒がどのようにして回復すべきかを教会に示すのに極めて有用である。

NASB、TEV	「霊の人であるあなたがた」
NKJV	「霊の人であるあなたがた」
NRSV	「霊を受けているあなたがた」
NJB	「より霊的であるあなたがた」

この聖句は「罪のないあなたがた」と言う意味に誤解されるべきではない。霊的成熟についてはすでに 5: 16-18 と 22-25 節で議論した。霊的成熟とは

1. キリストの心を持つこと
2. 霊の実を生かして生きること
3. しもべの心を持つこと
4. クリスマン仲間に仕えること

である。I テサロニケ 5: 21 の特別なトピック「クリスマンは互いに裁きあうべきか」を見よ。

「そのような人を正しい道に立ち帰らせなさい」「立ち帰らせる」は現在形能動態命令形、つまり進行中の命令であり、折れた骨を継ぐことや漁の網の修繕について言うときに用いられる(マタイ 4 章 21 節とマルコ 1: 19 を参照)。その語は、教会内の他者全ての霊的発達を助け(エペソ 4: 13 を参照)て墮落しつつある人々を正しい道に立ち帰らせる(II コリント 13: 11 を参照)ことができるほどに、キリストにあって成熟している人々にとって重要である。

赦しと非批判主義とは成熟したクリスマンの聖書的しるしである(マタイ 5: 7、6: 14-15、18: 35 ルカ 6: 36-37、ヤコブ 2: 13、5: 9 を参照)。教会訓練は常に悪意的ではなく救いにつながるものでなければならない(II コリント 2: 7、II テサロニケ 3: 15、ヤコブ 5: 19-20 を参照)。私達は傷ついている人をわざと撃つたりはしないのだ。

「誘惑されないように自身に気をつけなさい」この文脈の「誘惑する」[peirazo]は「破壊的な考え方に誘惑する」の意味である。同じ語はマタイ 4 章でイエスを誘惑する悪者について用いられている。「誘惑する」を意味するもう一つの語[dokimazo]は 4 節で2回用いられているが、この語の意味は「受け入れようという気持ちを持たせるように試みる」である。サタンは信徒を破滅させようと試

み誘惑しようとする。信徒は自身の内と外とを守らなければならない(I コリント 10: 12、II コリント 13: 5 を参照)。I テサロニケ 3: 5 の特別なトピックを見よ。

6: 2「互いに重荷を負い合いなさい」 これは現在形能動態命令形である。「互いに」はギリシャ語原典では強調に適した位置に置かれている。生活様式に則して言えば、成熟したクリスチャンは自分より弱く未成熟な兄弟たちの面倒を見てあげるべきである(ローマ 14: 1、15: 1 を参照)。これはとても実践的で目に見える形で新しい律法を成就する(5: 14 を参照)。

「重荷」とは貨物運搬用の家畜に載せられた、押しつぶされそうに重い荷物について述べるのに用いられる(マタイ 23: 4 を参照)。文脈中ではその語はユダヤ教徒化した者達の口述の伝統を比喩的に述べるのに用いられた。その語は、5 節に見られ「重荷」を意味してはいるが、兵士の背囊に対応する語とは別の語である。

「そうすることによってキリストの律法を全うしなさい」 キリストの律法は I コリント 9: 21 でも述べられており、またローマ 8: 2 では「イエス・キリストによる命の霊の律法」とある。キリストの律法はヤコブの手紙でも様々に言い表されている。

1. 1: 25「人々を自由にする、誤りのない律法」
2. 2: 8「王の律法」
3. 2: 12「自由の律法」

モーセの律法を解釈したものである口述の伝統のくびきはユダヤ人にとって押しつぶされそうに重い荷物となってきたが、キリストのくびきは負いやすく軽い(マタイ 11: 29-30 を参照)。しかし、くびきとはそういうものであり(ヨハネ 13: 34、I ヨハネ 4: 21 を参照)、このくびきはキリストにある兄弟姉妹と互いに愛し合い仕え合うという私達の責任である。

この動詞はここでは原典の中で2種類の時制で見られる。

1. MSS の^R、A、C、D の中のアオリスト命令形
2. MSS の B、F、G の中の未来形能動態直説法
3. MSS の P⁴⁶ の中の、語頭に前置詞を伴う未来形能動態直説法

UBS⁴ 委員会は上記のどれが本来のものかを明らかにしていない。彼らは、1 節の先行不定詞のために未来形がアオリスト命令形に変わったのだろうと考えた(Bruce Metzger 著 *A Textual Commentary on the Greek New Testament*)。

6: 3「もしも誰かが、現実には何者でもないのに、自分は何らかの地位ある者であると思うなら」

これは著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定した第一種条件文である。クリスチャンは他者と互いに適切な関係を持つことができるように、そして自身を過大評価することを避けることができるように自身を吟味するべきである(I コリント 3: 18 を参照。イザヤ 5: 21 を反映しているとも言える)。これはクリスチャンが罪を犯すことはないという意味ではなく、罪が彼らの生活を支

配することはないという意味である(Iヨハネ 1: 8 および 3: 6 と 9 節を参照)。だから彼らは、罪に支配された生活を送る人々を助けてその人々のために祈るべきである(I コリント 3: 18 を参照)。

「その人は自身を欺いている」 この動詞は新約聖書全体中でただ1回しか登場せず、その意味は自身を誤ちに誘惑することである。この動詞の名詞形はテトス 1: 10 に見られる。自己欺瞞は盲目のうちで最悪のものである。

6: 4「あなたがた各自は自身の行いを吟味しなければなりません」 これは「受け入れようという気持ちを持たせるように試みる」という意味の「試みる」つまり「誘惑する」に対応する語 [*dokimazo*] の現在形能動態命令形である。I テサロニケ 3: 5 の特別なトピックを見よ。

「そうすれば、自身に対してだけは誇れても、他者に対しては誇ることができないでしょう」 信徒は自身と他者、特に不意を突かれて罪に囚われている人々(1 節を参照)とを比べることがないように注意しなければならない(II コリント 10: 12 を参照)。

特別なトピック: 自慢

これらのギリシャ語の用語 *kauchaomai*、*kauchema*、*kauchesis* はパウロによって約35回、新約聖書の他の箇所でも2回だけ(2回ともヤコブの手紙で)用いられている。コリント人への手紙第一と第二ではもっと頻繁に用いられている。

自慢に関連する2つの主な真理がある。

1. 神の前では誰も誇る(自慢する)べきではない(I コリント 1: 29、エペソ 2: 9 を参照)
2. 信徒は主にあって誇るべきである(I コリント 1: 31、II コリント 10: 17 を参照。エレミヤ 9: 23-24 に暗示されている)

従って自慢あるいは誇り(つまり高慢)には適切なものと不適切なものがある。

A. 適切なもの

1. 天国への希望において(ローマ 4: 2 を参照)
2. 主イエスを通して神にあって(ローマ 5: 11 を参照)
3. 主イエス・キリストの十字架において(つまりパウロの主題。I コリント 1: 17-18、ガラテヤ 6: 14 を参照)
4. パウロの自慢
 - a. 自身の無報酬の働き(I コリント 9: 15 と 16 節、II コリント 10: 12 を参照)
 - b. キリストから与えられた自身の権威(II コリント 10: 8 と 12 節を参照)
 - c. 他者の労苦に対して自分は誇らないこと(コリント人への手紙の中で数回述べたように、II コリント 10: 15 を参照)

- d. 自身の種的遺産[訳者注: 祖先から受け継いだこと](コリント人への手紙の中でも他者がそうしていたように、Ⅱコリント 11: 17、12: 1 と 5 節と 6 節を参照)
- e. 自分の教会
 - (1)コリント(Ⅱコリント 7: 4 と 14 節、8: 24、9: 2、11: 10 を参照)
 - (2)テサロニケ(Ⅱテサロニケ 1: 4 を参照)
 - (3)神の慰めと救いによる自信(Ⅱコリント 1: 12 を参照)

B. 不適切なもの

1. ユダヤ人の遺産との関連(ローマ 2: 17 と 23 節、3: 27、ガラテヤ 6: 13 を参照)
2. コリントの教会の一部の人々は自慢していた
 - a. 人を(Ⅰコリント 3: 21 を参照)
 - b. 知恵を(Ⅰコリント 4: 7 を参照)
 - c. 自由を(Ⅰコリント 5: 6 を参照)
3. 偽教師達はコリントの教会を自慢しようとしていた(Ⅱコリント 11: 12 を参照)

6: 5「というのは、わたしたち各自が自身の重荷を負わなければならないからです」これは終末論的つまり終りの時の設定(Ⅱコリント 5: 10 を参照)におけるキリストの裁きの座のことを言っているようだ。一見すると 2 節と 5 節は、より詳細な語の研究によってそれぞれ用法の異なる「重荷」と「負荷」という 2 つの語に訳される 2 語が明らかにされない限りは互いに矛盾しているように思える。前者の 2 節に登場する語(*baros*)は「押しつぶされそうに重い荷物」の意味であり、後者の 5 節に登場する語(*phortion*)は「必要な装備で一杯になった兵士の背囊」の意味である。成熟したクリスチャンは自身への、あるいは時に他者への責任という重荷を負わなければならない。このことの例となるのはⅡコリント 8: 13-14 かもしれない。同じ用語はマタイ 11: 30 でイエスがクリスチャンに対して示された指針の中で用いられた。

NASB(改訂版)原典: 6: 6-10

⁶御言葉を教えられる人は持っている物全てを教えてくれる人と分かち合いなさい。⁷騙されてはいけません。神は侮られるような方ではありません。というのは、人は蒔くものが何であれ、この蒔いたものを刈り取ることもなるからです。⁸自身の肉に蒔く人は肉から滅びを刈り取りますが、霊に蒔く人は霊から永遠の命を刈り取ります。⁹善を行うのをあきらめないようにしましょう。たゆまず励んでいれば、時が来て、実を刈り取るようになります。¹⁰ですから今、時のあるうちに、全ての人に、特に信仰の家族である人々に対して善を行いましょ。

6: 6「御言葉」これはヨハネ 1: 1 の「言葉」と同じ語幹に由来し、イエスを指す用語である。この「御言葉」はイエスの、そしてイエスについての福音である。パウロはこの「御言葉」について様々な言い表し方を用いている。

1. 「神の言葉」 I コリント 14: 36、II コリント 2: 17、4: 2、ピリピ 1: 14、コロサイ 3: 16、I テサロニケ 2: 13
2. 「主の言葉」 I テサロニケ 1: 8、II テサロニケ 3: 1
3. 御言葉 ガラテヤ 6: 6、I テサロニケ 1: 6、コロサイ 4: 3、II テモテ 4: 2

「分かち合いなさい」これも現在形能動態命令形であり、以下に示す聖書箇所に関連がある。

1. 1～5節 より弱いクリスチャンを助けられるほどに成熟することへの召し
2. 7～10節 霊的な種蒔きと刈り取りの律法の記述(7節の解説を見よ)

御言葉を教えられる人には教えてくれる人の働きを分かち合うという霊的な責任がある(ルカ 10 章 7 節、ローマ 15: 27、I コリント 9: 9-14 を参照)。これは一般原則である。パウロは個人的に報酬を求めずに他の宣教者のためのそれ(報酬)を主張した。英語の用語“catechism”は、この節に見られ「教えられる」あるいは「教える」と訳されるギリシャ語の用語 *katecheo* から派生した語である。

「持っている物」「持っている物」は意図的なあいまいさを持つ用語であり、実際的必要、霊的必要、あるいはそれら両方を指している。御言葉を教えられる人が感謝の気持ちを抱き、また責任感を持つことは明らかな真理である。この節がどのように偽教師達と関連があるのか正確には分からない。パウロは自分と異邦人のエルサレムへの貢献について述べようとしていたのかもしれない。

「教えてくれる人と」ここで言う教師(教える人)は以下に示すような人である。

1. 教えの霊的賜物を持っている人(使徒行伝 13: 1、I コリント 12: 28 を参照)
2. 地方の民の中で生活し、信徒になったばかりの人と子供たちを訓練する教師
3. 全ての民が使徒の教えを日々の生活に適用できるように、エペソ 4: 11 に述べられた牧者つまり教師としてその教えの意味を民に教える人

この最後に挙げたものは旧約聖書において地方のレビ人の、そして後に書記職の人々の行った仕事と同じであったようだ。

6: 7「騙されてはいけません」 これは否定冠詞を伴う現在形受動態命令形であり、通常はすでに進行中であった行為をやめることを意味する。彼らはすでに騙されていたのだ(I コリント 6: 9、15 章 33 節、II テサロニケ 2: 3、ヤコブ 1: 16 を参照)。

「神は侮られるような方ではありません」これは何かあるいは誰かを「鼻で笑う」ことを意味する。これは神の代表者としての働きに召された人々、つまり 6 節でいう教師達のことを言っているようだ。クリスチャンの宣教者をあざ笑うことはある意味で神をあざ笑うことである。マタイ 10: 42 と 25

章 40 節でイエスは、私達が御自分の御名において他者を助けるときには私達は(実は)御自分を助けているのだとおっしゃった。これは反対方向からの理論展開によるものではあるが同じ真理である。しかし、これらの節がどのように互いに関連し合っているかは明らかではない。これは比喩的意味で適用される、「種蒔きと刈り取り」に関連した一般的格言であるようだ。

この節は 8~10 節と関連があるようだが、6 節とは全く関連がないようだ。これは道徳的宇宙である。私達は神の律法を破ることも神の律法を自分に都合のよいように解釈することもしてはならない。信徒であれ未信徒であれ私達は自分の蒔いたものを刈り取るということを知りなさい。信徒の生活の中でさえも、罪はいつでも我が道を行っている。野生のカラスムギはととてもとても高価だ—それは自己中心的な種蒔きも同じである。

「**というのは、人は蒔くものが何であれ**」これは霊的な原則である。神は倫理的で道徳的な方であり、彼の被造物もまた倫理的で道徳的である。人類は神の律法を自分に都合のよいように解釈している。私達は自分の蒔いたものを刈り取る。このことは信徒と未信徒にとって真実である[しかし救いには影響しない](ヨブ 34: 11、詩篇 28: 4、62: 12、箴言 24: 12、伝道者の書 12 章 14 節、エレミヤ 17: 10、32: 19、マタイ 16: 27、25: 31-46、ローマ 2: 6、14: 12、I コリント 3: 8、II コリント 5: 10、ガラテヤ 6: 7-10、II テモテ 4: 14、I ペテロ 1: 17、黙示録 2: 23、20: 12、22: 12 を参照)。

6: 8「自身の肉に蒔く人は肉から滅びを刈り取ります」これは神の前に義とされるための2つの基本的な方法(5: 13 と 16-17 節を参照)、つまり人の努力(ローマ 8: 6-8、13 節を参照)と無償の恵み(ローマ 8: 2-4、6 節、12-14 節を参照)について述べているようだ。

「滅び」

特別なトピック：破壊と破滅と墮落(*Phtheiro*)

この用語 *phtheiro* の基本的な意味は破壊、破滅、墮落、強(略)奪である。この用語は以下に示すような意味で用いられている。

1. 破産(多分 II コリント 7: 2 に記されている)
2. 物理的破壊(I コリント 3: 17 前半を参照)
3. 道徳的頹廢(ローマ 1: 23、8: 21、I コリント 15: 33 と 42 節と 50 節、ガラテヤ 6: 8、黙示録 19: 2 を参照)
4. 性的誘惑(II コリント 11: 3 を参照)
5. 永遠の破壊(II ペテロ 2: 12 と 19 節を参照)
6. 人の死ぬ運命(コロサイ 2: 22、I コリント 3: 17 後半を参照)

しばしばこの用語は同じ文脈中で否定的な、つまり反対の意味で用いられる(ローマ 1: 23、I コ

リント 9: 25、15: 50 と 53 節を参照)。

地上での肉体と天での永遠の体との間の並列対照に注意しなさい。

1. 墮落しやすさ 対 墮落しにくさ、I コリント 15: 42 と 50 節
2. 不名誉 対 栄光、I コリント 15: 43
3. 弱さ 対 力、I コリント 15: 43
4. 肉体 対 霊的体、I コリント 15: 44
5. 最初のアダム 対 最後のアダム、I コリント 15: 45
6. 地上での姿と天での姿、I コリント 15: 49

「永遠の命」 8 節に見られる永遠の命の概念はギリシャ語の用語 *zoe* に由来する。この用語はヨハネによって特に、復活の命、つまり新しい世での命を言い表すのに用いられている(ローマ 5: 21、6: 22-23、テトス 1: 2、3: 7 を参照)。ここでの意味も同じである。8~10 節は私達の種蒔きと刈り取りの結果を示している。

6: 9「善を行うのをあきらめないようにしましょう」 これは文字通り「絶望する」つまり「あきらめる」(否定形の現在時制能動態仮定法、ルカ 18: 1、II テサロニケ 3: 13、II コリント 4: 1 と 16 節、ヘブル 12: 3 を参照)である。しばしばクリスチャンは、行うように召されてきたまさにそのことに対して倦み疲れを感じることもある。

「たゆまず励んでいれば、時が来て、実を刈り取るようになります」 条件的表現(条件文ではない)に注意しなさい。それには継続的な信仰の応答が必要である。また、私達の人生の中の神の御統治の時機に関することにも注意しなさい。私達には物事がなぜ時に適って起こるのかが理解できない。しかし私達は神の御統治と、無償の恵みを受けるために特別に必要とされることを信じているので、奉仕と提供の方法を確かなものとするような生活を送る。3: 4 の特別なトピック「忍耐」を見よ。

6: 10「ですから今、時のあるうちに」 信徒はキリストへの信仰に生きる機会を見定め続けなければならぬ(エペソ 5: 15-21、コロサイ 4: 2-6 を参照)。この聖句は以下に示すような事柄について述べているのであろう。

1. 日常生活における機会
2. 迫害される前
3. イエス・キリストの再来前

このことは詩篇 69: 13 あるいはイザヤ 49: 8 に暗示されている(II コリント 6: 2 を参照)。

「善を行いましょ」 これは現在形中間態(異態)仮定法である。パウロは私達の神との関係は人

の努力によって成立するものではないと確信を持って言っているが、私達は神を知った以上は精力的に神に仕える生活を送るべきであると同時に強調している(つまりテトス 3: 8 と 14 節)。これら 2つの真理はエペソ 2: 8-9 と 10 節に見られる。私達は良い行いによって救われるのではなく、究極的には良い行いができるようになるために救われるのである。

「全ての人に、特に信仰の家族である人々に対して」 私達の愛は全ての人にとって意味があること、つまり私達の行いの全てには常に福音伝道への展望があることに注意しなさい(マタイ 28 章 19-20 節、ルカ 24: 47、ヨハネ 20: 31、使徒行伝 1: 8、I コリント 9: 19-23、I ペテロ 3: 15 を参照)。しかし私達の主な視点は交わりに関しては神の家族のメンバーにある。これは特定の教派の視点である。というのはキリストを信頼してきたという言葉で私達は人を判断するべきだからである。その人がそのように告白したのなら私達はキリストが私達に仕えてくださったのと同じようにその人に仕えるべきである。

私はこの書簡の地域的特質に関する Gordon Fee の非典型的かつ西洋的な個人強調ではない洞察がとても好きだ。この書簡は信仰共同体の聖霊に満たされた生活についてとそれ以上のことが書かれている(*To What End Exegesis?* の 163 ページを参照)。

NASB(改訂版)原典: 6: 11-16

¹¹見てのとおり、わたしはこんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています。¹²肉において人からよく思われることを望む人々は割礼を受けることをあなたがたに強いていますが、それはただ彼らがキリストの十字架のゆえに迫害されたくないからなのです。¹³割礼を受けている人々自身、実は律法を守ってはいませんが、あなたがたの肉において誇りたいためにあなたがたに割礼を受けることを望んでいます。¹⁴しかしわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに誇るものがあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対して、わたしは世に対してはりつけにされているのです。¹⁵問題なのは割礼を受けるか受けないかではなく、新しく創造されることなのです。¹⁶この原則によって歩いていく人々の上に、つまり神のイスラエルの上に平和と憐れみとがありますように。

6: 11「見てのとおり、わたしはこんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています」これはアオリスト能動態命令形である。パウロはこの書簡をある書記に宛てて書いた(ローマ 16: 22 を参照)。解説者達の中には II テサロニケ 2: 2 を根拠として、パウロの自筆の書簡中のこれらの締めくくりの言葉はその書簡がパウロの自筆のものである証拠となると見る者もいる。パウロの書簡のいくつかから彼が自分の手で締めくくりの言葉を書いたことがわかる(I コリント 16: 21、コロサイ 4: 18、II テサロニケ 3: 17、フィレモン 19 節を参照)。私はパウロの肉の棘が東洋で流行していた眼病であると信じているので、これは書記に宛てた手短で詳細な書き方ではなく部分的に失明した人に特有のこのような手つきであっても手紙を書き送る必要が彼にはあったことのさらなる証

拠である。

- NASB 「肉において人からよく思われることを望む人々」
NKJV 「多くの人々は肉において人からよく思われることを望んでいます」
NRSV 「それは肉において人からよく思われることを望む人々です」
TEV 「外見を見せびらかし自慢しようとする人々」
NJB 「それはただの自己中心的考えです」

ユダヤ教徒化した者達は宗教の外的側面により関心があった(コロサイ 2: 16-23 を参照)。彼らは宗教ショーをしたがっていたのだ(4: 17 を参照)。ガラテヤ人に割礼を強要することは「帽子の中の羽根」といえる(13 節前半を参照)。偽教師達はガラテヤの信徒が大幅に増える中で自分達の評判がよくなることを求めた。

「肉」については 1: 16 の特別なトピックを見よ。

「割礼を受けることをあなたがたに強いています」 12~16 節は、救われ十分に成熟する手段としての人の努力を偽教師達が不適切に強調したことに注目したこの書簡全体の要約である。これは現代の教会においても、信徒が礼拝、熱狂、儀式、出席、聖書的知識、祈り、その他あらゆる良い弟子になるための手技をキリストにあって完全となるための手段として求めると頻繁に生じる危険である。パウロの大いなる真理は、信徒はイエス・キリストを信仰を通して信頼するときに神との(適切な)関係を全うするということである。さらに、この新しい完全な受け入れによって信徒は神に喜ばれる者となり、また他者に仕えなければならない(つまりヤコブ 2: 14-26)。

「それはただ彼らがキリストの十字架のゆえに迫害されたくないからなのです」 これは以下に示すことについて述べているようだ。

1. ユダヤ人の迫害 キリストお一人による無償の恵みをパウロが精力的に説けば説くほど、ユダヤ教徒化した者達はますますモーセの律法に固執して受け入れようとしなかった。
2. ユダヤ教が公認宗教とされたのに対しキリスト教は違法とされたことによるローマ人の迫害
シナゴーク(ユダヤ教の教会)はその呪いの典型となり(紀元 70 年後半。ヤブネル[訳者注: 古代パレスティナの海岸近くの町。現在のテルアビブの南約 20km のところにある。紀元 70 年にエルサレムの神殿がローマ人によって破壊されるとユダヤ教の一大中心地となり、紀元 100 年頃にここで旧約聖書正典が決定された]からのパリサイ人の再起)、ラビ(ユダヤ教の指導者)達は「イエスはのろわれている」と言いたくなくまた言えなかったことを理由にシナゴークからキリスト教徒を追放した(ヨハネ 9: 22 と 35 節、12: 42、16: 2 を参照)。

6: 13「割礼を受けている人々自身、実は律法を守ってはいません」 この文の主題は明らかではないが、多分(1)偽教師達あるいは(2)ガラテヤの諸教会内の劇的転換であろう。割礼は神に義

とされる手段であると議論した人々は多分自身は律法全てを守ってはいなかっただろう(ローマ 2 章 17-29 節を参照)。もし(道徳的責任のとれる年齢以降で)一度でも一方的に律法を破れば、ヤコブ 2: 10(とガラテヤ 5: 3)は考慮すべき真理であるといえる。

6: 14「しかし．．．あつてはなりません」 2: 17 の解説を見よ。

「わたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかには誇るものが」 全ての人はどうすれば熱中のだが無価値な生活から救い出されるかをパウロは知っていた。(ピリピ 3: 2-16 を参照)。人の長所が排除されるときに人の自慢は排除される(エレミヤ 9: 23-26、ローマ 3: 27-28、I コリント 1: 26-31 を参照)。6: 4 の特別なトピック「自慢」を見よ。

「この十字架によって、世はわたしに対して、わたしは世に対してはりつけにされているのです」 これはガラテヤ人への手紙全体にわたって続く比喻であり、信徒は律法に対して死に、キリストによって神に対して生きるということを述べている。これは完了形受動態直説法動詞であり、外部の代理人、ここでは聖霊によって成し遂げられた継続する状態を強調している。この比喻は 2: 19 と 5: 24 で用いられており、信徒がキリストの十字架上の死を信じたときに全てのことがどのように新しくなるかを表現している。彼ら(信徒達)は今や神とともに生きるために律法から解放されている(ローマ 6: 10-11 と 12~23 節を参照)。

「世」については 4: 3 の特別なトピック「宇宙」を見よ。

6: 15「問題なのは割礼を受けるか受けないかではなく、新しく創造されることなのです」 パウロは以前に、割礼は問題ではないと述べている(ガラテヤ 5: 6、ローマ 2: 28-29、I コリント 7: 18-19 を参照)。問題は救いであり、もしも信徒が人間的な努力によって神に受け入れられようとするなら、異教徒であれユダヤ教徒であれ、その人はイエス・キリストによる全く無償の神の賜物を頂くことが全く不可能となる。神に義とされるための、2通りの相反する方法がある。

1. 悔い改めと信仰を通したキリストの無償の賜物
2. 人間的な努力。割礼は実は問題ではなく(食物についての律法も問題ではない。I コリント 8 章と 10: 23-26 を参照)本当に問題なのは、律法を完璧に守ることによって人がいかに神との正しい関係をつくりあげようとしているかということであるとパウロは再び述べている。

初期のギリシャ語原典の中には「．．．か．．．かではなく」の後に「キリスト・イエスにおいては」が付け加えられているものがある(MSS の^R、A、C、D、F、G と大半の小文字本と訳本[NKJV を参照])。しかし大半の現代英語訳では、MSS の P⁴⁰ と B にその一節が見られないことを理由にそれを省略している。UBS⁴はそのような除外を階級 A(確定)としている。それは多分 5: 6 からの記述上の同化であった。

「新しく創造されること」これは新しい契約である。信徒はイエス・キリストによって一新された人々なのだ。古いものは全て過ぎ去り、そして全てが新しい(ローマ 6: 4、8: 19-22、Ⅱコリント 5 章 17、エペソ 2: 15、4: 24、コロサイ 3: 10 を参照)。

6: 16「この原則によって歩いていく人々の上に平和と憐れみとがありますように」これは詩篇 124 篇 5 節と 127: 6 を自由に引用したもののようだ。ギリシャ語の用語「原則」(*kamoni*) から英語の用語“*canon*”が派生した。これは測量用の葦を指して用いられる建築用語である。その語はここでは福音を言い表すのに用いられている(イエスのくびき、6: 2 を参照)。信徒はただそれ(福音)を受け入れるだけではなくその内を歩いていかなければならないということに注意しなさい(ヤコブ 1 章 22 節を参照)。

「神のイスラエル」パウロは教会を「神のイスラエル」とはっきりと呼んだ。彼の著作物の中で彼はアブラハムの真の子孫は種子的子孫ではなく霊的の子孫である(ガラテヤ 3: 7 と 9 節と 29 節、ローマ 2: 28-29、9: 6、ピリピ 3: 3 を参照)と強調している。福音はイエスに関することであり、イスラエルの国家に関することではないのだ。

NASB(改訂版)原典: 6: 17

¹⁷今からは誰もわたしを煩わせないでほしいのです。というのは、わたしの体にはイエスの焼き印があるからです。

6: 17「今からは誰もわたしを煩わせないでほしいのです」この動詞は現在形能動態命令形である。これが誰に対して、あるいはなぜ言われたのかは分からない。パウロはこれが二度と起こるべきではないという理由からキリストのための自身の働きを主張した。それは多分、偽教師達がガラテヤの信徒達を福音から除外するための方法として用いた個人攻撃について述べているのであろう。ガラテヤの信徒達はこれが起こるがままにさせておいたのだ。

「というのは、わたしの体にはイエスの焼き印があるからです」偽教師達が割礼を神の契約のしるしとして強調していたのと同じように、パウロは自分にも外見上のしるしがあるのだと主張した。それらは(1)キリストの福音を宣べ伝えたことにより体に受けた迫害の[つまりⅡコリント 4: 7-12、6: 4-6、11: 23-28](2)ダマスコへの途上における復活のキリストとの出会いの(3)パウロがキリストの保護下に奴隷つまりしもべであったこととしるしとしての傷であった。私は(1)が文脈に最も適していると思う。

NASB(改訂版)原典: 6: 18

¹⁸兄弟達、わたしたちの主イエス・キリストの御恵みがあなたがたの霊とともにありますよう

に。アーメン。

6: 18 これは(エペソ人への手紙に見られるような個人的な挨拶の言葉がないので)パウロの書いた一連の福音書簡(の全て)に見られる短い締めくくりの祝辞の一例である。「あなたがたの霊とともにありますように」という一節は、聖霊を指してではなく人の霊を指して用いられる小文字の“s”(霊)の良い一例であることに注目しなさい。しかし、新約聖書の中の多くの例が示しているように、それは聖霊によって力を得る人の霊を指している。ここでは多分これがその意味であろう。

特別なトピック: パウロの神への賛美と祈りと感謝

パウロは賛美の人であった。彼は旧約聖書を知っていた。詩篇の最初の4篇は全て頌栄歌(訳者注: 神の栄光を称える歌)で終わっている(詩篇 41: 13、72: 19、89: 52、106: 48 を参照)。彼は様々な方法で神を賛美している。

1. 彼の書簡群の冒頭の言葉
 - a. 冒頭の祝祷(祝福の言葉)あるいは挨拶(ローマ 1: 7、I コリント 1: 3、II コリント 1: 2 を参照)
 - b. 冒頭の祝辞(*eulogetos*、II コリント 1: 3-4、エペソ 1: 3-14 を参照)
2. 短い賛美の言葉のあふれ
 - a. ローマ 1: 25、9: 5
 - b. II コリント 11: 31
3. 頌栄歌([1]*doxa* [つまり栄光]と[2]「永遠に」を用いてつくられた語)
 - a. ローマ 11: 36、16: 25-27
 - b. エペソ 3: 20-21
 - c. ピリピ 4: 20
 - d. I テモテ 1: 17
 - e. II テモテ 4: 18
4. 感謝(つまり *eucharisteo*)
 - a. 手紙の冒頭(ローマ 1: 8、I コリント 1: 4、II コリント 1: 11、エペソ 1: 16、ピリピ 1: 3、コロサイ 1: 3 と 12 節、I テサロニケ 1: 2、II テサロニケ 1: 3、フィレモン 4 節、I テモテ 1 章 12 節、II テモテ 1: 3 を参照)
 - b. 感謝をささげよとの召し(エペソ 5: 4 と 20 節、ピリピ 4: 6、コロサイ 3: 15 と 17 節と 4: 2、I テサロニケ 5: 18 を参照)
5. 短い感謝の言葉のあふれ
 - a. ローマ 6: 17、7: 25
 - b. I コリント 15: 57
 - c. II コリント 2: 14、8: 16、9: 15

- d. I テサロニケ 2: 13
 - e. II テサロニケ 2: 13
6. 締めくくりの祝祷
- a. ローマ 16: 20 と 24 節(？)
 - b. I コリント 16: 23-24
 - c. II コリント 13: 14
 - d. ガラテヤ 6: 18
 - e. エペソ 6: 24

パウロは神学的かつ経験的に三位一体の神を知っていた。自らの著作物で彼は祈りと賛美の言葉から書き始めた。説教の最中に彼は突然賛美と感謝の言葉を発した。手紙の締めくくりには常に神への祈りと賛美と感謝の言葉を忘れずに言った。パウロの著作物には祈りと賛美と感謝が息づいている。彼は神を、自身を、そして福音を知っていた。

「アーメン」 1: 5 の特別なトピックを見よ。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 墮落した兄弟達を正しい道に立ち帰らせるための聖書的指針は何か？
2. 2 節と 5 節とは矛盾しているか？
3. クリスチャンの働きを支えているクリスチャンについて 6 節は何と言っているか？
4. 種蒔きと刈り取りの聖書的律法をあなた自身の言葉で説明しなさい。
5. ガラテヤ人の手紙に明記された、救われるための2つの方法の聖書的概念をあなた自身の言葉で説明しなさい。
6. 9 節がどのように 6 節と 7 節と関連しているかをあなた自身の言葉で説明しなさい。
7. 15 節にあるようにもしも割礼が問題ではないのなら、なぜパウロはその節でそのような問題をとり上げたのか？
8. 16 節で教会が神の真のイスラエルと呼ばれたことの意味は何か？

パウロのテサロニケ人への手紙

テサロニケ人への第一の手紙

および

テサロニケ人への第二の手紙

テサロニケ人への手紙への導入

A. 短い要約

1. テサロニケ人への手紙には、宣教師としての、また牧師としてのパウロの深遠な洞察が表されている。この書簡から、彼が短期間で教会を建て上げて祈りを続け、そして教会の成長と発展と働きに関与したことがうかがえる。
2. この書簡から、彼が忠実に福音を宣べ伝え、未信者の回心に関与し、彼ら(未信者)を叱咤し、誉め、導き、忠告し、教え、愛し、そして自身を捧げることさえしたことがうかがえる。その点で彼は彼らの成長をわくわくしながら見守っていたが、彼らの成熟の速さについては失望していた。
3. これらの使徒たちの中には(宣教に)熱心な愛すべき神のしもべと、小さく熱心で成長する新しい教会が見られる。どちらも忠実で、神に用いられ、神の人々の間には稀であったキリストのような仕え方を互いにしていた。

B. テサロニケという都市について

1. テサロニケの歴史の簡単な説明

- a. テサロニケはテルマ湾の先端にあった都市である。テサロニケは、ローマから東方に走るローマ帝国の大きな道 Via Ignatia (国道) に面した沿岸都市であった。この町には港があり、肥沃で水はけのよい海岸沿いの平原にも非常に近かった。これら3つの利点によってテサロニケはマケドニアで最大の、そして最も重要な商業と政治の中心となった。
- b. テサロニケは元々テルマと呼ばれていたが、その名はこの地域にあった温泉の名に由来する。古代の歴史家の老プリニウスはテルマとテサロニケが共存していたと言っている。もしこれが事実なら、テサロニケはテルマと境を接してこれを併合したということになる(Leon Morris 著 *The First and Second Epistles to the Thessalonians*, [Grand Rapids の Wm. B. Eerdmans 出版社が 1991 年に刊行] の 11 ページ)。しかし大半の歴史学者達は、アレキサンダー大王の将軍の一人であった Cassander が紀元前 315 年に、フィリッパというマケドニアの娘とアレキサンダー大王の異父(母)姉妹で妻でもあったテサロニカの名にちなんでこの町を再びテルマと呼んだのだと信じている(Strabo VII 21 章)。キリスト教が広められた最初の数世紀の間に時々、テサロニケは住んでいるクリスチャンの特徴から「(キリスト教)の公認都市」というあだ名をつけられるようになっていた(Dean Farrar 著 *The Life and Work of St. Paul* [New York の Cassell and Company 有限会社が 1904 年に刊行] の 364 ページ)。現代ではテサロニケはサロニカという名で知られ、今もギリシャの主要都市の一つである。
- c. テサロニケはコリントと同様に国際的大都市であり、当時知られていた全ての世界から

人々がやってきて住みついた。

- (1) 北方からやってきて住みつき、異教と異教文化とをもたらした野蛮なゲルマン人
- (2) アカイアから南下して、あるいはエーゲ海の諸島から来て住みつき、自分達の洗練された文化と思想をもたらしたギリシャ人
- (3) 西方からやってきて住みついたローマ人。彼らの大半は退役軍人であり、自分達の意志の強さと富と政治権力をもたらした。
- (4) 最後に、ユダヤ人が東方から大勢やってきた。ついには人口の4分の3をユダヤ人が占めるようになった。彼らは自分達の倫理的な一神教信仰と国家についての(訳者注:他の人種への)偏見を持ちこんだ。

- d. テサロニケは人口約20万人を有し、まさしく国際都市であった。この町には温泉があったので保養地となり、また健康センターでもあった。港があり、肥沃な平原とイグナティア道に近かったのでこの町は商業の中心であった。
- e. テサロニケはマケドニアの首都であり最大の都市であるとともに政治の中心でもあった。ローマの属州の州都でありローマ市民(大半は退役軍人)が大勢住んでいたため、この町は自由都市となった。テサロニケ人の大半はローマ市民であったため、彼らには進貢(訳者注:貢物[みつぎもの]、つまり現代でいう税を納めること)の義務がなく、また彼らはローマの法の統治下にあった。従ってテサロニケの統治者は「行政官」と呼ばれた。この肩書は文献のどこにも見られないが、Vardar 門の名で知られるテサロニケの凱旋門の上部に刻まれて保存されている(Farrar の著書の 371 ページ中頃)。

2. パウロがテサロニケに来るきっかけとなった出来事

- a. パウロをテサロニケに導いた出来事は数多くあるが、しかし実際に彼が置かれていた環境の全て以上に決定的となったのは直接的で明確な神の召しであった。パウロには元々ヨーロッパ大陸に入る計画はなかった。この第二の伝道旅行における彼の望みは、最初の伝道旅行において彼が建て上げた小アジアの諸教会を再訪し、そして東方へと向かうことであった。しかし彼が北東方向へ向かおうとしたまさにそのとき、神は扉を閉ざし始められた。これの最高潮はパウロのマケドニアに対する見方であった(使徒行伝 16: 6-10 を参照)。これによって起こった出来事は2つある。ひとつはヨーロッパ大陸に福音が伝えられたことであり、もうひとつはパウロがマケドニアにおいて自身の置かれていた環境のゆえに使徒書簡を書き始めたこと(Thomas Carter 著 *Life and Letters of Paul* [Nashville の Cokesbury Press が 1921 年に刊行] の 112 ページ)であった。
- b. 上記の霊的導きの他にパウロをテサロニケに導いた、実際に彼が置かれていた環境は以下に示すような事柄であった。
 - (1) パウロはシナゴグのない小さな町ピリピに行った。そこでの彼の働きは予言者的で悪魔的な奴隷の少女の所有者達と町議会によって挫折した。パウロは打ちのめされ辱められたが、これら全ての出来事のただ中で1つの教会がつくられた。反発と肉体

への処罰のために、パウロは希望していたよりも早くピリピを去らなければならなかった。

- (2) そこから彼はどこへ行ったのか？彼はピリピと同じくシナゴグのないアンフィポリスとアポロニアを通過した。
- (3) 彼はその地域で最大の都市でありシナゴグのあるテサロニケに来た。パウロはまず最初に地域のユダヤ人のところに行くことを習慣としていた。彼がこのようにした理由は以下に示すようなことであった。
 - (a) 彼らが旧約聖書の知識を持っていたから
 - (b) シナゴグで教え説教する機会を求めて
 - (c) 彼らの選ばれた民、つまり神の契約の民としての立場から(マタイ 10: 6、15 章 24 節、ローマ 1: 16-17 と 9-11 節を参照)
 - (d) イエスは御自身をまず彼らに、そして世に捧げられた。だからパウロもイエスに倣おうとした。

3. パウロの仲間達

- a. パウロはテサロニケではシラスとテモテと一緒にいた。ルカはピリピではパウロと一緒におり、その地に留まった。このことは使徒行伝 16 章および 17 章の文中の代名詞「わたしたち」と「彼ら」から分かる。ルカはピリピでは(自分とパウロを)「わたしたち」と称したが、テサロニケでは「彼ら」と称した。
- b. シラス、つまりシルワノは、バルナバとヨハネ・マルコがキプロスに戻った後にパウロが第二の伝道旅行の同行者として選んだ人であった。
 - (1) 彼は使徒行伝 15: 22 で初めて聖書に登場するが、その箇所によれば彼はエルサレムの教会の兄弟達の間で頭(かしら)と呼ばれていた。
 - (2) 彼は預言者でもあった(使徒行伝 15: 32 を参照)
 - (3) 彼はパウロと同様にローマ市民であった(使徒行伝 16: 37 を参照)
 - (4) 彼とユダ・バルサバは状況調査のためにエルサレムの教会からアンテオケに遣わされた(使徒行伝 15: 22 と 30-35 節を参照)。
 - (5) II コリント 1: 19 でパウロは彼を賞賛し、いくつかの書簡で彼について記した。
 - (6) 後に彼はペテロとともにペテロの手紙第一を書いたとされている(I ペテロ 5: 12 を参照)。
 - (7) ルカは彼をシラスと呼んだが、パウロとペテロは彼をシルワノと呼んだ。
- c. テモテもパウロの仲間であり共に働いた人であった。
 - (1) パウロは最初の伝道旅行中にリストラで彼に出会い、彼を回心させた。
 - (2) テモテはギリシャ人の父とユダヤ人の母の間に生まれた。パウロは異邦人伝道において共に働く者として彼を用いたいと思っていた。
 - (3) パウロは彼がユダヤの民と共に働くことができるように彼に割礼を施した。

- (4) テモテはコリント人への第二の手紙とコロサイ人への手紙とテサロニケへの第一・第二の手紙とピレモンへの手紙の挨拶文中にその名が登場する。
- (5) パウロは彼について「伝道におけるわたしの息子」と言っている（Ⅰテモテ 1: 2、Ⅱテモテ 1: 2、テトス 1: 4 を参照）。
- (6) 自身の書簡群全般を通してのパウロの一般的な語り口はテモテが若く臆病であったことを暗示している。しかしパウロは彼を大いに信頼していた（使徒行伝 19: 27、Ⅰコリント 4: 17、ピリピ 2: 19 を参照）。
- d. パウロの仲間達の一同にはテサロニケから来てパウロの後の働きに加わったと言われている人々がいる。彼らはアリストアルコ（使徒行伝 19: 29、20: 4、27: 2）とセクンド（使徒行伝 20: 4）。デマスもテサロニケから来たと考えられている（ピレモン 24 節、Ⅱテモテ 4: 10 を参照）。

4. 都市におけるパウロの働き

- a. テサロニケにおけるパウロの働きは、まず最初にユダヤ人のところに行き、それから異教徒のところを訪問するという、彼がいつも行っていたことであった。パウロはシナゴークで安息日について3回説教した。彼のメッセージは「イエスはメシア（救世主）である」というものであった。メシアが苦しみを受けられるメシア（創世記 3: 15 とイザヤ53章を参照）であり政治的な一過性のメシアではないことを示すために彼は旧約聖書の御言葉を用いた。パウロはまた、キリストの復活と全ての人に与えられる救いも強調した。全ての人を救うことのできる時機が来てからイエスがメシアとして君臨されることははっきりとしていた。
- b. このメッセージに対する応答は、ユダヤ人の一部と多くの敬虔な異教徒と多くの女性の有名人達がイエスを救い主として、また主として受け入れたことであった。これら回心者達のグループ（の特徴）を分析することは、パウロがこの教会に対して後に送った書簡（の内容）の理解においてとても重要である。
- c. この2つの使徒書簡（テサロニケ人への第一の手紙と第二の手紙）のどちらにも旧約聖書からの暗示がないことから、（テサロニケの）教会員の大半が異教徒であったことが分かる。以下に示すいくつかの理由から異教徒は容易にイエスを救い主として、また主として受け入れた。
- (1) 彼らの伝統的な宗教は無力な迷信であった。テサロニケはオリンポス山の裾野にあり、人々は皆その標高がゼロであることを知っていた。
- (2) 福音は全ての人に対して無償である。
- (3) ユダヤ教の排他的国民主義はキリスト教にはない。ユダヤ教はその一神教主義と崇高な道徳性で多くの人を魅了したが、一方で（割礼のような）その嫌悪感を起こさせるような儀式および固有の人種的かつ国民的偏見で非常に嫌がられた。
- d. 多くの「女性の有名人達」は自身の宗教を選ぶ能力のゆえにキリスト教を受け入れた。マケドニアと小アジアの女性は他のギリシャ・ローマ世界の女性より自由な身分で

あった(Wm. M. Ramsay 卿著 *St. Paul the Traveller and Roman Citizen* [New York の G. P. Putnam's Sons が 1896 年に刊行]の 227 ページ)。しかし、より貧しい階層の女性は自由な身分ではあったが迷信と多神教の影響の下にあった(Ramsay の著書の 229 ページ)。

- e. 多くの解説者はパウロのテサロニケ滞在期間の長さの問題を見出している。
- (1)使徒行伝 17: 2 はパウロがテサロニケ滞在中にシナゴークで安息日について3回説教した理由について述べている。
 - (2) I テサロニケ 2: 7-11 はパウロがテサロニケ滞在中に行った(伝道の働きとは別に収入を得るための)仕事について述べている。この仕事とは幕屋作り、あるいは一部の解説者達の意見によれば皮革工芸(「皮なめし」など)であった。
 - (3)ピリピ 4: 16 は、滞在期間はもっと長くてそのテサロニケ滞在中にパウロはピリピの教会から金銭の贈り物を2回受けたという意見を支持している。この2都市間の距離は約 100 マイルである。解説者達の中には、パウロは約2~3ヶ月滞在中、ユダヤ人への伝道の働きでのみ安息日について説教したという意見もある(Shepard の著書の 165 ページ)。
 - (4)使徒行伝 17: 4 と I テサロニケ 1: 9 と 2: 4 とで回心についての記述が異なることはこの意見を支持している。これらの記述の最も重要な相違点は異教徒による偶像の拒絶であった。使徒行伝に登場する異教徒はユダヤ人の転向者(改宗者)であり、すでに偶像を否定していた。文脈はパウロがユダヤ人よりもその他の民族の異教徒への伝道に力を注いでいたことを暗示している。
 - (5)パウロは(初めて訪れる地では)常にまず最初にユダヤ人のところへ行っていったので、彼がユダヤ人よりもその他の民族の異教徒への伝道に力を注いでいたらしいことは分かるとしても、その内容は明らかではない。自分のメッセージをユダヤ人が拒むと彼はその他の民族の異教徒のところへ行った。異教徒達が大量で福音に应答するとユダヤ人は嫉妬し(パウロの伝道におけるテクニックのひとつ。ローマ9~11章を参照)、(テサロニケの)市中の場末で暴動を始めた。
- f. 暴動のせいでパウロはヤソンの家を去ってシラスとテモテと一緒に身を隠したので、暴徒達が彼らを探しにヤソンの家に押しかけたときには彼らはいなかった。行政官は市中の保安のためにヤソンの身柄を拘束した。このことがもとでパウロは夜陰にまぎれてテサロニケを去りベレアに行った。それでも(テサロニケの)教会は多くの反対に遭いながらもキリストを証しすることをやめなかった。

著者

- A. テサロニケ人への第一の手紙 現代知られている文体を見る限りでは、パウロがテサロニケ人への第一の手紙の真の著者であることを批評家達はかなり疑っているが、彼らの結論を多くの学者達は納得していない。テサロニケ人への第一の手紙は Marcion の正典(紀元 140 年)と Muratorian Fragment(紀元 200 年)に収録されている。この2つの新約聖書の正典はローマ人の間で盛んに読まれた。イレネウスは紀元 180 年頃に書いた自著でテサロニケ人への第一の手紙の名を引用した。
- B. テサロニケ人への第二の手紙
1. テサロニケ人への第二の手紙は必ずしもパウロの書いた他の使徒書簡ほどには受け入れられず、いくつかの見地に基づいて攻撃されてきた。
 - a. 問題の一つは語彙である。この書簡にはパウロの書いた他の使徒書簡には見られない用語が数多く見受けられる。
 - b. 「文体は型にはまっていて時々不思議なくらいに形式的である」(Heard の著書の 186 ページ)
 - c. これら2つの書簡の終末論は一貫していない。
 - d. テサロニケ人への第二の手紙は新約聖書に典型的な反キリストについての見解が記されているので、解説者達の中にはこの書簡がパウロの書いたものではないという結論を出しているものもいる。
 2. パウロがテサロニケ人への第二の手紙の真の著者であることはいくつかの仮定に基づいている。
 - a. Polycarp、Ignatius、Justin はそれを認めている。
 - b. それは Marcion の正典に収録されている。
 - c. それは Muratorian Fragment に収録されている。
 - d. イレネウスは自著でその手紙の名を引用している。
 - e. 語彙、文体、神学はテサロニケ人への第一の手紙でパウロが用いているものと同じである。
- C. 2つの書簡の比較
1. これら2つの書簡は、著者の主張だけでなく実際の文体もとてもよく似ている。冒頭句と結句を別にすれば、類似点は書簡全体の約4分の3にも見られる。
 2. テサロニケ人への第二の手紙の一般的な語り口は第一の手紙とは異なり、より他人行儀で形式的である。しかし、第一の手紙が書かれた感情的背景と第二の手紙において深刻化した問題を知ればこれは容易に理解できる。
- D. 書簡の書かれた順序
1. F. W. Manson は Johannes Weiss の解説を用いてもうひとつの興味深い仮説を発表している。彼はこれら2つの書簡の書かれた順序は逆であると主張している。この理由は以下に示すようなものである。

- a. テサロニケ人への第二の手紙では試練と苦難は最高潮に達しているが、テサロニケ人への第一の手紙ではそれらは過去のこととされている。
 - b. テサロニケ人への第二の手紙では書簡の著者の内的困難が彼が知ったばかりの新展開として語られているが、テサロニケ人への第一の手紙では状況は全ての当事者が熟知していた。
 - c. もしもテサロニケ人がテサロニケ人への第二の手紙2章に精通していたら、彼らが時間と季節について教えられる必要がない(I テサロニケ 5: 1)という発言はきわめて正しい。
 - d. I テサロニケ 4: 9 と 13 節および 5: 1 中の定型句「～に関しては」は I コリント 7: 1 と 25 節、8: 1、12: 1、16: 1 と 12 節中に見られるものと同様であり、それらの箇所では著者は自分に宛てて書き送られた書簡中で指摘された点に答えている。Manson はその返答がテサロニケ人への第二の手紙の中で提起されたある問題と関連しているのではないかと考えている。
2. いくつかの仮説はこの議論に反論するものであるようだ。
- a. パウロが注目している問題はテサロニケ人への第一の手紙からテサロニケ人への第二の手紙へと増大し深まっている。
 - b. テサロニケ人への第二の手紙の文脈はパウロからのある書簡(2: 2 と 15 節および 3 章 17 節)について述べているので、この書簡がテサロニケ人への第一の手紙ではないと私達が確信するなら、問題はある紛失した書簡にあるということになる。
 - c. 第一の手紙の主要部を構成する個人的回想は第二の手紙には述べられていないが、この手紙が第一の手紙の続きならばそれは当然のことである。
 - d. これら2つの書簡の書かれた順序が逆ならば、これらの語り口はこの状況について全く不自然に思える。

この手紙の書かれた時期

- A. テサロニケ人への手紙が書かれた時期はパウロの書簡群に記されている最も特定された時期のうちの一つである。その時期はパウロが「コリントで捕えられてアカイア総督ガリオの前に連れてこられた」頃であると記録されている。デルフィで発見された碑文はこの疑問に答え、この同じガリオの名があることから(テサロニケ人への手紙が書かれた時期は)クラウディウス帝の治世であると言っている。それはこの皇帝が裁判権力を持ってから 12 年目であり、皇帝として承認されてから 26 年目であった。この 12 年目の年とは紀元 52 年 1 月 25 日から紀元 53 年 1 月 24 日までであった。一方、皇帝として承認されてから 26 年目の年とは正確には分かっていないが、27 年目の年とは紀元 52 年 8 月 1 日以前であることは分かっている。クラウディウス帝の決断は紀元 52 年の前半期にガリオ総督に伝えられたに違いない。というのは当時は通常、総督は初夏に着任して1年の任期を務めたからである。つまり

ガリオは紀元 51 年の初夏に着任したということになる (Morris の著書の 15 ページ)。

- B. このように総督の在任期間を明らかにすることではテサロニケ人への手紙が書かれた時期を明らかにするという問題を完全に解決することにはならない。パウロはコリントに 18 ヶ月滞在した (使徒行伝 18: 11) が、ガリオの前に連れてこられたのがその頃であったかどうかは分かっていない。大半の解説者達はテサロニケ人への手紙が書かれた時期を紀元 50~51 年と考えている。
- C. F. F. Bruce と Murry Harris によってわずかに修正が加えられた、パウロが手紙を書いたと考えられる年代

手紙	年代	書かれた場所	使徒行伝との関連
1. ガラテヤ	(紀元)48 年	シリア州のアンティオキア	14: 28、15: 2
2. I テサロニケ	50 年	コリント	18: 5
3. II テサロニケ	50 年	コリント	
4. I コリント	55 年	エフェソス	19: 20
5. II コリント	56 年	マケドニア	20: 2
6. ローマ	57 年	コリント	20: 3
7. ~10. 獄中書簡群			
	コロサイ	60 年代初め	ローマ
	エペソ	60 年代初め	ローマ
	ピレモン	60 年代初め	ローマ
	ピリピ	62 年末~63 年	ローマ 28: 30-31
11. ~13. 第四の伝道旅行			
	I テモテ	63 年 (またはその後だが紀元 68 年より前)	マケドニア
	テトス	63 年	エフェソス(?)
	II テモテ	64 年	ローマ

テサロニケ人への手紙の背景となった出来事

- A. パウロがテサロニケ人への手紙を書ききっかけとなった出来事は複雑で互いに絡み合っている。はっきりした相違点、特に実情と感情的背景に関する違いが述べられなければならない。(テサロニケの) 市中の場末に住む迷信深い多神教的な連中をユダヤ人が扇動して暴動を起こさせ、そして暴徒達がパウロと彼の仲間達を探しにヤソンの家に押しかけたので、パウロはテサロニケの新しい信徒達のもとを去らなければならなかった。行政官の前で尋問を受けた後、ヤソンと他のクリスチャンの指導者達は市中の保安のために身柄を拘束された。パウロはこのことを聞いてこの若く未熟な教会(クリスチャン達)のもとを去らなければならぬと悟った。だから彼はシラスとテモテと一緒にベレアに行った。明らかに最初に同行したのはテモテであり(使徒行伝 17: 10 を参照)後にシラスが加わって一緒にアテネに行った(使徒行伝 17: 15 を参照)。

最初にパウロはベレアのユダヤ人から誠意ある敬待を受けたが、以前にユダヤ人の猛烈な反対に直面した彼にとってそれは祝福であった。しかしこれは長くは続かなかった。テサロニケのユダヤ人はベレアに南下して問題を起こし始めた。従ってパウロは再びその地を去らなければならなかった。

- B. このときパウロはアテネに行き、そこで冷たく無反応な対応を受けた。哲学者達にとって彼は目新しい人物となった。マケドニアで彼が経験したのは迫害と反発であった。彼は殴られ、衣服を剥ぎ取られて裸にされ、町中を夜中じゅう追い回された。学者達は彼をあざけり、異教徒と彼と同国の人々は彼を忌み嫌った(Ⅱコリント 4: 7-11, 6: 4-10, 11: 23-29 を参照)。
- C. パウロは重要な時にこのテサロニケの約束された教会を去るように強制された。彼ら(テサロニケの約束された教会のクリスチャン達)の信仰は未熟であり、彼らは苦難と迫害に直面していた。パウロはそれ以上の精神的苦痛に耐えられなかった。若い回心者達を心配して、ベレアとアテネの間のあらゆる所からパウロはテモテとシラスをマケドニアの新しい教会に送り返した。多くの解説者は彼が6ヶ月から1年間そこに滞まって宣教したと感じている。教会は自分達を教え安心させ励ましてくれる人を渴望していた。テモテ自身は正真正銘の新しい回心者であった。彼はパウロの最初の伝道旅行中に回心したが、パウロと一緒にいたのはその旅行中だけであった。というのはパウロが二回目の伝道旅行中にリストラに行ったからである。彼は伝道の初心者であったがパウロは彼を大いに信頼していた。これはテモテにとってパウロの公式の代表者としての最初の課題であった。
- D. アテネではパウロは一人で伝道したが、マケドニアで告げ知らせた福音とその地の新しいクリスチャンに絶えず関心を寄せたことに対する応答がなかったのととても気落ちし落胆した。彼は特にテサロニケの教会について関心を持たれていた。そのように短い時間と困難な状況で教会が建てられて維持されていけたのだろうか。(Carter の著書の 115 ページによれば)これに加えて彼はしばらくの間(解説者達の中にはほんの1~2ヶ月だと言う者もいるが、半年から1年の間)テモテとシラスから言葉を掛けられることはなかった(Farrar の著書の 369 ページ)。このことからパウロがコリントに着いたときの感情の状態が分かる。
- E. コリントではパウロにとって大きな励ましとなる2つの出来事があった。
1. コリントの多くの人々が福音に応答するであろうというビジョンが神から与えられた(使徒行伝 18: 9-10)。
 2. テモテとシラスが到着して良い知らせをもたらした。パウロがコリントからテサロニケの人々に宛てて手紙を書くきっかけとなったのはテモテのテサロニケからのメッセージであった。パウロはその地の教会からの教義的および実際的な質問に答えるつもりだったのだ。
- F. テサロニケ人への第二の手紙が書かれた時期は第一の手紙が書かれてから間もなくであった。というのはその書簡はパウロがそうなるように望んだことの全てを叶えなかったからである。また、彼は他にも問題があることに気付いていた。研究者達の多くはテサロニケ人への

第一の手紙が書かれた6ヶ月後に第二の手紙が書かれたと信じている。

手紙の(書かれた)目的

- A. テサロニケ人への手紙には3つの(書かれた)目的がある。
1. 迫害の最中にあってもテサロニケ人が神に忠実で、またキリストらしくいたことについての神へのパウロの喜びと感謝を分かち合うこと。
 2. 彼の意志と性格に対してなされていた批判に答えること。
 3. 主の再来についての議論をすること。パウロの説教の中のこの終末論はテサロニケのクリスチャン達の心の中に2つの疑問を生んだ。
 - a. 主の再来の前に死んだ信徒達に何がおこるのだろうか。
 - b. (伝道の)働きをやめてただじっと主の再来を待っていた信徒達に何がおこるのだろうか(Barclayの著書の21~22ページ)。
 4. 教会がした特定の質問に答えること(4:13と5:1を参照)。
- B. 上記の事柄の大半はこのテサロニケの教会(クリスチャン達)が若くてとても熱心であったという事実によって説明できる。しかしそのような状況のゆえに彼らの訓練と教化は不完全であった。これらの問題はこのような性質の教会について予想されること、つまり新しい信徒、(信仰の)弱い人々、臆病な人々、怠惰な人々、空想家(夢想家)、錯乱した人々を表している。
- C. テサロニケ人への第二の手紙の存在意義(どのようなものとして書かれたものか)は「最初の治療において現われていなかった特定のしつこい症状が発見された後に書かれる、同じ症状に対する第二の処方箋」(Walkerの著書の2968ページ)であった。

引用文献

William Barclay 著 *The Letters and the Revelation*、*The New Testament* 第2巻、New York の Collins が 1969 年に刊行

Thomas Carter 著 *Life and Letters of Paul*、Nashville の Cokesbury Press が 1921 年に刊行

Dean Farrar 著 *The Life and Work of St. Paul*、New York の Cassell and Company が 1904 年に刊行

Richard Heard 著 *An Introduction to The New Testament*、New York の Harper and Row 出版社 が 1950 年に刊行

Bruce Manning Metzger 著 *The New Testament: Its Background, Growth and Content*、Nashville の Abingdon Press が 1965 年に刊行

T. W. Manson 著 *Studies in the Gospels and Epistles*、Philadelphia の Westminster が 1962 年に刊行

Leon Morris 著 *The First and Second Epistles to the Thessalonians*、Grand Rapids の Eerdmans

が 1991 年に刊行

W. M. Ramsay 著 *St. Paul the Traveller and Roman Citizen*、New York の G. P. Putnam's Sons
が 1896 年に刊行

J. W. Shepard 著 *The Life and Letters of Paul*、Grand Rapids の Wm. B. Eerdmans 出版社が 1950
年に刊行

R. H. Walker 編 *The International Standard Bible Encyclopedia* 第5巻、N. D.

簡単な概要*

- A. 挨拶、1: 1
- B. 感謝の祈り、1: 2-4
- C. 回想、1: 5-2: 16
 - 1. 最初の説教へのテサロニケ人の応答、1: 5-10
 - 2. テサロニケでの福音説教、2: 1-16
 - a. (伝道)チームの意志の純粹さ、2: 1-6 前半
 - b. 援助を受けることを(伝道)チームが拒んだこと、2: 6 前半-9
 - c. (伝道)チームのふるまいは申し分なかった、2: 10-12
 - d. (伝道)チームによる神の御言葉のメッセージ、2: 13
 - e. 迫害、2: 14-16
- D. パウロとテサロニケ人との関係、2: 17-3: 13
 - 1. テサロニケ人のとに戻りたいという彼の願い、2: 17 と 18 節
 - 2. テサロニケ人についてのパウロの喜び、2: 19 と 20 節
 - 3. テモテの働き、3: 1-5
 - 4. テモテの報告、3: 6-8
 - 5. パウロの満足、3: 9 と 10 節
 - 6. パウロの祈り、3: 11-13
- E. クリスマン生活についての奨励の言葉、4: 1-12
 - 1. 一般、4: 1 と 2 節
 - 2. 性的純潔、4: 3-8
 - 3. 兄弟愛、4: 9 と 10 節
 - 4. 生計を立てる、4: 11 と 12 節
- F. 主の再来に関する問題、4: 13-5: 11
 - 1. 主の再来の前に死んだ信徒達、4: 13-18
 - 2. 主の再来の時、5: 1-3
 - 3. 昼の子、5: 4-11
- G. 一般的な奨励の言葉、5: 12-22

H. 結論、5: 23-28

*この書簡にはパウロの他の書簡の大半に見られるような教義編と実践編の整然とした要約が見られない。一般的様式に従うなら 4: 17-18 における主の再来についてのパウロの議論が教義編ではなく実践編となるのだ。主の再来はただ受け入れられるべき教義ではなく、主が再びこの世に戻られるその時を期待しながら生活することなのである。

テサロニケ人への第一の手紙1章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
挨拶	挨拶	挨拶	挨拶	挨拶
1: 1	1: 1	1: 1	1: 1	1: 1
テサロニケ人の 信仰と模範	彼らの良い模範	感謝	テサロニケ人の 愛と信仰	感謝と祝福
1: 2～10	1: 2～10	1: 2～10	1: 2～10	1: 2～3
				1: 4～10

第三読書サイクル(vii ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

1～10 節の文脈の洞察

- A. 1 節は紀元1世紀の標準的な手紙の形式である。パウロはギリシャ語の単語「挨拶」を似た響きを持つ「恵み」に置き換える(*charis* と *charein*) ことでそれをクリスチャンらしい形式に変えた。
- B. 2～10 節はテサロニケの信徒についての神への感謝のための一つの長い祈りとなっている。
 1. 2～5 節はパウロの福音伝道的な証しについて述べた一つの文となっている。
 2. 6～9 節はテサロニケ人の応答について述べている。
- C. 三位一体は2～5 節にはっきりと述べられている。ガラテヤ 4: 4 の特別なトピック「三位一体」を見よ。

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 1: 1

¹パウロとシルワノとテモテから、父なる神と主イエス・キリストにあるテサロニケの教会へ。恵みと平和があなたがたにありますように。

1: 1「パウロ」タルソスのサウロは使徒行伝 13: 9 で初めてパウロと呼ばれる。「ディアスポラ」のユダヤ人の大半はヘブル語の名前とギリシャ語の名前を持っていたようだ。もしそうなら、サウロの両親は彼にこの名前をつけたということになるが、なぜ使徒行伝 13 章で突然パウロという名前が登場するのだろうか？ 多分 (1) 他者が彼をこの名前呼び始めたから、あるいは (2) 彼が自身を「小さい」または「最も小さい」という言葉で表現し始めたからだろう。ギリシャ語の名前 *Paulos* は「小さい」を意味した。彼のギリシャ語名の起源についていくつかの理論が提唱されている。

1. パウロは背が低く、太っていて、はげ頭で、足が曲っていて、眉が濃く、目が飛び出していたという 2 世紀の言い伝えがこの名前のもとになったようだが、これはテサロニケの *Paul and Thekla* と呼ばれる聖書正典ではない書に由来するものである。
2. パウロが自身を、自分がかつて使徒行伝 9: 1-2 にあるように教会を迫害したので「聖人達のうちで最も小さい」と呼んでいる段落 (I コリント 15: 9、エペソ 3: 8、I テモテ 1: 15 を参照)。

研究者達の中にはこの「最も小さいこと」をひとりでに選ばれた呼び名 [訳者注: パウロ] の起源とする者もいる。しかし、ガラテヤ人への手紙のような書の中でパウロはエルサレムの 12 使徒との非依存性と平等性を強調しているため、この意見 [訳者注: 「最も小さいこと」をパウロという名前の起源とする説] はやや説得力に欠けるようだ。

このテサロニケの教会への挨拶を見る限りパウロの使徒の地位は疑いようがない。パウロの開拓した全ての教会の中でテサロニケとピリピの教会が最も協力的であった。

「シルワノ」これは彼のローマでの名であった。彼はパウロと同様にローマ市民であった (使徒行伝 16: 37 を参照)。ルカはいつも彼をシラスと呼んでいた。彼は神に賜物を受けた預言者であり、バルナバと同様にエルサレムの教会の中では尊敬されていた人であった (使徒行伝 15: 22、27 節、32 節、I ペテロ 5: 12 を参照)。彼はバルナバの代わりにパウロの第二回・第三回伝道旅行に同行した。

特別なトピック: シラスーシルワノ

シラス、つまりシルワノは、バルナバとヨハネ・マルコがキプロスに戻った後にパウロが第二回伝道旅行の同行者として選んだ人であった。

- A. 彼は使徒行伝 15: 22 で初めて聖書に登場するが、その箇所によれば彼はエルサレムの教会の兄弟達の間で頭(かしら)と呼ばれていた。

- B. 彼は預言者でもあった(使徒行伝 15: 32 を参照)
- C. 彼はパウロと同様にローマ市民であった(使徒行伝 16: 37 を参照)
- D. 彼とユダ・バルサバは状況調査のためにエルサレムの教会からアンテオケに遣わされた(使徒行伝 15: 22 と 30-35 節を参照)。
- E. II コリント 1: 19 でパウロは彼を福音説教者仲間と言った。
- F. 後に彼はペテロとともにペテロの手紙第一を書いたとされている(I ペテロ 5: 12 を参照)。
- G. ルカは彼をシラス(サウルのアラム語形)と呼んだが、パウロとペテロは彼をシルワノと呼んだ。シラスは彼のユダヤ人名でシルワノは彼のラテン語名と考えられる(F. F. Bruce 著 *Paul : Apostle of the Heart Set Free* の 213 ページを参照)。

「テモテ」彼はパウロの最初の伝道旅行の際にパウロによって回心したリストラ出身の人である。テモテは第二回伝道旅行(使徒行伝 16: 1-3 を参照)においてヨハネ・マルコの代わりにパウロの伝道チームの一員となった。詳細は導入部の B. 3 を参照せよ。

「テサロニケ」使徒行伝 17: 1-9 にはパウロとこれらの人々の出会いが記されている。

「教会」 *Ekklesia* は「人々を召し出す」という意味である。この用語は元々ギリシャの社会の街の集会を意味していた。旧約聖書をギリシャ語に翻訳したセプトウアギンタではこの用語を「集会[あるいは会衆]」を意味するヘブル語の用語 *qahal* (出エジプト 12: 6、16: 3、レビ 4: 13、民数記 14: 5、20: 6、申命記 5: 22、9: 10、10: 4、18: 16 を参照)の訳語として用いている。初期教会はそれらの人々自体をメシアを信じるイスラエルの会衆と考えた。ガラテヤ 1: 2 の特別なトピックを見よ。

「父なる神と主イエス・キリストにある」神とイエスはこのお2人の両方を表す1つの前置詞(3章 11 節、II テサロニケ 1: 2 と 12 節、2: 16 を参照)を用いて統語的に結合される。これは新約聖書の著者達がキリストの神性を神学的に主張するために用いる手法の一つである。もう一つの手法は YHWH の旧約聖書における称号とお働きをナザレのイエスに帰属させることである。

特別なトピック: 父

旧約聖書は父なる神について親密な家族の比喻を導入している。

1. イスラエルの国家はしばしば「YHWH の息子」と言い表されている(ホセア 11: 1、マラキ 3: 17 を参照)。
2. さらに前では申命記で父なる神について類似の語が用いられている(1: 31)。
3. 申命記 32 章ではイスラエルは「彼の子供達」と呼ばれ、神は「あなたの父」と呼ばれている。
4. この類似性は詩篇 103: 13 で述べられ、詩篇 68: 5 でさらにはっきりしている(孤児達の父)
5. それは預言者達の間で一般的であった(イザヤ 1: 2 と 63: 8、63: 16、64: 8[父なる神の息子イ

スラエル]、エレミヤ 3: 4 と 19 節、31: 9 を参照)。

イエスはアラム語を話されたが、このことは多くの場所で「お父様」がギリシャ語の *Pater* として見られることがアラム語の *Abba* に影響しているかもしれないことを意味している(14: 36 を参照)。この家族用語「父ちゃん」あるいは「パパ」はイエスの父なる神との親密さを反映しており、イエスがこのことを弟子達に明らかにされていることも私達自身の父なる神との親密さを強めている。この用語「お父様」は YHWH を意味する語として旧約聖書の中で控えめに用いられているが、イエスはこの語をしばしば、そして普遍的に用いられている。これは信徒にとって、キリストを介した神との新しい関係の主な啓示である(マタイ 6: 9 を参照)。

「主」 出エジプト 3: 14 で神はご自身の契約の御名、つまり YHWH をモーセに明かされた。後にユダヤ人は、この聖なる名を虚しいものとして十戒の一つを破らないようにするために、口に出して言うことを恐れた(出エジプト 20: 7、申命記 5: 11 を参照)。そこで彼らは御言葉を読むときにこの聖なる名を「亭主、領主、主人、主」を意味する *Adon* に置き換えた。これが英語訳聖書における YHWH の訳語「主」の語源である。

新約聖書の著者達はイエスを「主」(*kurios*) と呼ぶときにしばしばキリストの神性を主張した。この主張は初期教会において洗礼式の際の信条声明「イエスは主です」となった(ローマ 10 章 9-13 節、ペリピ 2: 6-11 を参照)。

「イエス」 この名は「YHWH は救ってくださる」(マタイ 1: 21) という意味であり、旧訳聖書に登場する名「ヨシュア」と同じである。「イエス」は神の契約の御名 (YHWH) の末尾に追加されるヘブル語の単語で救いを意味する用語 (*hosea*) から派生した名である。

「キリスト」 これは「聖別された方」を意味するヘブル語の用語 (*mashiach*) の訳語である。これは YHWH の命じられた業のための聖霊の特別な力づけと備えのことを言っている。その語は神の特別な、約束された、来るべき方、つまり「メシア」を意味するヘブル語の用語である(ルカ 2: 11 と 26 節、3: 15、4: 41、9: 20、22: 67、23: 2 と 35 節と 39 節、24: 26 と 46 節を参照)。

「恵み」 パウロは世俗の挨拶の言葉 *charein* (挨拶) を *charis* (恵み) に変えてクリスチャンに特有で神学的に重要な語とした。恵みは常に平和に先行する。

「平和」 これはヘブル語の挨拶の言葉 *shalom* を反映している。「恵みと平和」という聖句は多分ギリシャ語とヘブル語の慣習的な挨拶の言葉を結びつけたものであろう。

欽定訳聖書は「平和」の後に II テサロニケ 1: 1 にあるパウロの著作物に典型的な聖句「父なる神と主イエス・キリストから」を加えている。この聖句はギリシャ語のアンシアル書体の原典 B、F、G には見られない。それは古代のアンシアル書体の原典²⁸と A の中に見られる。少し変形したも

のは原典 D の中に見られる。それは II テサロニケ 1: 2 からの書記による注解かもしれない。UBS⁴は追加の聖句のないより短い文を階級 A(確定)としている。

NASB(改訂版)原典: 1: 2-10

²わたしたちはいつも祈りのなかであなたがたのことにふれ、あなたがた皆さんのことで神に感謝しています。³あなたがたがわたしたちの父なる神の御臨在のもとに信仰によって働き、愛とわたしたちの主イエス・キリストにある希望を堅く持って労苦していることをわたしたちは絶えず心に留めています。⁴神に愛されている兄弟たち、神があなたがたを選ばれたことをわたしたちは知っています。⁵わたしたちの福音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけではなく、聖霊と大きな確信によったからです。わたしたちがあなたがたの間であなたがたのために何をしたかは御承知の通りです。⁶そしてあなたがたはひどい苦しみのなかで聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに、そして主に倣う者となり、⁷マケドニアとアカイアの全ての信徒の模範となったのです。⁸神の御言葉があなたがたから出てマケドニアとアカイアに響きわたったばかりでなく、至るところに神に対するあなたがたの信仰が知れわたっているのです、わたしたちからは何も言う必要がないくらいです。⁹というのは彼ら自身がわたしたちについて言い広めているからです。つまりわたしたちがあなたがたにどのように迎えられたか、あなたがたがどのようにして偶像から離れて神に立ち帰って生ける真の神に仕えるようになったか、¹⁰また天から来られる神の御子を待ち望むようになったかを。この神の御子とは、神によって死者のなかからよみがえられ、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。

1: 2「わたしたち」これはパウロとシラスとテモテ(ユダヤ人信徒への伝道チーム)のことを言っている。パウロはこの複数形代名詞を自分の書いた他の書簡よりもテサロニケ人への第一の手紙において頻繁に用いた。このことがこの書簡の執筆の過程にどのような影響を与えたのかは明らかではない。パウロはしばしば書記(複数いた)を用いた。これらの書記達にどれほどの自由があったのかは正確には分かっていない。

「神に感謝しています」これは継続中の行為を示す現在形能動態命令形である。感謝の精神は書簡全体に表現されている(2: 13 と 3: 9 を参照)。パウロはピリピの教会ともこの(テサロニケの)教会とも良好な関係を持っていた。パウロの冒頭の祈りはギリシャの文化に適合しているばかりでなく、しばしば彼の神学的トピックを要約しているように思われる。

特別なトピック: 感謝

I. 導入

A. これは神に対する信徒の適切な態度である。

1. これはキリストを通した神への私達の賛美の源である。

- a. II コリント 2: 14
 - b. II コリント 9: 15
 - c. コロサイ 3: 17
2. これは伝道の正当な動機である。 I コリント 1: 4
3. これは天の絶え間ない主題である。
- a. 黙示録 4: 9
 - b. 黙示録 7: 12
 - c. 黙示録 11: 17
4. これは信徒の絶え間ない主題である。
- a. コロサイ 2: 7
 - b. コロサイ 3: 17
 - c. コロサイ 4: 2

II. 聖書の御言葉

A. 旧約聖書

1. 2つの重要語
 - a. *yadah* (BDB392) 賛美を意味する
 - b. *todah* (BDB392) 感謝を意味する。通常は捧げられた生贄について用いられる(II 列王記 29: 31、33: 16 を参照)。
2. ダビデは神を賛美し感謝するためにレビ人のうちの特別な者を指名した。この習慣はソロモン、ヘゼキヤ、そしてネヘミヤに受け継がれた。
 - a. I 列王記 16: 4、7 節、41 節
 - b. I 列王記 23: 30
 - c. I 列王記 25: 3
 - d. II 列王記 5: 13
 - e. II 列王記 7: 6
 - f. II 列王記 31: 2
 - g. ネヘミヤ 11: 12
 - h. ネヘミヤ 12: 24、27 節、31 節、38 節、46 節
3. 詩篇にはイスラエルの賛美と感謝の言葉があふれている。
 - a. YHWH が御自分の立てられた契約に忠実でいらっしゃることへの感謝
 - (1) 詩篇 107: 8
 - (2) 詩篇 103: 1 以降
 - (3) 詩篇 138: 2
 - b. 賛美は神殿での儀式の一部であった。
 - (1) 詩篇 95: 2

- (2) 詩篇 100: 4
- c. 賛美は犠牲を伴った。
 - (1) 詩篇 26: 7
 - (2) 詩篇 122: 4
- d. YHWH の御業に対する感謝
 - (1) 敵からの救出
 - (a) 詩篇 7: 17
 - (b) 詩篇 18: 49
 - (c) 詩篇 28: 7
 - (d) 詩篇 35: 18
 - (e) 詩篇 44: 8
 - (f) 詩篇 54: 6
 - (g) 詩篇 79: 13
 - (h) 詩篇 118: 1、21 節、29 節
 - (i) 詩篇 138: 1
 - (2) 監獄からの救出(比喻)、詩篇 142: 7
 - (3) 死からの救出
 - (a) 詩篇 30: 4、12 節
 - (b) 詩篇 86: 12-13
 - (c) イザヤ 38: 18-19
 - (4) 神は悪い者を罰せられ義なる者を讃えられる。
 - (a) 詩篇 52: 9
 - (b) 詩篇 75: 1
 - (c) 詩篇 92: 1
 - (d) 詩篇 140: 13
 - (5) 神は赦される。
 - (a) 詩篇 30: 4
 - (b) イザヤ 12: 1
 - (6) 神は御自分の民のために備えられる。
 - (a) 詩篇 106: 1 以降
 - (b) 詩篇 111: 1
 - (c) 詩篇 136: 1 と 26 節
 - (d) 詩篇 145: 10
 - (e) エレミヤ 33: 11

B. 新約聖書

1. 感謝(すること)について用いられる主な用語(数例ある)
 - a. *eucharisteo* (I コリント 1: 4 と 14 節、10: 30、11: 24、14: 17 と 18 節、コロサイ 1: 3 と 12 節、3: 17 を参照)
 - b. *eucharistos* (コロサイ 3: 15 を参照)
 - c. *eucharistia* (I コリント 14: 16、II コリント 4: 15、9: 11 と 12 節、コロサイ 2: 7 と 4: 2 を参照)
 - d. *charis* (I コリント 15: 57、II コリント 2: 14、8: 16、9: 15 と 18 節、I ペテロ 2: 19 を参照)
2. イエスの示された模範
 - a. イエスは食物に感謝された。
 - (1) ルカ 22: 17 と 19 節(I コリント 11: 24)
 - (2) ヨハネ 6: 11 と 23 節
 - b. イエスは答えられた祈りに感謝された。ヨハネ 11: 41
3. 感謝の他の例
 - a. 神が(私達の世に)キリストを贈って下さったことについて。II コリント 9: 15
 - b. 食物について
 - (1) 使徒行伝 27: 35
 - (2) ローマ 14: 6
 - (3) I コリント 10: 30、11: 24
 - (4) I テモテ 4: 3-4
 - c. 癒しについて。ルカ 17: 16
 - d. 平和について。使徒行伝 24: 2-3
 - e. 危険からの救出
 - (1) 使徒行伝 27: 35
 - (2) 使徒行伝 28: 15
 - f. 全ての環境について。ピリピ 4: 6
 - g. 全人類について。特に指導者達について。I テモテ 2: 1
4. 感謝の他の側面
 - a. それは全ての信徒に対する神の御意志である。I テサロニケ 5: 18
 - b. それは聖霊に満たされた生活の証しである。エペソ 5: 20
 - c. それを無視することは罪である。
 - (1) ルカ 17: 16
 - (2) ローマ 1: 21
 - d. それは罪の解毒剤である。エペソ 5: 4

5. パウロの感謝

a. パウロの教会への祝福

- (1) 福音を言い広めたことに対して
 - (a) ローマ 1: 8
 - (b) コロサイ 1: 3-4
 - (c) エペソ 1: 15-16
 - (d) I テサロニケ 1: 2
- (2) 授けられた恵みに対して
 - (a) I コリント 1: 4
 - (b) II コリント 1: 11、4: 15
- (3) 福音を受け入れたことに対して。I テサロニケ 2: 13
- (4) 福音を言い広める際の交わりに対して。ピリピ 1: 3-5
- (5) 恵みの中の(霊的)成長に対して。II テサロニケ 1: 3
- (6) (神に)選ばれたことを知っていることに対して。II テサロニケ 2: 13
- (7) 霊的祝福に対して。コロサイ 1: 12、3: 15
- (8) 気前よく与えることに対して。II コリント 9: 11-12
- (9) 新しい信徒達にあふれる喜びに対して。I テサロニケ 3: 9

b. パウロの個人的感謝

- (1) 一信徒であることについて。コロサイ 1: 12
- (2) 罪の束縛からの解放について。ローマ 7: 25、II コリント 2: 14
- (3) 他の信徒達の犠牲的労苦について。ローマ 16: 4、II コリント 8: 16
- (4) 知られていないいくつかの働きについて。I コリント 1: 4
- (5) 自分に与えられた霊的賜物について。I コリント 14: 18
- (6) 友の霊的成長について。フィレモン 4~5 節
- (7) 伝道の働きをなしうる体力があることについて。I テモテ 1: 12

III. 結論

- A. 救われた以上、感謝は私達の神への応答の中心である。それは言葉だけでなく日常生活における喜びとして表現される。
- B. 全てのことに感謝することは神の保護下で成熟した人生を送ることの目標である(I テサロニケ 5: 13-18 を参照)。
- C. 感謝は旧・新約聖書の両方における絶え間ない主題である。それはあなたのテーマですか。

「あなたがたのことにふれ」これは祈り続けるというパウロの固い決意を示す現在形中間態命令形である。パウロの祈りの統語的構造は3つの独立節、つまり(1)[祈りの中で] ふれる(2節)(2)

絶えず心に留める(3節)(3)知る(4節)の中に見られる。

特別なトピック: とりなしの祈り

I. 導入

- A. イエスの示された模範のゆえに祈りは重要である。
 - 1. 個人的な祈り。マルコ 1: 35、ルカ 3: 21、6: 12、9: 29、22: 29-46
 - 2. 神殿の清め。マタイ 21: 13、マルコ 11: 17、ルカ 19: 46
 - 3. 模範的な祈り。マタイ 6: 5-13、ルカ 11: 2-4
- B. 祈りは、臨在され、そして私達の祈りを通して私達の代わりに働く意志と能力を持っておられる人間的で慈み深い神を信じるという明白な行為の中に組み込まれる。
- C. 神は多くの領域で御自分の子らの祈りに対して個人的に働こうとされてきた(ヤコブ 4: 2を参照)。
- D. 祈りの主な目的は私達が三位一体の神と交わり共に時間を過ごすことである。
- E. 祈りの対象は信徒に関係する何かあるいは誰かである。私達は一度祈ったら、その後想いや関心がよみがえるたびに何度も繰り返し信仰を持って祈るべきである。
- F. 祈りにはいくつかの要素が関係しているようだ。
 - 1. 三位一体の神を賛美しあがめること。
 - 2. 神の御臨在と交わりと備えに対する感謝
 - 3. 私達の過去と現在の罪深さの告白
 - 4. 私達を感じている必要と望みの祈願
 - 5. 他者の必要を覚え、それを父なる神の御前でとりなすこと
- G. とりなしの祈りは神秘である。神は私達がする以上に祈る者を愛されるが、私達の祈りはしばしば私達自身のだけでなく彼らの変化や応答や必要に影響する。

II. 聖書の御言葉

A. 旧約聖書

- 1. とりなしの祈りの例
 - a. アブラハムのソドムのための哀願。創世記 18: 22 以降
 - b. モーセのイスラエルのための祈り
 - (1) 出エジプト 5: 22-23
 - (2) 出エジプト 32: 31 以降
 - (3) 申命記 5: 5
 - (4) 申命記 9: 18、25 節以降
 - c. サムエルのイスラエルのための祈り
 - (1) I サムエル 7: 5-6、8-9
 - (2) I サムエル 12: 16-23

(3) I サムエル 15: 11

d. ダビデの我が子のための祈り。II サムエル 12: 16-18

2. 神はとりなしの祈り手を求めておられる。イザヤ 59: 16

3. 周知の未告白の罪あるいは悔い改めない態度は私達の祈りに影響する。

a. 詩篇 66: 18

b. 箴言 28: 9

c. イザヤ 59: 1-2、64: 7

B. 新約聖書

1. 御子と聖霊のとりなしのお働き

a. イエス

(1)ローマ 8: 34

(2)ヘブル 7: 25

(3) I ヨハネ 2: 1

b. 聖霊 ローマ 8: 26-27

2. パウロのとりなしの働き

a. ユダヤ人のための祈り

(1)ローマ 9: 1 以降

(2)ローマ 10: 1

b. 諸教会のための祈り

(1)ローマ 1: 9

(2)エペソ 1: 16

(3)ピリピ 1: 3-4、9 節

(4)コロサイ 1: 3、9 節

(5) I テサロニケ 1: 2-3

(6) II テサロニケ 1: 11

(7) II テモテ 1: 3

(8)フィレモン 4 節

c. パウロは自分のために祈ってくれるように諸教会に頼んだ。

(1)ローマ 15: 30

(2) II コリント 1: 11

(3)エペソ 6: 19

(4)コロサイ 4: 3

(5) I テサロニケ 5: 25

(6) II テサロニケ 3: 1

3. 教会のとりなしの働き

- a. お互いのための祈り
 - (1) エペソ 6: 18
 - (2) I テモテ 2: 1
 - (3) ヤコブ 5: 16
- b. 特別なグループに求められた祈り
 - (1) 私達の敵 マタイ 5: 44
 - (2) クリスチャンの働き人 ヘブル 13: 18
 - (3) 支配者 I テモテ 2: 2
 - (4) 病人 ヤコブ 5: 13-16
 - (5) 背教者 I ヨハネ 5: 16

Ⅲ. 祈りが答えられるための条件

A. キリストおよび聖霊と私達の関係

- 1. キリストにつながる ヨハネ 15: 7
- 2. キリストの御名によって ヨハネ 14: 13 と 14 節、15: 16、16: 23-24
- 3. 聖霊によって エペソ 6: 18、ユダ 20 節
- 4. 神の御意志によって マタイ 6: 10、I ヨハネ 3: 22、5: 14-15

B. 意志

- 1. 心が揺れないこと マタイ 21: 22、ヤコブ 1: 6-7
- 2. 謙遜と悔い改め ルカ 18: 9-14
- 3. 不適切な願い事をする ヤコブ 4: 3
- 4. 自己中心性 ヤコブ 4: 2-3

C. その他の条件

- 1. 忍耐
 - a. ルカ 18: 1-8
 - b. コロサイ 4: 2
- 2. 求め続けること
 - a. マタイ 7: 7-8
 - b. ルカ 11: 5-13
 - c. ヤコブ 1: 5
- 3. 家庭内不和 I ペテロ 3: 7
- 4. 周知の罪からの解放
 - a. 詩篇 66: 18
 - b. 箴言 28: 9
 - c. イザヤ 59: 1-2
 - d. イザヤ 64: 7

IV. 神学的結論

- A. 特権とは何か。機会とは何か。義務と責任とは何か。
- B. イエスは私達の模範でいらっしゃる。聖霊は私達を導かれる方である。父なる神はじっと待っておられる。
- C. それはあなたを、あなたの家族を、あなたの友人を、そして世を変えるかもしれない。

1: 3「**絶えず心に留めています**」これは現在形能動態分詞である。これはパウロのこれら信徒達に対する強く継続的な関心を示している。彼は全ての教会に対してそうしたように、しばしばこれらの回心者達を想い、彼らのことで神に感謝した(ローマ 1: 9、エペソ 1: 16、ピリピ 1: 3-4、コロサイ 1: 9、II テモテ 1: 3、フィレモン 4 節を参照)。

NASB、NRSV 「あなたがたが信仰によって働き、愛と希望を堅く持って労苦していること」

NKJV 「あなたがたが信仰によって働き、愛によって希望のもとに忍耐して労苦していること」

TEV 「あなたがたがどのように信仰を實踐し、愛によって懸命に働き、そしてわたしたちの主イエス・キリストにあるあなたがたの希望がどれほど堅いか」

NJB 「あなたがたが信仰を實踐し、愛によって働き、希望を通して忍耐していること」

これら3つの聖句はそれぞれ、行いは信仰によって生み出され、労苦は愛によって生み出され、心の堅さは希望によって生み出されると主張する一つの文法構造の中にある。注目されているのは生きた篤い信仰を持つ信徒達である。信仰は常に神の恵みの御業への応答である。

これらの特徴はパウロの神への感謝の根本をなしている。エペソ 2: 8-10によれば、恵みと信仰は良い行いと関連がある。これら3つの用語(信仰、希望、愛)は新約聖書の中でしばしば一緒に現れる(ローマ 5: 2-5、I コリント 13: 13、ガラテヤ 5: 5-6、コロサイ 1: 4-5、I テサロニケ 5: 8、ヘブル 6: 10-12、10: 22-24、I ペテロ 1: 21-22 を参照)。登場する順番はしばしば異なる。「信仰」はこの文脈では教義(ユダ 3 節と 20 節を参照)ではなく個人的な信頼(8 節を参照)を意味している。ガラテヤ 3: 6 の特別なトピックを見よ。

「**労苦**」 「労苦」は非常に強烈な言葉である。キリスト教は能動的であって受動的ではない(I コリント 15: 58 を参照)。

「**堅さ**」 これも受動的な概念ではなく、試練に直面する中で能動的かつ自発的にじっと耐え忍ぶことである(ルカ 21: 19、ローマ 5: 3-4 を参照)。それは必要を満たすこと、つまり必要に応じて自発的に重荷を負うのを手伝うことを意味した(II テサロニケ 1: 4 を参照)。

「希望．．わたしたちの父なる神の御臨在のもとに」 これはこの書簡の大いなる主題 *parousia* つまり主の再来のことを言っている(1: 10、3: 13、4: 13～5: 11、Ⅱテサロニケ 1: 7 と 10 節を参照)。各章がまさにこの主題についての議論で終わっていることに注意せよ。「希望」は英語における「多分」あるいは「もしかすると」のような曖昧な意味ではなく、むしろ不明瞭な時間要素を伴ったある出来事の発生への期待という意味を持っている。ガラテヤ 5: 5 の特別なトピック「希望」を見よ。

1: 4「知っています」 これは 2 節のパウロの祈りに関連した3つの分詞のうちの3番目のものである。

「神に愛されている」 文字通り「神に愛されている者達」。この完了形受動態分詞節は神学的に彼らが神に選ばれたことと関連がある(エペソ 1: 4-5 を参照)。それは信徒の「愛されている者達」という継続する地位を強調している。愛という行為の主体は神である。形容詞「愛されている」(*agapetos*) は通常は父なる神のイエスへの愛について用いられる(マタイ 3: 17、12: 18、エペソ 1 章 6 節を参照)。それは後に信仰によって神を信頼し今も父なる神に愛されている人々について用いられるようになった(ローマ 1: 7、コロサイ 3: 12、Ⅱテサロニケ 2: 13 を参照)。

NASB	「神があなたがたを選ばれたこと」
NKJV	「神があなたがたを選ばれたこと」
NRSV	「神があなたがたを選ばれたこと」
TEV	「神．．はあなたがたを選ばれました」
NJB	「あなたがたが選ばれたこと」

動詞が見られないので(名詞節「あなたがたの選び」だから)行為の主体は神なるキリストであり、それは直前の動詞が受動態であることと神について特別に述べられていることによって表現されている。これは神の(私達に)与えられる愛と選びの神学的必要性を主張している(ヨハネ 6: 44 と 65 節を参照)。パウロは彼らが福音に応答したことで神に選ばれたと知っていたのだ。5 節に表現されている神の力強い御業によって神の選びを確認することができる。選びは聖さ(エペソ 1: 4 を参照)と奉仕(コロサイ 3: 12-14、Ⅱペテロ 1: 2-11 を参照)への召しである。

特別なトピック: 選び

選びは素晴らしい教義である。しかしそれは情実(えこひいき)への召しではなく、他者の救いのための道であり道具であり手段なのだ。旧約聖書ではこの用語は主に奉仕について用いられたが、新約聖書ではそれは主に奉仕によってもたらされる救いについて用いられている。聖書は神の主権と人類の自由意志の間の明らかな矛盾に決して妥協せず、両者についてはっきり述べているのだ。この聖書的な緊張の良い例はローマ9章の神の主権による選びとローマ10章の人類の応答の必要(10: 11 と 13 節を参照)であろう。

この神学的な緊張の本質はエペソ 1: 4 に見られる。イエスは神に選ばれたお方であり、全ての人が彼によって選ばれたのは確かなことである(Karl Barth)。墮落した人類の必要に対する神の「はい(了解しました)」はイエスである(Karl Barth)。エペソ 1: 4 はまた、予め定められた運命の最終が天国ではなく聖さ(キリストらしさ)であることを主張することによってこの問題を明らかにすることを助けている。私たちはしばしば福音の恩恵に魅了されて責任を忘れることがあるのだ。神の召し(選び)は時間と永遠のためにあるのだ。

教義は他の真理とも関連をもつようになるが、それは単なる無関係の真理との関連のようにではない。それは星座と一つの星との関係によく似ている。神の真理は西洋の文献にではなく東洋の文献に現れている。対極的な(逆説的な)2つの教義上の真理(超自然的な神対宇宙遍在的な神。例:安全対忍耐、父なる神と対等のイエス対父なる神の従者のイエス、クリスチャンの自由対契約の相手に対するクリスチャンの責任、等)の間の緊張を私達は取り除いてはいけない。

「契約」の神学的概念は(常に主導権を取られ綱領をつくれる)神の主権と人類からの義務的に始められ継続する悔い改めと信仰の応答(マルコ 1: 15、使徒行伝 3: 16 と 19 節、20: 21 を参照)とを結び付ける。逆説の一方だけを信じて他方を軽視して御言葉を解釈しないように注意しなさい。あなたの好きな教義や神学体系だけを主張することのないようにしなさい。

1: 5

NASB、NKJV 「あなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけではなく」

NRSV 「言葉だけによらずあなたがたに伝えられました」

TEV 「ただ言葉だけによらず」

NJB 「それはただ言葉としてだけではなくあなたがたに伝えられました」

単なる抽象的概念として以上に福音は私達の生活を変えた(ローマ 1: 16、ヤコブ 2: 14-26 を参照)。このことは現代の福音伝道において真理でなければならない。聖さは正しい教義というだけではなく、目標でもある(ローマ 8: 28-29、ガラテヤ 4: 19、エペソ 1: 4 を参照)。福音は(1)歓迎すべき人(2)愛すべきその人についての真理(3)その人を見習って生きる生活なのだ。3つ全てが重要である。

「聖霊によって」神の選びを確定する3つの関連事項がある。

1. 言葉によって伝えられた福音
2. 権力によって伝えられた福音
3. 聖霊によって伝えられた福音

これは(1)テサロニケの信徒達に個人的に起こったこと、あるいは(2)パウロを通した神の御業(ローマ 8: 15-16 を参照)について述べている。パウロの説教と教えは福音の真理と霊的力を力強く断言した。

「大きな確信によって」この「大きな確信」(コロサイ 2: 2、ヘブル 6: 11、10: 22 を参照)はパウロの説教あるいはテサロニケ人の福音への応答について述べているようだ。

「わたしたちがあなたがたの間であなたがたのために何をしたかは御承知の通りです」パウロは自分と自らの伝道チームのテサロニケ人の間における働き方(2: 7 と 10 節)を 2: 3-6 で述べられているものと対比させている。2章における違いに注意しなさい。

パウロ	他者
多くの反対に遭った	
迷いに基づかない	迷いに基づく
不純な動機に基づかない	不純な動機に基づく
ごまかしによらない	ごまかしによる
人を喜ばせない	人を喜ばせる
人にへつらわない	人にへつらう
貪欲ではない	貪欲である
自らの栄光を求めない	自らの栄光を求める
母親が子を育てるように優しく	
愛情をもって	
福音と自身について知らせる	

パウロはユダヤ人の中の偽教師達と問題のある人々のことを言っている(例えば使徒行伝 17 章 5 節)。

1: 6「そしてあなたがたは」これは 2~5 節の「わたしたち」との強調的な対比である。

NASB、NRSV 「そしてあなたがたはわたしたちに、そして主に倣う者となったのです」

NKJV 「そしてあなたがたはわたしたちに、そして主に従う者となったのです」

TEV 「あなたがたはわたしたちに、そして主に倣いました」

NJB 「そしてあなたがたはわたしたちに、そして主に倣う者とされました」

「倣う者」は英語では「模倣者」と訳されている(参考: そのギリシャ語での用語と概念は I テサロニケ 1: 6、2: 14、II テサロニケ 3: 7 と 9 節、I コリント 4: 16、11: 1、ガラテヤ 4: 12、ピリピ 3: 17、4: 9 を参照)。キリストらしさは神が全ての信徒に定められた目標である(ローマ 8: 28-29、ガラテヤ 4: 19、エペソ 1: 4 を参照)。人類の中の神のお姿は回復されるべきである(レビ 11: 44、19: 2、マタイ 5: 48、エペソ 1: 4、5: 1 を参照)。

NASB、NKJV	「御言葉を受け入れ」
NRSV	「あなたがたは御言葉を受け入れました」
TEV	「あなたがたは御言葉を受け入れました」
NJB	「あなたがたは福音を受け入れました」

この用語は「歓迎された客として受け入れる」(マタイ 10: 40-41、18: 5を参照)あるいは「メッセージを受け入れる」(Ⅱコリント 11: 4、ヤコブ 1: 21を参照)という意味を持つ。これはアオリスト中間態(異態)分詞である。人類はキリストの成し遂げられた御業に基づいて神が与えてくださった愛に悔い改めと信仰で応えなければならない(マルコ 1: 15、ヨハネ 1: 12、3: 16、使徒行伝 3: 16 と 19 節、20: 21、ローマ 10: 9-13を参照)。救いは(1)メッセージ[教義上の真理](2)人(存在することによる出会い)そして(3)生きるべき人生(6 節)である。私達は福音のメッセージを受け入れてイエスの友となる。私達は両者に完全に信頼しなければならない。これによって(神に)忠実で聖い新たな人生がもたらされる。

NASB、NKJV	「ひどい苦しみのなかで」
NRSV	「ひどい苦しみのなかで」
NRSV	「迫害にもかかわらず」
TEV	「ひどい苦しみにあつたにもかかわらず」
NJB	「あなたがたの周りの大きな反対」

これは文字通り「押し付ける」(ヨハネ 16: 33、使徒行伝 14: 22、Ⅱテサロニケ 1: 4 と 6 節を参照)である。クリスチャンになることは緊張のないことを保証しない。逆にその正反対である(マタイ 5 章 10-12 節、ヨハネ 15: 18-19、ローマ 8: 17、Ⅰペテロ 3: 13-17、4: 12-19を参照)。使徒行伝 17 章はパウロ(Ⅱコリント 4: 7-12、6: 3-10、11: 23-28を参照)とこの教会の経験した迫害のいくつかについて述べている。

「聖霊による喜びをもって」 聖霊の下さつたこの喜びはあまりにも圧倒的で完全なので、それは大きな迫害と苦痛のただ中にあつても存続している。それは(周囲の)環境に影響されない喜びである(ローマ 5: 2-5、Ⅱコリント 7: 4、Ⅰペテロ 4: 13を参照)。

1: 7「全ての信徒の模範となりました」 これはある意味で誇張であり、またとても文字通りのものでもある。試練の下でのテサロニケの信徒達の喜びと忍耐は他の(地の)信徒達にとって大きな励ましとなった。これはまた、預言者ヨブ(マタイ 5: 10 と 12を参照)とメシア(救世主)と使徒達の苦しみが未来の信徒達にどのような影響を与えたかを示している。信徒達にとって最も力強い証しは試練や苦痛や迫害のただ中でなされるのだ。

「模範」 以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: 型 (*Tupos*)

問題は様々な用法を持つ用語 *tupos* である。

1. Moulton と Milligan 共著 *The vocabulary of the Greek New Testament* の 165 ページ
 - a. 型
 - b. 計画
 - c. 文章の形式あるいは様式
 - d. 法令あるいは布告
 - e. 宣告あるいは判決
 - f. 癒しの神への捧げ物としての模範的人体
 - g. 法律の規範を強化する意味で用いられる動詞
2. Louw と Nida 共著 *Greek-English Lexicon* 第二巻 249 ページ
 - a. (傷の) 跡(ヨハネ 20: 25 を参照)
 - b. 姿(使徒行伝 7: 43 を参照)
 - c. 型(ヘブル 8: 5 を参照)
 - d. 模範(I コリント 10: 6、ピリピ 3: 17 を参照)
 - e. 原型(ローマ 5: 14 を参照)
 - f. 種類(使徒行伝 23: 25 を参照)
 - g. 内容(使徒行伝 23: 25 を参照)
3. Harold K. Moulton 著 *The Analytical Greek Lexicon Revised* の 441 ページ
 - a. (精神的) 打撃、印象、しるし(ヨハネ 20: 25 を参照)
 - b. 輪郭
 - c. 姿(使徒行伝 7: 43 を参照)
 - d. 形態、機構(ローマ 6: 17 を参照)
 - e. 型、意図(使徒行伝 23: 25 を参照)
 - f. 像、相方(I コリント 10: 6 を参照)
 - g. 予想図、予型(ローマ 5: 14、I コリント 10: 11 を参照)
 - h. 型の様式(使徒行伝 7: 44、ヘブル 8: 5 を参照)
 - i. 道徳的模範(ピリピ 3: 17、I テサロニケ 1: 7、II テサロニケ 3: 9、I テモテ 4: 12、I ペテロ 5: 3 を参照)

この文脈では上記の i. が最も近い意味であるようだ。福音は教義であり生活様式に影響するものである。キリストにある救いという無償の恵みはまたキリストのように生きることも要求するのだ。

「マケドニアとアカイアの」 これらはローマ帝国の属州である。アカイアは現在のギリシャの(国土の)範囲内にあった。マケドニアはギリシャと文化的かつ経済的に関係があったが政治的には独

立した国家であった。

1: 8「響きわたった」これは文字通り「大声で宣言する」あるいは「大声で言う」である。それは彼ら（テサロニケの信徒達）の喜びを通して試練のただ中にもかかわらず福音が「響きわたりそして響き続けている」ことを意味する完了形受動態直説法動詞である。英語ではこのギリシャ語の用語に由来する単語“echo”が対応する。ギリシャ語訳聖書では8～10節は一つの文となっている。

「...ばかりでなく、至るところに」これは2節と同じような比喩的な誇張である（ローマ 1: 8を参照）。聖書は東洋の書であるが、しばしば比喩的な言語を用いている。西洋的な文字通りの解釈に注意せよ。

特別なトピック: 東洋の文献

概念—聖書的逆説

1. この洞察は、聖書を神の御言葉として愛し信頼する私にとって個人的に最も役に立っている。聖書を深く研究しようとする中で、様々な言語に訳された原典が、限定された非組織的な方法で真理を明らかにしているのは明白である。神の靈感を受けた者によって書かれた原典は互いを打ち消したり軽視したりはできないのだ。真理は一つの御言葉を引用すること（根拠を探しながら御言葉を解釈すること）ではなく全ての御言葉（一部だけでなく全ての御言葉が神の靈感を受けた者によって書かれている。Ⅱテモテ 3: 16-17を参照）を知ることによりもたらされるのだ。
2. 聖書の真理の多くは（東洋の文献では）対極的な（逆説的な）2つの事柄に現れている（ルカ以外の新約聖書の著者達がヘブル人の思想家で一般的なギリシャ語で著述活動をしていたことを思い出そう。知恵に関する書と詩的な書は並列的に真理を現している。この対照的な並立は逆説のように機能する。この組織的並立は並列文のように機能する）。ともあれ両者は等しく真実なのだ。これらの逆説は私達のいつくしんできた単純な伝統にとって苦痛となるのだ。
 - a. 予め定められた運命 対 人間の自由意志
 - b. 信徒の安全 対 忍耐の必要
 - c. 原罪 対 意図的な罪
 - d. 神であるイエス 対 人間であるイエス
 - e. 父なる神と対等であるイエス 対 父なる神の従者であるイエス
 - f. 神の御言葉である聖書 対 人の手で書かれた書である聖書
 - g. 無罪（完璧主義。ローマ6章を参照） 対 罪を犯す傾向がないこと
 - h. 一度限りの瞬間的な義認と聖化 対 漸次的聖化
 - i. 信仰による義認（ローマ4章） 対 行いによる義認（ヤコブ 2: 14-26を参照）

- j. クリスチャンの自由(ローマ 14: 1-23、I コリント 8: 1-13、10: 23-33 を参照) 対 クリスチャンの責任(ガラテヤ 5: 16-21、エペソ 4: 1 を参照)
- k. 神の超自然性 対 神の宇宙遍在性
- l. 全く知り得ない神 対 御言葉とキリストを通して知り得る神。
- m. パウロが救いを比喻した言葉
 - (1)適用
 - (2)聖化
 - (3)義認
 - (4)救い
 - (5)賛美
 - (6)予め定められた運命
 - (7)和解
- n. 存在する神の御国 対 未来に完成する神の御国
- o. 神の賜物である悔い改め 対 救いのために必要な応答である悔い改め(マルコ 1 章 15 節、使徒行伝 20: 21 を参照)
- p. 旧約聖書は恒久的である 対 旧約聖書は過去のもので無意味である(マタイ 3 章 17-19 節 対 5: 21-48、ローマ7章 対 ガラテヤ3章)
- q. 信徒は召し使または奴隷 あるいは 子供または相続人

NASB	「わたしたちからは何も言う必要がないくらいです」
NKJV	「わたしたちからは何も言う必要がないくらいです」
NRSV	「わたしたちからはそのことについて何も言う必要がないくらいです」
TEV	「ですからわたしたちからは何も言う必要がありません」
NJB	「そのことについてわたしたちから他の人々に何も言う必要がありません」

意味の不明瞭な聖句であるので、多くの翻訳者達は前の節にある「信仰」をこれに付け加えて解釈している。これは必ずしも、彼らがキリスト教の教義や受難について全て理解していたことを意味してはいない。そうではなく、彼らの心に福音が確かに根づいていたことを彼らの生活が示していたのである。聖霊は全ての受け入れる心に福音の本質を明らかにされるのだ。

1: 9「偶像から離れて神に立ち帰った」これは異教の偶像崇拜からの彼らの悔い改めのことを述べている。福音には負の面と正の面—悔い改めと信仰がある(マルコ 1: 15、使徒行伝 3: 16 と 19 節、20: 21 を参照)。そこには「～へと向かう」とともに「～から神に立ち帰る」がある。

NASB スタディーバイブル(1748 ページ)にはテサロニケ人の回心には以下に示す3つの決定的証拠があるという考察が見られる。

1. 偶像崇拜から神に立ち帰ったこと

2. 神に仕えるようになったこと
3. キリストの再来を待ち望むようになったこと

「仕える」これは「奴隷として(仕えること)」を意味する。これは現在形不定詞である。彼らは偶像崇拝から神に立ち帰り(アオリスト)真の生ける神に仕え続けた(ローマ 6: 18 を参照)。このことは王なる神としもべなる追従者とを描写している。ある意味で私達は(神の)奴隷であり、また別の意味で(神の)子である。

「生ける真の神」これは神の契約の名 YHWH(出エジプト 3: 14 を参照)を反映している。YHWH は生ける唯一の神でいらっしゃる。これは聖書的な一神教の基本である(申命記 4: 35 と 39 節、6: 4、イザヤ 45: 5 と 6 節と 18 節と 21-22 節、47: 8 と 10 節を参照)。

特別なトピック: 神の名

A. *EI*

1. 多くの学者達がそれをアッカド語の語幹の「強いこと」あるいは「力強いこと」に由来すると信じているにもかかわらず、神に対する一般的な古代の呼び名である用語の本来の意味ははっきりしていない(創世記 17: 1、民数記 23: 19、申命記 7: 21、詩篇 50: 1 を参照)。
2. カナンのパンテオンでは崇高なる神は *EI* である(Ras Shamra 原典)。
3. 聖書では *EI* は通常は他の用語と混用されない。これらの組み合わせは神を特徴づける方法となった。
 - a. *EI-Elyon* (最も崇高なる神)、創世記 14: 18-22、申命記 32: 8、イザヤ 14: 14
 - b. *EI-Roi* (「見ておられる神」あるいは「ご自身を現わされる神」、創世記 16: 13
 - c. *EI-Shaddai* (「万能の神」あるいは「憐れみ深い神」または「山の神」、創世記 17: 1、35: 11、43: 14、49: 25、出エジプト 6: 3
 - d. *EI-Olam* (永遠におられる神)、創世記 21: 33。この用語は II サムエル 7: 13 と 16 節におけるダビデ王に対する神の約束と神学的に関連がある。
 - e. *EI-Berit* (「契約の神」、士師記 9: 46
4. *EI* は以下の用語群と同一視されている。
 - a. 詩篇 85: 8 とイザヤ 42: 5 における YHWH
 - b. 創世記 46: 3 における *Elohim*。ヨブ 5: 8 では「私は *EI* であり、あなたの父の *Elohim* である」。
 - c. 創世記 49: 25 における *Shaddai*
 - d. 出エジプト 34: 14、申命記 4: 24、5: 9、6: 15 における「嫉妬」
 - e. 申命記 4: 31 とネヘミヤ 9: 31 における「あわれみ」。申命記 7: 9、32: 4 における「忠実さ」。
 - f. 申命記 7: 21、10: 17 とネヘミヤ 1: 5、9: 32 とダニエル 9: 4 における「偉大で畏れ多い」
 - g. I サムエル 2: 3 における「知識」

- h. IIサムエル 22: 33における「私の力強い避け所」
 - i. IIサムエル 22: 48における「私の復讐者」
 - j. イザヤ 5: 16における「聖なる方」
 - k. イザヤ 10: 21における「力」
 - l. イザヤ 12: 2における「私の救い」
 - m. エレミヤ 32: 18における「偉大で力強い」
 - n. エレミヤ 51: 56における「報い」
5. 旧約聖書に登場する神の主な名前の全ての組み合わせはヨシュア 22: 22に見られる(*Elohim*、*YHWH*、以下同様)。

B. *Elyon*

1. その本来の意味は「崇高な」、「高貴な」、「高く上げられた」である(創世記 40: 17、I 列王記 9: 8、II 列王記 18: 17、ネヘミヤ 3: 25、エレミヤ 20: 2 と 36: 10、詩篇 18: 13 を参照)
2. それは神の他のいくつかの呼び名と同じ意味で用いられる。
 - a. *Elohim* —詩篇 47: 1-2、73: 11、107: 11
 - b. *YHWH* —創世記 14: 22、IIサムエル 22: 14
 - c. *El-Shaddai* —詩篇 91: 1 と 9 節
 - d. *El* —民数記 24: 16
 - e. *Elah* —ダニエル2~6章とエズラ4~7章でしばしば用いられ、ダニエル 3: 26、4: 2、5: 18 と 21 節に登場する *illair* (アラム語で「崇高なる」神を意味する用語)と関連がある。
3. それはしばしばイスラエル以外の民によって用いられる。
 - a. メルキゼデク、創世記 14: 18-22
 - b. バラム、民数記 24: 16
 - c. モーセ、申命記 32: 8における国々についての発言
 - d. 新約聖書のルカの福音書: 異教徒に対する記述。ギリシャ語の相当語 *Hupsistos* を用いている(1: 32、35 節、76 節、6: 35、8: 28、使徒行伝 7: 48、16: 17 を参照)。

C. 主に詩の中で用いられる *Elohim*(複数形)、*Eloah*(単数形)

1. この用語は旧約聖書以外では見られない。
2. この語はイスラエルの神あるいは国々の神々を言い表すことができる(出エジプト 12: 12 と 20: 3 を参照)。アブラハムの家族は多くの神々を信じていた(ヨシュア 24: 2 を参照)。
3. 申命記 32: 8(LXX)、詩篇 8: 5、ヨブ 1: 6 と 38: 7に見られるように、用語 *elohim* は他の霊的存在(天使、悪魔)を言い表す場合にも用いられる。それは士師(訳者注: 古代イスラエルの裁判官・行政官)を言い表すこともある(出エジプト 21: 6 と詩篇 82: 6 を参照)。
4. 聖書ではそれは神の最初の呼び名である(創世記 1: 1 を参照)。創世記 2: 4 で *YHWH* と一緒になるまではそれは排他的に用いられる。それは本来は(神学的に)、この惑星上の全ての生命を造り、維持され、与えられる方である神を言い表している(詩篇 104 篇を参照)。それ

は *El* と同意(義)語である(申命記 32: 15-19 を参照)。神の名の変化を別にすれば、詩篇 14 篇の *elohim* がちょうど詩篇 53 篇の YHWH と似ているのと同様に、それは YHWH とも並立できる。

5. 複数形でしかも他の神々を言い表すのにも用いられるにもかかわらず、この用語はしばしばイスラエルの神を言い表す。しかし通常は多神教的用法であることを表すために単数形の動詞を必要とする。

6. この用語はイスラエル以外の民の言葉の中に神の名前として見出される。

a. メルキゼデク、創世記 14: 18-22

b. バラム、民数記 24: 2

c. モーセ、国々についての発言、申命記 32: 8

7. イスラエルの多神教的な神の一般名が複数形なのは奇妙なことだ！ 確実性はないが、ここにいくつかの理論がある。

a. ヘブル語には多くの複数形があり、しばしば強調の目的で用いられる。「王の複数形」と呼ばれる、後の時代のヘブル語の文法の特徴はこれと密接に関連があり、そこでは複数形が概念を強調するために用いられている。

b. この語は、神が天で会われそして支配しておられる天使の集団を言い表しているかもしれない(I 列王記 22: 19-23、ヨブ 1: 6、詩篇 82: 1 と 89: 5 と 7 節を参照)。

c. この語が新約聖書にある三位一体の神の啓示を反映しているとみなすことも可能である。創世記 1: 1 では神は創造される。創世記 1: 2 では聖霊が満ちた状態となられ、そして新約聖書によればイエスは父なる神の代理者として創造の業をなさる方である(ヨハネ 1: 3 と 10 節、ローマ 11: 36、I コリント 8: 6、コロサイ 1: 15、ヘブル 1: 2 と 2: 10 を参照)。

D. YHWH

1. これは、契約をなさる神、つまり救い主でいらっしゃる神を反映する名前である！ 人間は契約を破るが、神はご自分のお言葉と(なされた)約束と契約に忠実でいらっしゃる(詩篇 103 篇を参照)。

この名前は創世記 2: 4 で初めて *Elohim* とともに登場した。創世記 1~2 章には創造についての記述は 2 度はないが、2 つのことが強調されている: (1) 宇宙(実体的)の創造主でいらっしゃる神、そして(2) 人間を特別に創造された神。創世記 2: 4 は人類の特権的地位と目的および罪の問題とその特別な地位に関連する反逆についての特別な啓示で始まる。

2. 創世記 4: 26 には「人間達が主の名(YHWH)を呼び始めた」と記されている。しかし、出エジプト 6: 3 によれば初期の契約の民(家父長達とその家族達)は神を *El-Shaddai* としてのみ知っていた。YHWH という名前は出エジプト 3: 13-16、特に 14 節にただ一度だけ説明されている。しかし、モーセの著書はしばしば(聖句中の)言葉を語源学的ではなく一般的な言葉の原則で解釈している(創世記 17: 5、27: 36、29: 13-35 を参照)。この名前の意味について

のいくつかの理論がある (IDB の第2巻 409~411 ページより抜粋)。

- a. アラビア語幹「熱烈な愛を示す」に由来。
- b. アラビア語幹「吹く」(嵐の神でいらっしやる神)に由来。
- c. ウガリット語(カナン語)幹「話す」に由来。
- d. フェニキア碑文によれば、「維持する人」あるいは「設立する人」を意味する使役動詞の分詞
- e. ヘブル語の *Qal* 形「いる人」あるいは「存在する人」(未来の意味では「いるだろう人」)に由来。
- f. ヘブル語の *Hiphil* 形「存在させる人」に由来。
- g. 「唯一生き続けている神」を意味するヘブル語幹「生きる」(例えば創世記 3: 20)に由来。
- h. 出エジプト 3: 13-16 の文脈中で完了の意味で用いられている未完了形動詞。「私は以前にあったものであり続けるだろう」あるいは「私はいつもあり続けてきたものであり続けるだろう」(J. Wash Watts 著 *A Survey of Syntax in the Old Testament* 67 ページを参照)。

YHWH という名前の完全な形はしばしば略語あるいは可能な限り本来の形で表現される。

- (1) *Yah*(例えば Hallelu-yah)
- (2) *Yahu*(名前。例えば Isaiah)
- (3) *Yo*(名前。例えば Joel)

3. 後の時代のユダヤ教ではこの契約の名はとても神聖に(ヤハウエの四子音文字: [訳者注]ヘブル語で「神」を示す4字。YHWHなどと翻字される)なったので、ユダヤ人は出エジプト 20: 7 と申命記 5: 11 と 6: 13 の命令に違反しないようにするためにその名を口にすることを恐れた。

そこで彼らはその名のかわりに「所有者」、「主人」、「夫」、「主」を意味するヘブル語の用語 *adon* あるいは *adonai* (私の主)を使った。旧約聖書の原文を読んでいるときに文中に YHWH が出てくると彼らはそれを「主」(を意味するヘブル語の用語 *adon* あるいは *adonai*)と発音した。これが、英訳聖書において YHWH が Lord と表記される理由である。

4. *EI*と同様に、しばしば YHWH はイスラエルの契約の神のあるご性質を強調するために他の用語と一緒に用いられる。多くの可能な組み合わせの中から数例をここに挙げた。

- a. *YHWH - Yireh*(YHWH は備えられるだろう)、創世記 22: 14
- b. *YHWH - Rophekha*(YHWH はあなたの癒し主)、出エジプト 15: 26
- c. *YHWH - Nissi*(YHWH は私の旗)、出エジプト 17: 15
- d. *YHWH - Meqaddishkem*(YHWH あなたを聖別される方)、出エジプト 31: 13
- e. *YHWH - Shalom*(YHWH は平和)、士師記 6: 24
- f. *YHWH - Sabaoth*(万軍の YHWH)、I サムエル 1: 3 と 11 節、4: 4、15: 2、しばしば預言者達の中で
- g. *YHWH - Ro 'I* (YHWH は私の羊飼い)、詩篇 23: 1

- h. *YHWH - Sidqenu*(YHWH は私達の義)、エレミヤ 23: 6
- i. *YHWH - Shammah*(YHWH はおられる)、エゼキエル 48: 35

1: 10 この節は福音の要約(I コリント 15: 1-4 を参照) のようである。これらの要約はしばしば *kerygma*(布告) と呼ばれる。

特別なトピック: 初期教会の *kerygma*

- A. 旧約聖書の中でなされた神の約束は今や救世主イエスが来られたことで成就している(使徒行伝 2: 30、3: 19 と 24 節、10: 43、26: 6-7、22 節、ローマ 1: 2-4、I テモテ 3: 16、ヘブル 1 章 1-2 節、I ペテロ 1: 10-12、II ペテロ 1: 18-19)。
- B. イエスは洗礼を受けられた際に神によってメシアとして聖別された(使徒行伝 10: 38)。
- C. イエスは洗礼を受けられた後にガリラヤでの伝道の働きを始められた(使徒行伝 10: 37)。
- D. イエスの伝道のお働きは神の御力によって善を行い力強い業を行うことであった(マルコ 10 章 45 節、使徒行伝 2: 22、10: 38)。
- E. メシアは神の永遠の目的によって十字架に架かれた(マルコ 10: 45、ヨハネ 3: 16、使徒行伝 2: 23、3: 13-15、4: 11、10: 39、26: 23、ローマ 8: 34、I コリント 1: 17-18、15: 3、ガラテヤ 1 章 4 節、ヘブル 1: 3、I ペテロ 1: 2 と 19 節、I ヨハネ 4: 10)。
- F. イエスは死者の中からよみがえられて弟子達にお姿を現された(使徒行伝 2: 24、31-32 節、3 章 15 節と 26 節、10: 40-41、17: 31、26: 23、ローマ 8: 34、10: 9、I コリント 15: 4-7、12 節以降、I テサロニケ 1: 10、I テモテ 3: 16、I ペテロ 1: 2、3: 18 と 21 節)。
- G. イエスは神によって高く上げられて「主」の名を与えられた(使徒行伝 2: 25-29、33-36 節、3: 13、10: 36、ローマ 8: 34、10: 9、I テモテ 3: 16、ヘブル 1: 3、I ペテロ 3: 22)。
- H. 私達が神との新しい交わりを始められるようにイエスは聖霊を下さった(使徒行伝 1: 8、2 章 14-18 節、38-39 節、10: 44-47、I ペテロ 1: 12)。
- I. イエスは裁きと万物の回復のために再来されることになっている(使徒行伝 3: 20-21、10 章 42 節、17: 31、I コリント 15: 20-28、I テサロニケ 1: 10)。
- J. 御言葉を聞く者は皆悔い改めて洗礼を受けるべきである(使徒行伝 2: 21 と 38 節、3: 19、10: 43 と 47-48 節、17: 30、26: 20、ローマ 1: 17、10: 9、I ペテロ 3: 21)。

これら一連の事柄は初期教会の主な公告であるが、新約聖書の著者達は自らの説教の中でその一部を省いたり他の特別な事柄を強調したりした。マルコの福音書は全体的に *kerygma* の使徒ペテロの解釈に厳密に従っている。伝統的にマルコは自らの福音書の執筆の際にペテロのローマでの説教を取り入れたと考えられている。マタイとルカはマルコの福音書の基本構造に従っている。

「天から来られる神の御子を待ち望む」これも現在形不定詞である。彼らは神に仕え続け(9

節)、キリストの再来を待ち続けた。パウロはこの書簡の基本概念としてキリストの再来を強調し続けた。全ての章はこの主題で締めくくられている(1: 10、2: 19、3: 13、4: 13-18、5: 23を参照)。救いは過去、現在、そして未来なのだ。5: 9の特別なトピックを見よ。

「**神によって死者のなかからよみがえられ**」これは父なる神が御子の身代わりの死を受け入れられたこと(I コリント15章を参照)の断定である。三位一体の神の3つの御人格、つまり父なる神—使徒行伝 2: 24、3: 15、4: 10、5: 30、10: 40、13: 30と33節と34節と37節、17: 31、聖霊—ローマ 8: 11、御子—ヨハネ 2: 19-22、10: 17-18、の全てはキリストの復活の中に生きている。ガラテヤ 4: 4の特別なトピック「三位一体」を見よ。

「**わたしたちを救ってください**」これはイエスが私達の身代わりになされる継続的な御業を強調する現在形中間態(異態)分詞である。イエスの勝利は続いているのだ(ローマ 8: 31-39を参照)。神の御子イエスは私達のためにとりなし続けておられるのだ(I ヨハネ 2: 1、ヘブル 7: 25、9: 24を参照)。

「**来るべき怒り**」ある意味でイエスの再来は彼らの大きな希望であり、また永遠の損失でもある。信徒はユダヤ人や異教徒からの迫害と圧力を受けることになるが、神のお怒りを受けることには決してならない(5: 9を参照)。神のお怒りはキリストを拒む者全て(I テサロニケ 2: 16、マタイ25章、ローマ1~2章を参照)に来ている(現在形中間態[異態]分詞)。怒りは擬人的な用語であるが「神の愛」でもあるというのは全く真実である。

テサロニケ人への第一の手紙の各章の末尾においてキリストの再来は最も重要である(1: 10、2: 19、3: 13、4: 13-18、5: 23を参照)。新約聖書の著者達は来るべき裁きと報いの日についての自分達の世界観を通して時代と歴史を見ている。新約聖書は全般的に終末論的である(FeeとStuart 共著の *How to Read the Bible For All Its Worth* の131-134ページを参照)。

特別なトピック: 苦難

この用語のパウロの用法(*thlipsis*)とヨハネの用法との間には神学的区別が必要である。

A. パウロの用法(ヨハネの用法を反映している)

1. 墮落した世にある問題、苦難、悪
 - a. マタイ 13: 21
 - b. ローマ 5: 3
 - c. I コリント 7: 28
 - d. II コリント 7: 4
 - e. エペソ 3: 13
2. 未信者によって引き起こされる問題、苦難、悪

- a. ローマ 5: 3、8: 35、12: 12
 - b. IIコリント 1: 4 と 8 節、6: 4、7: 4、8: 2 と 13 節
 - c. エペソ 3: 13
 - d. ピリピ 4: 14
 - e. Iテサロニケ 1: 6
 - f. IIテサロニケ 1: 4
3. 終りの時の問題、苦難、悪
- a. マタイ 24: 21 と 29 節
 - b. マルコ 13: 19 と 24 節
 - c. IIテサロニケ 1: 6-9
- B. ヨハネの用法
1. ヨハネは黙示録の中で *thlipsis* と *orge* つまり *thumos* とを特別に区別している。*Thlipsis* は未信者が信徒に対してすることで、*orge* と *thumos* は神が未信者に対してなされることである。
- a. *thlipsis* —黙示録 1: 9、2: 9-10、22 節、7: 14
 - b. *orge* —黙示録 6: 16-17、11: 18、16: 19、19: 15
 - c. *thumos* —黙示録 12: 12、14: 8、10 節、19 節、15: 2 と 7 節、16: 1、18: 3
2. ヨハネもこの用語を自らの福音書の中で、信徒がいつの世にも直面する問題を反映させるために用いている—ヨハネ 16: 33

特別なトピック: 一人の人間として表現された神(擬人的言葉)

I. この種の言葉は旧約聖書ではとても一般的である(数例を挙げる)。

A. 肉体の構成要素

1. 両目—創世記 1: 4 と 31 節、6: 8、出エジプト 33: 17、民数記 14: 14、申命記 11: 12、ゼカリヤ 4: 10
2. 両手—出エジプト 15: 17、民数記 11: 23、申命記 2: 15
3. 腕—出エジプト 6: 6、15: 16、民数記 11: 23、申命記 4: 34、5: 15
4. 両耳—民数記 11: 18、Iサムエル 8: 21、II列王記 19: 16、詩篇 5: 1、10: 17、18: 6
5. 顔—出エジプト 32: 30、33: 11、民数記 6: 25、申命記 34: 10、詩篇 114: 7
6. 指—出エジプト 8: 19、31: 18、申命記 9: 10、詩篇 8: 3
7. 声—創世記 3: 8 と 10 節、出エジプト 15: 26、19: 19、申命記 26: 17、27: 10
8. 足—出エジプト 24: 10、エゼキエル 43: 7
9. 人間の姿—出エジプト 24: 9-11、詩篇 47 篇、イザヤ 6: 1、エゼキエル 1: 26
10. 主の天使—創世記 16: 7-13、22: 11-15、31: 11 と 13 節、48: 15-16、出エジプト 3: 4、13-21 節、14: 19、士師記 2: 1、6: 22-23、13: 3-22

B. 身体行為

1. 創造の過程における宣言—創世記 1: 3、6 節、9 節、11 節、14 節、20 節、24 節、26 節
2. エデンの中を歩く(つまり足音を立てる)—創世記 3: 8、18: 33、ハバクク 3: 15
3. ノアの箱舟の扉を閉める—創世記 7: 16
4. 生贄の香りを嗅ぐ—創世記 8: 21、レビ 26: 31、アモス 5: 21
5. 天から降(くだ)る—創世記 11: 5、18: 21、出エジプト 3: 8、19: 11 と 18 節と 20 節
6. モーセを葬る—申命記 34: 6

C. 人間的感情(数例を挙げる)

1. 後悔または悔い改め—創世記 6: 6 と 7 節、出エジプト 32: 14、士師記 2: 18、I サムエル 15: 29 と 35 節、アモス 7: 3 と 6 節
2. 怒り—出エジプト 4: 14、15: 7、民数記 11: 10、12: 9、22: 22、25: 3 と 4 節、32: 10 と 13 節と 14 節、申命記 6: 5、7: 4、29: 20
3. 嫉妬—出エジプト 20: 5、34: 14、申命記 4: 24、5: 9、6: 15、32: 16 と 21 節、ヨシュア 24: 19
4. 嫌悪または憎悪—レビ 20: 23、26: 30、申命記 32: 19

D. 家族に関連する用語(数例を挙げる)

1. 父

- a. イスラエルの—出エジプト 4: 22、申命記 14: 1、39: 5
- b. 王の—II サムエル 7: 11-16、詩篇 2: 7
- c. 父親らしい行為の比喩—申命記 1: 31、8: 5、32: 1、詩篇 27: 10、箴言 3: 12、エレミヤ 3: 4 と 22 節、31: 20、ホセア 11: 1-4、マラキ 3: 17

2. 親—ホセア 11: 1-4

3. 母—詩篇 27: 10(育児中の母親との類似)、イザヤ 49: 15、66: 9-13

4. 若い忠実な愛人—ホセア 1~3 章

II. この種の言葉を用いる理由

- A. それは神が御自身を人類に現されるために必要である。男性としての神のとても普遍的な概念は擬人化である。なぜなら神は霊でいらっしゃるからだ。
- B. 神は人間の生活の最も意味深い場面を取り上げて、墮落した人類(父、母、親、愛人)に御自身を現されるために用いられる。
- C. 必要なことであるとはいえ、神はいかなる現実の形態をも限定してとることを望んではおられない(出エジプト20章、申命記5章を参照)。
- D. 究極の擬人化はイエスの受肉なのだ。神は実体を持たれ、触れることができるようになった(Iヨハネ 1: 1-3を参照)。神のメッセージは神の御言葉となった(Iヨハネ 1: 1-18を参照)。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. パウロはなぜこの書簡中で自らの使徒の地位を主張したのか。
2. 1節で重要なことは何か。
3. なぜ信仰と希望と愛は新約聖書の中で一緒に高頻度で述べられているのか。
4. 選びは信徒の行動とどのように関連しているのか。
5. なぜクリスチャンは苦しみを受けるのか。キリストの再来は苦難の問題をどのように述べているか。

テサロニケ人への第一の手紙2章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
テサロニケでのパウロの働き	パウロの働き	パウロの生活と働き	テサロニケでのパウロの働き	テサロニケでパウロの示した模範
2: 1~12	2: 1~12	2: 1~8	2: 1~9	2: 1~7 前半
				2: 7 後半~12
		2: 9~12		
			2: 10~12	
	彼らの回心			テサロニケ人の信仰と忍耐
2: 13~16	2: 13~16	2: 13~16	2: 13~16	2: 13~16
パウロの教会再訪の望み	彼らに会いたいという切なる望み	パウロのテサロニケ人への好意	パウロのテサロニケの教会再訪の望み	パウロの心配
(2: 17~3: 13)		(2: 17~3: 13)	(2: 17~3: 13)	
2: 17~20	2: 17~20	2: 17~20	2: 17~20	2: 17~20

第三読書サイクル(viiページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

1～13節の文脈の洞察

- A. この章はユダヤ人のテサロニケの教会への反発の増大を反映している(使徒行伝 17: 1-9 を参照)。
- B. この章は真の伝道の働きの特徴を見事に表現している。パウロはこれらの特徴を対象的な2つの事柄の組、つまり否定的な事柄と肯定的な事柄のセット(3～7節)3つで示した。パウロは自らのメッセージと目的と意図を弁護している。
- C. 10～12節は1～9節の要約である。
- D. この章はギリシャ語の原文をどこで区切るべきかという英訳上の混乱を反映している。
 - 1. 6～7節
 - 2. 11～12節
- E. パウロは14～16節で一時的に話題を変えて、コリントにおける自らの現況と初めてのユダヤ人からの反発の経験の概要について議論している。これらの節はパウロのユダヤ人についての(ローマ9～11章以外で)最も強烈で否定的なコメントである。

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 2: 1-12

¹兄弟たち、あなたがた自身が知っているように、わたしたちがあなたがたのところに来たことは無駄ではありませんでした。²それどころか、あなたがたも知ってのとおり、以前にわたしたちはピリピで苦しみと不当な扱いを受けましたが、多くの反発のただ中でわたしたちの主にあって大胆にあなたがたに神の福音を語ったのでした。³わたしたちの勧告は迷いや不純な動機あるいはごまかしによるものではありません。⁴わたしたちは神に認められて福音をゆだねられているからこそ、このように語っています。それは人を喜ばせるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくためです。⁵あなたがたが知っているように、わたしたちは決して人にへつらうようなことを言ったり、口実を作ってむさぼるようなことはしませんでした—そのことは神が証してくださいます—。⁶わたしたちはキリストの使徒として自分たちの權威を主張しましたが、あなたがたからも他の人たちからも誉れを求めませんでした。⁷しかしわたしたちはあなたがたの間では従順になりました。ちょうど母親が自分の子供を大切に育てるように。⁸あなたがたに対する愛情の深さのゆえに、わたしたちは神の福音だけでなく自分達自身の命さえ喜んであなたがたに差し上げたいと思ったほどです。なぜならあなたがたはわたしたちにとって愛する者となったからです。⁹兄弟たち、あなたがたは覚えているでしょう、わたしたちの労苦を、わたしたちがあなたがたに負担をかけまいと夜も昼もどれほど懸命に働きながらあなたがたに神の福音を宣べ伝えたかを。¹⁰あなたがた信徒に対してわたしたちがどれほど敬虔に、正しく、そして非難されることのないようにふるまったかはあなたがたが証してくださいますし、神も証してくださいます。¹¹あなたがたが知っているように、父親が自分の子供に対してするようにわたしたちはあなたがた一人一人に勧め、励まし、懇

願しました。¹²御自分の王国と栄光にあなたがたを招いておられる神の恵みにふさわしくあなたがたが歩むことを。

2: 1「あなたがた自身知っているように」パウロがテサロニケの信徒達との交流についてあまりにも頻繁に述べているので、この聖句はこの書簡の特徴を表すようになった(1: 5、2: 1、2 節、5 節、11 節を参照)。同様の聖句が 9 節「あなたがたは覚えているでしょう」と 10 節「あなたがたが証ししてくれます」に見られる。

NASB、NKJV、NRSV 「わたしたちがあなたがたのところに来たことは無駄ではありませんでした」

TEV 「わたしたちがあなたがたのところを訪れたことは失敗ではありませんでした」

NJB 「わたしたちがあなたがたのところを訪れたことは無意味ではないとわかりました」

これは完了形能動態直説法動詞である。これは(1)「無駄」(I コリント 15: 10 と 58 節を参照)ではないこと、そして(2)「無収穫」(マルコ 12: 2 を参照)ではないことを意味しているようだ。テサロニケの教会はユダヤ人の猛烈な反発にもかかわらず、同じようにユダヤ人の怒りを経験した(13 ~ 16 節を参照)ユデアの諸教会と同様に存続し続けた。

2: 2「それどころか」これは強い反意的接続語であり(*alla*、4 節[2回]、7 節、8 節を参照)、対照の意味を示す。

「以前にわたしたちはピリピで苦しみと不当な扱いを受けましたが」パウロは自らの受難と福音との関連づけを始めている(使徒行伝 16: 11-40、I コリント 4: 9-13、II コリント 4: 8-12、6: 4-10、11: 24-27 を参照)。

NASB 「不当な扱いを受けました」

NKJV 「意地悪されました」

NRSV 「恥ずかしくも不当な扱いを受けました」

TEV 「侮辱されました」

NJB 「ひどく侮辱されました」

これは肉体的・精神的虐待である。

NASB 「わたしたちの主にあって大胆にあなたがたに神の福音を語ったのでした」

NKJV 「わたしたちの主にあって大胆にあなたがたに神の福音を語ったのでした」

NRSV 「わたしたちの主にあって大胆にあなたがたに神の福音を宣べ伝えたのです」

TEV 「しかし神は御自分からの福音をあなたがたに語る勇気をわたしたちに下さったのです」

NJB 「わたしたちの神が御自分の福音をあなたがたに宣べ伝える勇気をわたしたちに下さったのです」

「大胆さ」については以下の特別なトピックを見よ。

聖句「神の福音」は以下に示すような意味を持つと思われる。

1. 神についての福音(目的格所有格)
2. 神についての福音(主格所有格、TEV と JB を参照)。これと同じ聖句は 8 節と 9 節にもある(ローマ 15: 16、I テモテ 1: 11、I ペテロ 4: 17 を参照)。

特別なトピック: 大胆さ(*Parresia*)

このギリシャ語の用語は「全ての」(*pan*)と「演説」(*rhetoric*)との複合語である。演説におけるこの自由つまり大胆さはしばしば反発や拒絶のただ中における大胆さを意味した。

ヨハネの著作物においては(13 回使用)この語はしばしば公告を意味する(ヨハネ 7: 4 およびパウロの著作物のコロサイ 2: 15 を参照)。しかし、時々この語は単に「ありのままに(はっきりと)」という意味を示すことがある。

使徒行伝においては使徒達はイエスについてのメッセージを、イエスが父なる神と神の御計画とお約束についてお話しになったのと同じように(大胆に)語った(使徒行伝 2: 29、4: 13 と 29 節と 31 節、9: 27-28、13: 46、14: 3、18: 26、19: 8、26: 26、28: 31 を参照)。パウロも大胆に福音を語ることができるように(エペソ 6: 19、I テサロニケ 2: 2 を参照)、また福音に生きることができるように(ピリピ 1: 20 を参照)祈り求めている。

パウロのキリストにある終末論的な希望はこの現況の悪い世に福音を宣べ伝える大胆さと自信とを彼に与えた(II コリント 3: 11-12 を参照)。イエスも自信を持っておられたのでイエスの従者達の行動は適切なものとなった(II コリント 7: 4 を参照)。

この用語にはもうひとつの特徴がある。ヘブル人への手紙ではこの用語は、神に近づいて話しかけることにおけるキリストにある大胆さの意味だけに用いられている(ヘブル 3: 6、4: 16、10: 19 と 35 節を参照)。信徒は御子を通じて父なる神に完全に受け入れられ親密な関係へと招かれているのだ。

この用語は新約聖書の中で幾通りにも用いられている。

1. 自信、大胆さ、確信
 - a. 人に関して(使徒行伝 2: 29、4: 13 と 31 節、II コリント 3: 12、エペソ 6: 19 を参照)
 - b. 神に関して(I ヨハネ 2: 28、3: 21、4: 12、5: 14、ヘブル 3: 6、4: 16、10: 19 を参照)
2. あからさまに、率直に、はっきりと語る(マルコ 8: 32、ヨハネ 7: 13、10: 24、11: 14、16: 25、使徒行伝 28: 31 を参照)
3. 公的に語る(ヨハネ 7: 26、11: 54、18: 20 を参照)

4. 関連する語形 (*parrhesiazomai*) は困難な環境のただ中で大胆に説教するという意味で用いられている(使徒行伝 18: 26、19: 8、エペソ 6: 20、I テサロニケ 2: 2 を参照)。

この文脈中ではこの用語は終末論的な自信について述べている。信徒達はキリストの再来を恐れない。彼らはキリストにつながっており、またキリストのような生活をしているので、自信に満ちた熱い気持ちでキリストの再来を歓迎するのである。

「多くの反発のただ中で」これは荒々しい徒手による格闘を表す競技用語あるいは軍事用語である(ピリピ 1: 30、コロサイ 2: 1 を参照)。このギリシャ語の用語は英語に取り入れられて“agony”となった。

2: 3

NASB、NKJV 「勧告」

NRSV、TEV 「主張」

NJB 「励まし」

これはヨハネ 14: 16 と 26 節、15: 26、16: 7 で聖霊を指して、また I ヨハネ 2: 1 でイエスを指して用いられている用語 (*parakletos*) と同じ語源に由来する用語 (*paraklesis*) であり、「慰める者」、「弁護者」あるいは「助け手」と訳されている。3: 7 の完全な解説を見よ。

NASB 「迷いによるものではありません」

NKJV 「ごまかしによるものではありません」

NRSV 「ごまかしによるものではありません」

TEV 「迷いによるものではありません」

NJB 「わたしたちは迷っていたので」

Planes は「惑星」を指すギリシャ語の用語であり、通常は星座の形態をとらない輝く天体(惑星、彗星、流れ星)のことを言っている。従ってそれらは「放浪者」と呼ばれ、後に比喩的に迷いを意味するようになった。

NASB 「不純な動機」

NKJV 「不潔」

NRSV、TEV 「不純な動機」

NJB 「不道徳」

この用語は性的怠惰を意味する(4: 7、ローマ 1: 24、ガラテヤ 5: 19、エペソ 5: 3、コロサイ 3: 5 を参照)。異教崇拝ではしばしば性行為が行なわれるということは覚えておくべきである。パウロは道徳的怠惰を擁護したことで、信仰を通した恵みによる義認を誤解したユダヤ人の律法学者達から非難されていたのかもしれない。

NASB 「ごまかしによる」
 NKJV 「策略によるものでもありませんでした」
 NRSV 「あるいはごまかし」
 TEV 「誰かを欺こうとしたのでもありません」
 NJB 「あるいは誰かを欺こうとしていた」

3節の他の2つの用語はパウロの動機について述べているが、この聖句は詐欺的な雰囲気を表している(エペソ4:14を参照)。「ごまかし」は本来「おとり(えさ)を使って捕えること」を意味する(マタイ26:4、マルコ7:22、14:1を参照)が、後に利益のごまかしを比喻する意味に変わった(Ⅱコリント2:17を反映するⅡコリント4:2を参照)。パウロはしばしば貪欲さを非難された(5節を参照)。

「わたしたちは神に認められて」 この完了形受動態直説法動詞は(神からの)承認への期待を伴った試験(*dokimazo*)を意味する。この意味での「認める」は一般に硬貨の真贋性試験を意味する。パウロの伝道チームは神に心を吟味され認められ続けてきていた。3:5の特別なトピック「試験に対応するギリシャ語の用語とその意味」を見よ。

「ゆだねられている」 これはアオリスト受動態不定詞である。この用語は「信仰」、「信条」、「信頼」と同じ語幹(*pisteuo*)に由来する。その基本的な概念は他者に何かを託すことである(Ⅰコリント9:17、ガラテヤ2:7、Ⅰテモテ1:11、テトス1:3を参照)。信徒は福音のしもべなのだ(Ⅰコリント4:1-2、Ⅰペテロ4:10を参照)。

「このように語っています」 これは完了形能動態不定詞である。信徒は受け取った福音(コロサイ4:2-6、Ⅰペテロ3:15を参照)を大胆に(2節を参照)分け与えなければならない。

「それは人を喜ばせるためではなく、神に喜んでいただくためです」(2:6、ガラテヤ1:10を参照)

「わたしたちの心を吟味される」 これは「心」のヘブル語での全人格という意味での用法を反映している。神は私達の意志を御存知なのだ(Ⅰサムエル16:7、詩篇7:9、26:2、44:21、139:1と23節、箴言21:2、エレミヤ11:20、12:3、17:10、ルカ16:15、使徒行伝1:24、15:8、ローマ8:27、黙示録2:23を参照)。4:6の特別なトピック「心」を見よ。

2:5「わたしたちは決して人にへつらうようなことを言いませんでした」 この用語は不正な動機のごまかしを意味する。反対する者達、特にコリントのそれらは(この書簡を書いたときパウロはコリントにいた)ここ(テサロニケ)のユダヤ人達と同様にしばしばパウロを不正な動機を持つ者として非難した。

「口実を作ってむさぼるようなこともしませんでした」パウロはしばしば貪欲さつまり日和見主義(ご都合主義)を非難されているが、多分それが(当時の)ギリシャ人の巡回布教師の特徴であったからであろう(使徒行伝 20: 33 を参照)。これが理由でパウロは当時仕えていた諸教会から定期的に金銭を受け取ろうとしなかったのである。後に彼はピリピの教会(2回。ピリピ 4: 16 を参照)とテサロニケの教会から(経済的)援助を受けた。

「神が証してくださいます」パウロは神に証人となっていただいて宣誓をしていた(2: 10、ローマ 1: 9、I コリント 1: 23、11: 31、ガラテヤ 1: 19、ピリピ 2: 25 を参照)。

2: 6「キリストの使徒として... しましたが」これにはシラスとテモテが含まれる。これはその用語のより広い用法を説明している。I コリント 12: 28 とエペソ 4: 11 では「使徒達」は教会内に存続する霊的賜物として述べられている。ここに数例を挙げる。

1. バルナバ(使徒行伝 14: 4 と 14 節を参照)
2. アンドロニコとユニアス(ローマ 16: 6-7 を参照)
3. アポロ(I コリント 4: 6 を参照)
4. 義人ヤコブ(ガラテヤ 1: 19 を参照)

この存続する霊的賜物が伝道の働きのどの項目、つまり(1)教会の開拓(2)福音伝道(3)地域の指導(4)?、に関連しているかは明らかではない。それはエペソ 4: 11 に挙げられている預言者、福音伝道師、牧師、そして教師に関連しており、彼らが福音において強調している事柄はそれぞれ異なる。

英訳聖書の中にはこの聖句を 6 節に入れているものもあれば 7 節に入れているものもある。

NASB 2: 6「わたしたちは自分たちの権威を主張しました」

NKJV 2: 6「わたしたちは要求しました」

NRSV 2: 7「わたしたちは要求しました」

TEV 2: 7「わたしたちは要求しました」

JB 2: 7「わたしたちはあなたがたに過度の重荷を負わせました」

文字通りこれは「重荷を」と訳される。その主張する意味は(1)使徒の権威(2)使徒の名誉(3)経済的補填(9 節、I テサロニケ 3: 8、I コリント 9: 3-14、II コリント 11: 7-11 を参照)であったようだ。

2: 7「わたしたちはあなたがたの間では従順になりました」ギリシャ語原典群の中では用語(1)「幼児」(*nepios*、MSS の P⁶⁵、⁸、B、C、D、F、G を参照)と(2)「従順」(*epios*、MSS の ⁸、C²、D² を参照)の用法の間に多様性が見られる。それらの頭文字だけが異なっている。純粹に原典のみに基づいて考えると(1)が最も適しており、文脈に基づいて考えると(2)が最も適している(書記

が意図的に変えたことを反映しているかもしれない)。UBS⁴は「幼児」を階級 B(ほぼ確定)としている。

Origen とアウグスティヌスはパウロが幼児語でテサロニケの信徒達に話しかけたと信じ、またそのように理解していたようだ。7、8、11 節でパウロは親の使う言葉を用いている。彼は自身を彼らの霊的な親と見ていたのだ。

「ちょうど母親が自分の子供を大切に育てるように」 これは第三種条件文である。この動詞は文字通り「警告する」を意味し、一般に母鳥がひな鳥に警告を与えることについて用いられた(エペソ 5: 29 を参照)。それは母鳥がひな鳥をかいがいしく世話することの比喩であった。パウロ(ガラテヤ 4: 19 を参照)はイエスのように(マタイ 23: 37 を参照)[YHWH のように、出エジプト 19: 4、イザヤ 66: 13、ホセア 11: 4 を参照; 聖霊のように、創世記 1: 2 を参照]彼ら(テサロニケの信徒達)への愛を女性語で表現した。

NASB 「あなたがたに対する愛情の深さのゆえに」

NKJV 「愛情を込めてあなたがたを懐かしんできたので」

NRSV 「あなたがたに対する愛情の深さのゆえに」

TEV 「あなたがたに対する愛情のゆえに」

NJB 「あなたがたに尽くしあなたがたを守ってきたので」

この語 (*homeiromai*) は新約聖書全体を見ても他にどこにも見当たらない。この語はセプトウアギンタのヨブ 3: 21 で用いられている。ギリシャ語の原典ではこの語は死んだ自分の子供を懐かしむ親の愛情を表す強意の語である。

「わたしたちは神の福音だけでなく自分達自身の命さえ喜んであなたがたに差し上げたいと思ったほどです。なぜならあなたがたはわたしたちにとって愛する者となったからです」 これは伝道の働きの価値の高さと使徒の愛とを示している。伝道の働きとは私達が何をしたかということではない—それは私達の人格なのだ。

2: 9「わたしたちの労苦」 これらは強意の同意語である(I テサロニケ 3: 8、II コリント 11: 27 を参照)。ギリシャの社会では労苦といえば奴隷の労働のみを指していた。ユダヤ人であるパウロは肉体労働を尊重していた。彼はしばしば、特にこのテサロニケの信徒への書簡において、それを奨励した。というのは彼と交わったテサロニケの信徒の中に仕事をやめて主の再来を待とうとする者が現れたからである(II テサロニケ 3: 6-15 を参照)。

「夜も昼もどれほど懸命に働き」 ラビ(教師)達は皆職業を持ち生計を立てなければならなかった(使徒行伝 18: 3、I コリント 4: 12 を参照)。パウロは貪欲さを非難されたので自分の伝道の働きに

対する対価としての金銭を受け取ろうとしなかった(2: 5を参照)。

「夜も昼も」は昼が夕暮れから始まるというユダヤ人の時間の考え方を反映している(創世記1章5節、8節、13節、19節、21節、23節を参照)。パウロは昼間は幕屋の設置や皮革工芸の仕事をし、夜は福音を宣べ伝えた。伝道は重労働を必要とするのだ。

2: 10「あなたがたが証ししてくれまし、神も証ししてください」これもパウロが自らの言動の(神への)忠実さを主張する宣誓のような表現である。5節の宣誓が主張しているように神は証人でいらっしゃるが、それはテサロニケの信徒も同じである。

「あなたがた信徒に対してわたしたちがどれほど敬虔に、正しく、そして非難されることのないようにふるまったか」テサロニケの教会員、共同体の構成員、あるいは部外者の中には自らの動機に疑問を持つ者がいたに違いない。パウロは常に自らの動機に対して弁解しなければならなかったようだ。

特別なトピック: 非難されない、無罪の、罪のない、叱責されない

A. 緒言

1. この概念は神学的に人類の本来の姿(つまり創世記1章のエデンの園)を表現している。
2. 罪と反逆はこの(神と人類との)完全な交わりの状態を損ねてきた(つまり創世記3章)。
3. 人類(男性と女性)は神との交わりの回復を待ち望んでいる。なぜなら彼らは神の姿に似せて造られたからだ(つまり創世記1: 26-27)。
4. 神は様々な方法で罪深い人類を取り扱ってこられた。
 - a. 神に忠実な指導者達(つまりアブラハム、モーセ、イザヤ)
 - b. 生贖の儀式(つまりレビ1~7章)
 - c. 神に忠実な模範的人物(つまりノア、ヨブ)
5. 究極的に神はメシア(救世主)をお与えになった。
 - a. 御自身の完全な啓示として
 - b. 罪の完璧な生贖として
6. クリスマンは非難されない者とされた。
 - a. キリストに帰属する義を通して合法的に
 - b. 聖霊の御業を通して継続的に
 - c. キリスト教の目標はキリストらしくなることであり(ローマ8: 28-29、エペソ1: 4を参照)、事実それはアダムとエバの堕落によって失われた神のお姿の回復である。
7. 天国はエデンの園での神との完全な交わりの回復である。天国は神が御自分のおら

れるところ(黙示録 21: 2 を参照)から聖化された地上(Ⅱペテロ 3: 10 を参照)に臨在されることによって誕生する新しいエルサレムである。聖書はこれと同じ主題に終始している。

- a. 神との親密で個人的な交わり
- b. 園という環境の中で(創世記 1～2 章と黙示録 21～22 章)
- c. 預言および動物が存在して人間と一緒にいることによる(イザヤ 11: 6-9 を参照)

B. 旧約聖書

1. 複雑な関係の全てを表し示すことが難しいであろう、完璧さと非難されることのないことと無罪の概念を表すヘブル語の用語は種類がとても多い。
2. 完璧さと非難されることのないことと無罪の概念を表す用語群のうちで主なものを以下に示す(Robert B. Girdlestone 著 *Synonyms of the Old Testament* の 94～99 ページによる)。
 - a. *shalom* (BDB1022)
 - b. *thamam* (BDB1070)
 - c. *calah* (BDB478)
3. セプトウアギンタ(つまり初期教会で用いられていた聖書)ではこれらの概念の多くが新約聖書で用いられるコイネギリシャ語の用語に訳されている。
4. この重要な概念は生贄の儀式と関係がある。
 - a. *amomos* (出エジプト 29: 1、レビ 1: 3 と 10 節、3: 1 と 6 節、民数記 6: 14 を参照)
 - b. *amiantos* と *aspilus* も新興宗教的な意味を持つ。

C. 新約聖書

1. その法的概念
 - a. そのヘブル語の法的かつ新興宗教的な意味は *amomos* (エペソ 5: 27、ピリピ 2: 15、Ⅰペテロ 1: 19 を参照)
 - b. ギリシャ語の法的意味(Ⅰコリント 1: 8、コロサイ 1: 22 を参照)
2. キリストは罪を犯さない、非難されることのない、罪のないお方である(*amomos*、ヘブル 9 章 14 節、Ⅰペテロ 1: 19 を参照)。
3. キリストに従う者はキリストを見習わなければならない(*amomos*、エペソ 1: 4、5: 27、ピリピ 2 章 15 節、コロサイ 1: 22、Ⅱペテロ 3: 14、ユダ 24 節、黙示録 14: 5 を参照)。
4. この概念は教会の指導者についても用いられる。
 - a. *anegkletos*、「非難されることのない」(Ⅰテモテ 3: 10、テトス 1: 6-7 を参照)
 - b. *anepileptos*、「批判されない」つまり「叱責されることのない」(Ⅰテモテ 3: 2、5: 7、6: 14、テトス 2: 8 を参照)
5. 「冒瀆されない」(*amiantos*) の概念は以下に示す事柄についても用いられる。
 - a. キリスト御自身(ヘブル 7: 26 を参照)

- b. 信徒の相続(I ペテロ 1: 4 を参照)
6. 「完全さ」つまり「健全さ」(*holokleria*) の概念(使徒行伝 3: 16、I テサロニケ 5: 23、ヤコブ 1: 4 を参照)
 7. 「誤ちのない」、「罪のない」、「無罪」の概念は *amemptos* で表わされる(ルカ 1: 6、ピリピ 2: 15、3: 6、I テサロニケ 2: 10、3: 13、5: 23 を参照)。
 8. 「非難されることのない」の概念は *amometos* で表わされる(I ペテロ 3: 14 を参照)
 9. 「欠点のない」、「汚点のない」の概念はしばしば上記の用語のうちの一つと一緒に文中で用いられる(I テモテ 6: 14、ヤコブ 1: 27、I ペテロ 1: 19、II ペテロ 3: 14 を参照)。

D. この概念を表すヘブル語とギリシャ語の用語の数は重要である。神はキリストを通して訴えられた私達の必要に備えられ、御自分になるようにと今も私達を召しておられるのだ。

信徒は自分の立場上、また弁論上(自身を)「正しい」、「義なる」、「非難されることのない」とキリストの御業によって宣言された。だから信徒は自分の立場を保持すべきである。「神が光の中におられるように光の中を歩みなさい」(I ヨハネ 1: 7 を参照)。「その召しにふさわしく歩みなさい」(エペソ 4: 1 と 17 節、5: 2 と 15 節を参照)。イエスは神のお姿を回復されている。今や(神との)親密な交わりは可能となったが、神は(御自分の)民に、御子がそうされているように御自身の御性質を反映する者となることを望んでおられる。私達はまさに聖い者となるように召されているのだ(マタイ 5: 20 と 48 節、エペソ 1: 4、I ペテロ 1: 13-16 を参照)。神は法的にだけでなく実在的にも聖い方でいらっしゃるのだ。

2: 11「勤めました」 3 節の解説を見よ。3つの分詞(綴りが全て *para* で始まる)はパウロの宣教活動について述べている:(1)勤めました[現在形能動態](2)励ましました[現在形中間態(異態)](3)懇願しました[現在形中間態(異態)]。

2: 12「恵みにふさわしく歩む」これは現在形不定詞である。この比喻は私達の継続的な生活様式を言い表しており、そしてそれは私達の主の御生活の有様を反映するものでなければならぬ(コロサイ 1: 10、2: 6、エペソ 2: 10、4: 1 と 17 節、5: 2 と 15 節を参照)。信徒は神の栄光を(他者と)分かち合い反映するように召されていると 12 節の末尾で述べられていることに注意せよ。

「あなたがたを招いておられる」ギリシャ語原典群の中ではこの聖句の時制に多様性が見られる:(1)原典[※]と A ではガラテヤ 1: 6 と同様にアオリストである。これは神の恵みによる召しを強調しているようだ(ガラテヤ 1: 6、I ペテロ 1: 15 を参照)。(2)原典 B、D、F、G、H、K、L、P では現在形であり、聖さへの神の継続的な召しを強調しているようだ(ローマ 8: 28-29、ガラテヤ 4: 19、エペソ 1: 4 を参照)。UBS⁴は(2)を階級 B(ほぼ確定)としている。

召される神と恵みにふさわしく歩む信徒との間の神学的バランスに注意せよ(ピリピ 2: 12-13 を参照)。教派によって見解は様々である(予め定められた運命か人類の自由意志か)。神は私達

と契約を通して関係を持たれる。神の召しと私達の義務的な応答(初めに行なわれるものとその後継続するもの)とはどちらも必要である。

特別なトピック: 選びおよび予め定められた運命と神学的バランスの必要

選びは素晴らしい教義である。しかしそれは情実(えこひいき)への召しではなく、他者の救いのための道であり道具であり手段なのだ。旧約聖書ではこの用語は主に奉仕について用いられたが、新約聖書ではそれは主に奉仕によってもたらされる救いについて用いられている。聖書は神の主権と人類の自由意志の間の明らかな矛盾に決して妥協せず、両者についてはっきり述べているのだ。この聖書的な緊張の良い例はローマ9章の神の主権による選びとローマ10章の人類の応答の必要(10: 11 と 13 節を参照)であろう。

この神学的な緊張の本質はエペソ 1: 4 に見られる。イエスは神に選ばれたお方であり、全ての人が彼によって選ばれたのは確かなことである(Karl Barth)。墮落した人類の必要に対する神の「はい(了解しました)」はイエスである(Karl Barth)。エペソ 1: 4 はまた、予め定められた運命の最終が天国ではなく聖さ(キリストらしさ)であることを主張することによってこの問題を明らかにすることを助けている。私たちはしばしば福音の恩恵に魅了されて責任を忘れることがあるのだ。神の召し(選び)は時間と永遠のためにあるのだ。

教義は他の真理とも関連をもつようになるが、それは単なる無関係の真理との関連のようにではない。それは星座と一つの星との関係によく似ている。神の真理は西洋の文献にではなく東洋の文献に現れている。対極的な(逆説的な)2つの教義上の真理(超自然的な神対宇宙遍在的な神。例:安全対忍耐、父なる神と対等のイエス対父なる神の従者のイエス、クリスチャンの自由対契約の相手に対するクリスチャンの責任、等)の間の緊張を私達は取り除いてはいけない。

「契約」の神学的概念は(常に主導権を取られ綱領をつくれる)神の主権と人類からの義務的に始められ継続する悔い改めと信仰の応答(マルコ 1: 15、使徒行伝 3: 16 と 19 節、20: 21 を参照)とを結び付ける。逆説の一方だけを信じて他方を軽視して御言葉を解釈しないように注意しなさい。あなたの好きな教義や神学体系だけを主張することのないようにしなさい。

「神の御自分の王国」パウロはこの用語をそれほど頻繁には用いていない。これは、今は信徒の心の中で行なわれているがいつの日か全地で完成されるであろう神の統治(マタイ 6: 10 を参照)について述べている。これはイエスの教えと説教の要点であった。それは「すでに」だがしかし「まだ」というイエスの受肉と再来の間の時間的緊張を反映している(Fee と Stuart 共著 *How to Read The Bible For All Its Worth* の 131~134 ページを参照)。

特別なトピック: 神の王国

旧約聖書では YHWH はイスラエルの王(I サムエル 8: 7、詩篇 10: 16、24: 7-9、29: 10、44: 4、89: 18、95: 3、イザヤ 43: 15、44: 4 と 6 節を参照)および理想の王としてのメシア[救世主](詩篇

2: 6、イザヤ 9: 6-7、11: 1-5 を参照)と考えられている。イエスがベツレヘムにお生れになった(紀元前6~4世紀)ことで神の御国は新しい力と救い(新しい契約、エレミヤ 31: 31-34、エゼキエル 36: 27-36 を参照)とともに人類の歴史の中に登場した。洗礼者ヨハネは御国が近づいていることを宣言した(マタイ 3: 2、マルコ 1: 15 を参照)。イエスは御国が御自身と御自分のお教えの中にあることをはっきりと教えられた(マタイ 4: 17 と 23 節、9: 35、10: 7、11: 11-12、12: 28、16: 19、マルコ 12: 34、ルカ 10: 9 と 11 節、11: 20、12: 31-32、16: 16、17: 21 を参照)。しかし御国は未来でもある(マタイ 16: 28、24: 14、26: 29、マルコ 9: 1、ルカ 21: 31、22: 16 と 18 節を参照)。

マルコの福音書とルカの福音書の中の共観福音書的な同一箇所の記事の中には聖句「神の御国」が見られる。イエスのお教えのこの共通のトピックは人の心の中の神の御臨在であり、それはいつの日か全地で完成されることになっている。これはマタイ 6: 10 のイエスの祈りに反映されている。マタイはユダヤ人への手紙の中で神の御名を用いない聖句(天の御国)を好んで用いたが、マルコとルカは異邦人への手紙の中で一般的に神の御名を用いた。

これは共観福音書群の中でとても重要な聖句である。イエスの最初と最後の説教と語られた寓話(たとえ話)の大半ではこのトピックが取り扱われている。ここではそれは人の心の中の神の御臨在のことである。驚くべきことにヨハネはこの聖句をたった2回しか(自著中のイエスの寓話の中では全く)用いていない。ヨハネの福音書の中では「永遠の命」が重要な比喻である。

この聖句に関連する緊張はキリストがこの世に2回来られることによって起こっている。旧約聖書は主に神のメシア(救世主)の来られること—天の軍勢を伴われ、裁きのために、栄光に満ちて来られること—を記しているが、新約聖書はイエスが最初(1度目)に、イザヤ 53 章に記されているような苦しみのしもべとして、またゼカリヤ 9: 9 に記されているような謙遜な王として来られたことを示している。ユダヤの2つの世、つまり悪の世と新しい義の世とは重複している。イエスは今は信徒の心の中に臨在されているが、いつの日かその御臨在は全ての被造物に及ぶことになっている。イエスは旧約聖書の預言通りに来られることになっている。信徒は神の御国の「すでに」対「まだ」の中に生きている(Gordon D. Fee と Douglas Stuart 共著 *How to Read The Bible For All Its Worth* の 131~134 ページを参照)。

「と栄光に」ガラテヤ 1: 5 の完全な解説を見よ。

NASB(改訂版)原典: 2: 13-16

¹³このようなわけで、わたしたちから聞いた神の言葉を人の言葉ではなく神の言葉としてあなたがたが受け入れたことを、わたしたちも絶えず神に感謝しています。というのは、事実それは神の言葉であり、また信じているあなたがたのうちにも働いているものです。¹⁴兄弟たち、あなたがたは、ユデアにある、キリスト・イエスにある神の諸教会に倣う者となりました。というのは、彼らがユダヤ人から受けたのと同じような苦しみを、あなたがたも自分と同郷の人々から受けてそれに耐えたからです。¹⁵ユダヤ人は主イエスと預言者たちを殺し、わたしたちを追い出しました。彼らは

神に喜ばれることをせず、全ての人に敵対し、¹⁶わたしたちが異邦人の救いのために語るのを妨げています。その結果として彼らはずっと自らの罪をあふれるほどに増やしているのです。しかし神の怒りは余すところなく彼らの上に臨みます。

2: 13「わたしたちも絶えず神に感謝しています」これは現在形能動態直説法動詞であり、1: 2-10のことを述べているようだ。これはパウロの継続的な祈りの生活と著述の様式を反映している(1章 2節、5: 17-18を参照)。I テサロニケ 1: 2の特別なトピック「感謝」を見よ。

「受け入れた」これはアオリスト能動態分詞である。これは私達の個人的応答の必要を示している。ここではそれはメッセージのことを言っている。ヨハネ 1: 12ではそれはイエスの御人格のことを言っている。I テサロニケ 4: 1ではそれは生活様式のことを言っている。福音は3つの事柄を強調している:(1)個人的関係(コロサイ 2: 6を参照)(2)教義的真理(II テサロニケ 3: 6、I コリント 15章 1-4節を参照)(3)キリストのような生活様式(ピリピ 4: 9を参照)。信徒は(霊的な)成熟のためにこれら3つの事柄全てに応答しなければならない。

聖句「神の言葉を受け入れた」は「福音を受け入れる」という意味の熟語となった(「わたしの言葉を聞いてわたしをお遣わしになった方を信じる者」、ヨハネ 5: 24)。

1. *dechomai* —ルカ 8: 13、使徒行伝 8: 14、11: 1、17: 11、I テサロニケ 1: 16
2. *paralambano* —I テサロニケ 2: 13
3. *paradechomai* —マルコ 4: 20
4. *apolambano* —ヤコブ 1: 21

認識的な要素と意志的な要素があることに注意せよ。

新約聖書には「受ける」と訳される動詞に関するいくつかの事柄がある。

A. 負の事柄

1. ローマ 8: 15—奴隷の霊を受け(*lambano*)ない
2. I コリント 2: 4—自然人は神の霊に関するものを受け(*apolambano*)ない
3. I コリント 2: 12—世の霊を受け(*lambano*)ない
4. II コリント 6: 1—神から受けた恵みを無駄にし(*apolambano*)ないこと
5. II テサロニケ 2: 11—救いに至る真実の愛を彼らは受けて(*apolambano*)いなかった

B. 正の事柄

1. 使徒行伝 1: 8—力を受け(*lambano*)る
2. 使徒行伝 2: 33—父なる神の約束を受け(*lambano*)る
3. 使徒行伝 2: 38、8: 15と17節と19節、10: 47、19: 2—聖霊の賜物を受け(*lambano*)る
4. 使徒行伝 10: 49、26: 18—赦しを受け(*lambano*)る
5. ローマ 5: 11—和解を受け(*lambano*)る
6. ローマ 5: 17—あふれんばかりの恵みと義の賜物を受け(*lambano*)る

7. ローマ 8: 15—神の子とする霊を受け(*lambano*)る
8. ガラテヤ 3: 4—信仰を通して霊の約束を受け(*lambano*)る
9. コロサイ 2: 6—イエス・キリストを受け(*paralambano*)る
10. ヘブル 10: 36—約束されたものを受け(*komizo*)る
11. ヘブル 11: 17—約束を受け(*anadechomai*)る
12. ヘブル 12: 28—ゆるがない王国を受け(*paralambano*)る
13. ヤコブ 1: 21—魂を救うことのできる、心に植えられた御言葉を受け(*apolambano*)る
14. I ペテロ 5: 4—色あせることのない栄光の冠を受け(*komizo*)る
15. I ヨハネ 2: 27—油注ぎを受け(*lambano*)る

ああ、福音とともにもたらされる素晴らしいものの種類は何と多いことか。

「受けました．．．受け入れました」互いに同意語であるこれらの用語は、神が与えてくださった福音に対する人類の応答の必要を言い表している。墮落した人類は悔い改めて福音を信じ(マルコ 1: 15、使徒行伝 3: 16 と 19 節、20: 21 を参照)、そしてそのようにし続け、また福音に生き続けなければならない。

前者の用語はヨハネ 1: 12 に見られる複合語である。後者の用語は誰かを客として歓迎することを意味する。この文脈では、人は福音を歓迎しなければならない。新約聖書は福音を人とメッセージの両方として言い表している。

「神の言葉」パウロの説教(福音のメッセージ)は神の靈感を受けて語られた啓示であった(II テモテ 3: 15-17、I ペテロ 1: 23-25、II ペテロ 1: 20-21、3: 15-16 を参照)。ここではこの聖句は聖書ではなく使徒の宣誓と教えについて述べている。新約聖書だけにイエスのお言葉と御業および使徒のメッセージのうちの選ばれたものが記してある。

- NASB 「神の言葉であり、また信じているあなたがたのうちにも働いているものです」
 NKJV 「神の言葉であり、また信じているあなたがたのうちにも十分に働いているものです」
 NRSV 「神の言葉であり、あなたがた信徒のうちにも働いているものです」
 TEV 「それはまさに神の言葉です。なぜなら信じているあなたがたのうちに神が働いておられるからです」
 NJB 「神の言葉．．．それは信じているあなたがたの間でも生きる力です」

これは現在形中間態直説法動詞である(ピリピ 2: 13 を参照)。「働く」はパウロの好んだ言葉であり、同語源の英単語“energy”と関連がある。パウロは福音を、信徒を力づける者として擬人化したのだ。これは多分、創世記1章とイザヤ 55: 11(およびヨハネ 1: 1)にあるような、語られた言葉の力についての旧約聖書における知見を反映している。

「信じているあなたがたのうちに」これは現在形能動態分詞である。ここでも継続的な信仰が重要なのだ。福音は物(天国への切符や保険証書)ではなく、御子を通した父なる神との個人的で次第に深まってゆく関係である。

2: 14「諸教会」これは文字通り「召し出された人々」と訳される。セプトウアギンタでは同じ概念が「イスラエルの民」と表現されている。初期教会はそれ自体を旧約聖書における神の民の子孫と見ていた。彼らが「神の諸教会」と呼ばれていることに注意しなさい。ガラテヤ 1: 2 の特別なトピックを見よ。

「キリスト・イエスにある」この聖句は球状の容器内にあることを表し、水中の魚と同じように、ある雰囲気「の中に」つまり「に囲まれて」という意味である。パウロがとてもよく用いた表現であるその用語はイエスと私達の結びつきについて述べている。私達はイエスのうちに生き、イエスのうちを動き、そしてイエスのうちに存在する。エペソ 1: 3-14 にはパウロによるこの語形の使用例がある:(1)「キリストにおいて」1: 3、10 節、12 節(2)「御子において」1: 4、7 節、9 節、10 節、13 節[2 回](3)「愛する」1: 6。

「ユデアにある」テサロニケの諸教会はユデアの諸教会とちょうど同じようにユダヤ人からの迫害を経験していた(マタイ 5: 10-12 を参照)。

「あなたがたも同じ苦しみに耐えた」ローマ世界においてはクリスチャンのメッセージへの応答は一般的に迫害であった(I ペテロ 4: 12-16 を参照)が、これはメッセージの排他的性質(ヨハネ 14 章 6 節を参照)によるものであった。

「自分と同郷の人々から」文脈中ではこれはディアスポラにおけるユダヤ人からの迫害について述べている。この書簡が書かれた当時コリントにいたパウロもちょうど同じような反発に遭っていた。

2: 15「主イエスと...を殺しました」ユダヤ人は実際にはイエスを殺していないが、彼らにはイエスの死の責任があった(マタイ 21: 33-46 と使徒行伝 2: 23 を参照)。

「と預言者たちを」神の民は神のメッセージを聞きたくなかったので神のメッセージの語り手達を殺した(マタイ 23: 31 と 37 節および使徒行伝 7: 52 を参照)。

特別なトピック: 旧約聖書の預言

I. 導入

A. 緒言

1. 信徒の共同体は預言の解釈方法については同意していない。何世紀にもわたって他の事実が正当な立場として立てられてきたが、これについてはそのようなことはなされていない。
2. 旧約聖書の預言にはいくつかのはっきりと定義された時期がある。
 - a. 先王時代
 - (1) 預言者と呼ばれた人々
 - (a) アブラハム 創世記 20: 7
 - (b) モーセ 民数記 12: 6-8、申命記 18: 15 と 34: 10
 - (c) アロン 出エジプト 7: 1(モーセの代弁者)
 - (d) ミリアム 出エジプト 15: 20
 - (e) メダドとエルダド 民数記 11: 24-30
 - (f) デボラ 士師記 4: 4
 - (g) 無名の人 士師記 6: 7-10
 - (h) サムエル Iサムエル 3: 20
 - (2) 一団とみなされた預言者達 申命記 13: 1-5、18: 20-22
 - (3) 預言者団体 Iサムエル 10: 5-13、19: 20、I列王記 20: 35 と 41 節、22 章 6 節と 10-13 節、II列王記 2: 3 と 7 節、4: 1 と 38 節、5: 22、6: 1 など
 - (4) 預言者と呼ばれたメシア 申命記 18: 15-18
 - b. 書記のいない時代の王(王についての記述)
 - (1) ガド Iサムエル 22: 5、IIサムエル 24: 11、I歴代誌 29: 29
 - (2) ナタン IIサムエル 7: 2、12: 25、I列王記 1: 22
 - (3) アヒヤ I列王記 11: 29
 - (4) イエフ I列王記 16: 1 と 7 節と 12 節
 - (5) 無名の人 I列王記 18: 4 と 13 節、20: 13 と 22 節
 - (6) エリヤ I列王記 18 章~II列王記 2 章
 - (7) ミカヤ I列王記 22 章
 - (8) エリシャ II列王記 2: 8 と 13 節
 - c. 古代の書記であった預言者達(国と王についての記述) イザヤ書~マラキ書(ダニエル書を除く)

II. 聖書中の用語

1. *Ro'eh* 「預言者」の意味。Iサムエル 9: 9。この用語自体は用語 *nabi* に取って代わられている。*Ro'eh* は一般的な用語「見る」に由来する。この人は神の道と御計画を理解し、ある事柄についての神の御意志を確かめる際の相談役を務めた。
2. *Hozeh* 「預言者」の意味。Iサムエル 24: 11。この用語は元々 *Ro'eh* の同意語である。こ

の用語はより一般的ではない用語「見る」に由来する。この分詞形は預言者(つまり「見る」)を指す用語として最も頻繁に用いられている。

3. *Nabi'* 「預言者」の意味。「呼びかける」の意味のアッカド語の動詞 *Nabu* と「宣言する」の意味のアラビア語の動詞 *Naba'a* と同じ語源を持つ用語である。この用語は旧約聖書の中では預言者を指す最も一般的な用語である。この用語は300回以上用いられている。この用語の正確な語源は明らかではないが、現在は「呼びかける」が最も確からしい候補であるようだ。おそらく最高の知見は、アロンを通じたモーセとファラオの関係について YHWH がなされた表現(出エジプト 4: 10-16, 7: 1, 申命記 5: 5 を参照)に由来するだろう。預言者は神が御自分の民に語られるお言葉を取り次ぐ人である(アモス 3: 8, エレミヤ 1: 7 と 17 節、エゼキエル 3: 4 を参照)。
4. I 歴代誌 29: 29 では(上記の)3つの用語は全て預言者の職名を指して用いられている。つまりサムエルには *Ro'eh*、ナタンには *Nabi'*、ガドには *Hozeh* が用いられている。
5. 聖句 *'ish ha- 'elohim*、つまり「神の人」もより広い意味で神の代弁者を指す用語である。この用語は旧約聖書の中で預言者の意味で何と76回も用いられている。
6. 用語「預言者」はギリシャ語を語源とする。この用語は(1)「~の前に」あるいは「~のために」という意味の *pro* と(2)「語る」という意味の *phemi* に由来する。

II. 預言の定義

- A. 用語「預言者」は英語においてよりもヘブル語においてより広いセム語域に属する。ヨシュア書から列王記まで(ルツ記を除く)をユダヤ人は「前任の預言者達」の書としている。アブラハム(創世記 20: 7, 詩篇 105: 5)とモーセ(申命記 18: 18)は預言者とされている(ミリアムも、出エジプト 15: 20)。だから、英語の推定上の定義には注意が必要なのだ。
- B. 「預言主義は神の関心と目的と関与という意味のみを受け入れた歴史理解として正当に定義されうる」*Interpreter's Dictionary of the Bible* 第3巻 896 ページ
- C. 「預言者は思想家(哲学者)でも組織神学者でもなく、神の御言葉を神の民に伝えて現在を再構築することにより未来を形造る、神の契約の仲介者である」*Encyclopedia Judaica* 第13巻 1152 ページ

III. 預言の目的

- A. 預言は神が御自分の民に呼び掛けられる手段であり、民の置かれている現在の状況における導きと神が民の生活と世の出来事を神が支配されているという希望を与える。民へのメッセージは根本的に団体単位でなされる。それは神が御自分の民を叱責され、励まされ、信仰と悔い改めを生みだされ、御自分の民に御自身と御自分の計画について告知されることを意味する。それらによって神の民は神の契約に忠実であり続ける。しばしばそれが神に選ばれた代弁者を明らかにするということにこのことは付け加えられなければならない(申命記 13: 1-3, 18: 20-22)。これは究極的に解釈すればメシアについて述べているようだ。

- B. しばしば預言者は自分の生きた時代の歴史的つまり神学的危機を取り上げてこれを終末論的な記述に投射した。この終末論的な世界観と、神の選びと契約上の約束はイスラエルに特有のものである。
- C. 預言者の職権は神の御意志を知る方法としての高位聖職者の職権と調和し(エレミヤ 18: 18)、またそれを侵害することもあった。ウリムとチュミムは神の代弁者からの口述のメッセージを超越する。また、預言者の職権はマラキの死後にイスラエルで絶えていたようだ。それは(マラキの死後)400年後の洗礼者ヨハネの登場により復活する。新約聖書でいう「預言」の賜物がどのように旧約聖書でいう「預言」の賜物と関連しているかは明らかではない。新約聖書の預言者達(使徒行伝 11: 27-28、13: 1、14: 29 と 32 節と 37 節、15: 32、I コリント 12: 10 と 28-29 節、エペソ 4: 11)は新しい契約つまり御言葉を公開するのではなく、契約における神の御意志を予言する。
- D. 預言は本質的に排他的つまり主要な予言ではない。予言は預言者が自らの職権とメッセージを確かなものにするひとつの方法ではあるが、次に述べることは覚えておかなければならない「旧約聖書の預言の少なくとも2%はメシアに関することである。その少なくとも5%は新しい契約の時代について特記している。その少なくとも1%はこれから起こることになっている出来事に関することである。」(Fee と Stuart 共著 *How to Read The Bible For All Its Worth* の 166 ページを参照)。
- E. 預言者は民に対する神の代表者であるが、司祭は神に対する民の代表者である。これは一般的に言われていることである。神に質問をしたハバククのような例外がある。
- F. 預言者達を理解することが難しい理由の一つは私達が彼らの書の構成について知らないからである。彼らの書の内容は時系列順に構成されていない。また、主題に沿って順に並んでいるように見えるが、必ずしも予想通りではない。歴史的背景や時系列あるいは神命の間の区別はしばしばはっきりとは明記されていないことがある。これらの預言書は(1)一通りの見解をもって読み通すこと(2)トピック毎の要約(3)各神命の中心的真理つまり著者の意図を明らかにすること、が難しい。

IV. 預言の特徴

- A. 旧約聖書には「預言」と「預言者」の概念に発展が見られるようだ。初期のイスラエルにおいては預言者の交流が盛んであり、それはエリヤつまりエリシャのような指導力のあるカリスマ的指導者によって導かれていた。聖句「預言者の子ら」はこの集団を指して用いられた(II 列王記2章)。それらの預言者達は恍惚の一団と呼ばれた(I サムエル 10: 10-13、19: 18-24)。
- B. しかし、このような時代は早くも過ぎ去り、預言者達が個人で活動する時代となった。(真偽含めて)預言者達の中には王とみなされて宮殿に住む者もあった(ガドとナタン)。また、独立して、イスラエルの社会内のいずれの地位にもあてはまらない立場で活動する者もあった(アモス)。彼らの中には男性も女性もいた(II 列王記 22: 14)。
- C. その当時の預言者はしばしば、人類の即座の応答を条件として未来についての明言を行っ

た。その当時の預言者の仕事はしばしば、神が御自分の造られたものについて立てておられる、人類の応答に影響されない普遍的な計画を明らかにすることであった。この普遍的な終末論的計画は古代近東の預言者達の中に特有のものである。預言と契約への忠実さは預言者のメッセージの2つの論点である(FeeとStuartの著書の150ページを参照)。このことは預言者達が主に論点をもとに結びつけていることを意味している。彼らは通常、排他的にではなく国民に呼びかけていた。

- D. 預言の大半は口頭でなされた。それらは後に、未発見の近東の文献の主題と時系列あるいはその他の文章様式によって結び合わされた。口述であるので記されたものほどには構成されていない。このため預言者達の書はそのまま読みこなすことも、特別な歴史的背景なしに理解することも困難である。
- E. 預言者達は自分のメッセージを伝えるためにいくつかの機会を利用する。
 - 1. 法廷—神は御自分の民を法廷に導かれるが、しばしばそれはYHWHが不忠実さを理由に御自分の妻(イスラエル)を拒絶される離婚訴訟の場である(ホセア4章、ミカ6章)。
 - 2. 葬儀—この種のメッセージの特別な韻律とそれに特徴的な「悲痛」はメッセージの形式を特別なものにしている。
 - 3. 契約上の祝福の公言—契約の条件的本質が強調され、未来の出来事が良いことも悪いこともどちらも述べられる。

V. 預言の解釈に有用な指針

- A. 各神命の歴史的背景と文脈を考慮することによって、原著者(編集者)である預言者の意図を見出さなさい。通常それには、神がモーセに与えられた契約をある意味で破るイスラエルが関係している。
- B. 神命のごく一部ではなく全体を読んで解釈し、内容に沿って要約しなさい。その神命が周囲の神命とどのように関係しているかを見なさい。預言の書全体の要約を試みなさい。
- C. 原典自体の中の何かが比喩的な用法を示すまでは原文の文字通りの解釈を確信しなさい。それから比喩的な表現を文章化しなさい。
- D. 歴史的背景と同じ内容を言い換えた文をもとにして象徴的な行為を分析しなさい。この古代近東の文献が西洋あるいは現代の文献とは異なることを覚えておきなさい。
- E. 預言を注意深く取り扱いなさい。
 - 1. それらの預言は原著者の生きた時代には受け入れられなかったのか。
 - 2. それらの預言はイスラエルの歴史の中で結局成就したのか。
 - 3. それらの預言は未来の出来事でもあるのか。
 - 4. それらの預言は現在成就しているのか、そして未来に成就することになっているのか。
 - 5. 上記の疑問の答えを現代の文献の著者達ではなく聖書の著者達に求めなさい。
- F. 特別な関連事項
 - 1. 預言は条件付きの応答によって意味を持つのか。

2. 預言が語られる対象ははっきりしているのか(それはなぜか)。
3. 預言が全ての人に成就する聖書的あるいは歴史的可能性はあるか。
4. 靈感によって新約聖書を記した人々は、旧約聖書の中にある、私達にとって未知の多くの箇所に見出すことができた。彼らは予型論つまり言葉遊びを用いたようだ。私達は靈感を受けていないのでこのような方法は避けた方がよい。

VI. 有用な書籍

- A. Carl E. Amending と W. Ward Basque 共著 *A Guide to Biblical Prophecy*
- B. Gordon D. Fee と Douglas Stuart 共著 *How to Read The Bible For All Its Worth*
- C. Edward J. Young 著 *My Servants and Prophets*
- D. D. Brent Sandy 著 *Plowshares and Pruning Hooks : Rethinking the Language of Biblical Prophecy and Apocalyptic*
- E. *New International Dictionary of Old Testament Theology and Exegesis* 第4巻 1067～1078 ページ

特別なトピック: 新約聖書の預言

- I. 新約聖書の預言は旧約聖書の預言(BDB611)とは異なり、ラビによれば YHWH からの靈感による啓示の意味を持つ(使徒行伝 3: 18 と 21 節、ローマ 16: 26 を参照)。預言者だけが御言葉を書くことができた。
 - A. モーセは預言者と呼ばれた(申命記 18: 15-21 を参照)。
 - B. 歴史書群(ヨシヤ記～列王記[ルツ記を除く])は「前期預言書」と呼ばれた(使徒行伝 3 章 24 節を参照)。
 - C. 預言者達は神からの情報源としての高位聖職者の地位を侵害した(イザヤ書～マラキ書)。
 - D. ヘブル語の正典の第2章は「預言者」である(マタイ 5: 17、22: 40、ルカ 16: 16、24: 25 と 27 節、ローマ 3: 21 を参照)。
- II. 新約聖書ではこの概念はいくつかの異なる用途に用いられる。
 - A. 旧約聖書の預言者達と、神の靈感を受けて彼らが語るメッセージについて述べるため(マタイ 2: 23、5: 12、11: 13、13: 14、ローマ 1: 2 を参照)
 - B. 団体にというよりは個人に対して語られるメッセージについて述べるため(旧約聖書の預言者達は主にイスラエルに語りかけた)
 - C. 神の王国を宣べ伝える人(マタイ 13: 57、21: 11 と 46 節、ルカ 4: 24、7: 16、13: 33、24: 19 を参照)としての洗礼者ヨハネ(マタイ 11: 9、14: 5、21: 26、ルカ 1: 76 を参照)とイエスについて述べるため。また、イエスは預言者達より偉大な方であるといわれた(マタイ 11: 9、12: 41、ルカ 7: 26 を参照)
 - D. 新約聖書のその他の預言者達
 1. ルカの福音書に記されたイエスの幼少期(マリアの回想)

- a. エリサベツ(ルカ 1: 41-42 を参照)
 - b. ザカリア(ルカ 1: 67-79 を参照)
 - c. シメオン(ルカ 2: 25-35 を参照)
 - d. アンナ(ルカ 2: 36 を参照)
2. 皮肉な預言(カヤパ、ヨハネ 11: 51 を参照)
- E. 福音を宣べ伝える人について述べるため(I コリント 12: 28-29 とエペソ 4: 11 の宣教の賜物のリスト)
- F. 教会の中で用いられ続けている賜物について述べるため(マタイ 23: 34、使徒行伝 13 章 1 節と 15: 32、ローマ 12: 6、I コリント 12: 10 と 28-29 節、13: 2、エペソ 4: 11 を参照)。時々この概念は女性を指すことがある(ルカ 2: 36、使徒行伝 2: 17、21: 9、I コリント 11: 4-5 を参照)。
- G. ヨハネの黙示録について述べるため(黙示録 1: 3、22: 7 と 10 節と 18 節と 19 節を参照)

III. 新約聖書の預言者達

- A. 彼らは旧約聖書の預言者達が受けたような神の靈感による啓示(つまり御言葉)を受けていない。聖句「信仰」が使徒行伝 6: 7、13: 8、14: 22、ガラテヤ 1: 23、3: 23、6: 10、ピリピ 1 章 27 節、ユダ 3 節と 20 節に用いられているのでこのように言うことができる。

この概念はユダ 3 節の聖句「聖なる者たちに一度与えられた信仰」から明らかである。この「一度(与えられた)」信仰とはキリスト教の真理、教義、概念、そして世界観に基づく教えである。この一度与えられたという強調は新約聖書の執筆について神学的に限定された靈感の聖書的基礎であり、後の時代に書かれた、啓示書とみなされている書についてはなされていない。新約聖書には不明瞭で不明確な灰色領域が多いが、信徒は信仰と実践に必要とされる全てのことが十分にはっきりと新約聖書に載っていることを信仰によって確信する。この概念はいわゆる「啓示の三角形」の中に表現されている。

1. 神は時間—空間の歴史の中に御自身を現わされている(啓示)
 2. 神は御自分の御業の記録と説明のために特定の人物を書記として選ばれている(靈感)
 3. 人類の心を開き、これらの書を厳密にではなく救いと有意義なクリスチャン生活を送るのに十分な程度に理解させるために神は御自身の霊を下さっている(啓蒙)。この概念の要点は靈感が御言葉の書き手に限られるということである。御言葉以上に権威ある書やビジョンや啓示はない。聖書正典は閉じられたまま開かれ(て読まれ)ることはない。御言葉には私達が神に適切に応答するのに必要な全ての真理がある。この真理は聖書の著者が認めることと敬虔で神の御心にかなう生き方をしている信徒の認めていないことの対立に最もよく見られる。現代の書き手や語り手における神のお導きのレベルは御言葉の書き手におけるそれと同程度ではない。
- B. ある意味で新約聖書の預言者は旧約聖書の預言者に似ている。

1. 未来の出来事の預言(パウロ、使徒行伝 27: 22: アガバス、使徒行伝 11: 27-28、21: 10-11: その他の無名の預言者達、使徒行伝 20: 23 を参照)
 2. 裁きを下す(パウロ、使徒行伝 13: 11、28: 25-28 を参照)
 3. 出来事を生き生きと描写する象徴的行為(アガバス、21: 10-11 を参照)
- C. 彼らは時々預言的に福音の真理を語る(使徒行伝 11: 27-28、20: 23、21: 10-11 を参照)が、これは主要な論点ではない。コリント人への第一の手紙における預言は根本的には福音を言い広めることである(14: 24 と 39 節を参照)。
- D. 彼らは各々の新しい環境や文化や時代への神の真理の実際の適用の仕方を示すことを霊に代わって行う人々である(I コリント 14: 3 を参照)。
- E. 彼らはパウロの開拓した初期教会において活動し(I コリント 11: 4-5、12: 28 と 29 節、13: 29、14: 1 と 3 節と 4 節と 5 節と 6 節と 22 節と 24 節と 29 節と 31 節と 32 節と 37 節と 39 節、エペソ 2: 20、3: 5、4: 11、I テサロニケ 5: 20 を参照)、*Didache* (紀元1世紀末あるいは2世紀に書かれた。日付[月日]不詳)と北アフリカで2・3世紀に書かれた Montanism の中に登場する。

IV. 新しい契約の賜物はもう与えられないのか

- A. この疑問に答えることは難しい。この問題は賜物の(与えられた)目的をはっきりさせることによって明らかにすることができる。その賜物は初めての福音宣教の成果を確かなものとするためのものなのか、それとも教会がそれ自体と失なわれた世のために働くために用い続けている方法なのか。
- B. この疑問の答えは教会の歴史の中に見出せるのか、それとも新約聖書自体の中に見出せるのか。霊的な賜物が一時的なものであることは新約聖書には示されていない。I コリント 13: 8-13 を用いてこの問題を解明しようとするれば御言葉を書いた著者の意図を侵害することになり、そのことは愛以外の全てが失なわれるであろうことを明言している。
- C. 教会の歴史ではなく新約聖書に権威があるので信徒は賜物が与えられ続けていると確信しなければならないと私は言いたい。しかし、文化が解釈に影響を与えていると私は信じている。とてもよく知られている文化的事柄はもはや役に立たない(聖なる接吻、女性用の頭の覆い、家庭礼拝など)。文化が聖句に影響を与えるなら、教会の歴史も同じではないのか。
- D. これはまさしく厳密な答えを出せない疑問である。信徒の中には「(神の賜物の授与は)終わった」と主張する者もいれば「終わっていない」と主張する者もいる。この問題では、多くの解釈上の問題と同様に、信徒の心が重要である。新約聖書は不明瞭で文化的である。その困難さによって、どの聖句が文化あるいは歴史に影響を受けているか、そしてどの聖句が時代や文化によらず普遍的であるか(Fee と Stuart 共著の *How to Read the Bible For All Its Worth* の 14~19 ページと 69~77 ページを参照)をはっきりさせることができる。ここではローマ 14: 1~15: 13 と I コリント 8~10 章に見られるような自由と責任の議論が重要

である。私達がこの疑問にどのように答えるかは2つの意味で重要である。

1. 信徒は皆、自分の持つ信仰によって歩まなければならない。神は私達の心と意志を見られる。
 2. 信徒は皆、他の信徒達が彼らの持つ信仰によって歩むのを認めなければならない。自他の聖書的結びつきの内には忍耐がなければならない。神は御自分がなさると同じように私達が互いに愛し合うことを望んでおられる。
- E. この話題のまとめと言えることは、キリスト教は信仰と愛の生活であり、完璧な神学ではないということである。私達の他者との関係に影響する神との関係は詳細な情報あるいは信条の完全さよりも重要である。

「わたしたちを追い出し」 多分これは、(1)ヤソンの保釈(使徒行伝 17: 5-9 を参照)と(2)パウロの伝道活動中の経験の全て(使徒行伝を参照)と関連がある。パウロは自身の経験を旧約聖書の預言者達の経験、特にイエスが同時代の人々から拒絶されたことと重ね合わせて見ていた。

NASB 「彼らは神に喜ばれることをせず」

NKJV 「彼らは神を喜ばせず」

NRSV 「彼らは神を喜ばせず」

TEV 「彼らがどれほど神を喜ばせなかったか」

NJB 「神を喜ばせることのできないようなことをして」

ユダヤ人は自分達の行いが神の御意志であると考え、モーセに与えられた契約を自分達に与えられたものとして守った。彼らは自分達を、偽教師達から信仰を守る神のしもべであると信じていた(パウロはこれらの感情をよく知っていた)。悲劇的で皮肉なことであるが、彼らが偽教師であった。

「全ての人に敵対し」 ここでいう敵意はユダヤ人全体の傲慢さと偏見に根ざすものであった。彼らはメシアとメシアの伝えられる全世界的福音を拒んでいた(イザヤ 2: 2-4、45: 22、49: 6、60 章 3 節、66: 18 と 23 節、ヨハネ 3: 16、エペソ 2: 11-13 を参照)。

2: 16「わたしたちが異邦人に語るのを妨げています」 これはパウロがテサロニケ人への第一の手紙の書かれた時期にコリントで経験したことを反映している。これらの聖句はユダヤ人に対するパウロの最も激しい抗議である(ローマ9~11 章を参照)。

「異邦人の救いのために」 これはアオリスト受動態仮定法である。神は御自分のお姿に造られた人類全てを救いたいと思っておられる(創世記 3: 15、12: 3、出エジプト 19: 5-6、エゼキエル 18 章 23 節と 32 節、ヨナ書、ヨハネ 3: 16、使徒行伝 28: 28、エペソ 2: 11-13、I テモテ 2: 4、II ペテロ 3

章9節を参照)が、(救われるためには)彼ら(人類)は悔い改めてキリストを信じなければならない(マルコ 1: 15、使徒行伝 3: 16 と 19 節、20: 21 を参照)。

NASB 「彼らはいつも自らの罪をあふれるほどに増やしているのです」

NKJV 「自らの罪をあふれるほどに増やすために」

NRSV 「彼らはいつも自らの罪をあふれるほどに増やしているのです」

TEV 「これは彼らがいつも犯してきたあふれるほど多い罪です」

NJB 「彼らは決して自分達が犯し始めた罪をやめようとはしませんでした」

パウロはこの用語を(1)セプトウアギンタの創世記 15: 16 にちょうどふさわしいギリシャ語の聖句があるので旧約聖書から(2)言行録(ダニエル 7: 10、黙示録 20: 12、詩篇 56: 8、139: 16、イザヤ 65: 6、マラキ 3: 16 を参照)に関連するマタイ 23: 32 のイエスのお言葉から採ったのかもしれない。神は人類の悪行を記録しておられるので、人はそれに応じた裁きを受けることになる(マタイ 25～26 章、黙示録 20: 11-15 を参照)。

「しかし神の怒りは彼らの上に臨みます」これはアオリスト能動態直説法動詞である。この聖句は、イスラエルに及んでいた(マルコ 12: 1-12[とマタイ 21: 33-46 とルカ 20: 9-19]の寓話に特記され、ローマ 11: 7 と 25 節とⅡコリント 3: 14 に明記されている)霊的盲目(頑固さ)と関連があるようだ。神の怒りは現在も未来にも(一時的に、そして終末論的に)存在する。

NASB 「余すところなく」

NKJV 「余すところなく」

NRSV、TEV、NJB 「徹底的に」

この聖句は幾通りにも訳されうるので、自分の英訳聖書と比較して、可能な訳をより徹底的に把握しなさい。具体的には以下に示すようなことをしなさい。

1. 読み返して要約する。
2. 意味を期待する
3. セム語の「完璧に」という意味を用いる。この語が神の怒りを言い表すことはめったにない。

NASB(改訂版)原典: 2: 17-20

¹⁷兄弟たち、わたしたちはあなたがたからしばらくの間引き離されていたので—会えなかったというだけで、心が離れていたわけではないのですが—なおさらあなたがたの顔を見たいと切に望みました。¹⁸わたしたちはあなたがたのところに行きたかったのですが—わたしパウロは一度ならずも—サタンに妨げられました。¹⁹誰がわたしたちの希望であり喜びであり歓喜の冠でしょうか。わたしたちの主イエスが来られるときにあなたがたではなくて誰が主イエスの御前でそのようなものなのでしょうか。あなたがたはわたしたちの誉れであり喜びなのです。

2: 17

NASB、NKJV 「あなたがたから引き離されていた」

NRSV 「わたしたちはあなたがたから引き離されて孤児にされました」

TEV 「わたしたちはあなたがたから引き離されました」

NJB 「わたしたちはあなたがたから引き離されていました」

これはアオリスト受動態分詞である。感情の高ぶりを表す言葉がこの段落全体に見られる。ここでも7節と11節のパウロの親的な比喩が続く。外部の人間によって文字通り「孤児にされ」たのだ。

多分パウロを責める人々は、彼がテサロニケを足早に去って長い間姿を見せなかったのは彼が本当は彼らのことを気にかけていなかったからだと言ったかあるいはあてこすった(遠回しに言った)のだろう。パウロは2: 17-20と3: 6でこれに反論する。

「切に望みました」この用語はしばしば軽蔑的な意味で「欲望」を意味する語として用いられ、ここでのように肯定的な意味で用いられることは稀である。彼らに会いたいというパウロの望みは3章10節に生き生きと描写されている。

2: 18「わたしたちはあなたがたのところに行きたかったのです」パウロの計画は全てが実現したわけではなかった(ローマ1: 13、15: 22を参照)。

「サタン」個人的な悪の力は私達の生きる世に働いており、(1)墮落した世の体系(2)悪魔(3)墮落した人類(エペソ2: 2-3、ヤコブ4章を参照)を代行者として神の御計画と目的を妨げようとしている。旧約聖書のヨブ1、2章とゼカリヤ3章にはYHWHのしもべとしてのサタンが見られる。新約聖書によればサタンは(神の)敵であるが(ローマ16: 20、Iコリント5: 5と7節、7: 5、IIコリント2: 11、11: 14、12: 7を参照)今も神の支配下にあるのだ。聖書における悪の増大についてはA. B. Davidson 著 Old Testament Theology の300~306ページで十分に議論されているので一読されたい。

特別なトピック: 悪人

これはいくつかの理由でとても難しい話題である。

1. 善に対する第一の敵ではなく、人類にそれに代わるものを示して人類の不義を告発するYHWHのしもべを旧約聖書は明らかにしている。
2. 神の第一の敵である者の概念はペルシャの宗教(ゾロアスター教[拝火教])の影響を受けて聖書外典の中で発展した。これは一方でラビ主導のユダヤ教に大きな影響を与えた。
3. 新約聖書は旧約聖書の主題を、驚くほど厳密だがまた選択的なものに発展させた。聖書神学の観点(それぞれ個別に研究また要約された聖書の各書・著者・ジャンル)から悪を研

究しようとするれば実に様々な悪の側面が明らかとなる。

しかし、聖書外典による世の宗教つまり東洋の宗教の研究をもとに悪を研究しようとするれば、新約聖書がペルシャの二元論やギリシャローマの精神論に発展したということになる。

御言葉が神の権威ある言葉であることを前提として認めるなら、新約聖書の発展は進歩的な啓示とみなされなければならない。クリスチャンはユダヤの民間伝承(昔話)や英国文学(つまりダンテやミルトン)にこの概念をさらにはっきりさせるようなことをさせてはならない。啓示のこの領域には確かに謎と不明瞭さがある。神は悪の全側面と起源と目的を明らかにされようとしているのではなく、悪の敗北を明らかにされているのである。

旧約聖書では用語サタン(BDB966)つまり告発者は3つのグループと関連があるようだ。

1. 人間の告発者(Ⅰサムエル 29: 4、Ⅱサムエル 19: 22、Ⅰ列王記 11: 14 と 23 節と 25 節、詩篇 109: 6)
2. 天使の告発者(民数記 22: 22-23、ゼカリヤ 3: 1)
3. 悪魔の告発者(Ⅰ歴代誌 21: 1、Ⅰ列王記 22: 21、ゼカリヤ 13: 2)

後に聖書外典で創世記3章の蛇はサタンとされ(知恵の書 2: 23-24、Ⅱエノク 31: 3を参照)、さらに後にこれはラビによる追記となる(*Sot* 9b と *Sanh.* 29a を参照)。創世記6章の「神の息子達」はⅠエノク 54: 6 では天使となる。それらはラビの神学では悪の起源となる。私がこのように言うのはその神学的な正確性を主張するためではなく、その発展を示すためである。新約聖書ではこれらの旧約聖書の活動はⅡコリント 11: 3 と黙示録 12: 9 に登場する悪事を行う天使(つまりサタン)とされている。

人間の姿をとった悪の起源を旧約聖書をもとに定めることは困難あるいは不可能である(個人の価値観による)。この理由のひとつはイスラエルのゆるぎない一神教にある(Ⅰ列王記 22 章 20 ~ 22 節、伝道者の書 7: 14、イザヤ 45: 7、アモス 3: 6 を参照)。全ての因果関係は YHWH に帰属され、それによって神の独自性と(世界で)第一位でいらっしやることが示される(イザヤ 43: 11、44 章 6 節と 8 節と 24 節、45: 5-6 と 14 節と 18 節と 21 節と 22 節を参照)。

信頼できる情報源としては(1)ヨブ 1~2章、サタンは「神の息子達」[つまり天使](2)イザヤ 14 章とエゼキエル 28 章、サタンの傲慢さが傲慢な近東の王[バビロンとツロ]を用いて表現されている[Ⅰテモテ 3: 6 を参照]、がある。私はこれらの情報を用いることに複雑な気持ちがある。エゼキエルはツロの王を用いてサタンを表現するためだけでなく(エゼキエル 28: 12-16 を参照)エジプトの王を用いて善悪の知識の木を表現するためにも(エゼキエル 31 章を参照)エデンの園の比喻を用いている。しかし、イザヤ 14 章、特に 12~14 節は傲慢な天使達の反乱を表現しているようだ。神が私達にサタンの特殊な性質と起源を明らかにしたいと望んでおられるなら、この箇所はどのようにするには遠回しである。様々な契約の言葉や著者や書やジャンルのほんの一部の不明瞭な箇所を取り上げて神のパズルを解こうとする組織神学の風潮に私達は染まらぬように気をつけなければならない。

Alfred Edersheim は自著 *The Life and Times of Jesus the Messiah* の第2巻の補遺 X III (748~

763 ページ)とXIV(770~776 ページ)でラビ主導のユダヤ教はペルシャの二元論と悪魔研究から多大な影響を受けてきたと言っている。ラビはこの分野における真理の源としては良いものではない。イエスの教えはシナゴグの教えとは大きくかけ離れている。ラビの提唱する、シナイ山におけるモーセへの律法の授与における天使の仲介と反対の概念が、YHWH と人類の第一の敵である天使の概念への扉を開いたのだと私は思う。ペルシャの二元論(ゾロアスター教[拝火教])には善悪2人の最高神 *Ahkiman* と *Ormaza* がいる。この二元論はユダヤ教の YHWH とサタンの限定二元論に発展した。

新約聖書には確かに悪の蔓延に対する進歩的な啓示があるが、ラビの主張ほどには整っていない。この違いの良い例は「天の戦争」である。サタンの敗北は論理的に必要ではあるが、特別に記されていない。記されている事柄さえも黙示文学の中に隠されている(黙示録 12: 4, 7 節、12~13 節を参照)。サタンは敗北し地上から追放されるが、それでも YHWH のしもべとして働く(マタイ 4: 1、ルカ 22: 31-32、I コリント 5: 5、I テモテ 1: 20 を参照)。

この分野に関しては私達は好奇心を抑えなければならない。個人を誘惑する悪の力があるが、神は唯一の方であり、人類は自らの選択に責任を負わなければならない。救いの前後には霊的戦いがある。勝利は三位一体の神にあり、三位一体の神を通して存続する。悪は負け続け、退けられることになるのだ。

「妨げられました」これは接近中の敵軍の面前にある道路を破壊する行為を意味する軍事用語である。現実に霊的抗争がある(エペソ 4: 14、6: 10-18 を参照)。

サタンではなく身体の病が問題であった可能性もある(II コリント 12 章を参照)。パウロは自らの人生を肉的にも霊的にも見たのだ。

2: 19 パウロの使徒の地位の正当性のしるしは異邦人への彼の伝道の成功にあった(20 節を参照)。

「希望」ガラテヤ 5: 5 の特別なトピックを見よ。

NASB	「あなたがたではなくて誰が... でしょうか」
NKJV	「あなたがたではなくて誰が... でしょうか」
NRSV	「あなたがたではなくて誰が... でしょうか」
TEV	「... はあなたがたです—他の人々ではなくあなたがたなのです」
NJB	「あなたがたは... です」

この聖句の問題は、それがテサロニケの教会に対するパウロの愛情と愛に、他の異邦人教会に対する愛情と愛についての場合と比べて、どのように関連しているかということにある。それらに何か特別な違いはあったのか。TEV の訳語「他の人々ではなくあなたがたなのです」はこの考

察を表すものであるといえる。

ある意味でテサロニケの信徒達は異邦人伝道担当の使徒としてのパウロの働きの有効性を証している。パウロがイエスに倣ったように彼らはパウロに倣った。そしてそのことは彼らの心が新しくなったこと(新しい契約)の外見上の証しである。

「わたしたちの主イエスが来られるときに」“Parousia”の文字通りの意味は「存在」であるが、比喩的に意味が拡張されるとその意味は「来ること」となる。この用語は新約聖書で初めて用いられた(2: 19, 3: 13, 4: 15, 5: 23, IIテサロニケ 2: 1, 8-9 節, I コリント 15: 23 を参照)。この用語は紀元1世紀の世俗の文書の中で王の行幸を指す言葉として用いられた。この用語は後に教会で主イエスの再来という専門的な意味を持つようになった。この主イエスの再来はテサロニケ人への手紙第一と第二の神学的に主要な論点である。テサロニケ人への手紙第一の各章はこの話題で終わっている(1: 10, 2: 19, 3: 13, 4: 13-18, 5: 23 を参照)。3: 13 の特別なトピック「キリストの再来を指す新約聖書の用語」を見よ。

特別なトピック: いつでも起こり得る再臨 対 まだ起こっていない再臨(新約聖書の矛盾)

- A. 新約聖書の終末論的な書は、現状を通して終わりの時を見る旧約聖書の預言的洞察を反映している。
- B. マタイ24章、マルコ13章、ルカ21章は同時にいくつかの問題を取り扱っているので解釈がとて難しい。
 - 1. 神殿はいつ壊されるのか。
 - 2. メシアの再来のしるしは何か。
 - 3. この世はいつ終わるのか(マタイ 24: 3 を参照)。
- C. 新約聖書の終末論的な書のジャンルの大半は、意図的な曖昧さを含み高度に象徴的な、黙示的で預言的な言葉の組み合わせである。
- D. 新約聖書のいくつかの箇所(マタイ24章、マルコ13章、ルカ17章と21章、テサロニケ人への手紙第一と第二、ヨハネの黙示録を参照)はイエスの再来を取り扱っている。これらの箇所が強調しているのは以下のことである:
 - 1. 再来の正確な時期は未知だが、再来されるのは確かである。
 - 2. 私達は再来の大体の時期は分かるが正確な時期は分からない。
 - 3. 再来は突然思いがけず起こることになっている。
 - 4. 私達は与えられた課題についてよく祈り、準備し、そして忠実でなければならない。
- E. (1)まだ起こっていない再来[ルカ 12: 40 と 46 節, 21: 36, マタイ 24: 27 と 44 節を参照]と(2)歴史上の出来事には起こらなければならないことがあるという事実、の間には神学上の逆説的な緊張がある。

- F. 新約聖書は再来の前にいくつかの出来事が起こることになっていると述べている。
1. 全世界に福音が宣べ伝えられる(マタイ 24: 14、マルコ 13: 10 を参照)
 2. 大規模な背信(マタイ 24: 10-13、21 節、Ⅰテモテ 4: 1、Ⅱテモテ 3: 1 以降、Ⅱテサロニケ 2: 3 を参照)
 3. 「罪ある者」の啓示(ダニエル 7: 23-26、9: 24-27、Ⅱテサロニケ 2: 3 を参照)
 4. 抑えているもの(者)が取り除かれる(Ⅱテサロニケ 2: 6-7 を参照)
 5. ユダヤ人のリバイバル(ゼカリヤ 12: 10、ローマ 11 章を参照)
- G. ルカ 17: 26-37 と同じ内容の記述はマルコの福音書にはない。共観福音書の中でこれと同じ内容の記述はマタイ 24: 37-44 に見られる。

2: 20

NASB、NKJV、NRSV 「わたしたちの誉れ」

TEV、NJB 「わたしたちの誇り」

ここでは用語「栄光」を「誇り」として用いている。これは神を言い表すのに用いられる神学的な栄光とは無関係である(12 節を参照)。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. パウロを非難していたのは誰か。なぜ非難していたのか。
2. なぜパウロは自分の宣教に対する報酬の受け取りを拒んだのか。
3. なぜパウロはユダヤ人の福音への反発という話題を持ち出したのか。
4. 16 節は神の目的としてのユダヤ人の国家についてどのような意味を持つのか。
5. 17~20 節はなぜ非常に感情的なのか。

テサロニケ人への第一の手紙3章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
パウロの教会再訪の望み	テサロニケ人の信仰への関心	パウロのテサロニケ人への愛情	パウロのテサロニケの教会再訪の望み	テモテのテサロニケ人への伝道
(2: 17-3: 13)		(2: 17-3: 13)	(2: 17-3: 13)	
3: 1~5	3: 1~5	3: 1~5	3: 1~5	3: 1~5
	テモテの励まし			テサロニケ人についての良い知らせをパウロは神に感謝する。
3: 6~10	3: 6~10	3: 6~10	3: 6~10	3: 6~10
	テサロニケの教会のための祈り			
3: 11~13	3: 11~13	3: 11~13	3: 11~13	3: 11~13

第三読書サイクル(viiページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

3章の簡単な概要

- A. パウロは心配のあまりにテモテをテサロニケの信徒達のもとへ送る。3: 1～5
- B. テモテは良い知らせを持って戻った。3: 6～10
- C. テサロニケの教会のためのパウロの祈り。3: 11～13

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 3: 1-10

¹そこで、わたしたちはこれ以上我慢ができず、自分たちだけがアテネに残るのが最善と思い、
²あなたがたを励まし信仰を強めるために、わたしたちの兄弟でキリストの福音のために働く神の仲間テモテを遣わしました。³それは、このような苦難に遭っていても、誰一人として動揺することのないようにするためでした。というのは、わたしたちがこのような苦難に遭うように定められていることをあなたがた自身が知っているからです。⁴あなたがたのところにいたときに、わたしたちは自分たちが苦難に遭うことになっていると前もって忠告しましたが、あなたがたも知っていたのとおり、事実そのようになりました。⁵このようなわけで、わたしはこれ以上我慢ができなくなり、あなたがたが惑わされてわたしたちの労苦が無駄になってしまうのではないかと心配になって、あなたがたの信仰を確かめるためにテモテを遣わしたのです。⁶ところで、今テモテがあなたがたのところからわたしたちのもとに戻ってきて、あなたがたの信仰と愛についてのよい知らせと、あなたがたがいつもわたしたちに好意を持ち、わたしたちがあなたがたに会いたがっているのと同じように自分たちもわたしたちに会いたがっていることを伝えてくれました。⁷兄弟たち、このようなわけで、あらゆる困難と苦難のただ中にあっても、あなたがたの信仰を通してあなたがたについて安心しました。⁸なぜなら、あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら、今わたしたちは確かに生きているといえるからです。⁹あなたがたのことでわたしたちは神の御前で喜びにあふれています、この大きな喜びについてわたしたちはどのように神に感謝したらよいのでしょうか。¹⁰あなたがたと顔を合わせて、あなたがたの信仰に欠けているものを補うことができるようにと、わたしたちは夜も昼も切に祈り続けています。

3: 1「これ以上我慢ができず」パウロはこのテサロニケの教会を心配していた。なぜなら(1)その教会が迫害の中で誕生した(2: 17-20を参照)からであり、また(2)パウロがまもなくして去らなければならなかったからである。パウロの牧会への情熱は冷めることがなかったようだ(5節を参照)。

「残る」この現在形能動態分詞は(1)両親にはぐれた子供[エペソ 5: 31、多分 2: 7と11節と17節の親の比喻とは別のもの]あるいは(2)配偶者の死(マルコ 12: 19を参照)の意味で用いられた。パウロはこのテサロニケの教会を深く愛していた。

「自分たちだけがアテネに」パウロのアテネ訪問の記録は使徒行伝 17: 15-34 にある。この都市はヘレニズム世界の知識の中心であった。パウロは眼病を患っており(Ⅱコリント 12: 7 とガラテヤ 4: 15 と 6: 11 を比較せよ)、特にアテネのような不慣れな土地に一人でいるのは彼にとってとても困難なことであった。用語「だけ」は複数形であるがその意味は明らかではない。使徒行伝 18: 5 はシラスとテモテが(パウロとは)別の使命を与えられていたことを暗示している。この節はパウロが「私達」を編集上複数形として用いた一つの例であり、彼一人を指していると思われる。

3: 2

NASB 「キリストの福音のために働く神の仲間」
NKJV 「神の宣教者であり、キリストの福音のために働くわたしたちの仲間」
NRSV 「共に神のためキリストの福音を宣べ伝える仲間」
TEV 「わたしたちと共に神のためキリストの福音を宣べ伝える者」
NJB 「キリストの福音を宣べ伝える神の助け手」

この聖句はテモテを指している。ギリシャ語の原典群にはそれぞれ違いがある。原典 B では「協力者」となっているが原典^αと A では「宣教者」となっている。その語は奴隷の賤しい働きを言い表している。現代訳聖書の大半は原典 B に倣っている。多分書記はパウロがテモテを「神の協力者」と呼んだことに衝撃を受けたのだろう。

この節はテモテの推薦状のように機能している(使徒行伝 18: 27、ローマ 16: 1、Ⅱコリント 8 章 18-24 節、Ⅲヨハネ 9 節と 10 節を参照)。

「あなたがたを強め励ますために」 迫害にさらされているこの新しい教会をパウロは心配した(1 章 6 節、2: 14、3: 3 を参照)。

3: 3「このような苦難に遭っていても、誰一人として動揺することのないようにするためでした」これは用語「動揺する」が新約聖書の中で用いられている唯一の箇所である。この用語は本来は犬が尾を振ることを指した。古代ギリシャでは(ホメロス)「へつらう」の意味で用いられた。これは 2 章 1 節あるいは 3: 5 と関連があるかもしれない。真の信仰とは忍耐である(マタイ 13: 1-23、ガラテヤ 6: 9、黙示録 2: 2-3、7 節、11 節、17 節、19 節、26 節、3: 5、8 節、10 節、11 節、12 節、21 節を参照)。ガラテヤ 3: 4 の特別なトピック「忍耐の必要」を見よ。

「わたしたちがこのような苦難に遭うように定められている」これは現在形受動態(異態)直説法動詞である。この受動態は神が生きて働かれることを暗示している。これは異教の人間とは無関係の運命の概念を指しているのではなく、またイスラム教の決定論の概念を指しているのでもない。受難は信徒にとって墮落した世で負うノルマ(克服すべき目標)である(4 節、マタイ 5 章 10-12 節、ヨハネ 15: 18 と 20 節、16: 33、使徒行伝 14: 22、ローマ 8: 17、Ⅱコリント 4: 7-11、11: 23-27、

Ⅱ テモテ 3: 12、Ⅰ ペテロ 2: 21、4: 12-16 を参照)。受難は靈的成熟の手段である(ヘブル 5: 8 を参照)。

特別なトピック: なぜクリスチャンは苦難に遭うのか

1. 個人的な罪のため(一時的な裁き)。これは問題と逆境の全てが罪の結果だという意味ではない(ヨブ記、詩篇 73 篇、ルカ 14: 1-5、ネヘミヤ9章、使徒行伝 5: 1-11、Ⅰコリント 11 章 29-30 節、ガラテヤ 6: 7 を参照)。
2. よりキリストらしくなるため(ヘブル 5: 8)。イエスでさえも人間として成熟されなければならなかったし、彼の弟子達もそうであった(ローマ 5: 3-4、8: 28-29、Ⅱコリント 12: 7-10、ピリピ 3 章 10 節、ヘブル 12: 5-12、ヤコブ 1: 2-4、Ⅰペテロ 1: 7 を参照)。
3. より力強い証し人となるため(マタイ 5: 10-12、ヨハネ 15: 18-22、Ⅰペテロ 2: 18-21、3: 13-17 を参照)。
4. 新しい世の産みの苦しみのしるしとして(マタイ 24: 6、マルコ 13: 8 を参照)。

3: 4「わたしたちは前もって忠告しました」これは過去の反復行為を意味する未完了時制である。パウロは福音に関係する迫害と苦難について彼らに数回警告しなければならなかった。彼はこのことをイエスの教えと個人的経験から知った(Ⅱコリント 4: 7-12、6: 3-10、11: 23-29 を参照)。今や彼らもそれを経験を通して知った。

NASB	「自分たちが苦難に遭うことになっている」
NKJV	「自分たちが苦難に遭うことになっている」
NRSV	「自分たちが迫害を受けることになっている」
TEV	「自分たちが迫害を受けることになっていること」
NJB	「自分たちが迫害を受けるに違いないこと」

これは現在形受動態不定詞を伴う現在形能動態直説法動詞である。Williams 訳聖書の脚注には「自らの重荷で潰れた荷馬車の様子」とある。

3: 5「あなたがたの信仰」これは多分旧訳聖書における「忠実さ」の意味で用いられているのだろう。彼らは自分達の信仰告白に忠実なのだろうか。ガラテヤ 3: 6 の特別なトピックを見よ。

「あなたがたが惑わされるのではないかと」人間化した悪の力(*ho peirazon*)は私達の世と生活に働いている(2: 18 を参照)。「誘惑する」(*peirazo*)と訳されるこのギリシャ語の用語は「破壊へと至る見方を伴った」誘惑を意味し、2: 4 の「喜ばれる」(*dokimazo*)とは逆である。2: 18 の特別なトピック「悪人」を見よ。

特別なトピック: 「試練」を意味するギリシャ語の用語とその意味

ある目的で誰かを試すことという概念を表すギリシャ語の用語は2つのグループに分けられる。

1. *Dokimazo*、*Dokimion*、*Dokimasia*

この用語は火による物(比喩的に人)の真贋性試験を意味する冶金学用語である。火によって純粋な金属が露わにされ不純物が焼き払われる(つまり製錬される)。この物理的過程は神またはサタンあるいは人間が他者を試みることを意味する強意の熟語となった。この用語は他者に受け入れられる目的での試みという肯定的な意味でのみ用いられる。

この用語が新約聖書の中で試みの意味で用いられている例:

1. 雄牛—ルカ 14: 19
2. 私達自身— I コリント 11: 28
3. 私達の信仰—ヤコブ 1: 3
4. 神さえも—ヘブル 3: 9

これらの試みの結果は良いものと予想された(ローマ 1: 28、14: 22、16: 10、II コリント 10: 18、13: 3、ピリピ 2: 27、I ペテロ 1: 7を参照)ので、この用語は試みられる人が以下のようなという意味を持つ。

- a. 価値ある人となる
- b. 良い人となる
- c. 真のクリスチャンになる
- d. 価値ある人となる
- e. 名誉ある人となる

2. *Peirazo*、*Peirasmus*

この用語はしばしば探し(欠点の探索)あるいは拒絶の目的で試みることを意味する。この用語はしばしばイエスが荒野で遭遇された誘惑の意味で用いられる。

- a. この用語はイエスをつまづかせようとする試みを意味する(マタイ 4: 1、16: 10、19: 3、22: 18と35節、マルコ 1: 13、ルカ 4: 38、ヘブル 2: 18を参照)。
- b. この用語(*peirazon*)はサタンの呼称として用いられる(マタイ 4: 3、I テサロニケ 3: 5を参照)。
- c. この用語はイエスによって神(マタイ 14: 7、ルカ 4: 12を参照)[あるいはキリスト(I コリント 10: 9を参照)]を試みないようという私達への警告として用いられる。この用語はまた、墮落に至ることを行わせる試みを意味する(使徒行伝 9: 20、20: 21、ヘブル 11: 29を参照)。この用語は信徒の遭遇する誘惑と試練の意味で用いられる(I コリント 7: 5、10: 9と13節、ガラテヤ 6: 1、I テサロニケ 3: 5、ヘブル 2: 18、ヤコブ 1: 2、13節、14節、I ペテロ 4: 12、II ペテロ 2: 9を参照)。神は人類の3つの敵(世、肉、悪魔)を通して特別な時と場所を示される。

「わたしたちの労苦が無駄になってしまうのではないかと」ここでは文法上の(叙)法の使い方が

重要である。現実を表現する法である直説法はサタンについて用いられているが、未来に起こり得る偶然の出来事を表現する法である仮定法はパウロの労苦について用いられている。これは 2: 1 と関連がありそうだ。問題は「『無駄に』は彼らの個人的回心と関連があるのか、それともテサロニケにおける生きて働く教会の確立と関連があるのか」ということである。パウロがこれら二者を区別していなかったかもしれないとはいえ、後者が文脈に最も合うと私は思う。

パウロはしばしば「無駄」つまり「不毛」の概念を表現するのに3つの用語を用いた。

1. *eike* —ローマ 13: 4、I コリント 15: 2、ガラテヤ 3: 4、4: 11、コロサイ 2: 18
2. *kenos* — I コリント 15: 10、14 節、58 節、II コリント 6: 1、ガラテヤ 2: 2、エペソ 5: 6、ピリピ 2 章 16 節、コロサイ 2: 8、I テサロニケ 2: 1、3: 5 (II コリント 9: 3 では動詞)
3. *mataios* — I コリント 3: 20、15: 17、テトス 3: 9 (ローマ 1: 21 では動詞)

パウロは福音の力が神の御業から来ることを知っていたが、彼は人類の選択が有意義な結果に影響することも知っていた。

3: 6「よい知らせ」 これは新約聖書の中でこのギリシャ語の用語がキリストの福音以外の意味で用いられている唯一の箇所である。この教会が神に忠実であるという(テモテからの)知らせはパウロにとって「福音」であり「よい知らせ」であった。

「あなたがたの信仰と愛についての」 この聖句の意味は幾通りか考えられる(1: 3 を参照)。これは(1) 正統な教義と互いに愛しいたわり合うこと(2) 神への忠実さと愛、について述べている。

「わたしたちに好意を持ち、わたしたちがあなたがたに会いたがっているのと同じように自分たちもわたしたちに会いたがっている」 これは、パウロに反抗してこの教会を害していたのは迫害でも偽教師達でもないことを示している。

3: 7「あらゆる困難と苦難のただ中にあっても」 コリントにおけるパウロの問題は I コリント 4: 9-13、II コリント 4: 7-12、6: 4-10、11: 23-28 に挙げられている。ああ、私(Utley)にとっての問題はキリストのしもべであるために払う犠牲なのだ。

「あなたがたについて安心しました」 パウロはしばしばこの複合語(「一緒に」と「召し」)を用いている。この語にはいくつかの意味がある。

1. 説得する、勧める、励ます(2: 3、11 節、4: 1、5: 14、II テサロニケ 3: 12 を参照)
2. 安心させる(2: 11、3: 2、4: 18、5: 11、II テサロニケ 2: 17 を参照)
3. 聖霊(ヨハネ 14: 16 と 26 節、15: 26、16: 7 を参照)と御子(I ヨハネ 2: 1 を参照)の助けの御業について用いられる、この語の名詞形(*paracletos*)

3: 8「今わたしたちは確かに生きていといえるからです」 この教会についての良い知らせを聞いて緊張から解放されたことを表現するために、パウロは比喩的な言葉を用いている。

「あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら」 これはギリシャ語の条件文であり、第一種条件文と第三種条件文を結合させてパウロの発言に未来に起こり得る偶然の出来事を付け加えている。彼は彼ら(テサロニケの信徒達)が主にしっかりと結ばれていてもまだ自分に会いたがっていることを確信していた(2: 1 と 3: 5 を参照)。

「主にしっかりと結ばれている」はキリストに対する私達の立場と関連がある。聖書は私達の救いを互いに緊張関係にある2つの真理で表現している。つまり救いは(1)自由でキリストに基づく(2)大きな代価を必要とし、進歩的で、私達の生活様式を選択の中に見られる(マタイ7章、ヤコブの手紙、ヨハネの手紙第一)。どちらも真実である。この節は前者の真理を強調している(ローマ 5: 2、I コリント 15: 1、エペソ 6: 11 と 13 節を参照)。

3: 9-10 これは11~13節の祈りを導く修辞学的質問であり、このパウロの書簡の前半の結句となっている。

3: 10「夜も昼も」 これはユダヤの時間の順序に沿った発言である(2: 9 の解説を見よ)。これはパウロの定期的(習慣的)で継続的な祈りの生活を反映している(1: 2、2: 12、II テモテ 1: 3 を参照)。

NASB	「切に祈り続けています」
NKJV	「熱心に祈っています」
NRSV	「切に祈っています」
TEV	「わたしたちは心から求めました」
NJB	「わたしたちは熱心に祈っています」

副詞「切に」はとても強烈な、3語(*hyper* と *ek* と *perissou*)から成る複合語で、感情的な用語である(エペソ 3: 20、I テサロニケ 3: 10、5: 13 を参照)。パウロはこれらの新しい教会を心配し、それらのために祈った(II コリント 11: 28 を参照)。ガラテヤ 1: 13 の特別なトピック「パウロの *Hyper* 複合語の使用」を見よ。

NASB	「あなたがたの信仰に欠けているものを補うことができるように」
NKJV	「あなたがたの信仰に欠けているものを補う」
NRSV	「あなたがたの信仰に欠けているもの全てを補う」
TEV	「あなたがたの信仰に欠けているものを補う」
NJB	「あなたがたの信仰に欠けているものを補う」

彼らは信徒の務めをよく果たしていたが、イエスの再来についての誤解が示しているように、(福

音の)理解においては未熟であった。ここでは信仰が(1)教義として[4: 13~5: 11 を参照](2)生活様式について再び強調するために用いられているので、「欠けているもの」とは多分倫理面から言われているのだろう[4: 1~12 を参照]。パウロはしばしばこの用語「信仰」(*pistis* あるいは *pisteuo*)をこれらの書簡(1: 3 と 8 節、3: 2 と 5 節と 6 節と 7 節と 10 節、5: 8、Ⅱテサロニケ 1: 3 と 4 節と 11 節、3: 2 を参照)で用いているが、特にこの文脈中では高頻度に用いている。ガラテヤ 3 章 6 節の特別なトピックを見よ。

NASB(改訂版)原典: 3: 11-13

¹¹どうか、わたしたちの父なる神とわたしたちの主イエスがあなたがたのところへわたしたちを導いてくださいますように。¹²また、わたしたちもあなたがたにそうするように、主があなたがたをお互いの愛と全ての人への愛とで豊かに満ちあふれさせてくださいますように。¹³そして、わたしたちの主イエスが、御自分に属する全ての聖なる者とともに来られるときにわたしたちの父なる神の御前であなたがたの心を非のうちどころのない聖なるものとしてくださいますように。

3: 11-13 ギリシャ語訳聖書ではこれらの節は一つの文となっている。この祈りには3つの稀少な願望法の動詞形、「導く」(11 節)と「あふれさせる」(12 節)と「豊かにする」(12 節)が含まれている。願望法は祈りに用いられる可能性の法である。

3: 11「導いてくださいますように」これは稀少なアオリスト能動態単数形願望法動詞であり、新約聖書の中のいくつかの祈りで用いられている(5: 23、Ⅱテサロニケ 2: 16、3: 5 と 16 節、ローマ 15 章 5~6 節、13 節を参照)。この動詞は父なる神とイエス・キリストについて用いられているが単数形であるということに注意せよ。これは新約聖書の著者達がナザレのイエスの神性を主張する方法であった(1: 1、Ⅱテサロニケ 2: 16 を参照)。

もうひとつの神学的要点は、2: 18 に記されているようにパウロが彼らのところに行こうとするのをサタンが妨げたので、パウロは彼らのところに行く(直接的で支障のない、ルカ 1: 79 を参照)道を父なる神とイエスに求めたということである。

「父」ガラテヤ 1: 1 の特別なトピックを見よ。

3: 12-13 パウロは 11 節で自分自身のために祈ったが、これらの箇所では彼はテサロニケの教会のために神に哀願した。彼は彼らが互いに愛し合い、また全ての人を愛するように祈った(エペソ 6: 18 を参照)。また彼は信徒が聖い者となるように祈った(13 節、エペソ 1: 4 を参照)。神は全ての信徒がキリストのようになることを望んでおられる(ローマ 8: 28-29、ガラテヤ 4: 19 を参照)。

「豊かに満ち」以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: 豊かに満ち (*perissevo*)

パウロはしばしばこの用語を以下のような事柄の意味で用いた。

1. 栄光に満ちあふれた神の真理、ローマ 3: 7
2. 一人のイエス・キリストの恵みの無償の賜物は満ちあふれる、ローマ 5: 15
3. 信徒は希望に満ちあふれる、ローマ 15: 13
4. 信徒は特定の食物を食べるように、あるいは食べないように神から勧められてはいない、I コリント 8: 8
5. 信徒は教会を建て上げることができるように豊かに満ちあふれる、I コリント 14: 12
6. 信徒は主の業を行うことができるように豊かに満ちあふれる、I コリント 14: 12
7. 信徒はキリストの苦しみと慰めとを豊かに受ける、II コリント 1: 5
8. 栄光に満ちあふれた義の働き、II コリント 3: 9
9. 信徒の感謝は神の栄光の中に満ちあふれる、II コリント 4: 15
10. 信徒は喜びに満ちあふれる、II コリント 8: 2
11. 信徒は全て(信仰、言葉、知識、熱心さ、愛)に、またエルサレムの教会の賜物に満ちあふれる、II コリント 8: 7
12. 全ての恵みは信徒に満ちあふれる、II コリント 9: 8
13. 信徒は神への感謝に満ちあふれる、II コリント 9: 12
14. 神の恵みの豊かさは信徒に満ちあふれる、エペソ 1: 8
15. 信徒の愛はますます満ちあふれる、ピリピ 1: 9
16. パウロにある信徒の誇りはキリストに満ちあふれる、ピリピ 1: 26
17. 豊かになる、ピリピ 4: 12 と 18 節
18. 信徒は喜びに満ちあふれる、コロサイ 2: 7
19. 信徒は互いへの愛に満ちあふれる、I テサロニケ 3: 12
20. 神の御心にかなう豊かな生活様式、I テサロニケ 4: 1
21. 仲間の信徒への愛に満ちあふれる、I テサロニケ 4: 10

キリストにある神の恵みについてのパウロの理解は「満ちあふれ」だが、それはまた日々の生活でこの「満ちあふれ」る恵みと愛の中を歩むことを信徒に求めているのだ。

「全ての人への」神の愛は全世界に広がっている(ヨハネ 1: 29、3: 16、I テモテ 2: 4、II ペテロ 3 章 9 節を参照)ので、神を信じる私達にも必ず与えられている。

3: 13「心」 ガラテヤ 4: 6 の特別なトピックを見よ。

NASB 「非のうちどころのない聖なるもの」

NKJV 「非のうちどころのない聖なるもの」

NRSV、NJB 「非のうちどころのない聖なるもの」

TEV 「完全で聖い」

聖さは賜物であり務めである(直説法と命令法)。それは叱責や非難を受けることのない人の持つ性質である(エペソ 5: 27 を参照)。これはまぎれもなく、非難されるべきはサタンであることを示している(ローマ 8: 31、32 節と 28 節)。神は全ての信徒がキリストのように聖くなることを望んでおられる(4: 3、ローマ 8: 28-29、ガラテヤ 4: 19、エペソ 1: 4 を参照)。Ⅱテサロニケ 4: 3 の解説を見よ。2: 10 の特別なトピック「非難されない」を見よ。4: 3 の特別なトピック「聖化」を見よ。

「わたしたちの主イエスが来られるときに」これはパウロが終りの時に起こることになっている事柄に関心を持ち続けていたことを示している(2: 19、4: 15-17、Ⅱテサロニケ2章を参照)。

イエスの再来の際に起こることになっている事柄と歓喜(Ⅰテサロニケ 4: 13-18 を参照)とキリストの裁きの座(Ⅱコロサイ 5: 10 を参照)と裁きの白い冠(マタイ25章と黙示録20章を参照)の間の正確な関係は明らかではない。パウロは組織神学者ではなかった。以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: イエスの再来を意味する新約聖書の用語

人類が(救い主および裁き主としての)イエスに会うことになっている、イエスの再来の特定の日はパウロの著書の中で幾通りもの表現で終末論的に強調されている。

1. 「主イエス・キリストの日」(Ⅰコリント 1: 8 を参照)
2. 「主の日」(Ⅰコリント 5: 5、Ⅰテサロニケ 5: 2、Ⅱテサロニケ 2: 2 を参照)
3. 「主イエスの日」(Ⅰコリント 5: 5、Ⅱコリント 1: 14 を参照)
4. 「イエス・キリストの日」(ピリピ 1: 6 を参照)
5. 「キリストの日」(ピリピ 1: 10、2: 16 を参照)
6. 「人の子の日」(ルカ 17: 24 を参照)
7. 「人の子が現れる日」(ルカ 17: 30 を参照)
8. 「わたしたちの主イエス・キリストの現れ」(Ⅰコリント 1: 7 を参照)
9. 「主イエスが天から現れる日」(Ⅱテサロニケ 1: 7 を参照)
10. 「主イエスが来られるときに御前で」(Ⅰテサロニケ 2: 19 を参照)

新訳聖書の著者達がイエスの再来について述べる方法は少なくとも4通りある。

1. *epiphanesia* (語源的にはないが)神学的に「栄光」と関連のある、まばゆいほどの明るさについて述べている。Ⅱテモテ 1: 10 とテス 2: 11 および 3: 4 ではこの用語はイエスが初めて来られたとき(つまり受肉)とイエスの再来について述べている。Ⅱテサロニケ 4: 8 ではこの用語は、Ⅰテモテ 6: 14 とⅡテモテ 4: 1 および 8 節とテス 2: 13 にあるイエスの再来を意味する3つの主要な用語全てを含めて用いられている。
2. *parousia* 臨在を意味し、本来は王の訪問について述べる用語である。この用語は新訳聖書の中で最も広く用いられている(マタイ 24: 3、27 節、39 節、Ⅰコリント 15: 23、Ⅰテサロ

ニケ 2: 19、3: 13、4: 15、5: 23、Ⅱテサロニケ 2: 1 と 8 節、ヤコブ 5: 7 と 8 節、Ⅱペテロ 1: 6、3: 4 と 12 節、Ⅰヨハネ 2: 28 を参照)。

3. *apokalupsis* (つまり *apocalypsis*) イエスの再来の目的が明らかにされることを意味する。これは新訳聖書の最後の書の名である(ルカ 17: 30、Ⅰコリント 1: 7、Ⅱテサロニケ 1: 7、Ⅰペテロ 1: 7、4: 13 を参照)。
4. *phaneroo* 光のもとに持ってきてはっきりと示し明らかにすることを意味する用語である。この用語は新訳聖書の中で神の啓示の数多くの内容を意味する語としてしばしば用いられている。この用語は *epiphanesia* と同様に、イエスが初めて来られたとき(Ⅰペテロ 1: 20、Ⅰヨハネ 1: 2、3: 5 と 8 節、4: 9 を参照)とイエスの再来(マタイ 24: 30、コロサイ 3: 4、Ⅰペテロ 5: 4、Ⅰヨハネ 2: 28、3: 2 を参照)について述べている。
5. 「来訪」を意味するとても一般的な用語 *erchomai* もキリストの再来を意味する用語として時々用いられる(マタイ 16: 27-28、23: 39、24: 30、25: 31、使徒行伝 1: 10-11、Ⅰコリント 11 章 26 節、黙示録 1: 7 と 8 節を参照)。
6. この用語はまた、旧訳聖書で神の祝福(復活)と裁きの日を意味する聖句「主の日」(Ⅰテサロニケ 5: 2 を参照)とともに用いられる。

新訳聖書は全般的に旧訳聖書の世界観の範囲内で書かれており、以下に示すような事柄を主張している。

- a. 現在の悪と反逆の世
- b. 来るべき義の世
- c. 救い主(聖別された方)の御業を通して聖霊のお働きによってもたらされる世

新訳聖書の著者達がイスラエルの期待を少し修正しているの、進歩的啓示の神学的仮定が必要となる。救い主の軍事的で国家(イスラエル)的な御臨在の代わりに2度の御臨在がある。最初の御臨在はナザレのイエスが母マリアの胎に宿り誕生されたことによる神の受肉である。イザヤ53章にあるように軍人でも裁判官でもない「苦難のしもべ」として、またゼカリヤ 9: 9にあるようにロバ(軍用馬や大型のラバではない)の子の背におとなしくお乗りになってイエスは来られた。最初の御臨在によって新しい救い主の世、つまり地上の神の王国が始められた。ある意味で神の王国はここにあるが、しかしもちろん別の意味ではまだはるかにほど遠い。ある意味で、まだ見ぬ、未だはっきりとはしないユダヤの2つの世をだぶらせているのは、旧訳聖書に由来するこの2度の御臨在の間の緊張である。事実、この2度の御臨在は YHWH のなされた全人類を救うという約束を強調している(創世記 3: 15、12: 3、出エジプト 19: 5、預言者達[特にイザヤとヨナ]の説教を参照)。

預言者達の大半が最初の御臨在について述べているので、教会は旧訳聖書の預言の成就を待ってはいない(*How to Read The Bible For All Its Worth* の 165~166 ページを参照)。信徒が期待しているのは、復活された王の王であり主の主である方が来られることであり、待ちに待った義の新しい世が天国と同じように(マタイ 6: 10 を参照)地上に歴史的に実現することである。旧訳聖

書の預言にある御臨在は不正確なのではなく未完成なのである。預言者達が YHWH の御力と権威において預言した通りにイエスは再来されることになっているのだ。

イエスの再来は聖書の用語ではないが、その概念は新訳聖書全体の世界観と要旨である。神はそれを確かに予定されている。神と神のお姿に似せて造られた人類の交わりは回復されることになっている。悪は裁かれ取り除かれることになっている。神の目的は台なしになることはないし、ありえないのだ。

「御自分に属する聖なる者」「聖なる者」(文字通り「聖者」)は(1)イエスの御側に仕える天使達(申命記 33: 2-3、ゼカリヤ 14: 5、マタイ 16: 27、25: 31、マルコ 8: 38、Ⅱテサロニケ 1: 7、黙示録 19 章 4 節を参照)あるいは(2)神の人々、聖者達(Ⅰテサロニケ 4: 14-16 を参照)である。パウロは決して天使を「聖なる者」つまり「聖者」と呼ばなかったが、それは多分解釈上の問題を解決するためだろう。天使と聖なる者は多分イエスとともに天上に戻るようになる。もしも死んだ聖なる者が終りの時の出来事に関与すれば、この教会は安泰ではなくなる。

「聖なる者」、文字通り「聖者」は聖なる方(Ⅰペテロ 1: 15 を参照)によって聖い者(4: 3 を参照)と呼ばれるのだ。キリスト教の目標は今の「聖さ」(エペソ 1: 4 を参照)であり、死後の天国での「聖さ」ではないのだ。

特別なトピック: 聖なる者

これはヘブル語の用語 *kadash* に相当するギリシャ語の用語であり、その元々の意味はある人、物、場所を YHWH の特別な御用のためにとっておくことである(BDB871)。この用語は相当する英語の用語の概念「神聖な者」を表している。YHWH は御本質(永遠の、被造物ではない霊)と御性質(道徳的完全性)において人類を超越しておられる。YHWH は万物の測定と判断における基準でいらっしやる。YHWH は超自然的で神聖な方なのだ。

神は交わりのために人類を造られたが、人類の堕落(創世記3章)によって聖なる神と罪深い人類の間には理性的・道徳的壁ができた。神は意志ある被造物(つまり人類)との関係を回復しようと決心された。そこで神は御自分の民を「聖く」なるように召された(レビ 11: 44、19: 2、20: 7 と 26 節、21: 8 を参照)。信仰によって神の民は YHWH との関係つまり契約上の立場を確立するが、それはまた聖く生きるようにとの召しでもある(マタイ 5: 48 を参照)。

イエスの御生涯と御業および信徒の心の中の聖霊の御臨在によって信徒は完全に受け入れられ赦されているので、この聖い生活は可能である。この聖い生活は以下に示すような逆説的状況をもたらす。

1. キリストに帰属する義によって聖くなる
2. 聖霊の御臨在によって聖い生活を送るように召される

信徒は(1)聖なる方[父なる神]の御意志(2)聖なる御子[イエス]の御業(3)聖霊の御臨在によって聖なる者(*hagioi*)である。

新約聖書では聖なる者は必ず複数形で表現されている(ピリピ 4: 12 は例外ではあるが、その箇所でも文脈における意味は複数形である)。救われることは家族や体や建物の一部になることなのだ。聖書的な信仰は個人的な(神の)受け入れで始まるが、その後は集団的な交わりが重要となる。私達は各々、キリストの体、つまり教会(I コリント 12: 11 を参照)を健康にし成長させるための賜物(I コリント 12: 7 を参照)なのだ。私達は仕えるために救われるのだ。聖さは家族的な特質なのだ。

ギリシャ語の MSS の中には「アーメン」を付け加えているものもある(MSS^{N*2}、A、D*)が、ごく初期の他の MSS の中には省略しているものもある(MSS^{N1}、B、D²、F、G)。UBS⁴は「アーメン」の付加について明確な見解をのべていないが、書記達は「アーメン」が手紙の途中にあるのは不適切だと思ってそれを残したのだと Metzger は考えている。

ガラテヤ 1: 5 の特別なトピック「アーメン」を見よ。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. なぜパウロは一人でいることが難しかったのか。
2. 用語「信仰」の様々な意味を挙げよ。
3. 受難は信徒にとって当然のことか。それはなぜか。
4. 聖化は神からの賜物か、それとも自己努力によるものか。
5. 5 節で述べられているのは人の救いか、それとも人の空しさか。2: 1 と 3: 5 は土のたとえ話(マタイ 13: 1-23)とどのように関連しているか。

テサロニケ人への第一の手紙4章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
神に喜ばれる生活	一致への哀願	聖さへの勧め	神に喜ばれる生活	聖さと愛の生活
4: 1～8	4: 1～8	4: 1～8	4: 1～8	4: 1～2
				4: 3～8
	兄弟愛と従順の生活			
4: 9～12	4: 9～12	4: 9～12	4: 9～12	4: 9～12
主の御臨在	主の御臨在による安心	主の御臨在に関する問い	主の御臨在	主の御臨在のときの死者と生きている者
(4: 13～5: 11)		(4: 13～5: 11)		
4: 13～14	4: 13～18	4: 13～18	4: 13～14	4: 13～18
4: 15～18			4: 15～18	

第三読書サイクル(viiページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

1～12節の全体的要旨

- A. 緒言、1～2節
- B. 性的不道徳についての警告、3～8節
 - 1. 聖くなる、3節前半
 - 2. 性的不道徳の実際的回避、3節後半
 - 3. 性的自制、4～5節
 - 4. 契約の兄弟の性的権利を侵害せずに自らの性的権利を正しく行使する方法、6～8節
- C. 他のクリスチャンへの勧め
 - 1. クリスチャンは互いに愛し合うべきである、9～10節
 - 2. より良い生活を送る、10節後半
 - 3. 静かな生活を送る、11節冒頭
 - 4. 自分の仕事に集中する、11節中部
 - 5. 自分の仕事に励む、11節末尾
 - 6. 失われた魂の証し人となることができるように、12節

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 4: 1-8

¹最後に、兄弟たち、主イエスに結ばれているあなたがたにわたしたちは求め、また勧めます。あなたがたはどのように歩み神を喜ばせるべきかについてわたしたちから教えを受けました(現にあなたがたがそのように歩んでいるように)から、今後もさらにそのように歩み神を喜ばせ続けてください。²というのは、わたしたちが主イエスの權威においてあなたがたに何を命じたかをあなたがたは知っているからです。³あなたがたが聖くなること、まさにこのことは神の御心です。つまりあなたがたがみだらな行いを避け、⁴あなたがた各々が聖さと誉れをもって自分の器の保ち方をわきまえ、⁵神を知らない異邦人のような情欲におぼれず、⁶あなたがたの中でだれもそのようなことで兄弟を虐げたり騙したりすることのないことが。なぜならわたしたちが以前にもあなたがたに告げ、また厳しく戒めておいたように、主はこれら全てのことについて報いられるからです。⁷というのは、神がわたしたちを召されたのは、汚れた者とさせるためではなく、聖い者とさせるためです。⁸ですから、この戒めを拒む者は人を拒んでいるのではなく、御自分の聖霊をあなたがたに与えてくださる神を拒んでいるのです。

4: 1「最後に」これは文字通り「さて(ところで)」である。ここからパウロの實踐編が始まる。大半のパウロの手紙は教義編と實踐編に分けられるが、テサロニケ人への手紙第一ではそのようにすることが難しい。パウロはこの聖句を結句の直前の前置きとしてではなく、最後の主題を導入するために用いた(Ⅱコリント 13: 11、エペソ 6: 10、Ⅱテサロニケ 3: 1を参照)。

「兄弟たち」パウロはしばしばこの用語を新しい主題について論じ始めるために用いた(1: 4、2: 1と9節と14節と17節、3: 7、4: 1と10節と13節、5: 1と4節と12節と14節と25節と26節と27節、Ⅱテサロニケ 1: 3、2: 1と13節と15節、3: 1と6節と13節を参照)。

「求め、また勧めます」パウロはこれらの現在形能動態直説法動詞を継続する行為を強調するために、そして使徒として穏やかな口調で命令するために用いた(4: 2と11節、Ⅱテサロニケ 3: 4と6節と10節と12節を参照)。

「あなたがたはわたしたちから教えを受けました」これはアオリスト能動態直説法動詞であり、パウロが個人的に彼らと一緒にいたときを指している。これは「他者から伝統的な教えを受けること」を意味するギリシャ語の用語である(2: 13、Ⅰコリント 15: 1を参照)。パウロは彼らに救われ方(義認)だけでなく救われた者としての生き方(聖化)も教えた。

「どのように歩むべきかについて」これは現在形不定詞である。歩みは生活様式における信仰の聖書的比喻である(2: 12、エペソ 2: 10、4: 1と17節、5: 2と15節、コロサイ 1: 10、2: 6を参照)。キリスト教は元々「道」と呼ばれた(使徒行伝 9: 2、19: 9と23節、22: 4、24: 14と22節、18: 25-26を参照)。これは神に結ばれた生活様式における信仰について述べている。私達はまず悔い改めと信仰で応答し、それから従順と忍耐を続けなければならない。永遠の命は目に見える特徴なのだ。キリストにあっては毎日が神聖で特別であり、礼拝と神の働きのために用いられる。

「神を喜ばせる」神の御自分の子供達に対する御心は彼ら(神の子供達)が死後に行く天国ではなく、キリストに似た今の性質である(ローマ 8: 28-29、ガラテヤ 4: 19、エペソ 1: 4、2: 10、Ⅰペテロ 1: 15を参照)。

NASB	「(現にあなたがたがそのように歩んでいるように)」
NKJV	[省略]
NRSV	「(事実あなたがたがそうしているように)」
TEV	「もちろんこれがあなたがたのしてきた生活のありさまです」
NJB	「あなたがたが今まで送ってきた生活のように」

ギリシャ語の原典のある問題がこの聖句と関連がある。この聖句はギリシャ語原典 D^c、K、L、およびテクストゥス・レケプトゥス原典には見られない。この聖句は MSS_{gr}、A、B、D*、F、G およびシリヤ語訳聖書、コプト訳聖書、ウルガタ聖書には見られる。大昔の原典にはこの聖句が見られるのに後の時代の原典には見られないというのは驚くべきことである。このことはこの聖句が偶然抜け落ちたということの意味している。UBS⁴はその聖句の挿入を階級 A(確定)としている。

これは現在形直説法であり命令法である。これは多分、キリストに倣った彼らの生活様式につい

でのパウロの見解を主張する直説法動詞だろう(NASB、NKJV、TEV、JBを参照)。

「今後もさらにそのように歩み神を喜ばせ続けてください」彼らはよくやっていたが、パウロは彼らにさらなる聖さを求めた(10節を参照)。3:12の特別なトピック「豊かに満ち(*Perisseuo*)」を見よ。

4:2

NASB、NKJV、NRSV、NJB 「命じたか(命令)」

TEV 「教えたか(教え)」

これは階級に応じて権威のもとに下される命令という稀な軍事用語である(Iテモテ1:5と18節を参照)。

「主イエスの権威において」これらはパウロの個人的な考えではなくイエスの教えである。パウロの使徒としての権威はイエスの権威に基づいていた(8節を参照)。

4:3-6 これはギリシャ語訳聖書では一つの文である。

4:3「まさにこのことは神の御心です」冠詞がないので、これは救いの後の(ヨハネ6:40を参照)神の御心(エペソ5:17を参照)の一つである。

特別なトピック: 神の御心(Thelema)

ヨハネの福音書

- イエスは神の御心を行うために来られた(4:34、5:30、6:38を参照)
- 父なる神から御子を頂いた人々全てを終りの日によみがえらせるために(6:39を参照)
- 御子を信じる人々全て(6:29と40節を参照)
- 神の御心を行うことに関する祈りに応えられた(9:31とIヨハネ5:14を参照)

共観福音書群

- 神の御心を行うことは重要である(マタイ7:21を参照)
- 神の御心を行うことで人はイエスの兄弟姉妹となる(マタイ12:50、マルコ3:35を参照)
- 誰も滅びないことが神の御心である(マタイ18:14、Iテモテ2:4、IIペテロ3:9を参照)
- カルバリーはイエスに対する父なる神の御心であった(マタイ26:42、ルカ22:42を参照)

パウロの書簡群

- －全ての信者の成熟度と働き(ローマ 12: 1-2 を参照)
- －この悪い世から救い出された信者達(ガラテヤ 1: 4 を参照)
- －神の御心は救いの御計画であった(エペソ 1: 5 と 9 節と 11 節を参照)
- －聖霊に満たされた人生を体験し、また過ごす信者達(エペソ 5: 17-18 を参照)
- －神の知識に満たされた信者達(コロサイ 1: 9 を参照)
- －完全で完成なものとされた信者達(コロサイ 4: 12 を参照)
- －聖別された信者達(I テサロニケ 4: 3 を参照)
- －全てのものに感謝する信者達(I テサロニケ 5: 18 を参照)

ペテロの書簡群

- －義を行い(つまり世の権威に従い)愚かな者達を黙らせ、福音伝道の機会をつくりだす信者達(I ペテロ 2: 15 を参照)
- －苦しむ信者達(I ペテロ 3: 17 と 4: 19 を参照)
- －自己中心的ではない生活を送る信者達(I ペテロ 4: 2 を参照)

ヨハネの書簡群

- －永遠に生き続ける信者達(I ヨハネ 2: 17 を参照)
- －応えられた祈りに忠実に生きる信者達(I ヨハネ 5: 14 を参照)

「あなたがたが聖くなること」この語の語幹は「聖なる」や「聖なる者」と同じである。聖化は義認と同じように無償の瞬間的な恵みの業である(I コリント 1: 2 と 10 節、6: 11 を参照)。立場上、信徒はキリストと結ばれている。しかしそれは生活様式に特徴づけられる進歩的な聖化へと発展すべきものである(7 節、3: 13、ローマ 6: 19-23 を参照)。全ての信徒に対する神の御心は信徒がキリストのように聖くなることなのだ。私達は聖化と義認とを切り離して考えることはできないのだ。

特別なトピック: 聖化

罪人は悔い改めと信仰によってイエスに立ち返る時に瞬間的に義とされ聖になると新約聖書は主張している。これは彼らにとってキリストと結ばれた新たな地位である。キリストの義は彼らに帰属する(ローマ4章を参照)。彼らは義なる聖なる者と宣言された(裁き主としての神の御業)。

しかし新約聖書は信徒に聖くあり続けること、つまり聖化され続けることも求めている。それはイエス・キリストの成し遂げられた御業に基づく神学的地位であるとともに、日々の生活においてキリストのような態度をとり、キリストのような行いをするようにとの召しでもある。救いが無償の恵みであり全てを犠牲にする生活様式であるのと同じように、聖化もまたそのようなものなのである。

最初の応答

使徒行伝 20: 23、29: 40

キリストのようであり続けること

ローマ 6: 19

ローマ 15: 16	Ⅱコリント 7: 1
I コリント 1: 2-3、6: 11	エペソ 1: 4、2: 10
Ⅱテサロニケ 2: 13	I テサロニケ 3: 13、4: 3-4、7 節、 5: 23
ヘブル 2: 11、10: 10 と 14 節、13: 12	I テモテ 2: 15
I ペテロ 1: 12	Ⅱテモテ 2: 21
	ヘブル 12: 14
	I ペテロ 1: 15-16

「みだらな行いを避け」これは文字通り「姦淫」である。婚前および婚外の性行為は旧約聖書においてはそれぞれ別の語で言い表されたが、新約聖書においてはこの語はより広い意味で用いられた。「姦淫」は同性愛や獣姦(性的倒錯)を含む全ての不適切な性行為を意味した。偶像崇拜もしばしば性行為に含まれた(5: 22 を参照)。

4: 4

NASB、NKJV	「保ち方」
NRSV	「治め方」
TEV	「持ち方」
NJB	「用い方」

これは現在形中間態(異態)不定詞である。これは文字通り「得続ける(持つ)こと」である。

NASB、NKJV	「自分の器」
NRSV	「あなたがた自身の体」
TEV	「妻」
NJB	「自分の体」

これは「自分の体」あるいは「自分の妻」について述べているようだ。モプスエスティアのアウグスティヌスとユダヤ教の指導者達と I ペテロ 3: 7 とセプトウアギンタはこれを「妻」の意味で解釈している(TEV を参照)。しかし初期教会の教父達(つまり Tertullian と Chrysostom)はこれを「体」の意味で解釈した。この解釈は文脈に最もよく合っている(NRSV、JB、NIV を参照)。器はⅡコリント 4: 7 では「体」の意味で用いられている。

「聖さと誉れをもって」イエスを知ることは人の生き方を変える。信徒はしもべであり、他者の意志に従う。神の御心は、失なわれた世を変える御自身の権力を全ての信徒を用いて示すことである。クリスチャンの結婚は、墮落し混乱した世の有力な証人なのだ。

4: 5「情欲におぼれず」これは、墮落した人類が自身を性的に制御できないこと(偶像崇拜)について述べている。自制は聖霊に満たされ導かれる生活の特徴である(ガラテヤ 5: 23 を参照)。

「異邦人のような」これは文字通り「諸国民」である。しかし、ここではこれは非ユダヤの民ではなく、全ての未信者を指している。パウロの時代の異邦人の生活様式は極めて非道徳的であった。

「神を知らない(人々)」これは「自然の啓示」(詩篇 19: 1-6、ローマ1~2章を参照)を除外してはいるのではなく、人の知識(ガラテヤ 4: 8-9 を参照)について述べている。旧約聖書では「知る」は親密な個人的関係を意味する(創世記 4: 1、エレミヤ 1: 5 を参照)。異邦人は神から疎外されている(エペソ 2: 11-13、5: 8、コロサイ 1: 21 を参照)。

4: 6「虐げ(る)」この用語は「限度を超えた行いをする」という意味である。

「騙(す)」この用語は「利用する」という意味である。この用語は用語「貪欲」と関連がある。

「兄弟」これは他の信徒の家族との間に性的な自由さを保つことと関連がある(9 節を参照)。しかし用語「兄弟」はこの文脈中では他のいかなる人をも指している可能性があり、「隣り人」と類似した語である(12 節を参照)。

「そのようなことで」これは限定冠詞を含むので3~5節の内容(つまり性的純潔)を指している。この語自体は実務的な事柄を指しているので、比喩的に性的な事柄を指して用いられたようだ。というのはパウロが6 節で話題を変え経済的な事柄を論じているからである。私は前者が最も適していると思う。

「なぜなら主はこれら全てのことについて報いられるからです」これは両天秤にかけられた正義、つまり世俗の正義(ローマ 1: 24 と 26 節と 28 節を参照)と終末論的正義(マタイ 25: 31 以降を参照)を指している。YHWH は倫理的な神でいらっしゃる(ガラテヤ 6: 7 を参照)。6 節と 7 節前半と 8 節前半では信徒が聖い生活を送るべき3つの理由が述べられている。

「わたしたちが以前にもあなたがたに告げ、また厳しく戒めておいたように」ここでは性的純潔に関する事柄が強い口調で述べられている(ヘブル 13: 4 を参照)。ガラテヤ 1: 13 の特別なトピック「パウロの *Huper* 複合語の使用」を見よ。

4: 7「神が... 召された」神は救いと聖化の両方において常に主導権をとられる(ヨハネ 6: 44 と 65 節を参照)。

「この戒めを拒む者は人を拒んでいるのではなく、神を拒んでいるのです」これは文字通り「価値の低いものとして扱う」である。生活様式についての命じは福音の真理に沿って行なわれるとパウロは主張している。2: 13 と 3: 1-2 にあるように、これらは神の真理であり、パウロの真理ではない。

「御自分の聖霊をあなたがたに与えてくださる」これは現在形能動態分詞である。これは最初および継続中の霊的体験(使徒行伝 2: 38、Ⅱコリント 1: 22、5: 5、Ⅰヨハネ 3: 24 を参照)において私達の内に住まわれる聖霊について述べている。復活と同じく神の内在も神の約束である。三位一体の神は3名全員が救いの御業の全てに参加される。信徒の内には(1)聖霊[ローマ 8: 9-10 を参照](2)御子[マタイ 28: 20、コロサイ 1: 27 を参照](3)父なる神[ヨハネ 14: 23 を参照]が住まわれる。

NASB(改訂版)原典: 4: 9-12

⁹さて、兄弟愛については、あなたがたに書き送る必要はありません。なぜなら、あなたがた自身、互いに愛し合うように神から教えられているからです。¹⁰事実あなたがたはマケドニア全土にいる全ての兄弟たちに対してそれを実践しています。しかし、兄弟たち、わたしたちはあなたがたになおいっそうそれに励むよう勧めます。¹¹そして、わたしたちがあなたがたに命じておいたとおり、落ち着いた生活を志し、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい。¹²そうすれば外部の人々に対して品位を保つことができ、誰にも迷惑をかけずに済むでしょう。

4: 9

NASB	「兄弟愛」
NKJV	「兄弟愛」
NRSV	「兄弟愛と姉妹愛」
TEV	「あなたがたの信徒仲間への愛」
NJB	「愛すべきわたしたちの兄弟たち」

これはギリシャ語の用語 *philadelphia* である。これは契約上の相手への愛を指している(ローマ 12: 10、ヘブル 13: 1、Ⅰペテロ 1: 23、Ⅱペテロ 1: 7 を参照)。失なわれた人々(未信者)への愛についての対照的な記述が 12 節にある(3: 12 を参照)。

「あなたがたに書き送る必要はありません」これは彼らをほめてさらに努力するように励ます、パウロの巧みな方法である(10 節後半を参照)。これは教義に関連する事柄(つまりイエスの再来)ではなく実際の倫理的な生活様式を指している。

「なぜなら、あなたがた自身、神から教えられているからです」これは現在時制である。教えは聖

霊が内在される限り続き(5: 1、ヨハネ 14: 26、16: 13、Ⅱコリント9: 1、Ⅰヨハネ2: 20と27節を参照)、それは新しい契約のしるしである(エレミヤ31: 33-34を参照)。ギリシャ語の用語 *theodidaktoi* (新約聖書でこの箇所だけにだけ見られる)は「神は教えられた」(ヨハネ 6: 45)という意味であり、その目的は「互いに愛し合う」ことである(ヨハネ 13: 34、15: 12と17節、Ⅰヨハネ 2: 7-8、3: 11と23節、Ⅱヨハネ5章を参照)。

4: 10「あなたがたは実践しています」 これも継続中の行為を言い表わす現在時制の動詞である(17節を参照)。パウロは彼らの愛を賞賛したが、(1節で聖い生活についてそうしたように)さらに愛するように彼らに勧めた。

「なおいっそうそれに励むよう」 彼らはよくやっているが、さらにそうし続ける必要がある(1節を参照)。愛は神の象徴である。私達の愛は決して十分ではない(3: 12を参照)。3: 12の特別なトピック「豊かに満ち」を見よ。

4: 11

NASB	「落ち着いた生活を志し」
NKJV	「あなたがたも落ち着いた生活をしたいと望むこと」
NRSV	「落ち着いた生活を望み」
TEV	「落ち着いた生活を望み」
NJB	「兄弟たち、より進歩し続け落ち着いた生活を望むようにわたしたちはあなたがたに強く勧めます」

11節には命令形として用いられている4つの現在形不定詞があり、継続的な行為を命じている。多分これはイエスの再来に対する忍耐と、高ぶる期待の気持ちの正常化の勧めだろう(Ⅱテサロニケ 3: 10-12を参照)。「気持ちを整えておき信仰を保ち続け」、「準備し」ないというのがここでの新約聖書のメッセージである。

用語「志(こころざし、つまり望み)」は「名誉と考える」、つまり「望む」という意味である。この用語はローマ 15: 20とⅡコリント 5: 9にも用いられている。

「自分の手で働く」 パウロがこの手紙を書いた時期には、教会の一部の者達がイエスの再来についての彼の説教を誤解し、イエスの再来を待つために仕事をやめてしまったという歴史的背景があったことを覚えておきなさい(Ⅱテサロニケ 2: 1-4と3: 6-15を参照)。

ギリシャの文化では肉体労働は奴隷だけが行う仕事と信じられていた。しかしヘブルの文化では、全ての人は、もちろんラビも、自身を養う手段として職業が必要であった(使徒行伝 20: 35、Ⅰコリント 4: 17を参照)。

古代ギリシャのアンシアル体で書かれた原典の^{BC}、A、D(NRSV)では「自分」と「の」の間に「自

身」が付け加えられているが、一方^{R2}、B、D*ではそのような語の付け加えはない。UBS⁴はその語を付け加えるべきかどうかについては明確な見解を公表していない(階級 C)。

「わたしたちがあなたがたに命じておいたとおりに」これは命令を意味する強意の語である(Ⅱテサロニケ 3: 4 と 6 節と 10 節と 12 節を参照)。

4: 12

NASB、NRSV 「そうすれば外部の人々に対して品位を保つことができるでしょう」
NKJV 「そうすれば外部の人々に対して品位を保つことができるでしょう」
TEV 「このようにすれば信徒でない人々に尊敬されるようになるでしょう」
NJB 「そうすれば教会外の人々に尊敬に値すると見られます」

人々は見ている。私達は証人である(マタイ 5: 13-16、コロサイ 4: 5、Ⅰテモテ 3: 7、5: 14、6: 1、テトス 2: 5 を参照)。

NASB 「誰にも迷惑をかけずに済むでしょう」
NKJV 「そうすれば何かに不自由することはなくなるでしょう」
NRSV 「そうすれば誰にも頼らなくて済みます」
TEV 「そうすれば誰にも必要を満たしてもらわなくて済むでしょう」
NJB 「そうすれば誰にも頼らなくて済みます」

明らかに、働くことをやめたクリスチャン達は他のクリスチャン達が自分達の必要を満たしてくれることを期待していた。信徒は自分にとって神の家族であるクリスチャン達(Ⅱコリント 8~9章、エペソ 4: 28 を参照)の必要を満たしてあげるべきだが、働くことを拒むクリスチャン達の必要を満たしてあげるべきではないのだ。

特別なトピック: 富

I. 旧約聖書全体の見解

A. 神は万物を所有しておられる

1. 創世記 1~2章
2. Ⅰ歴代誌 29: 11
3. 詩篇 24: 1、50: 12、89: 11
4. イザヤ 66: 2

B. 人類は神の目的のための富のしもべである

1. 申命記 8: 11-20
2. レビ記 19: 9-18
3. ヨブ 31: 16-33

4. イザヤ 58: 6-10
 - C. 富は礼拝の一部である。
 1. 2通りの十分の一献納物
 - a. 民数記 18: 21-29、申命記 12: 6-7、14: 22-27
 - b. 申命記 14: 28-29、26: 12-15
 2. 箴言 3: 9
 - D. 富は契約への忠実さを表す神からの賜物であると見られている
 1. 申命記 27~28章
 2. 箴言 3: 10、8: 20-21、10: 22、15: 6
 - E. 他者の浪費した富に対する警告
 1. 箴言 21: 6
 2. エレミヤ 5: 26-29
 3. ホセア 12: 6-8
 4. ミカ 6: 9-12
 - F. 富は優先されない限りはそれ自体罪深いものではない
 1. 詩篇 52: 7、62: 10、73: 3-9
 2. 箴言 11: 28、23: 4-5、27: 24、28: 20-22
 3. ヨブ 31: 24-28
- II. 箴言の独特な見解
- A. 個人的な努力によって築かれる富
 1. 無精と怠惰はいましめられる—箴言 6: 6-11、10: 4-5 と 26 節、12: 24 と 27 節、13: 4、15 章 19 節、18: 9、19: 15 と 24 節、20: 4、21: 25、22: 13、24: 30-34、26: 13-16
 2. 仕事に励むことのすすめ—箴言 12: 11 と 14 節、13: 11
 - B. 義と悪の対比に用いられる飢餓と富む者達の対比—箴言 10: 1 以降、11: 27-28、13: 7、15: 16-17、28: 6 と 19~20 節
 - C. 知恵(神と神の御言葉を知り、この知識によって生きること)は富む者に勝る—箴言 3 章 13-15、8: 9-11 と 18~21 節、13: 18
 - D. 警告と忠告
 1. 警告
 - a. 隣り人の負債(担保)の保証人になることへの警告—箴言 6: 1-5、11: 15、17: 18、20 章 16 節、22: 26-27、27: 13
 - b. 不正な手段で富を築くことへの警告—箴言 1: 19、10: 2 と 15 節、11: 1、13: 11、16 章 11 節、20: 10 と 23 節、21: 6、22: 16 と 22 節、28: 8
 - c. 借用への警告—箴言 22: 7
 - d. 富のはかなさへの警告—箴言 23: 4-5

- e. 富は裁きの日には頼りにならない—箴言 11: 4
- f. 富には多くの友がいる—箴言 14: 20、19: 4

2. 忠告

- a. 気前よさへのすすめ—箴言 11: 24-26、14: 31、17: 5、19: 17、22: 9 と 22~23 節、23: 10-11、28: 27
- b. 義は富に勝る—箴言 16: 8、28: 6、8 節、20-22 節
- c. 多過ぎない必要への祈り—箴言 30: 7-9
- d. 貧しい人に与えることは神に与えること—箴言 14: 31

Ⅲ. 新約聖書の見解

A. イエス

- 1. 富は神と霊的な事柄ではなく自分自身と俗世の事柄に依り頼むようにという誘惑の典型である
 - a. マタイ 6: 24、13: 22、19: 23
 - b. マルコ 10: 23-31
 - c. ルカ 12: 15-21、33~34 節
 - d. 黙示録 3: 17-19
- 2. 神は私達の実際的必要を満たされる
 - a. マタイ 6: 19-24
 - b. ルカ 12: 29-32
- 3. 種蒔きは刈り取りと関連がある(霊的および肉の)
 - a. マルコ 4: 24
 - b. ルカ 6: 36-38
 - c. マタイ 6: 14、18: 35
- 4. 悔い改めは富に影響する
 - a. ルカ 19: 2-10
 - b. レビ記 5: 16
- 5. 経済的搾取はいましめられる
 - a. マタイ 23: 25
 - b. マルコ 12: 38-40
- 6. 終りの時の裁きは私達の富の使い方と関連がある—マタイ 25: 31-46

B. パウロ

- 1. 箴言のような実際の見解(仕事)
 - a. エペソ 4: 28
 - b. I テサロニケ 4: 11-12
 - c. II テサロニケ 3: 8、11~12 節

- d. I テモテ 5: 8
- 2. イエスのような霊的見解(物事ははかないのだから、今あるものに満足しなさい)
 - a. I テモテ 6: 6-10(満足)
 - b. ピリピ^o 4: 11-12(満足)
 - c. ヘブル 13: 5(満足)
 - d. I テモテ 6: 17-19(気前のよさと、富ではなく神に信頼すること)
 - e. I コリント 7: 30-31(物事のはかなさ)

IV. 結論

- A. 富に関する組織的な聖書神学はない。
- B. この主題を明確に論じた聖書箇所はないので、この主題に関する知見は様々な聖書箇所から少しずつ集められたに違いない。これら各々の聖書箇所を自分の主観で解釈しないように気をつけなさい。
- C. 賢者達によって書かれた箴言には聖書の他のタイプの書よりも多様な見解が見られる。箴言は実践的で個人指向である。箴言は聖書の他の書と釣り合いを保ち、また保たなければならぬ(エレミヤ 18: 18 を参照)。
- D. 私達は聖書を依り処として富への見方と富に関する実際的な事柄を吟味する必要がある。私達が資本主義や共産主義を依り処とするなら物事の優先順位を取り違えることになる。富を得る理由と手段は蓄える富の量よりも重要な問題である。
- E. 富の蓄積は真の礼拝と責任ある奉仕と釣り合いを保たなければならぬ(Ⅱコリント 8～9章を参照)。

NASB(改訂版)原典: 4: 13-18

¹³兄弟たち、すでに眠りについた人々については、希望を持たない他の人々と同じように嘆き悲しむことのないように、あなたがたに知っておいてほしいことがあります。¹⁴イエスが死んでよみがえられたとわたしたちが信じるならば、神は同じように、イエスを信じて眠りについた人々もイエスと一緒に導き出してください。¹⁵主の御言葉によってあなたがたに伝えます。主が来られる日まで生き残るわたしたちがすでに眠りについた人々より先になることはありません。¹⁶つまり、合図の号令があり、大天使の声がして、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降ってこられます。するとまずイエスを信じて眠りについた人々がよみがえります。¹⁷それから生き残っているわたしたちが、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることとなります。¹⁸ですから、これらの言葉によって互いに励まし合いなさい。

4: 13～5: 11 イエスの再来についてのこの文脈は 5: 11 まで続く。ここでの論点は霊的指導であることを思い出そう。ここでは教義だけでなく、神に倣った生活様式についても述べられているのだ。

「兄弟たち、あなたがたに知っておいてほしいことがあります」これはパウロの著作物によく見られる成句である(ローマ 1: 13、11: 25、I コリント 10: 1、12: 1、II コリント 1: 8 を参照)。通常この成句は、イエスが用いられた「アーメン、アーメン」と同様に、重要なことを述べる際の前置きとなる。クリスチャンの真理についての知識(教義と世界観)のおかげで信徒は墮落した世にあってもゆるがないで生活を送ることができる。

「については」 テモテはコリントの教会からのイエスの再来についての質問をパウロに伝えたようだ。

1. すでに死んだ人々を信徒はどのような人々ととらえればよいのか。彼らは終りの時の出来事に関係があるのか。
2. 信徒はイエスの再来に驚き、終りの時の出来事に対して心の準備が整わないままになっているのか。

パウロはしばしばこの前置詞「について」をコリントの教会の質問に対する返答を行うにあたって用いている(I コリント 7: 1 と 25 節、8: 1、12: 1、I テサロニケ 5: 1 を参照)。

NASB 「すでに眠りについた人々」

NKJV 「すでに眠りについた人々」

NRSV、TEV、NJB 「死んだ人々」

ギリシャ語の原典でのこの聖句の表現様式は多様である:(1)アンシアル原典⁸、A、Bには現在分詞がある(2)原典 D、F、G、K、Lには完了形分詞がある。書記は多分、マタイ 27: 52 と I コリント 15: 20 における用法(Metzger の著書の 632 ページを参照)に従って元の現在形を完了形に変えたのだろう。

イエスは死に対して旧約聖書中で用いられている婉曲語「眠り」を用いられた(BDB1011。II サムエル 7: 12、I 列王記 22: 40、新約聖書のマタイ 27: 52、ヨハネ 11: 11-13、使徒行伝 7: 60、I コリント 7: 39、11: 30、15: 18、II ペテロ 3: 4 を参照)。英語の用語“cemetery”はこのギリシャ語の用語に由来している。

これは、信徒がイエスの復活される日を無意識のうちに待つ「魂の眠り」の教義を指しているのではない。新約聖書は、イエスの復活される日、つまり再来の日までの意識的な、しかし限られた交わりについて述べている(ルカ 16: 19-31、23: 43、II コリント 5: 8、ピリピ 1: 23 を参照)。

「希望を持たない他の人々と同じように嘆き悲しむことのないように」 動詞「嘆き悲しむ」は現在形受動態仮定法である(エペソ 2: 12 を参照)。私達信徒は福音の真理を知っているのだから、肉体の死を嘆き悲しみ続けるはいけない。

1. イエスは私達のために死なれた。
2. イエスを蘇らせた聖霊は私達を蘇らせてくださる。

3. イエスは私達のために戻ってこられる。
4. 死んだ人々はすでにイエスと一緒にいる。

異教徒(「他の人々」、5: 16 を参照)は死の際の心の平安にとまどった。「ああ、われわれがより確かに生きるための拠り所となるような神の言葉があればよいのに。」とソクラテスは言った。ガラテヤ 5: 5 の特別なトピック「希望」を見よ。

4: 14「(. . .)ならば」これは著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定した第一種条件文である。

「わたしたちが信じる」これは人類がキリストに信仰をおくという意味の重要な神学的動詞(現在形能動態直説法)である。これはギリシャ語の動詞 *pisteuo* であり、英語では“faith”、“trust”、“believe”と訳されている。ガラテヤ 3: 6 の特別なトピック「信条」を見よ。この個人的な信頼は新約聖書では一般的なギリシャ語の時制全てを用いて表現されている。

1. アオリスト(過去の単純な行為)、使徒行伝 15: 11、ローマ 8: 24、Ⅱテモテ 1: 9、テトス 3: 5
2. 現在形(進行中の過程)、Ⅰコリント 1: 18、15: 2、Ⅱコリント 2: 15、Ⅰテサロニケ 4: 14
3. 完了形(完結しようとしていてあるがままだり続けている過去の行為)、エペソ 2: 5 と 8 節
4. 未来(動詞の時制つまり文脈において)、ローマ 5: 9 と 10 節、10: 9、13: 11、Ⅰコリント 3: 15、ピリピ 1: 28、Ⅰテサロニケ 5: 8-9、ヘブル 1: 14、9: 28

信じる決意と生活様式を通じた弟子化はいつの日にか永遠の体と三位一体の神との親しい交わりとして完成することになる(Ⅰヨハネ 3: 2)。選びから義認、聖化、栄光の享受に至るこの神学的発達にはローマ 8: 28-29 に見られる。

「と(いうことを)」この *hoti* 節は福音の教義について述べている。特別なトピック「信仰」の E. の 5. を見よ。

「イエスが死んでよみがえられた」これらはともに歴史的事実を反映するアオリスト能動態直説法動詞である。これらの福音の真理、つまり(1)イエスの身代わりの死による聖別[イザヤ53章、マルコ 10: 45、Ⅱコリント 5: 21 を参照](2)体の、肉体の、永遠の復活[1: 10、Ⅰコリント15章]は信徒の希望の源である。

「神はイエスと一緒に導き出してくださいませ」聖句中の動詞(*ago*)がとても広いセム語領域を網羅している(連れ出す、導く、連れ去る、誘い出す、行く、去る、など)ので、この聖句の解釈は難しい。それは死者が天でイエスと一緒にいるという意味なのか、それともイエスが来られるときに死者が蘇ることになっているという意味なのか。

文脈中の代名詞は再来されるときにイエスを指している。テサロニケの信徒達はイエスの再来

についてのパウロの説教を理解していなかった。彼らは自分達の教会のすでに死んだ人々が終りの時の出来事に参加するのかどうかを知りたがった。これはパウロの肯定的な応答である。彼ら(すでに死んだテサロニケの教会員達)は終りの時の出来事に参加するだけでなく、最初に新しい体を与えられ、天の群衆の中でイエスと一緒にいることになる。

新約聖書には信徒の死と復活の日の間の状態が明記されていない。この聖句をⅡコリント 5: 6 および 8 節と比較すると、論理的に靈魂の肉体離脱期を仮定する必要がある。信徒は主とともにあるが、まだ復活の体を得ていないのだ。

4: 15「主の御言葉によってあなたがたに伝えます」 パウロは自分の個人的な意見を述べずにイエスの教え(4: 2 を参照)について述べた。しかしこのイエスの特別な教えは福音書群には記されていない。それが以下に示すようなことを指しているかどうかは明らかではない。

1. クリスチャンの口述伝承(使徒行伝 20: 35 を参照)
2. マタイ24章、マルコ13章、ルカ21章にあるようなイエスの説教
3. ガラテヤ 1: 17 にあるような、アラビア滞在中のパウロへの個人的啓示の一部
4. Ⅱコリント 12: 1 以降にあるような、その後の直接の啓示

この聖句が意味しているのは、パウロは自分の受けたものについて述べていること、また彼の終末観(終りの時に対する見方)は彼独自のものではないこと、そして彼は自分の受けたものを他の信徒達に渡そうとしているということである。問題は私達現代人がこの啓示の源とそれがどのように広まっていったかを知らないことである。

NASB、NKJV 「主が来られる日まで生き残るわたしたち」

NRSV 「主が来られる日まで生き残るわたしたち」

TEV 「主が来られる日に生きているわたしたち」

NJB 「主が来られる日まで生き残る」

代名詞「わたしたち」が用いられているのは(1)パウロは自分が生きている間にイエスが再来されることを期待していた、あるいは(2)編集の都合上「わたしたち」を用いた、ことを意味しているのだろう。2: 19 と 3: 13 の特別なトピック「イエスの再来」を見よ。イエスの「いつでも起こり得る」再来に対するこの期待は全世代の信徒の特権であるが、実際に経験できるのはただ一世代である。これはパウロが、どの世代がイエスの再来を経験できるかを靈感によって正確に答えることができなかったという意味ではない。

これはまた単なる文章技法なのかもしれない。というのは、テサロニケ人への手紙第二でパウロが、イエスがマタイ24章(および同じことの言い換え)で言われ、さらにペテロがⅡペテロ3章で言っているように、イエスの再来の時はまだ来ていないことを主張しているからである。

特別なトピック: いつでも起こり得る再臨 対 まだ起こっていない再臨(新約聖書の矛盾)

- A. 新約聖書の終末論的な書は、現状を通して終わりの時を見る旧約聖書の預言的洞察を反映している。
- B. マタイ24章、マルコ13章、ルカ21章は同時にいくつかの問題を取り扱っているので解釈がとて難しい。
 - 1. 神殿はいつ壊されるのか。
 - 2. メシアの再来のしるしは何か。
 - 3. この世はいつ終わるのか(マタイ 24: 3 を参照)。
- C. 新約聖書の終末論的な書のジャンルの大半は、意図的な曖昧さを含み高度に象徴的な、黙示的で預言的な言葉の組み合わせである。
- D. 新約聖書のいくつかの箇所(マタイ24章、マルコ13章、ルカ17章と21章、テサロニケ人への手紙第一と第二、ヨハネの黙示録を参照)はイエスの再来を取り扱っている。これらの箇所が強調しているのは以下のことである:
 - 1. 再来の正確な時期は未知だが、再来されるのは確かである。
 - 2. 私達は再来の大体の時期は分かるが正確な時期は分からない。
 - 3. 再来は突然思いがけず起こることになっている。
 - 4. 私達は与えられた課題についてよく祈り、準備し、そして忠実でなければならない。
- E. (1)まだ起こっていない再来[ルカ 12: 40 と 46 節、21: 36、マタイ 24: 27 と 44 節を参照]と(2)歴史上の出来事には起こらなければならないことがあるという事実、の間には神学上の逆説的な緊張がある。
- F. 新約聖書は再来の前にいくつかの出来事が起こることになっていると述べている。
 - 1. 全世界に福音が宣べ伝えられる(マタイ 24: 14、マルコ 13: 10 を参照)
 - 2. 大規模な背信(マタイ 24: 10-13、21 節、I テモテ 4: 1、II テモテ 3: 1 以降、II テサロニケ 2: 3 を参照)
 - 3. 「罪ある者」の啓示(ダニエル 7: 23-26、9: 24-27、II テサロニケ 2: 3 を参照)
 - 4. 抑えているもの(者)が取り除かれる(II テサロニケ 2: 6-7 を参照)
 - 5. ユダヤ人のリバイバル(ゼカリヤ 12: 10、ローマ11章を参照)
- G. ルカ 17: 26-37 と同じ内容の記述はマルコの福音書にはない。共観福音書の中でこれと同じ内容の記述はマタイ 24: 37-44 に見られる。

NASB	「先になることはありません」
NKJV、NRSV	「先になることは決してありません」
TEV	「先になることはありません」
NJB	「先になることは決してありません」

これは「決して—いいえ、決して」という強い二重否定である。死んだそれらの聖なる者達も、主イエスの再来の時に生きている信徒たちも、終りの時の出来事全てに終始参加することになる。KJV中の「避ける」では誤解を生む。この1611年編の英訳聖書中のその語は「先になる」という意味である。人は誰も主イエスの再来を避けることはできない。

4: 16「主御自身」 ギリシャ語訳聖書は、代理者ではなくイエス御本人がこの世に戻ってこられることを強調している(ヨハネ 5: 25-28 を参照)。

「天から降ってこられます」 イエスが信仰の家族を救うために父なる神のおられる所を去られるのはそれで2回目となる(ヨハネ 14: 2-3 を参照)。

NASB	「合図の号令があり、大天使の声がして、神のラツパが鳴り響くと」
NKJV、NRSV	「合図の号令があり、大天使の声がして、神のラツパが鳴り響くと」
TEV	「合図の号令があり、大天使の声がして、神のラツパが鳴り響きます」
NJB	「神のラツパが鳴り響き、大天使の声で合図の号令があります」

ここにも、どれくらいの天の人々がこれら3つの同時発生する出来事に関係しているのかが問題となる。その時には合図の号令(この語は新約聖書の中でここにだけ見られる)があり、大天使の声がして、神のラツパが鳴り響く。JBには大天使が3つの出来事全てを行い、それからイエスが天から降ってこられると明記されている。他の訳の聖書によれば、まず「声がして」、イエスから「号令」があり、それから大天使のラツパを鳴らす合図の音がする。

天はこの出来事に備えている—それは曆に書いてある。どなたが来られることになっているのかがわかっているために、いつどのようにしてこれらの出来事が起こるのかということは重要ではなくなる。イエスは御自分の民を救うために再来されるのだ。

「大天使」 冠詞がないので、この語は「一人の大天使」と解釈するべきである。ダニエル 10: 13 では複数の意味だが、聖書ではただ一人、つまりミカエルを指す(ユダ9章と黙示録 12: 7 を参照)。彼はイスラエルの国家天使なのだ。

「ラツパ」 ラツパを鳴らすことは東方では文化的に王の出座を知らせる方法であった(ヘブル 12 章 18-19 節を参照)。しかし、それには他にも意味がある。

1. 神の裁き、黙示録 8: 2、11: 15-19
2. 復活、I コリント 15: 52
3. 天使達によって選ばれた者の集まり、マタイ 24: 31

旧約聖書においてはこれは宗教行事や軍事行為においてとても重要な伝達手段であった(出エジプト 19: 16、イザヤ 27: 13、ヨエル 2: 1、ゼパニヤ 9: 14、I コリント 15: 52 を参照)。

旧約聖書には2種類のラツパ、つまり(1)銀のラツパ(民数記 10: 2、8~10 節、31: 6 を参照)と(2) *shopher* と呼ばれる、雄羊が成長の途上で脱ぎ捨てた角(出エジプト 19: 16 と 19 節、20: 18、レビ記 25: 9、ヨシヤ6章を参照)が登場する。

黙示録 4: 1 で天使の音がラツパの音と呼ばれているので、ラツパ3種類の音全て(号令、声、ラツパの音)は天使の声を指しているのかもしれない(黙示録 1: 10 を参照)。

特別なトピック: イスラエルで用いられた角笛

ヘブル語には角笛とラツパに関連する4つの語がある。

1. 「雄羊の角」(BDB901)—楽器に転用された。ヨシヤ 6: 5 を参照。これと同じ語は創世記 22: 13 でアブラハムがイサクの身代わりに生贄とした、自分の角が木の茂みにひっかかってもがいていた雄羊を指して用いられた。
2. 「ラツパ」(BDB1051)—野生の羊(アイベックス[湾曲した角のある野生のヤギ])を指すアッシリア語の用語に由来。これは出エジプト 19: 16 と 19 節にあるようにシナイ山とホレブ山で用いられた角である。1.と2.の内容はヨシヤ 6: 5 と同じである。この角は礼拝の時間と戦いの時間を知らせるのに用いられた(どちらもジェリコーと呼ばれた。6: 4 を参照)。
3. 「雄羊の角」(BDB385)—雄羊を指すフェニキア語の用語に由来(6: 4 と 6 節と 8 節と 13 節を参照)。この語はヨベルの年も表している(レビ記 25: 13 と 28 節と 40 節と 50 節と 52 節と 54 節、27: 17 と 18 節と 23 節と 24 節を参照)。

(上記のこれら3語は全てははっきりと区別されてはいないので互換性がある。ミシュナ [RH3.2] ではあらゆる動物—羊、ヤギ、アンテロープ、ただし牛は除く—の角を指して用いられている。)

4. 「ラツパ」(BDB348)—多分、動詞「伸ばす」に由来し、まっすぐな骨(動物の角のような湾曲がないもの)を意味する。これらは銀で作られた(形状はエジプトのものに似ている)。これらの用途は以下の通りである。
 - a. 礼拝の儀式用(民数記 10: 2、8 節、10 節を参照)
 - b. 軍事用(民数記 10: 9、31: 6、ホセア 5: 8、エズラ 3: 10、ネヘミヤ 12: 35 と 41 節を参照)
 - c. 王室用(Ⅱ列王記 11: 14 を参照)

これらの金属の角笛の一つはローマのテトス門に描かれている。また、Josephus も自著 *Antiquity* の3章12節の6.でこれについて記している。

「するとまずイエスを信じて眠りについた人々がよみがえります」この聖句は死者が死と復活の日の間に向かう場所について誤解を生じさせる。この節は彼ら(死者)がまだ墓にいることを意味している(マタイ 27: 52-53 を参照)。しかしⅡコリント 5: 6 と 8 節は彼らが主と一緒にいることを意味している。肉体離脱状態を仮定すればこの誤解を解けるかもしれない。肉体は墓にいて、靈魂が主のもとへ行き、主と一緒にいる。ここには多くの未回答の疑問がある。聖書はこの主題についての明確な教えを記していない。William Hendricksen の著書 *The Bible On the Life Hereafter* を

見よ。

外国語訳聖書の大半は、まるで聖なる者たちが神つまりイエスと一緒にいてイエスとともにこの世に戻ってくるかのように訳している(NASBを参照)。他にも、TEVは「イエスを信じて眠りについた人々がまず生きかえります」と訳している。

4: 17 「引き上げられます」 私達の知る神学的概念「歓喜」はこの動詞に起源がある。「歓喜」はここにあるギリシャ語の動詞(*harpazo* —未来形受動態直説法)と同じ意味のラテン語の用語で、強制的に「(人)連れ去る」(ヨハネ 6: 15、10: 12 と 28~29 節を参照)という意味である。この出来事は I コリント 15: 51-52 にも述べられている。

多くの人々はこの終りの時の出来事を受け入れていない。キリストの地上での千年統治の前の信徒の秘かな喜び(マタイ 24: 40-42 を参照)を期待する人々もいる。7年の受難の時期(ダニエル 7: 25 と 9: 27 を参照)はしばしばこれと関連がある。神学者達の中には、この7年の受難の時期の前後および最中を喜ぶ人々もいる。これらの終りの時の出来事の順番と本質は全く不明瞭である。教条主義はここでは明らかに役に立たない。

信徒は空中で主と出会うことになっている。というのは、新訳聖書では空中はサタンの王国と考えられており(エペソ 2: 2 を参照)、またギリシャ人は下空(大気)は清くなく不浄な霊の棲む所と考えていたからである。信徒はサタンの王国のただ中で主と再会し、サタンの王国が完全に転覆するのを見ることになるのだ。

「彼らと一緒に」 この教会はイエスの再来についてのパウロの説教を誤解していた。パウロはこれらの疑問に答えるためにテサロニケ人への手紙第一と第二を書いた。この教会は(1)死んだクリスチャンは終りの時の出来事に参加するのか(2)死んだ信徒と生きている信徒はいつ再会するのか、を知りたがっていた。この主題は II テサロニケ 2: 1 で取り上げられる。

「雲に包まれて」 雲は伝統的に神の移動手段である(ダニエル 7: 13、マタイ 24: 30、26: 64、使徒行伝 1: 9-11、黙示録 1: 7 を参照)。そのイメージは、神が御自分の民の中に臨在されることを象徴づける、旧約聖書の出エジプト記のシェキナ雲を思い出させる(出エジプト記 13: 21 と 22 節、14: 19 と 20 節と 24 節、16: 10、19: 9 と 16 節、24: 15 と 16 節と 18 節、34: 5、40: 34-38 を参照)。

特別なトピック: 雲に乗って来られる

この聖句は明らかにイエスの再来について述べている。この、イエスが雲に乗って来られることはとても重要な終末論的しるしである。この聖句は旧約聖書では3つの互いに異なる意味で用いられている。

1. 神の実体的御臨在、つまり栄光のシェキナ雲を見せるため(出エジプト記 13: 21、16: 10、民数記 11: 25 を参照)

2. 人が御自分のお姿を見て死ぬことがないように、神が御自分の聖さを隠されるため(出エジプト記 33: 20、イザヤ 6: 5 を参照)

3. 神が移動されるため(イザヤ 19: 1 を参照)

ダニエル 7: 13 では雲は人となられた神メシアの乗り物の意味で用いられている。ダニエル書のこの預言は新約聖書で30回以上も暗示されている。メシアと天の雲のこれと同じ関係はマタイ 24 章 30 節、マルコ 13: 26、14: 62、ルカ 21: 27、使徒行伝 1: 9 と 11 節、I テサロニケ 4: 17 に見られる。

「**出会うために**」これはギリシャ語の用語 *apansis* であり、誰かに出会ってそれから一緒にいるという意味で用いられている(マタイ 25: 6、使徒行伝 28: 15 を参照)。信徒は主と出会い、新たに造られた地に主と一緒に戻ることになるのだ。

「**空中で**」空中はサタンとその部下の支配する場所である(エペソ 2: 2 を参照)。私達はそこで主と出会い、完全な勝利を見ることになっている。空中で信徒がキリストと出会うとき、II ペテロ 3: 10 の浄めと一新の預言の通りに天は回復されたエデンの園と表現されると私は思う(黙示録 21～22 章と比較して創世記 1～2 章を参照)。

「**わたしたちはいつまでも主と共にいることになります**」これ以上何も言うことはない(詩篇 23: 6 を参照)。イエスの再来はテサロニケ人への手紙第一で繰り返し述べられている(1: 10、2: 19、3 章 13 節、4: 13-18、5: 1-11 を参照)。パウロがこの書(テサロニケ人への手紙第一)とテサロニケ人への手紙第二で述べているのは千年統治ではなく、ダニエル 7: 13-14 で述べられているような永久統治である(研究者の中には I コリント 15: 25 が地上での統治について述べていると考える者もいる)ことに注意せよ。

パウロが言いたいのはイエスが再来されるときに永遠の王国が始まるということである。終りの時の出来事のこれ以外の全てが記されているのは I コリント 15: 50-58 だけではない。パウロが言いたいのはイエスがこの地にもどられるということだけではない。Robert G. Clouses 著 *The Meaning of the Millennium* では4大千年紀が様々な著者によって明記されている。ある千年紀への応答に関して George E. Ladd はこのような驚くべきことを言っている「いかなる前千年紀に対する考え方についても最大の障壁となるのは、新約聖書の大部分でイエスの *parousia* によって救いが完結するという事実である」(189～190 ページ)。これはまさしく、パウロがここで飾らない言葉で主張していることである。

4: 18 この節は 13 節と同様にパウロがこれらの終りの時の出来事について述べる目的を示している。信徒達は死んだ仲間の信徒達にとっても関心があった。主の再来という素晴らしい出来事は彼らに関係があるのか。パウロは彼らに、生きている者も死んだ者も、全ての信徒が必ず主の再

来に関与すると明言した。この節が説教のためではなく(I コリント 15: 58 がそうであるように)主に靈的指導のために書かれたことに注意せよ。この節がどのように終末論的な節と調和するかは明らかではない。

「励ます」これは現在形能動態直説法動詞である。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 主の再来について聖書の中で最も詳しく議論している箇所はどこか。
2. パウロがこの章を書いた理由は何か。
3. 歓喜とは何か。誰が関係するのか。それはいつ起こることになっているのか。

テサロニケ人への第一の手紙5章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
主の再来	主の日	主の再来に関する質問	主の再来に備える	主の再来に気づき見極める
(4: 13~5: 11)		(4: 13~5: 11)		
5: 1-11	5: 1-11	5: 1-11	5: 1-11	5: 1-3
				5: 4-11
最後の勧めと祝福	いろいろな勧め	結語としての勧め	最後の勧めと祝福	
5: 12-15	5: 12-22	5: 12-22	5: 12-13	5: 12-13 前半
				5: 13 後半
			5: 14-15	5: 14-18
5: 16-22			5: 16-18	11: 16-17
			5: 19-22	5: 19-22
	祝福と助言			結語としての祈りと別れの言葉
5: 23-24	5: 23-28	5: 23-24	5: 23-24	5: 23-24
5: 25		5: 25	5: 25	5: 25
5: 26-27		5: 26-27	5: 25-26	5: 26-27
			5: 27	
5: 28		5: 28	5: 28	5: 28

第三読書サイクル(viiページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上に挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

1～22 節の文脈の洞察

- A. 1～11 節は 4: 13-18 と密接な関係がある。4: 18 と 5: 11 の結語が似ていることに注意せよ。これらの文は主として霊的指導のため書かれている。それらの文脈上の目的は、確かに(他の箇所では)パウロがそうしているが、教義を解説することではなく、安心させる(励ます)ことである。
- B. 主の再来およびクリスチャンが差し迫った主の再来に備えてどのように生きるべきかについての議論はここでも続いている。
- C. 13～22 節には、終りの時に備えての生活様式に関する、信徒への継続的な要求を意味する 15 個の現在形命令法動詞がある。

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 5: 1-11

¹兄弟たち、その時と時代についてあなたがたに書く必要はありません。²というのは、まさに盗人が夜にやって来るのと同じように主の日は来るということを、あなたがた自身がよく知っているからです。³人々が「平和で安全だ」と言っているそのときに、妊婦に陣痛が来るのと同じように破滅は突然やって来るのです。そして、人々は決してそれから逃れられません。⁴しかし兄弟たち、あなたがたは闇の中にいませんから、主の日は盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。⁵なぜならあなたがたは光の子であり昼の子であるからです。わたしたちは夜の子でもなければ闇の子でもありません。⁶ですから他の人々のように眠るのではなく、目を覚まして節度ある生活をしましょう。⁷というのは、眠る者は夜眠り、酒に酔う者は夜酔うからです。⁸しかしわたしたちは昼の子ですから、信仰と愛の胸当てを着け、救いの希望を兜としてかぶり、節度ある生活をしましょう。⁹神はわたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストを通して救いを得るように定められたのです。¹⁰主はわたしたちのために死なれましたが、それはわたしたちが目覚めていても眠っていても主とともに生きるようになるためです。¹¹ですからあなたがたは、今現実にそうしているように、互いに励まし合い高め合いなさい。

5: 1「について」主の再来という主題についての議論はここでも続いているが、その出来事の新たな一面が注目され始めている。つまり未信者への裁きである。

NASB	「その時と時代」
NKJV、NRSV	「その時と時期」
TEV	「その時と時期」
NJB	「時と時期」

信徒は時期を特定することはできないが(マタイ 24: 36 を参照)、歴史の流れを認識する必要がある(使徒行伝 1: 7、マタイ 24: 32-33 を参照)。「時」と訳されているギリシャ語の用語 *chronon* は「どのくらい(期間)」という疑問に答える。その語は過ぎ去った時の長さについて述べている。英語の用語「年代記」はこのギリシャ語の語幹に由来している。「時代」と訳されている用語 *Kairon* は「いつ」という疑問に答える。その語は特定の出来事について述べている。

「兄弟たち」これはパウロが新しい話題に移るときにしばしば用いた語である(4: 1 を見よ)。

「あなたがたに書く必要はありません」パウロは主の再来について彼らにより詳しく話すことができないでいた。彼のテサロニケ滞在はほんのわずかな間であったが、その間に彼がこの主題について数回の説教を行ったに違いないということをおぼえておきなさい。この聖句が意味しているのは、テサロニケの信徒達が終りの時に関する事柄を全て完全に理解していたということではなく、聖霊が彼らを導かれて、その理解に必要な事柄(ヨハネ 14: 26、16: 13、Iヨハネ 2: 20 と 27 節を参照)、特に(1)福音と(2)クリスチャン生活に関する真理を教えられたということである。

もうひとつ考えられることは、この聖句がエレミヤ 31: 31-34 の、特に 33~34 節の新しい契約について述べているということである。義の新しい世では信徒が神と親密で個人的な関係を持つ。神が聖霊によって信徒の心に御言葉を書かれるので、彼らには教師が必要ないことになる。

5: 2「主の日」神つまり救世主が歴史に登場されて義の新しい世を始められるという旧約聖書の聖句(ヨエル 1: 15、2: 11 と 31 節、アモス 5: 18、イザヤ 2: 12 を参照)とこれは一致している。旧約聖書では神のお出ましは祝福のためでもあり裁きのためでもありうる。信徒にとってそれは救いの最高潮となるが、未信者にとっては裁きの完了となるのだ。

(救い主であり裁き主でもいらっしゃる)イエスが人類と出会う特別な日はパウロの著作物の中で様々な表現によって終末論として強調されている。

1. 「主イエス・キリストの日」(Iコリント 1: 8 を参照)
2. 「主の日」(Iコリント 5: 5、Iテサロニケ 5: 2、IIテサロニケ 2: 2 を参照)
3. 「主イエスの日」(IIコリント 1: 14 を参照)
4. 「イエス・キリストの日」(ピリピ 1: 6 を参照)
5. 「キリストの日」(ピリピ 1: 10、2: 16 を参照)
6. 「人の子の日」(ルカ 17: 24 を参照)
7. 「人の子が現われる日」(ルカ 17: 30 を参照)

8. 「わたしたちの主イエス・キリストの啓示」(I コリント 1: 7 を参照)

9. 「主イエスが天から現われるとき」(II テサロニケ 1: 7 を参照)

10. 「主イエスが来られて臨在されるときに」(I テサロニケ 2: 19 を参照)

旧約聖書では著者達は2つの世、つまり悪の世と来るべき義の世、言い換えれば聖霊の世を見た。神は御子(救世主)を通して歴史に介入されてこの新しい世を始められることになっている。この出来事は「主の日」として知られていた。新約聖書の著者達がこれをキリストの来られる日とみなしていたことに注意しなさい。イエスの1回目の御臨在、つまり受肉は旧約聖書中の多くの箇所でも預言されていた。ユダヤ人は人の姿となられた神をではなく、ただ神の御介入を期待した。メシアの2度の御臨在、1度目は苦しむしもべと救い主としての御臨在で2度目は裁き人と主としての御臨在は旧約聖書の民には明らかにされなかった。ガラテヤ 1: 4 の特別なトピック「2つの世」を見よ。

「まさに盗人が夜にやって来るのと同じように来る」 これは未来時制として用いられている現在時制である。この「いつでも起こり得る」再来は新約聖書中で繰り返し議論されているテーマである(マタイ 24: 42-44、25: 13、ルカ 12: 40 と 45 節、21: 34-36、II ペテロ 3: 10、黙示録 3: 3、16: 15 を参照)。4: 15 の特別なトピックを見よ。

ユダヤ人の中には、メシアは過ぎ越しの祭りの期間中の深夜に、出エジプト記に登場する死の天使のように来られるという伝説がある。

「人々が『平和で安全だ』と言っているそのときに」 これはエレミヤの時代の偽預言者達のメッセージであった(エレミヤ 6: 14、8: 11 と 28 節を参照)。それによれば、人の生活と社会は神が介入される前に正常になることになっているという(マタイ 24: 37-38、ルカ 17: 26-27 を参照)。彼らはメシアを待ち望むつもりはないのだ。

主の再来の前に大きな苦しみがあると新約聖書は強調している(マタイ 24: 21、マルコ 13: 19-20 を参照)。

「破滅は突然やって来るのです」 この一節は「人々」(3 節)と「兄弟たち」(4 節)とをはっきりと対比させている。この破滅は壊滅という意味ではなく、神の裁きの聖書的比喩である(II テサロニケ 1: 9、ダニエル 12: 2 を参照)。

「突然」はこことルカの福音書中のイエスのオリーブ山での説教についての記述(ルカ 21: 34)にのみ見られる。それは突然の予期しない出来事を意味している。

「陣痛」 この旧約聖書中の裁きの比喩(イザヤ 13: 6-8、エレミヤ 4: 31 を参照)は新約聖書中でも比喩となった(新しい世の産みの苦しみ、マタイ 24: 8、マルコ 13: 8、ローマ 8: 22 を参照)。それは大きな苦しみを伴う突然の予期しない出来事を意味している。

NASB	「そして、人々は決してそれから逃れられません」
NKJV	「そして、人々は決してそれから逃れられません」
NRSV	「そして逃げ道はないのです」
TEV	「人々は決してそれから逃れられません」
NJB	「そして誰にもそれから逃れる道はありません」

これは強制的な二重否定「決して、いや、断じていかなる状況の下にあっても」である。

5: 4「しかし兄弟たち、あなたがたは闇の中にいません」 神は旧約聖書の預言者達とヨハネと新約聖書の著者達を通して終りの時の出来事の概要を明らかにされている。だから、生きている信徒は起ころうとしていることに驚かない。これは神がこの生きることの困難と終りの時の苦難の時期のただ中にある信徒を励まされる方法の一つである。

これらの出来事について信徒達の中に繰り返し混乱が起こる理由の一つは、各世代の信徒がこれらの出来事を自分達の歴史に無理やり組み込もうとしているからである。

特別なトピック: 終末論—クリスチャンはなぜ黙示録の大半を教義で解釈するのか

(Utley 博士の聖書注解シリーズの第12巻「黙示録」より抜粋)

私は自分の長年の終末論研究を通して、十分に確立され組織化された終りの時の時代学をクリスチャンの大半が知らずまた望んでいないことを知った。クリスチャンの中には神学上、心理学上、あるいは教派上の理由からキリスト教のこの分野に注目あるいはこれを専攻する人がいる。これらのクリスチャンは全てのことがどのようにして終わることになっているのかということにこだわってしまい、福音の緊急性を見落としているようだ。信徒は神の終末論的な(終りの時の)御計画を変えることはできないが、福音を通して定められたことに参加することはできる(マタイ 28 章 19-20 節、ルカ 24: 47、使徒行伝 1: 8 を参照)。信徒の大半はキリストの再来と、神の約束が終りの時に完結することを確信している。神の約束のこの瞬間的完結の理解の仕方から生じる解釈上の問題は聖書中のいくつかの逆説に由来している。

1. 古い契約の預言と新しい契約の使徒の言葉との間の緊張
2. 聖書の一神教主義(全ての人のための一人の神)とイスラエル(特別な民)の選びとの間の緊張
3. 聖書における契約および約束の条件的特質(もし...ならば...)と、神が墮落した人類を救われることに対して無条件に忠実でいらっしやることとの間の緊張
4. 近東地域の文献と現代西洋の文献との間の緊張
5. 実在する神の王国と未来に実現することになっている神の王国との間の緊張
6. キリストの再来が間近に迫っていることを信じることと、いくつかの出来事は最初に起こらなければならないことを信じることとの間の緊張

では、これらの緊張についてひとつずつ議論していこう。

第1の緊張(旧約聖書における人種、国家、地理による分類 対 全世界の全ての信徒)

旧約聖書の預言者達は、地上の全ての国民が集ってダビデの子孫である支配者を賛美しこれに仕えるエルサレムの中心にあるパレスティナにユダヤの王国が復活すると預言したが、イエスも新約聖書の使徒達もこのことについて明言しなかった。それは神の啓示による古い契約ではないのか(マタイ 5: 17-19 を参照)。新約聖書の著者達は終りの時の重要な出来事を省略したのか。世の終りについてはいくつか情報源がある。

1. 旧約聖書の預言者達(イザヤ、ミカ、マラキ)
2. 旧約聖書の黙示書の著者達(エゼキエル37~39章、ダニエル7~12章、ゼカリヤ書を参照)
3. 聖書外典である、ユダヤの黙示書の著者達(例えば、ユダの手紙に暗示されている I エノク)
4. イエス御自身(マタイ24章、マルコ13章、ルカ21章を参照)
5. パウロの著書(I コリント15章、II コリント5章、I テサロニケ4~5章、II テサロニケ2章を参照)
6. ヨハネの著書(ヨハネの手紙第一とヨハネの黙示録)

これら全ては終りの時に関する事柄(出来事、時代、人)を述べているか。そうでなければ、それはなぜか。それらは全て(ユダヤの聖書外典を除く)神の啓示を受けているか。

聖霊は旧約聖書の著者達に、彼らが理解できる言葉と事例で真理を明らかにされた。しかし、聖霊は継続する啓示を通してこれら旧約聖書の終末論的概念を普遍的規模に拡張された(キリストの謎。エペソ 2: 11~3: 13 を参照。10: 7 の特別なトピックを見よ)。ここにいくつかの関連する事例がある。

1. 都市エルサレムは旧約聖書では神の民(シオン)の比喩として用いられているが、新約聖書では神が全ての悔い改め信じた人々を受け入れられたことを表す用語とみなされている(黙示録21~22章の新しいエルサレム)。文字通りの実在の都市を新しい神の民(ユダヤ人信徒と異邦人信徒)にまで神学的に拡張したことは、創世記 3: 15に見られる、墮落した人類を救うという神の約束を暗示させる。というのはエルサレムにもユダヤ人が住んでおり、またエルサレムはユダ王国の首都だったからである。アブラハムの召し(創世記 12: 1-3 を参照)にさえ異邦人が関係していた(創世記 12: 3、出エジプト 19: 5 を参照)。
2. 旧約聖書では神の民の敵は周辺の古代近東諸国であったが、新約聖書では全ての未信者で神に反抗する、サタンの啓示を受けた人々に対象が拡張された。神の民と敵との衝突は地理的・地域的なものから全世界的・宇宙的なものへと変化した(コロサイ人への手紙を参照)。
3. 旧約聖書に**絶対**に不可欠の、ある土地についての約束(創世記にある、神の家父長達への約束、創世記 12: 7、13: 15、15: 7 と 15 節、17: 8 を参照)は今や全地についてのものとなった。新しいエルサレムは近東地域にだけ排他的にではなく新たに創造された地に建てられる

のである(黙示録21～22章を参照)。

4. 旧約聖書の預言の概念で拡張されたものの例としては他にも以下のようなものがある。
 - a. アブラハムの子孫が靈的に割礼を受けるようになった(ローマ 2: 28-29 を参照)
 - b. 異邦人も契約の民となった(ホセア 1: 10 と 2: 23[ローマ 9: 24-26 で引用]、レビ記 26: 12、出エジプト 29: 45[Ⅱコリント 6: 16-18 と出エジプト 19: 5 で引用]、申命記 14: 2[テトス 2: 14 で引用])
 - c. イエスが神殿となられ(マタイ 26: 61 と 27: 40、ヨハネ 2: 19-21 を参照)、イエスを通して地域教会に(Ⅰコリント 3: 16 を参照)、つまり各信徒に(Ⅰコリント 6: 19 を参照)御言葉が伝えられるようになった
 - d. イスラエルとそれを特徴的に表す旧約聖書の聖句も神の民全体を指すようになった(「イスラエル」[ローマ 9: 6、ガラテヤ 6: 16 を参照]、「祭司の王国」[Ⅰペテロ 2: 5 と 9～10 章、黙示録 1: 6 を参照])

この預言は成就し、拡張し、そして今や包括(総括)的となった。イエスと、新約聖書を書いた使徒達は終りの時について旧約聖書の預言者達と同じような述べ方はしなかった(Martin Wyngaarden 著 *The Future of The Kingdom in Prophecy and Fulfillment* を参照)。旧約聖書の預言を文字通り普通に解釈しようとする現代人は黙示録をユダヤ人と全く同じように解釈し、イエスとパウロの言葉の意味を無理やり霧のようにはかないあいまいなものにしているのだ。新約聖書の著者達は旧約聖書の預言者達を否定してはいないが、彼ら(旧約聖書の預言者達)の預言には究極的に普遍的な意味があることを明らかにしている。イエスやパウロの終末論には組織的な論理体系はない。それらの目的は主に救いつまり靈的指導である。

しかし、新約聖書の中にも緊張はある。終末論に登場する出来事には明確な体系化は見られない。黙示録は終りの時について述べるために、イエスのお教え(マタイ24章とマルコ13章を参照)の代わりに旧約聖書の聖句を驚くほど多くの目的に用いているのだ。黙示録の文体はエゼキエルやダニエルやゼカリヤの著書に倣っているが、これは聖書外典(ユダヤの黙示文学)の書かれた時期に発展した。これはヨハネが旧・新約聖書を関連づける方法であったようだ。それは人類の(神への)反逆を時系列順に示し、また神の救いの御決断を示しているのだ。しかし、旧約聖書の言葉や人や出来事を用いて書かれたとはいえ、黙示録はそれら(言葉や人や出来事)を紀元1世紀のローマのものをもとに再解釈しているということを覚えておかなければならない(黙示録 1 章 7 節を参照)。

第2の緊張(一神教主義 対 選ばれた民)

聖書は、靈的で、創造主であり救い主でいらっしゃるただお一人の神を強調している(出エジプト 8:10、イザヤ 44: 24、45: 5-7 と 14 節と 18 節と 21～22 節、46: 9、エレミヤ 10: 6-7 を参照)。古い契約のそれ自体の(それが神から民に与えられた)時代における独自性はその一神教主義にある。イスラエルの周辺諸国は全て多神教徒の国であった。神がお一人であることは旧約聖書の啓示の核心である(申命記 6: 4 を参照)。創造は神と神のお姿に似せて造られた人類との交わりの

目的のための過程である(創世記 1: 26-27 を参照)。しかし人類は神に反逆し、神の愛と導きと意図に対して罪を犯した(創世記3章を参照)。神の愛と意図はとても強く確かであり、それゆえに神は墮落した人類を救うと約束された(創世記 3: 15 を参照)のだ。

その緊張は神が一人の人や一つの家族や一つの国を選ばれて他の人類と交わろうとされるときに生じている。神がアブラハムとユダヤの民を祭司の王国(出エジプト記 19: 4-6 を参照)として選ばれたことは奉仕の代わりに高慢を、また受容の代わりに排斥を生んだ。神がアブラハムを召されたことは全人類を大いに祝福されるためであった(創世記 12: 3 を参照)。旧約聖書における選びが救いのためではなく奉仕のためであるということは覚えておかなければならないし、また強調されなければならない。イスラエルの全ての民は神に義とされることは決してなく、生得権(ヨハネ 8: 31-59、マタイ 3: 9 を参照)ではなく個人的な信仰と従順(創世記 15: 6 [ローマ4章中で引用] を参照)によらなければ永遠に救われることはなかった。イスラエルは自分の働きを果たさず(教会は今や祭司の王国となった。1: 6 とⅡペテロ 2: 5 と 9 節を参照)、義務を特権に、また奉仕を特別な地位にすり替えたのだ。神は全ての人を選ぶために一人の人を選ばれたのだ。

第3の緊張(条件付きの契約 対 無条件の契約)

条件付きの契約と無条件の契約の間には神学的緊張つまり逆説がある。神の救いの御意志と御計画が無条件であることは確かな真理である(創世記 15: 12-21 を参照)。しかし、それには人類が必ず応答することが常に条件となる。

「もし...なら...」の文体は旧・新約聖書の両方に登場する。神は忠実なお方であるが人類は不忠実である。この緊張は多くの混乱を招いてきた。解釈する者達はただ一つの「葛藤の角」、つまり神の忠実さと人類の努力、あるいは神の主権と人類の自由意志に注目しようとしてきた。どちらも聖書的であり必要である。

これは終末論および旧約聖書にある神のイスラエルに対する約束と関連がある。神がそれを約束されたなら、神はそれを確かなものとされたということなのだ。神は約束に忠実なお方である。神の名声がそれに関係する(エゼキエル 36: 22-38 を参照)。条件付きの契約と無条件の契約はイスラエルの内ではなくキリストの内になつたのだ(イザヤ53章を参照)。神の究極の御忠実さは、誰が誰の父あるいは母であるかということではなく、悔い改め信じる人全ての救いに表れている。もし聖書に神学的括弧(但し書き)があるなら、それは教会ではなくイスラエルを指しているのだ(使徒行伝7章とガラテヤ3章を参照)。

世界的な福音宣教の使命は教会に受け継がれた(マタイ 28: 19-20、ルカ 24: 47、使徒行伝 1 章 8 節を参照)。それも条件付きの契約なのだ。これは神がユダヤ人を完全に拒絶されたという意味ではない(ローマ9~11章を参照)。終りの時のイスラエル信徒のための場所と目的があるようだ(ゼカリヤ 12: 10 を参照)。

第4の緊張(近東地域の文献 対 西洋の文献)

(文学の)ジャンルは聖書を正しく理解するうえで重要な要素である。教会は西洋(ギリシャ)の文化を背景として発展した。東洋の文献は現代西洋の文献よりもはるかに修飾語が多く比喩的

象徴的である。これは簡潔な教義的真理よりも人々とその出会いと出来事に注目している。クリスチャンは自らの歴史と文学様式を判断材料に用いて(旧・新訳)聖書の預言を解釈するという罪を犯してきた。各々の世代と地域はその文化と歴史と実情を用いて黙示録を解釈してきた。それらは全て誤りだったのだ。現代西洋文化を聖書の預言の中心であると考えるのは傲慢というものである。

神の啓示を受けた原著者が書くことを選んだジャンルは読者との文章を通した交わりである。黙示録は歴史物語ではない。それは手紙(1~3章)と預言の組み合わせであり、大半が黙示文学である。原著者の主張以上のことを聖書から読み取ること、そして原著者の主張の一部を聖書から除外することは誤りである。解釈する者の傲慢と独断主義は黙示録のような書においては他書におけるよりはるかに不適切である。

教会は黙示録の正しい解釈に決して同意しない。私の関心は聖書の特定の箇所ではなく全体を聞いて調べることにある。聖書の東洋的な考え方は互いに激しい緊張状態にある一対の真理に表れている。教義的真理を求める私達の西洋の風潮は有効でないというよりはおぼつかないものである。全世代の信徒にその目的の変化を示すことによって黙示録の解釈における行き詰まりを少なくともいくぶんかは解消できると私は思う。黙示録をそれ自体の書かれた時代とジャンルに則して解釈しなければならないことは解釈する者の多くにとって明らかなことである。黙示録を歴史的に研究するには古代の読者が何を理解しようとし、また理解できたかを調べなければならない。多くの点で現代の解釈者達はこの書の主張の多くの意味を見失っている。黙示録の第一の主な主張は、迫害されている信徒を励ますことであつた。それは(旧約聖書の預言者達がそうしたように)神が歴史を支配されることを示した。それは(旧約聖書の預言者達がそうしたように)歴史が予定通りの結末、つまり裁きか祝福に向かって動いていると明言した。それは紀元1世紀のユダヤの黙示文学の中で神の愛と御臨在と御力と主権を明言した。

それ(黙示録)は全世代の信徒にとって同じ神学的意味を持つ。それは善悪の宇宙的闘争を描写している。紀元1世紀に書かれた原文自体は私達が目にすることができなくなっているかもしれないが、ゆるぎない、平安をもたらす真理は今も私達が知ることができる。現代西洋の解釈者達が黙示録の詳細な記述を現代の歴史に無理やりあてはめようとすれば、誤った解釈が繰り返されることになるのだ。

黙示録の詳細な記述は、(キリストの御誕生と御生涯と死に関して旧約聖書に記されているように)反神的な指導者(Ⅱテサロニケ2章を参照)と文化による迫害に直面していた過去の世代の信徒の場合と同じように驚くほど写實的に思える。これらの啓示が現実のものとなる場所は、イエス(マタイ24章、マルコ13章、ルカ21章を参照)とパウロ(Ⅰコリント15章、Ⅰテサロニケ4~5章、Ⅱテサロニケ2章を参照)の言葉によっても歴史的に裏付けられるまでは誰にもわからない。推測も憶測も独断主義も全て不適切である。黙示文学ではこの柔軟性が許されている。神様、歴史物語を超えるお姿を持ち象徴的存在でいらっしやることに感謝します。神は支配され、統治され、来られるのだ。

現代の注解書の大半はジャンルのその点を見落としているのだ。現代西洋の解釈者はしばしば、不明瞭で象徴的で劇的なユダヤの黙示文学に忠実であることよりも明快で論理的な神学体系を求める。この真理は I. Howard Marshall 編 *New Testament Interpretation* 中の Ralph P. Martin の記事“Approaches to New Testament Exegesis”によく表現されている。

「この書の劇的特質を認め、宗教的真理を表現する手段として言葉がどのように用いられているかを思い出さなければ、我々は黙示録について大きな誤解をし、その書がありきたりの表現だらけの、歴史上の出来事をただ経験的に記したにすぎないものであるかのように解釈するという誤りを犯そうとするだろう。後者のことをしようとするのは解釈上の全ての問題を招くことになる。そのことは黙示録の本質的意味のより深刻な誤解につながり、神なるキリストの主権および力と愛によるキリストの統治という逆説的事柄(5: 5 と 6 節『獅子は子羊』を参照)を神話作成的言語により劇的に主張することにより生まれる、新約聖書中のこの書の大いなる価値を見失うことになる。」(235 ページ)

W. Randolph Tate は自著 *Biblical Interpretation* の中で次のように述べている。

「黙示書、特にダニエル書と黙示録のように熱心に読まれて我々を失望させるジャンルの書は聖書中には他にない。このジャンルの書はその文体と文章構造と書かれた目的の根本的誤解による誤った解釈の悲惨な歴史を経験してきた。もうすぐ何が起ころうとしているかをとてはつきりと述べているために、黙示書は道路地図と、そして後に未来予想図とみなされてきた。この見解の悲劇的誤りは書の一連の参考文献が著者の生きていた時代のものではなく読者の生きている時代のものであるということにある。この誤った黙示書(特に黙示録)の解釈では書は現代の出来事を用いて原典の象徴的出来事を解釈するときの暗号文とみなされる。まず解釈者は黙示書が象徴的出来事を通してメッセージを伝えていることを認めなければならない。比喩的に表現されている象徴的出来事を文字通り解釈することは解釈を誤ることに他ならない。問題は黙示書中の出来事が歴史的であるかどうかということではない。それらの出来事は歴史的であるかもしれない。それらは現実にも起こったのかもしれないし、これから起こるのかもしれない。しかし著者は出来事を記し、その意味をイメージや典型的出来事を通して伝える。」(137 ページ)

Ryken と Wilhost と Longman III 共編 *Dictionary of Biblical Imagery* より:

「現代の読者はこのジャンルにしばしば困惑し失望する。聖句の大半において、予期しない比喩的表現や現世離れした出来事は大げさで調和を欠いているように思われる。この書を文字通り解釈しようとするれば多くの読者は『いつ何が起こることになっているのか』をはつきりさせようと急ぐことを強いられ、その結果黙示書のメッセージの意図を見失うことになる。」(35 ページ)

第5の緊張(実在する神の王国 対 未来に実現することになっている神の王国)

神の王国は実在するが、未来に実現することにもなっている。この神学的逆説は終末論の観点から注目されるようになった。旧約聖書にあるイスラエルへの預言の全てが文字通り成就することを期待するなら、その王国は地理上も神学的優秀性においてもほぼ回復されたイスラエルとなるのだ。このようなわけで5章には教会が密かに喜んでいることが記され、他の章はイスラエルにつ

いて述べていると言わざるを得ないのである(しかし黙示録 22: 16 を覚えておきなさい)。

しかし、古い契約で約束されたメシアが始められる王国に注目するなら、それはキリストが初めてこの世に来られたときに存在することになるので、次にはキリストの受肉(御誕生)、御生涯、御教え、死、そして復活が注目されることになる。神学的に強調されているのは現在の救いである。神の王国は到来し、古い契約は一部の人々に対するキリストの千年統治によってではなく、キリストが全ての人々に対して救いをもたらされることによって成就するのだ。

聖書がキリストの2度の御臨在について述べているのは確かに真実であるが、どちらが強調されるべきだろうか。旧約聖書の預言の大半は最初の御臨在、つまりメシアの王国の樹立(ダニエル書2章を参照)に注目しているように私には思える。多くの意味でこれは神の永遠の統治(ダニエル書7章を参照)と似ている。旧約聖書は神の永遠の統治に注目しているが、統治が明らかにされるのはメシアの御業によってである(Ⅰコリント 15: 26-27 を参照)。問題はどちらが正しいかということではない。どちらも正しい。むしろ問題はどちらが強調されるべきかということである。解釈者の中にはメシアの千年統治(黙示録20章を参照)に注目しすぎて父なる神の永遠の統治に聖書的な注目をし損なう者もいることは言うておかなければならない。キリストの統治は予備的な出来事である。キリストの2度の御臨在が旧約聖書に明記されていないのと同じように、メシアの一時的な統治も旧約聖書には明記されていないのだ。

イエスの説教と御教えの要点は神の王国である。それは(救いと奉仕の)現在と(普遍性と権力の)未来である。黙示は、メシアの千年統治(黙示録20章を参照)に注目するなら予備的であり究極的ではない(黙示録21~22章を参照)。一時的な統治が必要なことは旧約聖書からは明らかではない。実を言うとダニエル書7章にあるメシアの統治は永遠であり、千年間に限られてはいない。

第6の緊張(キリストの再来が間近に迫っていること 対 *Parousia* の延期)

イエスはまもなく、突然に、思いがけなく来られることになっていると大半の信徒は教えられてきた(マタイ 10: 23, 24: 27 と 34 節と 44 節、マルコ 9: 1, 13: 30、黙示録 1: 1 と 3 節、2: 16, 3: 11, 22 章 7 節と 10 節と 12 節と 20 節を参照)。しかし、イエスの御臨在を待ち望んでいる各世代の信徒はその点で誤解しているのだ。イエスの再来が間近に迫っていることは各世代の信徒に約束されたゆるぎない望みであるが、現実にはイエスの再来を生きて見られるのはただ一世代である(そしてその世代は迫害を受ける)。信徒はあたかも明日イエスが来られるかのように生きなければならないが、イエスの来られるのがなかなか起こらないのであればそれに備え、また大宣教命令(マタイ 28: 19-20 を参照)を実行しなければならない。

福音書群(マルコ 13: 10、ルカ 17: 2, 18: 8 を参照)とテサロニケ人への手紙第一・第二にはイエスの再来の延期(*Parousia*)に基づいて書かれた文がある。先に起こらなければならない歴史的出来事がいくつかある。

1. 世界規模の福音宣教(マタイ 24: 14、マルコ 13: 10 を参照)
2. 「不法の者」の啓示(マタイ 24: 15、Ⅱテサロニケ2章、黙示録13章を参照)

3. 大迫害(マタイ 24: 21 と 24 節、黙示録 13 章を参照)

ここには意図的なあいまいさ(マタイ 24: 42-51、マルコ 13: 32-36 を参照)があるのだ。今日が人生最後の日と思って毎日を生きなさい。だが未来に備えて身を引き締めて生活するようにしなさい。

一貫性とバランス

現代の種々の終末論解釈は全て真理を半分しか含んでいないことを言っておかなければならない。それらは一部の聖句についてはよく説明し解釈している。問題は「一貫性とバランス」にある。聖句を既定の神学的枠組みにあてはめるためにしばしば一連の仮説が用いられる。聖書は論理的で時系列順の組織的な終末論を明らかにしていない。それは家族アルバムのようなものである。写真は写実的だが、必ずしも時系列順で組織的で論理的ではない。一部の写真はアルバムから抜け落ちていて、後の世代の家族メンバーはそれらの戻し方をよく知らない。黙示録を正しく解釈するうえで重要なことは原著者の文学ジャンルの選択に現れている意図である。大半の解釈者は新約聖書の他のジャンルの書から解釈道具や方法を借りて黙示録を解釈しようとする。彼らはイエスとパウロの教えをもとに神学的枠組みを組み立てる代わりに旧約聖書に注目し、黙示録を旧約聖書の内容の証拠とみなしている。

私は次のことを認めなければならない: 私はこの注解書を書くにあたって不安と動揺を覚えたが、それは黙示録 22: 18-19 の呪いのためではなく、この書の解釈について神の民の間で起こり続けている論争の激しさのためである。私は神の啓示を好む。全ての人が嘘つきだとそれは真実である(ローマ 3: 4 を参照)。どうかこの注解書を教義的な書ではなく私の主張を試みた書としてとらえ、道路地図ではなく道路標識として、また「主が言われること」ではなく「ある条件下で起こりうること」に備えるために用いてください。私は自身の未熟さと偏見と神学的問題とに向き合ってきた。私はまた他の解釈者の持つそれら(未熟さと偏見と神学的問題)も見つけた。人々は黙示録の中に探していた答えをほぼ見出しているようだ。ジャンルはそれ自体を借りて悪用しているのだ。しかし、それはある目的のために聖書の中にある。それが結「語」として置かれているのは偶然ではない。それには各世代の御自分の子らへの神のメッセージがある。神は私達に理解を求めておられるのだ。派閥を作らず、皆で手を取りあおう。真実かもしれないことの全てではなく、明らかに重要なことを認めよう。神は私達皆を助けてくださるのだ。

5: 5「光の子であり昼の子」 これら2つは義なる人を意味するセム語の慣用句である(ルカ 16 章 8 節、ヨハネ 1: 4-9、3: 17-19、8: 12、11: 9-10、12: 35-36 と 46 節、エペソ 5: 8、I ヨハネ 1: 5 と 7 節、2: 8-10 を参照)。光対闇のこの比喩的な二元論は古代近東地域の文献の特徴である。それは使徒ヨハネの著書と死海文書で繰り返し論じられている主題である。

5: 6「眠るのではなく」 これは 4: 13 にあるものとは異なる語である。この語は新約聖書で「道徳への無関心」を意味する語としてしばしば用いられる(マルコ 13: 36、エペソ 5: 14 を参照)。「眠る」(

katheudo)の3通りの用法、つまり(1)道徳への無警戒[6 節](2)肉体の休息[7 節](3)死[10 節]に注意せよ。

NASB、NKJV、NRSV 「他の人々のように」
TEV 「他の人々のように」
NJB 「他の人々が皆そうしているように」

これは文字通り「他の人々」である。この語は 4: 13 で希望のない未信者を指して用いられているのと同じ語である。

「目を覚まして節度ある生活をしましょう」 6 節には3つの現在形能動態仮定法動詞がある。一つ目の語は否定語で、「眠り続けてはならない」という意味である。次の2つの語は肯定語で、「目を覚まして節度ある生活をする」という意味である。これらは継続的な勤勉さを強調しているが、それには偶然性が伴う。信徒の中には眠っていて警戒も節度ある生活もしない者がいる。イエスの再来を待ち望むクリスチャンにとって警戒は一般的な新約聖書中の主題である(マタイ 24: 42-43、25: 13、マルコ 13: 34、ルカ 21: 34 を参照)。「警戒する」と「節度ある生活をする」はともに比喩的に用いられている。6 節と 8 節の「節度ある生活をする」は精神的警戒つまり自制の意味で用いられている(Ⅱテモテ 4: 5、Ⅰペテロ 1: 13、4: 7、5: 8 を参照)。

「...を着け」これは「...を永久的に身に着ける」という意味のアオリスト中間態分詞である。この用法はローマ 13: 12 とエペソ 6: 11-17 での用法ととてもよく似ていて、イザヤ 59: 17 を反映している。パウロはこの軍用装甲の比喩をしばしば用いたが、同じクリスチャンの属性を表現するのに必ずしも装甲を用いたわけではなかった。信徒はキリストから頂いた霊的兵器を個人的に利用しなければならない。成熟したからといって自動的に自身を防御することにはならないのだ(7 節を参照)。

「信仰...愛...希望」これはパウロの好んだ、クリスチャンの美德を表す3つ一組の言葉である(ローマ 5: 2-5、ガラテヤ 5: 5-6、コロサイ 1: 4-5、Ⅰテサロニケ 1: 3、ヘブル 6: 10-12、Ⅰペテロ 1: 21-22 を参照)。それらは(神を信じたときの)最初の信仰と完成された信仰とを関連づける。

「希望」これは特にテサロニケ人への手紙第一・第二においてイエスの再来を指す語としてしばしば用いられる。ガラテヤ 5: 5 の特別なトピック「希望」を見よ。

5: 9「わたしたちの主イエス・キリストを通して救いを得るように」神の愛はキリストを通してのみ私達に流れる。キリストはただ一つの道であり(ヨハネ 14: 6 を参照)、扉であり(ヨハネ 10: 1-3 を参照)、ただお一人の仲介者でいらっしゃる(Ⅰテモテ 2: 5 を参照)。

特別なトピック: 救いの意味で用いられるギリシャ語の動詞時制

救いは産物ではなく関係である。それは人がキリストを信頼したときに終わるのではなく、始まったばかりなのだ。それは火災保険の証書でも天国行きの切符でもなく、キリストらしさを増してゆく生活なのだ。夫婦は一緒に暮らす時間が長いほど互いに似始めるというアメリカの格言(ことわざ)がある。これが救いの最終目的なのだ。

完了した行為としての救い(アオリスト)

使徒行伝 15: 11

ローマ 8: 24

Ⅱテモテ 1: 9

テトス 3: 5

ローマ 13: 11(未来指向のアオリストと結合)

存在状態としての救い(完了形)

エペソ 2: 5 と 8 節

継続中の過程としての救い(現在形)

I コリント 1: 18、15: 2

Ⅱコリント 2: 15

I ペテロ 3: 21

未来に完結する出来事としての救い(動詞時制および文脈では未来形)

ローマ 5: 9 と 10 節、10: 9 と 13 節

I コリント 3: 15、5: 5

ピリピ 1: 28

I テサロニケ 5: 8-9

ヘブル 1: 14、9: 28

I ペテロ 1: 5 と 9 節

従って、救いは最初の信じる決意に始まる(ヨハネ 1: 12、3: 16、ローマ 10: 9-13を参照)が、これは生活様式における信仰の過程に現れなければならず(ローマ 8: 29、ガラテヤ 3: 19、エペソ 1: 4、2章10節を参照)、いつの日か完成を見ることになっている(Iヨハネ 3: 2を参照)。この最後に述べられている事柄は称賛(栄光ある者としてたたえられること)と呼ばれる。これは次のように表現されうる。

1. 最初の称賛—義認(罪の罰からの救い)
2. 進行中の救い—聖化(罪の力からの救い)
3. 最終的な救い—称賛(罪ある存在からの救い)

5: 10「主はわたしたちのために死なれました」これはイエスが私達の身代わりに死なれたことを表現している(イザヤ53章、マルコ 10: 45、Ⅱコリント 5: 21を参照)。

「わたしたちが目覚めていても眠っていても」 2通りの解釈がある：(1)教会は死んだ仲間の教会員に関心があった(2)イエスは警戒も節度ある生活もしない信徒のためにも死なれた。

「主とともに生きるようになる」 天国は確かにある場所(ヨハネ 14: 2-3 前半)だが、重要なことはそれがイエスとともに存在し続けているということである(ヨハネ 14: 3 後半、Ⅱコリント 5: 6と8節を参照)。

5: 11「互いに励まし合いなさい」 これは現在形能動態命令形動詞である。「励まし合う」は“paracletos”と同じ語幹に由来する語である(ヨハネ 14: 16-26、15: 26、16: 17、Ⅰヨハネ 2: 1を参照)。大歓喜についてのパウロの議論(4: 13-18を参照)は倫理的な伝道の勧め(Ⅰコリント 15章58節、エペソ 4: 13を参照)で締めくくられる。教義は神の御心にかなう生き方を奨励するべきである(ルカ 12: 48を参照)。

「互いに高め合いなさい」 これも現在形能動態命令形動詞である。キリストの再来と天国への期待は私たちにとって、終末論的な人の世の中での競争ではなく互いに仕え合うことを奨励すべきなのだ。

特別なトピック: 教化

パウロはしばしばこの用語 *oikodomeo* とその関連語形を用いた。この語の文字通りの意味は「家を建てる」(マタイ 7: 24を参照)であるが、後に次のような意味で比喩的に用いられるようになった。

1. キリストのお体、つまり教会。Ⅰコリント 3: 9、エペソ 2: 21、4: 16
2. 建て上げる(高める)
 - a. (信仰の)弱い兄弟達、ローマ 15: 1
 - b. 隣り人、ローマ 15: 2
 - c. 互いに、エペソ 4: 29、Ⅰテサロニケ 5: 11
 - d. 伝道の聖人たち、エペソ 4: 11
3. 私達を建て上げる(教化する)もの
 - a. 愛、Ⅰコリント 8: 1、エペソ 4: 16
 - b. 個人的自由の制限、Ⅰコリント 10: 23-24
 - c. (根拠のない)推測を避ける、Ⅰテモテ 1: 4
 - d. 礼拝における話者(歌手、教師、預言者、異言による語り手、解釈者)の制限、Ⅰコリント 14: 3-4と12節
4. 全てのものが教化に関与するべきである。
 - a. パウロの権威、Ⅱコリント 10: 8、12: 19、13: 10

b. ローマ 14: 19 と I コリント 14: 26 にある要約

NASB(改訂版)原典: 5: 12-22

¹²兄弟たち、あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主に結ばれているあなたがたを導き教えている人々を大切に思い、¹³その働きのゆえに彼らを愛をもって心から尊敬なさい。互いに平和に暮らなさい。¹⁴兄弟たち、あなたがたに勧めます。言うことをきかない者たちを戒めなさい。気弱になっている者たちを励ましなさい。弱い者たちを助けなさい。全ての人に対して忍耐強く接しなさい。¹⁵誰も悪をもって悪に報いることのないように気をつけ、互いに、また全ての人に対していつも善いことを行うように努めなさい。¹⁶いつも喜んでいなさい。¹⁷絶えず祈りなさい。¹⁸全てのことに感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。¹⁹御霊の火を消してはいけません。²⁰預言を軽んじてはいけません。²¹全てのことを吟味して、良いものを大切にしなさい。²²あらゆる形の悪を避けなさい。

5: 12「兄弟たち」新しい主題に移る際にパウロはしばしばこの語を用いた(4: 13、5: 1を参照)が、常にではなかった(5: 14 と 25 節と 26 節を参照)。ここではその語は、パウロが教会全体に呼び掛けていたことを示している。

NASB	「...を大切に思い」
NKJV	「...を認め」
NRSV	「...を尊敬し」
TEV	「...に正しい敬意を払い」
NJB	「...を尊重し」

これは完了形不定詞であり、文字通り「知る」という意味であり、「尊重する」、「人に敬意を示す」、「...の価値を認める」、「...の価値を知る」の意味で用いられている。神の召しを受けた指導者に対して信徒は正しい敬意をもって応答しなければならない(I コリント 16: 18、ピリピ 2 章 29 節、 I テモテ 5: 17 を参照)。

NASB	「あなたがたの間で労苦ししている人々」
NKJV、NRSV	「あなたがたの間で労苦ししている人々」
TEV	「あなたがたの間で働いている人々に」
NJB	「あなたがたの間で働いている人々」

「労苦し」に対応するこの用語は「精力的な努力」を意味する(I コリント 16: 16 を参照)。この節全体は指導者に対する教会の態度の問題について述べていると思われる。

1. 「あなたがたの間で労苦ししている人々」(現在形能動態分詞)
2. 「あなたがたを導いている人々」(現在形中間態分詞)

3. 「あなたがたを教える人々」(現在形能動態分詞)

ギリシャ語の原典ではこれら3つの叙述句の後に冠詞があるので、これら3つの分詞は全て指導者を指している。

「主に結ばれているあなたがたを導いている人々」これは文字通り「前もって定められた」という意味である。彼らはその働きに応じて神の報いを受けることになる(Ⅰコリント 3: 10-17、ヘブル 13章 17 節を参照)。

「あなたがたを教える」これは文字通り「良識を授ける」という意味である。この語は通常「言うことをきかない者たちを戒める」と訳されている。

5: 12-22 崩壊の危機にある堕落した世で(神の子として)適切に生きることを信徒に勧める一連の現在形命令法動詞が15個ある。私達が神のように生きることは失なわれた人々をキリストに向かわせることとなるべきである。

NASB、NKJV、NRSV 「...を愛をもって心から尊敬しなさい」

TEV 「...に最大の敬意と愛をもって接しなさい」

NJB 「...に最大の敬意と愛を示しなさい」

この動詞は継続中の個人的行為を強調する現在形不定詞である。この副詞は3語の複合語で、パウロはこれを3回用いた(エペソ 3: 20、Ⅰテサロニケ 3: 10 を参照)。信徒は自分を指導してくれる人を尊敬するべきである(Ⅰコリント 16: 18、ピリピ 2: 29、Ⅰテモテ 5: 17 を参照)。ガラテヤ 1: 13 の特別なトピック「パウロの *Huper* 複合語の使用」を見よ。

「その働きのゆえに」指導力は神からの賜物である(エペソ 4: 11-13 を参照)。指導者は仕事を任せたらその仕事を誇りに思うが、必ずしもその仕事を任された人を誇りに思うとは限らない。13 節で「働き」と訳されるこの用語は 12 節にある語とは異なる。この懸命に働く指導者のグループは仕事を拒む人々(14 節とⅡテサロニケ 3: 6-11 を参照)と対比されている。

「互いに平和に暮しなさい」これは信徒への継続する命令と新約聖書の一般的主張(マルコ 9 章 50 節、ローマ 12: 18、Ⅱコリント 13: 11 を参照)を表す現在形能動態命令法動詞である。これは諸教会の一般的問題を反映している。キリスト教は多くの様々な事情を持つ男女を歓迎している(ローマ 14: 1-15: 13、10: 23-33 を参照)。

5: 14「兄弟たち」この節は主に指導者について述べていると思われる(27 節を参照)が、述べられている事柄は全ての信徒にあてはまるようだ。このことはⅠテモテ3章にも言えることである。新

しい契約のキリスト教は聖職者と一般の信徒を区別しない。私達は皆、神に召され聖霊の賜物を受けた、イエスのために働く者なのだ(エペソ 4: 11-13 を参照)。神はこの賜物を受けた働き人の家族の中から指導者を選ぶのだ。

NASB	「言うことをきかない者たちを戒めなさい」
NKJV	「言うことをきかない者たちに警告しなさい」
NRSV	「怠惰な者たちを戒めるように」
TEV	「怠惰な者たちに警告しなさい」
NJB	「怠惰な者たちに警告しなさい」

これは一連の現在形命令法動詞で始まり、継続的つまり習慣的行為について述べている。12～22節には15個の命令法動詞がある。この語は次の2つのうちのいずれかの意味を持つ語であろう(1)暴力行為を意味する軍事用語(2)エジプトで発見されたパピルス文書の中で用いられていた、怠惰な者たちを意味するコイネギリシャ語の用語。後者の意味の方がこの書簡の文脈に符合する(Ⅱテサロニケ 3: 7-16 を参照)。

NASB、NRSV	「気弱になっている者たちを励ましなさい」
NKJV	「気弱になっている者たちを慰めなさい」
TEV	「臆病なたちを励ましなさい」
NJB	「心配している者たちを励ましなさい」

これは現在形中間態(異態)命令法動詞であり、文字通り「小心者」を意味する。KJVでは「心の弱い者」となっているが、実は「気弱になっている者」つまり「信仰の弱い者」の意味で用いられている(ローマ 14: 1～15: 13、Ⅰコリント8章、10: 23-33 を参照)。この語はセプトウアギンタではイザヤ 35: 4 を暗示しているようだ。

「弱い者たちを助けなさい」この現在形中間態命令法動詞は体または心の弱い者の意味で用いられている。これはローマ 14: 1～15: 13(Ⅰコリント 8: 7、9: 22)にあるのと同じタイプのクリスチャンを表しているのかもしれないし、あるいは身体の問題(使徒行伝 5: 15と16節)を指しているのかもしれない。

「全ての人に対して忍耐強く接しなさい」これは現在形命令法動詞である。これは長い苦しみに耐え続け、短気を起こさないようにせよという命令である(Ⅰコリント 13: 4、エペソ 4: 2 を参照)。この命令は指導者と一般の信徒の両方に向けられている。それはまた、初期教会にあった問題の解決の道を私達に示している。

「忍耐」と訳されるギリシャ語の用語は2つある。(1) *makrothomia* と(2) *hupomone* である。それらはともにⅡコリント 6: 6、ガラテヤ 5: 22、コロサイ 1: 11、Ⅱテモテ 3: 10 に挙げられている。(1)

はこの書簡で用いられている。この語は神の御性質を指していると思われる(イザヤ 57: 15 の LXX、ローマ 2: 4、9: 22、I ペテロ 3: 20、II ペテロ 3: 9 を参照)。信徒は父なる神の御性質(お姿)を見習うべきである。この語はまた、(1)何か[ヘブル 6: 12、ヤコブ 5: 7 と 8 節を参照](2)誰か[マタイ 18 章 26 節と 29 節、I コリント 13: 1、I テサロニケ 5: 14、ヤコブ 5: 10 を参照]に対する忍耐の意味でも用いられる。これは霊的な成熟とキリストに倣った生活の証しである。

5: 15「誰も悪をもって悪に報いることのないように気をつけなさい」 これも現在形能動態命令法動詞である(マタイ 5: 44、ローマ 12: 17-21、I ペテロ 3: 9 を参照)。信徒は未信者よりも多様な応答をしなければならない。信徒は怒りではなく愛をもって行動するべきである。困難で不公平な状況はしばしば最も有効な証しの機会となる。

NASB	「いつも善いことを行うように努めなさい」
NRSV	「いつも善いことを追い求めなさい」
NKJV	「いつも善いことを行うように努めなさい」
TEV	「いつも善いことを行うように努めなさい」
NJB	「善いことだけを考えるようにしなければなりません」

この現在形能動態命令法動詞は文字通り「善いことを追い求め続ける」(21 節、ローマ 12: 9 を参照)ことについて述べている。ここでの用語「善いこと」は *agathos* であり、通常は道徳的価値を強調する。しかしこれは次にある句「互いに、また全ての人に対して」とどのように関連があるのか。21 節では用語 *kalos* (善つまり美)が用いられている。コイネギリシャ語ではこれら2語の間に広範囲のセム語的な意味の重複がある。区別する方法は何か。どちらも直近の文脈が「悪」について述べている(15 節前半と 22 節を参照)。15 節は信徒と未信者(全ての人)に対するクリスチャンの行動に関連しているが、21 節はクリスチャンの指導者つまり賜物の分析に関連している。私は今ではそれらが同音意義語であると思っている。パウロの時代のコイネギリシャ語には文法や語彙の簡潔化が見られた。William Barclay 著 *New Testament Words* の 151~161 ページに *kalos* についての詳細な議論があるので見よ。

「互いに、また全ての人に対して」 これは 14 節および 3: 12 ととてもよく似ている。信徒は個人的利益を超えて社会に善いことを行わなければならない(ローマ 12: 10、I コリント 12: 7、ピリピ 2 章 1-5 節を参照)。信徒の他の信徒に対する接し方は未信者に対する接し方へと一般化されるべきである(ガラテヤ 6: 10 を参照)。

5: 16「いつも喜んでいなさい」 この現在形能動態命令法動詞はピリピ人への手紙の主題である(2: 18、3: 1、4: 4 と 10 節を参照)。これは状況に依らず(ローマ 8: 31-39 を参照)キリストと私達の関係および他のクリスチャンと私達の契約の関係に基づく世界観である。

5: 17「絶えず祈りなさい」これも現在形中間態(異態)命令法動詞であり、生活様式についての祈り、つまり神との常時の交わり(1: 3 と 2: 13 を参照)を指しているに違いない。パウロは祈りの必要に気づき、またそれが自分の働きに影響すると信じていた(25 節、エペソ 6: 18-19、Ⅱテサロニケ 3: 1 を参照)。

5: 18

NASB、NKJV	「全てのことに感謝しなさい」
NRSV	「いかなる状況にあっても感謝しなさい」
TEV	「いかなる状況にあっても感謝しなさい」
NJB	「全てのことについて神に感謝しなさい」

これも現在形能動態命令法動詞である。状況は私達の感謝や喜びを写すものであってはならない(ローマ 8: 26-30、31~39 節、エペソ 5: 20 を参照)。感謝は「全てのことについて」ではなく「いかなる状況にあっても」流れるべきであることを思い出そう。ガラテヤ 6: 18 の特別なトピック「パウロの神への賛美と祈りと感謝」を見よ。Ⅰテサロニケ 1: 2 の特別なトピック「感謝」を見よ。

「神が望んでおられること」これは文字通りエペソ 5: 17 にあるような「神の御心」である。神の御心は墮落した人類がキリストを信じることである(ヨハネ 6: 29 を参照)。この後何度か神の「御心」についての記述がある。人は迫害や苦難のただ中にあっても喜び、また感謝するべきである。4: 3 の特別なトピックを見よ。

5: 19

NASB、NKJV、NRSV	「御霊の火を消してはいけません」
TEV	「聖霊のお働きを抑えてはいけません」
NJB	「決して聖霊のお働きを抑えようとしてははいけません」

19~20 節は否定冠詞を伴う現在形能動態命令法動詞であり、通常は進行中の行為を止めることを意味する。Williams 訳では「聖霊のお働きを完全に抑える」となっている。19~22 節の5個の命令法動詞は同一文中になければならない。19、20 節の最初の2個の否定的命令法動詞は 21~22 節の3個の肯定的命令法動詞とは区別されている。「消す」は「火を消す」ことを意味する。私達の行為は聖霊のお働きに影響するのだ(イザヤ 63: 10、エペソ 4: 30 を参照)。

特別なトピック: 聖霊の御人格

旧約聖書では「神の霊」(つまり *ruach*) は YHWH の御意志を達成する力であったが、それが人格を持つ(つまり旧約聖書の一神教主義)ことは示されていない。しかし、新約聖書には聖霊の御人格の全てが記されている。

1. 聖霊は冒瀆されることがある(マタイ 12: 31、マルコ 3: 29 を参照)

2. 聖霊は教えられる(ルカ 12: 12、ヨハネ 14: 26 を参照)
3. 聖霊は弁護される(ヨハネ 15: 26 を参照)
4. 聖霊は確信と導きを与えられる(ヨハネ 16: 7-15 を参照)
5. 聖霊は「... でいらっしやる方」(つまり *hos*)と呼ばれる(エペソ 1: 14 を参照)
6. 聖霊は悲しまれることがある(エペソ 4: 30 を参照)
7. 聖霊は消されることがある(I テサロニケ 5: 19 を参照)

三位一体説を述べた聖書箇所も3つの御人格について述べている。

1. マタイ 28: 19
2. II コリント 13: 14
3. I ペテロ 1: 2

聖霊は人の活動に関与される。

1. 使徒行伝 15: 28
2. ローマ 8: 26
3. I コリント 12: 11
4. エペソ 4: 30

使徒行伝の冒頭では聖霊の役割が強調されている。ペンテコステは聖霊のお働きの始まりではなく、新しいお働きの始まりであった。イエスは常に聖霊を伴われた。聖霊のバプテスマは聖霊のお働きの始まりではなく、新しいお働きの始まりであった。ルカは新たに効果的な伝道の働きを始めるために教会を備えた。イエスは常に父なる神の愛の中心であられ、聖霊は常に父なる神の愛を受け取るための有効な手段であられる。そして神のお姿に似せて造られた全ての人類の赦しと回復が目標なのだ。

5: 20

NASB	「預言を軽んじてはいけません」
NKJV	「預言を軽んじてはいけません」
NRSV	「預言の言葉を軽んじてはいけません」
TEV	「神の啓示によるメッセージを軽んじてはいけません」
NJB	「決して... 預言の賜物を軽蔑してはいけません」

新約聖書における「預言」の定義については多くの議論がなされてきた。その賜物は I コリント 12: 28-29 とエペソ 4: 11 に挙げられている一連の霊的賜物の一つである。御言葉を書いた旧約聖書の預言者達が後の時代の使徒達の預言の賜物とどのように関係しているかは明らかではない。大半の学者は新約聖書の時代の啓示あるいは黙示を限定的な意味でとらえようとしている(ユダ 3 節と 20 節を参照)。

新約聖書の預言者達は明らかに旧約聖書の預言者達と同じではない。新約聖書における賜物は通常、新しい啓示(黙示)の情報にではなく実践的適用の問題と関連している。しかし、使徒行

伝 11: 27-30 と 21: 10-11 には預言的事柄が記されている。コリント人への手紙第一・第二では預言と予言（I コリント 13: 1、14: 1 と 39 節を参照）は福音宣教を意味する。この宣教が使徒や預言者や伝道者や牧師や教師の行うものどどのように異なるかは正確には明らかではない。

20 節はある意味で 19 節と関連している。このことがどの程度テサロニケの教会についてあてはまるかは正確には明らかではない。信徒は偽指導者を徹底的に拒み、神の御心にかなう指導者を熱烈に歓迎するべきである。

5: 21

NASB	「全てのことを吟味しなさい」
NKJV	「全てのことを吟味しなさい」
NRSV	「全てのことを吟味しなさい」
TEV	「全てのことを吟味しなさい」
NJB	「何かをする前には考えなさい」

これは現在形能動態命令法動詞である。その語は文字通り「そして全てのことを調べなさい」という意味である。この語は文脈中では(1)教会指導者(2)霊的賜物(3)霊的メッセージ(4)教義を指していると思われる。この語(*dokimazo*、3: 5 の特別なトピックを見よ)は「肯定的な見方で吟味する」という意味である(I コリント 12: 10、14: 29、I ヨハネ 4: 1 以降を参照)。霊的に見えるものもあるが現実にはそうではない(マタイ 7: 21-23、コロサイ 2: 16-23 を参照)。

特別なトピック: クリスチャンは互いに裁きあうべきか

この問題は2通りの方法で取り扱われなければならない。

1. 信徒は互いに裁きあわないように勧められている(マタイ 7: 1-5、ルカ 6: 37 と 42 節、ローマ 2: 1-11、ヤコブ 4: 11-12 を参照)。
2. 信徒は指導者を評価するように勧められている(マタイ 7: 6 と 15~16 節、I コリント 14: 29、I テサロニケ 5: 21、I テモテ 3: 1-13、I ヨハネ 4: 1-6 を参照)。
正しい評価のためのいくつかの基準が手助けとなりうる。
 1. 評価は承認の目的のためのものであるべきである(I ヨハネ 4: 1 を参照—肯定的な見方での「吟味」)。
 2. 評価は謙遜さと寛容さをもって行なわれるべきである(ガラテヤ 6: 1 を参照)
 3. 評価は個人的な好みの問題に注目して行なわれるべきではない(ローマ 14: 1-23、I コリント 8: 1-13、10: 23-33 を参照)
 4. 評価は教会内あるいは社会の中で「批判されることのない」指導者を見出すためのものであるべきである(I テモテ3章を参照)

「良いものを大切にしなさい」「大切にしなさい」も現在形能動態命令法動詞である。その語は吟

味されるものに関連していると思われる。この語は 15 節にあるギリシャ語の用語 *agathos* ではなく *kalos* (善つまり美)である。

5: 22「あらゆる形の悪を避けなさい」「避けなさい」は現在形中間態命令法動詞である。「悪」は男性名詞あるいは中性名詞と思われる。これはマタイ 6: 13 のような文中では問題となる。なぜならその聖書箇所は一般にサタンあるいは悪人を指していると考えられるからである。この文脈中ではこの語は一般に悪人あるいは悪を指していると考えられる。テサロニケ人への手紙第一では偽教師が強調されていないので、多分その語は 21 節の一般的「善」の対極にある語である。

聖句「あらゆる形の」は2通りに理解されうる：(1)KJV ではルカ 9: 29 と同じように「あらゆる姿の」と訳されている。初期教会の教父達もこのようにこの用語を理解した。(2) *Didache* 3: 1 はこの用語を「全ての悪」、つまり見た目にではない現実の悪という一般的な意味で用いているようだ。

NASB(改訂版)原典: 5: 23-24

²³ どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊と魂と体が完全なものとして守られ、主イエス・キリストの来られるときに非難されることのないものとなりますように。²⁴ あなたがたを招かれるお方は忠実で、必ずそのとおりにしてくださいます。

5: 23「平和の神御自身が... してくださいますように」 これはパウロの書簡の一般的な締めくくりの言葉である(ローマ 15: 33、16: 20、II コリント 13: 11、ピリピ 4: 6、II テサロニケ 3: 16 を参照)。何と素晴らしく叙述的な神の称号であろうか。

「聖なる者とし... 守られ」 これらはどちらもアオリスト願望法であり、願望と祈りを表現する法である。神が信徒を聖なる者として守ってくださるようにパウロは祈った。これは聖化が救いの賜物であり継続的な神の御業であることを示している。4: 3 の特別なトピック「聖化」を見よ。

「あなたがたを全く聖なる者としてくださいます」 この文では2つのギリシャ語の形容詞「全く」と「完全な」が3つの名詞「霊と魂と体」と結びついていて、私達の人格の完全さを強調しているが、人が三位一体の神のように(霊と魂と体の)3つに分割されるということは言っていない。ルカ 1 章 46~47 節では並行論によって魂と霊が同じであることが示されている。人は魂を持っていない。人が魂なのだ(創世記 2: 7 を参照)。この聖句は信徒が生活のあらゆる場面において聖なる者とされることへの召しを強調している(マタイ 5: 48 とエペソ 1: 4 を参照)。

「あなたがたの霊と魂と体が完全なものとして守られますように」 これは人類の存在論的三分割説(人類も神と同様に三位一体であるという概念)を裏付ける聖句ではなく、人類はこの惑星と神

との両方と関係を持っていることを示す聖句である。このヘブル語の用語 *nephesh* は創世記では人類と動物の両方に用いられており(創世記 1: 24 と 2: 19 を参照)、一方「霊」(*ruah*) は人類にのみ用いられている(命の息)。これは人類の三位一体的性質を裏付ける聖句ではなく、ヘブル 4 章 12 節もそうではない。人類は聖書では主に一つの体を持つものとして表現されている(創世記 2: 7 を参照)。人類の三分割説と二分割説と一体説については Millard J. Erickson 著 *Christian Theology* (第二版) の 538~557 ページと Frank Stagg 著 *Polarities of Man's Existence in Biblical Perspective* に十分な要約があるので見よ。

「非難されることのない」 この用語は新約聖書ではここにのみ見られる。この用語はテサロニケの碑文に見られるものである。その意味は、非難つまり告発されることのないこと、言い換えれば道徳的に無垢であることである。多分これは、傷がなく生贄とすることができるという意味の旧約聖書の用語「汚れなき」を反映しているのだろう。

「主イエス・キリストの来られるときに」 これは書簡全体の神学的論点、つまりイエスの再来である(1: 10、2: 19、3: 13、4: 13~15: 11、5: 23 を参照)。2: 19 と 3:13 の特別なピック「イエスの再来」を見よ。

5: 24「... お方は忠実です」 この語には YHWH の 2 番目の叙史的な称号(申命記 7: 9、イザヤ 49: 7、I コリント 1: 9、10: 13、II コリント 1: 18、II テサロニケ 3: 3 を参照)と御性質(詩篇 36: 5、40: 10、89: 1 と 2 節と 5 節と 8 節、92: 2、119: 90 を参照)を示す機能がある。信徒の信頼は YHWH の確かで不変の御性質にあるのだ(マラキ 3: 6 を参照)。

「招かれるお方... 必ずそのとおりにしていただきます」 3 番目の叙史的な称号「招かれるお方」は常に父なる神を指している(2: 12、4: 7 を参照)。この節は信徒の選びと称賛について述べている(ローマ 8: 29-34 を参照)。物事を始められ完成される、信頼に値する神にこの節は注目している(ピリピ 1: 6、2: 13 を参照)。私達の希望は、御自分のなさった約束を守られる神の忠実さにあるのだ。

NASB(改訂版)原典: 5: 25

²⁵ 兄弟たち、わたしたちのために祈ってください。

5: 25「わたしたちのために祈ってください」パウロは祈りの必要を感じた(ローマ 15: 30、エペソ 6 章 18~19 節、コロサイ 4: 3-4、ピリピ 1: 19 を参照)。祈りはある程度、効果的な働きのための神の力を解き放つ。統治者なる神は御自分の子の祈りの一部の内容については御自分が関与されないと決心されている(ヤコブ 4: 2 を参照)。私達各自はクリスチャンとしてこのことに責任を負って

いる。1: 2 の特別なピック「とりなしの祈り」を見よ。

NASB(改訂版)原典: 5: 26-27

¹⁵全ての兄弟たちに聖なる口づけで挨拶しなさい。¹⁶この手紙を全ての兄弟たちに読み聞かせるように、わたしは主によってあなたがたに強く命じます。

5: 26「聖なる口づけ」 初期教会の「誰が」「どこで」「どのように」この種の挨拶をしていたかは明らかではない。後に男性は男性の頬に、女性は女性の頬に口づけをするようになった(ローマ 16 章 16 節、I コリント 16: 20、II コリント 13: 23、I ペテロ 5: 14 を参照)。聖なる口づけは教徒の文化的な誤解が原因で廃止された。

これは彼らの愛と支持と交わりの文化的なしるしであった。私達の時代のアメリカの文化では抱擁あるいは親密な握手が同じ趣旨で行なわれている。それは私達がひとつであることを知るための象徴となるものなのだ。

5: 27 この節は指導者達へのメッセージである。パウロの手紙は宛先の地域の広く一般の信徒に読まれて(コロサイ 4: 16 を参照)、その後他の教会にも回し読まれるように書かれたものである。パウロは自身の書いた手紙が彼ら(読み手となる信徒達)自身の時代背景を超える意味を持つことを理解していた。

NASB(改訂版)原典: 5: 28

²⁸わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたとともにありますように。

5: 28 多分、パウロはこの手紙を自分が書いたことを証明するために、この言葉を自分自身に向けて書いたのだろう(II テサロニケ 3: 17-18 を参照)。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 私達はイエスの再来の日を定めようと試みるべきだろうか。それはなぜか。
2. 「主の日」を定義せよ。
3. なぜイエスの再来は(1)夜盗や(2)出産中の女性と表現されるのか。

4. 聖書にはクリスチャンの鎧についての議論が他にもあるか。
5. これらの聖書箇所のがれが一般信徒に向けて、また指導者達に向けて書かれているか。
6. この章の書かれた当時のテサロニケの背景として考えられることは何か。
7. この章に「現在形命令法動詞」がとても多いのはなぜか。この文法形式は私達にとって何の意味があるのか。

テサロニケ人への第二の手紙1章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
挨拶	挨拶	挨拶	挨拶	挨拶
1: 1-2	1: 1-2	1: 1-2	1: 2	1: 1-2
			1: 3	
キリストが来られるときの裁き	神の最後の裁きと栄光	感謝	キリストが来られるときの裁き	感謝と励まし。最後の裁き
1: 3-12	1: 3-12	1: 3-4	1: 3-4	1: 3-5
		神の裁き		
		1: 5-12	1: 5-10	
				1: 6-10
			1: 11-12	1: 11-12

第三読書サイクル(vii ページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

1～10節の文脈の考察

- A. テサロニケ人への手紙第二はテサロニケ人への手紙第一の終末論的テーマを発展させている。
- B. ギリシャ語訳聖書では 3～10 節が一つの文となっている。それらの節にはパウロの信徒への

信頼と未信者への神の裁きに対する信頼が述べられている。ここでは神の最後の裁きがとも強調されている。裁く者と裁かれる者、つまり祝福を受ける者と受けない者の地上における立場は逆転することになっている。

C. 11～12 節は 3～10 節の要約である。

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 1: 1-2

¹パウロとシルワノとテモテから、わたしたちの父なる神と主イエス・キリストに結ばれているテサロニケの教会へ。²父なる神と主イエス・キリストからの恵みと平和があなたがたにありますように。

1: 1「パウロ」タルソスのサウロは使徒行伝 13: 9 で初めてパウロと呼ばれる。「ディアスポラ」のユダヤ人の大半はヘブル語の名前とギリシャ語の名前を持っていたようだ。もしそうなら、サウロの両親は彼にこの名前をつけたということになるが、なぜ使徒行伝 13 章で突然パウロという名前が登場するのだろうか。多分

1. 他者が彼をこの名前で呼び始めたから
2. 彼が自身を「小さい」または「最も小さい」という言葉で表現し始めたから

だろう。ギリシャ語の名前 *Paulos* は「小さい」を意味した。彼のギリシャ語名の起源についていくつかの理論が提唱されている。

1. パウロは背が低く、太っていて、はげ頭で、足が曲っていて、眉が濃く、目が飛び出していたという2世紀の言い伝えがこの名前のもとになったようだが、これはテサロニケの *Paul and Thekla* と呼ばれる聖書正典ではない書に由来するものである。
2. パウロが自身を、自分がかつて使徒行伝 9: 1-2 にあるように教会を迫害したので「聖人達のうちで最も小さい」と呼んでいる段落 (I コリント 15: 9、エペソ 3: 8、I テモテ 1: 15 を参照)。

研究者達の中にはこの「最も小さいこと」をひとりでに選ばれた呼び名 [訳者注: パウロ] の起源とする者もいる。しかし、ガラテヤ人への手紙のような書の中でパウロはエルサレムの 12 使徒との非依存性と平等性を強調しているので、この意見 [訳者注: 「最も小さいこと」をパウロという名前の起源とする説] はやや説得力に欠けるようだ (II コリント 11: 5、12: 11、15: 9 を参照)。

「シルワノ」 シラスは

1. 使徒行伝の中ではシラスと呼ばれ、使徒書簡の中ではシルワノと呼ばれている。
2. バルナバと同様にエルサレムの教会の指導者であった (使徒行伝 15: 22-23 を参照)。
3. パウロと親交があった (使徒行伝 15: 40、16: 19 以降、17: 1-15、I テサロニケ 1: 1 を参照)。
4. バルナバとパウロと同様に預言者であった (使徒行伝 15: 32 を参照)。

5. 使徒と呼ばれている（Ⅰテサロニケ 2: 6 を参照）。
6. パウロと同様にローマ市民であった（使徒行伝 16: 37-38 を参照）。
7. ヨハネ・マルコとともにペテロに同行している。多分書記として仕えたのだろう（Ⅰペテロ 5: 12 を参照）。

「テモテ」

1. その名は「神をあがめる人」という意味である。
2. 母はユダヤ人、父はギリシャ人で、リストラに住んでいた（使徒行伝 16: 1 を参照）。Origen の注解書のローマ 16: 21 のラテン語訳によればテモテは Derbe 市民であった。多分これは使徒行伝 20: 4 からとられたのだろう。
3. 母親と祖母からユダヤ教の教えを受けた（Ⅱテモテ 1: 5、3: 14-15 を参照）
4. パウロの最初の伝道旅行の際にキリストを信じた（使徒行伝 13: 49~14: 25 を参照）。
5. 第二回伝道旅行におけるパウロとシラスの伝道チームへの同行を求められた（使徒行伝 16: 1-5 を参照）。予言により堅信礼を受けた（Ⅰテモテ 1: 18、4: 14 を参照）。
6. ユダヤ人とギリシャ人に対する働きができるようにパウロによって割礼を受けた（使徒行伝 16: 3 を参照）。
7. パウロにとって献身的な、伝道の働きにおける仲間であり同僚であった。その名はパウロの他のいかなる協力者よりも多く挙げられている（10 の書簡中 17 回。ローマ 16: 21、Ⅰコリント 4: 17、16: 10、ピリピ 1: 1、2: 19 と 22 節、コロサイ 1: 5、Ⅰテサロニケ 1: 1、2: 6、3: 2、Ⅰテモテ 1: 2 と 18 節、4: 14、Ⅱテモテ 1: 2、3: 14-15 を参照）。
8. パウロは愛情をこめてテモテを「私の信仰の子」（Ⅰテモテ 1: 2 を参照）、「私の愛する子」（Ⅱテモテ 1: 2 を参照）、「同じ信仰を持つ、私のまことの子」（テトス 1: 4 を参照）と呼んだ。
9. パウロが監獄から釈放されたとき、テモテはローマにいたらしく、パウロの第四回伝道旅行に同行している（コロサイ 1: 1、ピレモン 1 節を参照）。
10. 使徒と呼ばれている（Ⅰテサロニケ 2: 6 を参照）。
11. 霊的指導のために書かれた3つの使徒書簡のうちの2つがテモテについて述べている。
12. テモテについての最後の記述はヘブル 13: 23 にある。

「教会」 このギリシャ語の用語 *ekklesia* は「神に召し出された人々」を意味する。これと同じ意味の用語はギリシャの都市内の集会（使徒行伝 19: 32 を参照）。セプトウアギンタの中で用いられているものは *qahal*（BDB874、出エジプト 12: 6、レビ 16: 17、民数記 20: 4、申命記 31: 30 を参照）、つまりイスラエルの「集会[あるいは会衆]」と訳されている。初期教会のクリスチャンは自分達を旧約聖書のイスラエルが成就して殖えた民と見ていた。ガラテヤ 1: 2 の特別なトピックを見よ。

「わたしたちの父なる神と主イエス・キリストに結ばれている」 この聖句はⅠテサロニケ 1: 1 とⅡ

テサロニケ 1: 1 の挨拶の間のいくつかの違いのうちの一つである。信徒達は神を「わたしたちの父」と呼ぶことができる(マタイ 6: 9 を参照)。もちろん、神は肉体的・世代的、つまり時系列上の関係における父ではなく、家族関係的な意味での父でいらっしゃる。ガラテヤ 1: 1 の特別なトピックを見よ。

文法構造(2つの目的語「父」と「主」を伴う1つの前置詞“*en*”)は新約聖書の著者達が父なる神と御子を関連づけるのに用いた方法の一つである(I テサロニケ 1: 1 を参照)。この文法構造は父なる神と御子が同じでいらっしゃる事、つまりイエスの神性を示しているようだ。

パウロは信徒について述べる際に「キリストに結ばれている」という表現を好んで用いたが、ここでは彼は信徒が父なる神とも結ばれていることを強調している。

1: 2「恵みと平和があなたがたにありますように」 多くの人はこれをユダヤとギリシャの挨拶の言葉の組み合わせと見ている。反復聖句「父なる神と主イエス・キリストからの」は接続詞「と」とひとつの前置詞によって神と御子を関連づけており、(1 節と同じように)イエスの神性についてのパウロの神学を示している。神学的恵みは常に平和に先行するのだ。

NASB(改訂版)原典: 1: 3-12

³兄弟たち、わたしたちがあなたがたのことでいつも神に感謝するのは当然であり、またそうしないではられません。なぜならあなたがたの信仰が大いに成長し、あなたがた一人一人の互いに対する愛もまた大きくなっているからです。⁴そういうわけで、わたしたち自身、あなたがたが受けているあらゆる迫害と苦難のただ中で忍耐と信仰を示していることを、神の教会の間で語ることを誇りとしています。⁵これはまさしく、あなたがたを神の御国にふさわしい者とするための神の判定が正しいということを示しています。あなたがたが苦しみを受けているのは、まさにそのためなのです。⁶神はまことに正しい方ですから、あなたがたを苦しめる者には苦しみをもって報いられ、⁷そして苦しみを受けているあなたがたとわたしたちには、主イエスが力強い天使達を率いて燃え盛る炎の中を来られるときに休息をもって報いられ、⁸神を知らない人々や、わたしたちの主イエスの福音に従わない人々には罰をもって報いられるのです。⁹これらの人々は永遠の破滅という罰を受け、主の御前と主の御力の栄光から遠ざけられることとなります。¹⁰その日、主は来られて、御自分の聖なる者たちの間であがめられ、また、信じる者たち全ての間でほめたたえられるのです。それはあなたがたがわたしたちの証しを信じたからです。¹¹このことのためにも、わたしたちはいつもあなたがたのために祈っています。どうか、わたしたちの神があなたがたを招きにふさわしい者としてくださり、また善を求めるあらゆる願いと信仰の働きを御力をもって成就させてくださいますように。¹²それは、わたしたちの神と主イエス・キリストの恵みによって、わたしたちの主イエスの御名があなたがたの間であがめられ、そしてあなたがたも主によって誉れを受けるようになるためです。

1: 3「わたしたちがあなたがたのことでいつも神に感謝するのは当然であり」これはパウロの諸教会のための祈りの生活を反映している(11 節、I テサロニケ 1: 2、II テサロニケ 2: 13、ピリピ 1 章 3-4、II コリント 11: 28 を参照)。いつも神に感謝して祈ることが当然だとパウロは感じていた (I テサロニケ 5: 18 を参照)。I テサロニケ 1: 2 の特別なトピック「感謝」を見よ。

NASB 「なぜならあなたがたの信仰が大いに成長し」
NKJV 「なぜならあなたがたの信仰が大いに成長し」
NRSV 「なぜならあなたがたの信仰が大いに成長して」
TEV 「なぜならあなたがたの信仰が大いに成長して」
NJB 「なぜならあなたがたの信仰がすばらしく成長して」

この農業から採られた比喻は植物の盛んな成長を表現している(II コリント 10: 15、II ペテロ 3 章 18 節を参照)。ガラテヤ 1: 13 の特別なトピック「パウロの *Huper* 複合語の使用」を見よ。パウロは彼ら(テサロニケの教会)の信仰と愛の成長を賞賛した。これは I テサロニケ 1: 3 と同様である。しかし、ここに「希望」という語が見当たらないことに注意しなさい。ここにも多くの混乱(つまり主の再来について。ガラテヤ 5: 5 の特別なトピックを見よ)が生じている。

「あなたがた一人一人の互いに対する愛」教会内の交わりの問題(I テサロニケ 3: 12、5 章 12 ~13 節、I ヨハネ 4: 7、11 節、12 節、31 節を参照)においては、このように彼らの互いに対する愛をほめたたえることが重要であった。

「もまた大きくなっている」この表現は洪水が増大するイメージを比喩的に述べるのに用いられる。

1: 4「わたしたち自身、あなたがたが... していることを語ることを誇りとしています」この聖句では「あなたがた」と対照的に「わたしたち自身」が強調されている。テサロニケの教会は自身の弱さを感じていた(I テサロニケ 5: 14 を参照)。パウロは彼らの強さを見て、そして明言している。迫害の中にあっても彼らがキリストのようであり続けていたことは、パウロの使徒としての働きが有効であったことの証しであった(I テサロニケ 2: 19 を参照)。

NASB 「忍耐」
NKJV 「忍耐」
NRSV 「堅実さ」
TEV 「あなたがたが耐え忍び続けている方法について」
NJB 「堅実さ」

これは文字通り「自由意志による積極的で堅実な忍耐」(I テサロニケ 1: 3 を参照)である。それ

は人と状況の両方に関係がある。このことも聖霊が彼らの生活に働かれていることの証しである。ガラテヤ 5: 4 の特別なトピック「忍耐」を見よ。

「信仰」旧訳聖書ではこの用語は神の忠実さと人類の信頼による応答を指すものとして用いられている(ハバクク 2: 4 を参照。ガラテヤ 3: 4 の特別なトピックを見よ)。ここではこの用語は迫害のただ中での彼ら(テサロニケの教会)の忠実さを指すものとして用いられている。パウロは I テサロニケ 3: 10 で彼らの信仰について祈り、そしてここでは彼らの信仰をたたえている。信仰を通して神の忠実さは信徒の忠実さとなる。ガラテヤ 3: 6 の特別なトピックを見よ。

「あなたがたが受けているあらゆる迫害と苦難のただ中で」 墮落した世にある信徒にとって受難は日常茶飯事である(マタイ 5: 10-12、使徒行伝 14: 22、ローマ 8: 17-18、I テサロニケ 2: 14、3: 3、ヤコブ 1: 2-4、I ペテロ 4: 12-16 を参照)。しばしばそれは私達の霊的成長の最良の手段となりうる(ハバクク 5: 8 を参照)。I テサロニケ 1: 10 の特別なトピック「苦難」と I テサロニケ 3: 3 の特別なトピック「なぜクリスチャンは苦難に遭うのか」を見よ。

1: 5「これはまさしく、神の判定が正しいということを示しています」 これは、御自分の民を迫害する未信者達に対して噴出される神の怒り(ピリピ 1: 28 を参照)について述べている。

用語「義である」の研究成果についてはガラテヤ 2: 21 の特別なトピックを見よ。

NASB 「あなたがたを(神の御国に)ふさわしい者とするための」

NKJV 「あなたがたが(神の御国に)ふさわしい者とみなされるようにするための」

NRSV 「あなたがたを(神の御国に)ふさわしい者とするための」

TEV 「このこと全ての結果としてあなたがたが(神の御国に)ふさわしい者となるための」

NJB 「あなたがたが(神の御国に)ふさわしい者とみなされるようにするための」

これはアオリスト受動態不定詞であり、「(神の御国に)ふさわしい者と宣言される」という意味を持つ。この受動態は、父なる神がその行為の主体でいらっしゃることを暗示している。これは苦しみを受ける目的の一つである。それは私達の人格を形成する(11 節、ローマ 5: 3-4、ハバクク 5: 8 を参照)。

これは、信徒がキリストに結ばれていることによる地位としての義と、信徒が義であり続ける必要との間の神学的な違いのよい例である。神の御前における私達の地位は賜物(直説法動詞)であるばかりではなく義務(命令法動詞)である。この真理を表現する方法は運動選手の比喩を用いることだろう。信徒はキリストとの信仰の関係によって競争に勝利している。信徒は競争の場においてキリストのために忠実に走らなければならない。行いを必要としない喜びはクリスチャンを神の御心にかなうものとする(I テサロニケ 2: 12、エペソ 4: 1 と 17 節、5: 2 を参照)。

「**神の御国に**」これは共観福音書群においてとても重要な聖句である(ガラテヤ 5: 21 の特別なトピックを見よ)。イエスの最初と最後の説教とたとえ話の大半ではこのトピックが取り扱われている。これは人の心の中の神の統治について述べているのだ。この聖句がヨハネの福音書の中にたった2回しか見られない(イエスのたとえ話の中には全く見られない)のは驚くべきことである。ヨハネの福音書では「永遠の命」は重要な用語であり比喻でもある。

この聖句はイエスのお教えの終末論的な部分と関連がある。この「(神の御国は)すでにあるが、まだ来ていない」という神学上の矛盾はユダヤ教の2つの世、つまり現在の悪の世とメシアが始められることになっている、来るべき義の世の概念と関連がある。ユダヤ人は(旧約聖書に登場する士師達のような)聖霊により力を受けた一人の軍事指導者がただ一度来ることを期待した。イエスが2度来られたことによって2つの世は重なった(ガラテヤ 1: 4 の特別なトピック「2つの世」を見よ)。神の御国はベツレヘムにおける受肉(イエスの御誕生)によって人類の歴史に突然現れた。しかし、イエスは黙示録19章に見られるような軍事的征服者ではなく、苦しむ奴隷(イザヤ53章を参照)および謙遜な指導者(ゼカリヤ 9: 9 を参照)として来られた。だから、神の御国は始まった(マタイ 3: 2、4: 17、10: 7、11: 2、12: 28、マルコ 1: 15、ルカ 9: 9 と 11 節、11: 20、21: 31-32 を参照)が、完成してはいない(マタイ 6: 10、16: 28、26: 64 を参照)。

1: 6

NASB 「神はまことに正しい方ですから」

NKJV 「神は正しい方ですから」

NRSV 「神はまことに正しい方ですから」

TEV 「神は正しいことを行なわれる方ですから」

NJB 「神はまことに正しい方ですから」

これは著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定した第一種条件文である。神の裁きは正しいのだ。

「**神は...をもって報いられます**」これは道徳世界の秩序である。神は正しいことを行なわれる方なのだ(ガラテヤ 6: 7 の詳細な解説を見よ)。

1: 7「**わたしたちには**」パウロも苦しみを受けていた(I コリント 4: 9-13、II コリント 4: 8-12、6 章 4 ~10 節、11: 24-27 を参照)。

「**主イエスが来られるときに**」これは文字通り「主イエスの啓示のときに」である。ここには動詞がない。*Apocalypsis* は「はつきりと現れる」という意味である(I コリント 1: 7 を参照)。これは主イエスの再来を指している。神の正しい裁きの時(5 節を参照)とは主イエスが再びこの世に来られるとき、つまり復活の日あるいは審判の日なのである(マタイ 25: 31-46、黙示録 20: 11-15 を参照)。

I テサロニケ 3: 13 の特別なトピックを見よ。

「力強い天使達を率いて」これは聖書の一般的主題である(申命記 33: 2、ゼカリヤ 14: 5、マタイ 16: 27、25: 31、マルコ 8: 38、ユダ 14 節、黙示録 19: 14 を参照)。主イエスは聖なる者達も伴って来られる(I テサロニケ 4: 13-18 を参照)。マタイ 13: 41 と 24: 31 は天使が人類を集めて分けることになっていることを暗示している(マタイ 13: 39-41、24: 31 を参照)。

「燃え盛る炎の中を」これは神の裁きの象徴である(イザヤ 29: 6、30: 27-30、66: 14-15、ダニエル 7: 9-10 を参照)。

この聖句が 7 節あるいは 8 節のどちらに入るのかについては混乱が生じている。もし 7 節に入るなら天使と関連があり、8 節に入るなら裁きと関連があることになる。NKJV と NRSV と REB はこの聖句を 8 節に入れている。

特別なトピック: 火

火は聖書の中で肯定的な意味と否定的な意味を持つ。

A. 肯定的な意味

1. 暖める(イザヤ 44: 15、ヨハネ 18: 18 を参照)
2. 光で照らす(イザヤ 50: 11、マタイ 25: 1-13 を参照)
3. 調理する(出エジプト 12: 8、イザヤ 44: 15-16、ヨハネ 21: 9 を参照)
4. 聖める(民数記 31: 22-23、箴言 17: 3、イザヤ 1: 25、6: 6-8、エレミヤ 6: 29、マラキ 3 章 2-3 節を参照)
5. 聖さ(創世記 15: 17、出エジプト 3: 2、19: 18、エゼキエル 1: 27、ヘブル 12: 29 を参照)
6. 神の指導権(出エジプト 13: 21、民数記 14: 14、I 列王記 18: 24 を参照)
7. 神の権力(使徒行伝 2: 3 を参照)
8. 保護(ゼカリヤ 2: 5 を参照)

B. 否定的な意味

1. 焼く(ヨシュア 6: 24、8: 8、11: 11、マタイ 22: 7 を参照)
2. 破壊する(創世記 19: 24、レビ 10: 1-2 を参照)
3. 怒る(民数記 21: 28、イザヤ 10: 16、ゼカリヤ 12: 6 を参照)
4. 処罰(創世記 38: 24、レビ 20: 14、21: 9、ヨシュア 7: 15 を参照)
5. 終りの時の偽りのしるし(黙示録 13: 13 を参照)

C. 罪に対する神の怒りは火のたとえで表現される。

1. 神の怒りは燃える(ホセア 8: 5、ゼパニヤ 3: 8 を参照)
2. 神は火を注がれる(ネヘミヤ 1: 6 を参照)
3. 永遠の火(エレミヤ 15: 14、17: 4 を参照)

4. 終りの時の裁き(マタイ 3: 10、13: 40、ヨハネ 15: 6、Ⅱテサロニケ 1: 7、Ⅱペテロ 3: 7-10、黙示録 8: 7、16: 8を参照)

D. 聖書中の多くの比喻(例えばパン種や獅子)と同様に、火は文脈によっては祝福にも呪いにもなりうる。

NASB 「罰をもって報いられるのです」

NKJV 「復讐されます」

NRSV 「復讐されます」

TEV 「処罰する」

NJB 「罰を与える」

これは現在形能動態分詞である。これは感情的な復讐による応答ではなく、「万人に対する例外的な裁き」である。神の造られたものは神の御性質を反映しているのだ。

「神を知らない人々には」この語は異教徒が故意に光を拒んでいること(詩篇 79 篇 6 節、エレミヤ 10: 25、Ⅰテサロニケ 4: 5、ヨハネ 3: 17-21、ローマ 1: 18 と 25 節、2: 14-15 を参照)とテサロニケの信徒達が受けていた迫害を反映している。この聖句は神について知ることで見出す真理(ギリシャ語の「知る」の概念)だけでなく神との親密な交わり(ヘブル語の「知る」の概念)についても述べている。用語「知る」はヘブル語では親密な交わりを意味する(創世記 4: 1、エレミヤ 1: 5、マルコ 14: 71、テトス 1: 16 を参照)。

特別なトピック: 知る(申命記を論理的枠組みとして用いたヘブル語の用語研究)

ヘブル語の用語「知る」(BDB393)は *Qal* の中でいくつかの意味(セム語領域)を持つ。

1. 善悪を理解する—創世記 3: 22、申命記 1: 39、イザヤ 7: 14-15、ヨナ 4: 11
2. 理解によって知る—申命記 9: 2 と 3 節と 6 節、18: 21
3. 経験によって知る—申命記 3: 19、4: 35、8: 2 と 3 節と 5 節、11: 2、20: 20、31: 13、ヨシュア 23 章 14 節
4. 考える—申命記 4: 39、11: 2、29: 16
5. 個人的に知る
 - a. 人—創世記 29: 5、出エジプト 1: 8、申命記 22: 2、33: 9
 - b. 神—申命記 11: 28、13: 2 と 6 節と 13 節、28: 64、29: 26、32: 17
 - c. YHWH—申命記 4: 35 と 39 節、7: 9、29: 6、イザヤ 1: 3、56: 10-11
 - d. 性的に—創世記 4: 1 と 17 節と 25 節、24: 16、38: 26
6. 学んだ技術あるいは知識—イザヤ 29: 11 と 12 節、アモス 5: 16
7. 賢くなる—申命記 29: 4、箴言 1: 2、4: 1、イザヤ 29: 24
8. 神の知識

- a. モーセの—申命記 34: 10
- b. イスラエルの—申命記 31: 21 と 27 節と 29 節

「福音に従わない人々には」解説者の中にはこれがテサロニケの信徒達を迫害している第二のグループであると、つまり最初の聖句(「神を知らない人々」)は異教徒を指し、2番目(「福音に従わない人々」)はユダヤ人を指していると考える者もいる。

1: 9「罰」これは8節の「罰」と同じ語幹を持つ。

「永遠の破滅」「永遠」(マタイ 18: 8、25: 41、マルコ 3: 29、ヘブル 6: 2、ユダ 7 節を参照)は「時代(世)」と同じ語幹を持つ(マタイ 28: 20、ヘブル 1: 2 を参照)。マタイ 25: 46 ではこの語は天国と地獄の両方を言い表している(I テサロニケ 2: 16 を参照)。現在の時(世)における人の福音への応答はその人が未来に生きることになる時(世)をはっきりと決める。

用語「破滅」(*olethros*)は I コリント 5: 5 と I テサロニケ 5: 3 と I テモテ 6: 9 にも見られる。この語の意味は「存在の価値を与えるもの全ての喪失」(Moulton と Milligan の共著の 445 ページ)であり、壊滅(*exolethreuo*、申命記 18: 19 の解説の LXX)ではない。

特別なトピック: 永遠

Robert B. Girdlestone は自著 *Synonyms of the Old Testament* の中で用語「永遠」について興味深いことを言っている。

「形容詞 *aionios* は『永遠の命』の関連語として新約聖書で 40 回以上用いられており、現在持っている賜物を指すこともあれば、未来に与えられることが約束されている賜物を指すこともある。この語は神の永久的な御存在(ローマ 16: 26)やキリストの聖別の永久的有効性(ヘブル 9: 12 と 13: 20)あるいは過ぎ去った世(ローマ 16: 25、II テモテ 1: 9、テトス 1: 2)を指すこともある。

この語は『永遠の炎』(マタイ 18: 8 と 25: 41、ユダ 7 節)や『永遠の罰』(マタイ 25: 46)や『永遠の裁きつまり懲らしめ』(マルコ 3: 29、ヘブル 6: 2)あるいは『永遠の破滅』(II テモテ 1: 9)を指して用いられる。この語はこれらの聖書箇所において『終局』を意味し、これらの裁きが行なわれるときに審判と変化の時、あるいは人の運命がよい方向へと向かう機会が必ずそして永久に続いていくことになっていることをはっきりと示す。我々が未来について、人間の人生と寿命の関係について、あるいは未信者の道徳的価値について、永遠という観点から理解していることはほんのわずかである。一方、我々が神の御言葉に付け加えや削除を行ってはいけなないのであれば、あるいは我々が永遠の罰の教義を聖句に先立つものと錯覚してしまうのであれば、我々はその間に自分達が理解できない闇の背景的事柄があることを知り、一歩立ち止まって、キリストにある神の愛という福音をそこから切り離して考えなければならない(318~319 ページ)。

「主の御前から遠ざけられることとなります」これは地獄のさらに悪い一面である。KJVの詩篇139: 8には「わたしが陰府(よみ)に身を横たえようと、見よ、あなたはそこにいます」とあるが、詩篇ではこれは、神から永久的に引き離された場所である *Gehenna* (マタイ 5: 22 と 29 節と 30 節、10: 28、18: 9、23: 15 と 33 節、マルコ 9: 43 と 45 節と 47 節、ルカ 12: 5 を参照)ではなく *Sheol* あるいは *Hades* (死者が安置される場所。マタイ 11: 23、16: 18、ルカ 10: 15、16: 23、黙示録 1: 18、20 章 13~14 節を参照)を指している。

特別なトピック: 死者はどこにいるのか

I. 旧約聖書

A. 人は皆 *Sheol* (語源は不明。BDB1066)に行く。*Sheol* とは死または墓を一語で言い表したものであり、主に知恵の書とイザヤ書に見られる。旧約聖書ではそれは薄暗く、人に意識されるが喜びのない存在である(ヨブ 10: 21-22、38: 17、詩篇 107: 10 と 14 節を参照)。

B. *Sheol* の特徴

1. 神の裁き(火)と関係がある。申命記 32: 22
2. 審判の日以前の処罰と関係がある。詩篇 18: 4-5
3. 神も関与される *abaddon* (破壊)と関係がある。ヨブ 26: 6、詩篇 139: 8、アモス 9: 2
4. 「穴」(墓)と関係がある。詩篇 16: 10、イザヤ 14: 15、エゼキエル 31: 15-17
5. *Sheol* に生きたまま降ってきた悪しき者。民数記 16: 30 と 33 節、詩篇 55: 15
6. しばしば擬人化される、大きな口を持つ動物。民数記 16: 30、イザヤ 5: 14、14: 9、ハバクク 2: 5
7. *Repha'im* と呼ばれる所にいる人々。イザヤ 14: 9-11

II. 新約聖書

A. ヘブル語の用語 *Sheol* はギリシャ語の用語 *Hades*(まだ見ぬ世界)の訳語である。

B. *Hades* の特徴

1. 死を指す語。マタイ 16: 18
2. 死の関連語。黙示録 1: 18、6: 8、20: 13-14
3. しばしば永遠の処罰の場(*Gehenna*)と似ていると言われる場所。マタイ 11: 23(旧約聖書からの引用)、ルカ 10: 15、16: 23-24
4. しばしば墓と似ていると言われる場所。ルカ 16: 23

C. 分けて考えられる場所(ラビの見解)

1. パラダイス(天国の別名として実際に用いられている語。II コリント 12: 4、黙示録 2 章 7 節を参照)と呼ばれる義なる場所。ルカ 23: 43
2. *Tartarus* と呼ばれる悪しき場所。II ペテロ 2: 4。悪の天使がいる場所(創世記 6 章、I エノクを参照)。

D. *Gehenna*

1. 旧約聖書の聖句「Hinnom の子らの谷」(エルサレムの南)を反映する語。その地はフェニキアの火の神 *Molech* (BDB574)が子供の生贄を通して崇拝された場所であった(Ⅱ列王記 16: 3、21: 6、Ⅱ歴代誌 28: 3、33: 6を参照)。子供の生贄を通した礼拝はレビ 18: 21 と 20: 2-5 で禁止された。
2. エレミヤはその語の意味を異教崇拝の場から YHWH の裁きの場に変えた(エレミヤ 7: 32、19: 6-7を参照)。その地はⅠエノク 90: 26-27 とシビル 1: 103 では火による永遠の裁きの場となった。
3. イエスのおられた時代のユダヤ人は自分の祖先が子供の生贄を通した異教崇拝に参加していたことに恐怖を覚えて、その地域をエルサレムにおけるごみ捨て場に変えた。永遠の裁きに関してイエスが用いられた比喻の多くはこのごみ捨て場由来している(火、煙、虫、悪臭。マルコ 9: 44 と 46 節を参照)。用語 *Gehenna* はイエスだけが用いられた(ヤコブ 3: 6を除く)。
4. イエスの *Gehenna* の用法
 - a. 火。マタイ 5: 22、18: 9、マルコ 9: 43
 - b. 永久。マルコ 9: 48(マタイ 25: 46)
 - c. (魂と体の)破壊の場。マタイ 10: 28
 - d. *Sheol* の並列語。マタイ 5: 29-30、18: 9
 - e. 「地獄の子」と呼ばれる悪しき者のいる場所。マタイ 23: 15
 - f. 判決文の結果。マタイ 23: 33、ルカ 12: 5
 - g. *Gehenna* の概念は第二の死(黙示録 2: 11、20: 6 と 14 節を参照)つまり火の池(マタイ 13: 42 と 50 節、黙示録 19: 20、20: 10 と 14~15 節、21: 8 を参照)と並立する。火の池は人類(*Sheol* から来る)と悪の天使(*Tartarus*[Ⅱペテロ 2: 4、ユダ 6 節を参照]、つまり深淵[ルカ 8: 31、黙示録 9: 1-11、20: 1 と 3 節を参照]から来る)が永久的に住む場所となるのかもしれない。
 - h. その場所は人類ではなくサタンと悪の天使の住む場所である。マタイ 25: 41
- E. *Sheol* と *Hades* と *Gehenna* は重複するので、次のようなことがありうる。
 1. 元々、人は皆 *Sheol* または *Hades* に行くことになっていた。
 2. そこで人類が経験することは良いことも悪いことも、審判の日以降に悪化するが、悪しき者のいる場所はそのままである。このようなわけで KJV では *hades* (墓)が *gehenna* (地獄)と訳されている。
 3. 新約聖書の中で神の裁きの前の苦しみについて述べられている唯一の箇所はルカ 16: 19-31 のたとえ話(ラザロと金持ちのとえ話)である。この箇所でも *Sheol* は処罰の場と言いつわされている(申命記 32: 22、詩篇 18: 1-5)。しかし、人はたとえ話の中で教義をはっきり述べることはできない。

Ⅲ. 死と復活の中間状態

- A. 死後についての古代のいくつかの考え方の一つである「魂の不滅」を新約聖書は教えていない。
1. 人の魂は肉体の生の前に存在する。
 2. 人の魂は肉体の死の前後で永遠である。
 3. しばしば肉体は監獄とみなされ、死は生前の状態に戻ることとみなされる。
- B. 新約聖書は死と復活の間の肉体離脱状態を暗示している。
1. イエスは肉体と魂の分離について語られている。マタイ 10: 28
 2. アブラハムは今では肉体を持っているかもしれない。マルコ 12: 26-27、ルカ 16: 23
 3. モーセとエリヤは変容の時に肉体を持つ。マタイ 17 章
 4. イエスの再来の時にキリストに結ばれた魂が最初に新しい体を得ることになるとパウロは主張している。I テサロニケ 4: 13-18
 5. 主の復活の日に信徒は新しい霊的な体を得るとパウロは主張している。I コリント 15: 23 と 52 節
 6. 信徒は *Hades* に行かず、死の時にイエスとともにいるとパウロは主張している。II コリント 5: 6 と 8 節、ピリピ 1: 23。イエスは死を凌駕され、義なる者達とともに天へ向かわれる。I ペテロ 3: 18-22

IV. 天国

- A. この用語は聖書の中で3通りの意味で用いられている。
1. 大地の上方にある大気。創世記 1: 1 と 8 節、イザヤ 42: 5、45: 18
 2. 数多くの星のある天空。創世記 1: 14、申命記 10: 14、詩篇 148: 4、ヘブル 4: 14 と 7: 26
 3. 神の御座のある場所。申命記 10: 14、I 列王記 8: 27、詩篇 148: 4、エペソ 4: 10、ヘブル 9: 24(第三の天。II コリント 12: 2)
- B. 聖書は死後のことについてははっきりとは述べていないが、多分それは墮落した人類に理解する能力がないからだろう(I コリント 2: 9 を参照)
- C. 天国は場所(ヨハネ 14: 2-3 を参照)であり人(II コリント 5: 6 と 8 節を参照)である。天国は回復されたエデンの園(創世記 1~2 章、黙示録 21~22 章)と言えるだろう。地は聖められ回復されることになっている(使徒行伝 3: 21、ローマ 8: 21、II ペテロ 3: 10 を参照)。神のお姿(創世記 1: 26-27)はキリストのうちに回復される。エデンの園での親しい交わりは再開可能となったのだ。
- しかし、これは比喩的であり(黙示録 21: 9-27 の巨大な立体都市としての天国)文字通りではない。コリント人への手紙第一の 15 章には肉体と霊的体の違いが種と成長した植物の違いに例えられて表現されている。I コリント 2: 9(イザヤ 64: 4 と 65: 17 からの引用)は大いなる約束であり希望なのだ。私達が主イエスに会うときに主のようになることを私は知っている。

V. 有用な文献

A. William Hendriksen 著 *The Bible On the Life Hereafter*

B. Maurice Rawlings 著 *Beyond Death's Door*

「と主の御力の栄光から」これはイザヤ 2: 10と 19 節と 21 節を暗示しているようだ。墮落した人類はイスラエルの唯一の聖なる神の栄光の御臨在、つまり神の御前を避ける。私達人類が最も必要としているものが神との交わりであるにもかかわらず、罪と反逆のために私達が、栄光ある交わりのために御自身に似せて私達を造られた神を恐れて神の御前を避けていることは、神の造られたものにとって悲劇である。

旧約聖書では、「栄光」を指す最も一般的なヘブル語の用語 (*kbd*, BDB458) は元々は「重い」という意味の商業用語 (天秤を指す) であった。当時は重いものが本質的に価値あるものと考えられていたのである。しばしば輝きの概念は神の偉大さを表現するために単語に付加された (出エジプト 15: 16、24: 17、イザヤ 60: 1-2 を参照)。神だけが価値ありほめたたえられるべきお方である。墮落した人類にとって神はあまりにも眩しくて見ることのできないお方である (出エジプト 33 章 17-23 節、イザヤ 6: 5 を参照)。神はキリストを通してのみ本当の意味で知ることのできるお方である (エレミヤ 1: 14、マタイ 17: 2、ヘブル 1: 3、ヤコブ 2: 1 を参照)。

用語「栄光」はややあいまいな意味を持つ: (1) この語は「神の義」の並立語のようだ (2) この語は神の「聖さ」つまり「完全性」を指しているようだ (3) この語は、人類がそれに似せて造られたにもかかわらず (創世記 1: 26-27、5: 1、9: 6 を参照) 後に人類の反逆によって損なわれた (創世記 3 章 1-22 節を参照) 神のお姿を指しているようだ。この語は YHWH が御自分の民にお姿を現わされたことに対して初めて用いられている (出エジプト 16: 7 と 10 節、レビ 9: 23、民数記 14: 10 を参照)。ガラテヤ 1: 5 の特別なトピック「栄光」を見よ。

1: 10

NASB、NKJV 「御自分の聖なる者たちの間であがめられ」

NRSV 「御自分の聖なる者たちにあがめられ」

TEV 「御自分の民の全てから栄光を受けられ」

NJB 「御自分の聖なる者たちの間であがめられ」

この聖句は少なくとも2通りに理解されうる。

1. ヘブル語の聖句を反映して、「再来されることの偉大さのゆえにイエスは御自分に従う者たちから栄光を受けられることになっている」という意味で。
2. 名詞が繰り返される (10 節と 12 節)、前置詞を伴う見慣れない複合語があることに加え、ギリシャ語の前置詞の通常の意味を反映して、「イエスは信徒達の間であがめられることになっている」という意味で。

「聖なる者たち」は文字通り「聖人達」である。用語「聖なる者」は常に複数形であるが、例外的にただ一度ピリピ 4: 21 では単数形で用いられている。しかしその箇所さえ意味上は集団であ

る。I テサロニケ 3: 13 の特別なトピック「聖なる者」を見よ。

これは地位上の経験に過ぎない。私達の地位は日常生活の中でより現実化していくことが望ましい。主イエスが再来されるときに私達は瞬間的かつ完全に聖化されることになっている（I ヨハネ 3: 2、ローマ 8: 30 を参照）。神の御心にかなう生き方をする御自分の民の間でイエスはあがめられるのだ（12 節、I テサロニケ 2: 12、ヨハネ 17: 9-10 を参照）。

「その日」この強調聖句は、神が祝福（信徒に対する）と裁き（未信者に対する）のために御自分の被造物のところに戻って来られる時の旧約聖書における比喩である。I テサロニケ 5: 2 の詳細な解説を見よ。

NASB 「また、信じる者たち全ての間でほめたたえられるのです」

NKJV 「また、信じる者たち全ての間でほめたたえられるのです」

NRSV 「また、ほめたたえられるのです... 信じる者たち全ての間で」

TEV 「また、信じる者たち全てからほめたたえられるのです」

NJB 「また、信じる者たち全てによって栄光をお受けになるのです」

10 節には2つの不明瞭な聖句がある。それらは(1)聖なる者達がキリストとともに栄光を受け、このことに彼らが感動する、あるいは(2)神が信徒達のためになさったことに天使達が感動するという意味なのだろう（エペソ 2: 7、3: 10、I コリント 4: 9 を参照）。

「それはあなたがたがわたしたちの証しを信じたからです」信徒達の応答は 8 節の異教徒達の応答と逆である。彼らはメッセージと人の両方から福音を受け取っていた（ヨハネ 1: 12、3: 16 と 36 節、6: 40、11: 25-26、ローマ 10: 9-13 を参照）。

1: 11「わたしたちはいつもあなたがたのために祈っています」パウロはこれらの教会のために祈り続けていた（II テサロニケ 1: 3、2: 12、I テサロニケ 1: 2、5: 13-18 を参照）。I テサロニケ 1: 2 の特別なトピック「とりなしの祈り」を見よ。

NASB 「神があなたがたを招きにふさわしい者としてくださいますように」

NKJV 「神があなたがたをこの招きにふさわしい者としてくださいますように」

NRSV、TEV 「神があなたがたを招きにふさわしい者としてくださいますように」

NJB 「神があなたがたを招きにふさわしく生きる者としてくださいますように」

神はそのようにされる（ピリピ 1: 6、2: 13、エペソ 4: 4 を参照）が信徒は神と聖霊と一緒に働いていただかなければならない（ピリピ 2: 12、エペソ 4: 1 を参照）。信徒が信仰による応答を自ら始めて続けなければならないのは神の統治と人類の自由意志とが矛盾しているためである。この文脈ではクリスチャンの新しい命が強調されている（エペソ 4: 1、5: 2 と 15 節を参照）。福音とはある人を

歓迎することであり、その人に関するメッセージ信じることであり、その人のように生きることである。

特別なトピック: 召された

召し、選び、そして信徒が御自身に哀願することにおいて神は常に主導権を執られる(ヨハネ 6 章 44 節と 65 節、15: 16、I コリント 1: 12、エペソ 1: 4-5 と 11 節を参照)。用語「召し」はいくつかの神学的意味で用いられる。

- A. 罪人はキリストの成し遂げられた御業と聖霊の説得 (*kletos*。ローマ 1: 6-7、9: 24 を参照。神学的に I コリント 1: 1-2、II テモテ 1: 9、II ペテロ 1: 10 と類似) を通した神の恵みによって救いに召されている。
- B. 罪人は救われるために主の御名を呼ぶ (*epikaleo*。使徒行伝 2: 21、22: 16、ローマ 10: 9-13 を参照)。これはユダヤ教の礼拝における定型句である。
- C. 信徒はキリストのように生きるように召されている (*klesis*。I コリント 1: 26、7: 20、エペソ 4 章 1 節、ピリピ 3: 14、II テサロニケ 1: 1、II テモテ 1: 9 を参照)。
- D. 信徒は伝道の働きをするように召されている(使徒行伝 13: 2、I コリント 12: 4-7、エペソ 4 章 1 節を参照)。

「また善を求めるあらゆる願いを」パウロは彼らの新たな意図が実現するように祈っていた(I テサロニケ 1: 3 を参照)。新しい心(エゼキエル 36: 26-27 を参照)とともに、彼らは新しい口と手と足(ローマ 6: 4、II コリント 5: 17、コロサイ 3: 10 を参照)を得た。

パウロはテサロニケ人への手紙の中でしばしば「善」の概念を用いている。

1. *agathos*、I テサロニケ 3: 6、II テサロニケ 2: 16-17
 - a. *agathon*、I テサロニケ 5: 15
 - b. *agathosune*、II テサロニケ 1: 11
2. *kalon*、I テサロニケ 5: 21
3. *eudokia*、II テサロニケ 1: 11

1: 12「わたしたちの主イエスの御名... 主によって」ここでは、「御名」が人を表すことは並列文構造から明らかである。以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: 主の御名

これは三位一体の神の教会内での個人的御臨在と活動力を述べた、新約聖書の一般的な聖句である。それは魔法の呪文ではなく、神の御性質の現れである。

しばしばこの聖句は主イエスを指す(ピリピ 2: 11 を参照)。

1. 洗礼の際のイエスへの信仰告白のとき(ローマ 10: 9-13、使徒行伝 2: 38、8: 12 と 16 節、

- 10: 48、19: 5、22: 16、I コリント 1: 13 と 15 節、ヤコブ 2: 7 を参照)
2. 悪魔払いの儀式で(マタイ 7: 22、マルコ 9: 38、ルカ 9: 49、10: 17、使徒行伝 19: 13 を参照)
 3. いやしの時に(使徒行伝 3: 6 と 16 節、4: 10、9: 34、ヤコブ 5: 14 を参照)
 4. 伝道の働きの際に(マタイ 10: 42、18: 5、ルカ 9: 48 を参照)
 5. 教会指導の時に(マタイ 18: 15-20 を参照)
 6. 異邦人への説教の間に(ルカ 24: 47、使徒行伝 9: 15、15: 17、ローマ 1: 5 を参照)
 7. 祈りの中で(ヨハネ 14: 13-14、15: 2 と 16 節、16: 23、I コリント 1: 2 を参照)
 8. キリスト教を指す言葉(使徒行伝 26: 9、I コリント 1: 10、II テモテ 2: 19、ヤコブ 2: 7、I ペテロ 4: 14 を参照)

私達が宣教者、伝道師、助け手、いやし手、悪魔払いの祈禱師等として何をしようと、私達は神の御性質、御力、備え—つまり神の御名に基づいてそれをしているのだ。

「あなたがたの間で、そしてあなたがたも」 イエスは信徒達の間で栄光を受けられ、信徒達はイエスによって栄光を受けるのだ。

「わたしたちの神と主イエス・キリストの恵みによって」パウロはテサロニケ人への手紙の中で頻繁に父なる神と御子の関係を強調している(I テサロニケ 1: 1 と 3 節、3: 11 と 13 節、5: 18 と 23 節、II テサロニケ 1: 1 と 2 節、2: 12、2: 13 と 16 節、3: 5 を参照)。

この聖句はキリストだけを指しているのかもしれない。もしそうなら、この聖句はイエスの神性を述べた新約聖書の他の聖句と調和する(ヨハネ 1: 1、8: 57-58、20: 28、ローマ 9: 5、ピリピ 2: 6、テトス 2: 13、ヘブル 1: 8、I ヨハネ 5: 20、II ペテロ 1: 1 と 11 節を参照)。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 1章の中心テーマは何か。それは I テサロニケ 1章の中心テーマとどのように違うのか。
2. 苦難はなぜ信徒にとって日常茶飯事なのか。(5 節)
3. 神は執念深い方か。もしそうでないなら 8 節は何を意味するか。
4. 地獄は永遠か。

テサロニケ人への第二の手紙2章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
無法の者	大規模な背教	主の日	悪しき者	主の臨在とその序章
2: 1-12	2: 1-12	2: 1-12	2: 1-4	2: 1-3 前半
			2: 5-12	2: 3 後半-8
				2: 9-12
救いに選ばれた	堅く立つ	感謝と勧め	あなたは救いに選ばれている	忍耐するようにと いう励まし
				(2: 13~3: 5)
2: 13	2: 13-17	2: 13-15	2: 13-15	2: 13-17
		2: 16-17	2: 16-17	

第三読書サイクル(viiページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引き的注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上に挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落
3. 第三段落
4. (以下同様)

1~12節の文脈の考察と神学的考察

A. この章には教会の歴史全般についての理論が数多くあるので解釈がとても難しい。

B. 聖書的背景

1. 1章がキリストの再来と未信者の裁きを取り扱ったのと同様に、2章1~12節は反キリストの出現と裁きを取り扱っている。この人物について新約聖書の中で最も詳細に記されている

- のはこの箇所である。使徒ヨハネの用いた用語「反キリスト」(Iヨハネ 2: 18 と 22 節、4: 3、IIヨハネ7章)をパウロは用いず、この人物を 3 節で「無法の者」、8 節で「無法者」と呼んだ。
2. この章の全般的背景は、旧約聖書の時代に信じられていた、神の民と悪しき者の民との最終対決(詩篇2篇、48: 4-8、エゼキエル 38~39 章、ダニエル7章、ゼカリヤ14章を参照)にある。この衝突は両集団のそれぞれの指導者、つまり神のメシアと反メシア(創世記 3: 15、ダニエル7章、9: 23-27 を参照)の対決に擬人化されている。
 3. 新約聖書中の関連する箇所は、マタイ24章、マルコ13章、ルカ17章と21章、Iテサロニケ4~5章、Iヨハネ2章、黙示録である。
 4. 1~12節には3つの時間的要素が関与している。
 - a. 現在の出来事
 - b. 未来に起こることになっているが、イエスの再来よりも先に起こることになっている出来事
 - c. 主の日に関連する未来の出来事
 - C. キリストの再来の全般的主題が聖書の中で双極的な緊張をもって示されていることは覚えておかなければならない。緊張の一方は、主の再来の緊急性が、先に起こらなければならない出来事数件と釣り合いを保っているということである。これらの事実の一つは他を打ち消したり他と矛盾しない。預言されている、先に起こらなければならない出来事とは以下に示すようなことである。
 1. 背教(マタイ 24: 1-13、Iテモテ 4: 1、IIテモテ 3: 1 以降、IIテサロニケ 2: 3 以降を参照)
 2. 大きな苦難(マタイ 24: 21-22、29~31 節を参照)
 3. 全ての国々への福音宣教(マタイ 24: 24 を参照)
 4. 反キリストの出現(マタイ24章、IIテサロニケ2章、黙示録13章を参照)
 5. 大勢の異教徒とユダヤ人の救い(ローマ 11: 11-36 を参照)
 - D. 解説者の多くはこの章をジャンル上の黙示文学と見ている。以下の特別なトピックを見よ。

特別なトピック: 黙示文学

(この特別なトピックは私の聖書注解書シリーズのヨハネの黙示録の巻からの抜粋である。)

黙示録はユダヤ文学のジャンルの中では独特な黙示文学に区分されている。この書はしばしば緊張の多い時代に、神が歴史を支配されて御自分の民を苦難から救われるという確信を表現するために用いられた。このタイプの文学には以下に示すような特徴がある。

1. 強い意味での神の普遍的統治(一神教主義と決定論)
2. 善と悪、つまりこの世と来るべき世との闘争(二元論)
3. 暗号的な用語(通常は旧約聖書あるいは聖書外典的なユダヤの黙示文学からの引用)の使用
4. 色、数字、動物、そして時々半人半獣が用いられている。
5. 幻や夢による天使の媒介が用いられているが、通常は天使の媒介を通した幻や夢が用いられ

ている。

6. 主に終りの時(新しい世)に注目している。
7. 一組の非現実的な象徴群が終りの時のメッセージを伝えるために用いられている。
8. このタイプの文学ジャンルの書を以下に示す。
 - a. 旧約聖書
 - (1)イザヤ 24～27 章、56～66 章
 - (2)エゼキエル 37～48 章
 - (3)ダニエル 7～12 章
 - (4)ヨエル 2: 28～3: 21
 - (5)ゼカリヤ 1～6 章、12～14 章
 - b. 新約聖書
 - (1)マタイ 24 章、マルコ 13 章、ルカ 21 章、I コリント 15 章(一部)
 - (2)II テサロニケ2章(大半)
 - (3)黙示録(4～22 章)
 - c. 聖書外典(D. S. Russell 著 *The Method and Message of Jewish Apocalyptic* の 37～38 ページから引用)
 - (1)I エノク、II エノク(エノクの秘密)
 - (2)喜びの書
 - (3)シビルの宣託Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ
 - (4)12教父の契約
 - (5)ソロモンの詩篇
 - (6)モーセの昇天
 - (7)イザヤの殉教
 - (8)モーセの黙示録(アダムとエバの生涯)
 - (9)アブラハムの黙示録
 - (10)アブラハムの契約
 - (11)II エストラス(IV エストラス)
 - (12)バルクⅡ、Ⅲ
9. このジャンルにはある意味で2面性が見られる。このジャンルには現実には、以下に示す事柄の間で二元論、対比、あるいは緊張が見られる。
 - a. 天と地
 - b. 悪の世(悪しき者と悪の天使)と新しい義の世(神の人と神の天使)
 - c. 現在の姿と未来の姿

これら全ては神によって完成(完結)されようとしている。これは神がそうなるように意図された世ではなく、神がエデンの園での親しい交わりを回復するために遊び、働き、そして御自分の意志を

投影し続けておられる世である。キリストに関する出来事は神の御計画の分岐点であるが、主が2度来られることは現代の二元論をもたらした。

単語と聖句の研究

NASB(改訂版)原典: 2: 1-12

¹兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストが来られることと、わたしたちが主のみもとに集められることについて、あなたがたにお願いします。²霊や言葉によって、あるいはまるでわたしたちが書き送ったように思える、主の日がすでに来てしまったかのように信じさせる手紙によって、すぐに落ち着きをなくしたり動揺したりしないでください。³だれがどのような手段を用いてもだまされてはいけません。なぜなら神に対する反逆がまず起こり、不法の者、つまり滅びの子が現れなければならないからです。⁴この者は、いわゆる神と呼ばれたり拝まれたりする全てのものに敵対し、それらをさげすみ、神の神殿に座り込んで、自分が神であるかのようにふるまうのです。⁵わたしがまだあなたがたのところに行ったときにこれらのことを話していたのを覚えていませんか。⁶今その者を抑えているものがあることはあなたがたも知っているとおりで。それは、定められたときにその者が現れるためなのです。⁷不法の秘密の力はすでに働いています。ただそれは、今その者を抑えているものが取り除かれるまでのことです。⁸不法の者が現れると、主は御自分の口から吐く息でその者を殺し、御自分が来られるときの輝かしいお姿でその者を滅ぼしてしまわれます。⁹つまり、不法の者はサタンのお働きによって現われ、あらゆる魔法と偽りの不思議な業を行い、¹⁰滅びゆく人々をあらゆる不義によって欺くのです。それらの人々が滅びるのは、自分たちを救いに導く真理から愛を受け取らなかったからです。¹¹このようなわけで神は彼らに惑わす力を送られ、彼らは間違ったことを信じるようになります。¹²こうして、真理を信じないで不義を喜んでいた者は皆裁かれるのです。

2: 1「来られることについて」これは「存在」を意味するギリシャ語の用語 *parousia* である。この用語の文化的背景としては、この語が常に王の行幸を指して用いられたということがある。新約聖書ではイエスの再来を言い表わす3つの語が用いられている。

1. *parousia* 1 節と 8 節と I テサロニケ 2: 19 を参照
2. *epiphaneia* 8 節を参照。目に見え、輝きに満ちて来ること
3. *apocalypsis* 1: 6-7 を参照。出現目的で「覆いを取る」ことを意味する。

最後の語は 3、6、8 節で反キリストの出現を言い表わすためにも用いられている。

「再来」は聖書の用語ではない。この用語は殉教者ユスティヌスによって初めて用いられた。I テサロニケ 2: 19 の特別なトピック「イエスの再来」と I テサロニケ 3: 13 の特別なトピック「キリストの再来を意味する新約聖書の用語」を見よ。

「わたしたちが主のみもとに集められること」これは I テサロニケ 4: 13-18 の「歓喜」を指している。文脈からは二度ではなく一度の行幸(マタイ 24: 27 と 31 節、25: 31 以降、マルコ 13: 27 を参照)が強調されている。3 節は苦しみを受ける聖なる者達と反キリストの出現について述べている。これら 2 つの節、つまり 1 節と 3 節では、苦難の前の、つまりキリストの千年統治の前の信徒の密かな喜びについての見方が対照的である。

通常、マタイ 24: 32-44(ルカ 17: 22-37 を参照)は、救われていない者達が放置されている一方で信徒が密かに喜んでることを裏付ける聖句として用いられる。しかし、文脈では(ノアの時代)救われていない者達は裁かれる。マタイ 24: 39 では「一人残らずさう」は洪水で殺された者達を言い表わしている(37~38 節を参照)。

一部の神学者達が信徒の密かな喜びを後の目に見えるイエスの再来と区別している真の神学的目的は、イエスの再来が差し迫っていることおよび再来の前にいくつかの預言された出来事の起こる必要性の間の緊張、そして教会が地上から取り去られるという、天命による前千年統治論を取り除き、旧約聖書の預言が文字通りイスラエルの民に成就するようにするためである。これは I テサロニケ 2: 13-16 の内容から見れば驚くべきことである。

2: 2

NASB 「すぐに落ち着きをなくしたりしないでください」

NKJV 「すぐに心を騒がせたりしないでください」

NRSV 「すぐに心を騒がせたりしないでください」

TEV 「すぐにとり乱したりしないでください」

NJB 「どうかすぐにあわてふためいたりしないでください」

これは身の周りの物事、ここでは霊や言葉によって起こる精神の混乱や心配について述べるアオリスト受動態不定詞である。この語は文字通り地震すなわち神つまり聖霊が来られること(ヘブル 12: 26-28 を参照)を述べているようだ。比喩的にこの語は神への忠誠心を失った精神状態を指している(詩篇 15: 8 の解説 LXX と使徒行伝 2: 25 を参照)。

「すぐに」は(1)自分がこれらのことについて語り始めるとすぐに聴衆[テサロニケの信徒達]の間に混乱と恐れと憶測が広まったことについてのパウロの驚き、あるいは(2)この主題についての他の人々の意見を彼らがすぐに受け入れてしまったことを暗示している。

「動揺したりしないでください」これは身の周りの物事、ここでは霊や言葉によって継続的に起こっている事柄について述べる現在形受動態不定詞である。2 節の最初の語が彼らの思考過程を指しているなら、この稀な語は彼らの感情を指している。この用語は終末論的な文脈の中のみに見られる(マタイ 24: 6、マルコ 13: 7 を参照)。

NASB 「霊や... によって」

NKJV、NRSV 「霊や... によって」

TEV 「言葉によって... 多分これは預言をする者の言葉だったのでしょ

NJB 「あらゆる預言や... によって」

パウロはテサロニケの信徒達を動揺させないために(*mete* を3回用いて)3つの事柄(「霊」、
「言葉」、「手紙」)を挙げている。最初の事柄は預言者の言葉あるいは他の超自然的啓示(Iヨハ
ネ 4:1を参照。反キリストを意味する *pneuma* とも関連がある)の意味で用いられている用語「霊」
である。

NASB 「... や言葉」

NKJV、NRSV 「... や言葉によって」

TEV 「... や預言をする者によって」

NJB 「... やうわさ」

この用語(*logos*)は「誰かの個人的解釈によって」あるいは「誰かの言葉によって」ということを
述べているようだ。

NASB 「あるいはまるでわたしたちが書き送ったように思える手紙」

NKJV 「あるいはまるでわたしたちが書き送ったように思える手紙によって」

NRSV 「あるいはまるでわたしたちが書き送ったように思える手紙によって」

TEV 「あるいはわたしたちが手紙にこのように書いたといわれる」

NJB 「あるいはわたしたちが書き送ったといわれる手紙」

パウロは自分からの手紙が本物であることを証明するためにそれらを自筆し始めた(3:17を参
照)。これは、テサロニケ人への手紙第一やテサロニケでのパウロの説教についての誰かの誤っ
た解釈を指しているようだ。

「主の日はすでに来てしまったかのように信じさせる」これは完了形能動態直説法であり、「主の
日はすでに来ている」という意味である。終末論に関するこの全般的な神学上の問題はパウロが
一掃しようと試めていた大きな問題であった。3~12節の残りの箇所はなぜこの発言(「主の日は
すでに来ている」ということ)が真ではないといえるかを説明している(マタイ 24:23と26節を参照)。
主イエスの再来に伴って起こるはずの出来事はまだ起こっていない(この章の導入部を見よ)。
「主の日」についての詳細な議論が I テサロニケ 5:2にあるので見よ。

2:3

NASB 「だれがどのような手段を用いてもだまされてはいけません」

NKJV 「だれがどのような手段を用いてもだまされてはいけません」

NRSV 「だれがどのような手段を用いてもだまされてはいけません」

TEV 「だれがどのような手段を用いてもだまされてはいけません」

NJB 「だれがどのような手段を用いても、決してだまされてはいけません」

これはアオリスト能動態仮定法動詞と *tis* を伴う強烈な二重否定であり、人の介入を暗示している。明らかに意図的な詐欺が起こっていた。

「なぜなら... がまず起こらなければならないからです」これは第三種条件文である。いくつかの出来事がまず起こらなければならない(この章の導入部の C 節を見よ)。この(主の)再来は差し迫ったものではない。この文脈では2つの出来事、つまり(1)大規模な背信、あるいは(2)「罪の者」の出現について述べられている。

NASB 「神に対する反逆がまず起こり」

NKJV 「神に対する反逆がまず起こり」

NRSV 「神に対する反逆がまず起こり」

TEV 「神に対する最終的な反逆が起こり」

NJB 「神に対する大きな反逆が起こり」

この複合語 *apo + histemi* は文字通り「離反する」という意味である(ガラテヤ 5: 4 の特別なトピック「背信」を見よ)。この語は否定的な意味(反逆)にも肯定的な意味(罪から離れること。Ⅱテモテ 2: 19 を参照)にも用いられる。この語はギリシャの文献(プルタークの著書と使徒行伝 5: 37)では政治的あるいは軍事的反乱の意味で用いられているが、セプトウアギンタ(ヨシュア 22: 22 を参照)とアポクリファではこの語はしばしば霊的な反逆を指している。誰が反逆しているかは明らかではないが、反逆者達は神を拒絶し、神に取って代わろうとさえしている。反逆者としては異教徒、ユダヤ人、あるいは教会員の一部が考えられる(マタイ 24: 3-12、Ⅰテモテ 4: 1、Ⅱテモテ 3: 1 と 8 節と 13 節、Ⅰヨハネ 2: 18-19 を参照)。

NASB 「不法の者が現れる」

NKJV 「罪の者が現れる」

NRSV 「不法の者が現れる」

TEV 「悪しき者が現れる」

NJB 「反逆者... が現れる」

ここにはギリシャ語の原典の問題が見られる。「不法」はギリシャ語のアンシアル書体の原典^{RT}と B、コプト語訳聖書とアルメニア語訳聖書、Tertullian に関して Origen と Marcion が用いたギリシャ語の原典に見られ、「罪」は原典 A、D、F、G、K、L、P、および初期教会の教父達に知られていたウルガタ聖書とシリア語訳聖書に見られる。「不法」(*anomias*)はパウロの著書の中では稀である(ローマ 4: 7、6: 19、テトス 2: 14 を参照)ので、書記達はこの語をより見慣れた用語の「罪」(*hamartias*)に置きかえたのだろう。用語「不法」は 7 節と 8 節でも用いられている。UBS⁴は「不

法」を階級 B(ほぼ確定)としている。

サタンについては 9 節ほどには明確に記されていないが、従順な召使いであったことと受肉については明確に記されている(キリストのへたな模倣。黙示録 13: 1-8 を参照)。パウロは用語「反キリスト」を決して用いなかったが、I ヨハネ 2: 18 と 4: 3 および II ヨハネ 7 章(パウロの死後に書かれた)はこれと同一の人物について述べている。ヨハネの手紙第一では「罪」と「不法」は同じことである(I ヨハネ 3: 4 を参照)。

パウロのいう「不法の者」はユダヤ教の黙示録での「価値なき者」(*belial*)の偽メシアあるいはサタンの啓示を受けた世の指導者への擬人化と関連があるようだ。この用語は以下に示す書ではこの意味で用いられている。

1. 申命記 13: 13、人々を YHWH の御前から引き離して偽の神のもとへ導いた者
2. I サムエル 2: 12、YHWH を知らぬ者
3. ナホム 1: 15、擬人化された悪
4. 「喜びの書」1: 20、擬人化された霊
5. 「イザヤの昇天」4: 18

この聖句の動詞はアオリスト受動態仮定法である。この受動態は外部の関係者を暗示している。歴史を支配しているのはサタンではなく神である。神の時(2: 6 を参照)にはこの偽キリストとこの受肉した悪とこのサタンのしもべが歴史に登場することになっている(用語「現れる」は 1: 7 ではキリストの啓示について用いられている)。

この仮定法は起こるはずのないことを暗示しているのではなく、はっきりはしていないが確かに未来に存在する啓示の時(6 節と 8 節を参照)について明言している。

この終りの時の人物について述べている聖句に注目しよう。

1. 「不法の者」
2. 「滅びの子」
3. 「反逆者」
4. 「うぬぼれる者」
5. 「神の神殿に座り込む者」
6. 「自分が神であるかのようにふるまう者」

この人物は神に反逆しているだけでなく、神に取って代わろうとしているのだ。前置詞「反—」は本来は「～の立場で」の意味であったが、後に「～に反抗して」の意味になった。これらの意味はどちらもこの不法の者にあてはまる。この人物は権力と支配権とあがめられることを望んでいるのだ。墮落の本質、つまり人類と天使の(神からの)独立欲は擬人化した(ダニエル 11: 3 と 16 節と 36 節を参照)。

多くの意味でこれらの表現は王や有力者について述べている。ネロが良い例だ。

NKJV	「滅びの子」
NRSV	「滅びる定めにある者」
TEV	「地獄に行く定めにある者」
NJB	「失なわれた者」

このヘブル語の成句は文字通り「破滅の子」である。これはヨハネ 17: 12 でイスカリオテのユダを指して用いられている。ユダのようなこの終末論的な人物は宗教に深くかかわっていても霊的には失なわれた者となり永遠の罰を受けるように定められることになる(4 節を参照)。

2: 4

NASB	「この者は、いわゆる神と呼ばれたり拝まれたりする全てのものに敵対し、それらをさげすむのです」
NKJV	「この者は、いわゆる神と呼ばれたり拝まれたりする全てのものに敵対し、それらをさげすむのです」
NRSV	「この者は、いわゆる神と呼ばれたり拝まれたりする全てのものに敵対し、それらをさげすむのです」
TEV	「この者は、人々が拝んで神と考える全てのものに敵対するのです」
NJB	「この者は敵であり、自分は人々が神と呼んで拝む全てのものよりもはるかに偉大であると言い張る者なのです」

これは2つの現在形中間態分詞である。ここで言い表されているのは、栄光と拝まれることを求める、偽キリストと呼ばれる悪しき者である(イザヤ 14: 13-14、エゼキエル 28: 2、ダニエル 7 章 25 節、8: 9-14、9: 27、11: 36-37、マタイ 24: 15、マルコ 13: 14、黙示録 13 章を参照)。

「それらをさげすむ(訳者注: 自分が偉大であると言い張る)のです」これはギリシャ語の複合語 *hyperairomai* である。ガラテヤ 1: 13 の特別なトピック「パウロの *Hyper* 複合語の使用」を見よ。

「神の神殿に座り込んで」この聖句は、イエスが語られ(マタイ 24 章、マルコ 13 章、ルカ 17 章と 21 章を参照)ヨハネが語った(I ヨハネ 2 章、黙示録を参照)終末論的出来事が未来の出来事であると信じる人々によってしばしば用いられる。もしそうなら、これはエゼキエル 40~48 章に見られるような、再建されたユダヤの神殿を暗示しているようだ。

解説者の中には、これらの明らかになった終末論的出来事が「すぐに」起こった、つまり紀元 1 世紀の地中海世界の歴史的出来事を指しているに違いないと信じる者もいる。

1. カリグラ(暴君として知られるローマ皇帝)はエルサレムの神殿に自分の立像を建てさせた。
2. 紀元 70 年の Titus 侵攻によるエルサレム陥落
3. ネロとドミトリアヌス(暴君として知られるローマ皇帝)の治世の信徒迫害

私達解説者の中には、これらの終末論的出来事は紀元 1 世紀の出来事と未来の出来事の両方

を指しているとみる者もいる。旧約聖書の預言者達はしばしば自分達の時代の出来事を取り上げてそれらを未来の「主の日」の設定に投影した。この意味で新約聖書はそれ自体の書かれた時代およびその後の各時代へのメッセージとなっている。私達は原著者の歴史設定だけでなく、驚くべきことに 2000 年も遅れている主の再来を厳密に把握しなければならない。

人物を厳密に特定するこの文はその人物の歴史的登場が未来に実現することを示唆している。しかしこの聖句は不明瞭でもある。特にこの種の言葉(「荒廃への嫌悪感」、この冒涇に対するダニエルの名)はセレウコス朝シリア(アンティオカス・エピファネス4世)とローマ帝国(Titus)のエルサレム侵攻で異教の神が神殿に祀(まつ)られてあがめられた時期に該当する。この終りの時の人物もバビロン(イザヤ14章)とティル(エゼキエル28章)の高慢で傲慢な王達に似ているが、多分それらのこともサタンの背信の形式なのだろう。

「神殿」を意味するギリシャ語の用語(*naos*)はユダヤの神殿(しかしその中に玉座はない)におられる聖なる方の中の聖なる方に対して用いられた。この用語はまた、神々が祀られた異教の神殿に対しても用いられた。このことは、エゼキエル40~48章を考慮するなら、ユダヤの神殿が現実に再建された(ダニエル 9: 24-27 を参照)に違いないことを暗示しているように思われるが、必ずしもそうとはいえない。ユダヤの神殿には王が座る場所などどこにもなかったことを思い出そう。玉座があったのはギリシャの神殿だけであった(そこにはゼウスのための玉座があった)。文字通りに解釈すればこの聖句はユダヤ人の礼拝する場所を指していたとは考えられない。

Chrysostom は「神殿」を、教会についてパウロが一般的に用いた比喻(I コリント 3: 16-17、6 章 19 節、II コリント 6: 16、エペソ 2: 21 を参照)として解釈した。この見解では反キリストが目に見える形で教会内に現れたと見ている。

「自分が神であるかのようにふるまうのです」 不法の者は現実に自分を神だと言っている。その者は偽キリストであり、受肉したサタンである。

ヨハネの黙示録には三位一体のサタン(海からの獣、偽預言者である大地からの獣、サタン)が登場する。海からの獣は偽キリストであり、

1. 致命傷を負うがまだ生きている(黙示録 13: 3 と 14 節を参照)
2. 肩書「獣のような者」はイザヤ 40: 18-22 と 43: 11 と 44: 6 と 8 節と 9~20 節と 45: 6 にある YHWH の表現を反映している。
3. 大きなしるしを示す(黙示録 13: 13 を参照)
4. 信徒達に明確なしるし、特にキリストに従う者達に神のしるしを与える(黙示録 7: 3 と 13: 16 を参照)

2: 5「わたしがこれらのことを話していたのを」 これは未完了時制で、この主題についての説教や教えをこれらの信徒達が繰り返し聞いていたことを表している。彼らはこの主題について、現代の読者達が持っていない知識を持っていた(5 節の「覚えていませんか」と 6 節の「あなたがたも知っ

ているとおりです」を参照)。従って、現代における解釈は全てがある程度不完全で推測にすぎないものである。有用で慎重な聖書解釈をすることによって独断主義を避けなければならない。この聖句が1～5節あるいは6～12節に記されている知識を指しているかどうかは不明である。

2: 6「あなたがたも知っているとおりです」これは(1)これらの信徒達はパウロが誰あるいは何について言っているかを知っていた(2)彼らはその当時、自分達の生活の中で権力あるいは権力者の存在を感じていた。

NASB	「今その者を抑えているもの」
NKJV	「抑えているもの」
NRSV	「今その者を抑えているもの」
TEV	「今この者の出現を抑えているものがあります」
NJB	「今その者を抑えているもの」

この動詞は以下に示すような意味を持つと考えられる。

1. 「抑える」(ルカ 4: 24、フィレモン13節を参照)
2. 「閉じ込める」(I テサロニケ 5: 21、ルカ 8: 15 を参照)
3. 「追放する」(聖書中に実例がない)

文脈からは「抑える」の意味であると言える。現実的な問題は、この「抑えているもの」が誰あるいは何であるかということである。6節と7節で中性名詞であったのが7節と8節で男性名詞に変わっているというのは興味深い文法的変化である。このことは人間化する影響力を暗示している。このため、少なくとも3通りの解釈が考えられる。

1. ローマ皇帝に擬人化した「法」対「無法」
2. 特定の天使(達)に擬人化した、天使の権力者集団。黙示録 7: 1-3
3. 聖霊としての神、あるいは福音宣教を援助して下さる聖霊

第一の理論はとても古く普遍的で、Tertullian によって始められた。これは、テサロニケの信徒達が理解していたと思われる、文脈の内容と調和する。パウロも法に関する自らの体験と自分の受けた法の恩恵について述べている(ローマ 13: 1 以降、使徒行伝 17～18 章を参照)。第二の理論はここで問題となっていることと密接な関連がある。これはダニエル10節を国々とその法体系に対する天使の支配と権威を証明するものとして用いている。第三の理論は他の2つの理論より新しい。これは非常に賞賛に値する理論であるが、仮定の多すぎる理論でもある。これは主に一部の天啓主義者達が信徒の密かな喜びを裏付けるために用いている。

反キリストの霊は常に世にも存在する(I ヨハネ 2: 18、4: 3、II ヨハネ7章)が、いつの日か最終的に人間化することになっている。サタンは神の御計画を知らないので、多分いつの世にも悪しき人々に備えをさせている。この抑制力は極めて超自然的であり、神の支配と御計画のもとにある(6節後半～7節を参照)。

「それは、定められたときにその者が現れるためなのです」ここで言われている人物つまり力は明らかに神に抑えられている。未来の定められたときにその者は現れることになっている。

2: 7「秘密の力」神は人類の救いについて、今まで墮落していない者も含めて全ての人類を救うという統一的な目的を持っておられる(使徒行伝 2: 23、3: 18、4: 28、17: 31、ルカ 22: 22 を参照)。この神の御計画を知る手がかりは旧約聖書の中に現れている(創世記 3: 15、12: 3、出エジプト記 19: 5-6 と預言者の書全般を参照)。しかしその全体像は明らかではない。イエスと聖霊が来られることでそれはより明らかとなり始める。パウロは用語「秘密の力」をこの万人の救いの計画を言い表すために用いた(I コリント 4: 1、エペソ 6: 19、コロサイ 4: 3、 I テモテ 3: 9 を参照)。しかしここでは彼はその用語を様々な意味で用いている。

1. 異邦人も救いの恵みに与れることへの、イスラエルの一部の人々のかたくなさ。ユダヤ人はイエスを預言されたキリストとして受け入れたときと同じようにしてこのように異邦人を受け入れることになる(ローマ 11: 25-32 を参照)
2. 福音は国々に知られるようになった。そして福音を聞いた全ての国々の民はキリストに結ばれ、キリストを通して神を知る(ローマ 16: 25-27、コロサイ 2: 2 を参照)。
3. イエスの再来の時の信徒の新しい体(I コリント 15: 5-57、 I テサロニケ 4: 13-18 を参照)
4. キリストに結ばれた全てのものの統合(エペソ 1: 8-11 を参照)
5. 異邦人とユダヤ人は信徒とともに神の御国を受け継ぐ(エペソ 2: 11~3: 13 を参照)
6. 結婚用語で表現された、キリストと教会の関係の親密さ(エペソ 5: 22-33 を参照)
7. 異邦人が契約の民に加えられると、その内にキリストの霊が住まわれて彼らをキリストのような者へと成熟させ、そうして墮落した人類の内に損なわれた神のお姿を回復させる(コロサイ 1: 26-28 を参照)。
8. 終りの時に現れる反キリスト(II テサロニケ 2: 1-11 を参照)
9. 初期教会の信徒の信条と聖歌(I テモテ 3: 16 を参照)

この用語は、神が未来についての「秘密の計画」を持っておられるのと同じようにサタンも「秘密の計画」を持っているという意味でも用いられるようだ。これらの節は人間化した悪がどのようにキリストのまねをするかを明らかにしている。

「不法の秘密の力はすでに働いています」これは現在形中間態直説法動詞である。これはヨハネの手紙第一にも見られる概念である(I ヨハネ 2: 18-29、4: 3 を参照)。用語「働く」(*energio*)のこの複合語形はほぼ限定的に超自然的な存在について用いられている(I コリント 12: 6 と 11 節、 II コリント 4: 12、ガラテヤ 2: 8、3: 5、エペソ 1: 11 と 20 節、2: 2、3: 7、4: 16、ピリピ 2: 13、 I テモテ 2: 12 を参照)。この霊的反逆は墮落以来起こり続けている。この反逆はいつの日か人間化することになっている。今、神はこの力を抑えておられる。聖書には、人間化した悪と神のメシアが終りの時に対決すると記されている。

NASB	「ただそれは、今その者を抑えているものが取り除かれるまでのことです」
NKJV	「ただそれは、今その者を抑えているものが取り除かれるまでのことです」
NRSV	「しかしそれは、今その者を抑えているものが取り除かれるまでのことです」
TEV	「この者の出現を抑えているものが取り除かれるまで」
NJB	「そしてその者を抑えているものがまず取り除かれます」

これはアオリスト中間態(異態)仮定法動詞を伴う現在形能動態分詞である。神(とその代理者なるお方)は今も抑え続けておられるが、未来のいつの日にかこの抑制力は取り除かれることになっている。「抑えているもの」の特定についての理論が6節の解説にあるので見よ。それが誰あるいはいは何であれ、歴史を支配するのは不法の者ではなく神である。

2: 8「不法の者が現れると」ここでは時間的要素が問題である。この聖句はそれが、神が抑制力を取り除かれた直後であることを意味している。以下の節はその後の神の御業について述べている。

NASB	「主はその者を殺してしまわれます」
NKJV	「主はその者を消し去ってしまわれます」
NRSV	「主イエスはその者を滅ぼしてしまわれます」
TEV	「主イエスはその者を殺してしまわれます」
NJB	「主はその者を殺してしまわれます」

この節にはギリシャ語の原典の問題が2つ見られる。ひとつは神の御名「主」と「主イエス」である。1語の称号は原典B、D^o、Kに見られる。2語の称号は原典^N、A、D*、G、P、およびウルガタ聖書、シリア語訳聖書、コプト語訳聖書に見られる。

もうひとつの問題は動詞である。「滅ぼす」は原典^N、A、D*、G、P、およびウルガタ聖書、シリア語訳聖書、コプト語訳聖書に見られる。パウロは多分、これと同じ動詞(殺す)がセプトゥアギンタに見られるイザヤ 11: 4 を婉曲的に示したかったのだろう。見慣れない用語「消し去る」は原典FとGに見られ、そしてその変形が原典D^oとKに見られる。イエスの再来はこの反逆の時を終わらせるものとなる。

「御自分の口から吐く息で」この聖句の背景となっている旧約聖書の箇所はヨブ 4: 9 と 15: 30 あるいはイザヤ 11: 4 と 30: 28 と 33 節である。新約聖書では黙示録 2: 16 と 9: 15 で用いられている。このヘブル語とギリシャ語の用語はどちらも、ヨハネ 3: 8 が示しているように、風、息、あるいは霊を指していると考えられるが、ここでは文脈から「息」という意味であると考えられる。これは(1)主イエスの御言葉の力[ジャン・カルヴァン]あるいは(2)旧約聖書の中に見られる、語られた言葉の力[創世記1章とイザヤ 55: 11 を参照]。

NASB	「滅ぼしてしまわれます」
NKJV、NRSV	「滅ぼしてしまわれます」
TEV	「その者を殺してしまわれます」
NJB	「その者を滅ぼしてしまわれます」

これはパウロが頻繁に用いた語である。彼は 27 回以上もこの語を用いている。この語の意味は「活動できないようにする」であり、「消し去る」あるいは「滅ぼす」(ローマ 3: 3、6: 6 を参照)ではない。ガラテヤ 3: 17 の特別なトピック「無用と無効(*Kartargeo*)」を見よ。

NASB	「輝かしいお姿」
NKJV	「輝き」
NRSV	「お姿を現わされること」
TEV	「輝かしいお姿」
NJB	「輝かしいお姿」

この用語には多くの訳がありうる。例えば「輝き」、「明るさ」、「煌めき」、「栄光」など。これはキリストが再び地にお姿を現わされることを強く肯定している(Ⅰテモテ 6: 14、Ⅱテモテ 1: 10、4: 1 と 8 節、テトス 2: 11 と 13 節、3: 4 を参照)。英語の用語 *epiphany* (「神の出現」の意味)はこのギリシャ語の用語の音訳である。キリストの再来についてのⅠテサロニケ 3: 13 の特別なトピックを見よ。

「御自分が来られるときの」これは「御臨在」を意味するギリシャ語の用語 *parousia* である。その時代にはこの語は王の訪問を指した。後にこの語はギリシャの文献の中で、神が来られることを言い表すためにも用いられるようになった。この語は 1 節と 8 節ではイエスについて用いられているが、9 節ではサタンの手先について用いられている。Ⅰテサロニケ 2: 19 の特別なトピック「イエスの再来」を見よ。

2: 9「サタンの働きによって現われ」 不法の者はサタンから力を受けて操られている(Ⅰテサロニケ 2: 18 の特別なトピック「悪しき者」を見よ。黙示録 13: 2 を参照)。Mopsuestia の Theodore の時代以来、反キリストはキリストの猿まねをする者つまり模倣者とみなされてきた。この文脈中でこの者がどのくらいキリストに似ているか、つまり 3、6、8 節の「現れる」、9 節の「来る」、9 節の「しるし」、10、12 節の「この者は次のようなことをしでかすのです」に注目せよ。

NASB	「あらゆる魔法とするしと偽りの不思議な業を行い」
NKJV、NRSV	「あらゆる魔法とするしと偽りの不思議な業を行い」
TEV	「サタンの力によってあらゆる奇跡と偽りのしるしと不思議な業を行い」
NJB	「あらゆる奇跡と偽りのしるしと不思議な業が見られるのです」

奇跡は自動的に神のしるしとはならない(出エジプト 7: 11-12 と 22 節、申命記 13: 1-5、マタイ

7: 21-23、24: 24、マルコ 13: 22、黙示録 13 章を参照)。サタンは万物を偽造してアダムの子らを騙して混乱させる。9 節は時系列上 8 節に先行するように思われる。また、9~10 節は長い時間に関係しているように思われる。

2: 10「あらゆる不義によって」 未信者(マタイ 13: 19、Ⅱコリント 4: 4 を参照)や信徒(エペソ 4: 14 を参照)のうちで霊的に未熟な者は誰であれサタンは騙すのである。

「それらの人々は真理から愛を受け取らなかった」これは抽象的な意味で言われているのではなく、次のようなことを指している。

1. イエスの御人格と御業(ヨハネ 14: 6 を参照)
2. 聖霊(ヨハネ 14: 17、15: 16、16: 13 を参照)
3. イエスについてのメッセージ(ヨハネ 17: 17 を参照)

「受け取る」はⅠテサロニケ 1: 6 と 2: 13 で客として個人的に歓迎するという意味で用いられている。これらの未信者達は福音を信じることとイエスを歓迎することを拒んだ。ガラテヤ 2: 5 の特別なトピック「真理」を見よ。

「自分たちを救いに導く」旧約聖書ではこの用語は「肉体の救い」(ヤコブ 5: 15 を参照)を意味した。しかし、新約聖書では霊的な、つまり永遠の重要性を意味する。

2: 11

NASB	「このようなわけで神は彼らに感わず力を送られます」
NKJV	「そしてこのようなわけで神は彼らに強力な感わず力を送られます」
NRSV	「このようなわけで神は彼らに強力な感わず力を送られます」
TEV	「このようなわけで神は彼らの内に働く感わしの力を送られます」
NJB	「このようなわけで神は彼らを感わず力を送られます」

これは未来の意味で用いられる現在形能動態直説法動詞である。ここでこの主な真理は、サタンも含めた万物を神が支配しておられることである(ヨブ 1~2 章、ゼカリヤ 3 章を参照)。ここで送られるのは(1)真理を拒む者達に神が積極的に与えられる裁き[ローマ 11: 7-10 を参照](2)彼らの不信仰の結果が彼らの生活に現れることを神が消極的に認めておられること[詩篇 81: 12、ホセア 4: 17、ローマ 1: 24 と 26 節と 28 節を参照]である。このあいまいさは旧約聖書中のファラオについての記述にも見られ、その記述によれば、ファラオは自身の心をかたくなとし(出エジプト 7: 14、8 章 15 節と 32 節を参照)、神も彼の心をかたくなとされた(出エジプト 4: 21、7: 3 と 13 節、9: 12 と 35 節、10: 1 と 20 節と 27 節、14: 4 と 8 節を参照)。

この複数形の代名詞は 10 節の悪しき者達を指している。

NASB	「彼らは信じるようになります」
NKJV	「彼らは信じるようになります」
NRSV	「彼らを信じ込ませます」
TEV	「彼らは信じるようになります」
NJB	「そして彼らを信じ込ませます」

キリストを拒む者は神に拒まれる(ホセア 5: 6 後半、ヨハネ 3: 17-21 を参照)。これは二重に定められた運命ではなく、不信仰がもたらした行動の結果である(I 列王記 22:19-23 を参照)。

NASB、NKJV、NRSV	「間違ったこと」
TEV	「嘘」
NJB	「真実ではないこと」

これは文字通り「嘘」である(ヨハネ 8: 44、ローマ 1: 25 を参照)。この語は 10 節の「真理」と対照的である。ヨハネの手紙第一では「嘘をつく者」は、イエスがキリストでいらっしやることを否定する者である(2: 22 を参照)。この嘘をつく者は「反キリスト」と呼ばれる。

2: 12

NASB	「こうして、... な者は皆裁かれるのです」
NKJV	「こうして、... な者は皆罰を受けるのです」
NRSV	「こうして、... な者は皆罰を受けるのです」
TEV	「その結果... な者は皆罰を受けるのです」
NJB	「皆罰を受けることとなります」

KJV ではこれは「処罰される」と訳されている。この用語は「公平に裁かれること」を意味している(紀元 1611 年に用語「処罰される」が持っていた意味と同様に)。

「不義を喜んでいた」 彼らは真理を愛さず悪を愛していた(ヘブル 11: 25 を参照)。

13～17 節の文脈の洞察

- A. この文脈は、神がテサロニケの信徒達の生活に無償の選びの恵みを下さっていること(2: 11 と逆)に対する(感謝の)祈りである。1: 3-4 が信徒についての感謝の祈りであるのと同じように、これは神が彼らの生活に働き続けておられることに対する(感謝の)祈りである。
- B. 多くの意味で2章の結句は1章の結句に似ている。
- C. 13 節以降は明らかに 11～12 節の未信者の運命と対照的である。
- D. この節には3つの思想単位(主題)が見られる。
 1. 13～14 節、信徒と聖化
 2. 15 節、信徒の忍耐

3. 16～17 節、「良いもの」における信徒の励ましと希望の問題

(各節において神の無償の恵みは人類の適切な応答との間に釣り合いを保っている)

NASB(改訂版)原典: 2: 13-15

¹³しかし、主に愛されている兄弟たち、わたしたちはあなたがたのことでいつも神に感謝せず
にられません。なぜなら神は、霊による聖めと真理への信仰を通して、あなたがたを最初の救
いにあずかる者としてお選びになったからです。¹⁴このことのために、つまりわたしたちの主イエ
ス・キリストの栄光にあなたがたがあずかることのできるようにするために、神はわたしたちの福
音を通してあなたがたを召されたのです。¹⁵ですから、兄弟たち、堅く立って、わたしたちが言葉
や手紙で伝えた教えを固く守り続けなさい。

2: 13「わたしたちはあなたがたのことでいつも神に感謝せずにはられません」これと同じ真理は
5: 18 に表現されている。ガラテヤ 6: 18 の特別なトピック「パウロの賛美と祈りと感謝」を見よ。

「神...主...霊」パウロはしばしば三位一体の神について婉曲的に述べた(ローマ 1: 4-5、5
章 1-5 節、8: 1-4 と 8~10 節、I コリント 12: 4-6、II コリント 1: 21、13: 14、ガラテヤ 4: 4-6、エペソ
1: 3-14 と 17 節、2: 18、3: 14-17、4: 4-6、I テサロニケ 1: 2-5、テトス 3: 4-6 を参照)。他の新約聖
書の著者達もこの主題(三位一体の神)について述べている(マタイ 3: 16-17、28: 19、ヨハネ 14 章
26 節、使徒行伝 2: 32-33 と 38~39 節、I ペテロ 1: 2、ユダ 20~21 節を参照)。ガラテヤ 4: 4 の特
別なトピック「三位一体の神」を見よ。

「主に愛されている兄弟たち」「愛されている」は *agapao* の現在形受動態分詞形である。これは
選びを意味している(ローマ 1: 7、コロサイ 3: 12、I テサロニケ 1: 4 を参照)。メシアに対する素晴
らしい称号「私の愛する者」(マタイ 3: 17、17: 5 を参照)は今やメシアに従う人々に対するものとな
った。彼らは真理を愛するがゆえに愛されるのだ(2: 10 を参照)。

NASB	「なぜなら神はあなたがたを最初の救いにあずかる者としてお選びになったか らです」
NKJV	「なぜなら神はあなたがたを最初の救いにあずかる者としてお選びになった からです」
NRSV	「なぜなら神はあなたがたを救いの初穂としてお選びになったからです」
TEV	「なぜなら神はあなたがたを最初の救いにあずかる者としてお選びになったか らです」
NJB	「なぜなら神はあなたがたを最初の救いにあずかる者としてお選びになったか らです」

これは、神御自身が信徒を選ばれている(エペソ 1: 4 を参照)という意味のアオリスト中間態直説法動詞である。これは 2: 11 と神学的に対照的である。選びの教義は(1)えこひいきによって得られた地位ではなく聖さへの召し(エペソ 1: 4 を参照)である(2)失なわれた者達に対するものではなく、救われた人々のためのものである。パウロは新約聖書の中でこの主題について数回述べている(ローマ9章、I コリント 7: 7、エペソ 1: 4-13、II テモテ 1: 9 を参照)。これは I テサロニケ 2: 12 と 5: 9 にも暗示されている。神が救いと歴史を支配されることはこの文脈の主な論点である。悪は霊的な王国にも現実の王国にも存在するが、そのことは二元論では説明できない。信徒は選びの神秘を完全に理解することができないとはいえ、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神が万物を完全に愛をもって支配されると確信している。

選びは素晴らしい教義である。しかしそれはえこひいきをすることへの召しではなく、他者の救いの道となり方法となり手段となることへの召しである。旧約聖書ではこの用語は主に奉仕について用いられ、新約聖書では主に奉仕の結果実現する救いについて用いられている。聖書は神の統治と人類の自由意志の間に見られる矛盾に決して妥協しないが、両者を認めているのだ。この聖書的緊張の2つの良い例は、ローマ9章の神の権威による選びと、ローマ10章(10: 11 と 13 節を参照)の人類の応答の必要である。

この神学的緊張の要点はエペソ 1: 4 に見られるようだ。イエスは神に選ばれた方であり、全ての人にはイエスに特別に選ばれた人である(Karl Barth の説)。イエスは墮落した人類の必要に対する神の「はい(肯定的な返事)」である(Karl Barth の説)。エペソ 1: 4 は信徒の予定された目標が天ではなく聖さ(キリストのようになること)であると主張しているのだ。このことを明らかにするうえでも有用である。ヨハネ 15: 16 には私達が実を結ぶようにするためにイエスが私達を選ばれたとある。私達はしばしば福音の恩恵に心を奪われて責任を忘れることがある。神の召し(選び)は時になうものであると同時に永遠でもあるのだ。

教義は単独の他と無関係な真理ではなく、他の真理と関連している。このことと似ている事柄の良い例は星座と単独の星の関係である。神は西洋の文学ジャンルにではなく東洋の文学ジャンルに真理を示されている。私達は双極的な(逆説的な)2つの真理の組から緊張を取り除いてはいけない。

「契約」の神学的概念は(常に主導権を執られ計画される)神の統治と人類の自発的で継続的な悔い改めと信仰による応答の義務とを結び付ける。この逆説の一方の側だけを根拠に聖句を解釈して他方を軽視することのないように気を付けなさい。あなたの好む教義や神学体系だけを(自論の)主張の根拠としないように気を付けなさい。

聖句「最初に」はギリシャ語の原典^N、D、K、L とペシッタ訳聖書に見られる(NEB を参照)。しかし原典 B、F、G、P とウルガタ聖書とハルクレアシア語訳聖書では「初穂」となっている(NIV、NAB を参照)。問題は聖句「最初に」がパウロの著書の他の箇所では用いられていないことである。A.T. Robertson はその聖句が本来の語義(意味)で用いられていると思っている(*Word Pictures in the New Testament* 第4巻 54 ページを参照)。また、UBS⁴はその聖句を階級 B(ほぼ確定)としてい

る。彼は「世の初めから」(コロサイ 1: 26 を参照)あるいは「世の始まる前から」(I コリント 2: 7 を参照)を用いている。しかし、パウロが選びについて述べるために「初穂」の概念を用いることは決してなかった。文脈批評の原則についての補遺2を見よ。

特別なトピック: *Arche*

用語「領地」はギリシャ語の用語 *arche* であり、何かの「始まり」あるいは「起源」を意味する。

1. 創造された秩序の始まり(ヨハネ 1: 1、I ヨハネ 1: 1、ヘブル 1: 10 を参照)
2. 福音の始まり(マルコ 1: 1、ピリピ 4: 15、II テサロニケ 2: 13、ヘブル 2: 3 を参照)
3. 最初の目撃(ルカ 1: 2 を参照)
4. 初めのしるし[奇跡]まり(ヨハネ 2: 11 を参照)
5. 基本原則(ヘブル 5: 12 を参照)
6. 福音の真理に基づく最初の確信(ヘブル 3: 14 を参照)
7. 始まり(コロサイ 1: 18、黙示録 3: 14 を参照)

この語は「支配」あるいは「権威」の意味で用いられるようになった。

1. 人間の政府の
 - a. ルカ 12: 11
 - b. ルカ 20: 20
 - c. ローマ 13: 3、テトス 3: 1
2. 天使の政府の
 - a. ローマ 8: 38
 - b. I コリント 15: 24
 - c. エペソ 1: 21、3: 10、6: 12
 - d. コロサイ 1: 16、2: 10 と 15 節
 - e. ユダ 6 節

これらの偽教師達は地上の権威も天の権威も全て軽視している。彼らは二律背反主義の自由思想家達である。彼らは神と天使と都市政府と教会指導者よりも自身と自身の望みを優先させていた。

「**霊による聖めを通して**」 聖さの概念の2つの側面がここに現れている。ひとつは、「最初の聖さとはキリストに結ばれることである」ということであり、もうひとつは「継続的な聖さとはキリストのような姿に成長していくということ」である(ローマ 8: 28-29、ガラテヤ 4: 19 を参照)。聖霊は私達のためにキリストに哀願され、私達が罪を自覚できるようにされ、私達が福音の真理を確信できるようにされ、キリストの御名において私達に洗礼を施され、私達の内にキリストを形造られるのだ(ヨハネ 16: 8-16 を参照)。I テサロニケ 4: 3 の特別なトピック「聖化」を見よ。

「と真理への信仰」 13 節の「真理」は 14 節の「福音」の類似語である。

2: 14「このことのために神はあなたがたを召されたのです」これも選びの強調である（Ⅰテサロニケ 2: 12、5: 9 と 24 節を参照）。この小さな、迫害を受け気落ちした信徒の集団は神に選ばれた民であった。彼らは聖さ（エペソ 1: 4 を参照）、つまりキリストのようになること（ローマ 8: 28-29、ガラテヤ 4: 9 を参照）に召されていた。

「わたしたちの福音を通して」福音は、信じられることになる神の御言葉と、受け取られることになる人物（つまりイエス・キリスト）である。それは墮落した人類に流れる神の祝福のしきみである。他に道はないのだ。

「つまりわたしたちの主の栄光にあなたがたが気づかることのできるようにするために」ここでは 1: 12 で述べたことを再び言っている。「栄光」は定義が難しい。この語は旧約聖書の中でさまざまな意味で用いられている。この文脈中ではこの語は、キリストの御業を通して聖霊によって聖められることへの、父なる神からの信徒の召しを反映している（エペソ 1: 4 を参照）。信徒はキリストのような人となり、キリストの再来の時に彼と一緒に栄光を受けることになっている（Ⅰヨハネ 3: 2 を参照）。1: 9 の詳しい解説とガラテヤ 1: 5 の特別なトピック「栄光」を見よ。

「主」旧約聖書における神の契約の名は YHWH である。この動詞は交互に「私は『私を存在させているもの』である」あるいは「私は『私は存在する』である」ということを述べているようだ。ユダヤ人は神の御名を虚しいものとしてしまうことを恐れて、聖書を読むときにこの名を大きな声を出して言うことをためらった（出エジプト 20: 7 を参照）。それで彼らはこの名を、「地主、亭主、主人、領主」を意味するヘブル語の単語 *adon* に置き換えた。私達の英語訳聖書では YHWH は全て大文字で LORD となっている。新約聖書の著者達がこの用語をイエスについて用いているのは旧約聖書の神とイエスを区別するためであった。Ⅰテサロニケ 1: 9 の特別なトピック「神の御名」を見よ。

「イエス」新約聖書の著者達はこの用語を単独で用いてナザレのイエスの御人格を言い表した。

「キリスト」これは、文字通り「聖別された方」である「メシア」を意味するヘブル語の用語の音訳である。旧約聖書では3種類の役職、つまり預言者、司祭、王が聖別された。それは特別な働きへの神の召しと備えであった。イエスは旧約聖書でのこれら3種類の役職全てを兼任された（ヘブル 1: 2-3 を参照）。

特別なトピック: 聖書における聖化 (BDB603)

A. 美化についての使用（申命記 28: 40、ルツ 3: 3、Ⅱサムエル 12: 20、14: 2、Ⅱ歴代誌 28: 1-5、

- ダニエル 10: 3、アモス 6: 6、ミカ 6: 15 を参照)
- B. 客についての使用(詩篇 23: 5、ルカ 7: 38 と 46 節、ヨハネ 11: 2 を参照)
- C. いやしについての使用(イザヤ 6: 1、エレミヤ 51: 8、マルコ 6: 13、ルカ 10: 34、ヤコブ 5: 14 を参照)[エゼキエル 16: 9 では衛生的な意味で用いられている]
- D. 埋葬の準備についての使用(創世記 50: 2、II 歴代誌 16: 14、マルコ 16: 1、ヨハネ 12: 3 と 7 節、19: 39-40 を参照)
- E. 宗教的意味での使用(物について。創世記 28: 18 と 20 節、31: 13[柱]、出エジプト 29: 36[祭壇]、出エジプト 30: 36、40: 9-16、レビ 8: 10-13、民数記 7: 1[礼拝堂]を参照)
- F. 指導者の擁立についての使用
1. 祭司
 - a. アロン(出エジプト 28: 41、29: 7、30: 30 を参照)
 - b. アロンの息子達(出エジプト 40: 15、レビ 7: 36 を参照)
 - c. 決まり文句あるいは称号(民数記 3: 3、レビ 16: 32 を参照)
 2. 王
 - a. 神によって(I サムエル 2: 10、II サムエル 12: 7、II 列王記 9: 3 と 6 節と 12 節、詩篇 45 篇 7 節、89: 20 を参照)
 - b. 預言者達によって(I サムエル 9: 16、10: 1、15: 1 と 17 節、16: 3 と 12~13 節、I 列王記 1: 45、19: 15-16 を参照)
 - c. 祭司達によって(I 列王記 1: 34 と 39 節、II 列王記 11: 12 を参照)
 - d. 長老達によって(士師記 9: 8 と 15 節、II サムエル 2: 7、5: 3、II 列王記 23: 30 を参照)
 - e. メシアなる王イエス(詩篇 2: 2、ルカ 4: 18[イザヤ 61: 1]、使徒行伝 4: 27、10: 38、ヘブル 1: 9[詩篇 45: 7]を参照)
 - f. イエスに従う人々(II 歴代誌 1: 21、I ヨハネ 2: 20 と 27 節[*chrisma*] を参照)
 3. (多分)預言者(イザヤ 61: 1 を参照)
 4. 神に救われた未信者の器
 - a. キュロス(イザヤ 45: 1 を参照)
 - b. テイルの王(エゼキエル 28: 14 を参照、エドムの比喩が用いられている)
 5. 用語つまり称号「メシア」は「聖別された方」を意味する(BDB603)

2: 15「兄弟たち」これは要約へ移ることを示している。

「堅く立って」これは2個の現在形能動態直説法動詞の一つである。パウロはしばしばこれを忍耐の比喩に用いた(I テサロニケ 3: 8、I コリント 16: 13、エペソ 6: 11 と 13 節を参照)。これは、肉体的あるいは精神的迫害や誤った教えに直面しても信徒が忍耐する必要があることを強調している。I コリント 15: 1 ではこの用語はキリストに結ばれた私達の立場について用いられている。これ

は上記の強調点と選びの間に釣り合いをもたらしている。ガラテヤ 5: 4 の特別なトピック「忍耐」を見よ。

「固く守り続けなさい」これはもう一つの現在形能動態直説法動詞である。パウロの教えた真理から信徒は離れずにい続けるべきである(I コリント 11: 2 を参照)。これは選びの間に神学的釣り合いを保っている。

「教え」この用語(*paedosis*)はいくつかの意味で用いられている。

1. I コリント 11: 2 と 23 節では福音の真理の意味で
2. マタイ 15: 6、23: 1 以降、マルコ 7: 8、ガラテヤ 1: 14 ではユダヤの伝統の意味で
3. コロサイ 2: 6-8 ではグノーシス主義(不可知論)の意味で
4. ローマカトリック教会はこの節を、聖書と伝統が権威上同等であることの聖書的根拠として用いている。

しかし、この文脈ではこの用語は使徒が語りまたは記した真理を指している(3: 6 を参照)

NASB(改訂版)原典: 2: 16-17

¹⁶わたしたちの主イエス・キリスト御自身と、わたしたちを愛し、恵みによって永遠の慰めと確かな希望を与えてくださるわたしたちの父なる神が、¹⁷あなたがたの心を励まし強め、いつもよい働きをし、よい言葉を語る者としてくださいますように。

2: 16-17 これは 1: 2 と 3: 16 と同様に祈りである。

2: 16「わたしたちの主イエス・キリスト御自身と、わたしたちを愛し、恵みによって永遠の慰めと確かな希望を与えてくださるわたしたちの父なる神が」ギリシャ語の原典には特定の単数形代名詞「御自身」と2つの単数形アオリスト分詞(愛すると与える)を伴う2つの主語がある。イエスについて最初に述べられていることにも注意しなさい。このことはそれら2つの主語の統一と同等性を示している(I テサロニケ 1: 1 と 2 節、3: 11 を参照)。御子と父なる神は私達に永遠の慰めと確かな希望を与えてくださる。I テサロニケ 1: 1 の特別なトピック「父なる神」を見よ。

NASB、NKJV	「永遠の慰め」
NRSV	「永遠の慰め」
TEV	「永遠の励まし」
NJB	「絶え間ない慰め」

信徒の慰めと希望は、キリストを通して見られまた実現する神の恵みに基づいている。I テサロニケ 4: 18 とちょうどよく似た、励ましについての霊的指導の文脈に注目しなさい。イエスの再来

についてのパウロの考察は私達の学説や理論を裏付けるためのものではなく、私達がキリストのように日々なり続けるように励ますためのものであった（I コリント 15: 58 を参照）。

「**確かな希望**」この特別な語形は新約聖書ではここでのみ用いられている。用語「希望」はしばしばイエスの再来の意味で用いられている（ガラテヤ 5: 5 の特別なトピック「希望」を見よ）。この言葉は、この神学的主題に注目したテサロニケ人への手紙の中ではとくに真実である。「**確かな希望**」は神の恵みからのみもたらされる。

2: 17 イエス・キリストと父なる神は恵みによって私達を愛し、永遠の慰めと確かな希望を与えてくださるが、その目的は

1. 私達の心を慰める
2. (a)いつもよい働きをする
(b)いつもよい言葉を語る
ことができるように私達の心を強める

ことである。

ギリシャ語の原典でも、17 節の「慰め」と同じ用語が用いられている。これら2つの節はギリシャ語の原典では一つの文となっている。信徒は「よいこと」をし、また言うように励まされていることに注目しなさい。私達はよいことをすることによって救われるのではなく、よいことをし、また言うために救われるのである。私達とキリストの関係は私達をキリストのような者とさせるものでなければならぬ。私達はよい働きをするように召されている（エペソ 1: 4 と 2: 10 を参照）。全ての信徒の目標は、死後に行くことになる天国ではなく、今がキリストのような者であることである。これらのよい働きとよい言葉は、私達の救い主を知らない人々に私達が信徒として福音を伝えるうえで助けとなりうる。

「**心**」ガラテヤ 4: 6 の特別なトピックを見よ。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ（優先事項）を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは（ある特定の概念を）定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. イエスの再来という主題はなぜ教会内で論争的になっているのか。
2. イエスの再来は差し迫ったことなのか。また、特定の出来事が最初に起こらなければならない

のか。

3. 神は人々が信じることのできないようなことをされているか。
4. 「嘘」とは何か。

テサロニケ人への第二の手紙3章

現代語訳聖書の段落分割

NASB	NKJV	NRSV	TEV	NJB
私達のための の祈り	私達のための祈り	結語、叱責と 祈り	私達のための祈り	忍耐するようにと いう励まし (2: 13~3: 5)
3: 1-5	3: 1-5	3: 1-5	3: 1-2 3: 3-4 3: 5	3: 1-5
怠惰への警 告	怠惰への警告		働きの義務	怠惰と不一致へ の警告
3: 6-15	3: 6-15	3: 6-13	3: 6-10 3: 11-12 3: 13-15	3: 6 3: 7-9 3: 10-12
3: 14-15		3: 14-15		
祝祷	祝祷		結語	祈りと別れの言葉
3: 16	3: 16-18	3: 16	3: 16	3: 16
3: 17-18		3: 17-18	3: 17	3: 17-18
			3: 18	

第三読書サイクル(viiページを見よ)

原著者の意図に段落レベルで従う

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

(解釈を試みようとしている)章を一通り読みなさい。その章の主題を明らかにしなさい。主題を上挙げた5つの現代語訳聖書の間で比較しなさい。段落分割は神の啓示により行うことではないが、原著者の意図に従うために重要なことであり、それは解釈の中心である。各段落は一つで唯一の主題を持つ。

1. 第一段落
2. 第二段落

3. 第三段落
4. (以下同様)

1～18節の文脈の考察

- A. パウロは自身の福音宣教のための祈りを求めている(エペソ6: 19、コリント4: 3を参照)。彼は自身の将来の福音宣教への神の祝福が彼ら(テサロニケの信徒達)への最初の説教においてなされたと見ていた。
- B. パウロは、働くことを拒む信徒達の中に見られているような、イエスの再来についての誤った教えがもたらす破壊的な結果を警告している。

NASB(改訂版)原典: 3: 1-5

¹最後に、兄弟たち、わたしたちのために祈ってください。主の御言葉が、あなたがたのところでもそうであったように、速やかに宣べ伝えられあがめられますように。²また、道に外れた悪人どもからわたしたちが逃れられますように。というのは、全ての人に信仰があるわけではないからです。³しかし、主は真実な方ですから、必ずあなたがたを強めて悪い者から守ってくださいます。⁴わたしたちが命じることをあなたがたが実行しており、そしてこれからも実行し続けると、わたしたちは主によって確信しています。⁵主があなたがたの心を神の愛とキリストの忍耐に導いてくださいますように。

3: 1「最後に」パウロはこの聖句(「その他については」)を自身の最後の真理つまり主題を述べるために用いている(I テサロニケ 4: 1を参照)。それは結論の始まりである。それは結語の導入のためにも用いられている(II コリント 13: 11を参照)。これが文字通り交差対句法[訳者注: 対句を逆に並べて交差させるもの]の中心的主張のしるしである可能性もある(I テサロニケ 4: 1を参照)。

「わたしたちのために祈ってください」これは現在形中間態(異態)命令法動詞である。パウロは祈りの必要を感じ、それが自身の働きの効率に影響すると信じていた(I テサロニケ 5: 25、エペソ 6: 19、コロサイ 4: 3を参照)。I テサロニケ 1: 2の特別なトピック「とりなしの祈り」を見よ。

「主の御言葉が」パウロは自身のための祈りではなく福音のための祈りを求めている。

創世記 15: 1と4節では聖句「主(YHWH)の御言葉」は神のアブラハムへの御言葉を指していた。この聖句はI サムエル 15: 10とイザヤ 1: 10では預言的な意味で用いられている。

新約聖書ではこの聖句は2通りの形で見られる。

1. *rhema* (語られた言葉)を用いたもの。ルカ 22: 61、使徒行伝 11: 16、I ペテロ 1: 25
2. *logos* を用いたもの。使徒行伝 8: 25、13: 44と48節と49節、15: 35、16: 32、19: 10と20節、

I テサロニケ 1: 8、4: 15 を参照

この2つの形の間に神学的な区別はないようだ。

NASB、NRSV	「速やかに宣べ伝えられあがめられますように」
NKJV	「速やかに宣べ伝えられあがめられますように」
TEV	「速やかに宣べ伝えられあがめられ続けますように」
NJB	「速やかに宣べ伝えられあがめられますように」

2つの現在形仮定法動詞がある。用語「宣べ伝えられる」は文字通り「競争に出る」(現在形能動態仮定法動詞)である。これは詩篇 147: 15 を暗示しているようだ。この文脈中の「栄光」(現在形受動態仮定法動詞)は「名誉」と理解されなければならない。それは受け取られ喜ばれる福音を指している。福音は、墮落した人類がそれに適切に応答し(2 節を参照)回心したときに誉れとなる。

3: 2「道に外れた悪人どもからわたしたちが逃れられますように」これはアオリスト受動態仮定法動詞である。この時制と、2つの形容詞の付いた冠詞は、パウロの生涯に起こった特別な出来事を示している。この教会はその出来事が何かを理解していた(I テサロニケ 2: 16 を参照)。パウロがコリントから書き送った手紙によれば、彼はその地で大きな苦難に遭った(II コリント 4: 8-11、6 章 4-10 節、11: 23-28 を参照)。

「というのは、全ての人に信仰があるわけではないからです」これは文字通り「信仰」である。これは(1)福音を受けるとい個人的体験あるいは(2)教義的意味での福音の真理を指しているようだ。悪人はしばしば善人のふりをする(マタイ 7: 21-23 を参照)。ガラテヤ 3: 6 の特別なトピック「信条」を見よ。

3: 3「主は真実な方です」ここでは用語「信仰」は、誠実さという旧約聖書での意味で用いられている。イエスは 2 節の悪人たちとは正反対である(I テサロニケ 5: 26 を参照)。ガラテヤ 3: 6 の特別なトピック「旧約聖書における信条」を見よ。

「強めてくださいます」セプトウアギンタ(LXX)ではこの用語は都市のようなものを建てるという意味で用いられた。後にこの用語は比喩的に人を建て上げるという意味で用いられるようになった(ローマ 16: 25、I テサロニケ 3: 2、II テサロニケ 2: 17、3: 3 を参照)。真実なる主は御自身を建て上げられ、悪と悪人と悪しきものから御自身を守られるのだ。

「守ってくださいます」これはこの章に見られる多くの軍事用語のひとつである(I ペテロ 1 章 3~12 節、I ヨハネ 5: 18 を参照)。

「悪い者から」この語尾が変化したギリシャ語の用語は中性形または男性形と思われる。東洋の教会の教父達と Tertullian はこの用語を男性形で解釈し、西洋の教会の教父達はこの用語を中性形で解釈している(ローマ 12: 9 を参照)。新約聖書では男性形での解釈が支持されているようだ(マタイ 5: 37、6: 13、13: 19 と 38 節、ヨハネ 17: 15、エペソ 6: 16、I ヨハネ 2: 13-14、3: 12、5 章 18-19 節を参照)。I テサロニケ 2: 18 の特別なトピック「悪しき者」を見よ。

この文脈は2つのことを指していると考えられる。ひとつはパウロの時代の偽教師達(反キリスト。I ヨハネ 2: 18 を参照)であり、もうひとつは反キリストという終末論的な悪(黙示録13章を参照)である。悪は常に存在するが、真実なる主もまたいつもおられるのだ。主は御自分に従う人々を悪人達から救いまた守られ、御自分に従う人々を強めて悪人達から守ってくださるのだ。

3: 4「あなたがたが... してくれると、わたしたちは主によって確信しています」これは現在形能動態直説法動詞であり、過去に起こって現在も継続中の行為を意味している。パウロの確信は「主によって」いたが、同時にこれら信徒達によるものでもあった。これと同じような、二つの事柄の両立はピリピ 2: 12-13 に見られる。救いは統治者なる神からのものであると同時に人類の応答(「している」と「し続けることにしている」)からもたらされるものである。神が人類に対してなさることは全て無条件の、条件の付かない契約としての約束に関連したものである。

「命じる」これは軍事用語である。この用語はこの文脈中で繰り返し用いられている(4、6、10、12 節を参照)。これはパウロの使徒としての権限を示している。この用語は(1)パウロの説教(2)彼の最初の手紙であるテサロニケ人への手紙第一(3)今解説している彼の手紙のテサロニケ人への手紙第二を指しているようだ。

3: 5「主が... 神の... キリストの... して下さいますように」用語「主」の曖昧さは明らかである。旧約聖書ではこの用語は常に YHWH を指している。新約聖書の著者達は YHWH の御業をイエスのものと述べるためにしばしば旧約聖書の聖句を引用した。この流動性は意図的に思われる。なぜなら神の啓示を受けた新約聖書の著者達がイエスの神性を主張して三位一体の神の御業を一つにまとめようとしたからである(2: 16-17 を参照)。

「導く」これはアオリスト能動態願望法動詞であり、祈り(I テサロニケ 2: 11-13 を参照)を反映している。これも軍事用語であり、「障害物を取り除いて直進する」ことを意味する。これは旧約聖書の比喻「よく整えられた義の道」(ルカ 1: 79、I テサロニケ 3: 11 を参照)を暗示している。この祈りに関して重要な2つの事柄、つまり(1)神の愛と(2)キリストの忍耐に注目せよ。

「心」この用語は旧約聖書では人物全体を指して用いられているが、さらに心に特定して用いられうるものであり、その解釈がこの文脈に最も合っている。ガラテヤ 4: 6 の特別なトピックを見よ。

「神の愛」この所有格を含む聖句は目的語としても主語としても、つまり神の私達への愛とも私達の神への愛とも理解されうる。文脈では神の私達への愛の方がよりふさわしい。

「キリストの忍耐」この聖句はパウロの著書の他の箇所どこにも用いられていない。この語はやや曖昧な意味の用語である。この語は「意志的でひたむきな忍耐」を意味する能動的な用語である。キリストが忍耐の模範を示されたので(ピリピ 2: 6-11 を参照) 信徒は忍耐することができる。

この所有格を含む聖句は、キリストがなされた忍耐のような信徒の忍耐、つまりキリストが信徒に与えられた忍耐を意味していると考えられる。この聖句は多分、前の聖句と同様に主格だろう。どちらの場合もこの忍耐は以下に示す事柄と関連している。

1. 彼ら(テサロニケの信徒達)が現在受けている迫害
2. 誤った教えに対する彼らの応答とその結果教会員の一部に見られるようになった怠惰
3. いつでも起こり得る、つまり今は先延ばしとなっているかに思われるイエスの再来に対する信徒の忍耐と信頼、そして信仰を持って待ち望む生活(11 節のようではない)

NASB(改訂版)原典: 3: 6-15

⁶兄弟たち、わたしたちはあなたがたに、わたしたちの主イエス・キリストの御名によって命じます。怠惰な生活をして、わたしたちから受けた教えに従わないでいる全ての兄弟を避けなさい。⁷というのは、あなたがた自身、わたしたちにどのように倣えばよいかを知っているからです。なぜなら、わたしたちはあなたがたのところにいたときに怠惰な生活をしなかったからです。⁸また、誰からも代価を払わずにパンを食べることはせず、むしろ誰にも負担をかけまいと夜も昼も苦勞して働きました。⁹それは、このような援助を受ける権利がわたしたちになかったからではなく、あなたがたがわたしたちに倣うように身をもって模範を示すためでした。¹⁰あなたがたのところにいたときでさえ、わたしたちはこのように命じていました。働こうとしない者がいるなら、その者は食ってはならないと。¹¹ところが、聞くところによると、あなたがたの中には怠惰な生活をし、全く働かず、余計なことばかりしている者がいるということです。¹²そのような者たちにわたしたちは、主イエス・キリストに結ばれた者として、落ち着いて仕事をし、自分で手に入れたパンを食べるように命じ、また勤めます。¹³そして兄弟たち、あなたがたはたゆまず善いことを行いなさい。¹⁴もし、この手紙のわたしたちの教えに従わない者がいれば、その者には特に気を付けてかわりを持たないようにしなさい。そうすればその者は恥じ入ることになるでしょう。¹⁵しかし、その者を敵とはみなさず、兄弟として戒めなさい。

3: 6「わたしたちはあなたがたに、主の御名によって命じます」これは礼儀上はシラスとテモテを含めた複数の人物からの言葉であるが、現実には使徒パウロからの言葉である。彼(パウロ)は神からの靈感と、キリストによって教会を導き教会に命令する(現在形能動態直説法動詞)権威とを認識していた(10 節と 12 節を参照)。「~の名によって」は人の性質つまり人格を指すヘブル語

の熟語である。

「の(御)名によって」これは人の性質つまり人格を表すセム語の熟語である(1: 12 を参照)。パウロは自身の権威から語ることはなかった。

特別なトピック: 主の御名

これは三位一体の神の教会内での個人的御臨在と活動力を述べた、新約聖書の一般的な聖句である。それは魔法の呪文ではなく、神の御性質の現れである。

しばしばこの聖句は主イエスを指す(ピリピ 2: 11 を参照)。

1. 洗礼の際のイエスへの信仰告白のとき(ローマ 10: 9-13、使徒行伝 2: 38、8: 12 と 16 節、10: 48、19: 5、22: 16、I コリント 1: 13 と 15 節、ヤコブ 2: 7 を参照)
2. 悪魔払いの儀式で(マタイ 7: 22、マルコ 9: 38、ルカ 9: 49、10: 17、使徒行伝 19: 13 を参照)
3. いやしの時に(使徒行伝 3: 6 と 16 節、4: 10、9: 34、ヤコブ 5: 14 を参照)
4. 伝道の働きの際に(マタイ 10: 42、18: 5、ルカ 9: 48 を参照)
5. 教会指導の時に(マタイ 18: 15-20 を参照)
6. 異邦人への説教の間に(ルカ 24: 47、使徒行伝 9: 15、15: 17、ローマ 1: 5 を参照)
7. 祈りの中で(ヨハネ 14: 13-14、15: 2 と 16 節、16: 23、I コリント 1: 2 を参照)
8. キリスト教を指す言葉(使徒行伝 26: 9、I コリント 1: 10、II テモテ 2: 19、ヤコブ 2: 7、I ペテロ 4: 14 を参照)

私達が宣教者、伝道師、助け手、いやし手、悪魔払いの祈禱師等として何をしようと、私達は神の御性質、御力、備え—つまり神の御名に基づいてそれをしているのだ。

「避けなさい」これは現在形中間態不定詞であり、コイネギリシャ語では「あなたは、あなたがた自身は、避け続けなさい」(14 節を参照)という命令形としてしばしば用いられる。従順ではない人々と信徒は親密で個人的な関係を持つべきではない(ローマ 16: 17、I コリント 5: 11、II テサロニケ 3: 14 を参照)。これは失なわれた人々と墮落した信徒のうちとけた友情を指しているのではない(15 節を参照)。

NASB	「怠惰な生活をしている」
NRSV	「間違った歩み方をしている」
NKJV	「怠惰な生活をしている」
TEV	「怠惰な生活をしている」
NJB	「働くことを拒んでいる」

これも「でたらめな指揮をする」という意味の軍事用語である(6、7、11 節を参照)。この用語はここでは怠惰で協調性のない信徒を指して用いられている(I テサロニケ 4: 11-12、5: 14 を参照)。

主イエスの再来が差し迫っていることを感じて多くの信徒は日常生活での行為を止めていた。それらの人々は他の教会員からの援助を期待していた。I テサロニケ 4: 2 の特別なトピック「富」を見よ。

NASB	「わたしたちから受けた」
NRSV	「わたしたちから受けた」
NKJV	「わたしたちから受けた」
TEV	「わたしたちが授けた」
NJB	「わたしたちが授けた」

この動詞の形はギリシャ語の原典群の間で様々である。

1. *parelabosan* あるいは *parelabon*(アオリスト能動態直説法動詞。三人称複数形)「彼らが受けた」、NRSV
2. *parelaben*(アオリスト能動態直説法動詞。三人称単数形)「彼が受けた」、NKJV
3. *Parelabetete*(アオリスト能動態直説法動詞。二人称複数形)「あなたがたが受けた」、NASB と NJB

パウロの書簡群の中には代名詞に関する事柄について様々な表現が見られる。

3: 7「わたしたちにどのように倣えばよいか」 この時代には新約聖書(書物の形になった新しい契約)がなかった。これらの信徒達は(1)パウロの[パウロを通して神から宣べ伝えられた]福音を受け取り(2)パウロに倣って歩まなければならなかった(9 節、I コリント 4: 16、11: 1、ピリピ 3 章 17 節、4: 9、I テサロニケ 1: 6 を参照)。

3: 8「誰からも代価を払わずにパンを食べることはせず」 これはヘブル語の熟語である。他のラビ(教師)達と同様にパウロは日々の必要のために働いた(I コリント 9: 12 と 18 節、11: 7、II コリント 11: 9、12: 13-14、I テサロニケ 2: 9 を参照)。ギリシャ・ローマ世界では旅回りの多くのペテン師つまり詐欺師が人々を騙していた。パウロはしばしば説教の報酬を受け取ったかどで告発されていた。この告発に敏感になったのか、パウロが説教を聞いた人々から金銭を受け取ることは稀であった。

「苦勞して働きたのです」 ギリシャ人は肉体労働をするのは奴隷だけだと考えていたが、聖書によれば労働は神が全ての人に与えられたものである。創世記には労働は墮落の前にも後にも見られる(創世記 2: 15、3: 19、出エジプト 31: 3、35: 35、申命記 5: 13、イザヤ 54: 16 を参照)。日々の必要のための労働の概念はこの文脈にとって重要である。信徒の中には主イエスの再来が近いことを確信して働くことを拒む者がいた。

「夜も昼も」これはユダヤ人のいう時間の順序である(創世記 1: 5、8 節、13 節、19 節、23 節、31 節を参照)。これは「ずっと働き続けた」という意味の熟語であるが、「ずっと」とは文字通り一日24 時間という意味ではない。

3: 9「このような援助を受ける権利がわたしたちになかったからではなく」信徒は自分を指導してくれる人を援助すべきであるという考えをパウロは認めていた(I コリント 9: 4-17、ガラテヤ 6: 6 を参照)。しかし、この特殊な状況下で彼は(1)働くことをやめた人々に対して模範を示し(2)なされる批判を避けるよう行動した。

「模範」 I テサロニケ 1: 7 の特別なトピック「型」を見よ。

3: 10「わたしたちはこのように命じていました」これは未完了形能動態直説法動詞であり、その文脈に沿った意味は、パウロが彼らと一緒にいたときに繰り返し語ったということであるに違いない。この命令は彼らにとって初めてのものではなかった。この問題はこの教会が設立された当初から、多分パウロが去る前にも直面していたものであったに違いない。

「... なら」これは第一種条件文である。このテサロニケの教会にはこのような人々がいた。

「働こうとしない者がいるなら、その者は食べてはならない」これは現在形能動態直説法動詞と現在形能動態命令法動詞である。これはこの章全体の要点である。それは無為な生活様式のことを言っているのであって、一時的に働いていない状態を言っているのではない。貧者の取り扱い方についてはこの書簡とパウロの他の書簡との間で釣り合いが保たなければならない(使徒行伝 24: 17、ローマ 15: 26-29、II コリント 8~9 章、ガラテヤ 2: 10 を参照)。この命令は(1)働こうとしない者を養ってはいけません、あるいは(2)そのような者を愛餐会に参加させてはなりません、と理解されうる(13 節と 14 節を参照)。

3: 11「聞くところによると... ということです」これは現在形能動態直説法動詞であり、文字通り「長い間聞いている」という意味である。

NASB	「余計なことばかりしている」
NRSV	「余計なことばかりしている」
NKJV	「全く働かない」
TEV	「他人の事に余計な世話ばかりしている」
NJB	「他人の事に余計な世話ばかりしている」

これは用語「働く」についてのギリシャ語の言葉遊びであり、「働く(*epgazomenous*)」ことをせず

自分の周囲の人々におせっかいをする(*periergazomenous*)」ことを意味する。彼らの「仕事」は他人の事業(仕事)への干渉となっていた。パウロはこの章でしばしば用語「仕事」を用いている(3: 8と10節と11節と12節およびIテサロニケ4: 11を参照)。

3: 12 パウロは強い口調の警告の言葉(1)「命じる」[現在形能動態直説法動詞](2)「勧める」[現在形能動態直説法動詞](3)「主イエス・キリストにおいて」を用いている。これは(1)怠惰な者がクリスチャンであること、そして(2)パウロがイエスの御名において彼らに命じたということの意味しているようだ。

「落ち着いて仕事をするように」これもパウロの警告である(Iテサロニケ4: 11、Iテモテ2: 2を参照)。これは、信徒は奇妙で異常な行動によって自身が過度に注目されるようにするべきではなく、むしろ信徒にふさわしく、静かで、礼儀正しく、道徳的で、愛があり、他者をいたわり、労働にはげむ生活をするによって自身が注目されるようにするべきである(3: 11の逆)ということの意味しているようだ。

私達の時代にはしばしば信徒は奇妙な信条や行動によって「目立」とうとする。パウロが労働と証しの模範であったように、現代の信徒もそのようであるべきだ。もしメッセージが論争を生むなら、それ自体に問題があるのであり、メッセージをした者に落ち度はないのだ。

NASB、NKJV	「自分で手に入れたパンを食べる」
NRSV	「自分の仕事をする」
TEV	「自分自身の生活の糧を得るために働く」
NJB	「自分で食べるための食物を手に入れる」

これは自分自身の労働によって自分自身を養うという意味の熟語である。

3: 13「たゆまず善いことを行いなさい」これは教会の静かで礼儀正しい日常生活について述べている(ルカ18: 1、IIコリント4: 1、ガラテヤ6: 9を参照)。人々は神のような生活をするように気を付けている。

3: 14「もし」これは著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定した第一種条件文である。

NASB、NKJV	「その者には特に気を付けなさい」
NRSV	「その者には気を付けなさい」
TEV	「それらの者には気を付けなさい」
NJB	「その者には気を付けなさい」

これは現在形中間態命令法動詞である。これは文字通り「印を付ける」という意味である。これ

は精神的に「気を付ける」ことの比喩である。

「かわりを持たないようにしなさい」これは命令の意味で用いられる現在形中間態(異態)不定詞である。これは6節の「～から離れる」と同じである。これが以下に示すような事柄と関係しているかどうかは明らかではない。

1. 正式な破門(除名)
2. 教会の食事会(*agape* の宴)からの排除
3. 指導者的役職あるいは交わりの場からのある種の排除

これは親密な交わりについて述べた I コリント 5: 9 と 11 節(この箇所[II テサロニケ 3: 14]と I コリント 5: 9 と 11 節にのみ見られる語)である。パウロはこれらの信徒達に他の信徒を過激化したり信徒の交わりから去ったり(あるいは対抗的な終末論の派閥を作ったり)してほしくなかったのだ。

「そうすればその者は恥じ入ることになるでしょう」教会訓練の目的は教え導くこととともに救いでもある(15 節、ガラテヤ 6: 1、I テサロニケ 4: 15 を参照)。その目標は回復なのだ。

NASB(改訂版)原典: 3: 16

¹⁶どうか、平和の主御自身が、いついかなる場合にもあなたがたに平和を与えてくださいますように。主があなたがた一同と共におられますように。

3: 16「平和の主」これは父なる神の一般的な称号である(ローマ 15: 33、16: 20、II コリント 13 章 11 節、ピリピ 4: 9、I テサロニケ 5: 23、ヘブル 13: 20 を参照)。テサロニケ人への手紙第二の結語がテサロニケ人への手紙第一の結語とどれくらいよく似ているかに注意しなさい。パウロは自身の書簡の文体を向上させている。

「主があなたがた一同と共におられますように」ギリシャ語の用語「一同」(*pantos*)はこの節に2箇所と 18 節にある。パウロの警告の対象にはそれらの誤りを犯している者達も含まれる。「主」とはイエスあるいは父なる神を指しているようだ。I テサロニケ 3: 11 中の言い換えた文を見よ。

NASB(改訂版)原典: 3: 17-18

¹⁷わたしパウロが自分の手でこのあいさつを書きます。これはどの手紙にも記すはっきりした印です。わたしはこのように書きます。¹⁸わたしたちの主イエス・キリストの恵みがあなたがた一同と共にありますように。

3: 17「自分の手でこのあいさつを書きます」パウロは自身の書簡を書記に書き取らせたが、書簡を自分が書いたことを証明するために結語は自分の手で書いた(2: 2、I コリント 16: 21、ガラテヤ

6: 11、コロサイ 4: 18、フィレモン 19 節を参照)。このことはパウロのこの書簡以降に書かれた書簡の全てにおいて習慣化したようだ。

3: 18 この結語は I テサロニケ 5: 28 の結語ととてもよく似ている。ギリシャ語原典の大半は「アーメン」を付け加えているが、 α と B には見られない。書記達はその語をどの書簡にも付け加える傾向があった。

ディスカッションのための質問

本書は学習の手引きの注解書であるから、あなたは自分自身の聖書解釈に責任を負わなければならない。私達は各自、自分の目の前にある光の中を歩まなければならない。あなた、聖書、そして聖霊が解釈において優先される。あなたはこれ(優先事項)を解説者に譲渡してはならない。

ディスカッションのためのこれらの質問はあなたが聖書のこの箇所の主題について考えるのを助けるため与えられる。これらは(ある特定の概念を)定義することではなく考えを喚起することを意図している。

1. 御言葉を拒む人々を教会はどのように取り扱うべきか。
2. この章は私達の現代の幸福状態について何を言っているか。差し迫ったことなのか。
3. 16 節の真理はなぜとても重要なのか。

補遺1

ギリシャ語の文法構造の簡単な定義

コイネギリシャ語はしばしばヘレニズム(アレクサンドロス大王の時代以降の古代ギリシャ世界)ギリシャ語と呼ばれ、アレクサンドロス大王の遠征(紀元前336~323年)以降約800年間(紀元前3世紀~紀元5世紀)にわたって地中海世界の共通(公用)言語であった。それは単なる簡略化された古代ギリシャ語ではなく、多くの意味でより新しい形のギリシャ語であり、古代近東世界ならびに地中海世界の第二共通(公用)言語となった。

新約聖書のギリシャ語はある意味で独特だが、それは多分、ルカとヘブル人への手紙の著者を除くその言語の使用者が主にアラム語を用いていたからだろう。だから彼らの文体はアラム語の熟語と(文法等の)構造形態の影響を受けていた。また、彼らは新約聖書と同じくコイネギリシャ語で書かれたセプトウアギンタ(旧約聖書のギリシャ語訳)を読み、また引用していた。しかしセプトウアギンタはギリシャ語を母語としないユダヤ人学者達によっても書かれている。

新約聖書の文体に厳密な文法構造をあてはめることはできないということを覚えておくべきである。新約聖書の文体は独特だが、(1)セプトウアギンタ(2)Josephusの著作物のようなユダヤ人の書いた書物(3)エジプトで発見されたパピルスではとても一般的である。では私達はどのように新約聖書の文体の文法構造を解明すべきだろうか。

一般のコイネギリシャ語と新約聖書のコイネギリシャ語の文法的特徴は流動的である。多くの意味でその当時は文法の簡略化が盛んな時代であった。文脈は私達にとって大きな助けとなるだろう。より大きな文脈において単語群だけが意味をもつならば、文法構造は(1)著者特有の文体と(2)特定の文脈をもとに理解されうる。ギリシャ語の様式と構造を厳密に定義することはできない。

コイネギリシャ語は主として動詞中心の言語であった。解釈においてはしばしば動詞の型と形が重要となる。主節の大半においては冒頭に動詞が現れているが、これは動詞が他の品詞より優先されることを示している。ギリシャ語動詞の解釈においては3種類の情報に注目しなければならない。3種類の情報とは(1)時制と態と法が本質的に強調している事柄[語形論つまり形態論](2)特定の動詞の基本的意味[辞書編集法、辞書学](3)文脈の流れ(統語法)である。

I. 時制

A. 時制つまり相は動詞と完了した行為あるいは完了していない行為との関係を取り扱う。これはしばしば「完了時制」あるいは「未完了時制」と呼ばれる。

1. 完了時制は行為の存在に注目する。何かが起こったということ以外に詳しいことは分かっていないのだ。その行為の始まりと継続あるいは最高潮については述べられていない。
2. 未完了時制は行為の継続過程に注目する。それは連続行為や持続行為や継続行為などの用語で表現される。

- B. 時制は著者がその行為を進行中のものとしてどのように見るかによって分類される。
1. それは起こった＝アオリスト
 2. それは起こり、結果が伴った＝完了形
 3. それは過去に起こり、結果が伴っていたが、今は起こっていない＝過去完了形
 4. それは起こっている＝現在形
 5. それは起こっていた＝未完了形
 6. それは起こることになっている＝未来形
- これらの時制がどのように解釈の助けとなるかの具体例としては用語「救う」が挙げられる。その語はその過程と最高潮とを示すためにいくつかの時制で用いられた。
1. アオリスト—「救った」(ローマ 8: 24 を参照)
 2. 完了形—「救われ、その結果が伴い続けている」(エペソ 2: 5 と 8 節を参照)
 3. 現在形—「救われている」(I コリント 1: 18、15: 2 を参照)
 4. 未来形—「救われることになっている」(ローマ 5: 9、10 節、10: 9 を参照)
- C. 動詞の時制に注目して、解釈を試みる者は原著者が自身(の行為)を表現するのに特定の時制を選択した理由を探る。標準的な「飾りのない」時制はアオリストであった。それは通常の「不特定の」、「限定されていない」、「他と区別されていない」動詞形であった。それは文脈が特定しているに違いない様々な動詞形で用いられる。それは単に何が起こったかを述べている。過去に関する時制は直説法の中でのみ表現される。他の時制が用いられたとしても、より特別な何かが強調されていた。それらの時制とは何だろうか。
1. 完了時制。これは結果を伴う完了した行為について述べる。ある意味でそれはアオリストと現在時制の結合したものであった。通常は付随する結果あるいは行為の完了に注目する(例: エペソ 2: 5 と 8 節「あなたがたは救われ、そして救われ続けているのです」)。
 2. 過去完了時制。これは付随する結果の発生が終わっていることを除けば完了時制と似ている。例: ヨハネ 18: 16「ペテロは扉の外に立っていた」
 3. 現在時制。これは未完結つまり未完了の行為について述べる。通常は出来事の継続に注目する。例: I ヨハネ 3: 6 と 9 節「神に結ばれている者は誰も罪を犯し続けることはありません」「神の子となった者は誰も罪を犯し続けることはありません」
 4. 未完了時制。この時制と現在時制との関係は完了時制と過去完了時制との関係に似ている。未完了時制は、起こっていたが今は終わった未完結の行為つまり過去における行為の始まりについて述べている。例: マタイ 3: 5「そこでエルサレム全土から人々が出て彼のもとに集まり始めた」
 5. 未来時制。これは通常は未来の時間枠に組込まれる行為について述べている。それは現実の出来事よりはむしろその出来事が起こる可能性に注目する。それはしばしばその出来事が起こる確実性について述べる。例: マタイ 5: 4-9「... は幸いである。彼らは...」

II. 態

- A. 態はその動詞の行為とその主語との関係を表す。
- B. 能動態はその主語がその動詞の行為を行っていることを普通に、予想されたように、強動的にではなく言い表す方法であった。
- C. 受動態はその主語が部外者によって行なわれたその動詞の行為を受けていたことを意味している。その行為を行う部外者はギリシャ語訳の新約聖書では以下に示すような前置詞と格で示された。
 - 1. 奪格の *hupo* で示される当事者(マタイ 1: 22、使徒行伝 22: 30 を参照)
 - 2. 奪格の *dia* で示される、間接的に関与している者(マタイ 1: 22 を参照)
 - 3. 通常、助格(具格)の *en* で示される物事
 - 4. 助格(具格)のみで示される人あるいは物事
- D. 中間態はその主語がその動詞の行為を生みだし、またその動詞の行為に直接関係することを意味している。それはしばしば高位の人物に関する事柄の態と呼ばれる。この文法構造はある意味で節あるいは文の主語を強調している。この文法構造は英語には見られない。ギリシャ語では様々な意味つまり訳がありうる。この動詞形には例えば以下に示すようなものがある。
 - 1. 再帰動詞—主語自体の直接的行為。例: マタイ 27: 5「首をつって死んだ」
 - 2. 強意(強調)の動詞—主語がそれ自体の行為を生み出す。例: II コリント 11: 14「サタン自身が光の天使を装うのです」
 - 3. 相補的動詞—2つの主語の相互作用。例: マタイ 26: 4「彼らは相談し合った」

III. 法

- A. コイネギリシャ語には4つの法がある。それらは動詞と現実との関係を、少なくとも著者自身の心の中で示している。それらの法は広い意味で2通りに区分される。ひとつは現実を示すグループ(直説法)であり、もうひとつは可能性を示すグループ(仮定法、命令法、願望法)である。
- B. 直説法は起こった行為あるいは起こっていた行為を少なくとも著者の心の中で表現する通常の法であった。それはギリシャ語にだけ見られる法であり、特定の時を表現しているが、ここでもその特質は二次的なものである。
- C. 仮定法は起こりうる未来の行為を表現した。何かはまだ起こっていなかったが、そうなる(起こる)可能性はあった。それは未来形直説法ではとても一般的であった。それとの違いは、仮定法はある程度の疑わしさを表現しているということであった。英語ではこれはしばしば用語“could”、“would”、“may”、“might”で表現されている。
- D. 願望法は論理的に実現可能な願望を表現した。それは仮定法よりもさらに一歩現実から進んだ行為を表現する法と考えられた。願望法はある条件の下での可能性を表現した。願望法は新約聖書では稀であった。それが最も頻繁に用いられているのはパウロの有名な聖句

「決してそうではない」(KJV、「神が禁じられている」)であり、15回も用いられている(ローマ 3: 4 と 6 節と 31 節、6: 2 と 15 節、7: 7 と 13 節、9: 14、11: 1 と 11 節、I コリント 6: 15、ガラテヤ 2: 17、3: 21、6: 14 を参照)。他の例はルカ 1: 38、20: 16、使徒行伝 8: 20、I テサロニケ 3 章 11 節に見られる。

- E. 命令法は実行可能な命令を強調したが、話者の意図が強調された。それは意志的な可能性のみを主張し、他者の選択を条件とする。祈りと第三者の要求には命令法の特別な用法がある。これらの命令は新約聖書では現在時制とアオリスト時制にのみ見られる。
- F. 分詞をもうひとつの型の法に区分する文法もある。それらはギリシャ語訳の新約聖書ではとても一般的であり、通常は形容動詞と定義されている。それらは関連する主動詞と関連づけて訳される。分詞には様々な訳が可能である。いくつかの英訳聖書を参照するべきである。ここでは Baker 社刊 *The Bible in Twenty Six Translations* が大きな助けとなる。
- G. アオリスト能動態直説法は出来事を普通に、つまり「特定せずに」記述する方法である。他のいかなる時制と態と法もこれほどには原著者の伝えたかった特別な解釈上の重要性を持たなかった。

IV. ギリシャ語に馴染みのない人には以下の学習の手引きが必要な情報を与えてくれるだろう。

- A. Barbara&Timothy Friberg 著 *Analytical Greek New Testament*、Grand Rapid の Baker 社から 1988 年刊
- B. Alfred Marshall 著 *Interlinear Greek-English New Testament*、Grand Rapid の Zondervan 社から 1976 年刊
- C. William D. Mounce 著 *The Analytical Lexicon to the Greek New Testament*、Grand Rapid の Zondervan 社から 1993 年刊
- D. Ray Summers 著 *Essentials of Greek New Testament*、Nashville の Broadman 社から 1950 年刊
- E. Illinois 州 Chicago の Moody 聖書学院の学界公認のコイネギリシャ語のコースが受講可能である。

V. 名詞

- A. 統語論的には名詞は格によって分類される。格は名詞の語尾が屈折(変化)した形であり、動詞と文の他の要素との関係を示すものであった。コイネギリシャ語では格の機能の多くは前置詞で示された。格が様々な関係を明らかにしたので、前置詞はこれらの考える機能をよりはっきりと区別できるようにした。
- B. ギリシャ語の格は以下の8種類に分類される。
 1. 主格は命名に用いられ、通常は文あるいは節の主語であった。それはまた、動詞「～である」や「～になる」と連結させて叙述的な名詞あるいは形容詞に用いられた。
 2. 属格(所有格)は記述に用いられ、通常は関連する語の属性つまり特質に帰属された。それは質問「どの」の答えとなった。それはしばしば英語の前置詞“of”を用いて表現された。

3. 奪格は属格と同じ語尾変化形を用いたが、離脱を表現するのに用いられた。それはしばしば時間、空間、源、起源、程度上の一点からの離脱を述べた。それはしばしば英語の前置詞“from”を用いて表現された。
4. 与格は個人的な事柄を表現するのに用いられた。これは肯定的な事柄も否定的な事柄も述べていたようだ。しばしばこれは間接目的語であった。それはしばしば英語の前置詞“to”を用いて表現された。
5. 所格(位置格)は奪格と同じ語尾変化形を用いたが、空間、時間上の位置あるいは論理的限界を表現するのに用いられた。それはしばしば英語の前置詞“in”、“on”、“at”、“among”、“during”、“by”、“upon”、“beside”を用いて表現された。
6. 助格(具格)は奪格および所格と同じ語尾変化形を用いた。それは手段あるいは提携を表現した。それはしばしば英語の前置詞“by”あるいは“with”を用いて表現された。
7. 対格は行為の完結を表現するのに用いられた。それは限界を表現した。それは主に直接目的語として用いられた。それは質問「どの程度」の答えとなった。
8. 呼格は直接的発言に用いられた。

VI. 接続詞と接続語

- A. とても多くの接続詞があるので、ギリシャ語は非常に正確な言語である。それら接続詞は思想(節、文、段落)を連結する。それらはあまりにも多数(多種類)あるので、それらが(見当たらないこと(連辞[接続詞])はしばしば聖書解釈上重要なことである。事実、これらの接続詞と接続語は著者の思想の方向を示している。それらはしばしば、著者が伝えようとしていることとは正確には何かを見定めるうえで重要である。
- B. ここにそれらの(ギリシャ語の)接続詞と接続語およびそれらの意味を挙げる(この情報は主に H. E. Dana と Julius K. Mantey 共著 *A Manual Grammar of the Greek New Testament* から少しずつ集めた)。

1. 時間接続詞

- a. *epei*、*epeide*、*hopote*、*hos*、*hote*、*hotan* (仮定法)—「～の時」
- b. *hoes* —「～の間」
- c. *hotan*、*epan* (仮定法)—「～の時はいつでも」
- d. *hoes*、*achri*、*mechri* (仮定法)—「～まで」
- e. *priv* (不定詞)—「～の前に」
- f. *hos* —「～以来」、「～の時」、「～と同時に」

2. 論理接続詞

- a. 目的
 - (1) *hina* (仮定法)、*hopos* (仮定法)、*hos* —「～するために」、「～のために」
 - (2) *hoste* (分節的対格不定詞)—「～のために」
 - (3) *pros* (分節的対格不定詞)または *eis* (分節的対格不定詞)—「～のために」

- b. 結果(目的と結果の文法形の間には密接な関係がある)
- (1) *hoste* (不定詞。これが最も一般的である)―「～して. . .」、「そして～」
 - (2) *hiva* (仮定法)―「そして～」
 - (3) *ara* ―「そして～」
- c. 原因あるいは理由
- (1) *gar* (原因/影響あるいは理由/結論)―「～から」、「～ので」
 - (2) *dioti*、*hotiy* ―「～ので」
 - (3) *epei*、*epeide*、*hos* ―「～から」
 - (4) *dia* (対格を伴う)と *dia* (分節的不定詞を伴う)―「～ので」
- d. 推論
- (1) *ara*、*poinun*、*hoste* ―「だから」
 - (2) *dio* (最強の推論接続詞)「そのために」、「したがって」、「だから」
 - (3) *oun* ―「だから」、「それで」、「そして」、「その結果」
 - (4) *toinoun* ―「その結果」
- e. 反意あるいは対比
- (1) *alla* (強い反意接続詞)―「しかし」、「～以外は」
 - (2) *de* ―「しかし」、「しかしながら」、「だが」、「一方」
 - (3) *kai* ―「しかし」
 - (4) *mentoi*、*oun* ―「しかしながら」
 - (5) *plen* ―「それにもかかわらず」(主にルカの福音書で)
 - (6) *oun* ―「しかしながら」
- f. 比較
- (1) *hos*、*kathos* (比較節を導く)
 - (2) *kata* (複合語で。*katho*、*kathoti*、*kathosper*、*kathaper*)
 - (3) *hosos* (ヘブル人への手紙で)
 - (4) *e* ―「～より」
- g. 継続あるいは連続
- (1) *de* ―「そして」、「さて」
 - (2) *kai* ―「そして」
 - (3) *tei* ―「そして」
 - (4) *hina*、*oun* ―「そして」
 - (5) *oun* ―「そして」(ヨハネの福音書で)
3. 強調用法
- a. *alla* ―「確かに」、「本当に」、「事実」
 - b. *ara* ―「事実」、「確かに」、「現実的に」

- c. *gar* —「しかし現実」、 「確かに」、 「事実」
- d. *de* —「事実」
- e. *ean* —「～さえ」
- f. *kai* —「～さえ」、 「確かに」、 「現実」
- g. *mentoi* —「事実」
- h. *oun* —「現実」、 「まさにそのとおり」

VII. 条件文

- A. 条件文は1つ以上の条件節を含む文である。この文法構造は、主動詞の行為が起こる、あるいは起こらない条件、理由、原因を示すので解釈の助けとなる。条件文には4つの型がある。それらは著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定した文を願望だけを述べた文に変換している。
- B. 第一種条件文は「もし～」で表現されているとはいえ、著者の観点と著述の目的に忠実であると仮定した行為あるいは存在を表現している。いくつかの文脈ではそれは「～だから」と訳されているようだ(マタイ 4: 3、ローマ 8: 31 を参照)。しかし、これは全ての第一種条件文が現実(事実、真実)に忠実であるという意味ではない。しばしばそれらは主張を強調したり誤りを明らかにするのに用いられた(マタイ 12: 27 を参照)。
- C. 第二種条件文はしばしば「事実と反対のこと」と呼ばれる。それは事実に忠実ではないことを強調している。例を挙げよう。
1. 「この人がもし預言者なら、自分に触れている女が誰で、どのような者か分かるはずだ。」(ルカ 7: 39)
 2. 「あなたたちはモーセを信じたのであればわたしをも信じたはずである。」(ヨハネ 5: 46)
 3. 「もし今なお人の気に入られようとしているなら、わたしはキリストのしもべではありません」(ガラテヤ 1: 10)
- D. 第三種条件文は起こり得る未来の行為を述べる。それはしばしばその行為の起こる可能性について断言する。それは通常は偶然性を暗示する。主動詞の行為は「もし～」節の行為に付随する。例えば I ヨハネ 1: 6-10、2: 4 と 6 節と 9 節と 15 節と 20 節と 21 節と 24 節と 29 節、3: 21、4: 20、5: 14 と 16 節。
- E. 第四種条件文は可能性を最も排除した事柄を述べた文である。それは新約聖書では稀である。事実、条件文の両部分(「もし～」節と従属節)が定義に合っているような完全な第四種条件文はない。部分的な第四種条件文の例は I ペテロ 3: 14 の冒頭の節(「もし～」節)である。結論の節(従属節)が部分的に第四種条件文となっている文の例は使徒行伝 8: 31 である。

VIII. 禁止

- A. *me* 分詞のついた現在形直説法動詞はしばしば(排他的にではなく)すでに進行している行為の停止を強調している。例えば「地上に富を蓄えてはいけません。 . . .」(マタイ 6: 19)、「自

分の生活のことで思いわずらってはいけません. . .」(マタイ 6: 25)、「あなたがたの体を不義の道具として罪に任せてはなりません. . .」(ローマ 6: 13)、「神の聖霊に逆らってはいけません. . .」(エペソ 4: 30)、「酒に酔いしれてはなりません. . .」(エペソ 5: 18)。

B. me 分詞のついたアオリスト仮定法動詞は「ある行為をし始めてはならない」という強調である。例えば「. . . だと思っははいけません」(マタイ 5: 17)、「. . . で思いわずらってはいけません. . .」(マタイ 6: 31)、「. . . を恥じてはなりません」(Ⅱテモテ 1: 8)。

C. 仮定法を伴う二重否定はとても強制的な否定である。それは「決して、絶対に. . . ない」あるいは「いかなる状況下でも. . . ない」のように表現される。例えば「その人は決して死ぬことがない」(ヨハネ 8: 51)、「わたしは決して. . . しません」(Ⅰコリント 8: 13)。

IX. 冠詞

A. コイネギリシャ語では限定冠詞「その」は英語の限定冠詞 the と同様の用法を持っていた。その基本的機能は「指示詞」としての機能、つまり語や名や句に注目させることであった。その用法は新約聖書では著者により異なる。この限定冠詞には以下のような機能もあったようである。

1. 指示代名詞のような対照用品詞としての機能
2. 予め導入された主語つまり人物を示すしとしての機能
3. 連結動詞のある文中で主語をはっきりさせる手段としての機能。例えば「神は霊である」(ヨハネ 4: 24)、「神は光である」(Ⅰヨハネ 1: 5)、「神は愛である」(4: 8 と 16 節)

B. コイネギリシャ語には英語の不定冠詞 a と an のような不定冠詞がなかった。不定冠詞がないことは以下のようなことを意味したようである。

1. 物事の特徴あるいは特質が注目される
2. 物事の範疇が注目される

C. 新約聖書の著者によって冠詞の用法は様々である。

X. ギリシャ語の新約聖書における強調の様式

A. 強調の様式は新約聖書の著者によって様々である。最も堅実で形式的な著者はルカとヘブル人への手紙の著者である。

B. 以前に述べたように、アオリスト能動態直説法は標準的で不特定のものを強調したが、他のいかなる時制と態と法もこれほどの解釈上の重要性を持たなかった。これはアオリスト能動態直説法が文法的な重要性を持って用いられることが稀であったという意味ではない(例: ローマ 6: 10[2回])。

C. コイネギリシャ語の語順

1. コイネギリシャ語は英語と同じように語順によらない語尾屈折(語尾変化)の言語であった。従って著者は通常の予想される語順を変化させて以下のようなことを示していたようだ。
 - a. 著者が読者に示したかったこと

- b. 読者を驚かせていたであろう著者の思想
 - c. 著者が深く感動したこと
2. ギリシャ語の通常の語順は未解決の問題である。しかし、予想される通常の語順は
- a. 連結動詞の場合
 - (1) 動詞
 - (2) 主語
 - (3) 補語
 - b. 他動詞の場合
 - (1) 動詞
 - (2) 主語
 - (3) 目的語
 - (4) 間接目的語
 - (5) 前置詞句
 - c. 名詞句の場合
 - (1) 名詞
 - (2) 修飾語
 - (3) 前置詞句

となる。

3. 語順は聖書解釈上きわめて重要である。例えば

- a. 「彼らは友好のしるしとしてわたしとバルナバに右手を差し出しました」 聖句「友好のしるしとして右手を」は分割されて、その重要性を示すために文頭に置かれている(ガラテヤ 2: 9)。
- b. 「キリストとともに」は文頭に置かれた。キリストの死は中央に置かれた(ガラテヤ 2 章 20 節)。
- c. 「それは少しずつ多くのしかたで」(ヘブル 1: 1)は文頭に置かれた。対比されているのは神がどのように御自身を現わされたかということであり、啓示の内容ではない。

D. 通常、ある程度の強調は以下に示すような文筆技法によって示される。

- 1. 動詞の語尾屈折(変化)形の中にすでにある代名詞の反復。例:「わたしは、わたし自身は、いつもあなたがたとともにいる。 . . .」(マタイ 28: 20)
- 2. 存在が予想される接続詞あるいは語・句・節・文をつなぐその他の品詞の不在。これは連辞[接続詞]省略(「非拘束」)と呼ばれる。接続用品詞の存在が予想されたので、その不在は注意を引くことになる。例:
 - a. 主イエス・キリストが山上の説教で語られた幸福に関する章句、マタイ 5: 3 以降(列記による強調)

- b. ヨハネ 14: 1(新しいトピック)
 - c. ローマ 9: 1(新しい章)
 - d. IIコリント 12: 20(列記による強調)
3. 文脈中にある語句の反復。例:「神の栄光のために」(エペソ 1: 6 と 12 節と 14 節)。この聖句は三位一体の神のお一人お一人の御業を示すために用いられた。
4. 熟語あるいは用語間の言葉(音)遊びの使用
- a. 婉曲語法—(口に出して言うことが)禁止されている主題を他の用語で置きかえる。例えば死は「眠り」(ヨハネ 11: 11-14)に、男性生殖器は「足」(ルツ 3: 7-8、I サムエル 24: 3)に置きかえられている。
 - b. 遠回しな表現—神の御名を他の用語で置きかえる。例えば「天の御国」(マタイ 3: 21)、「天からの声」(マタイ 3: 17)。
 - c. 比喩的表現
 - (1) ありえない誇張(マタイ 3: 9、5: 29-30、19: 24)
 - (2) 穏やかな口調で述べられた極端な発言(マタイ 3: 5、使徒行伝 2: 36)
 - (3) 擬人化(I コリント 15: 55)
 - (4) 皮肉(ガラテヤ 5: 12)
 - (5) 韻文[ピリピ 2: 6-11]
 - (6) 語間の音遊び
 - (a) 「教会」
 - (i) 「教会」(エペソ 3: 21)
 - (ii) 「召し」(エペソ 4: 1 と 4 節)
 - (iii) 「召された」(エペソ 4: 1 と 4 節)
 - (b) 「自由な」
 - (i) 「自由な女」(ガラテヤ 4: 31)
 - (ii) 「自由」(ガラテヤ 5: 1)
 - (iii) 「自由な」(ガラテヤ 5: 1)
 - e. 熟語的言葉—通常は文化的な言葉と特定の言葉
 - (1) 「食物」の比喩的使用(ヨハネ 4: 31-34)
 - (2) 「神殿」の比喩的使用(ヨハネ 2: 19、マタイ 26: 61)
 - (3) 思いやりを意味するヘブル語の熟語と「憎む」(創世記 29: 31、申命記 21: 15、ルカ 14: 36、ヨハネ 12: 25、ローマ 9: 13)
 - (4) 「全ての」対「多くの」。イザヤ 53: 6(「全ての」)および 53: 11 と 12 節(「多くの」)を比較せよ。これらの用語はローマ 5: 18 と 19 節に見られるものと同意語である。
5. 一語の用語の代わりに一組の聖句を用いること。例:「主イエス・キリスト」
6. *autos* の特別用法

- a. 冠詞(限定用法)が付いているときは「同じ」と訳される。
- b. 冠詞(叙述用法)が付いていないときは強意の再帰代名詞—「彼自身」、「彼女自身」、「それ自身」として訳される。

E. ギリシャ語を母語としない聖書研究者は以下に示すいくつかの方法で強調を見分けることができる。

1. 解釈用の辞書とギリシャ語—英語聖書(隔行にギリシャ語と英語で書かれた聖書)の使用
2. 英訳聖書群、特に様々な翻訳理論の比較。例:「逐語」訳(KJV、N KJV、ASV、NASB、RSV、NRSV)と”dynamic equivalent”訳(Williams、NIV、NEB、REB、JB、NJB、TEV)の比較。ここでは Baker 社刊の *The Bible in Twenty-Six Translations* が大きな助けとなるだろう。
3. Joseph Bryant Rotherham 著 *The Emphasized Bible* (Kregel 社の 1994 年刊)の使用
4. 文字通り忠実に訳された聖書の使用
 - a. 1901 年刊の *The American Standard Version*
 - b. Robert Young 著 *Young's Literal Translations of the Bible* (Guardian Press の 1976 年刊)

文法の研究は退屈だが正しい解釈のためには必要である。これらの簡単な定義と注解と実例はギリシャ語を母語としない人々にこの巻の文法解説を用いるよう勧める意図がある。確かにこれらの定義は簡略化されすぎている。それらは教義の理解のためだけにではなく新約聖書の統語法のより深い理解のための布石として用いられるべきである。読者がこれらの定義によっても他の学習参考書、例えば新約聖書の専門的解説書を理解できるようになることを望む。

私達は聖書の文脈中に見られる情報に基づいて自らの解釈を裏付けることができなければならない。文法は解釈を裏付ける証拠となる事柄(複数)の中で最も助けとなるもののひとつである。他の証拠物件には歴史的背景、文脈、現代用語の用法、言い換え文などが含まれる。

補遺2 原典批評

この主題はこの注解書に見られる御言葉を解説する方法とみなされるだろう。以下に示す資料が用いられることになる。

I. 英訳聖書の御言葉

- A. 旧約聖書
- B. 新約聖書

II. 「原典批評」とも呼ばれる「軽い批評」の問題と理論の簡単な説明

III. さらなる読解のための推奨文献

I. 英訳聖書の御言葉

A. 旧約聖書

1. マソラ聖書(MT)—このヘブル語の子音字で綴られた聖書は紀元 100 年にラビ(ユダヤ教の指導者)の Aquiba により書かれた。母音記号、アクセント(抑揚)、行間のコメント、句読点、そしてその他の文法上の記号は紀元6世紀から9世紀にかけて付け加えられた。その付け加えの仕事はマソラ編集者として知られるユダヤ教の学者によってなされた。彼らが用いた原文体はミシュナ、タルムード、タルガム、ペシッタ聖書、ウルガタ聖書に見られるものと同じであった。
2. セプトゥアギンタ(LXX)—伝説によればセプトゥアギンタはエジプト王プトレマイオス2世(紀元前 285~246 年)の後援のもとにアレキサンドリア図書館において70日間にわたって70名のユダヤ教の学者によって編纂された。その翻訳(ギリシャ語訳)はおそらくアレキサンドリア在住のユダヤ教の指導者の求めによるものであろう。この伝説は「アリストテレス書簡」に由来する。LXX はその大半がラビ(ユダヤ教の指導者)の Aquiba の聖書(MT)に由来するヘブル語聖書の様々な伝統に基づいている。
3. 死海文書(DSS)—死海文書は古代ローマ帝国でいう紀元前の時代(紀元前 200 年~紀元 70 年)に「エセネ派」と呼ばれるユダヤ教の分派によって書かれた。死海周辺の数箇所で見発見されたヘブル語の原典は MT や LXX 以降の様々なヘブル語聖書群の特徴を示している。
4. これらの聖書の比較が解釈においてどのように旧約聖書の理解の助けとなっているかの特別な例
 - a. LXX は翻訳者と研究者が MT を理解する際の助けとなっている。
 - (1)イザヤ 52: 14 は LXX では「それほどに、**彼**は多くの民を驚かせるであろう」
 - (2)イザヤ 52: 14 は MT では「それほどに、**あなたは**多くの民を驚かせた」
 - (3)LXX ではイザヤ 52: 15 中の代名詞がはっきりと示されている。

- (a) LXX では「それほどに彼は多くの民を驚かせるであろう」
- (b) MT では「それほどに彼は多くの民を驚かせた」
- b. DSS は翻訳者と研究者が MT を理解する際の助けとなっている。
 - (1) イザヤ 21: 8 は DSS では「そこで見張りは叫んだ。『見張り台の上に私は立ち. . . 』」
 - (2) イザヤ 21: 8 は MT では「そして私は獅子のように叫ぶ。わが主よ、私は一日中見張り台の上に立ち. . . 」
- c. LXX と DSS はイザヤ 53: 11 の内容を明確に理解する際の助けとなっている。
 - (1) LXX と DSS では「自らの魂の苦しみの後に彼は光を見て満足するだろう」
 - (2) MT では「彼は自らの魂の苦しみの. . . を見て満足するだろう」

B. 新約聖書

1. ギリシャ語訳の新約聖書は完全なものと部分的なものを問わず 5300 件以上が現存している。約 85 件はパピルスに書かれており、268 件は全て大文字(アンシアル体)で書かれた原典である。後に紀元9世紀頃に流状書体(小文字体)が発達した。書物の形をとるギリシャ語の原典は約 2700 件ある。日課表(聖句集)と呼ばれ、礼拝に用いられた聖句のリストも約 2100 ほど現存している。
2. 部分的なものを含めて、パピルスに書かれた新約聖書のギリシャ語訳原典が美術館に約 85 件収められている。紀元2世紀に書かれたとされるものもあるが、大半は紀元3世紀あるいは4世紀に書かれたとされている。これらの MSS の中に新約聖書全体が記されているものはない。これらが新約聖書の最古の写本であるからというだけで異本が少ないと断言することはできない。これらの多くは局所的に用いられるために手早く書き写された。その過程において注意は払われなかった。従ってそれらには多くの異本が存在する。
3. Codex Sinaiticus はヘブル語の文字^α(アレフ)つまり(01)で知られ、Tischendorf によりシナイ山の聖 Catherine 修道院で発見された。紀元4世紀に書かれたとされ、旧約聖書の LXX とギリシャ語訳の新約聖書が収められている。「アレキサンドリア原典」タイプの聖書である。
4. Codex Alexandrinus は「A」つまり(02)で知られ、エジプトのアレキサンドリアで発見された紀元5世紀のギリシャ語原典である。
5. Codex Vaticanus は「B」つまり(03)で知られる。ローマのバチカン図書館で発見され、紀元4世紀中頃に書かれたとされている。旧約聖書の LXX とギリシャ語訳の新約聖書が収められている。「アレキサンドリア原典」タイプの聖書である。
6. Codex Ephraemi は「C」つまり(04)で知られ、一部が破損した紀元5世紀のギリシャ語原典である。
7. Codex Bezae は「D」つまり(05)で知られる紀元5世紀あるいは6世紀のギリシャ語原典である。いわゆる「西洋聖書」の代表である。付け加えられた事柄が多く、欽定訳聖書の編纂時に原典として使用されたギリシャ語訳聖書である。
8. 新約聖書の MSS はそれぞれ特徴を持つ3つ、あるいは可能であれば4つのグループに分

けられる。

a. エジプトのアレキサンドリア原典

- (1) P⁷⁵、P⁶⁶ (紀元前 200 年頃)。福音書群が収められている。
- (2) P⁴⁶ (紀元前 225 年頃)。パウロの書簡群が収められている。
- (3) P⁷² (紀元前 225 年～250 年頃)。ペテロの書簡群とユダの手紙が収められている。
- (4) Codex B (紀元前 325 年頃)。Vaticanus と呼ばれ、旧・新約聖書全体が収められている。
- (5) このタイプの聖書からの Origen 引用
- (6) この聖書タイプの見られる他の MSS としては δ 、C、L、W、33 がある。

b. 北アフリカの西洋聖書

- (1) 北アフリカの教父 Tertullian と Cyprian および古代ラテン語訳聖書からの引用
- (2) Irenaeus からの引用
- (3) Tatian と古代シリア語訳聖書からの引用
- (4) Codex D 「Bezae」はこの聖書タイプに倣っている。

c. コンスタンティノーブルの東ビザンティン聖書

- (1) この聖書タイプは 5300 件の MSS の 80% 以上に反映されている。
- (2) シリアのアンテオケの教父 Cappadoceans と Chrysostom と Therodoret による引用
- (3) Codex A。福音書群中のみ
- (4) Codex E (紀元 8 世紀)。新約聖書全体が収められている。

d. 4 つめの考えられるタイプはパレスティナの「シーザー原典」である。

- (1) 主にマルコの福音書中にのみ見られる。
- (2) これの原典として使用されたのは P⁴⁵ と W である。

II. 「原典批評」とも呼ばれる「軽い批評」の問題と理論

A. 異本はどのようにして生まれたのか

1. 偶然の発生 (発生の大多数を占める)

- a. 手で書き写す際の見落とし。類似する 2 つの語の読み取りを後回しにして、その 2 つの語の間にある全ての語を見落としてしまうこと (類似語誘因脱落)。
 - (1) 2 文字の語あるいは句の見落とし (重字脱落)
 - (2) ギリシャ語原典の句あるいは行を誤って繰り返し書き写してしまうこと (重複誤写)
- b. 口述筆記によって書き写す際に聞き違いで綴りを間違えること (ギリシャ文字の η [エータ、イータ] を「イー」と聞き違えること)。このような綴りの間違いは音の似たギリシャ語の単語との意味や綴りの混同の誘因となる。
- c. 最古のギリシャ語原典には章あるいは節の分割がなく、句読点もわずかしかなく、または全くなく、語間の分割もなかった。異なる箇所では文字と文字の間を分割して異

なる語とすることは可能である。

2. 故意の(意図的な)発生

- a. 書き写される原典の文法形式の向上のために(原典の内容が)変更された。
- b. 書き写される原典と他の聖書原典との(内容の)一致を図るために(原典の内容が)変更された(言い換え文の調和)。
- c. 2つあるいはそれ以上の異本をつなぎあわせて一続きの聖書原典とするために(原典の内容が)変更された(異本合成)。
- d. 原典中に発見された問題の解決のために(原典の内容が)変更された(Iコリント 11: 27 と Iヨハネ 5: 7-8 を参照)。
- e. 原典の正しい解釈のためにある書記が行間に付け加えた、歴史的背景に関する情報を、その書記の書き写しの仕事を引き継いだ次の書記が原典の本文中に書き入れてしまったこと(ヨハネ 5: 4 を参照)。

B. 原典批評の基本原則(異本が存在する場合に本物の原典を判別するための論理的指針)

1. 最もごちない、つまり文法的に異和感のある原典が本物である可能性がある。
2. 最も短い原典が本物である可能性がある。
3. より古い原典は歴史的に(書かれた年代が)本物に近く、他の事柄も全て本物と同じであるのでより重要性が高い。
4. (他の聖書原典の発見された場所とは)地理的に離れた場所で発見された MSS は大半が本物であるといえる。
5. 教義的に弱い原典、特に異本についての神学的大議論、例えば Iヨハネ 5: 7-8 における三位一体の記述の多様性に関する原典はより本物とみなされている。
6. 他の異本の起源を最もよく説明しうる原典が本物である可能性がある。
7. 問題となるこれらの異本の様々な見解を調整するうえで助けとなる2つの引用
 - a. J. Harold Greenlee 著 *Introduction to New Testament Textual Criticism* の 68 ページには「議論が可能な原典にはクリスチャンの教義に固執しているものはない。従って新約聖書の研究者は自分が今研究している原典に神の啓示による本物の原典以上の正統性つまり教義的な強さを求めていることに気付かなければならない」とある。
 - b. W. A. Criswell 氏は *The Birmingham News* の Greg Garrison 氏との対談で自分は聖書中のいかなる啓示の言葉も信じないと言い、「必ずしも全ての言葉が幾世紀にもわたって現代まで翻訳者達によって明らかにされてきたわけではない」と述べている。Criswell 氏はまたこのように言っている「私は原典批評を大いに信じている。私が思うに、マルコの福音書 16 章の後半は異端説である。それは神の啓示による記述ではなく、ただのでっちあげである。... それらの原典でその聖書箇所(の)記述を比べてみれば、マルコの福音書の結論がそのようには記されていないことに気付く。誰かがそれを付け加えたのだ...」。

SBC 無謬論者協会の代表も、「改ざん」はヨハネの福音書5章のベテスダの池でのイエスについての記述においても明らかであると主張している。彼はまた、(イスカリオテの)ユダの自殺(マタイ27章と使徒行伝1章を参照)の2つの異なる記述について議論し、「それは単に自殺についての観点の違いである」と言っている。Criswell氏はそれに対して「それが聖書中にあるなら、それについての説明があるはずだ。そうするとユダの自殺についての記述が2つあることになる」と言っている。Criswell氏はさらにこのように言っている「原典批評はそれ自体素晴らしい科学である。それははかないものではない。それは場違いなものではない。それは壮大で中心的である...」。

Ⅲ. 原典の問題(原典批評)

A. さらなる読解のための推奨文献

1. R. H. Harrison 著 *Biblical Criticism: Historical, Literary and Textual*
2. Bruce M. Metzger 著 *The Text of the New Testament: Its Transmission, Corruption and Restraition*
3. J. Harold Greenlee 著 *Introduction to New Testament Textual Criticism*

補遺3 用語集

養子論 これはイエスと神性との関係についての古い考え方の一つである。この考え方の要旨は、イエスはあらゆる点で普通の人間であり、洗礼(マタイ3: 17、マルコ1: 11を参照)あるいは復活(ローマ1: 4を参照)の際に特別な意味で神の養子となられたということである。イエスはとても模範的な生活を送られたので、神は機会を見て(洗礼、復活)御自分の「御子」としてイエスを養子とされた(ローマ1: 4、ピリピ2: 9を参照)。これは初期教会と8世紀の少数派の意見であった。神が人となる(受肉)代わりにその逆のことが起こり、人が神となっているのだ。

神の御子でありすでにおられる神でいらっしゃるイエスが模範的な生活を送られたことに対してどのように賞賛されたかを言い表すことは難しい。もしイエスがすでに神でいらっしゃったなら、イエスはどのように賞賛されたのか。もしイエスがすでにおられる神としての栄光を受けられたなら、イエスはどのようにさらなる栄誉を受けられたのか。私達には理解が難しいが、父なる神は御自分の御意志の完全な成就という特別な意味でイエスに栄光を与えられたのである。

アレキサンドリア学派 この聖書解釈の方法は紀元2世紀にエジプトのアレキサンドリアで開発された。これはプラトンの弟子であったフィロの提唱した解釈の基本原則を用いている。これはしばしば寓話法と呼ばれる。これは宗教改革の時代まで教会内で影響力があった。その最も有力な擁護者は Origen とアウグスティヌスであった。Moises Silva 著 *Has The Church Mised The Bible?* (Academic 社が 1987 年刊)を見よ。

Alexandrinus エジプトのアレキサンドリアで発見された、この5世紀のギリシャ語原典は旧約聖書と聖書外典と新約聖書の大半から構成されている。これは現代の私達がギリシャ語の新約聖書の完全な書(マタイの福音書とヨハネの福音書とコリント人への手紙第二の一部を除く)の主な書として認めている書の一つである。この「A」と呼ばれる原典と「B」と呼ばれる原典(Vaticanus)の内容が一致する場合、これは多くの実例において大半の学者達から本物の原典とみなされる。

寓話 これは元々はアレキサンドリア学派のユダヤ教の中で生みだされ発展した聖書解釈の方法の一つである。この方法はアレキサンドリアのフィロによって普及した。この方法の主旨は聖書の歴史的背景と文脈を無視することによって読者の持つ文化あるいは哲学体系と聖句を関連づけることにある。この方法では各聖句の背後にある隠れた精神的意味が探られる。イエスがマタイ13章で、またパウロがガラテヤ4章で真理を伝えるために寓話を用いたことを認めなければならない。しかしこれ(真理を伝えるために寓話を用いたこと)は厳密には寓話の形ではなく予型論の形であった。

解釈辞典 これは新約聖書におけるギリシャ語のあらゆる形式を明らかにする研究道具の一種である。これはギリシャ語の形式と基本的定義をギリシャ語のアルファベット順に収録したものである。これは、隔行訳との組み合わせによって、ギリシャ語を母語としない信徒が新約聖書におけるギリシャ語の文法の形式と統語法の形式を解析できるようにしている。

聖句の類似 これは、聖書の全ての書が神の啓示によって書かれ、互いに矛盾せず相補っているという見解を表現するために用いられる成句である。この前提を認めることは聖書原典の解釈において並列文を用いる際の基礎的事柄である。

不明瞭さ これは文書中に2つ以上の意味がある場合または2つ以上の事柄が同時に示されている場合に生じる不確実さを指している。ヨハネが意図的に不明瞭さ(二重定義)を用いている可能性がある。

神人同形説 「人間に関する性質を持つ」という意味を表すので、この用語は神に関して私達がを用いる宗教的な言葉表現している。この用語は人類を意味するギリシャ語の用語に由来する。この用語は、私達が神に関する事柄をまるで人間に関する事柄であるかのように言い表す用語である。神は人間に関する身体的、社会的、心理学的用語の中に表現されている(創世記 3: 8、I 列王記 22: 19-23 を参照)。もちろんこれは単なる類似である。しかし、私達を指す、人間に関する用語以外に、神に関して用いるのに適した用語はない。従って、私達が神に関して知っている事柄は、真理ではあるが限られている。

アンテオケ学派 この聖書解釈の方法は紀元3世紀のシリアのアンテオケで開発され、エジプトのアレキサンドリアで開発された寓話をもとにする方法に対抗する方法であった。この方法の要旨は聖書の歴史的意味に注目することであった。この方法では聖書が普通の人間について書かれた文学と解釈される。この学派は、キリストが2つの御性質をお持ちである(ネストリウス主義)のか、それとも1つの御性質をお持ちである(一人の人間でいらっしゃるのとともにお一人の神でいらっしゃる)のかについての論争を生んだ。この学派はローマカトリック教会から異端とみなされ、ペルシアに追放されたが、学説はわずかに重要性を持っていた。その聖書解釈上の基本原理は後にプロテスタントの古典的宗教改革者達(ルターとカルヴァン)の聖書解釈の原理となった。

対句 これはヘブル語の韻文(詩)の行間の関係について述べるために用いられる3つの叙述用語のうちの一つである。これは互いに反対の意味を持つ詩の行に関連がある(箴言 10: 1 と 15: 1 を参照)。

黙示文学 これはユダヤの主な、多分独特でさえある文学ジャンルである。これはユダヤが外部

世界の勢力からの侵略と支配を受けた時代に用いられた、謎の意味不明なタイプの文学であった。この文学ではお一人の人間の姿をされた救いの神が世の出来事を創造されて支配され、そしてイスラエルは神から特別な関心を持たれ保護されているとみなされている。この文学は神の特別な御業を通した究極の勝利を約束している。

この文学には多くの意味不明な用語が見られるのでとても象徴的で空想的な印象がある。この文学ではしばしば色、数字、映像、夢、天使の仲介、秘密の暗号となる用語、あるいは善と悪との間の明確な二元論によって真理が表現される。この文学ジャンルの例は、旧約聖書ではエゼキエル書(36～48章)、ダニエル書(7～12章)、ゼカリヤ書、新約聖書ではマタイの福音書24章、マルコの福音書13章、テサロニケ人への手紙第二の2章、黙示録である。

護教論者(護教学) これは「法的弁論」を意味するギリシャ語の語幹に由来する。これは、クリスチャンの信仰についての証拠と合理的な議論とを探求する神学の中の特殊な教義である。

A priori これは用語「前提」と本質的に同意語である。これは、真理であると仮定された、予め受け入れられた定義や原理や立場からの理由づけと関連がある。これは試されたり解析されたりすることなく受け入れられる事柄である。

アリウス主義 アリウスは紀元3世紀から4世紀初頭にかけてエジプトのアレキサンドリアの教会で長老をつとめた人物であった。彼はイエスがすでにおられた方ではあるが神ではいっしょやらない(父なる神とは同一の方ではいっしょやらない)と主張したが、これは多分箴言 8: 22-31 に基づいた見解であろう。彼は紀元 318 年から長年にわたってアレキサンドリアの主(司)教と論争を繰り広げた。アリウス主義は東方教会の公的な見解となった。紀元 325 年のニケーア公会議ではアリウス主義が非難され、御子イエスの神との同一性と神性が主張された。

アリストテレス 古代ギリシャの哲学者の一人であり、プラトンの弟子であり、アレキサンダー大王の師であった。彼の影響は現代でさえ現代の科学の多くの分野に及んでいる。これは彼が観察と分類を通して知見を強調したからである。これは科学的方法の教義の一つである。

自筆 これは聖書の原本に対してつけられる名である。これらの原本、つまり手書きの原稿は全て失なわれている。写本の写本だけが現存している。これをもとにヘブル語訳やギリシャ語訳やその他の古代語訳聖書の異本の多くが書かれた。

Bezae これは紀元6世紀のギリシャ語とラテン語の原典である。この原典の分類上の名は「D」である。この原典には福音書群と使徒行伝と一般的な使徒書簡のいくつかが収録されている。この原典の特徴は書記の付け加えた書き込みが多いことである。この原典は、欽定訳以降に伝統的

に主な元本(翻訳のもとになる原典として用いられる聖書原典)として用いられているギリシャ語の原典「Textus Receptus」の元本となった。

偏見 これはある事柄あるいは見解に対する強い性向を表現するのに用いられる用語である。これは特定の事柄あるいは見解に関して公平性を保つことが不可能であるような心の態度である。これは偏った立場からの物の見方である。

聖書権威主義 この用語は非常に特別な意味で用いられている。これは原著者が自分の生きた時代の人々に語ったことの意味およびこの真理の私達の生きている時代への応用と定義されている。聖書権威主義は通常は聖書自体を私達の唯一の権威ある手引きと見る考え方と定義されている。しかし、現代の不適切な解釈を根拠として、私は聖書についてのそのような概念を、歴史的背景や文法構造に基づく教義によって解釈されるものとして限定的にとらえてきた。

正典 これは神の啓示によって書かれたと信じられている書を指して用いられる用語である。これは旧・新約聖書の両方を指している。

キリスト中心神学 これはイエスの中心性を表現するのに用いられる用語である。私はこの用語を、イエスは全ての聖なる者の主であるという概念と結びつけて考えている。旧約聖書はイエスがそのこと(イエスは全ての聖なる者の主であるということ)の成就であり最終目的でいらつしやることを指摘している(マタイ 5: 17-48)。

注解書 これは特殊な型の研究書である。これには聖書中の書の総合的な背景事項が記されている。従ってこれは聖書中の各書の意味することの説明を試みた書であるといえる。主に応用面について述べたものもあれば、より専門的に聖句を解説したものもある。これらの書は有用ではあるが、読者は自身の予備的研究を終えた後にこれらの書を読むべきである。その解説者の解釈は決して批判されることなしに受け入れられるべきではない。多くの場合、様々な神学的知見をもとにして数冊の注解書を比較することが有益となる。

コンコーダンス これは聖書研究の道具の一種である。これは旧・新約聖書中にある全ての用語のリストである。これは(1)特別な英語の用語の背後にあるヘブル語あるいはギリシャ語の用語の決定(2)同じヘブル語あるいはギリシャ語の用語が用いられている文の比較(3)同じ英語の用語に訳されている2つの相異なるヘブル語あるいはギリシャ語の用語が存在する箇所の検索(4)特定の書あるいは著者の特定の語の使用頻度の調査(5)読者が聖書中の聖句を見つける手助け(Walter Clark 著 *How to Use New Testament Greek Study Aids* の 54~55 ページ)に有用である。

死海文書 これは紀元 1947 年に死海付近で発見された、ヘブル語あるいはアラム語で書かれた一連の古代原典群である。それらの原典群は紀元1世紀のユダヤ教分派の経典であった。紀元 60 年代に古代ローマ帝国の支配による抑圧と暴動があったので、ユダヤ教分派の信徒はそれらの原典群を陶器の壺に入れて密閉し、洞窟や土中の穴に隠した。それらの原典群は紀元1世紀のパレスティナの歴史背景を理解するうえで有用であり、マソラ原典が少なくとも紀元前数世紀までさかのぼる限り非常に正確であると明言している。それらの原典群は「DSS」と略記されている。

演繹法 これは一般的原理を理由付けのために特別に利用する、論理展開つまり理由付けの方法である。これは、観察により明らかとなった特定の事柄(事実)から一般的な結論(理論)を導く科学的方法を反映する帰納法の反対である。

弁証法 これは互いに矛盾あるいは逆説という緊張関係にあると思われる2つの事柄について、その2つの逆説の両方の立場を含んだ統一的な見解を見出すための理由付けの方法である。聖書の教義の多くには弁証法的な2つの事柄の対、例えば予定運命と自由意志、安全と忍耐、信仰と行い、決断力と弟子の身分、クリスチャンの自由とクリスチャンの責任、がある。

ディアスポラ これはパレスティナ在住のユダヤ人が約束の地の地理的境界外に住む他のユダヤ人を指して用いているギリシャ語の術語(専門用語)である。

Dynamic equivalent これは聖書翻訳の理論の一つである。聖書翻訳は、ある英語の用語を必ずヘブル語あるいはギリシャ語の用語にあてはめるという「逐語」対応から、元の用語あるいは成句の意味をあまり考慮せずに思想のみを翻訳する「言い換え」へと続く一連の行為と見ることができる。これらの2つの理論の間にあるのが、本物の原典(の内容)を尊重しながらも現代の文法形式や熟語に則して翻訳するという「dynamic equivalent」である。これらの翻訳理論については Fee と Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* の 35 ページと Robert Bratcher の *Introduction to the TEV* の中に十分な議論がある。

折衷主義 この用語は聖書批評との関連で用いられる。これは自筆の原典と内容の近い原典を様々なギリシャ語の原典から選び出す練習を指している。その選び出しの練習において、本物の原典つまり自筆の原典はいかなるグループのギリシャ語原典にも含まれないという考え方は除かれている。

聖書の自己解釈 これは聖書解釈とは反対のことである。聖書解釈が原著者の意図を「導き出す」ならば、この用語は部外者の思想あるいは意見を「導入する」ことを意味する。

語源学 これは語の本来の意味を確定しようと試みる用語研究の一分野である。これから語幹の意味や特別な用法は容易に明らかとなる。解釈においては語源よりむしろその語の現代における意味や用法が主に注目される。

聖書解釈 これはある特定の文章を解釈する練習を意味する術語(専門用語)である。これは歴史的背景や文脈や統語法や語の現代における意味をもとにして原著者の意図を理解するためにその文章が暗示する内容を「導き出す」ことを意味する。

ジャンル これは様々な文学のタイプを意味するフランス語の用語である。この用語の主な意味は様々な形をとる文章を共通の特徴を持つ範疇、例えば歴史物語、韻文(詩)、格言(ことわざ)、黙示文学、法律文書、に分類することである。

グノーシス主義 この異端説について私達が知っていることの多くは紀元2世紀に書かれた不可知論に関する書に由来している。しかし、その概念が始まったのは紀元1世紀(あるいはそれ以前)であった。

研究者の中には紀元2世紀の Valentius と Cerinthus のグノーシス主義の教義を(1)物と霊はどちらも永遠である(存在論的二元論)。物は悪であり、霊は善である。霊である神は悪い物の形成に直接関与することはできない(2)神と物の間にはエマンティオ[神からの流出物。eons。天使階層]がある。その最終つまり最下層のものは旧約聖書に見られる YHWH であり、それが宇宙(kosmos)を形造った(3)イエスは YHWH のようなエマンティオであるが、より大規模で、より真の神に近い。研究者の中にはイエスを最高位にある方だが神よりは下位で、受肉した神ではありえないとみなしている者もある(ヨハネ 1: 14 を参照)。イエスは霊的な幻影である[I ヨハネ 1: 1-3、4: 1-6 を参照](4)救いはイエスへの信仰を通してだけでなく、特別な人々だけが知る特別な知識を通して得られる。知識(パスワード)は天球を通るのに必要とされる。ユダヤの律法主義も神のもとへ近づくのに必要である、と述べている者もある。

グノーシス主義の偽教師達は2つの互いに対立する倫理体系を、つまり(1)ある人々にとっては、生活様式は救いと無関係である。それらの人々にとっては、救いと霊性は天球の天使階層(eons)を通して秘密の知識(パスワード)の中に要約される。(2)その他の人々にとっては、生活様式は救いに不可欠であると主張した。彼らは真の霊性の証拠としての禁欲生活を強調した。

聖書解釈学 これは聖書解釈の手助けとなる原理を意味する術語である。これは特別な指針と方法論の組み合わせである。聖書解釈学は通常2つの範疇、つまり一般原理と特殊原理に分かれる。これらは聖書中に見られる様々なタイプの文学に関連がある。各タイプ(ジャンル)の文学は独自の指針だけでなくいくつかの一般的仮定と解釈の手順も持っている。

強い批評 これは聖書中の特定の書の歴史的背景と文章構造に注目する聖書解釈の手順である。

熟語 この語は個々の用語の通常の意味とは無関係の特別な意味を持つ、種々の文化の中に見られる成句として用いられる。現代語の例としては「それはすごく良かった」とか「殺し文句ね」という表現がある。聖書にもこの種の成句が見られる。

啓示 これは神が人類に語られている概念に与えられる名である。その概念の全ては通常3つの用語(1)黙示—神は人類の歴史に働かれている(2)靈感—神は御自身の御業の正しい解釈とその御業の意味を特定の選ばれた人々に示され、人類のために記録するよう命じられている(3)啓示—神は御自身が姿を現されていることを人類が理解できるように御自身の霊を送ってくださっている。

帰納法 これは特定の事柄から全体的な事柄へと考えを進める論理学つまり理由付けの方法である。これは現代科学の実験的方法である。これはアリストテレスの研究方法の基礎である。

隔行訳 これは読者が自分にとって外国語である言語で書かれた聖書中の言葉の意味と構造を解析できるようにする研究道具の一種である。その聖書の元々の言語(読者にとって外国語である言語)の行のすぐ下に逐語レベルで英語訳の行が置かれている。この道具は「解釈辞典」と組み合わせるとヘブル語とギリシャ語の用語の形式と基本的定義を示すことができるようになる。

靈感 これは神が聖書の著者達に御自身の黙示を正確かつ明確に記録させることによって人類に語られる概念である。その概念の全ては通常3つの用語(1)黙示—神は人類の歴史に働かれている(2)靈感—神は御自身の御業の正しい解釈とその御業の意味を特定の選ばれた人々に示され、人類のために記録するよう命じられている(3)啓示—神は御自身が姿を現されていることを人類が理解できるように御自身の霊を送ってくださっている。

記述のための言語 これは旧約聖書に書かれている熟語と関連させて用いられる。これは物事の五感への現れ方を通して私達の生きる世界を表現している。これは科学的な表現ではなく、そのようなこと(科学的な表現)を意図したものではなかった。

律法主義 この立場では規則や儀式が過剰に強調される。これは神に受け入れられることを目的とした規則正しい行いに依存する傾向がある。これは聖なる神と罪深い人類との契約の重要な特質を軽視して行いを重視する傾向がある。

逐語法 これはアンテオケで始まった、原典を中心にして歴史的に聖書を解釈する方法の別名である。これは、解釈では比喩的な言葉が認められていながらも実際には人の言葉の通常によく知られた意味がもとになって解釈がなされていることを意味している。

文学ジャンル これは韻文(詩)や歴史物語のような、人が意志伝達的手段として用いる様々な方法を指している。文学タイプには全ての種類の文学に適用される一般原理に加えて各々独自の特別な聖書解釈の手順がある。

文学単位 これは聖書中の書の思想の大きな分かれ目を指している。これはいくつかの節や段落や章で構成され得る。これはそれ自体が中心的な主題を持つまとまりである。

軽い批評 「聖書批評」を見よ。

原典 この用語はギリシャ語の新約聖書の様々な写本と関連がある。通常それらは(1)それらが書かれている紙材[パピルス、皮]または(2)書体(全て大文字あるいは流状)によって様々なタイプに分類される。それは「MS」(単数形)あるいは「MSS」(複数形)と略記されている。

マソラ聖書 これは紀元9世紀の旧約聖書のヘブル語の原典であり、ユダヤ教の学者達によって編纂され、母音記号と行外の注記が付け加えられている。これは現代の英訳の旧約聖書の正典となっている。この原典はヘブル語の MSS、特に死海文書のイザヤ書によって歴史的に正典と断定された。これは「MT」と略記されている。

換喩 これはある事物の名を用いて関連する他の事物について述べる比喩的表現である。例えば「やかんが沸いている」は現実には「やかんの中の水が沸いている」ことを意味する。

ムラトリー断片 これは新約聖書の正典目録である。これは紀元 200 年以前にローマで書かれた。これはプロテスタントの新約聖書と同じく 27 の書から構成されている。これは、古代ローマ帝国領内の諸地域の教会が4世紀の教会大会議以前に「事実上」正典を定めていたことをはっきりと示している。

自然の啓示 これは神の人への自己顕示(御自身を顕わされること)の一種である。これには自然の秩序(ローマ 1: 19-20)と道徳意識(ローマ 2: 14-15)が関係する。これは詩篇 19: 1-6 とローマ 1~2章で述べられている。これは、神が聖書に、そして究極的にナザレのイエスに特別に御自身を顕わされる特別な啓示とは異なる。

この神学的概念はクリスチャンの科学者達の間で起こっている「古い地球」運動(例えば Hugh

Ross の著書)によって再び強調されている。彼らはこの概念を用いて、全ての真理は神の真理であると主張している。自然は神についての知識への開かれた扉である。それは特別な啓示(聖書)とは異なる。この概念によって現代科学において自然の秩序を研究することができるようになった。これは現代西洋科学の世界を立証する素晴らしい新たな機会であると思う。

ネストリウス主義 ネストリウスは紀元5世紀のコンスタンティノープルの総(大)司(主)教であった。彼はシリアのアンテオケで(聖職者としての)訓練を受け、イエスが一人の人間とお一人の神の2つの性質をお持ちであると認めていた。この見解は、イエスが1つの性質をお持ちとするアレキサンドリアの正説を逸脱したものであった。ネストリウスの主な関心はマリアに与えられた「神の母」という称号にあった。ネストリウスはアンテオケで(聖職者としての)訓練を受けたことをアレキサンドリアの Cyril から非難され、破門された。アンテオケが歴史的背景と文法事項と文脈を手がかりに聖書の解釈を行う中心地であったのに対して、アレキサンドリアは第4の要素(寓話)を手がかりに聖書の解釈を行う中心地であった。結局、ネストリウスは聖職を剥奪されて追放された。

原著者 これは聖書の本物の著者つまり作者を指している。

パピルス これはエジプトの筆記用具の一種である。川岸に生えている葦で出来ている。ギリシャ語の新約聖書の最古の原典はこれの上に書かれた。

並列文 これは、聖書の全ての書は神から与えられたものであり、従ってそれ(聖書)自身を最も良く解釈し、逆説的な事実群を調停するものであるという概念である。これは不明瞭な文の解釈を試みる際にも有用である。これはまた、解読中の原典上の最も明確な文および手がかりとなるその他の全ての聖句を見出すのにも有用である。

言い換え これは聖書翻訳の理論の一つの名である。聖書翻訳は、ある英語の用語を必ずヘブル語あるいはギリシャ語の用語にあてはめるという「逐語」対応から、元の用語あるいは成句の意味をあまり考慮せずに思想のみを翻訳する「言い換え」へと続く一連の行為と見ることができる。これらの2つの理論の間にあるのが、本物の原典(の内容)を尊重しながらも現代の文法形式や熟語に則して翻訳するという「dynamic equivalent」である。これらの翻訳理論については Fee と Stuart 共著の *How to Read The Bible For All Its Worth* の 35 ページに十分な議論がある。

段落 これは散文中の解釈上の基本単位である。それには一つの中心的な考えとその発展とが見られる。その要旨に固執すれば多かれ少なかれ原著者の意図を見落としてしまうことになるだろう。

教区制 これは地域教会または地域文化の中に閉じ込められた偏見に関連がある。これは聖書的真理の文化を超えた性質あるいはその応用を認めない。

逆説 これは、一見矛盾しているように見え、互いに緊張状態にあるが、どちらも真実であるような事実群を指している。それらは互いに反対の立場から真実を述べることによって事実を構成している。聖書的真理の多くは逆説的な(弁証法的な)対によって表わされる。聖書的真理は単独の星ではなく、星々が描く模様によりつくられる星座である。

プラトン 古代ギリシャの哲学者の一人であった。彼の哲学はエジプトのアレキサンドリアの学者達を通して、そして後にはアウグスティヌスを通して初期教会に大きな影響を与えた。彼は地上の万物は幻想的であり、霊的原型を単に模倣したに過ぎないと断定(仮定)した。神学者達は後にプラトンの「イデア」を霊的王国と同一視した。

前提 これは私達がある事柄について予め成している理解を指している。しばしば私達は聖書自体を調べる前に物事に対して意見や判断を成してしまう。この傾向は偏見や *a priori* 的立場や仮定や予備的理解としても知られている。

聖句引用による解釈法 これはその文章単位中の前後の文脈やより長い文脈を考慮せずに聖書の一節を引用することによって聖書を解釈する練習である。これは聖書の一節から原著者の意図を排除する行為であり、通常は聖書の権威を主張しながらも個人的見解を裏付けようと試みることを指している。

ラビ主導のユダヤ教 このユダヤ人の生活様式はバビロン脱出(紀元前 586～538 年)で始まった。司祭達の影響力が大きく、また神殿が破壊されたので、地域のシナゴーク(礼拝堂)がユダヤ人の生活の中心となった。地域におけるこれらのユダヤ人の文化と交流と礼拝と聖書研究の中心地は国家の宗教生活の中心となった。イエスの時代にはこの「書記の宗教」は司祭の宗教の対極にあった。紀元 70 年のエルサレム陥落の時、パリサイ人を中心とする書記団の見解がユダヤ人の宗教生活の方向性を支配していた。その見解の特徴は口伝の伝統(タルムード)の中に説明されているようなトーラの実践的かつ法的な解釈にある。

黙示 これは神が人類に語られている概念に与えられる名である。その概念の全ては通常3つの用語(1)黙示—神は人類の歴史に働かれている(2)靈感—神は御自身の御業の正しい解釈とその御業の意味を特定の選ばれた人々に示され、人類のために記録するよう命じられている(3)啓示—神は御自身が姿を現されていることを人類が理解できるように御自身の霊を送ってくださっている。

セム語領域 これはある語に関連する意味の全てを指している。これはある語が様々な文脈中で表す、それぞれ異なった意味である。

セプトウアギンタ これはヘブル語の旧約聖書のギリシャ語訳本に与えられる名である。伝説によればこの原典はユダヤ教の学者 70 名がエジプトのアレキサンドリア図書館で 70 日間で編纂した。伝説にある出来事の年代は紀元前 250 年頃である(現実には完成までにおそらく 100 年以上を要したようである)。この訳本は(1)ヘブル語のマソラ原典との比較に必要な古代の原典として用いるにふさわしい(2)紀元前3世紀および2世紀にユダヤ人がどのように旧約聖書を解釈していたかを知る手がかりとなる(3)イエスの拒絶の前にユダヤ人がメシアについてどのような理解をしていたかを知る手がかりとなる、という理由で重要である。この原典は「LXX」と略記されている。

Sinaiticus これは紀元4世紀のギリシャ語の原典である。これはドイツの学者 Tischendorf によってシナイ山の伝説の場所 Jebel Musa の聖 Catherine 修道院で発見された。この原典は「アレフ[\aleph]」と呼ばれるヘブル語のアルファベットの第一の文字によって分類上の名が付けられている。この原典には旧・新約聖書が全て収録されている。この原典は私達が最古のアンシアル MSS とみなしている原典の一つである。

霊化 この用語は文の歴史的ならびに文学的内容を取り除いて他の判断基準に基づいてその文を解釈するという目的で寓話(たとえ話)を用いることと同じ意味を持つ。

同義語 これは(現実には意味が互いに全く同じセム語の2つの用語はないが)意味が互いに全く同じかまたはとてもよく似ている用語群を指している。それらは互いにとても深い関係があるので一つの文の中で意味を損なうことなく置き換えが可能である。これはヘブル語の詩の対句法の3つの様式の一つにおいても用いられている。この意味でこれは詩において同じ真理を表す2つの行を指している(詩篇 103: 3 を参照)。

統語法 これは文の構造を指すギリシャ語の用語である。これはいくつかの文の断片を組み合わせて一つの考えとして完成させる方法と関連がある。

統語 これはヘブル語の韻文(詩)のタイプと関連のある3つの用語のうちの一つである。この用語は互いに意味を増し加えるように、時に「最高潮」と呼ばれる状態となるように並んで詩を構成してゆく韻つまり行を指している。

組織神学 これは聖書中の真理を統一的かつ合理的に関連づけようと試みる解釈の場である。これは範疇(神、人、罪、救い、など)によって、単に歴史的というよりはむしろ論理的に表現され

たクリスチャン神学である。

タルムード これはユダヤの口伝の伝統を集めたものの名称である。ユダヤ人はこれを神がシナイ山でモーセに口頭で与えられたものだと信じている。事実、これはユダヤの教師達が長年にわたって集めた知恵であることが明らかとなっている。書物の形をとるタルムードは2つ、つまりバビロニア版と、それよりも短く未完のパレスティナ版がある。

聖書批評 これは聖書原典の研究である。本物の聖書原典は現存せず、代わりに互いに内容の異なる写本が現存しているだけであるので、聖書批評は必要である。これは異本についての説明を行い、自筆の旧・新約聖書の本来の内容に近づけようと試みている。これはしばしば「軽い批評」と呼ばれている。

Textus Receptus これは紀元 1633 年に編纂されたギリシャ語の新約聖書の Elzevir 版の名である。この聖書は少し後の時代のギリシャ語の原典およびエラスムス(紀元 1510~1535 年編纂)と Stephanus(紀元 1546~1559 年編纂)と Elzevir(紀元 1624~1678 年編纂)によるラテン語版聖書から編纂されたギリシャ語の新約聖書である。A. T. Robertson は自著 *An Introduction to the Textual Criticism of the New Testament* の 27 ページで「ビザンティン聖書は実質上 Textus Receptus である」と言っている。ビザンティン聖書は3つの古代ギリシャ語原典群(西方原典とアレキサンドリア原典とビザンティン原典)の中で最も価値が低い。幾世紀にもわたって手書きで写されたためにこの聖書には累積的な誤りが見られる。しかし、A. T. Robertson はこのようにも言っている「Textus Receptus は我々にとって十分な正確性を保った聖書である」(自著 *An Introduction to the Textual Criticism of the New Testament* の 21 ページ)。このギリシャ語の原典について行なわれた書写の伝統(特に紀元 1522 年のエラスムスのラテン語版聖書の第3版)は紀元 1611 年編纂の欽定訳において編纂の基礎となった。

トーラ これは「教え」を意味するヘブル語の用語である。これはモーセの著書(創世記から申命記まで)の公的な表題となった。これはユダヤ人にとってはヘブル語の正典のうちで最も権威ある書のグループである。

予型論 これは解釈の特殊な型である。通常これには、ある類似した象徴を用いて旧約聖書の文中で見出された新約聖書の真理が関与している。この種の聖書解釈学はアレキサンドリア学派の方法論の要点であった。この種の聖書解釈法は濫用されているので、この方法は新約聖書中に記されている特殊な事例の解釈のみに用いられるべきである。

Vaticanus これは紀元4世紀のギリシャ語の原典である。この原典はバチカン図書館で発見され

た。元々この原典には旧約聖書と聖書外典と新約聖書が全て収録されていた。しかし、いくつかの書(創世記、詩篇、ヘブル人への手紙、教書群、ピレモンの手紙、黙示録)が失われた。この原典は自筆の本物の原典を特定するうえでとても有用な原典である。この原典は大文字「B」によって分類上の名が付けられている。

ウルガタ聖書 これは Jerome によりラテン語に訳された聖書の訳本の名である。これはローマカトリック教会によって正式訳つまり「一般」訳聖書とされた。このラテン語訳は紀元 380 年代になされた。

知恵の書 これは古代近東地域で一般的な文学ジャンルであった(現代世界にもある)。実質上これは、幸運にも詩や諺や随筆に慣れ親しんできた新しい世代に指針を与えようという試みである。これは集団社会に対してよりも個人に対して語られる言葉である。これは歴史を暗示させるためには用いられず、人生経験と観察に基づいている。聖書ではヨブ記から雅歌までが YHWH の御臨在と礼拝を推測しているが、この宗教的世界観は全ての時代の全ての人の経験において明らかではない。

一つの文学ジャンルとしてはこれは一般的真理を述べている。しかし、この文学ジャンルを全ての特別な状況において用いることはできない。これらは必ずしも個々の状況の全てに適用されることはない一般的な記述である。

これらの賢人は敢えて人生の難問を投げかける。しばしば彼らは伝統的な宗教観に挑戦する(ヨブ記と伝道者の書)。彼らは人生の悲劇についての(問題への)安易な答えにバランスと緊張をもたらず。

世界図と世界観 これらは対をなす用語である。これらはどちらも創造に関連する哲学的概念である。用語「世界図」は「どのように」創造されたかを指し、「世界観」は「誰が」創造したかに関連している。これらの用語は、どのように創造されたかではなく誰が創造したかを主に述べている創世記の1~2章の解釈に関連がある。

YHWH これは旧約聖書における神の契約の御名である。これは出エジプト 3: 14 で初めて登場する。これはヘブル語の用語「ある」の使役形である。ユダヤ人はこの御名を軽い気持ちで呼んでしまうことを恐れて、「主」を意味するヘブル語の用語 *Adonai* をその代わりに用いた。この契約の御名はこのようにして英語に訳された。

補遺4 学説についてのコメント

私は信仰あるいは信条に関するコメントを特には厭わない。私は聖書自体についての発言を好む。しかし私は、信仰に関するコメントが、私と面識のない人々に私の学説的見解を明らかにする方法を示すであろうことはわかっている。神学的な誤りや詐欺があまりにも多い現代において、私の神学的見解を短くまとめると以下のようになる。

1. 聖書は新・旧約ともに、神により啓示された、誤りのない、権威ある、永遠の神のお言葉である。それは超自然的導きのもとに人類によって記された神の自己啓示である。それは私達にとって、神と神のご目的についての明白な真理の源である。それはまた信仰と神の教会の実践の源である。
2. ただおひとりの、永遠で創造主で救い主でいらっしゃる神がおられる。神は全ての見えるものと見えないものの創造主でいらっしゃる。神は公平で義なる方でもいらっしゃるが、愛し慈む存在としてご自身を現わされた。神は3つの異なる人格、つまり父なる神と御子と聖霊、現実には互いに別な存在であるが本質的には同じ存在、としてご自身を現わされた。
3. 神はご自分の世界を積極的に支配しておられる。ご自分の造られたものについての永遠で不変の計画と、人間ひとりひとりに自由意志を許すという計画がある。神の知識とお許しがなければ何事も起きないが、神は天使と人間に個人的な選択をお許しになった。イエスは「父」に選ばれた方で、万物はイエスによって確実に選ばれる。神による出来事の予知は、人間が予め決めた計画とそんなに違うものではない。私達は皆、自分達の考えと行動に責任がある。
4. 人類は、神のお姿に造られて罪のないものであったにもかかわらず、神に対して反逆することを選んだ。超自然的な代理者によって誘惑されたとはいえ、アダムとエバは自分達の意図的な自己中心さに責任があった。彼らの反逆は人類と被造物に影響を与えている。私達は皆、自分達アダムと同じ境遇にあることと自分達の意図的な反逆に対して、神の慈みと恵みを必要としている。
5. 墮落した人類に、神は赦しと(ご自分との関係の)回復の手段を与えられた。神の一人子イエス・キリストは人間となられ、罪なき人生を送られ、私達の身代わりとなって死ぬことによって、人類の罪を贖われた。イエスは神との交わりの回復のための唯一の方法でいらっしゃる。イエスの成し遂げられた御業に基づく信仰を通しての手段以外に救いの手段はない。
6. 私達ひとりひとり個人的に、イエスによる神の赦しと回復のお申し出を受けなければならない。これはイエスを通した神のお約束を自分の意志で信じることと、自分の意志で既知の罪から離れることにより達成される。
7. 私達は皆、キリストへの信仰と罪からの悔い改めに基づいて、完全に赦され回復されている。しかし、この新しい関係の事実は、変わった、そして変わりつつある生活の中に見られる。人類についての神の最終目的は、いつの日か来る天国であるだけでなく、今私達がキリストの

ようになることでもある。本当に救われた人々は、時々罪を犯してしまうとはいえ、生涯を通じて信仰を持ち続け、悔い改め続ける。

8. 聖霊は「もう一人のイエス」でいらっしゃる。聖霊は、失われた人々をキリストのもとに導き、救われた人々がキリストのようになってゆくのを助けるために世に存在される。聖霊の賜物は救いのときに与えられる。その賜物はイエスのお体の中で分けられたイエスの命と(神の子としての)権威、そして教会である。本質的にイエスのご態度とご意志であるこれらの賜物は御霊の実によって与えられる必要がある。聖霊は聖書の時代と同じように私達の生きるこの時代にも生きておられるのだ。
9. 父なる神は、復活されたイエス・キリストに万物の裁きを任されている。イエスは全ての人を裁くために地上に戻ってこられることになっている。イエスを信じ、子羊の書にその名が記されている人々は、イエスの再来のときに永遠に栄光を受ける体を頂くことになる。彼らはイエスとともに永遠に生きるだろう。しかし、神の真理への応答を拒む人々は三位一体の神との交わりの楽しみから永遠に引き離されることになる。彼らは悪魔とその天使達とともに懲らしめられるだろう。

これは確かに完全ではないし一貫していないが、私はそれがあなた(読者各位)に、私の心にある神学的想いを伝えることを望んでいる。私はこのような言い方を好む:

「本質には統一を、外辺には自由を、万物に愛を」